

転生幼女がD Q 5 にインしたようです

よつん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「アルマ」は海賊船の船長に拾われ、育てられた五歳の女の子だ。拾ってくれた海賊船の仲間たちや、世界を救った勇者様たちと、幸せに毎日を過ごしていた。ある日、「勇者様」が集めていると知っていた石板を見つけ、渡してあげようと思っていたところ、石板は「渦」となり、彼女を大切な人々から引き離してしまう。石板の光の先にあった世界には、聞き覚えのある名前と、見たことのある親子がいて――。

現代日本で社畜だった女性がドラクエ7の世界に転生し、第二の人生最高って思っていたところ、石板によってドラクエ5の世界に行ってしまうお話です。アルマは転生先のドラクエ7は未プレイですが、ドラクエ5は昔プレイしたことがあるという設定のため、原作知識ありです。ドラクエ5原作沿い（沿うとは言っていない）、ゲームと小説のいいとこどり、オリジナル要素ありです。

目次

きらめく思い出をその胸に

君を守ってあげる | 1

幼い勇気と悲劇の城 | 15

メモント・モリ | 30

ツライことがあっても | 45

大人になったら | 60

王家はズツ友 | 74

悪童の受難 | 89

特別な友達 | 107

ただ焦がれただけ | 119

別れへの呼び水 | 134

白い魔法 | 148

罪過あふるる | 162

微笑みの爆弾 | 175

時には急ぎすぎて、 | 187

きらめく思い出をその胸に | 201

神様は君だった

つながり | 215

父親 | 227

前だけ見ていたい | 241

「お役に立ちたい」 | 254

神の試練 | 269

すぎるもの | 282

神の導き | 294

魂の記憶が宿る塔	307
それぞれの思惑	321
兆し	333
予感	345
新たな一歩を	356
朗報	364
まもののすむばしよ	379
「師匠」	394
デモンズタワー	405
魔法の杖	418
優しい人	431
あなたへの花	444
元気でやってる	456
覆水	467
新たな場所へ	479
毒された村	490
不透明な未来	501

きらめく思い出をその胸に
君を守ってあげる

ゆらゆら揺れる水面を船の上から眺めるのは、私のお気に入りのごし方の一つだった。小さなこの体では落下防止用の柵のせいでも見えないので、そうしたいときは必然的に誰かに抱き上げてもらわないといけない。それは大抵、私を拾ってくれたシャークアイ船長であつたり、遊びに来た勇者様であつたりする。

「アルマは海が好きか」

「はい、シャークアイ様」

抱き上げてくれている偉丈夫の美しい顔を見上げてそう答えれば、彼はうれしそうに微笑んだ。

「そうだな。オレも好きだ」

つられて私も口元が緩む。それを誤魔化すために、私はシャークアイ様から目を逸らして、海へと視線を移した。

「あつ。見てください、シャークアイ様！何か浮かんでますよ！」

五歳児らしくない話し方だと分かっているながら、シャークアイ様と勇者様たちには自分を偽れない。他の誰にでも、子どもらしい演技をしてみせられるのに、シャークアイ様や勇者様たちには、変だと思われたとしても、素の自分でいたいと望んでしまうのだ。変だと思っても彼らなら受け入れてくれるだろうという、彼らの優しさに甘えているのは否めない。

「む？あれは石板か……？ならばアルス殿が探している物かもしれない。引き上げるとするか」

私を下ろしたシャークアイ様は、てきぱきと船員に指示を飛ばして、海に浮かんでいた石板を引き上げた。不思議な紋様の石板だ。勇者様が集めているのは石板のかけらが多いけれど、これは欠けたところのない、一枚の石板だった。

「私も見てもいいですか？」

「ああ。見つけたアルマが、アルス殿に渡すといい」

心が温かくなるのを感じた。勇者様はきつと喜んでくれるだろう。

「これよりフィツシユベルに向かう！」

よく通る声でそう言った船長へ、船員たちが「おう！」と一斉に返事をする。私はシャークアイ様の大きな手から、落とさないように慎重に両手でそれを受け取ると――。

「わあ!？」

石板がまばゆい輝きを放った。

「アルマ!？」

やがてその輝きは青やら白やら、まるで渦潮のようにぐるぐると渦巻いていく。伸ばされたシャークアイ様の手を取りたいのに、強い引力に抗うことができない。私は大好きなその人の呼び掛けに応えることもできないまま、渦となった石板に「吸い込まれた」のだった。

*

――ここは私の船じゃない。

目覚めて直感したのは、なんてことはない、自分の寝室とは違う場所にいたからだ。だけど、私の船じゃないだけであって、おそらく船の中なのだと思う。聞き慣れた潮騒と、嗅ぎ慣れた海のおい。それらは五感に馴染んだものであるはずなのに、見覚えのない部屋だからなのか、新鮮な感じもする。

とりあえず、私は寝かされたベッドの上から体を起こすことにした。手足は短いままだ。可愛らしい調度品で揃えられた室内には鏡台があったので、何の変化もないと思うが『前例』があるため一応覗き込んで確認をする。

髪の毛も目も黒い。幼い顔立ちの、「アルマ」で間違いなかった。ただし、服は寝る前に着ていたものではなくて、見覚えのない可愛らしい薄桃色のネグリジェである。首から提げていた勇者様にもらったお守りはきちんとあって、ほっと胸を撫で下ろした。

このお守りは、本来はアミュレットだったものを、小さな私には大

きすぎるからと、勇者様が紐を通してネックレスのようにしてくれたものだ。

勇者様が魔王を倒して、船の上で「これから」のことを話していたときのこと。私は、自分を保護してくれた海賊船マール・デ・ドラゴンに乗って、シャークアイ船長の力になりたいのだと語った。そして、「海と共に生きるのなら」と、勇者様は装備していたそのアミュレットを私にくれたのだ。

さて、そんな私の大事な思い出はさておき、間違っても海賊船ではなさそうな室内と、私の置かれている状況を鑑みて、保護されているのだらうと仮定する。というわけで、扉を開けてみることにした。現状の把握は大切だ。

カチャリとドアノブを捻れば、予想した通り周りは海。小高い位置にあるらしい、わざわざ設けられている子ども部屋から、お金持ちの個人船かと当たりをつける。

「おや、嬢ちゃん。目が覚めたかい？ 気分はどうだ？」

一般的な船乗りの恰好をした平凡そうな男に話し掛けられ、私は「おはようございます」と頭を下げた。

「どこもわるくないよ。でもね、ここがどこだかわからないの。おとうさんとおかあさんはどこ？」

眉を下げて不安げに言えば、男は「うっ」と気まずそうな顔をした。あまりに善良そうな反応に、誘拐などではなく、自分が何かしらのトラブルによってここにいるのだと何となく理解した。まあ、直前の状況からして、トラブルそのものだが。

「ええと……お嬢ちゃんは海で溺れてるところをこの船のお客さんに助けられてな。お父さんとお母さんは……」

なるほど、そういうことらしい。マール・デ・ドラゴンに拾われた時は確かに溺れていて、命の危険を感じたけれど、今回はどうにも穏やか過ぎて現実味が薄かった。旅の扉に吸い込まれた記憶はあれど、溺れていた記憶はないからだ。

「おとうさんとおかあさん、いないの？ わたしたち、コスタールにもどるとちゆうだったの」

「アルマ」のお父さんとお母さんは子どもを棄てた、余裕のない人たちだった。しかし、それも仕方のないことと言えば仕方のないこと。世は邪悪な魔物が蔓延り、抗う力のない彼らにとつて、子どもは必ずしも幸せの象徴ではなかったからだ。しかも、「アルマ」はただの子どもではなく「私」である。本物の、純粋な子どもであれば、もしかしたら疲弊し、傷ついた彼らが無垢な笑顔で癒せたのかもしれない。けれど、そうではなかった私にはできなかった。

だから、お父さんとお母さんとコスタールに戻る途中だったなんて、とんだ与太話である。

私は俯いて服の裾を掴んだ。全て哀れな少女を演じるためのポーズであり、私の本心とは一切関係がない。なにせ、私はシャークアイ様や勇者様たちと出逢わせてくれた彼らに感謝こそすれ、恨みなど抱いていないからだ。棄てられ、死に掛けたことなど、素晴らしい人々に出逢えたことを想えば些末なことである。とはいえ、自分の船かコスタールかのどちらかに戻りたいのは本当だった。

「コスタール？ そりゃ、お嬢ちゃんの家があるところか？」

「うん。おとうさんはふなのりでね。おしごとがおちついたから、おかあさんといっしょにふねにのせてくれたの。とくべつだぞって。それでね、グランエスタードにあそびにいつてきたの」

「ぐ、グランエスタード？」

こちらも外れ。つまり、困ったことに、コスタールもグランエスタードもない時代か、あるいははまったくの別世界に来てしまった可能性がある。私には「前回」があるし、旅の扉に吸い込まれたという状況が状況だったので、困りはすれど驚きはしないが、面倒だ。

私は「アルマ」としてあの世界に生まれ落ちる前、日本という島国で、いわゆるブラック企業に勤め、鬱になって自殺した。なんの因果なのか、生まれ落ちた世界は「ドラゴンクエスト」というゲームの世界とそっくりで、保護されてすくすくと育つてからは、絶望的な状況下に置かれたとしてもいつか現れる勇者様の存在を信じて生きてきた。そして、勇者様はたしかにいて、世界を救ってくださった。

私はドラゴンクエストを、「天空編」と呼ばれるナンバーしかやって

いなかっただから、分からなかったけれど、もしかして勇者様は本当に物語の主人公なんじゃないかと思うこともあった。しかし、それも今となっては確かめる術もない。まあ、どっちにしろ私にとって大事なものは、そんなことより私の大好きな人たちとこれから一緒にいる、そんな幸せな「今」と「未来」だった。

だからこそ、日本からあの世界に渡ってしまった時とは違って、私は明確にマール・デ・ドラゴーンを自分の家とし、船員たちを家族と思いい、あの場所に戻りたいと思っている。シャークアイ船長と、アリエスさまの力になりたいと思っている。しかし手元に石板もない今、どうすれば帰れるのかなんてもちろん分からない。

「かえりたいよう……おとうさんとおかあさんはどこ？ コスタールには、もどれないの？」

「わ、わ、泣くな！ そうだ、パパスさんに聞いてきてやろう。お嬢ちゃんの命の恩人だ。あの人は世界を旅してるらしいし、きっとコスタールってところも知ってるさー！」

泣きまねをしようとした私を見て慌てた男が、バタバタと走っていなくなった。ふう、と息を吐く。事態は最悪だった。無一文で、コスタールとグランエスタードほどの大国が船乗りにも認知されていないという事実。何せ魔王が打ち倒され、世界の中心はグランエスタードとなり、勇者様に力を貸したことで私たちマール・デ・ドラゴーンは海賊でありながら「正義の」と世界に認められた海の支配者だ。そして勇者様とマール・デ・ドラゴーン、どちらにも所縁ある享楽の国コスタールを知らないなどと、あの世界ではありえない。

しばらくして、豊かな黒髪と髭が印象的な戦士が船乗りにも連れられてやってきた。後ろには彼の子どものものか、小さな男の子もいる。私と同じくらいか、少し年上くらいだろう。見た目的に。

「おお、顔色は悪くないな。私はパパス。こちらは息子のリュカ。君の名はなんという？」

「……アルマです。おじさん、わたしをたすけてくれたひとだよね？
ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げると、パパスさんは私と視線を合わせるように膝

を曲げた。

「礼には及ばんさ。聞くところによると、お父さんとお母さんと一緒に、グランエスタードという場所からコスタールというところまで船で向かっていたのだとか」

「うん。そうなの。パパスおじさんは、コスタールをしつてる？ うみべにあるすてきなくなのよ。おおきなおしろがあつてね、うみのうえにうかんでるみたいだから、みずのくについてよばれてるの」

現在、お城はカジノ場として再利用されて、王族が住んでるのは昔ホビット族が暮らしていた洞窟だが、そんなことは別に伝える必要はない。コスタールといえばカジノを差すことが多いし、あちらにも一応住居はあつて国民も住んでいるので間違いではないだろう。

パパスさんは深く考え込むように、顎に手を当てていた。まあ、聞き覚えなんてないだろうな。この人がパパスという名で、紫色のターバンをした息子がいて、ここが船の上だというのなら、私はその状況が何を表しているのかよく知っている。

なぜなら、それはドラゴンクエストというゲームで、私が唯一やった天空シリーズのうちのひとつ、物語の冒頭と重なるものであったのだから。

ため息を吐きたいのをぐつとこらえ、代わりに唇をかみしめた。パパスさんは私の頭にぽんと手を置き「残念ながら、そのような国は知らない」と正直に答え、その腕で私を抱き上げた。

「だが、私が知らないだけかもしれない。世界は広い。アルマ、君の言う水の国を私も見たくなくなった。私とリユカは訳あつて旅をしていてな。目的があるのでコスタールを探すことだけに集中はできないが、よかつたら私たちと一緒に来ないか？」

ふわりとした浮遊感の中で、なるほど私は感心していた。私が純粹にただの子どもだったら、彼の事を一瞬で好きになり、その提案に一も二もなく頷いてその背を追いかけたのだろう。

だが、残念ながら私の中身はブラック企業勤め経験から人生に疲れていた三十路であり、さらに心酔している人間は既に別にいる。

「えつと……」

しかし選択肢は限られている。パパスさんの提案を受け入れて、コストールを探すためというよりは世界を渡るための方法か旅の扉を探す旅をするか。提案を受け入れず、子どもの身でありながら一人で旅をするか。

パパスさんについていくのは、何も知らなければ悪くないように思えた。けれど、「物語」を詳細に覚えているわけではなくても道のりはある程度予測できる。しかもその中の可能性としてリユカと仲良く奴隷ルートとというものが含まれるわけだ。これはいただけくない。私は奴隷なんてものになるのは絶対に嫌だし、強制された労働を憎んですらいる。できるだけぐうたら過ごしたい。

「た、たびつて、まものとかいるでしょう？ わたし、こわい……」

だが、提案を蹴ったとしてどうなる。どこぞの孤児院や修道院に預けられるか、運が良ければこの船の持ち主に引き取られるか、そのくらいだ。この見た目で一人で旅をするのもいろんな意味でしんどいし、常識的な考えを持つ大人なら、そのようなことはさせないだろうから、「一人で旅する」「だめだ」の応酬が非常に面倒なことになることが予想される。

私は戦闘力もさほどない。何せ守られ蝶よ花よと育てていただいたので。マール・デ・ドラゴーンに居座るために船乗りの職をマスターしたので、それくらいの実力はあるが、ゲマを倒して原作改変とかそういうのは無理。

「大丈夫だよ！ 僕もお父さんも、アルマのこと守ってあげるからー！」
えっへん、と可愛らしく胸を張る少年に、私の世界の勇者様の影が重なる。私の大切なひとの一人。大切なひとたちの、大切なひと。

——だったら、私もこの子を守ってあげようかなあ。

らしくもない気持ち芽生えたのは、なぜなのか。理由なんてどうでもよかった。当たり前みたいに手を差し出してくれたひとたちのことを考えてみる。そうだ。帰ったら、ある親子を守ってあげた話を、あの人たちにしよう。きつと笑って、心配して、そしていつもみたく抱きしめて、頭を撫でて、頬を寄せて、褒めてくれる。それはきつ

と素晴らしいことだ。

「わたし、じゃまじやないなら、その……おねがいます」

面倒だけど、決めてしまったからには仕方ない。私の大切なひとたちは、すくうことをためらわないから。私もそうであろうかな、と少しだけ思う。面倒だけど、それは仕方のないことなのだ。

*

船を降りる時に、この船の持ち主であるルドマン氏と、その娘二人と出会った。船員が私のことを説明し、お嬢さん方の部屋と服を使わせてもらったことを詫びると、ルドマン氏は私に笑みを向けて、そういうことならかまわないと寛大に頷いていた。当の娘であるデボラは不服そうだったが、私が借りていたのが妹のフローラのものであったことを聞かされて機嫌を直していた。まあ、サイズ的にフローラの方が合うだろうから。ちなみに、今はもう着替えていて、私が元々着ていた服を着ている。寝巻ではなく、肌着と麻でできた簡素なワンピース、黒いタイツに革のブーツというありふれた服装だ。

「これからどこへいくの?」

「サンタローズという村だ。私とリュカの家がある」

「どんなところ?」

「山の中にあつてな。村の中には小川が流れて、空気もきれいなところだ」

そんな話をパスさんしていると、知り合いらしき男に呼び止められ、「少し話があるから待っていないさい」と会話を打ち切られてしまった。

「ねえ、アルマ、ちよつと向こうを見てこようよ」

「でも、パスおじさん、まつてなさいって……」

「お父さん、よくいろんなひとに話かけられるんだけど、長いんだもん。それに、僕、昔このへんに住んでたらしいんだけど、あんまり覚えてないからいろいろ見てみたくて。近くならきつと平気だよ」

チュートリアルがこんな感じだったかな、と薄れている記憶を掘り

返しながらリュカの後をついて行く。スライムと遭遇したが、私の事を守るのだとはりきってくれたリュカが一人でやっつけてくれた。

「こら、リュカ。待っていなさいと言っただろう。とはいえ、きちんとアルマを守ったようだな。そこは感心だ」

怪我なんてかすり傷程度しかしていないようだったが、パパスさんは回復魔法を掛けていた。それからサンタローズに着くまで何度かスライムやらドラキーやらと戦闘になったが、戦闘が終わる度にパパスさんはリュカに回復魔法を掛けており、まあ親として心配な気持ちは分かるが、魔力がもつたいないなとか思ってしまう。

でも、シャークアイ船長や他の人たちも、そういえば私が戦いに加わったときは絶対に大したことない傷でも治療してくれたことを思い出して、そういうものなのかもしれないなとも思った。

サンタローズの人々のパパスさんへの歓迎ぶりはすさまじく、新顔の私も無条件に受け入れられた。これが幼女の姿ではなく三十路女の姿だったら反応も大分変わっていたのだが、そんなことは考えても詮無いことだ。とにかく、私は慣れない旅で疲れたということにし、眠そうなふりをしてさっさと休ませてもらおうことにした。

パパスさんの家を訪れていた、病気のお父さんのために、お母さんと一緒にサンタローズへ薬を取りに来たビアンカという少女は、新顔の私と話したい様子だったけれど、とりあえず私は眠かったということにしたので、少女の要望に応えてやることはしなかった。リュカのベッドの隣に客用の布団を敷いてもらって、私は宴の喧騒の中一人目を瞑った。

考えなくてはならないことはたくさんあった。リュカとパパスさんを守るためにできること。私が帰るために必要なこと。前者に関しては、考える余地も、工夫する余地もあるような気がするが、後者はどうだろう。世界を渡った経験はある私だが、その方法までは未だに知らない。あの世界に来たとき、元の世界に戻りたいとは思わなかったからだ。なので、推測しかできない。多分旅の扉を探すとか神様扱いされているマスタードラゴンに頼むとか、そんな感じだろう。

でもなあ。うちの世界の神様ならともかく、マスタードラゴンにそ

んなことのできるのだろうか。なんかアイツ、トロツコを止められずにぐるぐる回ってた記憶があるんだけど。

そんなことを頭に思い浮かべながら、私はいつの間にか眠ってしまっていた。さすが子どもの体である。

次の日、私とリュカは村の中を探検することにした。パパスさんはやることあるとかで、どっかに行ってしまったからだ。

幼い頃に来たきりだというリュカは、本当に村の事を全然覚えていないらしく、目を輝かせてあちこち歩き回り、いろいろな人に話を聞いて回った。それは自分の小さい頃のことだったり、父親のパパスさんのことだったり主だったが、時には全然関係ないことも話をしてた。探検をしている私たちを微笑ましそうな目で見た何人かが、薬草やら何やらをくれることもあった。タンスを漁ったり壺を割ったりする代わりに、向こうからの善意でアイテムを入手するらしい。そりやそうか。普通に考えて他人の家のタンス漁ったり壺を割ったりするのなんてやばいやつの所業だよな。

「あら、リュカとアルマじゃない。遊びに来たの？」

宿を訪れると、ビアンカたちが部屋でくつろいでいた。うれしそうに話し掛けてくる姿は大変愛らしい。金色の髪の毛は高い位置で二つに編まれ、活発そうな印象を与える。ぱっちりとした大きな青い目に、白磁の肌、桃色の頬と唇。まさに美少女といった容貌だが、それを自覚しているのかいないのか、鼻に掛けるような様子は一切ない。

「うん。僕たち、村の中を探検してるんだ。ビアンカは何をしてるの？」

「パパの薬を取りに行ってくれた人が中々戻って来ないから、いつでも帰れるように待ってるのよ。薬が届いたら、すぐに帰るつもりだから」

娘の言葉を引き継いで、ビアンカのお母さんが困り顔で「誰か洞窟の奥まで探しに行ってくれたらいいんだけど、あんたの父さんのパパスも忙しいからねえ」とため息を吐いた。恰幅の良い人で、顔立ちもビアンカとは似ていない。まあ、確か血が繋がっていないらしいし

当然と言えば当然だが。少し話をして、はつきりとした物言いであるけれど伝わってくる人の好きに、勇者様のお母さんを思い出し、私はかなり単純なことに、彼女のことをすぐに好きになった。

「それなら、僕たちが探してきてあげるよ！　ね、アルマ！」

「え、うん。そうだね」

純粹無垢な笑顔を向けられ、私も思わず頷く。しまった、「怖いから一人で行ってきて」という内容をオブラートに包んで伝えるべきだった。これからリュカに数多の試練とやらが訪れるならば、私は彼の成長を妨げるべきではない、という建前と、ただ単純に肉体労働が面倒だという本音は、ここぞというときに表現する間もなく潰えてしまう。

「でもねえ、洞窟は危ないし……」

「二人だから平気だよ。それに、本当に危なくなったらすぐに帰って来るから」

なんと、私たちは洞窟で冒険をするはめになってしまった。まあ、序盤の敵なので私も適度に戦闘に参加しつつ、リュカに守ってもらおうと体を楽をすればいいだろう。

「ママ、わたしも……」

ついて行きたそうな顔をしているビアンカに、おかみさんはやれやれと首を振る。

「ビアンカ。あんた、サンタローズに来る前にした約束を忘れたのかい？」

「うっ……覚えてるわよ。『サンタローズにいる間は、ママと一緒にいること。それができないなら、パパの看病をすること』って」

ビアンカは羨ましそうにこちらを見て、ため息を吐いた。

「わたしの方がお姉さんなのに！　ねえ、アルマは何歳なの？」

「五さいだよ」

まあ、肉体年齢は。普通五歳は船乗り職をマスターしていないと思うとか、そういう常識的な考え方は捨て去ってほしい。戦闘に参加すれば、防御と回避だけしていても経験になるし、職歴は上がるのだ。「わたしの方が、三つも年上だわ！　リュカだって、わたしより二つ下

なのよ。ねえ、ママ……」

「約束が守れないんなら、しかたない。サンタローズにいる人たちに頼んで、薬は後で持ってきてもらおうとしようか」

私には分かる。おかみさんは必死になっている娘を面白がっているのだ。その証拠に、顔は真面目ぶっているけれど、肩はちよつと震えていた。

「分かったわよ！ もう！ 二人とも、行きたいなら行って来ればいいでしょ!?!」

涙目でプンプンと部屋を出て行くこうとするビアンカに、おかみさんが「おや、どこへ行くんだい？」と声を掛ける。

「水をもらってくるのよ！ 喉が乾いちやったもの。すぐ戻るわ！」
大きな足音を立てるビアンカを見送って、私はおかみさんに「いいの？」と尋ねた。

「いいのさ。アルカパにいるときはみんなにちやほやしてもらって、好きなことをしているからね。慣れない場所でお姉さんぶって、あんなたちを危険な目に遭わせるよりは、あの子には留守番してもらった方がいいだろう。二人だったら、怖いと思ったら引き返すだろ？」
私とリュカは顔を見合わせた。その様子をくすくす笑ったおかみさんは、「あの子も普段なら、怖いと思えば引き返せると思うんだけど。あんまりはりきつちまうと、そうもいかなだろうから」と私たちの肩を軽くたたいた。

「ま、気にしないでおくれ。そのまま村の中を探検してもいいし、洞窟を探検したっていいけれど、危ないと思ったらすぐに帰って来るんだよ」

「はあい」

良い子のお返事をした私たちは、途中でグラスを持ったビアンカとすれ違った。彼女はツンと顔を逸らして、悔しさを隠すようにしていた。まあ、いざとなったら守ってあげるから連れて行ってあげても全然いいんだけど、保護者の許可が出ないなら仕方がない。

「……ビアンカ、怒ってるかな？」

「しかたないよ。いっしょに行きたいけど、おばさんがダメって言う

ならダメなのよ」

洞窟の方へ向かうと、入り口に立っている男性に「怪我しても知らないぞお」と脅されるが、はつきりと止められないあたり、ある程度は安全が保障されている場所なのだろうか。

「アルマ、僕のあとにちゃんとついて来てね」
「うん」

こわごわ、といった様子のリュカの後をついて行く。洞窟は確かに薄暗いが、壁には松明が掛けられていて、真っ暗というわけでもない。スライムやせみもぐらなどがこちらの様子を伺いつつ襲い掛かってくる。リュカは私をしつかり守れるようにと、パパスさんからもらったひのきの棒で「えいっ」とか言いながら敵を殴打していた。可愛いくせして、結構遠慮ない打撃である。私も、敵の数が多いときはその辺の石を拾って投げつけるようにした。

船乗りとして修業した私の石つぶては、そこらへんの敵を駆逐するのにはけっこう便利だ。これくらいの的なら私だって急所を外さずに確実に当てることができる。

「リュカ、だいじょうぶ？　つかれてない？」

「大丈夫！　薬草だつてあるし、アルマも手伝ってくれるから」

洞窟はあまり複雑な造りではなく、宝箱に入っているアイテムを回収する。手に入れた装備品は、「わたしのことはリュカが守ってくれるから」と、リュカに装備させた。ひのきの棒に皮の盾、旅人の服が初々しい。

地下の敵は地上の敵よりも少し強かったけれど、深手を負うこともなく、岩に下敷きにされたおじさんを見つけたことができた。かなり大きな岩で、こんなものの下敷きにされてしまった日にはもう複雑骨折待ったなしって感じだけれど、意外にも幼児二人の力でどかすことができたし、見た目のわりに軽い。岩から自由になったおじさんは、ピンピンした様子で去って行ってしまった。

「わたしたちも、戻ろうか」

段々口調がわざとらしい五歳児ではなくなってきた。違和感を持っているが、いつまでも舌足らずな演技をするのは疲れるので、違和感を持た

れないように徐々に変えていけばいいだろう。リユカも別にそれに
関して何かを言ってくることもない。

「そうだね」

年齢的に言えば就学前の幼児二人の大冒険だったわけだが、リユカ
は旅慣れているし、私は中身が見た目にそぐわないこともあり、あつ
さり攻略できてしまった。

とはいえ、この小さな体で慣れない環境を歩き回ることに加え、敵
との戦闘があったことで存外疲れていたらしい。洞窟を出て、サン
チヨさんの待つ家まで帰ると、安心したのか、どつと疲れが出て、私
たちはうとうとしながら体を洗って着替え、なんと、ご飯を食べなが
ら眠ってしまったのだった。

幼い勇気と悲劇の城

翌日、アルカパの村へ帰るといふビアンカとおかみさんを送ると言ったパパスさんに、私たち二人もついて行くことになった。道中、魔物との戦いの合間合間で、リユカがうれしそうに洞窟での冒険譚をパパスさんに語って聞かせる。その度に、ビアンカが羨ましそうな……いや、恨めしそうな目でこちらを見ているのには、多分気が付いていない。

「アルマってすごいんだよ！ 魔物に石を投げて、僕のこと助けてくれたんだけど、絶対外さないんだ！」

「えへへ」

私ははにかみ、秘技・笑って誤魔化すを使った。大人二人はそんな様子に微笑ましそうに目を細めている。

「アルマは誰かに教えてもらったのか？」

「ふなのりさんたちに、ちよつとだけ。海には魔物がでるから、おぼえておくと便利だぞって」

教えてもらったというよりは、ダーマの神殿で転職して、戦闘経験を積んだんですけど。船乗りは覚えておくと便利な特技が多いのは本当だ。

「ところで、アルカパってどんなところなの？」

話題を変えるためにそう質問すると、途端に得意げになったビアンカが話し始めた。アルカパの町はサンタローズの村より大きくて、きれいで、そんな町の中でも一番大きな建物である自分の家はすごいのだと、自慢を交えて教えてくれる。なんでも、ビアンカの家は宿屋を経営しているそうだ。

「ねえ、やどやさんなら、たくさんの方が来るよね？」

「え？ うん。そうね」

「じゃあ、コスタールって国から来た人とあったことある？ グランエスタードでもいいよ」

「え、ええ？」

ちらり、とビアンカが助けを求めると、母親を見た。おかみさんは、私と目を合わせて、気の毒そうに「ごめんね、どつちも聞いたことがないよ」と首を振った。パパスさんやサンチョさんから、私の事情を聞いているのだろうか。

「そう……うん。おしえてくれてありがとう、おばさん」

もとより期待はしていない。コスタールやグランエスタードを探すなら、もつと別の、旅の扉とか神隠しの噂とかを訪ねて回った方が早い気もする。ぽん、と肩にパパスさんの手が置かれた。

「アルマ、着いたぞ。あれがアルカパの町だ」

ビアンカが自慢げに話すだけあって、よく整備されたきれいな町だった。もともと落ち込んでないが、気持ちを切り替えたように見せ、私は笑顔で「きれいなまちね」と感想を告げた。

寄り道せずに、ビアンカの家である宿屋まで向かい、父親のダンカンさんに薬を渡す。本当はそのまま帰ろうとしていたのだが、おかみさんに引き留められ、アルカパの町で一泊していくことになった。

大人が話をしている間に、ビアンカがアルカパの町を案内してくれることになり、ぴよこぴよこと揺れる金髪を追い掛ける。勝手知ったる町の中では、少女は活き活きした顔で町のあちこちを紹介したり、町の人に話し掛けたりして、しつかりとその役目を果たしてくれた。

この愛らしい少女は町の人気者で、それは悪戯盛りの年ごろの少年たちからも、例外ではなかったようだ。

「ちよつとー！ 何してるのよー！」

猫——というには無理があるサイズの動物をいじめている怖い物知らずな少年たちは、ビアンカを見てぽつと顔を赤らめた。二人は「この猫面白い鳴き声なんだ」とかすつとぼけたことを言っていたが、どう見てもそれは魔物だと注意してあげた方がいいのだろうか。世間を知らないって怖い。

猫をいじめるな、と注意するビアンカに、少年たちは「それなら、レヌール城のお化けを退治してこい」と条件を付ける。もちろん、ビアンカはこの条件をあっさり呑んだ。あ、これ、私も行くやつかな。

宿に戻ったビアンカは、「夜になったら迎えに来る」と言っ、どこ

かへ行ってしまった。どうやら、夜に備えて準備をするらしい。

私とリュカも、とりあえずは一通り案内してもらったし、宿でのんびりすることにした。それにしても、考えたいことはいっぱいあるのに、イベントが短期間に立て続けにあって驚く。大まかなことしか記憶にないので、レヌール城攻略についても何か必須な物があつたかとか、そういうの全然覚えていないんだけど、大丈夫だろうか。まあ、本来は二人で攻略できるはずのところだから大丈夫だろう。私はリュカとビアンカについて行くだけだ。必要だったら石つぶてとか、さぎなみの歌とかで援護すればいい。はぐれたら稲妻で一斉駆逐である。

「リュカ、買い物とかしなくてへいき？」

「うーん……お化け退治って、何するんだろう。お化けも魔物みたいに倒せるのかな？」

「どうだろうねえ」

お化けという名の魔物だよ、とは言わずに、首を傾げる。ただ、子ども三人で行くとなると、私もリュカも回復呪文を使えないので、装備は充実させていた方がいいかもしれない。

「二応、買い物しておこうか。怪我をするかもしれないから、薬草も買っておこう。僕たち、洞窟で魔物を倒したから、ちよつとだけお金はあるし」

リュカも似たようなことを思ったのか、そう提案される。願ったり叶ったりだ。やはり、少年とはいえ旅慣れているので危機管理能力が多少は育っているようで、ありがたい。

「うん、わかった」

ちなみに、一応今のはパパスさんに聞かれないようにひそひそ話である。私たちはパパスさんに声を掛けて、買い物に行ってくることを伝え、宿を出た。陽は傾き始めていて、もうすぐ夕飯の時間である。

ビアンカが何時ごろ出掛けることを想定しているのかは知らないが、夜道は暗いだろうし光源があつた方がいいかもしれない。どこの家にもあるものだし、出掛けるときになつて慌てないように、一本火の着いていない松明を「借りて」おこうか。

「アルマは何かほしいものはある？」

「うーん、わたし、盾って重いから、持っているとたぶん、じやまになるとおもう。でも、何も無いのは不安だから、防具屋さんで何か買えるといいな」

「武器は？」

「リュカが新しいのを買うなら、今使ってるひのきのぼうをちようだい」

「分かった。何かいいものがあるといいね」

ピアノカに案内してもらったこともあって、目当ての店には迷わず辿り着くことができた。向こうも私たちのことを覚えてたようので、微笑ましそうにこちらを見ている。

「いらつしやい。ご用は何かしら？」

防具屋のお姉さんが、店の前に来た私たちに声を掛けてくれた。

「あ、僕たち買い物したくて……」

「リュカ、その前に、おなべのふたとか、ふくろに入れてあったものを売ろうよ」

「そうだね。えつと、これと、これと、これ……」

物理法則を無視している魔法の袋から、いろいろな物を並べていく。子ども相手に大人げなく商売をする気はないのか、良心的な値段で引き取ってもらうことができた。

「ボクにはこつちの革の鎧、お嬢さんには革のドレスがおすすめよ」

親切にそう教えてくれるが、革のドレスは子どもにとって少々値が張る。交渉しても良いが、五歳児の姿でそれはあまりよろしくないかなと思う気持ちもあり、話をリュカへと逸らすことにした。

「ねえ、リュカ。かわのよろいだつて。着てみたら？」

「じゃあ、アルマも……」

「ううん。わたしはいいの。リュカのおさがりのたびびとの服をもらうから」

「しつかりしてるわねえ。それじゃあ、ボク、さっそく試着してみましようか？」

子ども用サイズの、ぴかぴかした革の鎧をちよつと照れた顔で身につけるリュカはとっても可愛らしい。六歳という年齢と、もともとの

中性的な顔立ちもあって、少年というよりは少女にも見える彼だが、鎧を見に着けるとさすがに少年らしさが出る。

「わあ！……とつてもにあうよ！」

「そ、そうかな？……じゃあ、あの、これ買います」

チヨロくて心配になるが、素直なのが彼のいいところなので、褒めて伸ばそうと思います。防具屋ではそれだけを買って、私はリュカの旅人の服をもらいうけ、武器屋ではリュカのためにブーメランを購入した。ちなみに、戦闘で得たお金は全てリュカが持つようにしている。建前上は、リュカの方が年上なので。本音は彼が持っていたところで私が欲しいと言えば買ってもらえるため。

「本当に何も買わなくてよかったの？……全部僕のおさがりになっちゃったけど……」

「いいの。それにほら、やくそうをたくさん買ったら、あんまりお金なくなっちゃったじゃない。わたしは武器がなくても石を拾って投げればいいもの。それに、おさがりをもらうって、なんだかお兄ちゃんができたみたいでうれしい！」

思い切り笑顔を向ければ、リュカもそれ以上は言わなかった。夕食がちょうど出来た頃なのか、宿からは良いにおいが漂っている。ピアンカも含めたみんなで食事をし、お風呂に案内され、その間トイレに寄ると言って台所から松明をこっそりちよろまかしておいた。

子どもは寝る時間、と言われ、さっさとベッドに入る。子どもの体は入眠がとても早くて、私はすぐに夢の中に旅立った。

夜中、肩を揺らされて目を覚めます。暗い中だったが、起こしたのがピアンカとリュカなのは分かった。

「……おはよう」

「さ、いくわよ、アルマ」

「うん」

音をあまり立てないように立ちあがり、さっと身支度をする。それから、宿から出るときにちよろまかしておいた松明を持って行くと、ピアンカが呆れた顔をした。

「あなた、意外と抜け目ないのね」

「だって、まっくらな道を歩くのはこわいし……。あ、ぬすんだつもりじゃないのよ。勝手にとってきちちゃったけど、ビアンカがだめって言ったら戻すつもりだったの」

「あら、いいのよ。助かったわ。さ、レヌール城はこつちよ。大丈夫、門番のおじさんはぐっすり寝てるから」

「ぜんぜん門番のいみないね」

「あんた、はつきり言うわね……」

とはいえ、道中は全然平和ではなかった。魔物は昼より夜間の方が活発になるものが多いからだ。まあ人攫いとかに遭遇するよりは全然マシなわけだけど、そんなこんなで、リユカはホイミを覚え、ビアンカはメラを覚え、めきめきと戦闘技術が向上していった。人間、追い詰められると眠っていた力が目覚めるんだなあと感心しきりな私である。ちなみに、私は松明係と兼任して、薬草を使ったり石つぶてを使ったり、と戦況に応じた動きと称して子どもたちの成長を見守っている。

キヤーキヤー言いながら魔物を撃退しつつ、ようやくレヌール城まで辿り着く。始めは夜の道に緊張した様子が見られたビアンカだったが、もはやそんな余裕もなく、魔物との戦いに必死になっていた。「あ……いいいよね」

しかし、それもレヌール城を見るまでだった。元は美しい白亜の城であったらうその建物は、今は朽ちかけ、不気味に佇んでいる。道中は全く荒れていなかったはずの天気だが、レヌール城だけは局地的に雷鳴がとどろいていた。

「えーと、ビアンカ、大丈夫？」

「だ、大丈夫に決まってるでしょ！わたし、お姉さんのよっ？」

声が上がっている。一方、カチンコチンに怖がっているビアンカを気遣うリユカは怖がる様子もなく、六歳なのにもすごく肝が据わっているな、と感心した。正直言えば私もホラーは苦手だが、魔物のいる世界に来てからというものの、慣れもあつてか多少平気になった。しかも今回は、心霊的な現象というよりは魔物のせいだと種も分かつて

いる。というわけで、ビアンカよりは平静を保っていられた。

「ビアンカ。わたし、とつてもこわいから、手をつないでもいい……？」

おねがい」

松明を持っていない方の手を差し出すと、ビアンカは少しほつとした顔になって、「ええ、もちろんよ！」と私の手を取った。なるほど、おかみさんが「探検」に行かせたくなかったわけだ、と納得する。

この子は自分で「お姉さん」と言い聞かせることで無茶ができてしまう。無茶をしてしまう。諫める人がいない場で、年下の子どもたちをはずん引つ張っていくのはまだまだ向いていないかもしれない。とはいえ、その年下というのが私とリュカなので、今回は上手く「お姉さんキャラ」が発動してくれるようコントロールしていけるとは思うが。

「ありがとう、ビアンカ。これなら、あんまりこわくないわ」

微笑む。仲間外れにされた気持ちなのか、リュカが「行こうよ」と少し拗ねたような表情をした。かわいい。

松明の頼りない灯りに、ひゅうつと湿っぽい風が吹きすさぶ。ぽつり、稲光と共鳴するかのように雨が降り始め、ただでさえ頼りなかった灯りは消えてしまった。湿った松明など使えないので、邪魔だしさくつと捨てる。

「あれ、この扉、開かないよ」

「裏口がないか、見てみましょうよ」

正面の入り口は錆びついているのか、中に入ることはできなかった。雨粒が段々大きくなってきてお化け退治云々よりも雨宿りがしたい。年長者に従い城の裏手に回ると、崩れてむき出しになった城壁のおかげで、城内につながっているであろう長いはしごを発見することができた。

「ここから上れそうね……。リュカ、アルマ。雨が降っていて滑りやすくなってるから、気を付けるのよ」

「うん」

リュカ、ビアンカ、私の順にはしごを上る。ううむ、松明は捨てて正解だった。中々に重労働である。滑るはしごから落ちないように、

力を込めて慎重に手足を動かさねばならない。ああ、これ、明日筋肉痛になるやつだ……。無事に上まで辿り着いて、城内に足を踏み入れる。すると、一際大きな稲光と共に、今入ってきた扉の入り口が閉まってしまった。

「うそ……ううん、だ、大丈夫よ。もうあそこからは出られなくなっちゃったけど、進めばきつと出るところもあるはずだわ」

入った部屋には棺桶が並べられていて、嫌な雰囲気だ。遺体を安置する部屋というより、むしろ訪れた者を恐怖にさらして嘲笑うかのよくな醜悪さがある。リュカにしがみついているビアンカは、気丈に振る舞いきれずに震えている。かわいそうに。当のリュカも、先ほどのような余裕そうな表情ではなく、緊張からか恐怖からか、顔が強張っていた。

「階段がある。下を調べてみよう」

どの道この部屋にいても、戻る道が閉ざされては仕方がない。リュカの提案に頷いて、私は二人の後をついて行った。ところが、二人が階段を降りようとしたとき、ガタガタツと大きな音を立てて、棺の蓋が一斉に開いた。中からは骸骨が出て、規則正しく二列に並んでこちらに近づき——部屋が真っ暗になった。

「うっ、わ!? リュカ! ビアンカ!」

冷たい感触が、体を拘束してくる。私は二人の名を呼ぶが、目に見えない敵は私の体をどこかへ運び出す。

「このっ——!」

暗闇にまだ目が慣れない。しかし、目は慣れなくても口が自由なら、私は戦う術を持つ。そう、相手が魔物なら、歌えばいい。私の「さざなみの歌」は相手を眠りにつかせる。耳元でささやく潮騒の子守唄は、母なる海の抱擁を思わせ、聴いた相手を眠りに誘う。

ほどなくして、私の体から冷たいものが離れていった。代わりに、慣れてきた目をよくこらすと、どうやら罰当たりなことにお墓の上に倒れていたらしい、ということが分かった。周りには骸骨のような魔物が眠っているが、放置で良いだろう。生き埋めとかにされる前で助かった。そうなつてくると脱出に難儀するだろうから。

「リュカとビアンカは……」

辺りを見回すが、どうにも見当たらない。レヌール城で私が覚えていることと言えば、ベビーパンサーを助けるためにイベントが始まること、魔物のせいで王と王妃が眠りにつけないでいること、親玉を倒すとゴールドオーブがもらえることくらいで、もはやダンジョンの構成も、ゴールドオーブ以外の入手アイテムも忘れた。つまり、どこで合流するのが適切なのか、不明だ。

「うーん……」

顎に手をやり、少し考える。案は二つ。そのままここで二人が来るのを待っているのと、逆に先に進んでおくというものだ。もしもリュカたちが先に進んでいた場合、私は問題が解決されるまでここで待ちぼうけ。もしも私の方が先に進んでいた場合、私は二人を置いて親玉を倒そうという気は全くないのでイベントが発生しそうな雰囲気があるところで待つことができる。

というわけで、私は先に進むことにした。城内に入る扉に手を掛けて、周囲を警戒しながらそのまま中に入る。

倒れた本棚があるだけの部屋だ。中に階段のような物は見当たらないが、不自然に本棚同士がびったりとくっついて設置されている場所がある。この下に階段がありますと言われたら「でしょうね」と答えるレベルの不自然さだ。

ふと、視線を感じて本棚から部屋の奥へと視線を移す。そこには体の透けた美しい女の人がいて――。

「あつ！ アルマ！ 見つけたわよ！」

「アルマ！ 探したんだよ!!」

仲良く手を繋いだ二人が駆け寄ってきて、思ったより早い合流になったなど感想を抱きつつ、一応魔物が化けていないかの確認を取る。

「リュカ、ビアンカ、つわあ！」

転んだふりをして、リュカに抱きとめてもらう。胸元から出しておいた、勇者様にもらったお守りは反応なし。で、あるならば、おそらくリュカは本物だ。何せ、勇者様からのお守りには聖なる力が込めら

れているそうなので、邪悪なものは触れることも厭うのだそうだ。

「アルマ、大丈夫？ ケガはない？」

「こわかったよう……お墓の中にね、とじ込められそうになったの。ねむたくなる歌を歌ったら、がいこつさんたち、ねむってくれたんだけど」

泣きまねは上手くできる自信がなかったのでやめた。リュカのところから離れて、ビアンカにも抱きつく。

「ごめんね、アルマ。はしごを上ったあとも、手を握っていればよかつたわね」

そつと抱き留めたビアンカも全く問題はなさそうだ。私は彼女の手を握って、部屋の奥を指差した。

「あのね、ふたりとも。あそこに女の人がいたの。いっしょに見に行ってくれる？」

ごくり、と少年少女が唾を呑み込んだ。窓際に向かうと、そこには美しく、儂い雰囲気をもったドレス姿の女性がいた。姿は透けているが、恐怖を抱かせない優しげな雰囲気がある。

「あの……」

リュカが話し掛けようとする、彼女はその雰囲気と違わぬ優しい目でこちらを見つめ、そしてすうつとそのまま透けて消えた。彼女が消えていなくなったのと同時に、ぴたりとくっついていた本棚が離れ、下に階段が現れる。

「い、今の人、幽霊かな」

ビアンカがこわごわ口に出す。

「うん……でも、あの人、全然怖くなかったね。下に行ってみようよ」リュカに続いて階段を下る。階下にはカラスが集っていたが、私たちが下りてくるとどこかへ飛ばたいといった。窓の外では相変わらず、ざあざあど降り続く雨に、雷鳴が大きな音を響かせている。震えるビアンカの手を、きゅつと少しだけ力を込めて握った。心配顔の美少女がこちらを見る。

「ビアンカ、わたし、見つけてもらえてうれしかった。三人一緒なら、きつと大丈夫だね」

そう言うと、彼女は「ネコちゃんを助けたい」と言ったのと同じ、決意のこもった美しい目を私に向けた。

「そうね。わたしもそう思う。二人と一緒に来てもらえてよかったわ」

廊下の途中にある扉を開く。王族の寝室だったらしいその場所は荒らされた雰囲気はなく、部屋の中にはあの女性の幽霊がいた。ソファに座って、私たちに向かってにこりと笑みを浮かべる。

「あの、あなたはここのお城の人ですか？ 他の人は？」

リュカが話し掛けると、彼女は少し悲しげに頷いた。

「わたしはこのレヌール城の王妃、ソフィアといいます。十数年ほど前……お城の者は皆、魔物たちに襲われ、殺されたのです」

ソフィア王妃の目に、きらりと涙の粒が浮かぶ。それから王妃様は、邪悪な手の者が、世界中から身分ある子どもをさらっているという噂、自分とエリック王には子どもがおらず、その腹いせで皆殺されてしまったのではないかという話を聞かせてくれた。

正義感の強いビアンカは、目に涙を溜めて、怒りでぶるぶる体を震わせている。リュカは小さく「そんな、ひどい……」と呟いていた。そんな二人の様子を見て、王妃様は優しい子どもたちへ気遣うような笑み——あるいは、諦観かもしれないが——を浮かべて、言葉を続けた。「今となっては嘆いてもしかたのないこと。ですが、せめて……わたしたちは静かに眠りたいのです。どうか、お願いします……。この滅びた城に住みついたゴーストたちを追い出してください。そうでなければお城の者たちはいつまでも呪われた舞踏会で踊らされたままなのです……」

「ねえ、リュカ、アルマ。わたし、絶対許せないよ！ ネコちゃんを助けるためのお化け退治だったけど、王妃さまとレヌール城の人たちのためにも、絶対ゴーストを追っ払ってやるんだから！」

「うん！ 僕もそう思う」

「わたしも。望んでもいないことをずっとやらされるなんて、そんなの嫌にきまつてるもの」

ビアンカを皮切りに私たちがそう言うと、王妃様はうれしそうに、

けれど申し訳なさそうな顔をした。

「ああ、幼いあなたたちに、こんな危険なお願いをしなければならいなんて……ですが、どうかあなたたちの優しさに甘えさせてほしいのです。役に立つ物があるかは分かりませんが、この城で見つけた物は、好きにお持ちください。あなたたちに神のご加護を」

王妃様は両の手をぎゅっと握って、私たちのために祈りを捧げてくれた。心なしか、雨が弱まったような気がする。そういうわけで、私たちは寝室の中を見て回り、薬草や手織りのケープ、何に使うかは分からないが、綺麗な銀のトレイを見つけ、それを袋の中に入れた。

サンタローズの洞窟でも何かの原石のような石を見つけたが、何に使うか分からなかったのとおりあえずリュカの袋に突っ込んである。こういう用途不明の物は、突然後半になって使う用事ができることもあるので、袋があれば邪魔にもならないし、売ろうとすると嫌な顔をされるので、とっておくのが吉だ。

「ねえ、このケープ可愛いわね。アルマ、着たらどう？」

「え、ピアンカはいいの？」

「わたしはいいのよ。家に帰ればママもパパも買ってくれるもの。旅人の服もいいけど、やっぱり女の子だから、可愛い服を着なくっちゃ！」

まあ別に旅人の服でも困ってないし、ぶっちゃけ防御力に大した差はなさそうだから私はどっちだってかまわないんだけど。

「ありがとう。それなら、アルカパに戻ってから着るね。ここで着替え直すのもちよつと恥ずかしいし……。リュカ、これ、ふくろの中に入れておいてもらっていいかなあ？」

「うん、預かっておくね」

そんなやりとりを終え、部屋から出ると、シャンデリアが落ちていたり、床が崩れていたり、王妃のいた寝室とは打って変わって荒れた様子になった。再び、緊張感が増す。階段を下ると、お互いの姿が確認できていた先ほどまでとは違って、真っ暗闇になった。

「真っ暗ね……気を付けましょう」

ピアンカの言葉に頷く。ぴしやり、と稲妻が走り、それを光源とし

てわずかに辺りの様子を確認することができた。なんかいる。ゴーストっぽいやつが。ただし、こちらに向かつて襲ってくる気配はない。そのせいで魔物感がなく、ちよつとゾツとしたが。

「あつちに階段があつたね」

小さな声でも、二人には聞こえていたようで「下りてみよう」とリユカから短い返事をもらった。雷が光る度に周囲を確認して、着実に階段へと近づいて行く。王妃の話聞いたこともあつてか、稲光に照らされるビアンカの横顔は、もはや恐怖を浮かべてはいなかった。リユカの顔も、幼いながらに決意に満ちた表情をしていて、私はこの短時間での子どもたちの成長を頼もしく思った。

「階段を下りるよ。足元に気を付けて」

リユカの言葉に従い、慎重に足を動かす。下の階は先ほどとは違って、きちんと互いの姿を目視できる程度の暗さだった。

「あつ、人がいるよ」

まさしく、「王様」という恰好をした、これまた透けた人物を指差す。三人で顔を見合わせ、頷く。言葉にせずとも意見が一致したようだ。やることと言ったら一つしかない。――追い掛けよう。

その人物が歩いていった方へ向かい、扉を開ける。吹き抜けの大きな渡り廊下の下では、骸骨たちが集まって何かをしていた。王妃の言っていた舞踏会ではなさそうだな、と感想を抱く。渡り廊下を抜けて扉を開けると、再び王様っぽい幽霊が歩いて行くのが見えた。その人物は上り階段でも下り階段でもなく、廊下の奥の青い扉の向こうへ行ってしまった。

リユカとビアンカは見失わないようにと小走りになっていたが、私にはどうも、あの王様は私たちが見失わない程度に歩調を合わせてくれているような気がした。まあ、手をつないだままだから、私も小走りになるんですけどね。

「あつ」

扉の先で、リユカが声をあげる。王様っぽい幽霊は、私たちの方――つまり、扉の方を向いて立ち止まっていた。やっぱり、待っていてくれたらしい。

「おお、ここまで来る勇気のあつた者はそなたたちが初めてじゃ」

うれしそうに微笑んだ王様に、「エリック王ですか？」と無礼は承知で声を掛ける。私も一応、コスタールやグランエスタードの王族と謁見したことがある身だ。もうちよつとちゃんとした振る舞いはできると思うが（自信はない。なにせコスタールの王様はなんというか、気さくだし。グランエスタードの王様は子どもに優しいので、あんまりそういうのを気にされない方々なのだ）、この場ではむしろ、形式的な振る舞いよりも大切なことがあるのではと思ったのだ。

「うむ。その通り。わしはかつてこのレヌール城を治めていたエリック王に相違ない」

「わたしたち、王妃様からお話を聞きました！ このお城が魔物に襲われて、それで、お城の人たちみんな眠れなくて、困ってるって！」

ビアンカの言葉に、エリック王は深刻な表情で、深く頷いた。

「それなら話が早い。何年前前からこの城にゴーストたちが住みついてしまい、わたしとソフィアは眠りにつくこともできぬ。かつてはこの城に咲く花々をながめ、午後の茶を楽しむのがわれらの幸せだったというに……。どうかお願いじゃ！ ゴーストたちのボスを追い出してくれぬか？」

「もちろんです。僕たちもともと、お化け退治をしようと思って、ここに来たんです」

「それに、亡くなってる人たちを苦しめ続けるなんて、許せないわ！」

少年少女の言葉を聞いて、「そうか、やってくれるか！」とエリック王はうれしそうに頷く。それから、ゴーストのボスの居場所や、そこまでどう行くのかなどを教えてくれた。周りを魔界の幽霊が守っていると言っていたが、魔界の幽霊とは魔物とは別物なんだろうか。話に水を挿すのも失礼なので、特に質問はしなかったが、気になるところだ。あらかたの説明を聞いたと思われるところで、扉を引き返すと、エリック王が目の前に現れ、呆れつつも微笑ましそうにこちらを見つめていた。

「待ちなさい。まだ話すことがあるというに、若い者はせっかちでないか。そのまま玉座の間についても、真っ暗で何も見えぬであろう」

たしかに。言葉の続きを聞くと、大広間を抜けた地下に台所があり、その壺の中に松明があるそうだ。それを使えば、あの真っ暗な場所も明るく照らすことができるという。

「さあ、こっちじゃー！ サビついているドアも開くようにしておくから、よろしくたのんだぞよ！」

王様の言葉に従い、階段を下りる。すると、行く先々の扉が開いていく。幽霊つてすごいな、業者要らずである。

「ねえ、台所を探しながら、正面の入り口にも行ってみようよ。入るときは開かなかつたけど、王様の力で開けてもらえるかもしれないよ」「そうね。もしかしたら松明の他に役に立つ物があるかもしれないし、こうなったら隅々まで探検して、ゴーストのボスつてやつをぎつたんぎつたんにしてやりましょう！」

二人とも気にした様子はないが、今の自分の発言に反省する。舌足らずな演技をする気はもはやなくなっていた。これはまずい。ちゃんと演技しなければ。

メモメント・モリ

大広間では骸骨に混じって、お城の人たちが幽霊となって踊っていた。しかし、その表情は全く楽しそうではなく、むしろ苦痛そのものである。すぐに助けてあげるからね、と声を掛けながら、私たちは幽霊たちに役に立ちそうなことはないかヒントをもらっていく。

聞き込みのいかいあり、お城の正面玄関から出た先の、崖の下にある入り口から入ると倉庫があるという話や、地下の魔物は襲ってくるという話を聞くことができた。学者の幽霊が魔王ミルドラスの存在を示唆していたが、直近で必要な情報ではないと切り捨てる。

とりあえず、お城の幽霊たちからもらった情報をもとに、一旦城の戸外に出て倉庫に寄ってアイテムを回収し、再び城内に戻って地下へと向かう。大皿に盛りつける骸骨たちと、幽霊だからというのとは多分別の理由で顔色を悪くする料理長っぽい人がいた。

「下がってー！」

リュカの表情が険しくなる。魔界の、ではなく、魔物としてのゴーストが現れたのだ。戦いはレヌール城に来るまでの道中で慣れ、城では度胸をつけた子どもたちは、迷いなく魔物たちへと立ち向かっていった。なので、私も出し惜しみせず石つぶてで魔物たちに攻撃していく。魔物といえどゴーストに通用するのか少し不安だったが、問題なく物理攻撃が通ったので安心した。これなら多分、ゴーストのボスとやらにも効くだろう。

戦闘も無事に終え、松明を手に入れた私たちは、王様が説明していた通り、四階に向かうことにした。地下を抜ければ魔物に襲われることもなく、安全に歩くことができる。四階へ向かう途中、歩きながら私とはぐれていたときに二人が何をしてたのか聞くことにした。どうも、動く石像と戦ったり、お墓の前で眠っていた骸骨に襲われたりと、いろいろと大変だったらしい。すみません、後者は私のせいです。

だからなのか、地下以外が全く安全というわけでもない、と年長者

たちは警戒しているようだった。四階につくと、どちらか——あるいは二人ともが、固唾をのむ音が聞こえた。

「じゃあ、たいまつを使うよ」

リユカが松明に火を灯す。ただの松明ではないらしい。青白い炎が辺りを照らすと、稲光だけを頼りにしていたときにはうじやうじやいた魔界のゴーストとやらはいなくなった。玉座の間に向かうべく、慎重に歩を進める。廊下の中央にある立派な扉を開けた先に、そいつはいた。

「ほほう……ここまで来るとはたいしたガキどもだ。褒美においしい料理を作ってやろうじやないか。さあ、こっちに来なさい」

怪しい。ものすごく怪しい。私たちは顔を見合わせた。絶対罠に決まっている。

「その、おいしい料理って……」

「そうかそうか。料理について知りたいか、坊主？ でも、そんな遠くから質問するのは失礼じやないか？ 聞きたいことがあるなら、もっと近くに來なさい」

「料理のことなんてどうでもいいわ！ わたしたちはあなたにもっと聞きたいことが——！」

ずいっ、とビアンカが前に出た瞬間だった。床に穴が開いたのだ。「料理の材料はお前たちだ。残念ながら、質問には答えてやれないなあ」

いやらしい笑い方をするゴーストのボスの声が上の方から降ってきて、落下しながら、アイツ絶対殺す、と心に決めた私だった。

自由落下する私たちは吹き抜けを通って、先ほどまでいた地下まで落下した。何かしらの力がはたらいたのか、王様が助けてくれたのか、衝撃はさほどではなく、怪我もない。

「な！ なんてことだ！ 子どもを料理するなんて、わたしにはできない！」

料理長っぽい幽霊が悲鳴をあげる。私たちは言葉も出ない中「味付け」され、骸骨が壁に取り付けてあるレバーを引くと同時に、再び上

へと運ばれていったのだった。目まぐるしい展開の中、私はただただ魔物への殺意を滾らせていた。

「おおー、こりゃ美味そうだー！」

さて、仕掛けが止まり、浮遊感も収まる。そうやって私たちに襲い掛かってきた魔物どもに向かって、私は手近な料理の乗った皿をブン投げた。

「ぎゃんー！」

外すわけもなく、見事魔物に命中。しかしこんなことでは、はらわたが煮えくり返っている状態の私の怒りも殺意も収まらない。

「アルマ、さすがよー！」

ハツとしたビアンカがナイフを手に、おばけキャンドルたちに攻撃を加える。

「……て」

——ナメたまねしやがって。

「ど、どうしたの、アルマ？」

戸惑った様子のリユカに、笑顔を向ける。なぜって、怒りを向ける対象ではない相手に八つ当たりするのはよくないから。

「ううん、何でもない。はやくこいつらを倒して、さっきのやつを倒しに行こう？　ところで私の石つぶて、全然外さないからきつと、こっ、割れたガラス片とかでもよく当たると思うんだよね？」

私は足元にある皿を思い切り踏み抜いて、いくつかのガラス片を確保する。自分の手を傷つけないように、かつ、二人に当たらないように配慮しながらおばけキャンドルたちに確実に投擲していく。こうなったら、この階にいる魔物全員「退治」してやる。

もしこれがゲームで、テロップがあつたら、何かのバグかと思うほど「かいしんのいちげき」が表示されていたことだろう。これはゲームではないので、魔物が悲鳴を上げながら息絶えていくだけであるが。

「あ、あはは……アルマ、すごい活躍だね……」

「すごいわー！　アルマつたら、才能よ、それ！　あーあ、わたしたち、ソースまみれでひどいにおいだわ。家に帰ったらパパとママになん

て言い訳すればいいのよ……」

引いてる感じのリユカと、全く気にしていない様子のビアンカ。こういうのは女子の方が強かったりするよね。魔物どもが一掃されて少しは苛立ちも収まったため、会話に加わる。

「ほんと。ケープをリユカに預けててよかった。さすがに、しまつてあるものまでしみてないだろうし。さ、はやく四階に戻ろう?」

「そうね、早くお家に帰らなくちゃいけない理由もできたものね」

当初とは打って変わって、ずんずん進み始めた女子二人に遅れて、リユカがついて来る。再び四階へ行つて松明に火を灯すと、ゴーストのボスがバルコニーへ向かうのが見えた。好都合だ。

「追うわよ、リユカ」

「ぜったいにゆるさない」

バン!と扉を開けると、ゴーストのボスが「なんと、ガイコツどもは……」とかなんとか話し始めていたが、構わない。私は出し惜しみせず稲妻を呼んだ。むろん、それはペラペラと耳障りに喋り続けているゴーストのボスに直撃する。

「わあー、こわいなあ。天気が悪い時って、かみなりがどこに落ちてくるかわからないもんね?」

「く、くそガキがあー! 食ってやるわ!!」

「させないわ! メラー!」

幼いなりに自分で判断していたのか、温存していた魔法の火球をここぞとばかりに打ち込むビアンカ。激昂していたゴーストのボスは、もろにそれを喰らってしまう。ざまあみろ。

「ぬっ、小癩な……」

「えいー!」

体勢を崩したところで、リユカがブーメランを放ち、追撃する。うむ、中々良い連携だ。

「ガキども、許さん……許さんぞお……!」

「許さないのはこっちのせりふだわ! ルカナン!」

さて、ここに私がポケットに忍ばせておいたお皿の破片があります。投げます。悲鳴が聞こえますが、無視しましょう。さらに投げま

す。ゴーストのボスが血相を変えて私に迫ってきますが、それに気が付いたリュカが背後からブルーメランで殴打してくれます。さらに、いつの間にか覚えていたらしいマヌーサを掛けて、ゴーストのボスをビアンカが幻惑に包みます。

「悪いことをするとね、天罰が下るんだって」

再び稲妻を呼ぶ。怖いよね、天罰って。悪いことはしない方がいいよね、本当に。

「たっ……助けてくれー！ この城からは出て行くからー！」

満身創痍の魔物は這いつくばり、哀れみを誘うようにそう叫び始めた。私とビアンカは顔を見合わせる。うん、慈悲はないね。私はポケットから残りの皿の破片を取り出した。

「ま、待ってよ二人とも。話くらい聞いてあげようよ。出てくつて言ってるんだし……」

「……まあ、リュカがそう言うなら」

「……………一人がそう言うなら」

ビアンカが同調したので、仕方なく私も残りの皿の破片をポケットにしまうことにした。何かあればすぐ稲妻を呼べばいいし。屋内でも呼べるけど、自ら屋外に来てくれて手間が省けた。

「おお、坊ちゃん！ あんた立派な大人になるぜ！ そうなんだよ、オレたちが出て行けば、こんななにもない城にはもう魔物もやって来ないはず！ オレたちは魔界のはみだし者でただ楽しく暮らせるところがほしかっただけなんだよ。ゆるしてくれるだろ？ なっ？ なっ？」

「でもそれって、このお城の人たちに迷惑を掛けていい理由にはならないよね？」

「そうよね。王妃様も王様も、とっても悲しそうだったもの」

「坊ちゃん!!! 頼むよ!!!」

女子からの賛同が得られないと理解した魔物は、リュカの同情を誘うことにシフトチェンジした。私たち二人からじーつと見られているリュカはたらりと汗を一筋流し、「絶対に、もう、迷惑掛けないって約束できる？」とひきつった笑みで魔物へ問い掛けた。

「おう！ 約束する！ 誓ったっていい！」

「こう言ってることだし……」

困り顔のリユカを見て、私はまず、勇者様を思い出した。それから、シャークアイ様とアニエス様も。あの人たちなら、なんと言うだろうか。

……やっぱり、リユカのように許す気がする。どんなにひどいことをされたって、許せないと思っていたって、そのひとが反省していると思つて、敵意はないと分かったら、許してしまう気がする。そう考えて、勇者様のお守りに手を触れる。ぽうつと、あたたかくなつた気がした。

——あの方たちがそうなさるなら。

「わかつた。でも、本当に、もう絶対に、人に迷惑掛けたらだめだよ」「へ、へえ。ありがとうございます。じゃあ、これで……」

そそくさと魔物が消えていき、ふう、とため息を吐く。ふと空を見上げると、もう雨も雷も止んでいた。真夜中の冒険は終わりへと近づき、分厚い雲の隙間から見えた空は白み始めている。

すると、天から王妃様と王様が舞い降りてきて、私たちの体をふわりと浮かせた。私たちはバルコニーの真上、お墓のある場所まで運ばれたようだ。呆然としながらレヌール城の主たちを見ると、彼らはやわらかく微笑んでいた。

「よくぞやってくれた！ 心から礼を言うぞ」

王様が、私たち三人それぞれの目を見ながらそう言う。

「本当にありがとう。あなたたちののおかげでゆつくり眠れそうです。お城の者たちもやすらかな眠りについたようですわ」

そう言われて、お城の雰囲気先ほどまでとはがらりと変わったことに気が付く。あの魔物はきちんと手下たちを連れて引き上げたようだ。

「さあ、行こうか、おまえ」

王様が王妃様の手を取る。そろそろ夜が明けようかという、暗闇と夜明けがほのかにまじりあう幻想的な空の下、王妃様はうれしそうに

目に涙を浮かべ、しつかりと頷いた。それはあの寝室で見た涙とは全く違う、夜明けの希望に満ちた涙に見えた。

「はい、あなた……。さようなら。あなたたちのことは忘れません……」

手を取り合ったまま、二人は天に上りながら、私たちをずっと見ていた。そして二人の姿が見えなくなると、私たちは誰からともなく顔を見合わせた。

「よかったわね。これからは二人、幸せに眠り続けるはずよ。でも、このお城に住みついたゴーストたちも許せないけど……罪のないお城の人たちをおそった魔物はもつと許せないわね！」

やれやれ、といった風に、ビアンカがため息を吐く。

「たしかに許せないね。あ、ねえ二人とも。お墓の所に、何かあるよ」
リュカが指を差した先を見ると、そこにはまばゆい輝きの宝玉があった。ビアンカが手を伸ばし、何気ない動作で拾い上げる。

「あら？ 何かしら？ きれいな宝玉ね。きつとお礼よ。ねえ、持ってゆきましょう」

彼女はリュカにそれを手渡し、リュカは大事そうに袋へしまう。私はその宝玉を確認して、嫌な現実——というか、未来を思い出し、表情が陰りそうになるのを抑えるために、再び空を見上げた。

「見て、朝日だよ。もうこんな時間なんだねえ」

「大変っ！ 早く戻って着替えなくっちゃ！ 体も洗わなくちゃいけないし……！」

ハツとした表情になったビアンカが、わたわたと慌てる様子に、おかしそうにリュカがくすくすと笑う。

「ビアンカ、どっちにしろあの男の子たちにお化け退治をしたことは言わなくちゃいけないんだし、僕たちが夜抜け出したことを隠したまままでいるのは、諦めた方がいいと思うよ」

ビアンカは頭を抱えた。

「ああ……ママに怒られる……」

しかし、すぐに思い直したように拳を握り、私とリュカの顔を交互に見る。

「でもわたしたち、いいことをしたんだものね！ 危ないこともあったけど、三人だったから平気だったし。二人とも、ありがとう」

ビアンカが、本当に本当にうれしそうにそう言うものだから、私たちはなぜか三人でひたすらお礼を言い合い、そして笑い出し、起き出した魔物になんか目もくれずに、アルカパの町へと戻ったのだった。

まだ空が白んでいるアルカパの町では、見張りの兵士は眠りこけたまま。人々は活動を始める前で、私たちは音をたてないようにそっと宿の扉を開けた。

「すみませんでした」

とはいえ、音を立てないようにしたのは周囲への配慮にしかならず、私たちの「大人にバレないといいなあ」という淡い期待は見事打ち砕かれてしまった。

何せ、宿の中では夜中に抜け出した子どもたちを案じて、不安げな表情の大人たち——パパスさんにダンカンさん、おかみさん、さらには宿で雇われている人たちまで——が顔を突き合わせていたのだ。瞬時に状況を察した私が頭を下げると、大人たちは立ち上がった、こちらに駆け寄ってきた。何かを言おうと、それぞれが口を開きかけたとき、「ごめんなさい！」とビアンカが一際大きな声を出す。

「わたしが無理やり二人をつれて行ったのよ。三人なら大丈夫だと思っ……レヌール城のお化け退治に行ってたの」

「そんな、ビアンカのせいじゃないよ！ 僕だつてネコさんを助けたかったし……その、だから」

涙目になってビアンカを庇おうとするリュカのターバンの上に、ふわりと大きな手が乗った。私は、たったそれだけの挙動でその場にいますべての人の視線を奪った人——パパスさんを見上げる。息子の頭に手を置いたままのパパスさんは「疲れただろうから、体を洗ってよく寝なさい」と短く、それだけ言った。私たちは顔を見合わせて、それから頷く。

「うん、あの、分かった。お父さん、ありがとう」

「パパスおじさん、ありがとう」

「おじさま、ありがとうございます」

子どもたちから口ぐちにお礼を言われて、パパスさんは髭を撫でながら、ふうつと息を吐いた。

「礼にはおよばない。そのかわり、目が覚めたらきちんと説明することー!」

「はいっ!」

三人で良い子の返事をする。私たちは手早く着替えを用意して、ビアンカに案内されたお風呂場へ行った。みんな二桁にも満たない子どもなので、仲良くきやあきやあと洗いつこしながら、楽しくお風呂に入る。不愉快だったソースのにおいもすっきり落ちて、清潔な服に着替え直し（そういえば、着替えがなかった私はビアンカのおさがりを「たくさんあるから」ともらえることになった）、同じベッドでくうと眠ったのだった。

遅めの朝食の時間になり、まだまだ眠かったものの、この後の予定もあることから起こされ、食事をとる。食べながら、主に年長者のビアンカがお化け屋敷の顛末を語って聞かせると、大人たちは子どもが脚色した冒険譚を語っていると思っただのか、微笑ましく、けれどその内容に時には心配そうにしなから聞いてくれた。

ビアンカがいい感じに話を盛ってくれたので、基本的には事実なのだが、フィクション感が強まりありがたかった。特に、私が怒りで稲妻を呼び、ゴーストたちのボスを倒した話などは、どつと笑いが起きていた。ありがたい。魔法でない分、特技に関しては理解していない人にその特性を伝えるのが難しいからだ。ちなみに、ゴーストのボスを倒すシーンでは、なぜかリユカだけは一切笑わず俯いていた。

「みんな、うそだと思ってるわね!? 本当よ、わたしたち三人でお化け退治をして、レヌール城の王様たちにきれいな宝玉をもらったんだから。リユカ、見せてあげなさいよ」

「あ、うん」

袋から取り出されたゴールドオーブに、大人たちははつと目を瞠

り、そして息を呑む。美しいだけではない、その宝玉の神聖さは、誰であれ、少なからず感じ取ることが出来るだろう。

「これは……」

パパスさんが呟き、それから首を振った。「これは大切なものだ。これから、無暗に見せびらかしたり、人に話したりしない方がいいだろう」としつかりした口調で言う。

「ビアンカも、自慢したくなるかもしれないけど、この宝玉のことは黙っておいたほうがいいかもしれないね」

おかみさんがそう付け加えると、ビアンカは「分かったわ」としつかり頷いた。信じてもらえていないと思つてつい話をしてしまったようだが、彼女は優しく、そして聡明な子だ。ただならぬ雰囲気の宝玉が、善い人だけを引き寄せるとは思っていないのだろう。むしろ、その逆であることに思い至ったようで、真剣な表情になった。

「何はともあれ、三人が無事でよかった。父さんは支度をしたらこの町を発つつもりだが、リユカもアルマも、町の人にお別れの挨拶をしておきたいだろう。宿で待っているから、挨拶が済んだら戻つて来なさい」

返事をして、私たちはとりあえず捕らわれの猫を助けに行こうと、宿を出ることとする。詳細はともかく、私たちがレヌール城のお化けを退治したということは、寝ている間に広まったようで、多くの人が知っていて、たくさんの人に声を掛けられた。

私の予想では、今頃子どもたちがいなくなった宿屋では、ゴールドオーブのことを含め、今後私たちにとつて不都合になり得ることは緘口令が敷かれていることだろう。まあ、そこまで知らない町の人たちは、私たちの冒険譚を少ない情報から想像して補い、面白おかしい噂話として話題にしているようだ。

「さあ、約束だよー。この子ネコをもらつていつでもいいわね？」

周りを池に囲まれた、小さな小さな小島のような場所で、変わらず猫という名のベビーパンサーを連れ立っていた少年二人に、ビアンカが胸を張って自信満々に話し掛ける。

「おい、どうするっ？」

ビアンカに話し掛けられて、やっぱりちよつとうれしそうな少年は、ちらちらと彼女を盗み見つつ、相棒である隣の少年を見やった。「しかたないか……」

仕方ない、というよりは、格好つけるためだろうな、とバレバレの表情で首を振った少年は、私たち——やっぱり、特にビアンカを熱心に見つめて、言葉を続けた。

「よし・約束したし、お前らもがんばったからな！ このネコはあげるよ！」

そう言つて、ぱしんとベビーパンサーの背を軽く叩く。当のベビーパンサーは嫌そうに顔を歪めた後、切り替えるように私たちの方向に走ってきた。

「よかつたわね、ネコさん。もういじめられないわよ。さあ、行きましょう」

少年たちに熱心に見つめられているビアンカの対応はあっさりしたもので、もはや彼らに用はないと言わんばかりに（事実はないが）、ベビーパンサーを優しく撫で、ふわりと微笑んだ。うむ、可愛らしい。「あ、おい……」と彼女を引き止めようとする少年たちを、わざとなのか本当に気が付いていないのか無視したビアンカは、橋の上まで来たところで足を止め、両手を打った。

「そうだわ！ このネコさんに名前を付けてあげなきゃ！ どんな名前がいいかしら？」

ビアンカが名前の候補をずらずらと出した後、名前は私の一存で「ゲレゲレ」に決まった。リユカは名前にこだわりはなかったようで、「よろしくね、ゲレゲレ」と穏やかに話し掛けている。ビアンカの宿屋は、おかみさんが動物アレルギーのようで、猫（ベビーパンサー）を飼うことはできないらしい。だから、リユカと私がご主人様なのだと、寂しさを悟らせないために、空元気と思える様子で伝えられた。

一通りの挨拶は済ませてあったので、宿に戻ることにする。別れるのがよほど寂しいのか、ビアンカは自分の家が近づくほどに俯き、無言になっていった。まあ、私も思うところがないわけではない。なんだかんだ、私には同じくらい（五歳という肉体基準）の友達はいなかつ

たし、遊び相手はいつもマール・デ・ドラゴーンの船員や、たまに顔を見せてくれる勇者様たちだった。めちやくちや贅沢な遊び相手である。

そして多分、彼女との別れは、周りの大人たちが思っているような気楽なものにはならない。私が元の世界に帰るにせよ、帰れないにせよ、リュカやパスさんと一緒にいるということは、一生会うことができないかもしれないし、そうでなくとも長い別れになることは容易に予想できる。

私は別れに対して気負う方ではない。実の両親との別れは、たとえば心身が擦り減り判断力が地に落ちていたとはいえ、自ら選択したことだったし、転生してからも、それまでの家族や友達を懐かしむことはあれど、会えないことを思っただけ泣いたことはない。今回の「旅」だって、シャークアイ様にもアニス様にも、勇者様たちにだって、絶対にまた会うという決意があるから、寂しくなんてない。

——けれど、この子には、もう会えないかもしれないんだなあ。会いたいな、と思う。けれど、あの世界と天秤にかけてしまえば、私はそちらを選び取る。目の前で別れを惜しんでくれているこの健気な少女を、私は選ばない。

「おお、リュカ、アルマ。ちょうど父さんも準備ができたところだ。これから村に戻るが、町の人たちに挨拶は済ませたか？」

「うん、お父さん」

大人たちは挨拶を既に済ませたのか、戻ってきた子どもたちをにこにこで見守っている。おかみさんだけは、鼻を気にしていたので、ピアンカの言う通り動物アレルギーが反応しているのかもしれない。魔物でも動物つてことで反応するなら、けっこう辛いなと思う。想像したくないが一例として、町が魔物に襲われたときに、隠れたとしてもアレルギー反応のせいでバレてしまう可能性がある。そうならないうことを祈るばかりだ。

「ところで、その猫は？」

パスさんはゲレゲレに視線を移した。すべすべした毛皮を撫でながらリュカがパスさんを見てその問いに答える。

「ゲレゲレっていうんだよ。いじめられているところを助けたんだ。飼ってもいい？」

「うむ……。命を預かる以上、世話はきちんとするように。では、行くでしょう！」

そんなあつさりでいいのかと思わないでもないが、まあいいのだろう。さすが一国の王様、懐が深い。

「リュカ、アルマ……」

なんて、別れから目を逸らそうとする私を、ビアンカの小さく呟くような声が許さない。私は涙ぐむ少女を見た。

ところで、今の私は五歳児の肉体に気持ちが引つ張られていて、冷静ではない。私は胸に、何とも言い難い気持ちがせりあがり、気が付けば体が動き出していた。

それは、あのレヌール城での猜疑に満ちたものではなく、私の心からの衝動だった。私はビアンカに飛びついて、首に腕を回し、唇が触れ合う寸前まで顔を近づけて、それから口を開く。

「私、ビアンカのこと、ビアンカと冒険したこと、絶対に忘れない」
元の世界に戻ろうとも、絶対に。私の家である海賊船に戻ったら、大切な「家族」たちに、大切な友達との大冒険を聞かせてあげるのだ。
「おおげさよ……だけど、わたしだって、絶対に忘れないわ！」

ビアンカの声は震えていた。子どもはすぐに泣くから困る。——
むろん私も子どもなので、すぐに涙腺がゆるんで、とても困る。

ぎゅっと抱きしめ返してくれたビアンカは、お姉さんぶるとかではなくて「お姉さんとして」、そっと体を離して私の肩に両手を置いた。
「アルマ、これあげる」

ビアンカが、トレードマークでもあるマントのひもをすりと外して、私の肩に掛ける。三歳上のお姉さんのマントは私には大きく、地面についてしまっていた。

「えっと、そうだ。しばらく会えないかもしれないから、リュカとゲレゲレちゃんにも、これをあげるね」

ビアンカはリュカとゲレゲレへ視線を移し、今度は自身の髪の毛をほどいている。ふわり、と少女のやわらかな金髪が風に揺れた。彼女

はりボンをリュカに手渡し、ゲレゲレの首に巻いてあげてから、リュカと私を見つめる。

「リュカ、アルマ。またいつか、一緒に冒険しましょうね！ 絶対よ。みんな、元気だね」

私はビアンカにもらった若草色のマントをぎゅつと握りしめ、頷いた。その約束は、守れないかもしれない。けれど私は、そんなことを言う勇氣は持ち合わせていなかった。

またね、と無邪気に手を振ったりリュカを見て、パパスさんが歩き出した。私たちはその大きな背を追い掛ける。パパスさんは町を出る直前で立ち止まり、こちらを振り返った。

「ところで、二人とも。お化け退治のこと、この父も関心したぞ。しかし、お前たちはまだ子どもだ。あまり無茶をしないようにな」

私たちは顔を見合わせ、「うん」と返事をした。その返事に満足したように、パパスさんは再び歩き出した。サンタローズへ帰る道中、魔物と戦闘になると、ゲレゲレが戦いに加わってくれた。本当、彼が村にいる間、あのいじめていた少年たちに怪我がなくてよかったと思う。ゲレゲレは魔物ながら優しく、分別があるようだと感じた。

村へは戻ると、門番の青年がパパスさんの姿を見てうれしそうに飛び上がった。それを労ったパパスさんは、まっすぐに自宅まで向かう。私は、一応睡眠をとったと言えど、いろいろなことがあって疲れていたのので、一刻も早く体を休ませたかった。そのため、彼がぐたぐた村の人たちと話しこむようなことがなくて非常に助かる。

「旦那様、お帰りなさいませ！ ダンカンさんの病気の御加減はいかがでしたか？」

家に戻ると、こちらもまたパパスさんの帰還を飛び上がって喜ぶサンチョさんに出迎えられた。パパスさんの慕われっぷりがよく分かる光景である。

「ああ、ただの風邪だったようだ。薬を飲んで、もうすっかり元気になっっていた」

「それはようございしました。ところで、留守中旦那様にこのようなお

手紙が……」

サンチョさんの丸い手には、上質そうな紙の封筒があった。何の紋章かは分からないが、蜜蝋でしっかりと封がしてある。パパスさんはそれを真剣な顔で受け取っていた。手紙がパパスさんの手に渡ると、サンチョさんは朗らかな笑顔をこちらに向けた。

「おや、坊ちゃん。そちらは……」

そう言っただけで見つめる。明らかに魔物だが何も言わない。グランバニアの人たちは寛大な心を持っているらしい、と納得した。パパスさんもゲレゲレを連れ歩くことに何も言わなかったし、二つ返事で了承していたし。

「ゲレゲレっていうんだ。僕とアルマとビアンカの三人でお化け退治をして助けたんだよ」

「そうでしたか。それはお疲れでしょう。夕飯の時間になったら呼びますから、どうぞしばらくお休みください。ああ、洗い物と荷物はこちらに」

スルースキルも高い。グランバニアはすごい国だ。

「そういえば、サンチョ。ダンカンのおかみさんから、娘のおさがりを持って行ってくれと、アルマの洋服をたくさんもらった。これもよろしく頼む」

せつせと荷物を受け取ったサンチョさんは、私たちを宿顔負けに整えられたベッドまで案内してくれた。疲れていたのはリユカも同じだったらしく、私たちは横になると、すぐに眠りについた。

ツライことがあっても

夕飯のときに、リュカがお化け屋敷での出来事をサンチョさんに語って聞かせ、もう一度眠った翌日の朝。パパスさんは調べることがあるので家にいるらしい。村の中にいるように、と釘を刺されて、私とリュカは村の中を探検することにした。私たちは既に村を探検していたけれど、ゲレゲレを村のみんなにお披露目することも兼ねて、外で遊ぼうということになったのだ。

家の外には相変わらず、焚き火のそばで寒い寒いと震える青年がいる。確かに、私は今ビアンカからもらった洋服の中から、長袖のニツトワンピースと、ズボンとレギンスの間のようなものを着て、さらにマントまで羽織っているが、春とは思えない気温なので寒い。ちなみに、手織りのケープは古い品で、ほつれているところがあったそうので、サンチョさんが直してくれることになっていた。

「みんな、最初はゲレゲレにびっくりするけど、なでるとうれしそうなの顔をするね」

「そりゃあ、こんなに気持ちがいいんだもの」

自慢げに言うリュカに、思わず笑ってしまう。ゲレゲレの毛皮はなでるとすべすべで、手を差し入れるともこもこしていて温かい。手入れなんてされていなかったはずなのに、毛繕いで事足りるのか、毛並もとても美しかった。太陽に照らされて、ビアンカの髪の毛よりもより色濃い金色がぴかぴかと光っている。

ごろごろとうれしそうに喉を鳴らす彼は、ふと耳をぴくんと反応させ、鼻をひくひく動かした。それから戸惑ったようにリュカを見て、そしてそれからじつと一点を見つめた。

私たちはそれにつられて、彼が見つめた先に視線をやる。そこには、紫色のターバンを巻いた男性が、やわらかな笑みを浮かべて立っていた。私たちのことをもともと見ていたのか、すぐに目が合う。男性は整いながらも柔和な顔をしているが、逞しい体つきも相まって、

まだ幼く男女の区別がつきにくいほど愛らしいリユカとは、似ているようでまったく違う印象を与えた。——たとえば、男性が成長したリユカなのだと言われても、にわかには信じがたいような。

目の色やかたち、口元、髪の毛の感じなど、似ているところを上げれば枚挙にいとまがないが、それ以上にまとう雰囲気が違う。年齢が違うのだから当然かもしれないが、表現しがたい何かを、男性は抱えているような気がした。

「こんにちは」

「あ……こんにちは」

リユカが挨拶を返したので、私はぺこりと頭を下げるだけに留めた。たぶん、この人は大人になったリユカだ。たしか、未来からやって来て、天空城を復活させるためにゴールドオーブを取りに来たのだったか。でも、こうして未来のリユカがいて、ゴールドオーブを必要としているということは、私は何も変えられず、パパスさんは死に、ゴールドオーブは魔物に壊されてしまったということか。

聞きたい。彼に、未来はどうなっているのか、私はどうしているのか。口を開きかけて、閉じる。眩暈がして、私はリユカの服を掴んだ。

「大丈夫かい？　顔色がよくないようだけど……」

驚いたようにこちらを見たリユカよりも先に、男性が私に声を掛ける。その顔は、純粹にこちらを心配してくれているようだった。

「だい、じょうぶ。心配してくれてありがとう、お兄さん。あの、お兄さんは旅人さんよね？　それなら、コスタールとグランエスタードっていう国を知っている？」

私は必死で脳みそを稼働させて、質問を絞り出した。彼はハツとした顔になり、こくりと頷く。

「僕が行ったことはないけれど、話には聞いたことがあるよ。すごく遠いところにあるって」

「わたし、そこから来たの。どうやったら帰れるか、お兄さんは知ってる？」

「それは……」

男性の顔が、悲痛に染まる。待つて。それは一体どういう意味だ。

何を表しているんだ。あなたの時代で私は何をしているんだ。何もできなくて死んでしまったのか。シャークアイ様にもアニス様にも、勇者様たちにも会えないままに。それは——それだけは、なによりも怖かった。

「ねえ、アルマ。本当に大丈夫？」

彼が何かを言う前に、リユカがぎゅつと私の手を握った。私は、その小さな手の温かさに少しだけ冷静さを取り戻す。彼の目的はゴールドオーブだろう。ならば、私はその手伝いをしてやらねばなるまい。私は細く長く、息を吐き出して呼吸を整えた。

「大丈夫。ありがとう、リユカ。それと、困らせちゃってごめんない、お兄さん。おわびに、すてきなものを見せてあげる。ねえ、リユカ。アレを見せてあげようよ」

「え？ でも……お父さんが無暗に見せびらかしたり、人に話したりしない方がいいって」

「うん、だからナイショよ。大丈夫、ちよつと見せてあげるだけでもの。ねえ、お兄さん」

「もちろん。そんなにすてきな物なら、ぜひ見てみたいな」

リユカは少し渋った様子だったが、男性の邪気のない様子を見て大丈夫そうだと判断したのか、袋からゴールドオーブを取り出して、彼に手渡した。見せるだけなら手渡す必要まではないと思うが、そういうところが子どもらしくて可愛いなと思う。

「ね、きれいでしょ？」

私が、あたかも宝物を自慢する幼子のように胸を張ったそのとき、突然強い風が吹いた。ビアンカからもらったマントが翻る。リユカのマントも、男性のマントもぼさりとはためいて、ほんの一瞬、ゴールドオーブのきらめきが、大きなマントに隠れた。

「うん、とつてもきれいだね。見せてくれてありがとう」

風が収まって、男性はにこやかにゴールドオーブをリユカの手へと戻す。いそいそと袋にそれをしまった少年は、私の手を引いて「もう行こうよ」と妙に急かした。

「坊や！ お友達と、お父さんを大切にね。どんなにツライことが

あつても、負けちゃだめだよ。大事な人とは、離れちゃだめなんだ」
背中を見せたリュカを呼びとめた男性は、それから私の方を見た。彼は何かを言おうとして、口を閉ざしてしまふ。しかし、私が彼に言葉を促す前に、リュカがらしくなく、少し強く私の手を引いた。

「そんなの、お兄さんに言われなくつたつてわかつてるよ。じゃあね。僕たち、探検の途中なんだ」

ずんずんと歩くリュカに引つ張られて歩く。やっぱり、自分に会うつて、たとえ姿がちが違つたとしても、本能的に忌避されるんだろうか。そんなことを考えながら、私は未来についての不安や恐怖を、一旦置いておくことに成功した。

「ねえリュカ。そういえば宿屋さんにはゲレゲレのこと紹介してないね。行つてみる？」

もともと、いろいろなことをずると引きずるタイプではない。もちろん、その時々で思い出しはするけれど、今優先すべきなのは、少し不機嫌に見える少年の気分転換だろう。

「あつ、そうだね。行つてみよう」

私たちは手をつないだまま、宿屋に入った。店主に挨拶すると、ゲレゲレの姿にびっくりした様子だったものの、大人しく私たちの後について来る姿を見て安心したようで、入店拒否はされなかった。

「そうそう、ところで、宿帳に落書きがされていたんだ。二人はやりそうもないし、ビアンカちゃんが出て行く前にこつそりやつたんじゃないかと思うんだけど、何か聞いているかい？」

「おじさん、ビアンカはそんなことしないよ！」

リュカがはつきりと告げると、店主は「そうか、ごめんごめん」と微笑ましそうに謝ってきた。

「僕たち、酒場のおじさんにもゲレゲレを紹介してくる！」

ぱつと体の向きを変えて階段を下りるリュカについて行きつつ、顔だけ店主の方へ向けて頭を下げておいた。どうも、うちの子が失礼な態度ですみません。まあ、確かにビアンカはそんなことしないけどな。宿屋の娘だから、宿帳が大切なものだというこつそりくらいは分かっているだろう。

階段を下りた先、真正面のバーカウンターに、半透明の女の子が座っていた。耳の尖った見知らぬ少女を誰も気にした様子がないことと、レヌール城での出来事もあり、リュカがこっそり私に「幽霊かな？」と耳打ちしてくる。

「酒場のおじさんにゲレゲレをしようかいたら、こっそり話しかけてみる？」

「うん、そうしよう！」

そういうわけで、酒場の店主へのゲレゲレの紹介は流れ作業的になった。サンタローズの人たちは気のいい人が多いので、明らかに魔物であるゲレゲレを誰も邪険に扱わない。恐らく、パパスさんが許可していることと、リュカ自身の人望の厚さもあるだろう。同じ年ごろの少年たちと比べると、旅慣れていることもあつてか彼はわがままも言わず、大人をよく手伝い、素直で思いやりがある、ずばらしい子ども”だったので。

酒場の店主と話し終えると、彼は夜の準備のため、商品を確認し始めた。その隙に、私たちは半透明な少女に近づき、小声で話掛ける。「ねえ」

私とリュカが同じタイミングで口を開くと、少女は猫のような目を大きくまんまるに見開いた。

「まあっ！ あなたたちには私が見えるの!?!」

こくり、と頷く。少女は途端にうれしそうな笑顔になった。

「よかった！ やつと私に気がついてくれる人を見つけたわ！」

「えーと……君は誰なの？ どうして透けてるの？」

声を掛けるまでのぼうつとした感じとは打って変わってハイテンションになった少女に戸惑いながら、リュカが店主に不審がられないようこっそり質問する。

「私は何者かですって？ 待って、ここじゃ落ち着かないわ。たしか、この村には地下室のある家があったわね……。その家の地下室に行つて！ 私もすぐに行くから……」

マシンガントーク気味に言葉をすらすら重ねる少女に圧倒されながらも、そそくさと酒場、および宿屋を後にする。宿屋を出たところ

で、リユカの顔を覗きながら「ねえ、地下室のある家って……」と声を掛けると、すっかり機嫌は元に戻ったようで、真剣な顔で「うーん……」と考えていた。

「僕の家にもあるけど、他にもあったかなあ？ とにかく、うちの地下室に行ってみようか。多分、村のほとんどの人にゲレゲレのことは紹介できたし」

その言葉に従って家まで戻ると、サンチョさんが「おかえりなさい」と出迎えてくれた。パパスさんは二階で調べ物をしているらしい。

「僕たち、ちよつと地下に行ってくるね」

「地下？ 何しに行くんです？ 地下は寒いので、もしかくんぼでもして遊ぶなら、暖かい恰好をしてくださいね。ほらほら、ちようどアルマちゃんのケープも繕い終わりましたから」

「わあ、ありがとう！」

受け取って、マントを一度外して羽織ってみる。「よくお似合いですよ」とサンチョさんが笑顔で褒めてくれた。それからもう一度マントを羽織ると、今度は家の中なのにちよつと厚着に思える。

「じゃ、ちよつと行ってくるね！」

階段を下ると、半透明な少女はすでに地下にある蔵の中にいた。

「来てくれたのね！ 私はエルフのベラ」

「あ、僕はリユカ。こつちがアルマで、この子はゲレゲレって言って、」
「じつは私たちの国が大変なのっ！ それで人間界に助けを求めて来たのだけど、だれも私に気がついてくれなくて……。気がついてほしくて、いろいろイタズラもしたわ。そこへあなたたちが現れたってわけ。ねえ、私たちの国に来てくださる？ そしてくわしい話はポワンさまから聞いて！」

リユカの自己紹介を遮り、そこからは口をはさむ余地さえなく、一人でガンガン話し続けるベラは、多分周りから「人の話を聞け」とか「思い込みが激しい」とか言われるタイプだと思う。言い切ったと思っただけで姿を消し、彼女が立っていた場所には黄金の階段が出現した。

「わあ……すごいね」

「うん、階段もすごいけど、わたしたちのへんじも聞かずにいなくなっちゃったベラもね……」

私は心の癒しを求めて、リュカとつないでいない方の手でゲレゲレを撫でた。のほほんとした顔のベビーパンサーには、とてつもなく癒される。こんな癒しの生き物の心を邪悪に染める魔王、やっぱ諸悪の根源だわ。勇者様倒してくれてありがとう。

「ともかく、行ってみようよー」

「うん」

明らかに建物の一階にはつながっていない、長い黄金の階段にそつと足を置く。きらきらと輝くそこは、幻想のように突然現れたわりには、しっかりと私たちの体重を支えてくれた。

階段を上りきると、パツと強い光に視界を奪われる。目を開くと、眼前にはベラがいて、雪の降る小島に私たちは立っていた。近づいてきたベラは「来てくれたのね」と喜び、ポワン様のところに案内すると歩き出した。小島には橋が架かっているが、水面に浮かぶ蓮の葉をベラが軽やかに渡っていくのを見て、私とリュカも恐る恐る足を踏み出した。蓮の葉は大きく揺れることもなく私たちを受け止め、架け橋の役目を担ってくれた。ベラについて行くと、大きな樹をそのままくりぬいたような建物に案内される。

扉をくぐって、氷でできているようには見えるけれど濡れていたり靴底が貼りついたりしない階段を上ると、天井のない吹き抜けの空間に出た。そこには立派な玉座があり、そこに座る、美しくたおやかな女性こそが「ポワン様」なのだとすぐに理解する。透き通る白い肌に、芸術品のように左右対称に整った顔立ち、ベラと同じく上がった耳が特徴的だった。

私たちに気が付いた彼女は、その完璧といっても過言ではない美貌にふわりと笑みを浮かべる。あれだけぺらぺら話していたベラも、彼女の前では緊張した面持ちだ。

「ポワンさま、おおせの通り、人間族の戦士を連れてまいりました」

膝について頭を垂れるベラと、とりあえず立ち尽くす私たち。

「まあ、なんてかわいい戦士さまですこと」

その言葉に、ベラがパツと顔を上げて、大きく手を振る。

「あ……い！ いいえっ！ こう見えなくても彼らは……」

ゆるゆると首を振ったポワンさまが彼女の言葉を遮り、「すべては見ておりました」と言うと、ベラの白い顔は血の気が引いて、寒さとは関係なく青白くなった。ただし、ポワン様自身に責めるような雰囲気はなく、私たちはもちろん、ベラに向ける視線もやさしいものである。

「リュカとアルマと言いましたね。ようこそ、妖精の村へ。あなたに私たちの姿が見えるのは、なにか不思議な力があるためかもしれません」

リュカ、それから私と目を合わせた。ポワン様はやさしげな表情を少し引き締めて、改めて私たちの名前を呼んだ。まあ、気持ちは分かるけど、ゲレゲレもいるから、出来れば彼の名前も呼んであげて欲しいなど、ひっそり思う。

「リュカ、アルマ。あなたたちに頼みがあるのですが、引き受けてもらえますか？」

「あの、はい。僕たちにできることなら」

私は今後、頼みごとをされたらまず内容を聞いてから引き受けるかどうかを検討することをリュカに教えたいと思う。ともあれ、彼が引き受けると言ったなら、当然私も同意する。よく考えなくても、魔物と戦うことになるということは命の危険があるってことだが、まあ仕方がない。

ポワン様は、妖精の国の宝である春風のフルートを奪われてしまったのだと、事情を説明し始めた。このフルートがなければ、世界に春を告げることができない、とも。リュカは寒さに震える村の人たちを思い出したのか決意に満ちた目で「うん！ 僕たちで春風のフルートを取り戻してくるよ！」と元気よく返事をしていった。ちなみに、誰が奪ったとかそいつが今どこにいるとか、そういう詳細は一切聞いていない。

「まあ！ 引き受けてくださるのですね！ ベラ、あなたもお供しな

さい」

感激したように言うポワン様と、彼女に指名されて「はい！ ポワンさま！」とこれまた元氣よく返事をするベラ。待つて待つて。みんなちよつと気楽じゃない？ 記憶があいまいで妖精の国に関する詳細なことが分からない私は、周囲との認識に大きな溝があることについて心配になった。これでちゃんと覚えているなら、上手いことリユカをリードしてさくさくつとフルートを取り返すことができたのかもしれないけど。

「リユカ、アルマ。あなた方が無事にフルートを取り戻せるよう、祈っていますわ」

ポワン様にそう言われて、仕方なく玉座を後にする。ここでいろいろ突っ込むよりも、さくつと聞き込みをして、最初の目的地を定めた方が有益だと思つたからだ。

「ねえ、ベラ。春風のフルートをぬすんだひとつて、どこにいるの？」「えーと……確かだれかがどこかにいるって言つてたような……。そ、そうよね！ こういうのは聞き込みが大事だわ！ みんなに聞いて回つて、情報を集めましょう！」

なるほど。話を聞いていないせいで、明らかになつている情報のことも覚えていなかったのか。ていうか、妖精の国から人間界のことを見ることができないポワン様なら、妖精界のことも見れそうな気がするのだが。私たちに必要な情報を与えなかったのは、何か意図があるからなのだろうか。できれば、そうだと言つてほしい。そうだと思つたから突っ込まなかつたのに、これで実はポワン様がド天然で、うっかり言い忘れていただけとかだつたら泣けてくる。

情報収集はリユカに任せ、私はたまに口を挟んで本筋から逸れないよう誘導する程度にした。そこで分かつたのは、春風のフルートを盗んだやつは氷の館という場所にいること。その館は鍵が閉まつていて開かない事。西の洞窟に、盗賊のカギの技法を編み出して先代に追い出されたドワーフがいること。関係がありそうなのはこれくらいだろうか。

あとは、それらの話に付随して、ポワン様の考え方が甘いだとか、先

代は厳しかつただとか、そういう話も聞いた。ついでに、ゲレゲレがキラーパーンサーの子どもってことで、勝手に私たちに怖い老人もいたな。

「西のどうくつってところに行ってみる？」

宿屋にいたよろず屋さんから、ゲレゲレ用の武器である石のキバを購入して装備させてやってから、私たちは集めた情報を基に今後の方針を決めていた。

「うん、そうしよう」

「ねえ、ベラ。西のどうくつって、魔物はいる？ 強い？」

「えっと、私、西に洞窟があることも知らなかったのよね。まあ、魔物がいたって、私がついているし大丈夫でしょう。危ないと思ったらすぐに戻って、武器や防具を整えてまた挑戦すればいいのよ」

私の質問に、ベラが顎に手を当てながら答える。私は頭を抱えたくなったが、まあ、考えているだけでは進まないことも確かだ。そもそも妖精の国の周りに入る魔物のことすら知らないし、魔物と遭遇してやばさを感じたらすぐに引き返せばいい。

「じゃあ、さっそく行くこうよ！」

戦闘になると危険なので、ずつとつないでいた手を離す。でも、私もリュカも手袋をしていないので、それだけでちよつと寒い。地下室とは違って、雪国は息が白くなるほど寒かった。

静かに雪が降りしきる妖精の国は、吹雪くことは滅多にないそうで、そういった心配はしなくていい、とベラが歩きながら言う。彼女は樂觀主義のきらいがあるゆえどこまで信じていいか判断がつきかねるが、まあ、あまり疑うのもよくないだろう。そう判断して、体が冷え切らないように、パパスさんと歩いているときは違って、積極的に戦闘に参加した。とはいえ、基本的には石つぶてを敵に当てる程度だが。

妖精の国の魔物は集団で襲い掛かってくるようなのも多く、サンタローズの洞窟はもちろん、アルカパ周辺の魔物よりも厄介だ。リュカは懸命にブーメランを投げたり、状況を見て回復魔法を掛けたりしてくれている。ゲレゲレは素早い身のこなしでヒットアンドアウェイ

を繰り返しているし、多様な魔法を使えるらしいベラは補助をしたり攻撃に加わったりと、案外バランスの取れたいパーティーだなとふと思った。

子どもの足で西の洞窟に辿り着くまでにはけっこうな時間が掛かり、到着したところには私たちはすでに三人と一匹での戦闘に慣れてきていた。洞窟では何があるか分からないから、と薬草と回復呪文を併用しつつ、一度傷を癒す。確かここでボス戦はなかったと思うが、記憶が確かではないし、外より洞窟内の魔物の方が強い可能性は大にある。気を引き締めていくことは大切だろう。

洞窟内は薄暗くはあるが、サンタローズの洞窟と同じように松明で灯りは確保しており、人の手が入っていることがうかがい知れる。魔物に警戒しながら歩いているが、やはりどうにも数が多い。もう、背に腹は代えられない、と稲妻を呼びまくってさくさく敵を倒すことにした。だって、既に疲れているし。さっさと洞窟を攻略して一度休みたかった。

「やっぱり、アルマは自由に雷を呼べるんだね」

やっぱり、ということとは、彼は私が自由意志で稲妻を呼べることに気が付いていたらしい。まあ、おやぶんゴーストのときといい、タイミングが良すぎたもんな。

「うん。ダーマの神殿にいつてふなのりの職業につくと、できるようになるんだよ」

リユカの様子から見るに、頭の中にいくつもの疑問符が浮かんでいるようだったが、彼はその疑問の取捨選択をしたようで、「えー」と首をかしげながら口を開いた。

「いつも使わないのはどうして?」

リユカが質問している内容を、ベラも興味深そうに聞いている。人の話を聞かないかと思いきや、思い込みが作動してない場面ではきちんと聞くことができるようだ。

「こどもが強いとくぎを使えると、悪いひとにりようされたり、こわがられたりするんだって。だからね、使わなくていいならあんまり使っちゃいけませんって、おとうさんに言われてるの」

まあ、あの世界に戻れば私よりすごい人がたくさんいるから、子どもだからってあんまり目立たないんだけど。船乗り職をマスターしたことは、すごいことだととても褒められたけれど、私の周囲からしてみれば、「稲妻」なんて子どもにしてみればすごい、程度である。海賊船に乗っている私が単体で行動することなんてほぼないし。

「そうだったんだ。ねえ、アルマのお父さんってどんな人？ お母さんは？」

「えつとね、おとうさんは背が高く、強くって、とつてもやさしくて、かつこいいの。大きなふねの船長さんをしてるんだよ。おかあさんはやさしくて、おひめさまみたいにきれいな。アルマって名前は、おかあさんがつけてくれたのよ」

二人のことを思い出しながら、自然と頬が緩むのを感じる。シャークアイ船長の黒髪が太陽にきらめき、潮風に揺れている光景は、力強い絵画のようで自然と目を奪われた。アニエス様の白くて美しい手が私に触れ、そつと抱きかかえて頬を寄せられると、とても良い匂いがして、幸せな気持ちになった。

魔王の呪いで永い眠りにっていたシャークアイ様に生きてまた会うために、アニエス様は海底王に頼んで人魚になった。そして、悠久のときを待ち続けていた。時は経ち、魔王の呪いは勇者様のおかげで解け、シャークアイ様とアニエス様は再び同じ時代を生きることができている。

今は一緒に住むことはできないけれど、人魚になったアニエス様に会うために、シャークアイ様は小舟をアミットさんに譲ってもらっていた。マール・デ・ドラゴンは大きすぎるから、アニエス様の住む海底王の住処に行くために、小舟が必要なのだ。アニエス様は海底王の計らいで一年に一度だけ人間に戻ることができるので、そのときにはマール・デ・ドラゴンに乗りたいたいとおっしゃっていた。

再会の目途も経っていない「両親」について私が考えていると、リユカがにこにここと笑みを浮かべてこちらを見ていた。なんだかくすぐったいような気持ちになって、私はそれに照れ笑いを返す。

「アルマは、お父さんとお母さんのことが大好きなのね」

「うん！ つらいことがあっても、おとうさんたちのことを考えると、頑張りたいて思えるの！」

私の話を聞いてか、リュカの様子を見てなのか、あるいはそのどちらものか、ベラの微笑ましそうな言葉に大きく頷く。戦闘中にお喋りをする余裕はまだないが、魔物が現れても切り替えがすぐできるようになったので、歩いているだけのときは雑談をしながら散策ができるようになったのだ。

「あつ、ねえ。なんだか部屋があるよ。入ってみよう」

ぽつかり開けた空間に入ってみると、ドワーフのおじいさんとスライムがいた。タンスやベッド、机や椅子にカーペットまであり、彼らの居住空間であることが窺える。

「あの、こんにちは」

おずおずとリュカが挨拶をしても、おじいさんは気が付いていないのか、「まったく！ ザイルには呆れてしまうわい！」とぶつぶつ独り言を言っていた。

「あの、すみません。ザイルって？」

ベラがすかさず彼の独り言に割り込むと、ようやくこちらに気が付いたのか顔をあげた。

「わしの孫じやよ。どうにも、わしがポワンさまに追い出されたと勘違いをして仕返しをしたようでのう」

ふう、とおじいさんがため息をつく。それから、私たちの顔を順繰りに見ていった後、再び口を開いた。

「妖精の村から来たお方よ。おわびとっては何だが、カギの技法を授けよう。カギの技法はこの洞窟深くの宝箱の中に封印した。どうかザイルを正しき道にもどしてやってください」

深く頭を下げられ、この人が自分の孫がしでかしたことに對して責任を感じていることが十分伝わってきた。自分の足で連れ戻そうとしないのは、どうやら老いによってそれができないのだろう、と細い足を見て理解する。

まあ、世界中にこれだけ影響をおよぼしているんだから、這ってでも連れ戻してブン殴ってほしいところだが。それだけ祖父思いとい

うことなら、連れ戻す途中でおじいさんが倒れたことを誰かから聞けば、慌てて氷の館とやらから出てきて、誤解を解く機会くらいはつくれそうなものである。

とはいえ、私のおぼろげな記憶の中だと、ここのボスは雪の女王だった気がするので、背後にいる魔物にそのかさされて、ザイルが氷の館から出ず、おじいさんが冷たい雪の中亡くなってしまいう可能性もあるため、協力者に頼むのが一番安全で確実だということには同意するが。

「洞くつ深いか……アルマ、ベラ、疲れてない？ ゲレゲレは、ちよつと疲れた様子だけど」

主に気遣われてハツとした様子のゲレゲレは、突然表情を取り繕ってキリツとしていた。そのやけに人間くさい仕草に笑いながら、私も正直に話す。

「ちよつとつかれたけど、大丈夫だよ。そのかわり、カギの技法をてにいれたら、いっかい休みたいなあ」

「そうね。私も少し疲れたわ。もちろん、奥に進めないというほどではないけどね。洞くつを出たら一度休むことには賛成だわ。その、ザイルってやつが素直にフルートを返してくれるかどうかも分からないし」

「うん、そうしよつか。妖精の村には宿屋さんもあったもんね」

満場一致で、洞窟を出たら一度休むことが決定する。ありがたい。六歳だけど周りへの気遣いを忘れずリーダーシップを発揮するリユカは、将来すばらしい大人になるだろう。できれば奴隷なんかにならずに、パパスさんとの旅を続けられるようにしてあげたい。

洞窟のなかをうろうろ散策して、けっこうへろへろになったところに、ようやくカギの技法が封印されている宝箱を発見した。リユカがその書物を手に取ると、不思議な光が少年を包み、書物が崩れ去る。試しに、洞窟の中にあつた扉を私が開けようとして鍵が掛かっていることを確認してから、リユカに開けてもらおうと、見事に扉を開けることができた。なるほど、これは便利だ。

「悪いことに使っちゃだめだからね！」

ベラが笑いながら注意してくる。まあ、リユカなら大丈夫だろう。悪いことをするという発想がそもそもなさそうだ。

帰り道まで魔物の相手をするのはしんどい、ということできメラのつばさを放り投げ、妖精の村に戻る。そのまま宿屋へ直行してお金を払い、ベッドに倒れ込む。本当は体を洗いたかったが、一度休んてから、起きたときにすればいいだろう。戦闘続きだったことと、なんだかんだ洞窟散策では緊張感を保っていたのか、私はすぐに意識を手放した。

大人になったら

翌朝、不思議なことが起こった。というのも、妖精の国で宿を取ったはずの私たちは、家に戻っていたのだ。みんなしてベッドから飛び起きると、調べ物をしていたパパスさんに「どうした？」と聞かれた。落ち着いた様子の父へと、リユカが「妖精の国が大変だから、早く戻らないと！」と慌てて答える。しかし、彼はそんな息子を見て朗らかに笑っていた。

「夢でも見たのか？ まあ、とにかく、父さんは調べ物の続きをしているから、村の外には出ないようにな」

優しく告げる父親に、リユカは少しムツとした顔をしている。妖精の国での出来事は夢ではないことは私たち自身、よく知っていた。何せ、ゲレゲレの口元を見れば妖精の国で買った石のキバが装備されているし、半透明になったベラがにつこりと微笑んでいたからだ。

階段を下って地下室へ行くと、妖精の国へ続く黄金の階段があった。私たちは迷わずそこを駆け上がり、再び神秘の世界へと向かう。

「ねえ、氷の館に行く前に、装備を整えなくて平気？」

ベラが私たちの恰好をじろじろ見ながら尋ねる。

「洞くつでも、まあ苦戦ってほどではないけど、魔物の数が多くて大変だったじゃない。氷の館ってところにも、私が行ったことがないから……強い魔物もいるかもしれないでしょう。洞くつで戦いっぱなしだったからお金も少しは溜まってると思うし……」

一理ある、と思つて私たちは防具屋さんに向かうことにした。武器は事前によろず屋で見っていたし、特に欲しい物もなかったことはチェック済みだ。一方、防具は情報収集のときに買おうか迷つてやめたという経緯が実はあった。

ただし、この後にはラインハットという山場が控えている。装備品はここで揃えるよりも、ラインハットの方が良い物があるだろうし、どこまで買うかは迷うところだ。とはいえ、お金をケチつて危険に晒されるのでは本末転倒だから、余計に悩むのである。

「わたし、毛皮のフードを買ってもらってもいい？ さむかったし、頭を守るものがなかったものね」

「分かった。じゃあ、ゲレゲレにも何か買ってあげたいけど……」

迷った様子のリュカに、防具屋の店主がにこやかに提案をしてきた。なんでも、ゲレゲレには自前の毛皮があるんだから、リュカと私はお揃いにして、リュカの革の帽子をゲレゲレにあげたらどうか、という話だった。彼は笑顔でその提案に乗り、毛皮のフードを二つ購入することにした。ゲレゲレも、リュカのおさがりの革の帽子をとってもうれしそうに被っている。

「アルマ、他に何か買う？」

「うーん……わたしは、もういいかな。よろいとか盾とかって重そうだから……」

私が断ると、店主にあれこれ勧められていたリュカは「じゃあ、僕もやめとく」と言って、ゲレゲレ用に革の腰巻を買ってあげていた。

「いいの？」

「うん。あんまり急に物が増えると、お父さんがびっくりするかもしれないから」

確かに。村の外へ出ていないはずの息子が新しい鎧や盾を持っていたら、さすがのパスさんでも訝しむだろう。毛皮のフードとか、ゲレゲレの腰巻くらいは寒かったからもらったとかなんとか言って誤魔化せそうだけど。

そういうわけで買い物を済ませた私たちは、氷の館に向かうことにした。リュカはめきめきと強くなっていて、なんとベホイミの魔法が使えるようになった。

私など回復魔法に適性がないらしく、「覚えたいならダーマの神殿に行く？」と以前勇者様に誘ってもらったことがあるくらいだ。そのときは船乗りのままでいようか、いずれ海賊になるために盗賊になろうか迷っていたときだったので、断ってしまったが。結局、周りの「焦らなくていい」という言葉を聞いて船乗りのままでいることにしたという経緯があるのだけれど、こういうことになるって分かっていたら、シャークアイ様や勇者様に連れてもらいながら安全に修業したの

に。

たればの話をしてもし方がないので、思考を切り替える。眼前には美しい氷の館があった。氷でできたその建物は、美しいながらも素材のせいだけではない冷たさを感じさせる。緊張をはらんだ顔になったリュカが、鍵の掛かった扉を、そつと開けた。

「寒いね」

「うん。寒いね。毛皮のフードがあつてよかつた。リュカ、買って来てありがとう」

「気にしないで。僕だけのお金じゃないから」

屋外よりも寒い屋内に感想を漏らす。壁から床から全て氷でできていて、慎重に歩かなければ滑ってしまいそうだ。ポワン様のいる建物の階段も氷つぽかつたけれど、ここはそれとは違って「あ、滑りますんで転んでも知りませんよ」という、感じの悪さを覚えた。

案の定、ツルツル滑る床のせいで、私たちは壁や氷の岩などの障害物を使いながら、なんとか階段を上り、歩みを進めていかなければならなかった。もちろんその間魔物に襲われることもあるし、私は一人で「こんな面倒なことをさせているザイル許さない」という思いを募らせていた。

ところが、実際にザイルと会ってみると、リュカを「いい子」と称すなら、彼は「クソガキ」と言われる部類の、つまりは普通の子どもで、私は恨みつらみが一気に霧散してしまった。まあ、向こうから襲い掛かってきたので、死なない程度に容赦なく痛い目を見せてあげたけれど。

初っ端からさぎなみの歌で眠らせようかと思つたが、眠つてくれなかつた。耐性があるようなので、仕方なくひのきの棒でぶん殴るようになる。子どもに稲妻とか石つぶてとかかする気にはなれなかつたので、リュカたちの補助をしつつ隙あらば殴打を繰り返していたら、彼は数の暴力にあえなく膝をついた。うん、でもほら、君は一応、思い込みだけで世界中の人々に迷惑を掛けているからね。

ザイルに、おじいさんを追い出したのはポワン様ではないことを伝えると、「でも、雪の女王さまが……」と何かを言い掛ける。言い掛けたところで、私が出現させたわけでない、黒い稲光が彼の体を打った。「ククククク……。とんだ邪魔が入ったこと……」

倒れたザイルに見向きもせずに笑い声を上げるのは、見た目だけは美しい、透き通るような白い肌に白銀の髪の毛の女性だった。身にまとう白いドレスはこの寒さの中では薄着すぎるが、彼女がそれを気にした様子は一切ない。その人はこちらを見て、それからようやくザイルに目を向けたかと思うと、彼の小さな体を足で蹴り飛ばし、嘲笑を浮かべた。

「やはり子どもをたぶらかしてという私の考えは甘かったようですね。今度は私が相手です。さあ、いらつしやい！」

美しい姿は一瞬で醜悪な魔物へと形を変える。ザイルとの連戦もあり、私は少しでも戦闘を有利に進められるようにさざなみの歌を歌ったが、効果はなく、眠ってはくれなかった。雪の女王は「そんな子どもだましが私に効くと思わないことですね！」と、姿に合わず丁寧な口調で高笑いをしている。

ザイルに効かない時点で一か八かではあったが、本人がそう断言したということは、効きにくいのではなく無効であると考えて選択肢から外した方がよさそうだ。水面蹴りや網なわで行動不能にさせようかとも思うが、体が浮いていることもあって、蹴ったとしても転ばせることは難しいだろう。そうになると、搦め手でどうこうするよりも、正面からぶつかると結果的に早いかもしれない。

「ちよこまかと……！」

雪の女王の攻撃を避けていると、力を溜めるようなポーズをとった。まずい、と思った時には遅く、魔物の口から氷の息が吐きだされる。

「うっ……」

「アルマー！」

全員がそれなりに食らったはずだが、いろいろ思考を巡らせていたせいで防御が追い付かなかった私は、モロに食らってしまった。リユ

カがベホイミを掛けてくれ、私もベラに薬草を手渡す。自前の毛皮のおかげか、ゲレゲレは少しだけ余裕がありそうだった。

「よくもやったわね！ ルカナン！」

それまでギラや打撃による攻撃を行っていたベラがルカナンの呪文を放つと、雪の女王の表情が変わった。ハッとひらめく、つまり、あいつには防御力低下が効くのだ。

「スカラー！」

リュカが私にスカラを掛けてくれる。ゲレゲレは私に言われるまでもなく攻撃を続けているし、そうなれば話は早い。

「ベラ、ルカナンの効果が切れたらすぐに呪文を掛け直して。リュカは私だけじゃなくて、みんなにもスカラを掛けてくれるとうれしい」先ほど出した結論と同じ、正攻法。私は氷の館に稲妻を呼び寄せる。女王にどれほど体力があるかは分からないが、私は物理攻撃よりも、稲妻を使った方がはるかにダメージを与えられる。リュカは仲間の補助、余裕があれば攻撃、ゲレゲレと私は基本的に攻撃を続け、ベラが補助および回復。これで比較的命の危険なく戦えるはずだ。

「小癩な……！」

女王は自らにホイミの呪文を掛け、傷をふさいでいく。しかし、私は一人ではない。

前衛として攻撃をしてくるゲレゲレをかわそうとすれば、私の稲妻に打ち据えられ。私を狙えば隙を見つけたリュカに突然攻撃される。余裕をなくし、なりふり構わなくなった女王はしかし、呪文で傷を癒しきることもできずに、呻きながら胸を押さえた。

「ああ、身体が熱い……ぐはあっ！」

息絶えた魔物は、跡形もなく消え去った。その最期があまりにもあつけなく、私はそこにいたはずの存在が本当にいなくなったのか実感が持てず、しばし虚空を見つめた。

魔物には、死体が残らない者もいると、以前勇者様に聞いたことがある。

子どもをそそのかして悪事を働かせる「悪い」魔物の末路に、一抹の寂しさのようなものを覚えて、私はふるりと首を振った。寒い。感傷に浸っている場合じゃない。きつと寂しく思えるのは、この寒さのせいだ。

魔物が落としたキメラの翼を拾い上げてリュカに渡し、袋に入れてもらう。そのやりとりの間にベラがザイルにホイミを掛けてやると、倒れていた覆面の少年はぱつと起き上がり、混乱したような、憤ったような、複雑な目をしていた。

「だいいじょうぶ？」

雪の女王との戦闘中は演技をする余裕もなかったというか、指示しながらどうやって演技すればいいか分からなかったのも、今後は子どもらしくかつ的確に指示通り動いてもらえるような言い方などを研究したい。ともかく、私は突然目を覚ましたザイルに子どもらしく見えるように、顔をのぞきこみながら安否を尋ねた。覆面なので残念ながら顔色は分からない。

「あ、ああ。えーと、そのエルフ、回復してくれて、ありがとな。雪の女王さまって悪い怪物だったんだっ！ オレ、だまされてみたいだなあ……」

ベラに顔を向けて、気まずそうに頭を下げるザイルに、ベラが気安い調子で「これくらい、何でもないわ」と返事をしていた。少しだけそのまま俯いていたザイルは、何を思い出したのか、急にパツと顔を上げる。近くにいた私は、びっくりして肩が跳ねてしまった。

「うわーっ、まずい！ じいちゃんにしかられるぞ！ 帰らなくっちゃー！」

立ち上がった彼は、凍る床をもものともせず、階段の方へと走っていた。それから、途中でまた思い出したように私たちの方を振り返る。

「あつ、そうだ！ 春風のフルートなら、その宝箱に入ってるはずだぜ！ 忘れずに持って行けよ。じゃあなっ！」

戦闘明け、それも負けてから追い打ちのように黒い稲妻に撃ち抜かれたとは思えない元気さで去っていったはた迷惑な少年の背中を見

送ると、少しだけ場に沈黙が落ちた。

「……とりあえず、ザイルの言ったように春風のフルートを持って行きましょう。それにしても、ごめんなさいの一言もないのかしら」

沈黙を破ったのは、おしやべりのベラだ。とはいえ、普段の調子ではなく、疲れを感じさせる様子だった。

私たちは宝箱を開けて、春風のフルートと、ついでに隣にあった宝箱の中身であるブーメランを回収した。女王との戦いは打撃だけでなくホイミや氷の息、力溜めなどの使い分けをされて、今までの中で断トツで緊張感のある戦闘だったため、なんだかどつと疲れた。手加減していたとはいえ、ザイルとの連戦もあったことだし、早く体を休めたい。館から出たら、ぜひキメラの翼で妖精の村へ戻りたいところだ。

「あなたたちって、こんなに小さいのに、本当にすごいわね」

館の中を、残った魔物と戦ったり逃げたりしながら歩いていると、ふいにベラが呟いた。

「ベラだつてすごいよ。ベラの力がなかったら、僕たちだけじゃ勝てなかったかもしれないし」

「そんなことないわ！ あなたたちって、本当に不思議。気が付いてくれたなら誰でもいいって思ってたけど、本当にフルートを取り戻しちゃうんだもの」

感心しきりのベラに、リユカは謙遜しつつ笑みが漏れている。誇らしさとくすぐったさを感じているのが手に取るように分かって可愛い。

「アルマだつてすごかったよ。いつもは僕の後ろに隠れちゃうことも多かったのに、妖精の国ではずつと頑張ってたもんね。雪の女王と戦つてるときなんて、なんだか年下に思えなかったもの」

「えへへ、レヌール城で王様と王妃様を助けてあげられたから、わたしでもやればできるんだと思ったの。雪の女王とたたかつてるときは、おとうさんのまねをしたのよ。おとうさんはせんちようさんだから、人に指示をするのがとっても上手なんだよ」

にこにこ笑いながらそう言う。いや、シャークアイ船長はもつと的確ですばらしい指示を出しているけど。まねというのもおこがましいほどだけど。

「でも、まねをするだけでもすっごく疲れちゃった。ねえねえ、ここから出たら、キメラの翼を使わない？ わたし、もうへとへとだよお」
たまに使うわがまま幼女を全開にすると、ベラが「しようがないわね」という目で私を見てきた。

「リュカ、アルマもこう言ってることだし、使ってあげましようよ。正直、私も疲れちゃったし、何より早くポワンさまにフルートを届けて差し上げなくっちゃ！」

「そうだね。じゃあ、さっさとここから出ようか」

話がまとまり、襲い掛かってくる魔物を倒しつつ館の出口にたどり着くと、さっさとキメラの翼を放り投げた。キメラの翼は、勇者様たちが使ってくれるルーラの呪文とは移動の時の感覚がちよつと違う。上手く言い表すことができないが、同じ「目的地に一瞬で移動する」ということでも、方法が違えばやっぱりそれは同じではないということだろう。

さて、妖精の村へと戻ってきた私たちは、まずはポワン様にフルートを届けるのが先決だろうと、村の住人から労いの言葉を受けながら、玉座へ向かう。時折人間のことを嫌うエルフもいたけれど、些末なことだろう。ともかく、ポワン様は穏やかな笑顔で迎え入れてくれた。

「ポワンさま。僕たち、春風のフルートを取り戻してきました」

おずおずと、リュカが小さな手にフルートを乗せてポワン様に差し出す。それを見た妖精の女王は、本当にうれしそうに目を輝かせた。心の目とやらで私たちの戦いを見ていた、と道中教えてくれたエルフがいたから、多分そんなことは知っていたんだろうけど。実際に見るのではやはり感動が違うのだろうか。

「まあ！ それはまさしく春風のフルート！ さあ、リュカ、アルマ。あなた方のお顔をよく見せてくださいな」

私たちはポワン様にきちんと顔が見えるように並び直した。じつくりと、それこそ名前の拳がらなかったゲレゲレとも目を合わせながら、ポワン様は感慨深そうに深く頷いた。

「リュカ、アルマ、そしてゲレゲレにベラ。本当によくやってくれました。これでやつと、世界に春を告げることができますわ。なんてお礼を言えばいいのやら……」

ふと目を伏せたポワン様は、その白い頬に長い睫毛の影を落とし、それからすぐに視線を私たちの方へと戻し、にこりとまた微笑む。美しい顔に浮かべられたやわらかな笑みは、それこそ雪解けを告げる春のあたたかな日差しのようなだ。

「そうだわ、約束しましょう。あなた方が大人になり、もし何か困ったとき……もちろん、二人一緒でも、一緒でなくてもかまいません。再びこの国を訪ねなさい。きつと力になりましょう」

よく覚えておくように念押しをしたポワン様の言葉を他所に、私は一人、「大人になったら」という言葉に胸を痛める。そうだ、この後、どうにかしなくてはならないことがたくさん——いいや、突き詰めればたった一つの大きな問題として、存在する。

「さあ、そろそろお別れの時です」

私の思考を現実に取り戻すかのように、ポワン様のやわらかな、よく透る声が耳に入る。私たちと一緒に並んでいたベラが列を外れた。少し離れた位置から私たちを、寂しそうな、妙に大人びた笑みを浮かべて見つめている。

「あなたたちのこと、忘れないわ。あなたたちも、私のこと忘れないようにこれを持って行ってね」

ゆっくりと歩み寄ってきたベラの手握られていたのは、枯れかかった枝だ。杖ほどの長さはなく、けれど小枝と呼ぶにはしつかりした太さと長さがある。嫌な顔ひとつせず受け取ったリュカに、エルフの悪戯少女は、にっこりと快活な、少女らしい笑みになった。

「その枝は今寒くて枯れかかっているけど……世界に春が告げられればすぐに元気になると思うわ。それじゃあ、元気でね。リュカ、アルマ、ゲレゲレ」

「僕も、妖精の国に来られて、ベラやポワン様と会えてよかった。僕たちがここへ来たのは偶然かもしれないけど、僕たちを連れてきてくれてありがとう、ベラ」

一緒にいた時間は短いかもしれない。ビアンカもそうだけど、ベラとも、大袈裟な言い方をすればお互いの命を預けあつた中だ。過ぎした時間の密度がちがう。

「わたしも。大変だったけど、ベラといっしょにぼうけんできて、たのしかったわ。げんきでね」

リユカと私の言葉に、少しだけ笑みを崩して涙目になったベラは、慌てたように再び笑みを作り直した。のそりと彼女へ歩み寄ったゲレグレが、ベラの手に分の頭を押し付ける。まるで、撫でろと言うように。

目を見開いたベラはすぐに目を細め、きらめく黄金の毛並みを撫でた。それに満足したのか、ゲレグレは「ガウ」と勇ましいような甘いような声を出して、私たちのところへ戻ってきたのだった。

ベラとの別れの挨拶が終わるまで待つてくれたのだろう。終えて一拍、ポワン様がそつとフルートに唇を当てた。優美で、軽やかで、のびやかな曲が響く。しんしんと降り続いていた雪は桜の花へと姿を変え、まるで意思を持つかのように——「いや、事実意思を持つて、桜吹雪は妖精の世界と人間の世界をつなぐ「扉」となった。

桜の花びらに包まれた私たちは、いつの間にやら、家の地下室に立っていた。日のあたらないひんやりした空気は、しかし雪国だった妖精の国よりは温かい。明らかな空気の違いに寂しさを覚えている間に、眼前に残っていた妖精の国へと続く黄金の階段が、名残を惜しむように、けれど永遠には存在できない幻のように、姿を消してゆく。ひらり、屋内にも関わず、どこからか桜の花びらが一枚落ちてきて、石と土の床に触れた瞬間、やはり消えてしまった。

「アルマ。ポワンさまはああ言ってたけど、絶対、また二人で妖精の国へ行こうね。もちろん、ゲレグレも一緒だよ」

階段が消え、桜が消えた床を見つめる私に、リユカがそう言った。

約束は守られるべきだ。であるなら、私は軽々しくその言葉に頷くべきではない。べきではないけれど——そうだったらいいな、と思った。

「リユカ。わたし、いつかおとうさんとおかあさんのところに……おとうさんの船に帰るわ」

リユカの目を見つめる。彼の黒曜石の双眸は、いつも不思議な光が灯っていた。魔物と仲良くなれるのもなぜか納得できるような、全てを包むあたたかさと一緒に、上手く説明できないような、吸い込まれそうな深みがある。

「だけど……大人になって、いつかまた戻ってきたら、そのときも、いっしょにぼうけんしてくれる？　妖精の国に、いっしょに行つてくれる？」

それはあまりに都合の良い未来。私はあの世界に帰り、けれど気楽にこちらに戻ってくる手段——例えば、勇者様が世界を救うのに使った石板とか——を手に入れて、大好きな家族とも、友達とも好きなように会える、そんな未来。あまりに夢見がちで、馬鹿馬鹿しくて、だからこそ諦めきれない、すばらしい「いつか」。

リユカの表情が、少しだけ曇る。旅慣れた彼は、別れにも慣れているだろう。なればこそ、私の言葉を、六歳であっても軽くは考えない。「アルマは、お父さんとお母さんが大好きだもんね。離れるのは寂しいけど……戻ってきたら、絶対に一緒に冒険をしよう。それで、困ったことなんかなくなつたつて、ベラやポワン様にも会いに行こう。約束だよ」

私たちは小指をからめ、不確かな「いつか」の約束をした。

「さ、上に行こうよ。春になった村も見てみなくちゃ。お父さんに、妖精の国のことも話したいし！」

私の手を引いたリユカは、地下室の扉を開けた。逸るように階段を上った彼に続く、地下から出てきた私たちに気が付いたサンチョさんが、驚いた顔をした。それからすぐにこちらに歩み寄ってリユカの肩をつかみ、困ったような、焦ったような様子で口を開く。いつも穏やかな彼らしくない姿だ、と数日しか共にいないだけの私は、そんな

感想を抱いた。

「坊ちゃん、アルマちゃん。今までどこに!?!」

「えっと、僕たち地下室で……」

リユカが事の顛末を話そうとすると、サンチョさんは真剣な顔で首を横に振って、言葉を遮る。

「いえ、いいんです。お話はまた時間のあるときに聞きましょう。それより、旦那様にラインハット城から使いが来て、出掛けることになったんです! 坊ちゃんたちも連れて行くつもりで、ずいぶん捜したんですが……。見つからなくて、旦那様はたつた今お出掛けになりましたっ。すぐに追い掛ければまだ間に合うかもしれません。さあ、坊ちゃん、アルマちゃん!」

急かさされた私たちは、疲れも忘れて玄関へ向かった。すると、サンチョさんがリユカを見て、出て行くのを引き留める。「ポケットから何かが……」と言われて、ベラにもらった杖をサンチョに見せた。リユカは、その杖がもらったときとは打って変わって、美しい花を咲かせていたことに驚いていた。もちろん、私もこんなに一瞬であの枯れかけの杖がよみがえるとは思っていなかったなので、緊急事態であることを一瞬忘れ、見入ってしまったほどだ。

「おお! これは見事な桜の枝ですな! そういえば、すこし暖かくなってきたから花が咲いたんでしょうか……。それにしても、美しい! 坊ちゃんたちのお部屋にでも飾っておきましょうか?」

「えっと、そうだね。これ、お願い。友達からもらった大事な物なんだ」

リユカが桜の杖を手渡すと、サンチョさんは大きく頷いて、私たちの背を軽く押した。

「承知しました。では、坊ちゃんたちは急いで旦那様を!」

「うん! 行ってきます!」

「行ってきます!」

リユカに続いて挨拶をすれば、サンチョさんは手を振っていた。村の入口へと二人と一匹で駆け出す。それにしても、結局休めてもいないし、超重要イベントがすぐに訪れすぎてつらい。息を弾ませながら

橋を渡って、村の出入口まで向かう。冬から春へ移ったからか、妖精の国を歩いてきた服装では、多分村を歩くだけならばさほど気にならないだろうが、走れば汗をかいてしまう暖かさだ。

「お父さんっ！」

「おじさんっ！」

階段を駆け下りて、門番と話しているパパスさんに向かって二人して大きな声を出す。

「おお、リュカにアルマ。探していたんだぞ」

存外朗らかな口調でパパスさんがこちらを見た。これ……先にゲレグレにおいを辿って行ってもらえばそんなに急がなくてもパパスさんは待つてくれていたのでは、と息を整えながら考える。教会で祈る暇もありはしない。なんなら連戦からの休憩もなし。ひどい話だ。

「今度の行き先はラインハットのお城だ。前の船旅とちがって、そんなに長い旅にはならないだろう。この旅が終わったら、父さんは少し落ち着くつもりだ。アルマの言っていたコスタールやグランエスタードのことも、調べる余裕ができるだろう」

大きな手が、私の頭に乗る。そのまま、汗をかいて張り付いた私の前髪を硬い指で不器用に横へ流し、パパスさんはやわらかく微笑んだ。

「二人して、一生懸命追い掛けて来てくれたのだな」

それからリュカの頭にターバンの上から空いている方の手を置く。私たちは目を見合わせて、それからお互いに高い位置にあるパパスさんの顔を見た。父親らしく、この人について行けば絶対に大丈夫なんだという安心感を与えてくれる。

「アルマが来て遊び相手ができたとはいえ、リュカには淋しい思いをさせてしまっていたな。これからは父さんも一緒に、みんなで遊ぼう」

リュカの顔をそっと見れば、分かりやすく輝いていた。黒い目はきらきらとパパスさんを見つめ、口は開きっぱなし、健康的に日焼けした肌は、走ったからただけではなく紅潮している。そんな息子の様子

を、パパスさんもまた愛おしそうに見ている。

「さて、行くとするか」

私たちの頭から手を外し、くるりと門の外へと体を向けたパパスさんの背中を見て、そつと祈る。

——シヤークアイ様、アニス様。勇者様。マール・デ・ドラゴンのみんな。私に力を貸してください。

「いってらっしゃい、パパスさん！」

門番の青年が元気な声で送り出してくれて、私たちは村の外を歩き始めた。

王家はズツ友

戦闘はパパスさん、リュカ、ゲレゲレの男三人衆がパパツと済ませてくれるので、私は道中歩きながらこれからのことを考えるのに没頭することができた。

まず、どこからなら「変えられるか」を整理する。時系列を後ろからなぞっていくと、第一に、ゲマと遭遇してしまつたら、もう私の手ではどうにもならない。何も変わらず、私、あるいはリュカが人質とされ、パパスさんは成す術なく鬨り殺されてしまうだろう。考えたくもなかった。つまり、最悪でも攫われたヘンリーを洞窟まで運ばせてはならないということ。洞窟に行けば、そこにはヘンリーを受け渡すために魔物たちが待ち構えている。

ならば、最低ラインは洞窟に着く前にヘンリーを取り返すことだろう。もつと前に食い止められればより良い。例えば、城にいる時点で人攫いを返り討ちにする。人攫いがどの程度の強さかは未知数だが、現場にパパスさんさえいれば大きな戦力になるし、私は稲妻で、リュカもブーメランで全体攻撃ができるから、あまりに大人数でなければ対処できる、と思う。

一番強烈なイベントがその後に控えているせいで、主人公と人攫いが戦闘にもならずヘンリーが攫われてしまった原因みたいなものは記憶の彼方なので、万が一人攫いた者が予想外の強さだった場合は非常に困ったことになるが。一番安全で確実なのは、子どもだけでいいこと。つまり、人攫いというイベント自体を、発生する前に潰すことだ。

確か、ヘンリー誘拐イベントは、ヘンリーのお守りをする事になったパパスさんをヘンリーが遠ざけ、子どもだけで人気のないところにしたのを人攫いたちに狙われたはずだ。つまり、人目のある場所、あるいは戦える大人がいるという状況それ自体が、ヘンリーを守る大きな要因になるのではないか。もちろん、人が多すぎればどさくさに紛れて誘拐される可能性もあるけれども、そこは一旦置いてお

く。

ヘンリーを見捨てるという選択肢はない。私の大切なひとたちは、そんなことしないからだ。パパスさんや、リユカだってきつとそれは望まないだろう。

「アルマ、やつぱり疲れてる？ 顔色が良くないよ」

リユカに声を掛けられ、私はへらりと笑った。

「つかれてるよお。リユカはつかれてないの？ 妖精の国から、ずっとやすんでないじゃない」

「妖精の国？」

私たちの会話に、パパスさんが興味深げに入ってきた。私は「わたしたち、みんなで妖精の国にいったのよ！」とあえて自慢げに胸を張った。

「それでね、妖精の国の女王様にたのまれて、雪の女王をやっつけて、春風のフルートをとりもどしてあげたの。だから、ほら、今までずっとさむかったのに、春になったでしょう？」

パパスさんは「わっはっは！ それは確かに、大変だったな！」と全く信じていなさそうな様子で笑う。

「お父さん、全然信じてないね」

こっそり、リユカが耳打ちしてくる。それからこの素直な少年には珍しい、悪戯っぽい表情になって「僕たちだけの秘密だね」と言った。「そうね。わたしたちだけの秘密。ゲレゲレも、もし他にお友達ができて、言ったらだめだよ」

しゅいっと口元に指を当ててゲレゲレに話し掛けると、「にゃおん！」と魔物らしからぬ愛らしい返事をした。

「ほら、もう関所に着くぞ。あまり時間はないが、疲れているのなら少し休憩するでしょう」

パパスさんの視線の先を追うと、川に二分された手前にある建物が見えた。川向こうにも似たような建物があり、橋は掛かってないので地下でつながっているのだろう。パパスさんは迷いなく衛兵に近づき、堂々とした様子で声を掛けた。

「私はサンタローズに住むパパスという者だ。ラインハット国王に呼

ばれ、お城にうかがう途中である。どうか通されたい！」

「おお、あなたがパパス殿ですか!? 連絡は受けています。どうぞお通りください！」

さすが、王直々に手紙が来るだけある。兵士の対応も丁寧なものだった。私たちはそのまま歩き、予想通り、少し空気のひんやりした地下道を通っていく。坂を下つて上ると、地上に出た。

「リュカ、アルマ。ここから先はラインハットの国だ。この上からの川の眺めはなかなかのものらしいぞ。のんびりはできないが、休憩がてら、見に行くとしよう」

パパスさんの後をついて行くと、透き通った川が日の光を受けてきらきらと輝いていた。確かにきれいだ。私は川よりも海の方が好きだけど。

「どれ。リュカ、アルマ、こつちに来なさい」

私たちを自分の両サイドに呼んだ。パパスさんは、片腕だけで私とリュカを持ち上げ、それぞれを肩に乗せた。肩車である。私もリュカも落ちないようにきやあきやあ言いながらパパスさんの頭にしがみつく。もちろん、パパスさんは二人担いでいるというのにびくともしない。自分の中で安定できるポジションというか姿勢をなんとなく発見した後は、高くなつた視界に感動する。海賊たちによく肩車はしてもらうけれど、友達といっぺんにしてもらうのはさすがに初めてだ。そもそも同年代の友達がいなかったし。

おすすめされた景色を眺めつつも周囲を見回すと、ふいにもともと川を眺めていたらしい老人がこちらを微笑ましそうに見ていたのに気が付く。私がにこつと愛想を振り撒けば、老人はひらりと手を振つて、それから視線を外し、悲しげに川へと視線を戻した。

「あの……おじいさん、どうしたの?」

「いいや、なんでもないのじや」

気になって尋ねれば、老人はふるふると首を振る。

「家族の仲が良いことはすばらしい。そういう当たり前で尊いものを見ると、時に当たり前でなくなってしまうものも思つて、心が痛むものじや。……お嬢ちゃんには、まだ難しいかもしれんがのう」

「あなたは、ここで何を？　あまり風に当たると、体に毒ですぞ」

私への言葉に思うところがあつたのだろう。五歳の子どもにするには適当でないことを言っている老人に、パパスさんが声を掛ける。「わしは川の流れを見ながら、この国のゆく末を案じているだけじゃて……」

老人の目には諦観が浮かんでいた。私にはその目に覚えがある。それは、自分たちが信じていた神様が偽物で、魔王が化けていたと知ったときの多くの人の目と同じだった。閉ざされた世界、凶悪な魔物たちに怯えながら、「もう終わる世界だから仕方ない」、「どうせこのまま助かるはずもない」と、口ほどにものを言っていた、たくさんの人々のあの目。

「おじいさん。ラインハットが好きなのね」

だから、声を掛けた。私の世界は勇者様が救ってくれた。諦めてはいけないと、言葉だけでなく、実際に世界を救ってみせて、教えてくれた。

「おじいさんに、私が教えてもらったこと、教えてあげるね」

少し、目を瞑る。勇者様の顔が浮かぶ。以前、魔王へと挑む前の勇者様に、聞いてみたことがある。「怖くないのか」と。「どうして戦うのか」と。

『やりたいことをやり遂げるのは、いつだって自分しかいない』んだって。怖くたって、恐ろしくたって、痛くたって、どんなに嫌なことだって、その先にやりたいことがあるなら、それを乗り越えるのも、やり遂げられるのも、自分だけなんだって」

彼らは笑っていた。世界を絶望に陥れた魔王との決戦を前にして。自分がやりたくて始めたことだから、最後まで責任を持つのだと。絶望を乗り越えたその先を見たいから、魔王を倒すのだと。

そして世界を救って、「ほら、やれないことなんて何もなかったでしょ?」と、いつもの朗らかな顔で笑っていた。だから、私もやらなくて。せっかく勇者様に教えてもらったのだ。そして、やり遂げたことを伝えて、勇者様たちにいっぱい褒めてもらおう。

老人は目を見開いて、まじまじと私を見ていた。

「……そうじゃな。お嬢さん、君には若くて未来がある。この国は今、少しづつ少しづつ、良くない雰囲気広がっている。気を付けてゆるのじゃよ」

「うん。ありがとう、おじいさん」

返事をする、パパスさんが私とリュカを下ろして、「そろそろ行くぞ」と声を掛けてきた。私は頷き、パパスさんに続いて関所を後にする。

「アルマは先ほどの言葉を、誰に教わったのだ？」

歩きながらパパスさんに聞かれたので、私は「アルス様っていう、わたしの勇者様だよ」と答えた。

「……勇者様？ それはあの、伝説の天空の勇者様か？」

パパスさんの目の色が変わり、どこか厳しくも見えるものとなった。しかし、残念ながら勇者様はパパスさんの探している人ではない。私は首を横に振った。

「ううん、ちがうわ。勇者様は漁師さんをしているの。すごく強くて、優しいのよ」

そう言えば、パパスさんは目元をやわらげて、ぽん、と私の頭に手を置いた。

「そうか。立派な人なのだな」

勇者様のことを思い出すと、自然と笑顔になる。いつだって彼の、彼らの存在には勇気をもらえる。

さて、勇者様のように世界を救う力はないかもしれないけど、私だって身近な人たちを助きたい。知っている未来を変えたい。もう関所を越えてしまった。ラインハットまでもう時間がない。

整理すべき点はいくつかある。根本にあるのは王妃のヘンリーに対する負の感情。自分の息子を王にしてやりたいという強い気持ち。それらのせいで人攫いとながり、人攫いは王族の子を狙う魔物たちへとつながってしまった。

対して、ヘンリー本人にも問題はあったような気がする。想像しやすいのは、実の母親がいないこと、父親の多忙による、彼が求める愛

情の不足。たとえば実際はラインハット王がどれほどヘンリーのことを愛しているのだとしても、こればかりは本人に伝わらなければ満たされない。だから悪戯を繰り返す。

さらに、ラインハット王の人柄は全然知らないが、確か「ヘンリーを王にする」と決めていたからこそ、王妃が強行手段に出たような、そんな記憶がぼんやりとある。

それゆえの、ヘンリーの大人への不信任感。悪戯小僧というか意地悪すぎて周りからの悪評もあった気がする。こちら辺はイメージだが、それで主人公との奴隷生活を乗り切つて改心するのではなかったか。

王妃の問題を解決するなら、ラインハット王が時間を掛けてでも王妃を説得するか、いつそのことヘンリーではなく弟を世継ぎに決めればよい。要は王妃が人攫いとながる理由をなくせばいいのだ。まあもちろん、現時点で人攫いとながっているだろうから時既に遅しって感じかもしれないけど。

次に、パパスさんがヘンリーに信用してもらい、常に護衛できる関係を築くこと。これはヘンリーの不信任感を取り除けは良いので、ありだと思う。私やリュカを仲介として、パパスさんが同じ場にいることを許容してもらう。そうすれば、何かあったときの対処が迅速になるだろうし、誘拐も防げるだろう。

よし、とりあえずこのプランでいく。名付けて「ヘンリー君ズツ友大作戦！」だ。うん、我ながら頭悪そう。

*

ラインハットの城下町に着くと、リュカはきよろきよろと周囲を見回していた。今は観光する時間も惜しいようなので、残念ながらパパスさんは歩みを止めてはくれないが、「リュカ、大きな町が珍しいだろう」と息子に声を掛けていた。

「うん、びつくりした。アルマは、こんなに大きな町来たことある?」「うん。コスタールもグランエスタードも、とつても大きな町だから」「そうなんだあ……ねえ、お父さんの用事が終わったら、町を見て回っ

「てもいい?」

「ああ、もちろんだとも」

約束を取り付けた父子の足取りは軽い。主人がうれしそうで、つられて機嫌のよいゲレゲレも。お城行きたくないな、なんなら逃げたいな、くらいに思っている私の足取りはとても重い。疲れているせいでできるから、むしろ休みなしで妖精の国から直行できてよかったのかもしれないとか考えるほどだ。

さて、思っただけでも足は進んでいるので、ラインハットのお城に到着。やけに険のこもった口調と表情の衛兵に。パスさんが名乗ると、手のひらを返したように行儀よくなった。衛兵に連れられながら城内を歩くだけで、城の雰囲気が良いのは十分に伝わってくる。ピリピリしているし、兵士だけでなく使用人と思しき人や、その他城にいる人々の表情は、揃いも揃って浮かない顔ばかりだ。

いくつも階段を上った先の玉座に案内されると、案内していた衛兵が膝を付き首を垂れる。

「王様! パスどのお連れしました!」

子どもだからという理由で、私は礼儀を丸無視してラインハット王の顔をまじまじと見た。恰幅のよい男性だ。パスさんより年は上だろう。中年と初老の間に見える。

「ふむ。ご苦労であった。その方は下がってよいぞ」

鷹揚に頷き、衛兵を下がらせる声の張り方も、口調も、表情も、王としての威厳は感じさせる人だ。ただ、近くで見れば顔色が悪いことは否応なしに分かってしまう。

「さて、パスとやら。そなたの勇猛さはこのわしも聞き及んでいるぞ!」

衛兵が下がりがきるのを待つてパスさんへと声を掛けるラインハット王。そういう設定らしい、と納得した。そうだな、王様が他所の国の王様に自分の国のこと大々的に相談したり頼んだりするのは多分やっちゃだめだよな。まさか本当に正体を知らないとか、そういうことはあるまい。

「その腕をみこんで、ちと頼みがあるのだが……。コホン……。パパス、もう少しそばに！ 皆の者は下がってよいぞー！」

わざとらしい咳払いをして、王の側に控えていた護衛までも下がらせる。残された私たちは立ち尽くすばかりだ。リュカとアイコンタクトで「私たちはどうすればいいんだろう？」「ここにいてもいいのかな？」みたいな会話を交わしていると、パパスさんが口を開いた。

「リュカ、アルマ。そんなところに立っていても退屈だろう。よい機会だからお城の中を見せてもらいなさい。一通り見るうちには父さんたちの話も終わるはずだ」

あ、やっぱり友達なんだ。普通、王様の許可もなしに、勝手に「城の中を見せてもらえ」だなんて言わないはず。

「やったあ！ ねえねえリュカ、探検しようよ！ パパスおじさん、王様、行ってきますー！」

「あつ、えつと、行ってきますー！」

超無礼な感じで玉座の間を後にする。幼児の筋力も体力もない体に鞭を打って、子どもだからと口を滑らせてくれる大人や、親近感をゆえ何でも答えてくれる子どもからの情報収集、歩き回りながら城の作りを徹底的に頭へ叩き込んでいった。

「王子様はふたりいるのね。ヘンリー様とデール様。どこにいるの？」

「おふたりとも、自分の部屋じゃないかな。デール様は王妃さまと一緒に、二階の西の方にある部屋にいらっしやると思うよ。ヘンリー様の部屋は二階の東の方。年が近いからって、失礼のないようにな」

ちよろちよろ歩き回りながらもなんとなく核心を避け、先に二人の情報を得ておく。城の兵士たちはラインハット王のことは敬愛しているようだが、同時に王妃が良くない連中とつるんでいることに不信と不安を感じている。また、王の体調があまり良くないのでは、と心配する者もいた。だからこそ国王がまだ存命だというのに、世継ぎの噂が蔓延しているのだろう。あとは王子たちの噂。ヘンリーはさぶる悪い。デールは大人しく、母親の言いなりだそうだ。

「リュカ、王子様に会ってみようよー！」

そう声を掛けると、リュカが「……アルマも、王子さまと結婚したいの？」と捨てられた子犬のような目で見つめてきた。

「いや、何の話？」

ゆえに、思わず素で返してしまう。脈絡なさすぎないか。

「だって、女の子は王子様と結婚したいんでしょ？ さつき、メイドさんが言ってたじゃない」

……そう言えば、私が情報収集のためにヘンリーやデールのことを聞いていたら「女の子はみんな王子さまに憧れるわよねえ。私も小さい頃は王子さまと結婚するのを夢見てたわ」と楽しみに話していたメイドがいたな。ただし、その後には「ま、うちの王子さまたちは……あー、いえ、うふふ……」と不敬罪でとっ捕まりそうなことを口走り掛けて笑って誤魔化していたが。

「わたし、よく知らない王子様とけっこうこんなってしたくない。けっこうするなら、おとうさんみたいに強くて優しい、すてきなひとがいの」

シャークアイ様ほど理想を引き上げると一生結婚できない気もするが、そこは別によからう。シャークアイ様はアニス様のものなので結婚したいとは思わないが（しなくても既に娘というポジションで家族の一員に加えていただいているのでそれだけで幸せだし）、シャークアイ様のような人がいたらとても心惹かれることは間違いない。勇者様のような人でももちろん心惹かれる。そうなると魔王よりも神様よりも強い男ということで、よりハードルが上がってしまうが。

私の発言を聞いて、なぜか何度も頷いたりリュカは、手をつないで、「ここからだったらデールさまの部屋の方が近いね!」と歩き始めた。先頭を切って、王妃と王子の部屋のドアをノックすると、衛兵から声を掛けられる。王様から（直接ではないが）城内を探検していい許可をもらったと伝えると、「王妃様の部屋だから失礼のないように」と注意されたが、中には入れてもらうことができた。

部屋の中は、甘ったるい香が炊いてあり、疲労困憊の身では頭痛と眩暈がした。私も社畜時代に心ばかりの癒しを求めてルームフレグ

ランスを使ったことがあるが、そういうのはほのかに香るから癒されるのだ。ちよつとこのにおいはキツイ。お腹いっぱい状態だったら、オエツとなりそう。気になって、ちらつとゲレゲレの方を見たら、目を回して入口に這いつくばっていた。可哀想に。

「なんじゃ、そなたらは？　我が子デールにあいさつに来たのですか？」

こちらからは一言も何も言っていないのに、私たちの姿を見つけてペラペラと上機嫌に話し出す王妃。なるほど、美しい金色の髪は丁寧に結われており、髪飾りもドレスも、その他首飾りなども高級な品で着飾っている華やかな人だという印象を受ける。その華美な格好に負けないくらい、顔立ちも整っていた。ただし、化粧は濃い。

加えて、言動だけでなく、何気ない表情や雰囲気から気の強さや他者を見下す傲慢さが見えてしまうのが勿体ないところだ。王妃とは国の象徴であり、重要な政治のカードでもあるはず。で、あるならばやはり、人にマイナスのイメージを与えない方がいいだろう。狙ってやっているとか、それを補って余りある才能があるのなら別だが。

「ボク、王様になんかなりたくないよお……」

こつそりデールに近づくと、当の本人はそんなことを言っているし。息子のことを思っているつもりで、本人の気持ちが見えていないようだ。

「それ、お母さんにちゃんとお話しした方がいいよ」

小さな王子様の呟きにこつそり呟き返す。少年は俯いていたが、上機嫌にデールのすばらしさやヘンリーがいかに王としてふさわしくないかを、聞いてもないのに語って聞かせてくる王妃がそれに気付く様子はなかった。

「あの、王妃様。たくさんお話を聞かせてくれて、ありがとうございます。もつと聞きたいけど、おとうさんたちのお話、そろそろ終わっているかもしれないから、わたしたち、もうもどらなくちゃ」

「あら……それは残念。この城にいる間は、いつでも遊びにきて良いのですよ。おほほほほ」

勝手に気に入ってくれたらしい王妃に頭を下げ、部屋から出る。う

ん、新鮮な空気とはすばらしい。あの部屋には長くいない方がいいな。思考が鈍るというか、脳が痺れるような不快な感じがある。ていうかにおいのせいで普通に気持ち悪くなる。

「ゲレゲレ、大丈夫？ 次は、ヘンリー様のところに行こう？」

なんとかふらふらついてきたゲレゲレに尋ねると「ふにゃあ」と頼りない返事をされた。気持ちは分かる。私たちの何倍かまでは分からないが、嗅覚は相当良いだろうから、あのおいはかなりしんどかっただろう。

「え、お父さんたちのところに戻るんじゃないの？」

「だって、デール様しかまだ見てないもの。あの部屋、すごいにおいだったし、ゲレゲレがかわいそうだったから、わたし早く出たくて……。リュカは大丈夫だった？」

「ちよつとくらぐらしたけど、もう平気だよ。ヘンリーさまのところへ行けば、鍵が掛かってたところ以外は大体お城の中全部見れたかな？」

「うん。みんなが言ってるみたいなの、いやな人じゃないといいね」

そう言つて、玉座の間へつながる階段がある広間を、まっすぐ東に抜ける。王妃の部屋と違って、見張りもない。王子の部屋なのに。

リュカは私と手をつないだまま、空いている手で扉をノックした。「誰だ」と不機嫌そうな声が返ってくる。

「僕たち、お父さんが王さまに呼ばれてお話ししてるんだけど、その間はお城を見て回って良いって言われて。えーと、ヘンリー様ですか？」

ばたん、と乱暴にドアが開かれる。緑色のおかっぱ頭の男の子は、リュカよりも少し背が高い。私たちをじろじろ見定めるように睨んで、それから「子分になりに来たのか？」と聞いてくる。

「ごぶんって何？」

私は純粹無垢な質問をぶつけた。すると、ヘンリーは馬鹿にしたように鼻で嗤う。

「ふふん、そんなことも知らないのか。子分っていうのはな、えーと……親分の言うことを何でも聞くんだ」

「じゃあ、ヘンリー様はおやぶんなの?」

「ああ、オレはこの国の王子だから、王さまの次にえらいんだ。すごいだろう?」

質問を重ねると、ヘンリーは胸を張った。ザイルとは別ベクトルのクソガキであるが、まあ、まだ覆面パンツという子どもながらに変態性しか感じられない格好をしていたザイルと比べると、ヘンリーの方が可愛げがあるかもしれない。愛情不足なのは情報収集により裏付けが取れて知っているわけだし。

ザイルの方はというと、氷の館ではすぐに戦いになってしまったし、リュカがいる手前「なんでそんな恰好してるの? 変態なの?」とかそういう質問はしなかったが、やはりあれは子どもだとしてもけっこう嫌だ。誰も何も思わなかったのかな、あの恰好に。荒くれ者とかってみんな覆面してるけど、ズボンも穿いてる人が多いと思ってたんだけど、誰リスペクトであの恰好なんだろう。まさか自発的にやりだしたんだとしたら、……なんというか、心配になるな。

「うん、とつてもすごいね。でも、王子様とおやぶんって何がちがうの? どっちもとつてもえらくて、みんなが言うことを聞いてくれるんでしよう?」

ともあれ、ザイルにあの恰好をしている意図を聞く機会は失われてしまった。私は目の前のクソガキ二号、ヘンリーと向き合うこととしよう。

「王子はえらいけど、王子だからって、みんな何でも言うことを聞くわけじゃないんだぜ」

ヘンリーは寂しげな表情を一瞬だけ浮かべたが、すぐににやりと笑って、バシンと私の肩をたたいた。「いたっ」と、そう大した威力でもなかったのに、口をついて言葉が出る。疲れていたことといきなりだったことで、子どもにやられただけでもよろけてしまった。手を握っていたリュカが支えてくれなかったら、そのまま尻もちをついて転んでいたかもしれない。

「お前みたいなチビで弱そうなやつは、頼まれたって子分にしてやらないけどな!」

「わははー」と笑うヘンリーを、らしくなくリュカが睨む。

「あやまれ」

大人しそうな少年に睨まれたことに、一瞬ひるんだ様子を見せたヘンリーだったが、すぐに不快であることを顔全体で表して、さっきまでよりもさらにふんぞり返った。

「はあ？　なんだお前。オレはこの国の王子だぞ。オレがこんなチビにあやまるわけないだろう？」

「アルマは何もしてないじゃないか。どうしてそんな乱暴するんだ！　転ぶところだったじゃないか！」

「リュカ、わたし、大丈夫よ。リュカがささえてくれたから。ね？」

珍しい。そう思つて隣にいる少年を宥めようとするが「そういう問題じゃないんだ」と怒りを収めなのまま、リュカはヘンリーを睨み続けていた。

「な、なんだよ……生意気なやつだな。お前より、オレの方がえらいんだぞ」

「君なんか、全然えらくない。君は王さまの息子ってだけで、全然すごいじゃないか。年下の女の子を突然たたくなんて、えらい人のすることじゃない。アルマにあやまれ！」

さすがリュカ。正義感が強く、優しい男の子である。でも、私としては彼と信頼関係を築いて、パパスさんが護衛しやすいようにしようと思つていたのに、これでは「お前の父さんとなんか、一緒にいられるか！」と言つて完全シャットアウトにされる可能性がある。それだけは本当に避けたい。「ズツ友大作戦」が早くも瓦解しかけている。

私はたった四人で死地に向かう勇者様を見送つたときのことを思い出していた。もちろん、勇者様が世界を救つて、またお顔を見せてくれることを信じていた。同時に、たった四人に世界の命運を託さねばならない理不尽に憤りと不安を抱いていた。私が力になれたらよかつたのに。また生きて、会えるのだろうか。

そんなことを思い出していれば、自然と涙が出てくる。

「えぐつ……リユカ、おこっちゃやだよ……」

ぎよつとした顔をしている少年二人が一斉にこちらを見た。とはいえ、勇者様パワーも長続きはしない。勇者様は立派に世界を救って、今は漁師としてのびのび暮らしているし。私はそれ以上顔を見られる前に、ゲレゲレの毛皮に顔をうずめた。

「ふ、ふん……泣き虫め……」

「王子さまとおともだちになれたらいいなって思ったただけなのに……けんかしちゃだよお……」

「アルマ。でもね、やっぱりヘンリーのやったことは良くないし、あやまらなくちゃいけないことだから……」

オロオロを二者で異なる表現をしていた少年たちだが、リユカの言葉に反応してヘンリーがリユカに突つかかる。頭上で大きな声が飛び交ってうるさい。

「ヘンリー!? お前、オレは王子だぞ! 呼び捨てなんて無礼なんだからな!」

「君に『様』なんて付けるもんか! ヘンリーで十分だ!」

「ふたりとも、おこっちゃやだよ」

そしてたまに茶々を入れる。ゲレゲレの毛皮は気持ちいい。ちよつと獣臭いけど、太陽の下で活動しているからか、おひさまのにおいもする。私は寒い演技を続けながら、オチの付け方を考えていた。どうしよう、これ。

「アルマ。僕はアルマに怒ってるわけじゃないんだよ。ヘンリーに怒ってるんだ。アルマは怖がらなくていいんだよ」

「ツケ、チビのきげん取りかよ。かっこわるい」

リユカとヘンリーの表情は見えない。私が未だにゲレゲレをもふもふしながら顔をうずめているからだ。ただ、私の背中をさすっているのがリユカであろうことは想像するに容易だ。ヘンリーだったら言動の不一致が激しすぎて脳が処理できない。

「アルマ、大丈夫? もう行こうよ。僕たち、お父さんのところに戻らなくちゃ」

「ぐすん……もう大丈夫よ」

涙をぬぐうふりをして顔についたゲレゲレの毛をさつと払い、私はじつとヘンリーを見た。非常に気まずそうに、顔をそらしている。当然、目は合わない。リユカは私がヘンリーを睨んでいるのを見たからなのか、私の背中に触れていた手をそつと外した。

「でもわたし、リユカとヘンリー様が仲良くしてくれなくちやいや」
むうっ、と頬を膨らませて、怒っていますアピールをする。もちろん怒っていない。けれどこのままでは困るのだ。二人には現時点でズツ友になつてもらわないと。

「パパスおじさんのところには、わたしが行ってくる。リユカはヘンリー様と仲直りするまで、ここにいてね。仲直りできなかつたら、わたしもう、リユカと口きかないんだから。ヘンリー様だって、リユカと仲直りしないなら、わたしのことぶつたの、ぜつたいにゆるさないから！」

「えっ、アルマ、ちよつと待っ……」

「わたし、行ってくるから！　ちゃんと仲直りしてくれなくちやいやよ！」

っん、とそつぽを向いて「行こ、ゲレゲレ！」とゲレゲレを伴ってその場を小走りで離れる。ゲレゲレは空気を読んでついてきてくれた。

うん。自分で言うっておいてなんだけど、直す仲も元々構築してない両者にさせる仲直りとは、これいかに。

悪童の受難

とりあえずはこれで、私がパパスさん呼びに行ってくる少しの間くらいはヘンリーが一人になることはなくなった。戻ってみて、「仲直り」とやらをしていなかったら監視という名目でヘンリーを言いくるめ、パパスさんと一緒にいさせる。していたらしていたで、仲直りの証に家族仲良く、ということではパパスさんが遊びの場に同席することを許可させる。今のところはこれでいこう。

「パパスおじさあん!」

私は見知った人影を見つけて、小走りのまま声を掛けた。

「おお、アルマ。リュカはどうした? 話が終わってしばらく待っていたが、二人が来ないので探しに行こうと思っていたところなのだ」
「えっとね、リュカとヘンリー様がけんかしちゃったの。だからわたし、仲直りするまでゆるしてあげないって言って、おじさんをむかえにきたのよ。ね、一緒にヘンリー様のおへやに行きましよう? 二人とも、仲直りしてるかしら」

さつさとヘンリーの部屋まで行こうとパパスさんの手を引くと、案の定戸惑った顔をしていた。

「リュカが喧嘩? 珍しいこともあるものだ……一体何が?」

「えっとね、ヘンリー様に『ごぶんになりに来たのか』って聞かれたんだけど、『お前みたいなチビで弱そうなやつはごぶんにしてやらない』って、わたし、肩をたたかれたの。わたしが転びそうになって、リュカが怒っちゃって、『あやまれ』『あやまらない』って、ヘンリー様と喧嘩してるの。わたし、けがなんてしてないから、大丈夫って言うてるのに」

急かすように手を引けば、パパスさんは私を抱き上げて、長い脚ですたすとヘンリーの部屋まで歩いて行ってくれた。楽でありがたい。ゲレゲレはちよこまかとその後をついてきている。

「だからわたし、リュカにはヘンリー様と仲直りするまで口をきかないって言っちゃったし、ヘンリー様にはリュカと仲直りしないなら、

ぶつたことゆるさないって言っちゃったの……」

しゅん、としたような顔をする。こんな見え見えの演技で粗を見抜かれてもしょうもないので、俯いてパパスさんの胸に顔を寄せると、大きな手で頭を撫でられた。

「アルマは二人が仲良くしなかったことに怒ったのだな」

「うん。わたし、二人に仲良くしてほしいかったの。王子様とおともだちになって、みんなで遊べたらいいなって思ってたの」

「ふむ。ほら、着いたぞ。……ヘンリー殿下、リユカ！ 入るぞ！」

扉の前で口論していたはずの二人は、仲直りどころか、閉じた扉の先でキャットファイトをしていた。戦闘慣れしているリユカが優勢だが、さすがに手加減はしているのか、王子に目立った傷はない。今はヘンリーに馬乗りになったリユカが、ラインハット第一王子のほっぺをつねっている。

「ひよまへ！ ひよんなひよとひてううはれふとおおつへるのは!？」

「うるさいうるさい！ 君のせいでアルマに嫌われちゃったじゃないか！」

こちらに気が付いた様子はない。パパスさんは私をそつと下ろして、リユカに拳骨を落とした。

「痛っ!?! ……お、お父さん!?! アルマも!?!」

さあつと顔を青ざめさせるリユカ。いや、私しつかりはつきりパパスさんと呼んでくるって言ったじゃん。何聞いてたの君。まあ、私の歩調に合わせずパパスさんの長い脚で歩いてきたから、到着予定時刻は大分早まったけれど。

「お前、お前え……許さないからな！ お前の父親もクビだ！ この城から出て行け！」

リユカから解放されたヘンリーが立ち上がって、キツと顔を真っ赤にして泣きながらリユカを睨んだ。パパスさんはしやがみこんで彼と目線を合わせ、「それは出来かねますな」と穏やかに、けれどきつぱり告げた。

「ふざけるな！ オレは王子だぞ！ 王様の次にえらいんだ！ オレ言うことが聞けないのか!?!」

「たしかに、あなたはこの国の王子だ。そして、私はあなたの御父上――あなたよりも『偉い』王様に雇われております。つまり、あなたでは私を解雇できないのです」

顔を真っ赤にしたまま、ぶるぶると震えたヘンリーは、パパスさんに指を差して怒鳴る。

「じゃあ、じゃあ、ここから出ていけ！ この部屋はオレのものだ！ 部屋の主が命じているんだぞ！ 出ていけよお！」

「出て行かないわー！」

ふん、と私が胸を張る。いいぞ、いい展開になってきた。

「わたし、言ったもの。リュカと仲直りしないなら、ヘンリー様のことゆるさないって。ゆるしてないから、ヘンリー様の言うことなんて聞いてあげない！」

「なっ……！！ なっ……！！」

言葉を紡げないヘンリーに、私は追撃とばかりに仁王立ちする。

「パパスおじさんだつて出て行かないわ。おしごとだもの。っていうことは、ゲレゲレだつてそうよ。今日はみんなで、一緒にごはんを食べ、お風呂に入つて、この部屋でねるのよ」

「アルマ、それって僕も……」

「っーん」

リュカを無視する必要はないが、仲直りしていないという条件は二人平等なので、私はわざとらしくそっぽを向いた。

「殿下、どうやらアルマはこうなったら聞きませんぞ。覚悟を決めて、リュカと仲直りされるか、我々と一緒に過ごすしかなさそうです」

笑いながら、パパスさんがヘンリーの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「わっ!? ぶ、無礼だぞー！ 親子揃つて……!!」

パパスさんの手が離れると、ヘンリーはせつせとさらさらのおかっぱを撫でつけていた。

「私はパパス。御存じかも知れませんが、御父上に呼ばれ、あなたのお守りをするように言われております。あなたと大喧嘩していたのが息子のリュカ。そしてこちらの強情娘が、アルマといいます。そちらの猫はゲレゲレ。皆、あなたの良き遊び相手となつてくれることで

しょう」

朗らかに私たちの紹介をしたパパスさんとは対照的なヘンリーは、そんな「お守り役」の戦士を地団駄を踏みながら怒鳴りつける。

「認めない！ 認めないからな！ 父上に言いつけて、すぐにお前なんかやめさせてやる！」

「わっはっは！ では、私は御父上から解雇を言い渡されるその日まで、誠心誠意働かせていただくといたしましょう！」

ぷりぷり怒っているヘンリーはしかし、私たちが部屋から出ていくことを諦めたらしい。むしろ、部屋の中にみんなでいるよりはと思っただのか、パパスさんの横をすり抜けて部屋から出て行った。

「ヘンリー様、どこに行くの？」

「言っただろう、父上に言っつて、お前の父親をやめさせるんだ！」

すたすたと歩くヘンリーの後ろをついて行ってる私とパパスさんは、顔を見合わせてクスツと笑った。

「ね、ねえ、アルマ。もう怒ってない？」

「っーん」

「ほ、本当に口をきいてくれないの？」

「っーん」

「諦めなさい、リュカ。アルマはお前がヘンリー王子と仲直りするまでは、このままだろうさ」

涙目のリュカを袖にするのは罪悪感があるが、まあそういう流れだ。少なくとも、これで私たちがヘンリー王子のストーリーキングをする口実ができた。いや、リュカは私への思いやりと理不尽に対抗する正義感を発揮しただけで全然悪くないけど、パパスさんの命には代えられまい。作戦の犠牲となってくれ。

「父上！ 今すぐはこのパパスとかいう男をクビにしてください！」

それと、こいつらも！ みんな追い出してください！」

「おお、ヘンリーや。一体どうしたと言うのだ」

玉座の間には、二人の話が終わったからか、衛兵も戻ってきていた。喚き散らすヘンリーには呆れた目が、私たちには同情の目が向いている。ラインハット王は癩癩を起している息子の様子に動じることも

なく、穏やかに声を掛けた。

「こいつら、無礼なんです！ 僕のことを呼び捨てにしたり、僕のことをつねってきたり！」

「それはヘンリーが先にアルマをぶったからだろ！ アルマは何にもしてないし、僕との喧嘩で先に手を出してきたのだから！ 君だ！ だいたい、『僕』ってなにさ。さっきまでは『オレ』って言ってたくせに！」

ヘンリーの主張に、やつぱり珍しいことにリュカが声を荒げる。パスさんも、そんな息子の様子を珍しそうに見ていた。

「か、関係ないだろ、お前には！ とにかく、こんなやつらと一緒に過ごすのなんて耐えられません！ すぐにクビにしてください！」

「ふむ……」

ラインハット王が髭を撫でつけながら、王の御前にも関わらずわー言い合う少年たちを見て、それからパスさんの方を見た。父親二人は言葉を交わさずとも頷き合い、それからパスさんがラインハット王にそつと何かを耳打ちをする。必死な息子たちはその様子に気付かないまま、再びキャットファイト寸前までいつていた。衛兵たちがオロオロと、少年たちを止めるべきかどうか困ったように突っ立っている。

「静まらんか、小僧ども！」

ラインハット王の一喝。リュカはもちろん、ヘンリーも動きを止める。ヘンリーなんか、油の切れた機械みたいなぎこちない動きで父親の方を見て、それから泣きそうに顔を歪めた。

「ヘンリー、そなたの言い分はよく分かった。しかし、パパスを解雇することはできぬ。わしがパパスをそなたのお守りに命じた理由は、ただお守りをするだけでなく、この者から学んでほしいことが多くあるゆえ。ヘンリー、そなたは確かにこの国の王子である。しかし、この子らとそなたは対等な立場と心得よ。なぜなら、パパスはわしに雇われている身でありながら、わしの客人でもあるのだから」

「そ、そんな……」

ヘンリーの絶望しきった顔に、ラインハット王は厳しい表情を返す。

「さて、そうと分かったらヘンリー。この者たちに城を案内してやりなさい。ああそうだ、その……アルマといったかな。彼女に言われたそうじゃないか。これからは彼らと食事を共にし、風呂に入り、同じ部屋で眠るといい。そなたの部屋にこの者たちの分の寝具を運んでおくように命じておこう」

「ち、父上！ そんなの耐えられません！ 僕は——」

「くどい。わしはお前を少々甘やかし過ぎたようだと反省しておる。これからはパパスの言うことをよく聞くのだぞ！ よいな？」

ヘンリーはうなだれ、「はい……」と掠れた声で言った。それからとぼとぼと階段を下りながら、すすり泣いている。俯いていて表情は見えないが、ぐずぐずと鼻をすすっているの、泣いているのは間違いないだろう。

「ヘンリー様、いつもどこであそぶの？」

私は空気を読まずに声を掛けた。だって、ヘンリーに引つ張られてなのか何なのか、リユカまでじめじめした空気を醸しているし。

「ぐす……お前には、ひつく……関係ないだろ……」

「関係あるよお。私たち、これからしばらく一緒に遊ぶんだからねえ、ヘンリー様がすきな遊びはなに？」

返事がないので、勝手に話を続ける。男どもは沈黙だ。空気がじつとりしていて嫌な感じである。パパスさんは様子見って感じで口を挟もうとしない。

「わたしはねえ、おにごっこも好きだけど、絵本を読むのとか、お歌をうたうのも好きよ。かくれんぼは嫌い」

うっかり「かくれんぼをしよう！」なんて流れにならないように、先に言っておく。これなら、この短時間で植え付けた私の強情さを押し、「かくれんぼ嫌い！ やらない！ 隠れさせない！」という手段に出られる。超わがままで普通に嫌われそうだけど、まあ別によからう。「ズツ友作戦」が始まる前から終わったために、私が彼からの好感度を稼ぐ必要はなくなった。とはいえ、一緒に過ごすならば本当に嫌いな相手というのはつらいだろうし、お互いのために徐々に仲良くなっていく必要はあるだろうが。

「もおー……どうして泣いてるの？ そんなに王様に怒られたのいやだったの？」

「ツ泣いてない!!」

デリカシーの欠片もない発言に、ぐしぐしと乱暴に顔をぬぐったヘンリーは、真つ赤になった目で私を睨んできた。そういえば、後ろの方ではパパスさんがリユカに何かをこそこそ話している。なんだろう。

「遊びたいんだっただな、お前。いいぞ、遊んでやったって。こっちに来い」

「うん！ なにするの？」

手を引つ張られて、中庭の方へ連れられて行く。王様に言いつけられたのは城の案内だが、私たちはもう十分に見て回ったし、パパスさんがラインハット王と友達なら、案内されずともよく知っていることだろう。なので、別に誰も「城の案内」ではなくなっていることに口は挟まなかった。まあ、リユカは年下の女の子に無視をされてそれどころじゃないのかもしれないが。かわいそうに。

「これだ」

ヘンリー王子がつまみあげたのは、カエルだった。普通……よりも、少し大きめの。

「オレがいつもしている遊びは、こいつを人の背中に入れたり、顔に向かって投げたりすることだ」

「カエルがかわいそうだよ」

「うるさい！ お前、オレと仲良くしたいんだろ。やってこいよ。そうだな、この時間なら厨房で休憩している男がいるはずだ。そいつの顔面に投げてこい」

ほいっとカエルを手渡される。厨房で休憩している男とは、多分カエルが苦手と言っていた男性のことだろう。かわいそうに。

「アルマにそんな意地悪なことさせられないよ！」

「お前には言っていないだろ！」

「言われてないけど……アルマ、こんなやつ言うこと、聞かなくていいからね！」

「っーん」

リユカ、かわいそう。でも、私もどこでこの設定を覆せばいいのかわからなくなってしまう。表面上だけでいいから、仲良くしてくれれば私もこんな無益な行動をとらなくていいのに。

「お、お父さん……お父さんからアルマに言つてよ。人にされて嫌なことは、自分もやったらいけないって、お父さん、前に言つてたじゃない」

涙目で父に縋る息子に何を思ったのか、パパスさんはリユカの頭を撫でた。

「アルマ、突然カエルを顔に投げつけられたらどう思う?」

「びっくりする」

「嫌だと思うか?」

「そのせいでカエルが死んじゃったらいやかなあ……」

「では、お前の御父上の顔面にカエルを投げつけるやつがいたらどうする?」

「ええ……多分おとうさんはそんなのひらりと避けるか受け止めるから、どうもしないよお」

突然投げられたカエルをひらりと避けるシャークアイ様、かっこいい。むしろ避けそこなつてぶつかってもかわいい。まあ、その場で私は何もしなくても、ぶつけたやつにはその意図を小一時間程度問い詰めるかもしれないけど。

「……突然カエルを投げつけられたら大多数の人間が嫌だと思ふものなのだが、この一般論を聞いてどう思う?」

「いっぱんろんを確かめるために、一回やつてみるね!」

につこり笑えば、パパスさんは笑っているのを誤魔化すように額に手を当てていた。ただし、肩が揺れているし、長身なので下からのぞきこめば髭に隠れた口元が笑っているのが見える。一方、意外そうな顔をしていたのはヘンリーだ。リユカは暗い顔でぶつぶつと何かをつぶやいていた。ダークサイドに落ちないように、機を見計らってフオローしておこう。

*

僕はヘンリーが嫌いだ。意地悪で意地っ張りで、乱暴で、王子だからってえらそうだ。それなのに、ヘンリーと仲良くしないとアルマは口をきいてくれないって言う。

アルマは一つ年下の五歳の女の子だ。ある日海で溺れているところをお父さんに助けられて、コスタールっていう国か、グランエスタードっていう国を探すために僕たちと旅をしている。さらさらな黒い髪の毛に、笑うと三日月みたいに細くなる黒い目は、僕と同じ色なのが、本当の妹みたいでうれしかった。海が好きなアルマはよくお父さんの船に乗せてもらっていたみたいで、日焼けした肌は太陽の光できらきらして、なんだか眩しく見える。

「アルマは僕のこと、本当に嫌いになっちゃったのかな……」

どこか楽しそうに、男の人の顔にカエルを投げに行ったアルマを見ながら呟く。アルマは石だろうとお皿の破片だろうと、投げた物は外さない。あの男の人、さつき話したときに「カエルが苦手」って言っていた。それなのに、それを知っていて、どうしてアルマはカエルをぶつけようと思ったんだろう。

アルマは優しい子で、洞窟で薬師のおじさんを助けたときも、レヌール城でおばけ退治をしたときも、妖精の国で春風のフルートを取り戻したときも、どんなときだって思いやりを忘れなかった。僕が戦いで傷付けば、すぐに気が付いて薬草をくれたし、ビアンカが怖がっているのに気が付いて、自分が怖いからって言っって手をつないであげていた。妖精の国では四人で協力して戦えるようにいつだって声を掛けてくれた。

「いいや、そうではないさ。アルマもまた、自分で言い出したことだから、意地になっっているんだろう」

お父さんが、僕の言葉にそう言ってくれる。

「お父さん、アルマは人にカエルを投げつけるような子じゃないよ。それも、相手の人がカエルが苦手だって知ってるのに。ヘンリーが王子様だから、言うことを聞いたのかな？」

「リュカ。それは違うと、お前も分かっているんじゃないのか？」

どうして、お父さんはアルマとヘンリーを止めないんだろう。二人について行くと、やっぱり、アルマは狙いを外さなかった。可哀想に、椅子から転げ落ちて悲鳴を上げる男の人を見て、ヘンリーはお腹を抱えて笑っている。それから、二人して厨房のおばさんに「食べ物を扱うところに食材じゃない生き物を持ち込まないでください！」と怒られていた。

そうだ、お父さんの言う通り、僕だってヘンリーが王子様だからって、アルマが言うことを何でも聞くような子じゃないって、知っている。それに、何でも言うことを聞くな「ゆるしてあげない」なんて言わないだろう。なのになぜ、怒られるのが分かかっていてあんなことをしたんだろう。

「リュカ、人と仲良くなるには——友達になるにはな、とっておきの方法がある。アルマは、ヘンリー王子と友達になりたいと言っていただろう。知ってか知らずか、あの子はそれを実践しているだけなのだ」「それって……どんな方法なの？ 人に嫌がらせをしないと友達にならないなんて、僕、嫌だよ」

「いいや、そんなことではない。お前だって、ビアンカちゃんと友達だろう。どうやって仲良くなったか、よく考えてみるといい。そうすれば、自然とヘンリー王子とも仲直りして、アルマも自分の言い出したことを引つ込めず、また仲良くできるだろうさ」

笑い合っているアルマとヘンリーを見て、心がもよもよする。アルマ、ヘンリーのことゆるさないって、言ったのに。どうしてそんな相手と、そんな風に笑えるんだろう。ヘンリーはアルマのこと、理由もなくたたいたり、チビって言ったり、嫌なやつなのに。

「お父さん。僕、ビアンカとは友達だけど、ヘンリーとは友達になれないと思う」

「そうか。まあ、さっき言った通り、父さんはこれからヘンリー王子のお守りをしなければならぬ。アルマはヘンリー王子のことを『許さない』から、一緒にいることだろう。お前はどうするのだ？ ヘンリー王子と友達になれないから、一人でサンタローズにでも戻るのか

？」

お父さんは真剣な顔をしていた。もし、僕が「うん」と頷けば、サンチョに手紙でも出して迎えに来てもらおうとでも言いだしそうな、そんな雰囲気だった。僕は、アルマが口をきいてくれないのとは別に、なんだか泣きそうな気持ちになる。こんなに嫌なことばっかり続いたら、ラインハットになんか来なければよかった。お父さんを追い掛けないで——それはかなり寂しいけれど——サンタローズで、アルマやゲレゲレと、サンチョの美味しい料理を食べて待つていればよかったんだ。

「そんなこと、するわけないよ。ヘンリーとは友達になれないけど、僕はアルマとも、お父さんとも、ゲレゲレとも、みんなで一緒にいたい。それに、お父さん、言つたじゃない。これからは僕と遊んでくれるつて。あれは嘘だったの？」

僕がそう言つてお父さんの腕を掴めば、お父さんは目元をやわらかくして、「そうか」と頷いた。

「もちろん、嘘ではないさ。遊ぶ相手が、お前やアルマの他に、ヘンリー王子も増えたというだけだな。さあ、見ろ。二人が追い出されているぞ。もうすぐ料理を作り始めるようだ」

そういえば、お昼過ぎにサンタローズを出て、もう太陽が落ちかかっていた。すっかり夕方だ。アルマが眠い眠いと何度も言つていたように、僕も疲れているし、眠かった。だって、今日はなんだかとても一日が長い。

「料理が出来上がるまでに、風呂に入るとしよう。王城の風呂だ、楽しみにしておくといい」

お父さんが使用人のおじさんに話し掛けると、僕たちのお風呂はすぐに用意された。着替えはいつもの旅装束があるからと思つていただけ、お城の人が子ども用の寝間着と、お父さんのための服を用意してくれていた。お父さんの言う通り、お風呂はとて広くてぴかぴかで、僕はなんだか、ヘンリーへの怒りも忘れて呆然としてしまった。「ふふん、すごいだろう。本当なら、ここは王族やその客人しか入れないんだぞ。それをお前らと、その猫まで入れてやるなんて、絶対に

ありえないんだからな」

ヘンリーが裸んぼで胸を張る。

「いつもなら使用人に体を洗わせるんだ。それをお前の父親のせいで、自分で洗うことになったんだぞ」

それからすぐに不機嫌な顔になってお父さんを睨んだ。

「まさか、リユカやアルマでさえ自分で体を洗えるのに、殿下はできないのですかな？　だとしたら申し訳ないことをしました」

「そうなの？　ヘンリー様、自分で体あらえないの？　じゃあ、みんなで背中流しっこしましょうよ！　わたし、パパスおじさんの背中洗ってあげる！」

「おお、ありがとう。では、私は殿下の背中を流して差し上げよう」

「じゃ、じゃあ、僕、アルパカのと きみたくアルマの背中流してあげるね！」

「っーん」

一向に返事をしてもらえないことに、落ち込む。「にゃおん」とゲレゲレが僕の頬を舐めた。僕はゲレゲレを洗ってやることにした。ゲレゲレは猫だけど、水を特別嫌がる感じはない。みんな一緒だからだろうか。ために、足元をちよつとだけ湯船のお湯で濡らしてみたら、濡れた前足をペろつと舐めただけで、嫌な顔はしなかった。

「ふん、お前みたいな力加減の出来なさそうなやつに体なんか洗わせられるわけないだろ。オレは自分で洗う。お前らは勝手にしろ」

「あ、よかった。おじさん、ヘンリー様、自分で体あらえるみたいよ」

「チビ！　お前そろそろいい加減にしるよ！」

「あー、おこったあ。こわいよお」

アルマがお父さんの後ろに隠れて、キャツキヤと笑う。僕は泣かないようにしながら、ゲレゲレを丁寧に、丁寧に洗ってやった。お風呂から上がって拭いてやると、ゲレゲレは今までよりもさらにきれいでふわふわの毛並みになった。

夕食は、王様とも一緒に食べるようになった。本当は王妃様とヘンリーの弟のデール様も誘ったらしいんだけど、ヘンリーがいるから断られたと、兵士さんがこっそり教えてくれた。

「リュカ、アルマ。この城はよく見れたかね？」

「はい！ 探検させてくれて、ありがとうございます」

ぺこっと頭を下げるアルマ。僕はそれに続いて頭を下げるだけにした。こんなお城、本当は早く出て行きたい。ヘンリーを怒ってくれた王様は悪い人ではないんだらうけど、僕はもう、このお城の全部、苦手になっていたのだ。

お父さんや王様は、僕たち子どもにいろんな質問をしてきた。僕にも、アルマにも、ヘンリーにも。王様は僕たちに今までの旅のことを聞いてきたし、お父さんはヘンリーにお城での生活について聞いていた。ヘンリーも、王様がいるからか、それまでみたいにお父さんに失礼な態度は取らない。そっけないけれど、質問にはちゃんと答えていた。

「それでは、アルマはコスタールとグランエスタードという国を探しているのじゃな」

「はい。王様はしていますか？」

「ふむ……わしは聞いたことがないが……調べさせるようにしましょう」

「ありがとうございます！」

アルマはうれしそうに笑っていた。そうだ、アルマは帰りたいんだ、お父さんとお母さんのところに。僕だって、気持ち想像できる。お父さんと離れ離れになったら、どうしても会いたくなると思う。会えるなら、なんだってすると思う。それに、アルマはしっかりしてるけど、まだ五歳なんだから。

夕飯を食べ終わって、ヘンリーの部屋に戻ると、僕たちのためのベッドが用意されていた。ヘンリーの部屋は広くて、簡単なベッドが二台入ったって、全然窮屈に感じなかった。ヘンリーは「部屋が狭くなった」って怒っていたけど。子どもだからってまとめられたのだから。アルマは相変わらずツーンとしていたけれど、僕と同じベッドで寝ることを嫌がりはしなかった。

朝、目が覚めるとお父さんはもう支度を終えていた。王さまと昨日の夜、これからのことを話し合ったらしい。そういうことで、僕たち

は午前中は剣の稽古と簡単な勉強、午後はみんなで遊ぶことになった。剣の稽古は楽しかったし、ヘンリーよりも僕の方が上手だったから、僕はすぐにこの時間が好きになった。だけど、勉強は苦手だった。というのも、僕は文字が読めないけど、ヘンリーは読める。それをえらそうに自慢してくるのだ。

「アルマは文字が読めるの？」

「うーん、完全に一緒ではないけど、基本似てるから読める……じゃなかった、っーん」

僕はちよつと笑った。アルマは僕と口をきかないことを忘れちゃっていたみたいだ。だから、きつと僕のことを嫌いになったわけじゃないんだと思う。お父さんが昨日言ってみたいに、「仲直りするまで」って自分で言っちゃったから、引つ込みがなくなっただけだったんだ。それが分かると、ちよつとだけ心が軽くなった。アルマったら、子どもなんだから。まあ、僕の方がお兄ちゃんだから、アルマとまた遊べるように、僕がヘンリーと仲直りしてあげよう。

「ヘンリーさま、午後は何するの？」

「大臣のカツラを取ってやろうと思ってる。あいつ、いつつもオレに説教してきて、ムカつくんだ」

アルマが聞くと、ヘンリーがアルマに耳打ちをした。多分お父さんに聞かれないようにするためなんだと思うけど、残念ながら僕にも聞こえたくらいだからお父さんにも聞かれていると思う。

「あ、あの。それ、僕もやっていい？」

「えっ？」

小さく手を上げると、びっくりしたようにアルマがこちらを見た。仕方がないじゃない。僕はヘンリーのことを嫌いだし、友達になんかなりたくないけど、仲良くしてほしいって言ったのはアルマなんだから。

それに、お父さんは仲良くなるための方法がなんなのか、詳しいことは教えてくれなかった。僕はこの「悪戯」にヒントがあると思う。だから、本当はそんなことしちやいけないうって分かっているけど、やってみないことには分からないこともある、と思う。

「なあんだ、良い子ぶってたくせに、本当はお前もやりたかったんじゃないか」

「ちがうけど……でも、なんでそんなことやりたいのか、全然分からないから、やってみたら何が楽しいのか分かるかと思って」

「おう！ それならこつち来い！ パパス、お前は聞くなよ！ 邪魔もするんじゃないぞ！」

「ほどほどになさってくださるなら」

こうして、作戦会議が開かれた。お父さんは遠くの方で壁に背中をもたれさせながらこつちを見ている。大勢の前でカツラを取るのはいかいそうだと、ということ、やるのは大臣が一人にいるときになった。ヘンリーが僕とアルマを紹介するっていう形で大臣の部屋に入って、ヘンリーが大臣の気をそらしている間に、僕がカツラを取る。なんでも、ヘンリーは「けいかい」されてるから、カツラを取る役には向いていないんだそうだ。

お父さんは仕事のこともあるからヘンリーから離れられないけど、邪魔はしないということ、大臣の部屋の近くで待っていてくれることになった。

ヘンリーは大臣の休憩時間に合わせて、部屋のドアをノックした。うう、ドキドキする。大臣はドアを開けて、ヘンリーを見て眉をぴくぴくと動かした。

「よお、今、休憩時間だろ？ アルマとリュカ、ゲレゲレだ。紹介に来ただけど、お茶でも出してくれよ。知ってるんだぞ、休憩時間にもすつごくうまそうなクッキー食べてるだろ」

「うっ……殿下、まつたくどこからそんな情報を仕入れてくるやら……はあ、どうぞ、おあがりください」

大臣は嫌そうだったけど、諦めたみたいで、僕たちを部屋に通してくれた。椅子を出してくれたので、素直にそこに座る。大臣も座った。座れば、僕にも頭に手が届きそうだと。もともと、この人はそんなに背が高くない。僕はドキドキしたまま、大臣をじろじろ見た。

「どうかしましたかな？ えーと」

「リュカです。え、えっと、僕、緊張しちゃって。突然押しかけて、ご

めんなさい」

「リュカはビビリなんだよ。城の案内とか、人の紹介とかしてやってんだけどさ、縮こまっちゃって」

僕が頭を下げれば、ヘンリーがやれやれと首を振る。泣き虫の君には言われたくない。それに、僕はヘンリーに案内も紹介もしてもらっていない。アルマと二人で探検に行っただけだ。

「わたしがアルマです！　ねえねえ、大臣さん、この部屋、本がすっごくたくさんあるのね。大臣さんってどんなお勉強をするの？　すごい人なんでしょう？」

元気よく質問するアルマに、大臣はヘンリーに向けるのと違って、にこやかな顔を向けた。

「ああ、子どもには難しいかもしれないが、国のお金をどうやって使うかとか、この国で暮らす人たちが住みやすいようにどうすればいいか、勉強しているんだよ。さて、殿下。クッキーとお茶です。侍女たちが淹れるものほど上手くはありませんが、どうぞ」

ちらり、とヘンリーに視線を向けられる。僕はごくりと唾を呑み込んだ。

「おお、やっぱりうまそうだな。ところで大臣、オレ、どうしても確認したいことがあって」

ヘンリーが真剣な顔になる。なんの話だと思っているのか、つられたように大臣も真剣な顔になった。

「とても大事な話なんだ。……そうだな、資料もいる。リュカ、その本棚の本を取ってくれ。大臣、よく聞けよ……」

ドキドキ。僕は立ち上がり、本棚に向かうふりをして大臣の後ろに立つ。

「それは、もしや——」

「今だッ!!」

大臣が何かを言い掛けたとき、ヘンリーが大きな声を出す。僕は無我夢中で、その声に従って大臣の頭に手を伸ばし、カッラを取った。隠すもののがなくなった大臣の頭は、つるりと部屋の明かりを反射して光っていた。

「はーっはっはっは！ お前がカツラだつてことを、確認させてもらったぜ！ こいつらに、ちゃんと本当の姿を紹介してやりたかったんだよ！ はっはっは！」

「で、殿下ーッ！ 毎度毎度！ あなたは将来この国の上に立つ方なのですぞ！ このようなくだらない振る舞いはおやめください！」
僕の手からカツラをひったくった大臣はいそいそと頭に再びそれを乗つける。そんなに大事なのかなあ。僕はそんなに必死になって隠すような恥ずかしいものではないと思うけど。

大臣にはすごく怒られたけど、ヘンリーは全然気にしないで大笑いしていた。アルマも、堪えようとしていたけれど、ふるふる震えている、笑っているのがバレバレだった。僕もつられて笑ってしまった。アルマは「リユカ、大成功だったね」とにやつと笑って僕に話し掛けた。こうして、僕はお兄ちゃんなので、彼女の意地を守ってあげて、再び彼女と話をすることができるようになったのだ。

それから、僕たちは悪戯三人組として、ラインハットで有名になってしまった。やりたいことをヘンリーが言い出して、その作戦を三人で考えて、実行する。ときにはお父さんを出し抜いて、城下町に抜け出したこともあった。でも、出し抜いたと思っただけでもなぜかお父さんにはいつも抜け出したことがすぐにはばれてしまって、後をつけられている。なんでそんなことが分かるかって、そうつとヘンリーの部屋に三人で帰ると、先回りをしていたお父さんが部屋で待っているのだ。それから、僕たちが抜け出した間のことを話して、「ずいぶん楽しそうだったな」と締めくくり、全部バレてるってことを嫌でも知らされる。

本当はいけないって分かっていることだけど、三人で悪戯を考えてやってみるのは楽しくて、僕たちは大人に何度怒られようとも、やめられなかった。お父さんを出し抜くのはまだまだ難しそうだけど、でも、悪戯が成功したときには達成感もある。いつの間にか、僕とヘンリーは仲良くなっていた。もちろん、喧嘩は何度だつてしたけれど、もうアルマは「喧嘩するな」とは言わなかった。

僕はラインハットという国が好きになった。王妃様はヘンリーと仲良くしている僕たちのことを嫌いになってしまったようだけれど、デールはいつも羨ましそうに僕たちを見ていた。だから、王妃様に見つからないように、たまに悪戯に誘ってあげた。兵士たちは、僕たちがデールを誘うのを見逃してくれる人が多かった。僕たちは誘えるときにはデールも誘って、四人と一匹でお城の中や外で悪戯をして回った。王妃様の監視が厳しくなって、デールは外に連れて行けなかったけれど。だけど、デールは連れ出すときいつもうれしそうだった。あの頭の痛くなる部屋にいるときよりずっと元気に動いて、大きな声で笑っていた。

午前中は剣の稽古。僕とヘンリーは稽古の最後に必ず一本勝負をするようになった。勉強は、分らないところをヘンリーが教えてくれるようになった。午後、悪戯のネタがないときや天気が悪いときは、お父さんが遊んでくれた。ピアノカも、サンチョもいたらもっと楽しいのに。そう思って、習ったばかりの文字を使って、二人に手紙を書いてみようと思った。お父さんに言えば「文字だけじゃなくて、文章を書く練習にもなってよいだろう」と書き方を教えてくれることになった。勉強も少しずつ好きになってきた。最初は嫌いだっただラインハットは、僕にとつてすぐくすてきな国で、大人になってヘンリーが王様になったら、またこの国に遊びにきたいと思った。

特別な友達

私たちがラインハットに滞在して十日ほど経った日のことだった。私たちはラインハットの悪戯三人組として随分有名になっていて、ヘンリーの悪評は私たちの悪評になった。

今日はなんだか定着してしまった剣の稽古でのリュカとヘンリーの一本勝負を、ラインハット王が見学に来ている。私はこの時間、一応二人の動きを見て伝えるという役割を担っていた。そうすることで、反省点や良かったところの振り返りができるからだ。ちなみに、私は体も小さく力もあまりないので、剣の稽古は基礎だけやったら、あとはゲレゲレと一緒に体力づくりをしている。二人のように本格的な剣術は習っていない。

「アルマや。わしは、そなたらがこの城に来てくれてよかったと、心から思っておるよ」

「えーと、ありがとうございます。わたしも、ヘンリー様とお友達になれて、うれしいです」

相変わらず顔色は悪いが、ラインハット王の表情は穏やかだった。まぶしいものを見つめるように目を細めて、視線はヘンリーから外さない。

「あれは明るくなった。これまでのように、下手な関わりではなく、きちんと相手のことを考えるようになった」

「王様……あの、自分でこんなこというの変だけど、わたしたち、いたずらばっかりしてるよ?」

「それでも、前は誰もあれに面と向かって怒ることはできなかったのだ。できたのは、厨房で働くおばちゃんくらいかのう。傷つけられる前に他人を傷つけていた子どもが、他人との関わりを受け入れるようになったのじゃ」

ヘンリーが一本取られた。最近は接戦になってきたが、ヘンリーは剣の腕ではリュカには敵わない。それでも、「くっそー!」と悪態を吐

きながらも、彼は毎日の一本勝負をやめることはなかった。

「わしは、なんと不出来な父親であることか」

子どもだからなのか、それとも下手に言いふらさないと信用されているのか、あるいは別の理由なのか、私は大人の「独り言を聞く係」になることがしばしばある。まあ別にいいんだけど、人生経験の少ないはずの五歳児としての正解が分からないので、いつも言葉に迷う。

「でも、ヘンリー様、王様のことすきよ。わたしがおとうさんのこと、だいすきなと同じように」

だから、五歳児としてというよりは、「娘である私」として答える。もつと言えば「娘にしてもらったアルマ」として。

「王様はいそがしいから、たいへんかもしれないけど。わたしだったら、おとうさんに『何かしてもらえる』よりも、ただ一緒にいてくれることの方が、ずっとだいじよ」

ぽつりとそう言えば、ラインハット王の存在に気が付いたヘンリーが、大慌てでこちらへ駆け寄ってきた。勝負をしていたリュカや、審判をしていたパパスさんも、あとからこちらへ向かって歩いてくる。

「ち、父上！ 恥ずかしいところをお見せしました……」

「いいや、良い勝負だった。上達したな、ヘンリー。王宮剣術の稽古は嫌いだったのにと、兵士長が拗ねておったぞ」

顔を真っ赤にしたヘンリーが、俯きながら「……その、友達と一緒にだと、楽しいので」と蚊の鳴くような声で返した。その言葉を聞いて、リュカが目をきらきらさせながら、パパスを見やる。ヘンリーが直接的に私たちのことを友達と称するのは初めてのことだった。

「それは、なによりであるな。リュカも、良い腕をしておる。さすがはパパスの息子じゃ」

褒められたリュカはにこにこして「僕、大人になったらお父さんみたいに強くなりたいんです！」と良い息子の模範みたいな回答を、計算など少しもなく言っただけのけた。まぶしすぎる笑顔に、私は自分の心の汚れを見せつけられた気がして、思わず胸を押さえた。

「アルマ、どうしたの？」

「なんでもない……」

純粹すぎることは、ときに鋭すぎるナイフのような切れ味を誇るのだと知る。私だってブラック会社勤務の社畜だった過去を鑑みれば、純粋な方だと思うけど……シャークアイ様をはじめとしたマール・デ・ドラゴーンの人たちとか勇者様たちとかに浄化してもらってるし……。でも、私だったらあの手の発言は受け手の反応を想定した上で、の計算によって口に出すだろう。

「父上、あの、もし時間があるなら、もう一勝負見て行ってください！
僕、次は勝ちますから！」

お、初の延長戦。ヘンリーの言葉によって思考を切り替えた私は、心の汚れ問題から目をそらし、少年の反応を見た。これにはリユカもノリノリで「僕だって負けない！」と気合を入れている。ラインハツト王は、「もちろん。良い試合を楽しみにしておる」と笑った。さつそく始まった二試合目に、ヘンリーは「いつもにも増して真剣な表情だ。いつもだったらここで子どもらしい挑発のオンパレードだが、それも含はなりを潜めている。」

私はゲレゲレの隣に腰を下ろして、ふかふかの毛皮にもたれかかった。王宮のお風呂で毎日洗っているからか、獣臭さは感じず、おひさまのにおいのゲレゲレちゃんである。

「アルマ、どちらが勝つと思う？」

パパスさんにそう聞かれ、私は「リユカかなあ」と素直に答えた。「ヘンリーは意外とまじめだから、教えられた型を、教えられた通りに使うことが多いもの。リユカは魔物ともたたかうし、型にしばられずにいろいろやってみるのよね」

武器だって、剣も使えればブーメランもナイフも使える、万能型だ。それは実戦で鍛えられたからこそそのしなやかさであり、強さなのだろう。一方、ヘンリーは基本に忠実だ。実戦経験の少ないヘンリーには、それが何よりの強みとなる。守りと攻めのバランスが良いのだ。パパスさんは彼らの特徴をよく理解して、それぞれに合った剣術を教えているようだった。

「アルマに戦い方を教えたのは、勇者殿か？」

首を傾げる。私は基本的に、パパスさんがいるときには戦闘に参加

しない。というのも、必要がないからだ。戦いを補助する前に男三人衆で敵をやっつけている。レヌール城でのお化け退治の話はビアンカとリュカがしていたけれど、実際に目で見たわけではないから、私ほどの程度戦えるかは分からない、はず。

「ううん。勇者様にたたかいかたを教えてもらったことはないわ。『わたしもたたかう』っていうえば、守ってくれたけれど」

シャークアイ様や勇者様に言ったことがあるのは、「私も船乗りになる！ 船乗りマスターになりたいから、一緒に戦って！」みたいなことである。ダーマの神殿へ行つて転職させてもらったり、魔物に殺されないように体の使い方を教わったりはしたけれど、戦い方と言われれば疑問が浮かんだ。

「どうしてそう思ったの？」

「アルマの戦いを見る目は、『戦いを知る目』だ。だから、きっと誰かに教えてもらったんだろうと思っただが……」

「それなら、勇者様がたたかっている横で、マリベル様がおしえてくれたの！」

「マリベル様？」

「勇者様の、こいびとよ。たぶん、もうすぐ奥さんになるの！ マリベル様はきびしいことも言うけど、本当は誰よりも優しい、すてきなひとなんだよ！」

まあ、その優しさは時と場合によって度合いがかなり変わってくるけど。でも、マリベル様はよく怒ってはいるが、その怒りの根底には誰かへの思いやりがあることは間違いない。その「誰か」が自分であることも少なくはないが。

「マリベル様、すごいんだよ。わたしには、勇者様の戦いは『すごい』としか思えないのに、『今のは全然ダメ』とか『今のは無駄が多い』とか『今のはまあまあだったわね』とか、そういうのをおかし食べながら教えてくれるの！」

「……待て、それはどういう状況だ？」

「えっとね、船にのってて、海の魔物が出てきたときに、アルス様と他の人にたたかわせて、マリベル様はわたしのそばで一緒におかしを食

べながら『けんがく』するの。人数がそろってるときは、たたかいたくないんだって」

それと、本人は口に出さなかったけど私のことを守ってくれていたんだと思う。事実、私が船乗りの経験を積むために魔物と戦うときは、補助呪文を駆使して、過保護なくらいに戦いやすくしてくれていた。私は弱いので大変ありがたかった。

そういうところにも性格は出て、マリベル様は補助呪文を使って、私自身に戦わせようとしていたが、アルス様は基本的に自由にやってみろ、という感じで、危なくなったら助けてくれた。それから、マー・デ・ドラゴンのみんなは、茶々を入れながら一緒に戦ってくれて、その中で危なくないように守ってくれた。大変だし疲れるし怖いけど、意外と一番安全なのがマリベル様と戦うときだ。そして一番ヒヤツとする場面が多かったのがマー・デ・ドラゴンのみんなと戦うときだった。人数が多いので、みんな私のことを忘れて戦っていて、私一人ピンチになることが多々あったのである。そういうときはシャークアイ様が助けてくれて事なきを得るんだけど。

「ということは、そのマリベル殿も戦えるのか？」

「マリベル様は魔法でそこらへんの魔物ならしゅんさつできるよ」

魔法じゃなくて特技を使うこともある。あくびをしながら魔物へジゴスパークをぶちかましていたのを見たときは、鳥肌が立った。なんか、感動とか畏怖とかいろいろで。私の周り、レベルの違う強さを誇る人がたくさんいたから。勇者様一向は別の次元として、シャークアイ様をはじめ、マー・デ・ドラゴンの人たちも世界の海を平気で渡り歩いていられるくらい強いからね。

さて、私と同じくらいのレベルの少年たちの勝負は、そろそろ佳境に入っていた。稽古終わりの二戦目ということで疲れもあるのか、二人とも動きが大振りだ。当ててやろう、終わらせてやろうという魂胆が見え見えである。父親にかっこいいところを見せたい気持ちが強いのだろうか。

「あっ」

ヘンリーが勝負に出た。いつもの基本に忠実なヘンリーらしくな

く、型が崩れており、さらには攻撃的で妙に力んでいる。それを見逃すリユカではなく、攻勢に出たヘンリーへ見事にカウンターを食らわせる。できた隙にモ口に入ってしまった横薙ぎの一閃に、「ぐうっ」とヘンリーの苦しそうな声が聞こえた。

「そこまで！」

パパスさんの張りのある声に宣言されて、相変わらずヘンリーの負け越しで勝負は幕を閉じた。

「うわわっ、ヘンリー、大丈夫!? 今ホイミを……」

「いらねえ！」

仰向けに倒れたままのヘンリーは、駆け寄ってきたリユカが差し伸べた手を払いのける。

「先生、回復、お願いします」

稽古と勉強をしている午前中の間だけは、パパスさんのことを「先生」と呼ぶ少年は、本当に悔しそうに顔をゆがめたまま、のそりと起き上がった。それから回復魔法を施してもらい、力ない笑みでラインハット王へと向き合う。

「父上……次は、次は勝ちますから」

「うむ。上達を楽しみにしておるぞ、ヘンリー」

「はい！」

「では、わしもそろそろ戻らねばならん。ヘンリー、リユカ、アルマ、各々励むように」

私たちの返事を聞くと、ラインハット王は頷いてから、城の中へと戻っていった。

「先生、オレ、今日は勉強は休んでもいいですか」

自分の父親の姿が見えなくなると、ヘンリーは俯いたまま、傍に立っていたパパスさんに小さく声を掛けていた。

「ふむ。理由を聞こう」

「先生にはいいんですけど。あいつらには聞かれたくありません」

ハッキリとそう告げたヘンリーに、リユカがショックを受けた表情になる。私は口を挟まず、パパスさんの反応を見た。顎に手を当てた彼は、逡巡した後、「分かった」と口を開いた。

「では、今日の授業は休みにする。お前たちは文字の読み書きを自習するように」

何かを言いたそうにしているリュカを無視して、「はい」と軽く返事をする。私は立ち上がって、そのままリュカの手を取った。

「ほら、リュカ。行こう?」

「でも……」

「いいのよ、パパスおじさんがあ言っただもの。ね、昨日読んだ本の続きを読みましょう。ゲレゲレ、おいで」

不満そうなりユカを連れて中庭から城内に入ると、彼は「ヘンリー、僕のこと嫌いになったのかな」とぼつりと呟いた。

「王様の前で、勝ちたかったにちがいないし……僕、負けてあげた方がよかったかな」

「そんなことしたら、よけいにおこるだけだよお」

ぴたり、一度足を止めて、リュカに向き直る。両手をつないで、じつと迷いに揺れる黒い双眸を見つめた。

「リュカ。リュカはヘンリーのお友達だけど、きっとそれだけじゃないのよ」

「それって、どういう……?」

「さあ。でも、そんな感じがするわ。たとえば、リュカとヘンリーはよくけんかをするけれど、わたしとはあんまりしないじゃない。同じお友達でも、同じ種類の仲良しではないと思うの」

にこり。私は不安げな少年に安心を与えるために笑みを作った。

「リュカだって、もしもヘンリーが自分より強いのに、わざと負けたらおこるでしょ?」

「そりゃあ、そうだけど。本当に嫌われてないかな?」

「それは午後にたしかめればいいんだよ。わたしたち、本の続きも読まなくちゃいけないし、ビアンカとサンチョさんにお手紙も書かなくちゃいけないし、いそがしいんだから。早く部屋にもどりましょう」
「……うん」

そんなやり取りをして、ヘンリーの部屋へと戻る。彼が数年前に文字の勉強用にともらった絵本や児童書を、私たちは教科書としてい

た。この世界の文字は、向こうと似ていて少し違う。なので覚えやすいと言えば覚えやすいが、想像で補填するとんでもない思い違いをしていることもあるのだ。その点、絵本や児童書が教科書というのは都合がよかった。思い違いをしても害がないし、スラングを使わないので正しく単語を覚えられる。しかも物によっては易しい歴史書のようなものもあり、この世界のことを知るのにも役立つ。私はこの世界のことを知っているようで全然知らないので、大変ありがたい。

「先に本を読む？ 手紙を書く？」

「手紙、かなあ。今はなんだか、本を読む気分にはなれないや」

「じゃあ、書きたいことをまとめようよ。ビアンカには何を書く？」

わたし、妖精の国のこと、ビアンカに教えてあげたい！」

「そうだね。アルカパを出てから、いろいろあつたもんね。妖精の国のこと、ラインハットでヘンリーと大喧嘩したこと、友達になったこと、僕たちが悪戯ばっかりしてることを、教えてあげなくちゃ」

「ビアンカ、まじめだからおこるかな？」

「ふふ、怒るかもね。サンチヨには、悪戯のことは内緒にしておこう。サンチヨには剣の稽古とか、勉強のこととか、ラインハットがどんなところかとか、そういうの、教えてあげたいな」

私たちはメモを取りながら、ビアンカとサンチヨさんへの手紙の内容を考える。それはこれまでの日々を振り返る時間でもあり、私はふと、勇者様が旅をしているときにいつでもつけていたという冒険の書のことを思い出した。

私は冒険の書をつけていない。日記というものが非常に苦手だし、誰かに頼むには演技もろもろが面倒だからだ。リュカはたまに、教会で神父様にこれまでのことを話して、書き記してもらっている。冒険の書とは日記のようなものであり、自分の努力についての記録であり、旅の出来事に関する備忘録であり、その時々自分の思いを語る相棒のようなものであるようだった。

——「冒険の書は、僕の宝物のひとつでもあるんだよ」。

そうおっしゃった勇者様の顔はひどく穏やかで、そこにいるのに、いないような、不思議な感じがした。勇者様は私に、冒険の書をつけ

ろと言ったことはない。私は勇者様の冒険に憧れながら、マール・グ・ドラゴーンに乗せてもらうことに満足していたし、あそこを離れて冒険する気もなかったのだ、これまでは冒険の書をつけようと思ったこともなかった。

「ねえ、リユカ。わたし、冒険の書をつけてみようかなと思うの。神父様にたのむんじゃないで、自分で思ったことを、自分の言葉で書いたら、すてきだなんて思ったから」

「そうだね。僕も今まで、神父様にこれまでのことを告白してつけてもらってたけど、自分でつけたらいいよね。神父様が書いてくれるみたいに上手にはできないかもしれないけど……」

私たちは、未熟な文字で、文章で、パパスさんに練習用にともらったノートにこれまでの冒険のことを書いていた。リユカと出会ったこと。サンタローズの洞窟での、初めての冒険。アルカパの町のこと。レヌール城でお化け退治をしたこと。助けた「猫」をゲレグレと名付けたこと。いつまでも寒いサンタローズの村で、ベラを見つけたこと。ベラに妖精の国へ連れて行ってもらったこと。春風のフルートを取り返して、ポワン様が世界に春を告げたこと。ラインハットに来て、ヘンリーとひと悶着あったこと。仲良くなって悪戯三昧をして、ラインハット内に悪評を轟かせていること。

「わたしたち、けっこうすごいことしてるよね」

「うん。ね、アルマ。冒険の書を書き始めた記念に、手形を付けようよ。僕、アルマのノートに付けるから、アルマは僕のノートに付けて」「わかった」

手のひらにインクを付けたリユカが、ぺたりと一番最後のページに手形を付ける。私もそれに倣って、リユカの「冒険の書」の最後のページに手形を付けた。今日の日付と、自分の名前を添えてやると、それを見たリユカが私のノートにも同じことをする。

子どもの小さな手形をすっぱり収めたノートを見て、私たちは満足げに笑った。仲間外れにされたゲレグレが、ぴちやりと前足をインクに浸して、裏表紙の内側、最後のページの隣に自分の肉球を押し当てる。「やってやった」と、満足げな顔にまた笑い合うころには、リユカ

が抱いていたらしいヘンリーへの不安もすっかり吹き飛んだようで、汗だくのヘンリーとパパスさんが部屋に帰ってくると、晴れやかな顔で二人を迎えていた。

「ヘンリー、今日の午後はどうする？」

昼食を取りながらリユカが質問をすると、剣の稽古のときよりはすっきりした顔で、ヘンリーは腕を組んで「今日はなあ……」と眉を寄せた。

「デールのところに行くか。オレたちがあいつにちよつかいかけ始めたつてんで、義母上が怒ってるらしいんだよ。それで、参ってるつて兵士たちが話してたんだ。外に連れ出すのは難しいかもしれねえけど、少しの時間話すくらいならできるだろ」

「わたし、あの部屋にがてだから、デール様にはどこか来てもらおうよ」

「じゃ、ヘンリーの部屋に呼ぼうよ！ そしたら王妃さまも来ないだろうし」

「きやあきやあと騒ぐ子どもたちへ、パパスさんが「それなら、私はお邪魔かな？」とクスクス笑う。」

「ああ、邪魔だ！ お前は部屋の前で変なやつが来ないか見張ってる！」

「そうさせてもらおう」

ヘンリーの言葉に頷いたパパスさんの方を見る。今までも、一応パパスさんの目が離れる場面では、必要がありそうなら「子どもの情報を伝えるようにしていた。たとえば、彼らがパパスさんを出し抜いて子どもだけで城下町に遊びに行きたいといえば、出し抜くための作戦をそれとなく伝えたり、「秘密を隠し切れない子ども」を装ってどこで何をするか情報提供したりと、ともかく子どもだけにならないように気を配ってきたのだ。

今回はデール様を部屋に呼ぶだけだから問題ないとは思うが、これで子どもだけになったときに「じゃ、部屋から出よう」と、ヘンリーの部屋にある隠し階段を使って抜け出す可能性もなくはない。今までが安全だからと、これからも安全とは限らないのだから。

さて、午後になり、私たちはデール周辺の情報を探っていた。というのも、私たちは全員、デールの部屋のおいが嫌いなので、できれば滞在時間を少なくしたい。王妃様は一日の内のほとんどもをあの部屋で過ごす、もちろん出ていくタイミングもある。そのときは見張りの兵士とデールだけになる。その見張りが私たちに協力的な場合は話が簡単なのだが、そうではない場合は面倒で、そういうときはデールを連れ出すのを諦めていた。

幸運なことに、今日は私たちに協力的な兵士が見張りをしているようで、少し話があったのだと伝えればすぐにデールを呼んでくれて、王妃様が戻る予定時刻まで教えてくれた。王妃様が部屋を開けるときの大体の理由が良からぬ連中との密会らしい、というのは兵士の間でなんとなく広がっている噂である。

ただし、王妃様自身の安全確保のためもあるのだろう、戻る時間を必ず伝えられているため、その時間さえ知ることができれば、私たちはそれよりもちよつと早めにデールを部屋に送ればいい。

「兄さま！ 今日は何の遊びを教えてくださいませんか？」

「いや、デール。今日は悪戯は休憩だ。ちよつとオレが疲れてるんだな」

ヘンリーの部屋に着くなり、デールは顔を輝かせて聞いてきた。その言葉に首を振ったヘンリーだったが、すぐににやりと笑みを浮かべる。

「お前の鬱憤が溜まってらんじやないかと思って、話を聞いてやろうと思つたのさ。お茶と菓子でももつてこさせようと思うが、何がいい？」

「あつ、それなら……」

デールがにこりとうれしそうに笑う。

「お母さまのくれたケーキがあるんです。とつても美味しいんですが、ボク一人では食べきれなくて……侍女に持ってきてもらいましょう。兄さまが食べたいものはありますか？」

「ケーキか、いいじゃないか。義母上もオレには食べさせたくなかつ

ただろうし……ククク、もしオレが食べたって知ったら、悔しがらるうなあ。言わないけど」

悪い笑みを浮かべているヘンリーに呆れる。

「デール様、わたし、ざんねんだけどお昼を食べすぎちゃったから、ケーキはやめとくね」

たとえ息子にあげたものだとしても、信用できない人物の用意した物を、私は口に入れる気にはなれない。あの部屋の香や、息子の気持ちを鑑みない日頃の言動から、「息子のためを思って」と怪しい薬が入れられていてもおかしくはないだろう。成長促進剤とか、下手したら怪しい連中とやらからだまされて得体の知れない何かが入っている可能性もある。絶対に嫌だ。できればリユカやヘンリーにも食べさせたくない。

「そうなの？ 残念だけど……アルマは小さいものね。あんまり食べられなくても仕方がないか」

残念そうな顔のデールには申し訳ないが、断固拒否だ。

「ちようどあと四つ余りがあつただけど……リユカさん、ゲレゲレはケーキも食べられますか？」

「うーん、大丈夫だと思うよ。僕たちと同じものも結構食べてるし……食べないものもあるから、自分で食べていいものとだめなものが分かってるんじゃないかな？」

私は嫌な予感を抱きながら、主に目を向けられて得意げに「にやおん！」と魔物らしからぬ可愛い返事をしているゲレゲレの背を撫でた。

ただ焦がれただけ

さて、デールの優しく臆病な性格ゆえ、オブラートで幾重にも包まれた愚痴をみんなで聞きつつ、ときにヘンリーが茶化したり燃料を投下していく。リュカが優しく寄り添っているのに便乗して、私もデールの不満に寄り添いつつ、不審がられない程度に王妃の情報について探りを入れていた。ゲレゲレはおねむの姿勢だったが、耳だけぴくぴくと動いているので、聞いていないわけではないんだろう。

「それにしても、デール。このケーキ、本当に美味しいな！」

「本当ー。アルマも一口くらい食べたらいいのに。甘いだけじゃなくて、ちよつと苦いけど」

「そこがいいんだろ。大人の味ってやつさ」

くんくんとおいをかいでいたゲレゲレが食べずにおねむの姿勢に戻った時点で、私は一口さえも食べないと心に決めたところだ。にこりと「やめとくね」と再びはつきり告げると、男二人は「もつたいない」といいながら、ゲレゲレが食べなかった一つを二等分しておかわりしていた。デールも自分の分をちみちみ食べながら、「それで、お母さまだったら……」と自分の愚痴の続きを垂れ流していた。うむ。二桁に満たない年齢の子どももしかいないからこんなものかとも思うが、まとまりのない空間である。

私がデールへ適当に相槌を打っていると、扉が控えめにノックされた。

「楽しんでいるところ、すまない。私に用事があると、王に呼ばれた。しばらく部屋から離れるが、そのまま部屋にいるようにな」

パパスさんだ。午前中の稽古のこともあり、私はもしかしたら今後の子どもたちの教育方針についての話かもしれないと思った。「いつてらっしゃーい」とみんなで送り出す。パパスさんが離れるなら、たとえ少年たちが今のうちに抜け出そうと提案しても、何としてでも丸め込んで部屋から一步もでないようにするだけだ。必要があれば、さざなみの歌で眠らせればいい。

ところが、その必要はなくなつた。おそらく、午前中は勉強返上で稽古を続けていたのだろう。ヘンリーが目をこすりはじめたからだ。

「なんか、眠いな……おい、デール。悪いけど、オレ昼寝するから、時間が心配なら帰っていいからな……」

ふわあ、と大きなあくびをしたヘンリーが、ベッドに向かつてふらふらと歩きます。

「ふわあ……ヘンリーがお昼寝するなら僕もそうしようかな……」

眠そうにするリュカを見た私は嫌な予感がして、「それなら」と椅子の下にある隠し階段の方をちらりと見やる。この部屋には、普段使われる出入口と隠し階段の二つ、侵入経路がある。窓もあるのでいざとなればそこから飛び降りることもできるが、一階ではない分、気軽な方法ではなかつた。

「デール様はどう？　ねむくない？」

そう聞けば、デールは首を振る。

「ボクは大丈夫だよ。アルマは？　侍女に頼んで時間を見てもらつて、みんなでお昼寝にする？」

「わたしも大丈夫。もしねむいなら、私が時間を見てるから、ねてもいいよ」

ヘンリーが疲れていて眠くなつただけならいい。親しい人のあくびは伝染するというから、リュカがそれにつられて眠くなつただけなら、問題ない。

けれど、嫌な胸騒ぎがする。そして何より、今まではそういった兆候はなかつたけれど、「そういう可能性がある」ことを私は知っていた。すなわち、王妃からの害意悪意により、ヘンリーの誘拐が企てられていることを。

「うーん……せっかく兄さまの部屋に遊びに来れたから、寝るのはなんだかもつたいないな。アルマ、お話ししようよ」

デールは私より一つ年下だが、王妃の熱心な教育もあつて、現代日本でいえば就学前の身でありながら、さまざまな学習をしている。私は興味本位と「デールがこの部屋にいるのならば荒事は起こらないかもしれない」という希望のもと、この世界の地理や、王宮での礼儀作

法など、デールに教えてもらおうことにした。

時間にして三十分から一時間程度だろうか。私と話をしていたデールが、目をこすり始めた。

「ふわあ……なんだか、ボクも眠くなってきたみたい。アルマ、やっぱり部屋に戻る時間までに起こしてもらってもいい？」

「うん、分かった。おやすみ、デール様」

私はすぐさまゲレゲレに「パパスおじさんに届けてね」と手紙を書いて渡した。あのケーキ、やはり何か薬が盛られていたとしか思えない。ケーキを食べていない私とゲレゲレだけが起きていたという状況が何より怪しい。二人が早く眠ってしまったのも、おかわりをしたからと思えば説明がつく。しかも、デールは二人よりも食べるのがかなり遅かった。

一番気になっているのは、本来一つだけ食べたときに効果が出るのが三十分から一時間程度だとしたら――。

「ゲレゲレ！ 行って！」

私の怒声で、ゲレゲレは扉を荒々しく開けた見知らぬ男を押し倒しながら、廊下を走る。そう、もちろん、「敵」は薬が十分効いてきた頃合いを見計らって突入してくるに違いない。今、そうなってしまったように。

「くつくつく、運が悪かったなあ、お嬢ちゃん。大人しく眠っていりやあ、怖い目にも合わずに済んだってのに」

人数は四人、そのうち一人、ゲレゲレに押し倒された男は打ちどころが悪かったのか、ありがたいことに意識を失っている。リーダーっぽい男は邪魔が入らないようにか、扉の鍵を後ろ手に閉めてしまった。私は見知らぬ男の言葉には答えずに、開いた口で歌を紡ぐ。

眠りを誘う、さざなみの歌。無防備に歌を聞いてしまった男たちが眠りかけたにもかかわらず、リーダーっぽい男が他二人を剣の鞘で殴り打し無理やり起こす。自身も口から血を流していることから、痛みで眠気を吹き飛ばしたようだ。

「ツチ。面倒な子どももいたもんだぜ」

手の内が一つバレてしまった。次に歌おうとしても、相手は警戒し

てくるだろう。無防備な相手と、警戒している相手では歌を聴かせる難易度が全然違う。で、あるならば攻勢に転じるべき。敵はヘンリーを攫えば勝ち。私は眠っている三人の少年を守り切らなければならぬ。そんな悪条件だが、負けるわけにはいかなかった。

「近寄らないで！」

そう言つて、稲妻を呼び出す。

「お前らの父親のせいで、こっちは早くしろつてせつつかれてるんだよ！」

直撃。だが、怯んだ手下と違って、リーダーの男はまっすぐにヘンリーを狙う。ただ、ここで攻撃の手に転じるのは悪手。

「させない！」

二度、三度、室内に雷鳴が轟く。マリベル様が扱うジゴスパークのような凶悪なものではないが、人体にとつては確実に脅威となる攻撃のはずだ。

「ガキが……予定変更だ、王子を攫うのは、てめえを殺してからにしてやるぜ！」

焦げ臭いにおいの誘拐犯が、剣を抜いてこちらに向かつてくる。部下は倒れていて、もはや動ける状態ではなさそうだ。

——大丈夫、怖くなんてない。

私は、自分よりずっと強い魔物だつて相手にしてきた。それはもちろん、守ってくれる誰かが、補助してくれる誰かがいて、安全な状況にしてもらつてのことではあつたけれど。でも、だからこそ、私はこんなやつらになんて負けたくない。

「稲妻ツツ!!」

私の呼び掛けに反応して、室内に再三轟いている小さな稲妻が、誘拐犯の身を焦がす。まだ倒れてくれない。それなら、倒れるまで何度だつて——。

刹那、扉がぶち破られて、ゲレゲレとパパスさんが部屋に雪崩れ込んできた。

油断はできないのに、口からはほつと息が漏れる。ぎろりとパパス

さんは誘拐犯を睨み、それから素早い動きで誘拐犯を鞘に入ったままの剣で殴打した。すぐに昏倒した誘拐犯たちの様子を見て、私の体から力が抜ける。ゲレゲレが近寄ってきて、「にやうん」と愛らしい声をあげながら、心配そうな表情で私の頬を舐めた。

「よく耐えてくれた、アルマ。怪我はないか？」

衛兵がぞろぞろと部屋の中に入ってきて、誘拐犯たちを連行する中、パパスさんが私を抱き上げながらそう聞いてきた。私は彼の分厚い胸板にもたれかかり、「ない」と短く答えた。

「何よりだ。疲れているところ本当に済まないが、少しだけ話を聞きたい。大丈夫そうか？」

「うん。あ、えつとね、ゲレゲレに手紙を届けてもらったんだけど……」

「ああ。確かに受け取った」

手紙には、咄嗟だったこともあり「ヘンリーさまのへやにきて。なにかへん」としか書けなかった。それでもこうして駆けつけてくれて、本当にありがたい。

「私としても、謁見の間に行ったものの、どうにも衛兵から伝え聞いていた話と噛み合わなくてな。妙な胸騒ぎがしたんだ。この部屋で起きたことを教えてくれないか？」

「うん。あのね、王妃様にもらったケーキを食べながら、みんなでお話してたの。わたしはお腹いっぱいだったし、ゲレゲレもいらなかったみたいで食べなかったんだけど。しばらくしたら、みんなが眠いて言い始めて三人とも寝ちゃったの。……いやな感じがしたから、わたし、おじさんに手紙を書いて、ゲレゲレにとどけてねって渡したの。そうしたら、知らない人たちが入ってきたの。王子をさらうって言うてた。早くしろって言われてるって」

「誰に、『早くしろ』と言われたのかは言っていないかったか？」

「言ってなかった……。ごめんなさい、わたし、今話したことくらいしか、分からないの」

そう言うと、パパスさんは私の頭を撫でて、「いいや、それで十分だ」と優しく声を掛けてくれた。ぐっすり眠っている子どもたちを起こ

した。パパスさんは、私を抱きかかえたまま、みんなをぞろぞろと引き連れ、説明もしないまま謁見の間へ向かった。

「王よ、話がある」

厳しい表情でそう言ったパパスさんに、衛兵からヘンリーの部屋に誘拐犯が侵入し、捕えたことを聞かされていたのであろうラインハット王は、同じく厳しい顔で頷いた。寝ぼけ眼だった少年たちは、ただならぬ雰囲気の大人たちに怯えるように、そつと身を寄せ合っている。

「この子たちの身の安全を確保したい。事が起こった以上、私は彼らから離れない方がよいと思っっている」

「わしとしても同意見だ」

「下手人は『王子の誘拐』を目的としていたそうだ。ならば、デール殿下もこれからはヘンリー殿下の部屋で寝泊まりし、まとめて護衛させてもらえるだろうか」

「そんなー」

悲鳴を上げたのは、青白い顔をした王妃だった。王の側に控えていたようだが、ドレスを皺になるほど握りしめて、怒りのような絶望のような、ともかく尋常じゃない形相でパパスさんを睨みつけている。

「デールは母親であるこの私が守ります！」

「しかし、今回のようなことが起こったときに、武力行使をされればあなたに王子を守る術はないのでは？」

「衛兵がいます！」

「部屋を守っていたはずの衛兵はいなくなっております。もはや、この城のどこに敵が潜んでいるとも分からないのですぞ」

パパスさんと王妃の睨み合いを終わらせたのは、ラインハット王だった。

「パパスの言う通りであろう。デールはパパスに任せることとする」

甲高い声で悲鳴を漏らした王妃は、感情的に一步前に出て、きれいに整えられた頭をぶんぶん横に振る。

「陛下、そんな、やめてくださいまし！ デールは私といれば安全なのですよー！」

「ほう？　そこまで言うなら、デール殿下の安全を保障できる理由があるはずです。お聞かせ願えますか？」

「それは……っ！」

あまりに失言。王妃は悔しげに唇を噛み「わ、私の傍には近衛がついております。この城で最も腕の立つ者たちですわ」と苦しい言い訳をした。

それを認めなかったのは、やはりラインハット王だ。王妃がどんなに泣こうが、喚こうが、デールが私たちと寝食を共にすることになるのは変わらなかった。デール本人はおろおろしていたが、王の強硬な姿勢と、パパスさんの厳しい表情、取り乱す王妃の様子を見て、何かを感じ取ったのだろう。物憂げな顔をして俯いてしまった。

「パパスや。わしは少し王妃と話がある。何かわしから話があるときには、これからはそちらへ赴くこととしよう。あるいは、子どもらも同席させる。それでよいな？　ヘンリー、デール。それからリユカにアルマ。これからは悪戯と外出は控えるように。どこかへ行きたいときは、必ずパパスを伴うのだぞ」

リユカとヘンリーは顔を見合わせた。真剣な顔で頷いていた。何が起こったのかまだ把握していなくとも、普段と違いすぎる空気は肌で感じているのだろう。

「おい、そろそろ話してくれよ。何が起きたんだ？」

みんなでヘンリーの部屋に戻ると、困り顔の部屋の主がパパスさんにそう尋ねた。

「殿下たちを狙った不届き者が侵入しました。誘拐が目的のようでしたが、『運よく眠らなかつた』ゲレゲレが私を呼び、アルマが誘拐犯を食い止めてくれていたおかげで、大事には至りませんでした。やつらを退けたからと言って、到底安心できる状態ではありません。誘拐犯は何者かに指示されて事を起こしたようです。根本を断ち切らねば、城内でも安全とは言い難いでしょう」

「ゆ、誘拐!？」

「アルマ、怪我はないの!？」

未だに抱えられたままの私は、声を荒げたヘンリーとリュカにへらりと笑みを向けた。

「うん、ゲレゲレがすぐにパパスおじさんと呼んでくれたから」

「……それって、その、お母さまのせいなんですか？」

デールが暗い顔のまま呟く。パパスさんは私を下ろし、それからしゃがんで、デールへと視線を合わせた。

「それは分かりません。誘拐犯については、兵士たちが今、いろいろと聞いていることでしょう。気になることは多いとは思いますが、殿下はどうか、御自分の安全を第一にお考えください」

「そうだけ、デール。お前だって被害者だったかもしれないんだ。義母上が関係してるかどうかなんて、まだ誰にも分からねえ。悪戯も外も釘を刺されちまったが、せつかくだしお前も訓練に加われよ。みんなでやったら楽しいこと、いっぱい見つけていこうぜ」

弟を気遣ったヘンリーが、努めて明るい様子で手を差し出す。うるんだ目でそれを見つめたデールは、差し出された手を両手で握りしめ、ぐずぐずと泣いた。

「もし、お母さまのせいだとしたら、ボク、お母さまを許せません……ボク、ボク、みんなのことが、もちろん兄さまのことだって、大好きなのに……！」

「ああ、オレもだぜ。義母上が今回のことに何も関わってないことを祈るよ」

弟の肩を優しくさすってやりながら慰めるヘンリーは、すぐに白い歯を見せて笑った。

「にしても、この部屋も狭くなっちゃったなあ！ はは、これなら王子の部屋なんかに見えねえや！ いっそのこと、みんなで小間使いの服でも来て、使用人ごっこでもしてみるか？」

「ヘンリー、似合わないさそうだね」

「うるせえ！ リュカなんて似合いすぎて本物の小間使いに間違えられそうなくせに！」

わちやわちやと少年たちが仲良く喧嘩をしているのを見て、デールがふつと笑う。

「ふふ、それならボクも、リュカさんみたいに小間使いに間違えられちゃうかも。兄さまと違って、ボクは平凡な茶髪だから……」

「おうー。お前らまとめてみーんな、オレの子分で小間使いだ！ ざまーみるー！」

何がざまーみるなのかは全然分からなかったが、少年たちは楽しそうに笑い合っている。私は疲れていたもので、その様子を見ているだけにしたのだった。

*

王様は子どもたちが寝静まったところに部屋を訪れて、その日のことをパパスさんに報告している。こそこそと小さな声だが、他に聞こえるのは子どもたちの寝息くらいなので、何を話しているのか、内容は分かった。

たとえば、誘拐犯が「王妃に頼まれた」と口を割ったけれども、当の王妃はそれを否認。誰かが自分を陥れようとしているのだと、頑として聞かない。王妃が関与したとした明確な証拠が、誘拐犯の証言しかないこともあって、今は部屋に軟禁状態で、他に何か分かれば牢に入れるとのことだった。

しかし、王様も一応王妃のことを愛しているのか、それともただの情なのか、「できれば強硬な手段は取りたくない、自供して反省してくれば」と甘ったれたことを言っていた。それから、このような事態を招いたのは、はつきりしない態度を取り続けた自分のせいなのだと。

初めから次期国王はヘンリーに任せたいと思っていて、それなのにデールを王に据えたい王妃に毅然とした態度を取ることができなかった、と。

私は眠りが特別浅いタイプでもないが、一度偶然起きたときにこういったやり取りを耳にしてしまったことをきっかけに、次の日も寝たふりをして耳をすませるようにした。それがほとんど毎日行われていることなのだと分かり、一応自分のためにも起きていられるときは

こっそり聞くようにしているのだ。

まあ、最近は王様のうじうじした悩み相談というか愚痴みたいになってるので、そろそろ聞かなくてもいいかな、とは思いついてる。事態が進展しないので、毎日報告することはそれほどないのだろう。パパスさんによるカウンセリングが行われているだけだ。

とりあえず、王妃が軟禁されていて、城内に不審な影はなし。城に入り込んでいた柄の悪い連中も、いつの間にか姿を消していたようで、ラインハット城にはびこっていた不穏な空気はなりを潜めていた。

ただし、人の口に戸は立てられず。隠しているとはいえ誘拐犯のことや、彼らと王妃につながりがあるらしいことは城内の人々だけでなく、城下町でも噂になっているようだ。城には毎日王妃に責任を取らせるべきだという抗議をしに来る人々が詰めかけている。

城の雰囲気とは、今までとは違う意味で良くない感じになっているのは少年たちだって気が付いていた。最近といえば、稽古や勉強の他、自由時間は遊びという名のデールを励ます会を開いている。チェスをやったり、パパスさん監督のもと鬼ごっこをしたり、その日彼がやりたい遊びをするのだ。勝ち負けがあるものについては罰ゲームがあることもある。

負けた者が必ずしも罰ゲームを受けなければならないわけではなく、罰ゲームを受ける条件は遊ぶ前にくじで決めていて、結果がはつきりしたらくじを見て誰が罰ゲームをやるのか知る、という形を取っている。体力勝負な遊びはデールが負けやすいし、小賢しさでなんとなかる遊びでは手を抜かない限り私が圧倒的勝率を誇っているため、偏りを無くそうというわけだ。

さて、そんなこんなで、表面上は穏やかだけれど、根本の問題が解決していないままに城内に流れる空気は微妙なまま、数日が過ぎた。「パパスや、聞いてくれ。いや、もう噂になっているかもしれないが……」

真夜中。うとうとしていると、今日も今日とて王様が部屋を訪れ

た。この時ばかりは一国の王という仮面を捨て去り、いつもうじうじした様子の王様は、いつもよりもさらに沈んだ様子で、小さく小さくパパスさんに話し掛けています。

「あの日、この部屋を守っていた衛兵と、そなたに虚偽の招集をかけた衛兵をようやく捕まえた。彼らは一様に、『金のために王妃の言うことを聞くしかなかった』、『誘拐ではなく、あの悪戯ものの子どもたちを少しこらしめてやるだけだと聞いていた』などと、王妃に指図されて行ったことだと口を割ったのじゃ」

「それは……」

「二人とも、伏せがちな年老いた母親がいたり、小さな我が子が大怪我をしたりして、多額の治療費が必要だったそうじゃ。それを知った王妃にそそのかさされ、『怪しいやつらを手引きする』、『決められた時間にパパスを呼び出す』、それだけやれば莫大な報酬をやると、そう言われておったそうだ」

「王妃の処遇はどうするのだ」

そういえば、二人きりのときに、パパスさんは王様へ敬語を使わない。いつものカウンセリングとは違い、厳しい口調のパパスさんに、「我が友よ」と王様は疲れ切った、掠れた声で返答した。

「あれを牢に入れる。王子たちを慕っていている民衆にも示しがつかぬ。それに、国民が汗水たらして納めている税金を悪事に使おうなど……許されることではないのじゃ。そうする他、なかるう」

それから、王様は昔話をし始めた。ヘンリーのお母さんが亡くなって、本当に悲しかったこと。幼いながらに母親を喪つても気丈に振舞う息子の聡明さが、余計に痛々しくつらかったこと。その姿から目をそらしていたときに、天真爛漫な現王妃に癒されたこと。気は強く思い込みは激しいものの、はつきりした性格で、落ち込んでいた王を打算なしに励ましてくれたこと。かつてはその容貌の美しさも相まって、太陽のようだと思つたこと。

しかし、デールが生まれて「我が子を幸せにしたい」という思いが悪い方向に働いてしまったこと。以前はあつた思いやりも、「デールのため」を理由に、他者の迷惑や不幸を考えなくなつてしまったこと。

それを知っていながら、見てみぬふりをしてしまったこと。

聞いていて、悲しくなった。王妃はもちろん、王様に対しての憤りはある。けれど、そうではない。私はヘンリーやデールのことを考えて、この一件があの子の心に傷を負わせることになる——あるいは、既にそうなってしまうことに対して、ただただ、悲しくなったのだ。

同じころ、真夜中。王妃はぶるぶると震えながら寝室にいた。自らの寝室とはいえ、あまりに落ち着かない。部屋を固めている衛兵の人数は多く、しかも自分の息が掛かっていない者たちが厳選されている。軟禁状態ではやることもなく、娯楽もない。少しでも、部屋の外では何が起きているのか確かめるために、常に耳をそばだてていたが、果たしてよかったのか、悪かったのか。

——明日、私の運命は終わるのだわ。

確かに聞いてしまった。ヘンリー王子誘拐のために利用した者たちが捕まり、自分を黒幕だと話していたと。誘拐犯だけならば、まだ良い。しかし、多方向から証言が集まってしまえば知らぬ存ぜぬは意味を成さない。王は、彼女を明日牢に入れるようだと、兵士たちは言っていた。

——それもこれも、全部あのパスとかいう男のせいよ。

あの男が来なければ。誘拐を邪魔したあの男の娘も、変な猫も憎らしい。ふつふつと己の中に沸き上がる憤怒と共に、じわりと滲む悲しみ。

——陛下は、私のことを嫌いになってしまったのかしら。

情けないやつだと思った。すばらしい王であるともてはやされていたものの、亡くなった妃の喪に暮れるばかり。政務はこなしていたようだが、あまりに覇気のない状態に、イライラさせられた。貴族の娘であった王妃は、ふん、と鼻を鳴らし、そんな情けない王が中庭をぼうつと眺めているときに、嫌味を言ってやったのが、出会いだった。

情けなくて、うじうじしていて、けれど誰よりもこの国のことを考えていた王が、こんなことをした自分を好きでいてくれるはずがない。そもそも、自分を妃とした後も、あの人はどこかで、前妻を想っていた。

だから悔しくて、絶対に息子のデールを即位させてやると思っていた。自分はその女よりも上なのだ。死んでしまったから、本人とはもう比べようがない。その息子に、自分の息子が打ち勝てば、あの女よりも自分は愛されていたと言えるはずだと思った。だって、父親なら、より愛している方の息子をこの国の主にしてくれるはず。

——結局、何一つ、勝てやしなかった。

あの人は、あの女の死を悲しみはしても、自分を牢に入れることは厭わない。はつきりしてしまった、残酷な現実。だから、王妃は声を押し殺して涙を流した。

「ふっ……うぐっ……ううっ……」

熱いしずくが、枕を濡らし、やがて頬を冷やしていく。この世はなんとままならないのか。どうして、どれほど愛をささやかれても、抱きしめられても、満たされないのか。なぜ見えないものを求めてしまうのか。絢爛豪華なあれこれだって、デールに求めた「次期国王」だって、愛を確かめるためのバロメーターだった。なのに、求めれば求めるだけ、何かが遠ざかる。こちらを見てほしくて何を言っても、彼を悩ませるのは国の行く末と、悪行三昧の長男ばかり。

「みじめですねえ」

知らない声が、間近から降ってきた。彼女はひとつ息を吐く。生来の気の強さから、見栄を張るのは得意だった。

「無礼者、何奴です。衛兵は一体何を？」

涙をぬぐって、被っていた布団を退ける。まだ牢に入れられていない、罪状を言い渡されていない彼女は、まだ「ただの王妃」だ。その寝室に忍び込むなど、許されるはずがない。あるいは、兵士たちが乱心し、牢に入れられる前に不貞を働くつもりだろうか。

しかし、侵入者を睨んだ王妃は思わず息を呑んだ。

「衛兵たちには少し眠ってもらいました。あなたに話があったもので

すから」

紫色のローブを目深に被ったその姿は、長身の魔術師にも思える。しかし、そうではないことは明らかだった。不気味な黄色の目。あまりに禍々しい雰囲気。魔物であろう、ということは察しがついた。城の結界をもものもしないほどの、強力な魔物だ。

「お可哀想に。あなたはただ、幸せになりたかっただけなのでしょう？」

その目に見つめられていると、頭がぼうつとする。王妃が好んで焚いていた香にも似たような効果があつた。嫌なことを忘れさせてくれる、甘美なおい。それを嗅いでいる間は、現実のことを考えなくてもよく、いつの日か常に焚くようになった魔性の香。そういえば、あれはいつ、誰が最初にくれたものだったか。

「そう……私、幸せになりたかっただけ……」

「だが、あなたは明日には冷たい牢の中だ。ああ、こんなことが許されて良いのか！」

鼓膜を揺らし、脳内でガンガンと反響するその声に共鳴するように、王妃の口から言葉が漏れ出る。

「許されていいはずが……ない……私は、私はこの国の王妃なのよ！」

じわじわと憤りが、絶望が、胸に広がっていく。

「そう、あなたは王妃です。牢だなんて似合わない。すぐにはできませんが、私が解放して差し上げましょう」

「今すぐここから連れ出してはくれないの？」

「そんなことをすれば、あなたの汚名は永遠にこの国に残るでしょう。牢に入った後なら、どうとでもできる。それに何より、事前準備は大切なことなのです」

そうか、と王妃は納得した。たしかに、牢に入った後なら身代わりを立てるなりして脱獄してしまえば、自分は無事だ。服装が違って、少し遠くへ逃げれば、誰も自分のことなんて分らないだろう。しかし、今逃げてしまえば「王妃が罪を認めて逃げた」ことになる。逃げた罪人を野放しにしておくような王ではない。あの真面目な男の性を彼女は誰よりも理解しているつもりだ。

「そのためには、まず、あなたの邪魔をした者たちがどんな人物だったのか教えてほしいのです。それから、この城の兵士のことも」
「分かったわ」

口を開く。この城を守る兵士たちのこと。あの忌々しい田舎者丸出しの戦士、その息子と娘、連れてくる変な猫のこと。それからもちろん、憎らしいヘンリー王子のこと。

「同じ部屋にいる、私の息子のデールは茶髪の幼い男の子です。ヘンリーは緑の髪。絶対に間違えないでちょうだいね」

「ええ、覚えておきます」

「ヘンリー、忌々しい子……あいつさえ——」

——あの女さえ、いなければ。私は幸せになれたのに。

「ほっほっほ、お気持ちは十分伝わりました。では、少しお待ちいただくことになりましたが、必ずあなたを解放するとお約束しましょう」

「ええ、必ずよ」

「もちろんです」

いつの間にか、王妃は眠っていた。昇った朝陽の眩しさに目を覚ましたとき、なぜだか妙に、自分があの太陽とは遠い存在となってしまうのだと感じた。

別れへの呼び水

王妃が牢へと捕えられて、落ち込みの激しいデールを励ますために、私たちは城下だけでなく、近隣の散歩へ出掛けるようになった。まあ彼にはまかり間違っても言えないが、王妃という黒幕が捕まったので、安心して外へ出掛けられるようになったこともある。もちろんパパスさんにはついてきてもらっているし、この辺りの魔物なら、私はもちろん、リユカもゲレゲレも、本気を出さなかったって勝てる程度には強くなっていたから、王子二人の安全はある程度確保できるし、室内でふさぎ込むよりよっぽどいいだろう。

「帰りたくない」

その日は午前中から出掛けることになって、関所の橋の上でお弁当を食べて帰ってくるルートだった。デールが海を見てみたいと言ったので、南へ遠回りをしてから城に戻る予定だったが、相も変わらず暗い顔でデールがそんなことを呟いた。

「ボクに帰る資格なんてないんです……！　だって、だって、お母さまはボクのために悪いことをして、捕まったんだ！　なのにボクだけが、なんにもなくて、楽しく遊んでるなんて、そんなの……許されるはずがない！　もともと王さまになんかなりたくなかったし、ボク、ラインハットの王子なんか生まれなきゃよかった！　そうだったら、お母さまもボクを王さまになんてしようとしなかったはずだし、こんなことにはならなかったんだ!!」

目に涙を浮かべながら叫んだデールを見て、ヘンリーが顔を青ざめさせて、息を呑んだ。パパスさんはつかつかと静かに少年に歩み寄り、ぱちん、とその左頬を打つ。もちろん本気ではないが、デールの白い肌はみるみる赤くなった。

「そのようなこと、間違ってもお父上の前では言われませぬよう」

誰にもそんなことをされたことがないデールは、呆然と自分の頬を両手で押さえ、パパスさんを見上げている。

「あなたがお生まれになったとき、どれほどの者が喜んだことでしょ

う。もちろん、あなたが王子だからということもあるかもしれない。しかし、何の掛値もなく『デール』という子どものかけがえのない命を見守っている者もいるのです。愛する我が子がそのようなことを言えば、親は悲しく思います」

パパスさんはしやがみこみ、デールと目線を合わせた。それからふつと微笑む。

「人は間違い、過ちを犯すものだ。だが、だからこそ、人は正しくあるうともがくものでもある。全ての過ちを拒み、否定し、目を逸らしたままでは、生きてはゆけない。時にはそれを受け入れることもまた必要なのだ。デール、お母上のしたことは確かに悪いことだが、そうではない側面も見てやってほしい」

パパスさんの大きな手が、デールの頭を優しくなでる。もともとデールの目に溜まっていた涙は、堤防が決壊したようにぼろぼろと大粒のしずくとなって落ちていく。

「君はたしかに、自分で『お母上が自分のためにしたことだ』と言ったな。人の感情とはかくも難しい。誰かのためと思ってしまったことが誰かを傷つけ、何の意図もしなかったことが、誰かを救うこともある」
「う、うええ……」

「幼い君には、確かにつらいことだろう。だが、君はたしかに、お父上にとって大切な息子のひとりなのだ。どうか、同じようにつらい思いをしているはずのお父上の側にいてやってくれ」

大きな声で、彼らしくなく泣きじやくるデールは、パパスさんの胸に縋って、わんわんと泣いた。ちなみに、魔物避けの結界が張られた建物の中ではないので、その様子を見ているヘンリーはともかく、私とリユカとゲレゲレは、邪魔しないように静かに静かに魔物を討伐していた。

「ところで、デールにはやりたいことがあるか？」

デールが泣き止んで落ち着き、ラインハットへと戻りながらパパスさんが穏やかな口調でそう問うた。一応王子と護衛という建前があるので今までは剣の稽古のとき以外は敬語を使っていたパパスさんだが、「そうすることが必要だ」と思ったのか、デールに対して砕けた

口調を続けている。

「え？」

「ほら、王になりたくないと言っていただろう。それなら、他にやりた
いことがあるのかと思ってるな」

「えつと……そういうわけではないんですけど、ボク……ずっと、兄さ
まの子分でいたいなあ」

「だ、そうだぞ。ヘンリーはどうなんだ？」

話題を振られたヘンリーが口を開いては閉じ、開いては閉じを何度
か繰り返した後、口を尖らせて、恥ずかしそうに呟いた。

「デールが嫌っていうなら、オレがなってやってもいいぜ、王さま。オ
レの代でラインハットの血筋を途絶えさせるわけにもいかねーし、父
上がせっかく守ってる国をやりたいやつにハイどうぞって渡すのも
癪だしな」

それを聞いたらあのうじうじラインハット王は泣いて喜ぶことだ
ろう。パパスさんがあまりに優しい顔をしていたことに気が付いた
のか、ヘンリーが顔を真っ赤にして、唾を飛ばしながら叫ぶ。

「それを言うなら！ リュカやアルマはどうなんだよ！」

話を振られた私たちは顔を見合わせた。

「僕はお父さんみたいに強くて立派な人になりたい！」

「私はお父さんの船でお手伝いをしたい！」

にこつと笑う私たちに続いて、なぜかゲレゲレが誇らしげに「なう
ん！」と猫っぽい鳴き声を上げていた。一人だけ無駄に照れていたヘ
ンリーは大きなため息を吐き、生意気な感じで肩をすくめ、首を振つ
た。

「お前らなー、今は子どもだからいいけど、そんなんで大人になったと
きにどうやって金を稼ぐんだよ。仕方ないから親分のオレがお前ら
を雇ってやる。リュカはオレの護衛な。まあ、いつかはオレの方が強
くなるけど。で、アルマは……うーん……小間使いでもいいけど、船
に乗りたいたいなら、お前の乗ってる船員まるごとラインハットで召し抱
えてやってもいいぞ」

少年らしい可愛い提案に、私はゆるゆると首を振った。

「ごめんね、ヘンリー。ラインハットまでお父さんの船で来ればいいんだけど、とても遠いから、きつと来れないと思う。でも、もしもマール・デ・ドラゴーンがラインハットに来るようなことがあれば、王様になったヘンリーのお手伝いをしたいって、みんなに頼んでみるね！」

ビアンカとの別れのとくに感じた寂しさのようなのを押し込めて、笑顔を浮かべる。ヘンリーは「遠くても、来いよ。親分の命令だぞ」と口を尖らせていたが、私は曖昧に笑うことしかできなかった。

*

目下の脅威が去ったことと、王子たちのメンタルが大分安定したこともあって、私たちがラインハットに滞在するのも残り一週間となった。サンタローズからランハットは遠くない距離だ。以前言っていたように、パパスさんは旅をひと段落させ、サンタローズで調べものついでにコスタールやグランエスタードの情報を集めてくれるらしい。

暇さえあれば、たとえばパパスさんが忙しくともサンチョさんを伴ってラインハットれ遊びに来たつていい、とも言ってくれた。初めはこねていたヘンリーもこの言葉を聞いて、渋々納得したようだ。「手紙は絶対に見せ、長くとも二か月か三か月に一回は絶対に見せに来い」など条件は付けていたが、月一と言わなかったのは、彼なりに相手の事情を考慮した結果なのだろう。

久しぶりに悪戯をして回ったり、建設中だという橋を見に足を延ばしたりと、私たちはいろいろなことをしていた。

そんな中、「残り一週間」ということで、特別なことがしたいと言いつたのは、ヘンリーだった。最終日には城をあげてのお別れ会をやるようなので（とはいえ、王妃が罪人として捕まっているのでかなりささやかなものになるだろうが）、そうではなく、子どもたちだけのお別れ会をしたらしく、送り出す側と送り出される側に分かれて、最終日の前日に向けて準備をし始めた。遊ぶ時間も確保してあるが、暗

黙の了解として、お昼ご飯を食べてからおやつまではそれぞれお別れ会の準備の時間ということになっている。

「何かプレゼントはしたいよね。手作りできそうなものとか、あるかな？」

私とリュカは城下町で作戦会議だ。ちなみに、パパスさんは護衛の仕事があるので、送り出される側であるけれども、私たちに秘密を洩らさない約束で、王子たちの側に控えている。一応戦闘ができる私たちは、あまり遠くでなければその辺をふらふらしてもいいことになっているのだ。

「そういえば、前にお針子のおばさんと話をしたときに、王妃さまがいなくなつて、仕事が減つて暇だつて言つてたよ。せつかくなら、何か僕らでも作れそうなものがないか聞いてみる？」

「いいかも！」

きやあきやあ話しながら、城下町を歩く。何かアイディアが浮かぶと良いなあ、と思つてふらついていたのだが、こうなるともう城に戻つて、お針子のおばさんと話をした方が良さだろう。そう思つて城に向かつて歩いていると、ふと城の跳ね橋近くの茂みがかがさ動いた。小動物でもいるのかと思つてちらりと見ると、数人の少年少女たちが、何かを蹴っている。小声ではあるが、「悔しかつたら何か言つてみる！」という言葉も聞こえて、いじめだと判断した私は、無邪気を装つて「何やつてるの？」と声を掛けた。

子どもたちはぎくりとした顔でこちらを見た。王子であるヘンリー、デールはもちろん、彼と一緒に悪戯をして回っている悪童として、私たちもラインハットではそこそこ有名になつてしまつたように、「あ、なんだ。アルマとリュカか」と大人に怒られると思つていたらしい彼らはほつとした顔をする。

「ねえ、何やつてたの？」

「こいつ、汚くて臭いし、なんにも喋らないからいじめてたんだ。ほら、むかつく目でこつちを睨むくせに、何もできない弱虫なんだよー」

げしつと少年が蹴つたのもまた、少年だった。年のころは私やリュカよりと同じくらいか、少し下程度だろうか。薄汚れていて痩せつぽ

ちな様子からは浮浪児にも思えるが、だからと言って不当に虐げている理由にはならない。

「やめなよ」

眉を寄せたリュカがはっきりとした口調で言う。自分のときのことを思い出したのか、普段は子どもに優しいゲレゲレも、「ぐるる」と唸りながら怒り顔だ。

「ちえ、なんだよ、つまんねーの。お前らだつて悪いことやってるくせに、こういうときばっかいい子ぶっちゃってよ」

「わたしたち、人に怪我をさせるようなことはしていないわ。ねえ、大丈夫？」

子どもたちも、王子たちと親交ある私たちには逆らえないと思っ
ているのか、興が冷めたようにぱらぱらと散っていった。虐げられていた少年に近づいた私とリュカのこと、少年はギツと強い眼光で睨みつける。リュカがホイミを掛けても、何も言わないままだ。もしかしたら喋らなかつたのではなく、心身の問題で喋れなかつたのかもしれないと思ひ、私はできるだけ彼を安心させるように笑みを浮かべた。「わたし、アルマっていうの。こっちはリュカ。この子はゲレゲレだよ。あなたの名前が知りたいな。文字は書ける？」

警戒したような表情はそのままに、少年はこくりと頷いた。

「じゃあ、あなたの名前を書いてみて」

そういつても、ぶすつとした顔の少年は何のアクションも起こさない。

「名乗らないなら、トンヌラって呼ぶから。名前がないのは不便だものね？」

「アルマ、トンヌラはかわいいそうじゃないかな。せめてアベルとか……」

パパスさんとリュカのネーミングセンスが親子で違ったことが発覚したが、まあ呼べればどちらでもいい。私は「じゃあ、アベルくん」と名乗ろうとしない少年に呼び掛けた。

「あなた、ひどいにおいよ。体を洗って、着替えた方がいいと思う。ね、こっちに来て」

手を握ろうと思ったたら、避けられた。あれだけ好き放題蹴られていたわりに、「反応は良いようだ。怪我が治ったからということと、私たちが大人数でないことも関係するかもしれないが。」

「体洗いたくないの？　もしかして、水が怖いのか？」
聞けば、さきほどよりさらにムツとした顔で首を振られる。

「じゃあ、体洗いなよ！　お城の水浴び場に案内してあげる。さすがにお風呂は勝手に貸せないけど……」

そう言えば、アベル（仮）は地面に「本当に？」と書いていた。浮浪児だとしてたらしいすぎる文字に面食らったが、そもそも識字率の高くないこの国で、浮浪児が文字を書けるというのもしつくりこない。もしかしたら、王妃にそそのかされて捕えられた兵士の子どもかも、と目の前の少年について想像する。だとしたら非常に複雑な気持ちになるが、まあ、深く考えるのはやめよう。

「本当だよ。わたしたち、お城のみんなと仲良しなの。で、あなたの名前は何に？」

「アベルでいい」と書いた少年の強情さを感じながら、私とリユカは彼が不審人物に思われないように、両側から手をつないで歩いた。声を掛けてきた兵士たちには「新しいお友達なの！」と言えばそれ以上何も言われなかった。彼の出で立ちとにおいに眉をひそめる兵士もいたが「悪戯もほどほどにしろよ」と日頃の行いのおかげで悪戯仲間と勘違いされたようだった。

水浴びは一人でしたいと彼が伝えてきたので、私は部屋に子ども服を取りに行き、リユカとゲレゲレが脱衣所の前で待っているようにした。子どもを疑いたくはないけれど、招き入れた身としては、彼が万が一出来心でお城の物を盗んだり、悪気がなくとも壊してしまったりしないように見張っていた方がいいだろうと思っていたのだ。疑われている当人には「心細いだろうから」と言って誤魔化してある。さっと服を取りに戻った私は脱衣所まで行き、声を掛けて中に服とタオルを置いた。

ほどなくして出てきた少年は、黒髪に紅の目の、小綺麗な顔立ちであることが発覚した。痩せていて子どもらしいぶにぶに感には掛け

るものの、幼いながらに整っていることがはつきり分かるというの
すごい。リユカも整った顔立ちではあるが、やわらかく女の子にも間
違えられる可愛らしさなので、種類が違う。

清潔さとはかくも人の印象を操作するものなのか、と感心しながら、
私たちは雑談しながら城の中を案内してあげた。というのも、彼
が珍しそうにきよろきよろと城内を見ていたのに気が付いたからだ。
もちろん入るべきではない場所もあるので、そういう場所は抜かして
一通り案内し終えると、筆談しやすいように中庭へ行った。リユカは
かなりアベルのことを気に入った様子で、甲斐甲斐しく世話を焼いて
いる。

「アベルはラインハットの子なの？　今まで見掛けたことなかったけ
ど」

兵士の息子だったらやばいなと思って私が聞けずにいたことを、
リユカが純粹無垢な顔で聞いていた。首を振ったアベルは「父の仕事
を手伝いに来た。ラインハットに来たのは初めてだ」と書く。

「へー！　お父さんは何をしてる人なの？」

私が内心で安堵している間に、リユカが質問を続ける。「聖職者」と
いう文字を見て、失礼なことに、彼がもし父親似だったら相当似合わ
ないな、と思った。たしかに整った顔立ちではあるが、聖職者にして
はあまりに目つきが悪い。いや、顔立ちと職業は関係がない。無粋な
想像だった。

「お母さんは？」

少しの沈黙の後、リユカの無邪気な質問に対して「へいはい」と答え
たアベルの横顔は、まだ親がいないことを受け入れられてないのか、
それとも母親の記憶がなくなっていくくらい幼いころに死別したのか、悲しげと
いうよりは無表情に見えた。

「そっか。僕もお母さんいないんだ。おんなじだね」

寂しそうに、けれど微笑んだリユカに、ふん、とアベルが鼻を鳴ら
す。暗い話題になる前にと、私は「アベルくんは何歳なの？」という
実に他愛のない質問をぶちこんだ。アベルは文字は書かず、五指を開
いてみせた。

「五歳かあ。わたしと同じだね！ リユカは六歳だから、アベルくんよりお兄さんだよ」

アベルはまた、ふん、と鼻を鳴らし（全然見えない）と書いた。こんな生意気な子が、よく少年たちの暴力を大人しく受けていたものだ。父親が普段から非暴力を口を酸っぱくして言い続けているのだろうか？ にしても、正当防衛くらいはいいと思うけどな。まあ、家庭の考え方はそれぞれだ。彼が何でも暴力で問題解決をするような子であるよりは、よっぽどいい。

「僕たち、アベルくんのこと勝手に連れてきちゃったけど、お父さんは心配してない？」

五歳とは思えないような、何かを諦めたような顔でふっと笑った少年は、ふるふると首を振った。

（父はラインハットに来てない。父の部下と来たんだ。忙しくて持ち場を離れられないから、どこかへ行くときは部下に行かせるんだ。おれはわがまま言って、連れてきてもらった）

彼が書いた初めての長文を見ながら、大きな教会の神父様とか司教様とかかな、とあたりをつける。ごたごたしていたラインハットの民の心の安定のためにお城の神父様はもちろん、シスターなども城下町に行っていることがあり、忙しそうだから、その応援かもしれない。「ねえ、また明日もこうして話をしようよ。僕、なんだかアベルとは仲良くなれそうな気がするんだ！」

にこにこアベルの手を両手で握ったリユカがそう言うと、言われた当人は目をまんまるに見開いてそれからギツと睨んだ。手を握られている彼は、地面に文字を書けない。なので彼の胸中は想像するしかないのだが、やがて諦めたようにため息を吐いていた。

「リユカ。アベルくんの返事を聞きたいなら、手を離してあげたら？」
「あつ、そうだった」

言われて気が付いたらしいリユカが手を離すと、アベルは（断る）と短く書いていた。

「えー！ なんでさ！ ヘンリーとテールのことも紹介してあげる。みんなで一緒に遊んだり、おやつを食べたりしようよ！」

断られるとは露ほど思っていなかったらしいリユカは、子どもっぽく抗議する。ヘンリーといるときは彼に合わせて背伸びをしているし、デールといるときはお兄さんぶっているし、パパスさんといるときは純粹天使なりユカの駄々っ子姿は珍しい。へおれは忙しいんだ。お前なんかと仲良くする気はない」と書き残して、アベルは逃げるように走り去ってしまった。急に距離を詰めすぎたんだろう。私はそのようなことを言っただけでリユカを慰め、おやつが用意してあるだろうヘンリーの部屋へと向かった。

「どうしてリユカはアベルくんと仲良くなりたかったの？」

「だって……アベルって、いじめられても、全然やり返さなかったじゃないか。睨んだり怒ったような顔をしたりはしてるけど、優しい子だと思う。ゲレゲレが全然警戒してなかったし、それに……なんでか、かまいたくなるんだよなあ。どうしてだろう？」

首を傾げたリユカを見て、「ヘンリーたち兄弟を見て、自分も弟が欲しくなったのでは？」と思っただけで、言わないでおいた。

その日のおやつであるマドレーヌを食べながら、リユカはヘンリーたちにアベルと自分たちが名付けた少年と出会った話をしていた。いじめられていたことや、声が出ないことなどを言えば、デールは気の毒そうな顔をしたが、パパスさんとヘンリーの二人は眉を寄せた。「父親が聖職者で、しかも部下がいるような立場のやつなんだろ？ なんだってそんな恰好を？」

「ふむ……周りに怪しい大人はいなかったのだな？」

「いかなかったと思うけど……もしかして、アベルを疑ってるの？」

二人の反応にむっとした顔をしたのはリユカだ。私はアベルについて、リユカの話に時折補足や茶々を入れるくらいに留めている。

「アベルは良い子だよ。魔物だったらゲレゲレが分かるはずだもんね、アルマも。アベルは怪しくなんてなかったよな？」

「うん」

確かにヘンリーが指摘したようなことには引っ掛かりを覚えるが、私も本人と対峙した身としては、怪しいとは思わなかった。前世の記憶があることも含めて、普通の五歳児よりはいろいろな人たちと知り

合って、関わって生きてきたが、そりが合わない人や危険な人に対して感じるような第六感めいたものは働かなかったのだ。

「目つきは悪かったけど、普通の子だったよ。にらんできたのも、いじめられてたんだから突然声をかけたわたしたちのこと、けいかいしたのは当たり前かなって思うし……」

「お城に入れて、うれしそうだったよね。表情からは分かりにくいんだけど、口を開けてきよろきよろしてたもの」

私たち二人が領き合っていると、疑い深い二人は何やらアイコンタクトをしていた。何を通じ合ったのかは分からないが「じゃ、お前らが帰っちゃう前に、オレにも紹介しろよな」とヘンリーがにやつと笑った。

「うん！ 僕、明日も城下町に行つて、アベルを探してみる！」

リュカは宣言通り、次の日も城下町でアベルを探しに行つた。完璧にヘンリーたちへのプレゼントのことを忘れていそうだったので、私はちよつとした時間にお針子のおばさんのところに、私たちでも作れそうなものはないかと相談しに行つた。構造の簡単な人形やぬいぐるみの作り方を教えてもらつて、それを作ることに決める。リュカには事後報告だ。

今のところ、ゲレゲレっぽい猫のぬいぐるみを作る予定で、それらの生地やたてがみ、目の色を二人のイメージに変えようかと思つている。本人たちを模つた人形は細かい作業が多くなりそうだし、アベルにお熱なリュカは多分、正午からおやつまでの時間を彼のためにつぶしてしまいそうだから、より単純化したぬいぐるみが良いだろうと思つたのだ。

「ねえねえ、アルマも行くようよー！」

「もう、リュカ。このままだとヘンリー様たちへのプレゼント、完成できないうよ」

アベルとは約束をしているわけではないが、主人公の直感なのか、それとも旅をして生きてきた野生の勘なのか、リュカはすぐに彼を見つけた。アベルはちよつと気持ち悪がつていた。しかたがないと思う。

「あ……そうなんだけど……」

リュカはしゅんと悲しそうに眉を下げた。リュカはいつも楽しそうに、アベルに今までの旅や何やらのお愛のない話をアベルに聞かせている。アベルも表面的には嫌がっているものの、根がいい子なのでふんふんと頷いたりわずかに表情を変えたりして、きちんとリアクションを取りながら話を聞いてくれていた。だから余計にリュカが喜ぶ。アベルは自分の話はしたがるらないが、ぽろっと魔法が得意なことを教えてくれた。

「そうだ！ 僕、アベルにもプレゼントを作りたい！」

「えっ！ もう明後日だよ、お別れ会」

「うん。だからね、明日の午後までに頑張って作って、そこで渡すんだ。お別れ会の日はアベルに会いに行く時間はないだろうし、最後の日はみんなでパーティーでしょう？ 僕、がんばる！」

隙間時間を見つけてちまちま縫っていた私とは違い、リュカの方は全然進んでいない。ちなみに、私たちは分業制にしている、最初はリュカがヘンリーへのものを、私がテールへのものを作る予定だったが、それでは「二人から」というよりそれぞれへのプレゼントになってしまう、という気にしいのリュカ坊ちゃんの発言により、同時進行でぬいぐるみの形を作り、完成したものを交換して目や鼻、たてがみなどの飾り付けすることになったのだ。

結局見かねて、私はぬいぐるみを二匹分作成した。飾りつけはリュカに二匹分させた。本人としては満足げに「えへへ、なんだかちゃんと三人に似てる猫になったね！」と言っていた。猫っていうかベビーパンサーのデフォルメだけど、それはもはや猫だな、と思いついた私は素直に頷いた。

さて、簡単にラッピングして、城下町にせつせと出掛ける。明日もラインハットには滞在しているが、アベルに会う時間はない。出掛けて間もなく、リュカの謎の直感力でアベルはやはりすぐに見つかった。

「アベル！」

うれしそうに駆け寄るリュカを見て、アベルは紅の目をまんまるにしながらへもう飽きたのかと思った。と地面に書いた。

「そんな！ 僕たち、明後日サンタローズに帰るんだ。だから、これ、あげようと思って」

ヘンリーとデールのぬいぐるみは黄色の生地それぞれ髪色のたてがみを付けたが、アベルの物は違う。黒の布地に、紅の目、たてがみも黒にした。

「えへへ、アベルのつもりで作ったんだよ。僕たち、きつとすぐにまたラインハットに遊びに来るから。あ、そう言えば、僕のお父さんと友達へのンリーとデールも、君に会いたいわって言ってたんだ。みんなを連れてるときはなんでかアベルには会えなかったから、今度はきつとみんなで会おうね」

そうだった。リュカの変態的なアベルセンサーをもつてしても、パスさんやヘンリーたちを伴ったときには見つけれなかったのだ。まあ、それはいつもの時間とは外れた時間帯なので、そういうもんかと深く考えなかったけど。アベルの話をする時パスさんとヘンリーが胡散臭そうな顔というか、リュカを心配そうな顔で見るので、リュカもアベルの話を彼らの前ではしなくなってしまう。私も一応警戒していた方がいいかと思つてこつそりと勇者様のお守りをアベルに触れさせてみたが、何の反応もなかったから大丈夫だと思つた。リュカの入れ込み方が心配だつていうのは完全に同意するけど。

「アベルも、ラインハットにはずっといるわけじゃないんだよね？ いつ帰っちゃうの？」

私がそう尋ねると、アベルはじつとリュカを見つめて、それから私を見て、最後にゲレゲレを見た。「なうん」と甘えた声で鳴いたゲレゲレを優しい手つきで撫でると、彼は小さく表情を綻ぼせる。それから名残惜しそうに手を離し、指で地面に「明後日の午前中だ」と変わらぬ美しい文字を書いた。

「ええー！ 僕たちよりも早いね。僕、ラインハットに来ればまた君に会えると思つてた……」

しゅんとしたリュカに、アベルは困つたようにへもしまた会うこと

があれば」と言葉を続けた。へそのときはおれの本当の名前を教えるよ、続きを読んで、きらきらと目を輝かせたりユカは、頬を紅潮させて、少年の手を握った。

「絶対だよ！ 約束だよ！ 僕、絶対に君を見つけるから！」

私は見目麗しい少年たちの微笑ましいやり取りを見ながら、「いつもの」と感じ始めた置いてけぼり感を味わっていた。うん、いいんだ別に。

白い魔法

子どもだけのお別れ会は、みんなでプログラムを考えて、朝から行われた。これがまた私たちらしくて、午前中はトーナメント形式の決闘を行う。これを提案したのはヘンリーだ。優勝者はパパスさんに挑むことができ、もしも勝つことができたならパパスさんを子分にできるんだとか。当然、パパスさんがそのまま戦ったら勝てるわけがないので、ハンデとして彼はその場から一步でも動いたら負けということになっている。最後の最後で、なんとかしてリユカとパパスさんに勝ちたいということなのだろう。

体を動かしてお腹が空いたら、ご飯の時間だ。ご飯はそれぞれの食べたい物を厨房にリクエストしてある。一息ついたら、今度は悪戯の作戦会議。最後の最後に、私たちが仲良くなれたきっかけでもある悪戯の集大成を見せてやろうじゃないか！ ということらしい。しかも、その日に計画してその日に実行しなくちゃいけないから、すぐく頭を使うし、協力しなくちゃいけない。

悪戯が終わったらみんなでお風呂に入って洗いっこをする。大きな浴槽ではしたなくばしやばしやと泳いだり、お湯を掛け合ったりして思いつきり遊んだ後は夕食。それも終われば次はダンスの時間。明日もダンスはあるけれど、形式ばったやつじゃなくて、好きなように踊ってやろう！ とのことらしく、演奏もなし。楽器は自分たちでタンブリンやマラカス、鈴なんかを手を持ちながら誰かの歌に合わせて踊るのだ。

そして最後にプレゼント交換。余すことなく楽しむための一日だった。

最初の決闘は、厳正なるくじ引きで決めた結果、デール対私、ヘンリー対ゲレゲレ、シードがリユカとなった。まあ、特筆すべき点もなくデールには勝った。彼はまだまだ体の使い方から勉強中の身だ。一応実戦経験もあり、船乗り職をマスターしている身である私として

も手加減をしても余裕をもって戦えるのでありがたい。

初めて稽古に加わったときには「女の子のアルマにも勝てないなんて……」とすぐく落ち込んでいたデールだが、懇切丁寧に生育環境が全然違うことと、別に人それぞれだから落ち込む必要はないことを伝えてあげていたら、徐々に気にしなくなっただのか、思い切りよく勝負を仕掛けてくるようになった。稽古の終わりはリュカとヘンリーの戦いだけでなく、私とデールの戦いまで追加されてしまったのである。そのため、今回の敗北にも、デールは気落ちしすぎることはなかった。

さて、ヘンリーとゲレゲレの戦いでは、ゲレゲレはすばやい動きでヘンリーを翻弄していたが、悪知恵の働くヘンリーが勝った。ゲレゲレの集中を逸らすために猫じゃらしのようなものを使ったり、マヌーサをうまく使ったりして生来の能力差を埋めることに成功したのだ。ゲレゲレは身体能力が高いし、さらに訓練された魔物であるので、普通に戦えば厄介なはずである。ヘンリーの剣術が上達していることもあって、小器用な戦い方にもバリエーションが増え、型通りで隙がない剣術と、持ち前の機転を活かした形の勝利となった。

シード枠のリユカとは私が戦う。と言うのも、ヘンリーはたった今戦い終えたばかりなので休憩をはさんだ方が良いだろうとの判断からだ。

「アルマ、いなずまを使ってもいいからね」

対峙するなり、リユカは真面目な顔でそう言った。当然、私はふるると首を横に振る。

「使わないよ」

「本気でやってくれなくちゃ、つまらないよ」

本気でやると皿の破片を投擲するという殺傷沙汰になるのでできません。

「私も、いなずまに頼らずどこまでできるか確かめておきたいし」

ともあれ、そんな戯言は聞かせる必要がない。私は稽古用の剣を構える。非力な私でも扱えるように、細身の模擬剣だ。

「やああー」

開始の合図をパパスさんに出され、先手必勝とばかりに私はリュカへと突進した。

体の身軽さは私の方が上でも、年齢的なこともあり、素早い動きができるのはリュカの方だ。向かってくる私をひらりと避けて、隙ありとばかりに彼は剣を振りかぶった。ただし、その動きは予想済みだ。私はくるりと体をひねってリュカの攻撃をかわし、勢いをつけて足払いを掛ける。

「わっ!?!」

そう来るとは思っていなかったのか、リュカは体勢をくずした。しかしながら間一髪のところまで避けられ、そのまま一撃くらわそうと下方から上方へ剣を薙ぐが、これも避けられた。ううむ、基本性能の差か。ガツチガチに守りを固めてもらっていたとはいえ、こちら辺りもさらに強い魔物と戦っていた（成果は特にないが、経験としてはある）私であるので、さすがに悔しい。私だって魔物ひしめく海をシャークアイ様と一緒に航海したいのだ。人魚のままでも、アニエス様に好きなききに会いに行きたいのだ。勇者様たちが暇なときには一緒に遊びたいのだ!

「つと!?!」

私が煩惱に思考を投じている隙に剣を構えたリュカが、油断なくこちらへ一閃。もちろん、まともに食らっては痛いだけなので、スピード感にヒヤツとしつつも避ける。

「アルマ、何考えてたの?」

「ないしょー!」

カンツと模擬剣が合わさる。鏢迫り合いでは負けるので、どうにか向こうの力を利用したいところだけれど、中々タイミングがつかめない。睨み合うリュカと私。ふいに、リュカが何かに気付いたように視線を逸らした。何事かと私も彼の視線を追うと、手首に激しい衝撃。剣を弾かれ、取り落としてしまった。

——フェイント!

リュカが全くやらなさそうな戦法だった故に、疑いもせずにならされてしまった。丸腰になった私に、リュカは複雑そうな顔で剣を突

き付けた。審判のパパスさんが「勝負あり！」と宣言する。

「リュカがあんな手を使うなんてな」

「あんな手？ アレは……」

勝負を終えたりユカにヘンリーが笑いながら話し掛けた。リュカが何かを言い掛けたときに、デールが「あつ」と声を上げる。ラインハット王が、中庭に訪れたのだ。

「父上ー」

兄弟の声が重なると、彼は初めて会ったときより幾分やつれた顔を綻ばせた。いろいろな心労がたたってか、ここ最近は何にも見えて顔色が悪いが、息子たちを前に気弱な姿は見せられないのだろう。王妃が牢に入れられてからは、ますます公正で厳格な父親として振舞っていた。

「すまぬ、邪魔をしたか？」

「いいえ！ ちようど今、アルマとリュカの試合が終わったところです」

「お父さま！ 次は兄さまとリュカさんの試合なんですよ！ 一緒に見ましよう！」

まだまだリュカの方が強いが、小器用になってきたヘンリーも少しは勝てるようになってきただけあり、デールは「すごい試合になるはずです！」と鼻息を荒くしていた。

「ああ、じゃあ、そうするでしょう。……ゴホッ」

私があっさりやられてしまったので、休憩もさほど挟まず、リュカとヘンリーの試合はすぐに始まった。ラインハットに来てからほとんど毎日戦ってきた二人だ。互いの癖はよく知っている。じりじりと近づきながら、先に攻撃を仕掛けたのはヘンリーだった。

いつかの時とはちがう、冷静な一太刀。リュカはそれを正面から受け止め、ふつと負けん気の強い笑みを浮かべる。

「力比べで僕に勝てると思ってる？」

「ばあか、思ってるよー」

ぎりぎり正面に掛けていた体重を横へ逸らし、リュカが体勢を崩すのを狙ったヘンリー。先ほどの罅迫り合いのとき、私がやろうとし

てフェイントを食らったやつだ。

「おらっ」

重心が移動した流れで回し蹴りを放つヘンリー。力はリュカに劣るが、体の使い方はどんどん上手くなっている。リュカは体をひねって衝撃を殺そうとしたけれど、完璧とはいわずに表情が歪んだ。

体の使い方だけではない。ヘンリーは感情の抑え方も上手くなった。以前だったら、手も足も出なかったリュカに一撃を食らわせたから、それで満足して次の攻撃がおろそかになったり、すぐに慢心したりして、その隙をリュカに叩かれていた。以前なら一撃食らわせた喜びで、そのまま考えなしに大振りで雑な攻撃を畳みかけようとしていただろう。けれど、それが少なくなった。

二人の戦いは長引いた。臨機応変型のリュカは、ヘンリーが機転を利かせて戦っても、持ち前の身体能力と勘とかそういうので対処してしまう。肩で息をする二人を見ながら、太陽が真上にきていたのに気が付いて、もうすぐご飯の時間だな、と思った。

「ヘンリー。きみ、強くなったね」

リュカがそう呟くと、ヘンリーがぎりぎり聞こえないくらい小さな声で、何かを呟き返す。何を言ったのか、リュカが目を見開いた。ヘンリーの青い目がざらりと光る。

「っらあああああー！」

雄たけびと共に、剣を振りかぶる。リュカが怯んだ一瞬の間に、ヘンリーは親友の肩口から脇腹に掛けて斜めに振りぬく——と思わせて、手首に力を込めて無理やり軌道を変え、リュカの首筋に突き立てた。

「勝負ありー！」

「いっつう……」

声を漏らしたのは勝利したヘンリーだ。無理な動きをしたせいで手首を痛めたのかもしれない。一応。パスさんにホイミを掛けてもらっていたが、お昼になったことと、念のためということもあり、パスさんへの挑戦はいつかラインハットへ戻ってきたときに延期することとなった。

ご飯を食べてヘンリーの部屋に行き、午後からの悪戯の内容を考える。一番最初に案を出したのは、意外にもデールだった。

「あの……お父さまに悪戯を仕掛けませんか？」

私たちはさすがに王様に悪戯を仕掛けたことがない。友達の父親だとしても、一国の王に対してそんな無礼すぎることをしてみようという発想がそもそもなかった。ヘンリーだって、私たちと出会う前から悪童と有名だったが、さすがの彼でも王様に悪戯をしたという話は聞いたことがない。やっぱり、父親だとしても「王」という肩書がある分、悪戯をするのはためらってしまうということだろうか。

まあ、勇者様の親友であるグランエスタードの王子様は、王様に対してさんざん悪戯をしていたらしいが、何もかもを手放しても、自分の行く道を選んだ人だと聞いたので、常識にはしばられない人なのだろう。

「お父さま、最近無理をしてるように思います。だから、ボク……お父さまを元気づけられるような、そんな悪戯がしたいんです。兄さまたちの試合を見てるとき、お父さま、本当にうれしそうだったんです。ボクたちは王子で、お父さまは国王だけれど……でも、普通の、親子なんだって、そう思ったんです」

ぎゅつと己の拳を強く握ったデールは、目に涙を溜めていた。「王子になんて生まれたくなかった」と叫んだ彼である。幼いながらも様々な感情が胸中を行き交っているのだろう。そんな弟の頭に、ヘンリーがぼんつと手を置いた。

「スツゲー良い考え！ 父上に悪戯なんて、考えたこともなかったぜ！ まあ、周りに悪戯して父上を困らせてやろうと思ったことはあるけど……」

最後の方はもによもによと彼らしくなくハッキリしない言葉だったが、それでも、白い歯を輝かせて弟に笑い掛ける。

「みんなで父上をびつくりさせてやろう！ こんなのはどうだ？」

作戦はもちろん、パパスさんにも内緒だ。私たちはまず、手分けして厨房と衣裳部屋、それからリネン室へ行った。私とリュカとゲレグレが材料調達、ヘンリーとデールは根回しだ。

「おやつの時間に合流した私たちは、マカロンを食べながら首尾はどうかお互いに確認し合う。もちろん、全員抜かりないようだった。ペロりとマカロンを平らげた私たちはこくりと頷き合い、ヘンリーが横柄な口調で、「パパス！　パパスはいるか!!」とどたどた部屋の外へ出た。もちろん、パパスさんは部屋の扉の前で控えていたので、すぐそこにいるに決まっている。」

「どうした、ヘンリー。何かあったか?」

「『何かあったか?』じゃない!　アルマが変な魔法を使って、デールを女の子にしちまつたんだ!　お前、保護者だろ!　責任取れ!!」

衣裳部屋から借りてきた可愛いふりふりの子ども用メイド服を着たデールは、顔を真っ赤にしながらくすくすと泣いている。正直非常に似合っていて可愛い。何も知らない少年とかが見たらうっかり初恋の相手になってしまいそうなくらい可愛い。

「ぼ、ボク……うう、こんなの恥ずかしいです……」

「ご、ごめんなさいパパスさん……わたし、こんなことになると思わなくって……マリベル様に聞いたことのあるまほうを使おうとおもっただけなの……!」

正直吹き出しそうになるのを堪えながら、必死で俯く。顔を上げたら笑っているのがバレてしまうからね、しかたないね。

「……………すまないがデール、服を脱いでもらっても?」

「馬鹿野郎!　デールは女の子になっちまったって言ってるだろうが!　こんな往来で服なんか脱げるか!　ちよつとは考えて物を言えよな!」

あからさまにしらーつとした顔をしているパパスさんに、ヘンリーが激昂した様子で答える。演技が上手い。大きくなったらその道でも食べていきそうな感情表現だ。

「しかし、責任を取るにしても状況を確認しないことには……」

「うるせー!　オレたちは部屋で待ってるから、父上にこのことを伝えに行け!　早く行けよ!!」

我儘王子に命令されたパパスさんは「やれやれ」と肩をすくめながら謁見の間へと向かっていった。王様は執務室にいるときと謁見の

間にいるときが多いが、この時間なら謁見の間にいるだろう。

「よし、パパスは追い払ったぞ。こっからが正念場だ」

リユカと私とゲレグレが、ひよいっとヘンリーの部屋にある隠し階段を下って、準備の最終調整を進めていく。リユカは機嫌良さそうに、「僕、アルマとの戦いのときによそ見したでしょ？」と手を止めないまま話し掛けてきた。

「あれね、別にフェイントのつもりはなかったんだ。アベルに呼び掛けられた気がしたんだよ」

「あつ……そうなんだ……うん……よかったね」

私は彼の将来が心配になりつつ、当たり障りのない返事をした。確かにアベルは美少年だけどさあ！

*

仕込みを終えてヘンリーの部屋へ戻る途中、王様を伴ったパパスさんとぼったり遭った。

「なんだ、みんなと一緒に部屋で待っているのかと思ったぞ」

「お父さんたち中々来ないから、待ちくたびれたんだよ」

「そうそう。わたしたち、お城の人にまほうのこと書かれてる本がなにか教えてもらってたの。デールのこと元に戻す方法のことは書いてなかったけど……」

悪戯を繰り返すうちに、ピユアという言葉が人間の形をしていたリユカも少しは人間（というかまんま悪戯小僧）になり、さらつと方便を使うようになった。私はそれに便乗して、しゅんとした顔を作ってみせる。

「ふむ……すまん、少し、王と一緒に明日の話をしていた。午前中にちよつとした別れの会を開いてもらえることになっていたらどう？
食事を済ませて昼過ぎにここを経つ予定だと、出立の最終確認をしていたのだ」

どうせデールのことは本気にとらえられていないから、子どもたちがいない間に、牢に入ってから、すっかり大人しくなってしまうたら

しい王妃の話をしていただろう。出立の確認なんて、ここを発つ日が決まったときにあらかたしてあるはずだ。

ともかく、二人をヘンリーの部屋の中に入れる。私はそっと、パパスさんの手を握った。

「おじさん、もしこのままデールが女の子のままだったら、わたしのせいでわ。そしたらわたし、ちゃんと『せきにん』とつて、デールが戻るまで、ラインハットにいる！」

「ええ!？」

私の発言に声を上げたのはリユカだった。ヘンリーとデールは目を合わせて、ぽかんとしている。

「アルマ。あのな、もしラインハットを離れたいんだとしても、すぐに遊びに来れる距離だ。なんなら、サンタローズで馬に乗る練習をすればいい。そうすれば、歩いて来るよりずっと早く……」

「ハーツハツハツハ！ そりゃいいな！ アルマ、ずっとこの城にいるよ！ デールも女の子になって、心細いだろうからな！」

パパスさんが眉を下げて私を説得しようとする中、子どもたちの中でいち早く復活したヘンリーはお腹を抱えて大爆笑をしていた。

「そ、そんなのいやだよ！ アルマは僕と一緒にサンタローズに帰るんだ！」

「ばあか。アルマ本人が残りたいて言ってるんだ。本人の意思を尊重しようぜ」

「ばかはヘンリーの方だよ！ ばか！ いばりんぼ！」

「なんだどう!? お前なんか子分クビだ！」

「最初っから子分になんてなったつもりはないよ！ ヘンリーが勝手に言っただけじゃないか！」

「や、やめてよ二人とも……」

私がつめらいがちに言うと、女の子の服が似合すぎていているデールが、「あの！」と声を上げた。ちなみに、目まぐるしい展開に大人たちは置いてけぼりである。

「アルマ。本当にボクが女の子のままだったら、ラインハットに残つてくれるの?。」

「え？ それはもちろん、わたしのせいだし……」

「だったらボク、男の子になんて戻らない！」

「そ、そんなのダメ！」

リュカが叫ぶと、デールはひらりと軽やかな動きで部屋にある椅子をどけ、隠し階段の扉を開ける。魔法なのかからくりなのか、扉を開けると普段は隠されている階段が出現し、下りきると元のように収納されて下からは上れないようになっていている仕掛けのものだ。

「絶対もとになんて戻らない！」

「待つてよ、デール！ そんなの許さないぞ！」

階段を駆け下りたデールを追いかけたリュカ。私は困り顔を作ってパスさんの手をきゅつと握る。ちなみにゲレゲレはあくびをしていた。自由なやつめ。

「へへっ、面白くなってきた。父上、オレたちも追い掛けましよう！」

ヘンリーが王様の手を引き——それから、階段の真上から父親を突き落とす。

「スカラー！」

階下からリュカの声が聞こえ、階段を転げ落ちる寸前だった王様の体を、暖色の淡い光が包み込む。とはいえ、物理的な衝撃に強くなるだけで、力の方向を変えられるわけではない。

「ヘンリー！ なんてことを！」

「大成功！ だな！」

パスさんが悲鳴のような声をあげ、私の手を振りほどき、階段の下を覗き見る。そこには、衣裳部屋から運び込んだ、ヘンリーとデールが今よりもっと幼かったころに着ていた大量の衣類や、リネン室から持ってきたまくらが敷き詰められていた。ご丁寧にそれらの上には小麦粉がまぶしてある。落下した王様は、階段からの衝撃はリュカのスカラに守られて怪我は少しもないが、その先で待ち受ける小麦粉にまみれて全身真っ白になっていた。なんてことだ。一体だれがこんなことを。

「ハッハッハ！ どうだ父上！ オレがあなたに悪戯なんて仕掛けるわけがないと思っただろう！」

「うふふ、ボクの演技もなかなかだったでしょう?」

「それを言うなら僕だって、ハクシンの演技つてやつだったよ!」

けらけらと笑い始めた少年たちを見て、パパスさんが私を見た。

「……えへ?」

私はとりあえず、首を傾げて笑って誤魔化す。パパスさんが子どもたちに雷を落とそうと口を開くより早く、ラインハット王は粉まみれ子ども服まみれ、使用済みまくらまみれで、お腹を抱えて笑い始めた。「こりや、してやられたわい! 全く、なんたる悪戯鬼共か! げほつげほつ……このわしに悪戯を働こうとは!」

「ふふふ、お父さま。これでは国王の威厳も台無しですね!」

「そうだな、すぐに風呂に入らなくちゃ!」

「そういえば、そろそろボクたちもお風呂の時間ですね!」

「おお、そうだったな我が弟デールよ! いや、今は『我が妹』か?」
「どうやら魔法を解くカギはお父さまの笑顔だったようです。なんだかもう、男の子に戻っている感じがします。確かめるためにも、みんなでお風呂に入りましょう!」

悪戯のとき同様、アドリブを利かせてはいるけれども方向性はブレないセリフをノリノリで紡いでいく王子たち。ゆつたりと階段を下りてきたヘンリーを見て、体勢を立て直した王様が「ときにヘンリーよ」と穏やかな声で呼び掛けた。

「そなたは友を得て、本当に明るく、たくましくなった。この父にもっとよく顔を見せておくれ」

「そんな……へへ、照れるぜ。それもこれも、パパスをオレの護衛にしてくれた父上のおかげです!」

「デールも。気弱そうだったそなたが、今では立派な悪戯小僧じゃ。二人とも、わしも年だのう……涙でよく見えん……もつと近くへ」

うれしそうな兄弟が王様にててつと近寄る。あつ、と思つた時には、二人は「年老いた」と自称するわりには素早く、力強く伸ばされた王の腕に捕えられた。

「この父に一杯食わせるとは! なんとという息子たちか! 仕返しじゃ!」

大人げなく息子たちを小麦粉まみれにする王様を見て、パパスさんはやわらかな笑みを浮かべた。私たちも階下へ行くと、親子でもみくちゃしている王族たちに「お前らも来い！」と誘われる。

「いやいや、父子水入らずの最中だろう。私たちは遠慮して……」

「行け！ ゲレゲレ！」

ヘンリーのきびきびした命令に、ゲレゲレが反応する。渾身の力でパパスさんの背中にとびかかったゲレゲレに続き、私とリュカの二人でタイミングを合わせて、さらにパパスさんの腰にタックルする。見事、パパスさんは小麦粉の海に倒れたのだった。

「リュカ、アルマ」

真つ白な顔で、パパスさんにはやりと笑った。

「サンタローズに戻ったら稽古は今の倍厳しくしてやる」

私とリュカは聞かなかったふりをした。

みななどお風呂に入りながら、他愛もない話をする。ラインハットに来て驚いたこと、楽しかったこと、怖かったこと、悲しかったこと、いろいろな思い出話を。

「オレたち今まで、たくさん悪戯してきたけど、今日のが一番楽しかったな！」

「真つ白になった王さま、おもしろかったね」

「メイドたちがここにこしながらか片付けはやってくれるって言って、よかったですよね。本当はボクたち、片付けも自分でするつもりだったんです」

「そうそう。準備のときはゲレゲレががんばってくれたのよ。力持ちだから、まくらとか小麦粉とか、たくさん運んでくれたの」

「あつ、父上！ 城のやつらも協力してくれたけど、処罰なんてやめてくれよな！ みんな『父上の息抜きになれば』って言って協力してくれたんだ」

矢継ぎ早に交わされていく子どもたちの会話に、大人たちが呆れたように顔を見合わせた。

「馬鹿者。灸を据えるのはおまえたちだけじゃ。そもそも、城の者たちは『王子に命令されただけ』、そうであろう？」

「えつと……うん！ そうなんだよ！ オレとデールが命令したんだ！」

さつき堂々と「協力してくれた」と言ったのは聞き流してくれたらしい王様が、ヘンリーの緑色の髪と、デールの茶色い髪をがしがしと乱雑に撫でる。

「して、誰がこのようなことを考え付いたのじゃ？」

「へっへっへ、聞いて驚くなよ。デールなんだ！ デールが、父上に悪戯をしようって言ったんだよ。もちろん、作戦はみんなで考えたけどな」

デールは一瞬慌てた様子で口をぱくぱくさせたが、すぐににんまりと笑い、胸を張った。

「ボクだって、兄さまの弟ですからね」

まだまだ話し足りない様子の兄弟であったが、のぼせてはいけなからとお風呂からは出ることになった。夕食のときにも話す時間はたくさんあるから、ということ、大人たちに促されたのだ。たくさん笑ったからか、お風呂で温まったからか、王様の顔色はずいぶん良い。

夕食もダンスの時間も、飛ぶように過ぎて行ってしまった。私たちは始終笑い合い、語り合い、それから手を取った。遅くなる前に、楽器は迷惑になるからとメイドたちが片付ける。ほどよく疲れた体のまま、私たちは部屋に戻った。

「これ、二人で作ったんだ」

リュカはヘンリーに。私はデールに。作ったぬいぐるみを差し出した。ラッピングのリボンをしゅるりと解いて、袋からそれを取り出した二人が、むずがゆそうに笑う。

「なんだ……その、似るもんだな」

「うん。ボクと兄さまって、すぐに分かる」

「大切にすると声を揃えて言った兄弟は、今度は私たちにきれいに包装された小包を差し出した。さっそくリュカが包装を破いて中身を取り出すと、ヘンリーが頬をかきながら、照れ隠しなのか口を尖らせながらぼそぼそと呟いた。

「お前の、ベルトじゃなくて腰ひもだろ。剣を留めるのに、そっちの方が便利かと思つて」

リユカに渡されたのは細めの革ベルトだ。裏にはこっそりと文字が刻印してある。

「あー、それは後で見ろよな！ 今とはとにかく、付けてくれよ」

私たちが文字を見ようとすると、慌てたヘンリーがリユカの手からベルトを奪い、甲斐甲斐しく付けてあげている。

「ふふ、ボクと兄さまからのメッセージです」

デールがばちん、とウインクをしてきた。続いて私も包装をはがす。中身は革の土台にレース生地がはりつけられたヘアバンドだった。

「可愛い！ ね、ね、似合う？」

簡単にハーファアップにしてきつそくつけてみると「似合うよ！」と少年たちが口々に褒めてくれた。ちよつと気分が良い。

「大切にするね、二人とも！」

お礼を言い合つて、その日は眠つた。明日は出発だ。その前に、大人たちが企画してくれたお別れ会もある。だから、ちやんと早く寝て、明日のお別れ会もしっかり参加して、それから元気にサンタローズへ戻るのだ。サンチョさんにヘアバンドのことを自慢しよう。それから、ちよつと凶々しく、このヘアバンドに似合う、可愛い服を買いにか縫うかしてもらおうのだ。

罪過あふるる

まだ朝陽が世界をうすぼんやりと照らす時間。私はリュカに体を揺すられて起きた。瞼をこすりながら「どうしたの？」と尋ねれば、彼は口元に指を当てて「アベルに会いに行こう」と言ってきた。お別れ会の間はお城から抜け出すのはさすがに失礼だし、それが済んだら城下に寄る暇もなくサンタローズへ出発することになる。旅慣れているとはいえ、子ども二人を連れた道中だ。慣れている道、良く知った魔物しか出ないところとは言え、早めに到着してゆつくりしたいという。パパスさんの気持ちも分かる。

「しかたないなあ……」

私はヘンリーやデールを起こさないように身支度を整え、ふにやふにやと寝ぼけながらも私たちのやり取りで目を覚ましたゲレゲレを伴い、こっそりと城を抜け出した。

「この時間だと、お城の跳ね橋は上がったままだと思うけど……」

「前にお城を探検したときに、イカダがあったのを見つけたる？ それを使えばいいんだよ」

「二応、みんなに心配されないように手紙だけは書いておくよ」

私はさらさらつとへ友達にお別れをするために、城下町に行ってきます。朝ごはんまでには戻りますと書いて、机の上に置いていった。

さて、衛兵たちは私たちに声を掛けてきたが、こそこそ行動する様子に「最後の最後まで悪戯か」と思ったのか、「ほどほどにな」と言うくらいで、部屋に戻そうとはしなかった。

無事に城下町まで来ると、きよろきよろとリュカが周囲を見回す。

「アベル！」

私は、この少年たちの間に働く見えない力に若干慄きながらも、町の隅、木々が生えているあたりに立っていたアベルに笑顔で彼に駆け寄りリュカの後ろを追った。

〈来るような気がしていた〉

「僕も、会えると思ってたよ！」

地面に書かれた文字をうれしそうに見つめたリュカは、そう言葉を返す。

〈逃げる〉

「え？」

アベルが、真剣なまなざしでリュカを見つめた。その透き通った赤い双眸には、困惑したりユカの顔が映っている。

〈おれの本当の名は、アダム。父は光の教団の教祖だ。この国は、教団の擁する魔物に襲われる〉

「よう——何？ それって、どういう意味？」

擁する、という言葉自体を知らないらしいリュカが眉を寄せた。

「本当なの？」

私は、彼が書き記す文字を見て、喉がからからに乾いていくのを感じた。

そんな、だって、人攫いだって、王妃だって捕えられた。中で手引きする人間でもいなければ、町や城に張られた聖なる結界のおかげで、邪悪なる者は簡単には中に入れないはず。弱い魔物なら紛れ込むこともあるかもしれないが、明確に害意をもって入り込むことができるのは、結界の力を凌駕するようなすごい力の持ち主や、人間に化けることができたり、結界の力を魔法であやふやにしたりできるような魔物くらい。だから魔物は基本的に人里には入ってこないし、入ってきたとしても撃退できる範囲なのだ。と勇者様が教えてくれた。

〈本当だ〉

「それならあなた……」

魔物なの？ と聞こうとしたときだった。

——振り向いてはいけない。

ぞくり、と肌が粟立つ。

「ほっほっほ。お喋りなのは関心しませんねえ、アダム」

振り返るな、振り返れ、と本能が相反する警鐘を同時に鳴らす。理性が現状を把握しろと叫ぶ。背後に、何か、いる。

「おまえがセントベレス山を下りたいと言うから、『口を開かない』ことを条件に連れてきてやったというのに。おまえは懇切丁寧に言葉の意味を説明しなければ、その真意が分からないのですか？」
「……教団の目的は王族の子どもだけだ。こいつらは関係がない。だったら別に、見逃したっていいだろ」

初めて聞いたアダムの声は、幼いながらに硬質な響きをもって、鼓膜を揺らした。

「ど、どういうことなの。僕、全然分からないよ……！」

「ほっほっほ。可哀想に。何も知らなければ、こんな恐怖を味わうこともなかったでしょうに」

怯えをはらむ、リュカの戸惑った声。返された不穏なセリフに、私は恐怖を振り払って背後を振り返る。想像した通り、そこには紫色のローブを身にまとった魔物が不気味に笑っていた。

「おや、立ち向かおうというのですか？ 中々に勇敢な娘です」

「リュカ、ゲレゲレと一緒にお城の人たちにこのことを伝えて！」

「あ、アルマは?!」

「いいから早く！」

早口にまくしたてた私は、リュカを城と城下町を隔てる用水路に思い切り突き飛ばした。私たちがお城から脱走する経路に使った場所だ。「ゲレゲレ！」と私が叫べば、彼は情けない声で一鳴きしたあと、リュカと同じく用水路に飛び込んだようだった。視線は魔物から外していないので、聴覚情報に頼る形になるが、無事に城までたどり着いてくれたらいいなと願う。

「うーん、なんとという素晴らしい友情でしょう」

おそらく、わざと私たちの行動を見逃していた魔物を睨みつける。にたにた笑いは腹立たしさよりも、得体の知れない恐怖を一層覚えさせる。一体どうして。王妃が捕まれば安心だと思ったのに！ これまで、平和で楽しく、安心して過ごしていたのに！ なんだって今日なのか……なんだって、この国なのか！

「ゲマ！ さつきも言ったはずだ！ こいつらは王族なんかじゃない！ 教団にとって必要なのは『王族の子ども』だろう!?!」

「しかし子どもは使い道がある。奴隷にでもしようかと思っ
たが……何やらこの娘、いやな気配がしますねえ。ここで始末して
おこうか、もつと恐怖と絶望を味わわせてみるか……悩むところ
です」
短く息を吐く。アベル——アダムは先ほど、「魔物に襲われる」と書
いていた。それはつまり、子どもを攫うだけではないということ。
ヘンリーとデールを攫うために、邪魔する者たちを殺して回るとい
うことだろうか。

「勇敢な娘よ。良いことを教えましょう。魔物はまだ来ません。
なに、少し野暮用があるもので、それを済ませてから呼び寄せよう
としていたのですよ」

「ゲマー！ いい加減に——！！」

「アダム。ピーちくぱーちくとさえずられては耳障りです。お喋りな
おまえには『こう』してやりましょう」

「——！！」

ゲマが指を鳴らして、私を挟んで対峙しているアダムに何かをし
た。しかし、私はその様子を確認するために振り返ることすらできな
い。この魔物から目を離れた隙に何が起こるか分かったものではな
いからだ。

「そう。魔物はまだ来ません。だが、すぐに来る。なぜなら、『おまえ
が招き入れたから』。愚かなおまえはアダムに手を差し伸べた。城の
結界を見つけるために忍び込むはずだったアダムに、城を案内した。
魔法の力を感じ取るのに長けているアダムは見事我らを阻む結界の
核となる位置を発見し、私に報告した。ゆえに、このラインハットに
はいつでも魔物が攻め入る準備が整っているのです」

「な……」

思考が上手く働かない。アベルは良い子だった。優しい子だった。
リュカのこと、鬱陶しそうな顔をするくせに、ちゃんと話は聞いてあ
げて。ゲレゲレには優しい目を向けて。勇者様のお守りだって、反応
しなかった。

——世界が違うから、勇者様の力が届かないだけなの？

それでも。そうだとしても。リュカが懐くアベルのことを、私は信

じたかった。ぽろり、と泣くつもりなんてないのに、目から勝手にしずくが溢れ出る。

「我々にとつては僥倖でした。しかし——そうですね。あの少年が『魔物を送り込んだのは光の教団だ』と伝えてしまうのは少々困ります」

「私の、私のせいだとしても……私のせいだとしたら！」

叫ぶ。リユカは死なせない。あの子はこの世に光をもたらす存在だ。死なせるわけにはいかない。私の知っている物語と変わってしまった今、魔物にとつて不都合な真実を彼が大人に伝えかねない今、奴隷になるという保証はどこにあるだろう？ 命だけでも助かるなんて、どうしてそんなことが言えるだろう？

「稲妻っ！ 稲妻あつ！ 稲妻あああつ!!」

呼び掛けに答えた雷鳴が、魔物を貫く。しかし、にたにた笑いは変わらない。

「ふむ、興味深いですね。『雷鳴を呼ぶことができるのは勇者のみ』……おまえが勇者とは思えません。なぜそんな芸当が？」

「稲妻！ 稲妻！ 稲妻！」

誰か、誰か気付いてくれ。パパスさん。王様。兵士さんたち。誰でもいい。誰でもいいから、異変に気が付いて。脅威が迫っているのだと知って。そして、一人でも多く逃げてほしい。私のせいだとしたら、私は逃げない。逃げてはいけない。そんなことでは、私の大切な多くの人に顔向けができない。

——勇者様。

「ふむ。回数を重ねると少しばかり厄介ですね」

——勇者様。

「その力は興味深い。気が変わりました」

——勇者様。お願いです。

「アダム、その娘を見張っていないさい。余計なことをするようであれば……おまえがイブールの息子であろうと、関係はない。娘もろとも、首に死神の鎌を掛けることとします」

——世界を隔ててるとしても。あなたのその力で、どうか、どうか。

「ひう」

眼前で、魔物の姿がぶれた。何をされたのか分からないまま、私の視界は暗転する。

「私は野暮用を済ませてきます。アダム、頼みましたよ」

——どうか、いつもそうしてくれたみたいに。私に力を貸してください。

用水路でもがいていたりリユカは、すぐに城の兵士に見つけられ、ゲレグレと一緒に保護された。少年は目に涙をたたえながら、「アルマが危ないんだ！」と叫ぶ。その形相にただならぬものを感じた兵士は、すぐさま近くにいた者に、パパスを呼びに行かせた。すぐに現れたパパスに、リユカが途切れ途切れに、アベルに会ったこと、アベルは光の教団の教祖の息子で、本当はアダムということ、教団が魔物を連れてきて、この国を襲うと教えてくれたこと、逃げろと言ってくれたこと、ヘンリーとテールが狙われているらしいこと、恐ろしい魔物が現れて、アルマが自分を用水路に突き落として逃がしてくれたことを語った。

「その話が本当ならば……すぐさま王子たちを避難させねば。なに、魔物が襲い掛かろうとも、兵士たちは優秀だ。そう簡単に負けたりせんさ。リユカ、お前はヘンリーとテールを連れて、サンタローズへ向かってくれ。ゲレグレも、頼んだぞ」

パパスは道具袋から、キメラの翼を取り出し「あいにく、一つしか手持ちにない」と苦笑った。

「そんな！ 僕、アルマを助きたいよ！ それに、お父さんはどうするのさ!?!」

「私はアルマを助けに向かう。お前にはヘンリーとテールの護衛を頼みたい。キメラの翼が使われたのを見て、魔物が気付かないとも限らないからな。それから、サンタローズについたら、サンチヨに事情を説明してくれ。私からサンチヨへの伝言は『必ず子どもたちを守れ』

だ。今はお前だけが頼りなのだ」

真剣な目で父に見つめられ、リュカは不安と恐怖がないまぜになった瞳で父を見つめ返す。

「お前なら大丈夫だと信じている。アルマは私が必ず守る。どうかこの父を信じて、この大役を任されてくれないか」

「お父さんは、ずるいよ……お父さんにそんな風に言われたら、僕、断れるわけがないんだ……!」

ぎゅつと渡されたキメラの翼を握りしめながら、リュカは「約束して」と、恐怖を押し込め、覚悟を決めた顔で言った。

「お父さんも、アルマも、絶対に無事で、また一緒にみんなで旅をしようね。絶対だよ」

「ああ、絶対だ。約束しよう。では、私は行くとする。いつ魔物が来るかも分からない。リュカ、頼んだぞ」

こうして、親子二人はそれぞれの道を駆け出した。リュカはヘンリーの部屋へ。パパスは兵士に王への伝言を頼み、城の跳ね橋は絶対にあげてはならないことを伝えて、自身は用水路に飛び込む。イカダはリュカとアルマがアベルに会いに行くために使ってしまったので。

息を切らして部屋に飛び込んだリュカに、城内が騒がしいことに気が付いていた王子たち二人は「何があつた」と口々に言った。

「魔物が来る! 僕と一緒に逃げて、二人とも!」

「な!? そ、それが本当だとして、アルマはどうしたんだ!」

「お父さまは知っていますか!? 逃げるなら、パパス先生たちも、みんな……」

「アルマは、僕を魔物から逃がしてくれた。お父さんはアルマを助けに行くつて。王さまは……そうだ、みんなで逃げよう! 謁見の間に行かなくちゃ!」

しかし、慌てた子どもたちが謁見の間に駆け込むと、ラインハット王はすでに武装していて、「わしはここに残る」と説得を試みる少年たちにはつきりと告げた。

「国の主が、国民を見捨てて逃げるわけにもいかぬ。そなたらが生き

残れば、この『戦』は勝ちなのじゃ。どのみち、わしは長くは生きられぬ。ヘンリー、デール。逃げるのだ。そして、必ず生きろ」

「父上！ そんな……っ！ オレたちにお灸を据えるって言ってるじゃないですか！」

「では、灸を据えるでしょう。出て行け、この悪餓鬼ども。このラインハット王を小麦粉まみれにしたのだ。この城から、早く出ていくのだ!!」

「嫌だ！ 嫌だよッ！ 父さん!! オレ、オレっ……！」

泣き叫ぶヘンリーの袖を引いたのは、デールだった。

「行きましょう、お兄さま。お父さま、その『罰』、謹んでお受けします。だけど……その、御武運を。反省したら、すぐに戻ってきますから」

目に涙をいっぱいためたデールは、そう言っただけで力では負けているはずの兄の腕を引っ張る。

「ああ。行っつてしまえ。——とここで、これはわしの独り言じゃが……息子たちよ、愛している。これからも、永遠に」

ぐすん、とすすり泣きが謁見の間こだまする。屋外に出た子どもたちは、みな一様に涙や鼻水で顔を濡らしながら、互いの顔を見て頷いた。

「サンタローズへ、行こう」

キメラの翼を放り投げたりユカは、友人たちと共にラインハットの地を脱出したのだった。

空を駆け抜ける子どもたちの姿を見て、ゲマは黄色い瞳を細めた。方角としては、西。どこへ逃げたのかは分からないが、なんともまあ、手際のよいことだ。そういうえば、キメラの翼が人間たちにとって便利な道具として取引されているのを失念していた。とはいえ、キメラの翼を使っても知らない場所には行けない。使うときには、行きたい場所を具体的に思い浮かべなければならぬからだ。どうせ子どもだ、そう様々などころへは行ったことがないだろうとあたりをつけ、ラインハットの王子たちについては後ほどじっくりこの近辺の西方面を

探せばよいだろうと思ひ直す。

「天空の勇者は、高貴な血を引く」という予言に従って、ゲマの所属する光の教団——正確に言えば、魔王が世界を支配するために動いているその組織は、高貴な血筋の子どもをさらっては奴隷として神殿で働かせて監視したり、ときに処分したりしていた。だが、未だ天空の勇者らしき子どもは見つからない。

雷を呼び寄せたあの少女がそうかもしれないと一瞬考えたが、ゲマとしては「それは違う」と直感を抱いてもいる。

「いつまで待たせるつもりでしたの?」

地下牢。道すがら兵士たちを殺しながらここまで辿り着いたゲマは、姿を見せるなり声を掛けてきた女性に「ほっほっほ」と笑い声を返す。

「申し訳ありません。少々準備に手間取りましてねえ」

「まあいいわ。ヘンリーは? ちゃんと殺したんでしょね?」

「いえいえ、残念ながら邪魔が入りまして、取り逃がしました」

「何ですって!?!」

冷たい鉄格子を両手でつかみながら、女性——ラインハット王国の王妃は、声を荒げた。

「しかし、御安心を。特徴はあなたに聞いておりますし、逃げた方角も分かっています。捕えるのは時間の問題でしょう。それより先に、あなたとの約束を果たしに来たのです」

その言葉に、王妃は少しばかり安堵したような表情を見せた。牢で日々を過ごすうちに、あの日の出来事は夢だったのではないか、自分は騙されたのではないかと疑心暗鬼になっていたのだ。どうやら、約束を果たす気はあったらしい、と目の前の魔物の意外な誠実さに胸を撫で下ろす。

「それで? 私は何をすれば良いのです?」

「そこで見つとしていてくだされば、すぐにも解放して差し上げましょう」

ゲマの杖のような指が、王妃の額に伸びる。変化の魔法でも掛けるつもりか、おとぎ話のような展開に、王妃はそっと目を閉じた。

「え？」

しかし、魔法は掛からなかった。王妃の額には、ゲマの紫色の指が頭蓋を砕いて深く突き刺さっていたのだ。ぐちゅり、と音がする。どうやら突き刺した指で脳髓をかき回しているらしい。

「あなたにとつて、もはやこの世は牢獄のようなものでしょう。そんな場所からは、とつとと解放してさしあげます。死神の鎌は使いませんでしたので、この世への怨念でも無念でも抱いて、世界の闇を色濃くするのに一役買ってくださいね」

指を引き抜く。見開かれた王妃の目は、冷たく暗い地下牢の天井を映していた。

サンタローズでは尋常じゃない様相の少年たちの中に、見知ったリュカがいることに気が付いた門番が声を掛けた。

「リュカ、おかえり。パパスさんとアルマはどうしたんだい？ 二人に何か……」

「ラインハットが大変なんだ！ お父さんとアルマは僕を逃がして……僕、サンチヨにこのことを伝えなくちゃッ！ みんな、来て！」

ハツとした顔つきになったリュカは、わき目も振らずに自宅へと駆け抜ける。ちょうど朝食の時間だ。サンチヨは台所に立っていた。

「サンチヨー！」

「おや。坊ちゃん、お帰りは夕方前と聞いていましたが……ともかく、おかえりなさい」

「それどころじゃないんだ！ お父さんが！ アルマが！」

柔和な顔立ちをしたサンチヨは、尋常じゃない様子リュカとその後ろに続いた見知らぬ少年たちの泣きはらした目を見て、眉を寄せ

る。

「旦那様に何かあったのですね？」

「そうなんだ！ 実は——」

リュカが話し終わると、サンチヨは彼にしては珍しく険しい表情

で、ひとつ頷いた。

「旦那様がついているのなら、アルマちゃんは無事でしょう。ご存知の通り、旦那様はお強い」

「分かってる。だけど、心配なんだ。僕……僕だって戦える。ラインハットに戻って、お父さんの手伝いがしたいよ」

「それはなりません」

ぴしやり。有無を言わせない様子のサンチョに、リュカが目を見開く。彼はどんなときでも優しく、このような物言いをされたのは初めてのことだった。

「旦那様が、このサンチョめに『必ず子どもたちを守れ』と言ったのなら、私はあなた方をラインハットに向かわせることはできないのです」

それから、安心させるようにサンチョは微笑んだ。

「朝からそんなに大変なことがあって、お腹が空いているでしょう。腹が減っては戦もできません」

ほかほかの朝食を前に、しかし子どもたちとゲレゲレは悲痛な表情で俯いたままだった。唯一サンチョだけが、自分で作った食事に手をつけている。

「魔物が来たとしても、狙いが王子様方だというなら、城はあなた方を守りながら戦わなくて良い分、自由が利くはずです。敵の狙いはもうラインハットにはない。ということは、何も考えずに魔物を追い払えばいいだけです。坊ちゃん、胸を張りなさい。あなたは旦那様から任された大役を、見事に成し遂げたのですよ」

「そんな……僕、キメラの翼を使っただけだし……」

「ええ、ええ。だけど他に、それができる者はいなかった。ラインハットのお城で何が起きようとしているのかよく知っていて、旦那様からの伝言を私に伝えることができ、キメラの翼を使ってサンタローズに来て、二人の王子を任せてもいいと思えるくらい信用に足る人物が、他にはいなかったのです」

「……ああ、そうだ。リュカ、ありがとうな。お前のおかげだ」

ぽつり。ヘンリーがそうつぶやくと、ふわふわのパンに手を伸ばし

た。涙を流しながら、けれども用意された食事を口に運んでいく。

「オレ、悔しいよ。自分が弱くて、守られるばっかで、悔しいよ……！
だから、今は待つ。それで、パパスとアルマが帰ってきたら、もっと強くなれるように、誰かに守られなくなつたって、自分で自分のことくらい守れるようになるよ……！」

「そう……そうですよ。ボクだって……ボクだってそうになりたい。
リュカさん、きつと大丈夫です。ラインハットの兵士たちはよく鍛えられているんです。パパス先生には負けますけど、とつても強いんですよ」

涙を溜めながら、デールが無理やりに笑う。それから兄と同じように、自分も無理やり食事を口に詰め込みはじめた。その姿に、サンチヨはそつと涙する。「にやうん」と、ゲレゲレが励ますように、リュカの足に体をこすりつけた。

「僕……アルマのことを守るって約束したのに、アルマに守られてばっかりなんだ」
リュカは俯く。

「サンタローズの洞窟を探検したときも、アルマは道に危険がないか、さりげなく確かめてくれた。あの時は戦いにはあんまり参加しなかったけど、それ以外のことで、いろんなことに気を遣ってくれていた」

自分より一つ年下の少女。年相応の舌足らずな話し方や、甘えた態度を取ることもあるが、きつと本当はすごく賢くて、いろいろなことを考え、行動している女の子。

「レヌール城のお化け退治では、怖がるビアンカに『自分も怖い』って言うって安心させてた。そのくせ、お化けの親分にはすつごく怖がられるくらい強くて。アルマがいなかったら、お皿の上に落つことされて魔物に襲われても無事でいられたか、分からない」

アルマは不思議だった。自分の知らないどこかへ帰るのだと、いつも言っていた。それがリュカには寂しかったけれど、不思議なあの子が語る土地は、人々は、いつも魅力的だった。リュカはアルマが帰ってしまったとしても、いつか絶対に、彼女の話していたコスタールや

グランエスタードへ、彼女に会いに行こうと決めていた。だから、寂しくても我慢して、アルマが帰れるように協力しようと思っていた。だって、自分だったら父親に会えないのはつらいと思うから。

「ラインハットでは、ヘンリーと仲良くなるきつかけをくれた。そのおかげで、デールと仲良くなれた。それだけじゃなくて、こうして、魔物からも逃がしてくれた。アルマがいなかったら、僕、何もできなかった」

だから、信じている。アルマは絶対に帰ってくる。

「僕、お父さんのこと、待つよ。だってお父さんは、約束してくれたもの」

リユカはようやく、朝食に手を伸ばした。その様子を見たゲレゲレも、自分に用意された朝食を口にし始める。全員が食べ終わると、サンチヨは食器を片付けながら、一度子どもたちに二階で休むように声を掛けた。

彼はキメラの翼を使ったことで、魔物に王子たちが避難したことに気付かれている可能性について承知していた。ラインハットへの襲撃がどれほどの規模で行われるかは分からない。それに伴い、王子捜索に割かれる数も不明だ。追手が現れるのに掛かる時間は分からないが、備えはしておかねばならない。

「鍛錬は欠かさず行っておりましたが……」

大金づちを視界に入れながら、彼は呟く。彼とてただの従者ではない。かのグランバニア王の従者である。家事や子守りが得意なだけでは、務まらない。主からの命は、何があろうと、必ず守ってみせる。

微笑みの爆弾

ふと、波の音が聞こえた気がした。しかしここは、私の愛する海ではない。

ゆるりと目を覚ますと、パパスさんの顔が真上にあつた。どうやら私は、パパスさんの腕に抱かれているらしい。

「目を覚ましたか、アルマ」

やけに硬質な声。妙にぼんやりしていた私は、ようやく事の深刻さを思い出した。

「パパスさん……私……！」

「話はリュカから聞いた。その少年のことも」

パパスさんに言われ、私は俯くアダムへと視線を移した。彼は眉を寄せて普段よりは筆圧の濃い字で「魔物は王子たちを追うぞ。もちろん、一緒にいるリュカも」と枝で地面に書きなぐった。

「それでも、ここに留まらせるよりは安全だろう」

答えたのはパパスさんだった。私には、まるで話が見えない。混乱したまま、「みんなはどこに？」と口を挟んだ。

「誰がどこで聞いているか分からない以上、それは話せないが……ともかく、避難させた。アルマは心配しなくていい。あいにく、カメラの翼を切らしていてな。お前はしばらく私とラインハットに留まることになるが……なに、私が付いている。大丈夫だ」

「だめだよ!!」

私は叫んだ。

「逃げた方がいい! あの魔物はだめだ! アダムの声を封じたやつ! どうして私が見逃されてるのは分からないけど……」

城から爆音が上がる。そちらに目を奪われると、アダムがパパスさんの腕を引いて、ふるふると首を振った。

「アンタ、リュカの父親だろう?」

彼は似合わない笑みを浮かべた。そこに表れているのは、間違いなく諦念。私が言うのもおかしな話だけれど、五歳児がするにはあまり

に悲しすぎる表情だ。

「この国になんの関係もないはずだ。逃げた方がいい。アルマの言う通り、ゲマはだめだ」

「なるほど、魔物を率いる大将はゲマというのか」

頷いたパパスさんが私を地面に立たせ、「君は逃げるといい。いくら教祖の息子だとして、戦闘に巻き込まれてしまえばただでは済まないだろう」とアダムへと微笑み掛けた。アダムは口を開きかけ——思い出したように自らの喉を抑えると、顔を歪めて「ばか」と口の形を作った。

「おれは敵だ。事の発端はすべておれだ。逃げるのはそっちだ。おれじゃない」

「たしかに、君は『敵』だ。ここを襲撃する魔物を擁する光の教団の教祖の息子であり、その『手伝いのため』ここを訪れていた。……だが」

パパスさんは膝を折り、まっすぐにアダムの紅い目を見つめた。

「君はリユカとアルマのともだちだ。今なお我々の身を案じてくれる君は、『敵』でありながら『敵』ではない。それに何より、君は子どもだ。大人である私は、君を守る義務がある」

アダムはぎゅつと眉を寄せ、それから決意したように地面に文字を書き連ねていく。

へさつきの爆発はゲマだ。地下牢に侵入する道から、城の結界を崩して魔物たちを手招してる。魔物の襲撃は城の外からでなく、中から始まるんだ。……橋が上がっていけば、城の人間は助からない。橋が下がれば、城下に被害が広がる。もう、どっちにしたって終わりだよ。彼は枝を片手に持ったまま、片手でパパスさんの手を握った。泣きそうな表情で「無駄なんだ」と口を動かすアダムに、パパスさんは強い光を宿した瞳で見つめ返す。

「君は逃げろ」

握られた手を優しく解いて、パパスさんは城下を走って行った。私は呆然とするアダムに一度だけ目を向けて、それからパパスさんの後を追った。

「城には兵たちがいる。魔物の襲撃があることは知らせてあった。内

部からの襲撃とはいえ、多少は持ちこたえられるだろう」

その言葉を信じて、私たちは城下の人たちに避難するよう説いて回った。キメラの翼を取り扱っている道具屋の主人に、緊急事態だからと城下の人たちには無償で配るように伝える。初めは信じていなかった町の人たちも、城の方から聞こえた爆音や、パパスさんの鬼気迫る表情に圧倒され、すぐに避難を開始してくれた。

「おじさん！ 橋が……」

城下の真ん中で避難を指示しているパパスさんの腕を引く。橋が降り、そこから多くの魔物が雄叫びを上げながら城下町へとなだれこんできた。多くの人たちが慌てて避難する中、大切な物やこれから必要になるであろう物をかき集めていた人たちはまだ避難が完了していない。

「アルマ！ 援護を頼むぞ！」

「うん！」

魔物の姿を見て、町の人たちは慌てて自分たちの思い浮かべられる他の場所へと移動し始める。キメラの翼は何人かで一つの消費なので、数に限りがあることもあり、一家庭に一つずつしか配られていない。家中を手分けして荷物を集めていたのであろう人々は、魔物にやられる前にと家族の名前を呼び合っている。

私は稲妻を呼び出したり、石を投げつけたりして主に空を飛ぶ魔物たちの動きを牽制。この魔物たちが先発して城から出てこなかったのは非常に助かった。橋を渡ってくる魔物たちを一網打尽にしているパパスさんの援護として、隙を見て補助のための特技を使っている。

「城の方を見に行くようにしましょう」

城下は閑散としていた。住民はほとんど、避難できたようだった。

「アダムは逃げられたかな……」

ぽつり、呟く。ラインハットがこうなったのは、私のせいだ。私が軽率にアダムを城に招き入れなかったら、こんなことにはならなかったのだ。アダムが光の教団に協力しているのは仕方がない。彼の父親は教祖であり、幼い彼の世界の全ては家族だ。私と違って純粹に五

歳児であるならなおさらのこと。家族のことを信じるのは自然だし、それについて善悪を判断することができなかつたのは仕方がない。それでも、友達を危険に晒してしまつて反省しているような様子が見られるあたり、彼はやっぱり、リユカの言つた通り優しい子だ。

私は彼とは違う。中身は大人で、判断力があつたはずだ。この世界が、じわじわと闇に侵食され始めていることも知識として知つていた。

「アルマ」

パパスさんが城を睨みながら私へ声を掛ける。

「実は、道具屋からキメラの翼を何枚か手渡されている。お前は一足先に避難してもいいんだぞ」

「ううん」

優しさがづらい。これは全て私のせい。であるならば、私は償わなければならぬ。自分のしたこと、きちんとケジメはつけなければならぬ。

「私、たたかう。私のせいだから。ラインハットを魔物の好きになんてさせない」

城の中は混沌としていたが、状況が悪すぎるといふほどでもなかつた。残念なことに、死体はそこかしこに転がっているが、それは魔物についても同じで、兵士たちの奮戦が見て取れた。

「状況は」

傷ついた兵士たちを回復して回りながら、パパスさんが現状について確認している。

「へ、陛下が……魔物に……!」

一人の兵士の言葉を聞いて、私たちはすぐに謁見の間へと向かつた。そこには他の場所より、一際多くの屍が横たわっている。異様な雰囲気はすぐに感じ取ることができた。嫌な空気。まるで悪意という悪意を煮詰め、器に収まらず漏れ出てしまつていふような。

「ほっほっほ。アダム、おまえにチャンスをあげようと言つていふのですよ」

謁見の間では、玉座の手前で怪我をしているラインハット王を捕え

ているゲマと、ギリりと唇を噛むアダムがいた。

「おまえの手で、ラインハット王を殺めるのです。半端者のおまえを、教祖の息子という理由だけで『仲間』にしてやっていたのです。こんなこともできないようでは、おまえに居場所はない。父親も、さぞ失望することでしょうね」

「待てッ!!」

邪悪の権化のような言葉を紡ぐゲマへ、怒りの表情を隠さず、油断なく剣を構えたままパスさんが叫んだ。

「アダム! 君はそんなことしないでいい! 居場所が欲しいなら、自分で作ればよいのだ! 探し出せばいいのだ! 君にそんなことをさせるような『居場所』を、君には拒む権利がある!」

紅の目は、泣きそうに潤んだ。

「なんと酷いことを言うんでしようねえ。アダムにとって父親はたった一人の肉親。光の教団は生まれ育った場所。アダム、よく考えなさい。半端者のおまえが居場所を失えば、どうやって生きていくというのです? おまえは誰からも愛されない。そんなおまえを受け入れてくれる居場所なんて作り上げることも、探し出すこともできるはずがない。おまえを愛してくれる可能性があるとするれば、おまえの父親だけでしよう。なぜなら——」

もはやゲマの言葉を耳に入れる価値はない、とパスさんがゲマへと斬りかかる。王様を放り投げたゲマはひらりとそれを避け、ニタニタと不快な笑みを浮かべたままだ。

「ジャミー・ゴンズー!」

ゲマに声を掛けられた魔物たちが、床に投げ出された王様と、動けずこちらを見ていたアダムを拘束した。

『『勇敢なる娘』よ。おまえの父親ですか。では、礼を言わねばなりませんね。その娘がアダムを城に入れてくれたおかげで、我々は城に侵入することができました。御協力、どうもありがとうございます!』

「私——ッ!」

何を言おうとしたのか、自分でも分からないまま。私は言い掛け、思わず王様を見てしまった。私のせいでめちやくちやにされたこの

国の、主を。

「アルマ」

ひゆうひゆうと危険な感じのする呼吸音を響かせながら、王様が口を開いた。

「気にするな。お前のせいではない。余計な心配をせずとも、この国は魔物なんかに負けやしない」

目頭が熱くなる。喉が詰まる。何か言いたい。言いたいののに、言葉が出ない。

「死に掛けの老人が、何を強がっている？」

馬のような魔物が鼻で嗤って、王様を拘束する腕に力を込めた。王様の顔は痛みに歪んだけれど、強い光を宿した目はこちらから逸らさない。

「話の続きをしましょう、アダム。おまえに良いことを教えてあげようと思っていたのです」

ゲマがゆったりと両手を広げる。その動作の気安さとは裏腹に、隙が無い。

「おまえの友達——リユカと言いましたか。あの少年の目を見て、確信しました。おまえとあの子には、同じ血が流れている」

「でたらめを言うな！ リユカは私の息子だ！」

カツとした様子で、パパスさんが怒鳴った。

「ほう——ではあなた、マーサの夫……グランバニアの、デユムパポス王であるか？」

目の前の人間の怒りに対して、魔物はニタニタと愉快そうに嗤う。パパスさんが顔を強張らせた。怒りよりもさらに深い感情。ピリリと肌を刺すような殺気。

「それでは……もしや、お前が妻を……妻は、光の教団にいるのか？」
「ほっほっほ。それを教えてやる義理はありません。ですが、これでラインハットの王子たちだけでなく、あの子にも光の教団へ来てもらう理由ができました」

けれど、私はパパスさんの殺意に恐怖はしなかった。抱いたのは共感。この魔物を絶対に殺してやると、明確な殺意が、私の中で急速に、

冷え冷えと組み立てられていく。

「絶対に、そんなことはさせない……!」

私は手のひらに神経を集中させる。イメージは、マリベル様が易々と扱っていたジゴスパーク。私の稲妻とは比べ物にならない破壊力を誇る、地獄の雷だ。

「アダム！ よく聞きなさい！ そして自分で判断するのです！ おまえとあの子には同じ血が流れている。だが、お前の父親は目の前のグランバニア王ではない。お前を愛してくれるのは、お前の父親しかないのです！」

「黙れ！」

パパスさんがゲマに斬り掛かる。今度は魔物の腕が少し切れた。

「やれやれ。落ち着いて話も出来やしない」

パチン、とゲマが指を鳴らすと、ごきりと嫌な音が謁見の間に響いた。悲鳴を上げた王様と、声が出ないが苦しそうに顔を歪めるアダム。二人の腕はおかしな方向に折られていた。

「貴様ッ！」

「デユムパポス王、あなたに選ばせてあげましょう。『娘』もろとも、殺されるか——。全てを見殺しにして、我々に戦いを挑むか」

パパスさんが唇を噛んだ。血の滲んだ唇で、彼は低く、低く、呻くように言葉を紡ぐ。

「アルマは私の娘ではない。引き取っていただけの、見知らぬ子どもだ。アルマとアダム、ラインハット王の三人の無事を約束してくれるなら、私は——」

「ダメだよ！ パパスさん！」

バチバチ、と私の手元で雷光が音を立てる。呼吸がづらい。頭が痛い。自分のスペックを超えることを無理やりにやろうとしていることに、体が、脳が、悲鳴を上げている。

「そんなの、絶対にダメ——!」

私の手から、紫電がほとばしる。鼻からつうつと血が垂れていくのを感じた。

「アダム！ 王様！ 逃げて!!」

二匹の魔物を直撃する雷。マリベル様が扱うものとは全然違う、弱い稲光。地獄の底つていうより、地獄の門の手前で呼び出したような不完全なものだ。

それでも——パパスさんの動きを助けるのには、一役買ったようだった。

素早く二匹の魔物に接近して斬りつけ、二人を救出したパパスさんは、彼らにキメラの翼を押し付けた。ここは室内。すぐには使えないだろうが、幸運なことに二人がやられたのは腕だ。足は生きています。すぐに屋外に脱出すれば、この窮地を逃れることができるはずだ。

「パパス……」

「何も言うな」

王様はこくりと頷いて、動けないでいるアダムの手を使える方の腕で掴んだ。

「アダムを連れて行かれるのは困りますねえ。……そうなるくらいなら、ここで処分してしまうこととしましょう」

ゲマの手から極大の火球が放たれる。仲間のはずの魔物の存在も無視して、アダムたちのいる方へと向かうそれ。全てがスローモーションに見えた。私は何かを叫んだ。なんて叫んだかは分からない。皆がいる方に手を伸ばした。

轟音と共に、三人がいた方を焦がして消失した火球。二人を抱えたパパスさんが、半身に火傷を負いながらもなんとか逃れたようだというのを視界に入れて、力が抜ける。——抜けてしまった。

「さて、デュムパポス王。教えていただけませんか？ 三人の王子たちの居場所を」

一瞬の隙に、私の体は魔物の腕に捕えられていた。次元の違う戦局。一瞬で、あらゆることが移り変わる。

私は首に手を掛けられた状態で宙ぶらりんになっていた。息が苦しくて、魔物の手をがりがり引つ掻くが、なんの抵抗にもなっていない。

「アルマを放せ！」

「ええ、いいでしょうとも。ですが、王子たちの行方が先です」

「言つちや……だめ……」

掠れた小さな声は、果たして彼に届いただろうか。

「教えられないというのなら……そうですねえ。この娘を殺した後、グランバニアにでも行きましようか。六年前は王妃を攫っただけでしたが、今回は国をめちゃくちゃにしてやるとしましよう。何、王に見捨てられた国。いずれは滅びる運命だったのです。それが少し早まったくらいで——」

「サンタローズという村だ」

ゲマの言葉を遮って答えたのは、ラインハット王だった。

「我が息子はそこにいる。アルマを放せ」

「なぜ——」

意識が遠のいてきたと思つたら、激しい衝撃に体が打ち付けられた。ゲマが私から手を放したのだ。せき込みながらも、絶句している様子のパパスさんへと視線をやる。

「友よ。わしはそなたの重荷になるわけにはいかない。今度は、ラインハット王が傭兵に命じるのではなく、一人の友として、頼みたいのだ。息子を、守ってくれ。そなたならできるな」

私はゲマが追つてこないのをいいことに、パパスさんの側へと駆け寄つた。ラインハット王が、ゲマの方へと歩いていく。

「ああ！ ああ、なんと素晴らしい友情であることか！」

芝居がかった様子のゲマは「いつまでそうしているのです、おまえたち」と倒れていたジャミとゴンズに声を掛ける。二人の救出を優先させたパパスさんは魔物たちの命を奪っておらず、彼らはふらつきながらもそのそりと立ち上がった。

「さて、ラインハット王。あなたのその言葉が本当であったのなら、王子たちは殺さないと約束しましょう。教団のために働いてもらうことにしますがね」

魔物たちが油断なく、ゲマの傍に控えるように移動する。息を荒くしながらも、どっしりとした構えで、近づいてくるラインハット王ではなく、私たちを睨みつけていた。

「そうか」

また一步、ラインハット王がゲマに近づく。ゲマはニヤニヤと笑ったまま、 ज्याミとゴonzは意識を王へと向けないまま、パパスさんは油断なく構えながら私とアダムを守るように立ったまま。

「だが、お前には頼まない」

ラインハット王だけが、歩を進めていた。

剣さえあれば、攻撃の当たる距離。けれどゲマは動かない。人を見下し切った表情で、にやにやと笑うだけだ。

「わしが息子たちを頼むのは、友であるパスタだ一人」

そのとき、ふと、ラインハット王の体から光が漏れ出ずる。その光は、希望の光というよりも――。

「アルマや。そなたがこの城に来てくれてよかった」

全てを白く染める、破壊の光。

――そんなはずはないのに。

王様が守ってきたこの国をめちゃくちゃにしてしまったのは私なのに。

私がこなければ、あなたは「そんなこと」しなくてよかったのに。

パパスさんが、多分彼の名前なんだろう、知らなかった名前を叫んだ。噴き出る光に呼応するように、あるいは友の呼び掛けに応えるように、その人は微笑んだ。

――どうして、そんな風に笑うの。

「メガンテ……！ チェッ！」

対照的に、初めてゲマの表情が崩れた。刹那、信じがたい衝撃と共に、爆発が起こる。私たちは、不思議なことに爆発には巻き込まれなかった。余波で起こった風にあおられ、壁に打ち付けられた痛みはあったが、それだけだ。

「やってくれましたねえ……！ ラインハット王……！」

魔物の怨嗟の声が聞こえ、私はふるりと身を震わせながらパパスさんの姿を探した。

「地獄へ送ってやるとしましょう……！ そうまでして守りたかったもの全てを！」

パパスさんはすぐに見つけることができた。私は彼に駆け寄る前に、倒壊し始めた城を脱出するべきか、半身がどろどろに溶け、残りの半身もぼろぼろに傷ついた魔物にとどめを刺すべきか少し迷った。

——でも、このまままでいたら、みんなが危ない。

こうなったのは私のせいだ。それに、この魔物をここで仕留めれば、その後の憂いはほとんどなくなると思っていただろう。何せ、ゲマはリュカに立ちほだかる最大の障壁と言っても過言ではない。それをここでどうにかできたら。

私がかうだかと考えている間に「アルマ！」と叫ぶパパスさんの声が聞こえる。彼に突き飛ばされると、私がそれまでいた場所には鎌が突き刺さっていたのが見えた。音もなく投擲されたいそれは、あまりに禍々しい見た目だ。

「アルマ。アダムを連れて逃げろ。私はすぐに行く」

「そんな……！」

パパスさんは強い。だけど、手負いとはいえゲマだって強い。ちらりと、とアダムに目を向けた。彼は意識を失っているようで、壁際に横たわっている。

「おおおおお！」

雄叫びと共に、パパスさんの剣がゲマの胸に深く突き刺さる。嫌な予感が拭えなくて、私はパパスさんに言われたことを無視して、こちらに駆け寄った。

カチリ、とまるで開けてはいけない錠に鍵を挿し込んでしまったように、完成させてはいけないパズルにピースをはめてしまったように、音が聞こえた気がした。

ぶわり、と肌が粟立つのを感じる。

それは悪意。それは殺意。それは絶望。それはありとあらゆる負の感情。ゲマの体から黒い霧が立ち上った。

「地獄の魔手で、永遠の苦しみを与えてあげましょう。こちらもただでは済まないのが難点ですが……」

「パパスさん!!!」

手を伸ばす。ぎりぎりのところで、パパスさんの足に縫りつくことができた。黒い霧に吞まれる。視界がゼロになる。だけど手は離さない。

——大丈夫。大丈夫だと言って。

カラン、と音がした。武器を捨て、パパスさんがその両腕で私を抱きしめた。

——勇者様。

胸が熱い。熱い。熱い。熱を奪っていくような闇の世界の中で、私の胸だけが、ひどく熱い。地の底で波打ち、熱風を吹き付けてくるマグマのように。

——あなたがそうしてくれたように、私も、私の『世界』を救ってみたかった。

「マーサ……リユカ……!」

音さえも吸い込んでしまいそうな闇の世界で、パパスさんの眩きが耳に残った。

時には急ぎすぎて、

ざわざわと妙な胸騒ぎを覚えながら、リュカはヘンリーたちに村の中を案内していた。サンチョは村の人々にラインハットに訪れた脅威について話して回り、万が一の時のために避難や防衛の準備をしておくよう呼び掛けている。村の人々は恐怖に身を震わせていたものの、リュカたちを見れば気丈に「パパスさんは絶対に帰ってくるー」と励ましたり、「魔物なんか怖くねえ、へっちゃらさー」と明るく振舞ったりしていた。

しかし、歩きながら空を見上げてみると、キメラの翼を使ったらしい人々が飛んでいくのが見えた。ラインハットはどうなっているのだろう、と自然と三人の顔が曇る。避難せざるを得ない状況というのは、形勢が不利ということではないのか。

そして、昼を過ぎたころ。傷だらけの兵士がサンタローズを訪れた。まさに満身創痍といった様相で、リュカが回復魔法を掛けても、焼き爛れた右腕は動くようにはならなかったほどである。彼はラインハットがどうなったのかを、村長であったパパスの代わりにと村の代表を務めるサンチョに話したいと申し出てきた。

初めは子どもたちが同席するのを拒んだ彼だったが、王子たちが「自分たちの国がどうなったか、知る権利がある」と口にしたのを聞いて、涙ぐみながら何度も何度も頷いた。子どもたちは、誰一人言葉を発せない。そんな中、兵士はぽつりぽつりと語り出した。

「城の地下で爆発音がしたと思ったら……魔物がなだれこんできて……」

魔物の数は百や二百ではないだろう。それでも、兵士たちは奮戦した。魔物にやられるだけでなく、きちんと勤めを果たし、王を守るべく戦った。彼は主に、城にいる非戦闘員の避難に当たっていたが、あらかた城から人がいなくなつたのを見届け、自分も他の兵たちの加勢に向かおうとしたときだった。ものすごい爆発により、城が崩れ始めたのだ。瓦礫を避けながら城から脱出すると、城から「なんだかとして

つもなく恐ろしい気配」を感じて、情けなくも這う這うの体で逃げ出してきたのだと語った。

「本当なら陛下をお守りするのが使命なのに……殿下たちに合わせる顔も、本当ならありません……」

俯き、涙を流す兵士に、「馬鹿野郎」とヘンリーが呟くように言った。「命あつてのことだ。それに、父上には覚悟があつた。お前の情報はオレたちの『力』になるかもしれない。もっといろいろ聞かせてくれ。城が崩れたのは分かつた。城下町の住人たちはどうなつた？」

「それは……パス殿やアルマちゃんがキメラの翼を配つて、逃がして回つたと聞きました。実際に、城下町には人の姿はありませんでした。自分は話していませんが、パス殿が城の中に残っていた人たちにもキメラの翼を渡して回っていたのを見掛けています」

「お父さんとアルマはどうなつたの!?! アベルは!?!」

身を乗り出したリュカに、兵士は悲痛な面持ちで首を振つた。

「分かりません。謁見の間に向かつたことは確かなようですが……無事かどうかの確認は……」

「ねえ! サンチョ!! ラインハットから魔物がいなくなつたなら、お父さんとアルマと王さまがどうなつたか、確かめに行こうよ!」

顔をくしゃくしゃに歪めて叫んだリュカに、サンチョは「なりません」と静かに言った。

「まだ安全とは言えません。魔物がいなくなつたという確認もできていない。坊ちゃん、ここは旦那様を信じて待ちましょう」

リュカはもはや、何も言わなかつた。

それから、数日が過ぎてもパスとアルマはサンタローズに帰つてこなかつた。村の人たちはふさぎ込むリュカを心配して声を掛けたが、あまり意味はなかつた。

「なあ、リュカ。案内してくれよ。その洞窟、アルマと探検した場所だろ?」

唯一、この傷心の少年が耳を傾けるのは、同じく傷心しているはずの親友の言葉だけだつた。ヘンリーは明るく振舞いながら、あるときは理由をつけて、あるときは理由なんてなくてもリュカを家の外へと

連れ出し、気を紛らわせるようにいろいろな話をした。デールももちろん、それに加わった。

「実はさ、オレ聞いちゃったんだよ。パパスがあそこの洞窟に何か隠してたらしいって、じいさんが言ってたんだ。探検しようぜ！」

「うーん……でも、お父さんはいかだを使って洞窟に入って行くことが多かったから、隠してたなら、いかだを使わなくちや行けないところじゃないかなあ」

「なんだよ、つまんねーの。いかだはあのじいさんが見張ってて使わせてくれねーもんなあ。ま、リユカとアルマが探検したところを見てみたいってのも本当だぜ。行くとするか」

一通り探検しても、体力のある子どもたちは昼前に出発して、太陽が真上にあるころに戻ってくるのができた。家に戻れば、サンチョがあたたかな昼食を用意して待ってくれている。

パパスとアルマがいないだけ。その状況が、リユカにはあまりに寂しく、つらいものだった。やっぱり、探しに行きたい。そう思うのも自然なことであり、彼は「少しだけだから——と、その日の夜中、こっそりと家を抜け出した。

「ゲレゲレ……ついてきたの?」

当たり前前だ、と言うように頭を足にこすりつけてきた相棒に、リユカはうれしいやら情けないやらで複雑な気持ちになる。

「ちよつと見に行くだけなんだ。だから、心配しないで」

そうして、彼はキメラの翼を放り投げた。

ラインハットの城は、避難してきた兵士の言葉通り、変わり果ててしまっていた。崩れた城はもはや人が住むには適さない。がらんとした城下町は不気味な沈黙を下ろし、夜のとぼりが落ちたこともあって、好き勝手に魔物が闊歩している。幸いなことに、その魔物というのはこの辺りに出現するようなものばかりで、リユカやゲレゲレにとっては苦戦する相手ではなかった。

ラインハットが襲撃されてから、日にちはそれほど経過していない。城と城下を渡す橋は老朽化もしておらず、リユカはおそろるおそろる、慣れているはずの城へと忍びこんだ。

瓦礫があちこちに転がり、通路や階段がふさがっていて、通れない場所もいくつかあった。それでも、謁見の間に行けば何か手掛かりがあるはず。そう思つて、リュカはゲレゲレと共にそこへ向かった。

いくつものを死体を魔物が貪っていた。それは人間のものだったり、魔物のものだったりしたが、城の中に横たわる屍は腐りかけるか食い荒らされて骨になつているか、ひどい有様だった。

謁見の間へ続く道は、死体が一際多くあつた。いつの間にかぼろぼろと涙を流しながら、リュカはそこには落ちていた抜身の剣を見つめる。

父の物だ。子どもの手には大きく、重いそれは、父が使つていた剣に違いなかつた。けれど、持ち主はどこにもいない。絨毯が焦げて燃えたような跡がいくつかあるが、父の死体もアルマの死体も発見できないことが、唯一の救いだった。

——きつと、死んでないんだ。二人とも、生きてどこかにいるんだ。もしかしたら、ひどい怪我をして動けないのかもしれない。そう思つて、重たい剣を引きずりながら、もう少しだけ城の中を探すことにした。一応ゲレゲレに二人のおいはしないか聞いてみるも、彼はふるふると首を振つただけだった。

ヘンリーの部屋だった場所に行つてみると、ぬいぐるみが転がつていた。慌ただしく避難したので、持ち出す暇もなかつたのだろう。アルマとの思い出の品ということもあり、リュカは道具袋にそれらを入れた。ふう、と息を吐くと、誰かの足音が聞こえる。思わず体を強張らせ、父の剣を床に置き、自らの武器を手にした。

「坊ちゃん……家にいないと思つて、心配しましたよ。やはりここでしたか」

足音は、サンチョのものだったらしい。汗だけでリュカに駆け寄つた彼に、小さく「ごめん」と呟く。

「すぐに戻りましょう。私も坊ちゃんを探しながら旦那様やアルマちゃんを探しましたが、いらっしやらないようでした。今はみんな、離れない方がいい」

「うん……でも、もう少しだけ。お願い。一通りだけでも見て回りたい」

いんだ。地下にはまだ行っていないから、そこを見たら帰るよ」

サンチヨはため息を吐いて、リュカの頭を撫でた。それから、床に置かれた剣を見つめて「少しだけですよ」と言い、その剣をまるでガラス細工のように慎重な手付きで拾い上げる。どこか気迫を感じさせるサンチヨに続いて、リュカとゲレゲレは歩きだした。

「ねえ、サンチヨはラインハットに来たことがあるの？」

迷いなく地下へ向かうサンチヨへ、リュカが首を傾げる。サンチヨはほろ苦く微笑み、懐かしむように遠くを見た。

「ええ。昔、旦那様に連れられて」

「えっ？ それじゃあ、お父さんは前にもラインハットに来たことがあったの？ 王妃様はお父さんのことを知らなかったみたいだけど……」

サンチヨは少し迷ったような顔をして、それから再び口を開いた。「……ええ、ええ。もちろん、来たことがありますとも。ですが、その話は戻ってからとしましょう」

地下牢には、一段とひやりと冷たく重い空気が淀んでいた。そのに入れられていたであろう囚人たちの死体は欠けているか、骨だけか。それすらも残らぬ者もいるだろう。

「誰もいないし……手掛かりになるようなものも、ないか」

ぽつりとリュカが呟いて、もうサンタローズへ戻ろうかとしたときだった。ゲレゲレが一点をじいっと見つめているのである。その視線の先を追うと——火の玉が浮かんでいた。

「魔物っ!？」

サンチヨが剣を抜身のまま腰に佩いてすぐに大金づちを構えると、「無礼者！」と声が聞こえる。どうやら、火の玉が何かを言ったらしい。リュカは眉を寄せて「誰？ 魔物じゃないの？」とそれに話し掛けた。

「ふん……私はこの国の王妃。お前はよく覚えているでしょう。私は魔物に騙され、この地下牢で殺されたのです」

火の玉はその内容と、生前の彼女の気性を考えると、いささかふさわしくないほどに、静かに言葉を続ける。

「お前たち家族や、ヘンリー、私を殺した魔物への恨みを忘れられず、魂だけの存在となってこの世にとどまっています。……お前に、頼みがあるのです」

ちらちらと炎が揺れる。その明かりは、冷たい地下牢にあつてほんのりとリュカの温かく照らした。

「我が息子、デールを守ってほしいのです。お前たち家族やヘンリーへの恨みよりも、今は魔物に対する恨みやデールの無事を祈る気持ちの方が強い。魔物はお前たちの村へ、王子たちを始末しに行くと言っていました。もちろん——グランバニアの王子である、お前のも」

「えっ?」

「どこでそれを!?!」

リュカが目を丸くしたのと同時に、サンチヨが火の玉へと詰め寄った。火の玉はちらちらと揺れるだけだ。

「魔物と、お前の父親が話をしていましたよ。我が夫もそのことを知っている様子でした。ですから、重ねてお願いします。グランバニアの王子よ。どうか我が息子デールを魔物の手より守ってください」
「ちよ、ちよと待つてよ! お父さんとアルマがどうなったか知らない!?! 王様だつて……」

リュカはふるふると頭を振る。そうだ、大事なのは自分の出自などではない。大事な人たちがどうなったのか、ただそれだけだった。生きていくのならば、きつと怪我をしているはずだ。助けに行かねば。

しかし、火の玉は無情にも、一番聞きたくなかったことを告げた。人間のときのように、表情豊かに話してくれたら、まだよかつたのかもしれない。しかし、魂だけの火の玉に表情はなく、ゆらゆら揺らめくそれは、いつそ無感動に、「事実」であろう現実を話した。

「皆、魔物の手によって死にました。我が夫はその命を捧げてお前の父親とあの娘を守らんとしましたが、その甲斐なく、二人は魔物の魔手によって地獄へ送られたようです。死体も残りませんでした」

火の玉が、「それから、これは忠告です」と、続けてつらつらと何かを言っている。けれど、リュカの耳には入らない。ぐるぐると頭の中

を、想像もしたくなかった「最悪」ばかりが駆け巡る。

呆然自失とした様子のリュカを慮って、サンチョは火の玉に頭を下げた。主の忘れ形見を抱き上げて、屋外に出ると、すぐにキメラの翼を放り投げる。やはり、リュカを見つけた時点でサンタローズへ連れ戻せばよかったかもしれない。自らの肩に顔をうずめて震える少年の姿に心を痛めながら、サンチョは目を瞑った。

そして、城の地下では死者が嗤っていた。あるいは、それはすすり泣きのようにも聞こえた。

*

その日から、リュカはまるで人形のように心を閉ざした。そんなリュカの世話を甲斐甲斐しくする兄弟たちがサンチョに事情を聞くと、二人は顔を見合わせる。

「それじゃあ……」

夜中にラインハットを訪れた二人が、亡くなった王妃からパパスとアルマ、それから二人の父親であるラインハット王が魔物に殺されてしまったことを聞いたと知った彼らは唇を噛んだ。それから覚悟を決めたように、各々口を開く。

「ボク、リュカさんに守られるだけじゃなくて、リュカさんを守ります」

「そうだよな。オレたちだって守られるばっかかっていうのは、恰好がつかねえや」

ヘンリーはそれから、膝をばちんと叩いて立ち上がった。

「リュカ、ぼけっとしてないで、外行くぞ！ パパスが洞窟に何を隠してたのか、今度こそ探しに行くんだ」

強引にリュカの腕を引くと、何の抵抗もなく彼は「親分」に連れられるがまま、外へ出る。サンチョはそんなヘンリーに深く頭を下げ、日頃から「リュカたちを見守るように」と再三言い聞かせている村人を信じ、己は己のできることを、と筆を執った。

リュカはサンタローズの村が大好きだった。優しい人々。世話焼きのサンチョ。遅しく、ひたすらに憧れ続けたパス。それから、後ろについて回っているようで、実は先導してくれていた女の子。

寒かった冬も、取り戻した春も。大好きな人たちに囲まれて、他愛のない話をして、子どもらしい冒険をしても「おかえり」と当たり前のように迎え入れてくれて。

——けれど、今のリュカにとって、サンタローズは、世界は無彩だった。

あれほどやわらかく、あたたかく包み込んでくれた空気は鉛のように重い。人の顔がおぼろげだ。ヘンリーは目立つ髪色をしているし、デールだって見慣れた背格好だし、サンチョだって、ゲレゲレだって、間違えるはずもない。

それでも、たとえ間違えることがなくなっただって、リュカにはもう、人の顔が分からなくなってしまった。笑っているのか、泣いているのか、怒っているのか、心配しているのか。

後悔も、諦念も、憤怒も、何もわからない。

もはやリュカにとって、世界は無となった。

ぼんやりと流れる景色、ヘンリーがおじいさんと何か言い合っている。それは分かるのに、リュカの脳は何も処理しない。

「お兄様、やっぱり、リュカを休ませてあげた方が……」

「いいんだよ、デール。いかだを渡った先の魔物は、他の魔物と比べてちよつとばかり強いんだろ？　ちよつどいいじゃねえか。オレたちの鍛錬になる。こいつには、『思い出』が必要なんだ。『目的』が必要なんだ」

リュカには認識できないヘンリーの表情は、デールにははつきりと映っていた。ぎりりと唇を噛みしめ、目じりを赤くし、この中で一番の年長者だからと、気丈に振舞っている。

ヘンリーは七歳、リュカは六歳、デールは四歳。年相応に悪戯もするが、基本的に彼らは賢く、しつかりしており、その辺の魔物相手になら戦える強さをもっている。それでも——子どもだった。

親が死に、友達が死に、親友が心を壊して、平気なはずがなかった。それでも、ヘンリーもデールも泣かなかった。彼らには矜持があったし、後悔があったし、泣いて蹲っているわけにはいかない理由ができてしまったからだ。

前に進まなくてはならない。休んでなんかいられない。

幼いラインハット王子たちは、親友の手を引いて、強引に説得して半ば無理やり乗ったいかだの上で鼻をすすった。涙は出ていない。涙で、目の前を曇らせるわけにはいかなかった。

「リュカ、オレはさあ」

薄暗い洞窟の中に入り、ぽつりとヘンリーが呟いた。

「お前がどんなになつたって、親友でいるよ。それで、いつでもライバルでいたいんだ」

すらり、と剣を抜く。

「オレ、強くなるから」

トン、とリュカの背を押してデールへと引き渡す。魔物に囲まれていた。ヘンリーの青い眼は、どこまでも透き通っていた。その青いきらめきだけは、刹那の間だけ、リュカの無彩の世界に飛び込んできた、あまりに美しい色彩だった。

「オレだけは、お前を一人にさせないから」

襲ってきたスライムを、ブラウニーを、ヘンリーは見事な剣さばきで撃退する。それに後れを取らぬよう、ゲレゲレも主を守るため、奮戦した。

子どもたちは奥へ奥へと進んだ。どれほど傷ついても、ヘンリーは愚直なまでに魔物に立ち向かっていった。時にゲレゲレの速攻で敵をかく乱し、見たことのない敵にも頭を使って対応しながら。ホイミとキアリーを使えるデールは回復役を務めつつリュカの盾となり、そんな兄の補助を務める。

とはいえ、こんな洞窟で無理をして死んでしまったのは、自分たちのために亡くなった大勢の人々に顔向けができない。その日は一度洞窟の散策を打ち切り、ヘンリーたちはぼろぼろになったままサンチョコの待つ家へと戻った。

「おかえりなさいませ。洞窟へ行ってきたと聞きました。どうぞ、ゆっくりお風呂に入って疲れを癒してください。ご飯を用意して待っていますから」

サンチョの目には泣きはらした跡があったが、誰もそれについて何も言わなかった。入浴後に出てきたサンチョのご飯は、いつも通りとても美味しい。けれどやはりどこか、味気なかった。

「ヘンリー様、デール様。どうかお二人に聞いていただきたいことがあるのです」

疲れ果てて眠たかった兄弟だったが、サンチョのあまりに真剣な表情に、姿勢を正し、聞く姿勢を取る。

「もちろん、聞かせ」

眠気は吹き飛んだ。連日の不安、恐怖、緊張感、もろもろの要因が彼らを苦しめていたはずなのに、幼い兄弟は一切の弱音を吐かない。それどころか、親友であるリュカのためにと、あれやこれやと一生懸命考え、行動している。

「実は——旦那様の正式な名は、デュム・パポス・エル・ケル・グランバニアといい、グランバニア王国の国王であらせられました。坊ちゃんにも、リュケイロム・エル・ケル・グランバニアという、正式な名があり、当然、グランバニア王国の正当な王位継承者でございます」

サンチョは俯いた。グランバニア。その名を出せば、国民から愛され、皆の期待を一身に背負い、同時にそれに応えてきた、尊敬する主のありし日を思い出す。

「なぜ、一国の王であった旦那様が、幼い坊ちゃんを連れて旅をしていたのかと言えば……愛する妻、マーサ様を、邪悪な手により攫われてしまったからなのです。それゆえ、旦那様はマーサ様を探す旅をしておられました」

さらに言葉を続けようとしたサンチョが、ふいに言葉を止めた。ゲレグレの耳がぴんと立ち、毛が逆立っているのに気が付いたのだ。「嫌な予感がします。ヘンリー様、デール様、これを」

サンチョは、薬草やら毒消し草やらが大量に入った袋を、兄弟へ押し付けた。

「坊ちゃんを連れて、洞窟へ避難してください。あそこには、旦那様が遺した、大切なものがあるのです」

ヘンリーは体に溜まった疲労を無視して、頷く。そして、昼間と同様に、リユカの腕を取った。

「デール、行くぞ。遅れるなよ」

サンチヨの「嫌な予感」は当たってしまった。空を覆いつくす、鳥型の魔物。村を包囲する獣型の魔物。ラインハット城を攻め落とすときよりも手薄とはいえ、それでも小さな村にはあまりに過剰な戦力だった。

子どもたちが洞窟へ向かったのを見届けて、サンチヨは息を吐いた。

「スクルト。スクルト、スクルト、スクルト……」

サンチヨは魔法がそれほど得意ではないし、魔力も少ない方だ。けれど、村人を守ってみせるという気概だけはある。グランバニアの王であった主が、国と同様大切にしていた、サンタローズの村だ。他国の領の村長を引き受けてしまったのは、パパスが本当にこの村を好きだったからだろう。

「誰も死なせません。誰も……!」

ぐ、と武器を握りしめる。パパスがラインハットでそうしたように、サンチヨもまた、サンタローズの人々へとキメラの翼を渡していた。何かあったときのためにと。生きて、またこの村に戻ってくることができるようにと。

*

大勢の敵に囲まれる経験から、ヘンリーはイオという爆発呪文を使えるようになった。もともと、勉強の得意な少年である。適性のあるなしはあるものの、城の書物により、基本呪文の知識は頭に入っていた。後は経験と、感覚を掴めばよい。

「お兄様……ここが、一番奥みたいです」

肩で息をするデールは、魔力が尽きてしまったようで傷を癒し切れ
ていない。それでも、リュカには傷一つなかった。幸いなことに、最
奥は部屋のようになっていて、魔物の気配もしない。何かしらの結界
が施されているのか、聖水でも振り撒いてあるのかは分からないが、
じつくりと見て回るのにはちょうど良かった。

「ああ……あれが、パパスの遺したものってヤツだろう」

地面に突き刺さる、古い剣。古いが、決してみすぼらしくはない。
刀身が半分以上隠れた状態であるのに、神々しさすら感じる。

「ツチ。オレたちの力じゃ抜けねえな。こりや、大人がいねえと……。
おい、デール。お前はちよつとここでリュカと休んでろ。余力がある
なら剣に縄でもくくつといてくれ。オレはゲレゲレと他にも何かな
いか探してくる」

子どもの背丈、力では、その剣を抜くには十分ではなかった。ヘン
リーは緊急事態の今、無駄に体力を使うよりはと一旦諦めることとし
た。もちろん、焦りはある。

「これ……パパスの手紙だ……リュカに宛てた……」

そうして見て回った中に、リュカへの手紙があった。その手紙に
は、パパスからリュカへの願いが記されている。

——これを見せれば。

リュカは心を取り戻すかもしれない。一抹の希望が、ヘンリーの胸
に湧き上がった。

「リュカ、見てみるよこれ……!」

そのときだった。

洞窟の階段を、誰かが下ってくる音がした。ヘンリーは喉がカラカ
ラと乾いていくのを感じた。血の気が引く。この手紙を魔物に見ら
れてはまずい。万が一人間だったとしても、下手な相手には見せられ
ない。

ヘンリーはすぐにリュカの道具袋へとその手紙を押し込み、剣を構
えてじりじりと階段へ近づいていった。デールには、「リュカと隠れ
てる」と言い渡し、部屋の中にあつたタンスへと二人まとめて押し込
んだ。幼い少年たちは、特段困ることもなく、すんなりタンスへと収

まった。

「お前——」

階下に来たのは、黒髪に紅の瞳の少年。ヘンリーよりは年下だろうに、その美貌は既に異彩を放っていた。

「オレ、お前のこと知ってるぞ。『アベル』だろう」

少年は言葉を発さない。それも、ヘンリーがリュカから聞いて知っている情報だった。

そして、それは相手にとっても同じだった。

お互い、顔を合わせたことはない。けれど、その存在は、一人の少年から、少女から、しっかりと伝えられていた。

「お前——魔物の、仲間だったんだってな」

少年は喋らない。口を開くことすらしない。その背後に、魔物を引き連れて、少年らしからぬ、ゆったりとした尊大な足取りで、ヘンリーとゲレゲレへと近付いてきた。

——こいつさえいなければ。

——アルマとパパスが死んで、どうしてお前は生きてるんだ。

——お前が死ねばよかったのに。

——リュカを誑かして、優しさに付け込んで、許せない。

ヘンリーは湧き上がる憤怒、憎悪、あらゆる負の感情で、視界がチカチカした。

「だけど……」

一度、目を伏せる。罵詈雑言を飛ばすのは簡単だった。そうするべきだとも思った。優しきのせいで大切な人たちが喪われてしまったのなら、自分だけでも厳しく在れ、自分だけは何があっても目の前の相手を赦してはならないという、当然の考えもあった。

「お前、生きててよかったよ。リュカが心配してたんだ」

どろどろと腹を、頭を、心の中を漂う暗く煮え滾る感情を霧散させたのは、簡単な理由だった。リュカはパパスとアルマの死を知ってか

ら、口を利かなくなった。だからと言って、もうコイツのことなんて心配していないかもしれない、憎しみに変わったかもしれないと、あのお人よして頑固者の少年がそんな風に変容するとは、ヘンリーには思えなかった。思いたくなかった、というのが真実かもしれないが。

ふいに、開かなかった少年の口が動く。ヘンリーは目を見開いた。

『ザキ』

それは死の呪文だった。全身の血液を凍らせ、問答無用に生者を死へ誘う絶望の呪文。

『ザキ』

少年の口は何度もその形に動く。まるで、この部屋にいる人数を見通しているかのように、正確にその数だけ、魔法を放った。

洞窟内には沈黙が落ちる。

紅の瞳の少年は、物言わぬ骸となったそれらに手をかざした。

きらめく思い出をその胸に

武器を振るいながら、サンチヨは村人たちへと指示を飛ばしていた。もう少し、もう少しだけ持ちこたえてほしい、と続けるように叫びながら、ただ一心不乱に魔物と戦っていく。

「サンチヨ様、お待たせいたしましたー!」

張りのある声に、サンチヨは「加勢を!」と手短かに答える。

それはグランバニア王国の軍隊だった。ラインハットが強襲を受けたことをキメラの翼を駆使し、手紙にて伝えていたサンチヨは、王子たちの身に万が一のことがあつてはならないと、何かあつたときにすぐ駆け付けられるよう、援軍を要請していたのだ。

国王代理——今は、国王となったオジロンは、その要請を断るような人柄ではない。「そう多くは出せないが」と、本気で申し訳ないと思っているのがよく伝わる返事が、すぐに返ってきた。それから、村人に混じってこっそりとグランバニアとの連絡役がサンタローズに控えていた。

駆け付けた援軍は、次々に魔物を倒しながら、村人たちをグランバニアへと避難誘導し始める。魔物たちは苛立ちを隠しもせず、その中心となつているサンチヨへと猛攻を仕掛け始めた。

「サンチヨ様!」

「私は大丈夫です! あなた方は、村の人たちを!」

己の血なのか、返り血なのか、日頃の穏やかな風貌とはかけ離れたサンチヨに、若い兵士は気圧されていた。しかし、ここは戦場である。すぐに「ハッ」と短く返事をして、避難誘導を続ける者と、サンチヨを援護する者に分かれた。サンタローズはもともと小さな村だ。村人たちの退避はすぐに終わり、魔物たちは成果も上げられないまま、焦った様子になった。

「どうするのだ。このままでは示しがつかんぞ」

それまでは戦況を眺めているだけだったリーダー格の鳥型の魔物・キメラと、獣人型の魔物・オークがひそひそと言葉を交わす。

「なに、我らの目的はあくまで王子たち。それらしい餓鬼どもは見えない。大方どこかに隠れているのだろう。じっくり探せばよいだけだ。おい、半端者。探してこい」

ぐいつ、とオークが己の後ろにいた子どもを乱暴に投げた。子どもは受け身も取れないまま地面に放り出されたにも関わらず、呻き声一つあげない。黒髪の、まだ幼い子どもだった。

「……あなたは」

サンチヨはその容貌に聞き覚えがあった。リュカがサンタローズに戻ってきた時、ラインハットの状況を説明する際に出てきた「アベル」だ。リュカの友達でありながら、ラインハットを襲った「光の教団」の教祖の息子の「アダム」でもある。彼は敵の組織の中核にいるであろう存在だ。しかしながら、リュカたちへラインハットへ迫る脅威を教えたのもまた、目の前の少年である。

「生きていたんですね」

少年はふらりと立ち上がり、洞窟の方に向かおうとした。そうはさせまいと、兵士が困惑しながら、「キミ、魔物の言いなりになる必要はない」と立ちはだかる。

「殺せ。お前はもう後がないんだ。王子たちを始末できなきや、お前には永遠の苦しみを与えられるだろう」

オークが嗤う。「そうなればいいのに」という、醜悪で加虐的な本音がありありと透けて見えるようだった。

「魔物の言いなりになんてならずともよいのです」

サンチヨは言った。少年が持つのは小ぶりなナイフだ。そんなものでは、グランバニアの鍛えられた兵士は殺せない。パパスに鍛えられた王子たちのことも、殺せないだろう。

「坊ちゃん、あなたを友達だと言っていました。そうでなくとも、子どもが……！ そのようなことしなくても……！」

言葉を続けようとしたサンチヨに、魔物は容赦なく火炎の息を吐き出した。皮膚が焼かれ、爛れる感覚に苦悶の声が出る。アダムへ向けていた視線を、魔物へぎらりと向き直ったサンチヨは、気管が熱されたのか、聞き取りにくい声で兵士へ指示を飛ばした。

「魔物を討伐します。……アベル君、私は、坊ちゃんが『優しい』と言った君の心を、信じます」

妙に、迫力のある声だった。兵士たちはもはや、アベルなど誰も見ていなかった。なぜなら、あのサンチョが信じると言ったから。

それならば、目の前の脅威を断ち切ってから、ゆっくりと子どもたちを迎えに行けば良いのだ。

アベルは戦う大人たちをちらりと見て、洞窟へと駆けた。途中、監視のつもりなのか、手柄を取ってやろうという野心なのか、攻撃の手を逃れた魔物たちが何匹かついてきたが、彼は気にしなかった。

洞窟の魔物は弱かった。アダムは剣こそ使ったことがないが、魔法に関しては特別な才能がある。それは、彼が魔物と人間の間にできた子だからか、彼個人の才能なのかは分からない。野生を忘れず、邪悪にも染まっていなかった愚かな魔物たちに襲われることが何度かあったが、後ろからついてくる魔物たちの手を借りずとも、これくらいなら声を発することのできないアダムでも倒すことができた。

洞窟の最も奥には、緑の髪に青い目の子どもが、剣を構えて立っていた。見覚えのあるベビーパンサーもいる。アダムは、声を掛けようとして、封じられていることを思い出し、息を吐くだけに留めた。

少年——光の教団に父を殺された、ラインハットの第一王子は、口を開いた。あろうことか、アダムに対して「生きててよかった」と。「リュカが心配していた」と。

それに対して、アダムは自分の抱いた感情が何なのか分からなかった。名前のないその感情を振り払って、彼は一步、また一步と、第一王子へ近づく。後ろからついてきた魔物たちも同様に歩を進めていた。

——やることはたった二つだけ。簡単なことだ。

彼はくるりと振り返り、死の呪文を唱える。勝手についてきた魔物

たちは油断しきりで、すぐに絶命した。四匹の死体のうち三匹に手をかざしたアダムは、その死体を変質させた。

これこそ、ゲマがアダムを殺さなかった理由である。

アダムの突出した魔法の才の中でも、変身呪文に関しては、もはや異質とも言ってよい程だった。普通、変身呪文というのは使用者が「目の前にいる他者」に化けるものだ。しかしアダムは、他者を、己の知っている者の姿に変身させることができる。今よりさらに幼い頃、どういった経緯か彼自身も忘れてしまったが、その才をゲマに見いだされ、彼は教団の中でも「教祖の息子」としてだけではない扱われ方をし始めた。

今、彼の即死呪文によって絶命した魔物は、リュカ、ゲレゲレ、ヘンリーの姿となっている。

「どういう、つもりだ……?」

困惑したヘンリーの言葉を無視して、アダムは迷いなく、ダンスを開けた。中で怯える茶髪の少年を見て、残りの死体をその少年そっくり——というよりも、そのもの見た目に変身させる。それから、アダムは地面にさらさらと文字を書いた。

〈迷惑掛けた〉

どうやっているのか、死体を浮かせたアダムはくると背を向ける。能面のような美しい顔からは、彼が何を感じ、何を考えているのかはまるで伝わってこなかった。

「迷惑って……迷惑って……!」

ぶるぶると、ヘンリーの声が、震えながら口から漏れ出す。そしてそのまま、その小さな背へと激情をぶつけ始めた。

「そんなんで、済まされるわけねえだろうが! 戻ってこないんだぞ、

父上も、パパスも、アルマも、城のみんなも!! 平和で笑い合ってただけの、日常も!!!」

気丈に振舞っていただけだった。心を閉ざしてしまったりユカと、また笑い合いたいと思つたから。みんなが繋いでくれた命を、絶対に粗末にはならないと分かつていたから。泣いて視界がぼやけたら、迷子になる。挫けて座り込んだら、もう立ち上がれなくなる。切っ先を下ろしたら、その刃で己を貫いてしまいそうになる。

だから、絶対に、自分だけは泣いてはならなかった。立つて、歩き続けなければならなかった。構えた剣を、戦う意思を、敵に向け続けなければならなかった。

だけどやつぱり、ヘンリーは子どもだった。いや、大人でも、堪えることは至難の業かもしれない。

「なんでそんなことするんだよ、お前ら! 全然『光』なんかじゃないじゃないか! 人の『光』を奪っておいて!! 何を教え説くんだよ!!!」

そんな兄の姿を見て、デールの目からは大粒の涙がこぼれる。一緒にダンスに入っていたリユカの洋服に、それらは次々に染みをつくつていった。

「なんで——なんの理由があつて、人の『幸せ』を奪うんだ!!!」

アダムは答えない。

「にやうん」と、ゲレゲレが、去りゆく友を呼び止めるように、あるいは傷付いた友を慰めるように鳴く。

それでもやつぱり、アダムは答えなかった。

「……なんつーか、辛気臭いやつだったな」

どれほどの時間が経ったのか。静けさを破ったのは、ヘンリーの声だった。彼の目に溜まった涙は、結局流れ落ちることはなく、いつの間にか乾いていた。

「デール、こっちこい。ゲレゲレも。みんなで『天空の剣』を抜くぞ」
柄に縄をくくりつけ、少年たちは一生懸命引つ張った。初めはびくともしなかったそれも、ゲレゲレが周りの土を掘ってみたり、みんなで声を出したりする中で、ようやく引っこ抜くことができた。

「きれいな剣ですね……」

自分たちは泥にまみれた顔で、デールが見惚れたように呟く。ヘンリーもそれは同感だったが、見惚れている暇はないと知っていた。だから、子どもの手では重いそれを、本人なりに急ぎつつ、どうにか背中に縛り付ける。

「デール。悪いがオレはこいつを運ぶのに手いっぱいになりそうだ。帰り道は任せろぞ」

「はい、お兄様。今度はリュカをお願いします」

「ああ。それは任せろ」

しかし、拍子抜けするほど穏やかに、まるで何かに守られるように、少年たちは洞窟を抜けた。戦闘の音はもうしない。どうやら収まったようだ。とヘンリーは慎重にきよろきよろと周りを見た。当たりはもう真つ暗だが、ちろちろと火の手が上がっている部分もある。焦げ臭さと血のにおい、それから自身の泥臭さで鼻が麻痺しそうだな、と少年たちは思った。

「サンチョ、いるか？」

まだ残党がいては困るが、確認しないことにはどうにもならない。そう思って、ヘンリーは声を上げた。

「あ……ああ……」

声だ。しかし、それがサンチョのものとは思われない。砂漠で水を求める人のような、切実さをはらむ掠れた声だった。ともかく、生きている人がいる。そう思って、王子たちは声のした方へとすぐに向かった。

「生きて……おいで……」

しかし、声の主がサンチョだと分かったのは、その目、表情だろう。燃え残った戦火を瞳の中で揺らめかせるその人は、体はぐずぐずに焼かれ、両脚は潰され、手の指はおかしな方向に折れ曲がりながらも、心底安心したとでもいうように、微笑んでいた。

慈しみにあふれた目。「おかえりなさい」と包み込んでくれた大きな体。太く丸い指で、美味しい料理をいつだって作ってくれた。

「サンチョ……お前……何があって……」

言いながら、ヘンリーは道具袋の中から薬草を取り出した。そんなものじゃ間に合わないと分かっているが、その人に対し、少しでも痛みが、傷が、癒されればと願わずにはいられなかった。

「私は、旦那様との約束を果たしたまでです。……果たせて、よかったです」

*

アダムが子どもたちの死体を運んできた時、サンチョの心情はとうと、もう、喩えようもなかった。

彼は常の柔和な顔が、面影も残らぬほど狂乱しながら魔物を殺戮した。せめて魔物どもを道連れにしてやろうと。グランバニアから連れてきた兵士たちも、同様だった。魔物たちも、死を恐れぬ人間たちに対し、あらゆる手段を使って対抗した。

そうして両軍勢が倒れたとき、戦いを静観していたアダムはサンチョの近くに歩み寄り——まだ息のあつたキメーラの首を、小ぶりなナイフで切った。

一瞬だけサンチョへ向けたアダムの目。一見宝玉のごとく美しい紅は、一人ぼっちでさみしい少年の心情を何よりも表していた。

霧散。

全ての恨みが、憎悪が、憤怒が、行き場をさまよい、ただ涙となつ

て流れ落ちた。

ぐるぐると滾っていた狂おしい怨嗟がそうしてサンチヨの内から外へと流れ出で、目の前の少年を、——赦すことにした。

そうでもしなければ、相反する己の心と頭、理性と感情が、軸を失い狂ってしまいそうだった。いつそ、狂ってしまえば楽だったのかもしれない。

それでも、狂わなかった。本来の穏やかで素朴な自分が、少年を恨むまいとサンチヨ自身に言い聞かせた。恨むのは、彼をリユカたちのところへ行くのをみすみす見逃してしまった己の他に、いるはずもない。裏切られたわけではないのだから。ただ、ただ、自分が見誤っただけ。

それでもきつと、主も、自分が守るはずだった子どもたちも、この愚かな従者を赦してしまうだろう。だから、自分だけは自分を赦すまい。それから、せめて、せめて、あの哀れな少年が、狂った組織から抜け出せること祈ろう。

——あんな目を、子どもにさせてしまうことこそが間違いなのだ。それからアダムは、キメーラの死体の羽根をもぎとり、王子たちの死体もろとも、どこかへ消えてしまった。

*

むろん、声を出すことが精一杯のサンチヨには、そのときに起こったことの説明などできるはずもない。しかし、賢い第一王子は、己の経験と、現状から推測できることを口にした。

「どういうつもりか分からんが、アベルのやつはオレたちを『死んだこと』にしたらしい」

ヘンリーは安心させるように精一杯微笑んで、見るに堪えないサンチヨの手を、痛みのないよう優しく包んだ。その手をさらに、小さなデールの手が包む。

「だからさ。『死人』同士、生きよう、サンチヨ。約束と一緒に命まで

果たすなんて、そんなの許さないぜ」

サンチヨは力なく笑った。幼い慰めに応えてやれないことが、優しい彼にとつては何よりつらい。

そのとき、デルの小さな手を包む手があった。

「サンチヨ……いやだよ、サンチヨ……」

リユカである。ぽろり、ぽろりと涙を流しながら、彼は祈るように、回復魔法を掛け続けた。

ホイミとベホイミは、回復魔法の中でも下級のものである。上級魔法の原理とは異なり、それらは生き物の持つ本来の自然治癒能力を高め、促進させる効果を持つ。ゆえに、失った血はおろか、切断された手足はくつつかない。よほど綺麗に切られていれば、すぐにその断面同士を合わせながら呪文を唱えることでくつつくこともあるようだが。当然、火傷なども、真皮まで到達していれば痕は残ってしまう。

それに対して、上級魔法では、「体の時を戻す」ことを限定的に行っている。そのため、切断された手足はくつつくし、火傷も元の状態に戻る。ただし、そこまで理解して魔法を使用している者は数少ないのが実情だった。

とにもかくにも、リユカは上級回復魔法を使えない。下級の回復魔法は、サンチヨには既に意味を成さず、ふさがる傷はあれど、到底追いついていなかった。

「坊ちゃん」

サンチヨは微笑んだ。掠れた声は、砂漠で水を求める者のそれではない。

「お元気で。それが、このサンチヨめの、何よりの幸せでございます」
十分に、満たされた者の声だった。

手当などで応援を呼びに行った兵士たちが戻ってきて、夜中であるにも関わらず、サンタローズの村は松明の光で煌々と照らされた。そこにはおびただしい量の魔物の死体があった。

サンチョと子どもたちは、急いでグランバニア城へと運ばれた。立派な城を見学する間もなく、子どもたちは厳重な警戒態勢が敷かれた部屋に入れられ、ふかふかのベッドで寝かしつけられることとなる。いろんなことが起こりすぎた疲れや緊張には抗えず、彼らはそのまますつかり眠った。

数日後、子どもたちはサンチョの眠る医務室を訪れた。手当の甲斐あって、サンチョの体はすっかりきれいに元通りになっている。

しかし、彼は目覚めなかった。

敵の中に神経を麻痺させる息を吐く魔物があり、彼はその攻撃を食らってしまっていたためだ。しかも、常人よりもその手の攻撃に強いサンチョは、他の兵士がその攻撃を食らわないよう、自身が率先して盾となつたらしい。

いくら耐性があるとはいえ、神経毒を幾重にも喰らえば、当然体の機能はおかしくなる。しかも、単純な毒ではないため毒消し草では効果がない。麻痺を快癒させる呪文は、もちろんある。けれどもそれは、掛かった神経毒そのものを取り除く魔法であり、——いわゆる「後遺症」には効果が無い。

「普通の麻痺なら、キアリクで治るはずなんです」

涙を流しながら、治療に当たっていたシスターがそう説明した。「時間が経ってからの治療でも、ほとんど問題なく治せるはずなんです」

しかし、サンチョは、忠誠心が誰よりも強い男だった。「子どもたちを守る」という主との約束、そして、そのために自らが呼びつけた、主の大事な国民。それらを失うわけにはいかないという心のもと、全てを守ろうとした。

だから、何度も、何度も、何度も、魔物の息を受けた。耐性のある自分ならば、そんなもの喰らっても動けるのだと、魔物に見せつけてやるように。

「サンチョは、いつか目覚めるよな?」

ヘンリーの震えた声に、誰も答えなかった。答えられなかった。

リュカは、サンチヨの手を握った。頬を、頭を撫でてくれた大きな手だ。しかし当然、握り返されることはない。

祈りばかりが、部屋に満ちる。横たわった体に、幾重もの願いが掛かる。

——結果として言えば、彼が目覚めることは、ついぞなかった。

弱々しく動いて、精一杯生命を保っていた心臓は、数日後、ゆるやかに動きを止めた。

大神殿に戻ったアダムは、父であるイブールに、これまでの経緯を説明していた。既に、声は取り戻している。「王子たちを殺したら、ゲマに封印されている声を戻してやる」と言われていた通り、イブールはすぐに息子に施されていた封印を解いた。ゲマの封印は簡素なものだったらしく、教団の祖であるイブールにとっては取るに足らないものだったようだ。

「ラインハット襲撃は既にゲマから御報告があつたことかと思ひますが」

およそ、親子とは思えぬ雰囲気両者に流れていた。アダムの言葉は淡々としており、少しも感情を滲ませない。そんな息子へ、ワニのような容貌の魔物もまた、興味などなさそうな冷たい目を向けている。

「うむ。簡単に聞いたただけだな。お前が余計な情報を漏らしたせいだ、王子たちを逃がした、と」

「弁解のしようもございません」

小さな首を垂れ、アダムは言葉を続けた。

「王子たちはサンタローズという村へ逃れていました。キメラの翼により、西方に逃れたというゲマの情報から、捜索に当たったところ、すぐに発見いたしました」

「それにしても、時間が掛かったようだが」

「小さな村に似つかわしくないほど、強固な守りが村に施してありました。ラインハット城のそれにも匹敵するほどのものです」

その言葉で、冷え冷えとしたイブールの瞳に激情が宿る。その目には幼いアダムを映していながら、アダムを見てはいない。

「あのグランバニア王が拠点としていたのだ。何もおかしいことはないまい」

しかし、それも一瞬のことだった。次の瞬間には、何事もなかったかのように、イブールは再び、冷えた目をアダムへと向けていた。

「……手間取りまして、面目次第もございません。ともかく、結界を内部より破壊し、攻め込むことに成功いたしました。しかし、教祖様のおっしゃる通り、グランバニア王が拠点としていた村です。サンタローズには、グランバニア王に仕える者がおりました。おそらく、定期的に連絡を取り合っていたのでしょう。グランバニアより援軍が押し寄せ、私が王子たちを捜索している間に、村を攻めていた魔物たちは壊滅状態に陥っていました」

すらすらと答えるアダムの腹を、イブールは蹴りつける。さらには、毬のように跳ねたその体を踏みつけた。

「王子たちを殺しただけで、このわしがお前の愚行を許すとも思わなかったか」

「まさか……許していただくかなど……」

痛みに歪むアダムの小さな顔に、じりじりと火球が近づく。当たってはいいのに、その熱さは皮膚を焦がした。

「お前は役に立つ。それゆえ生かしてやっているということを忘れるな。次に余計なことをすれば、そのときは我が息子だろうと関係ない」

「承知して、おります」

パツ、と火球が消え、イブールは傷付いた我が子を置いて、部屋から出て行った。

——余計なことなんて、とんでもない。

アダムは、自身に回復魔法を掛け、すつと立ち上がった。やること

はたくさんある。

なにせ、アダムのせいで光の教団の被害は甚大なものとなってしまった。イブールの部下であり、あの得体の知れないゲマでさえも、数年は元のように活動できないほどに深刻なダメージを負い、その腹心であったジャミはラインハット王のメガンテによって死亡。ゴonzは瀕死状態だったものの、既に治療済みだ。ただし、肉体は回復したが、怒りで理性を忘れて暴れ回るため、幽閉状態となっている。多くの魔物たちも死に、単純に戦力が低下してしまった。

しかし、一番の問題は「光の教団が魔物に国を襲わせた」という事実が広まりかねないことである。アダムが秘密を洩らした相手はグランバニアの王子で、しかも彼はそれをラインハットの王に伝えた。当然、王は国民を避難させるために、隠し立てることもせず、その事実を伝えただろう。ラインハットの民も、サンタローズの村人も、ほとんどが避難し、生きながらえている。光の教団にとって、これほどの問題はない。

光の教団は、予言に従い高貴な血筋の子どもを集めたり、処分したりしている。そのためには、誘拐だけではなく、富裕層を信者に取り込むことも重要なのだ。信者となった富裕層は、自ら子どもを教団へと差し出す。そういった信者たちは財源としても優秀だ。日頃、アダムに関心を持たないイブールが怒り狂うのも頷ける。

——父上に認められなければ。

そうでなければ、生きていく意味がない。アダムはそう考えていた。己の力を認められなければ、生まれてきた意味がない。

アダムとイブールの関係を知る教団幹部の魔物たちが、「半端者」である少年を見る度に冷やかしてくる。別に、そんなことは構わなかった。

アダムの心は決まっていた。やることは、たくさんある。誰も味方にならなかつた。いい。誰の仲間にもならなかつた。いい。

——お前、生きててよかったよ。

——君の心を、信じます。

——君はリユカとアルマのともだちだ。

——また明日もこうして話をしようよ。

——ねえ、大丈夫？

だって、自分で壊してしまった。手に入るかもしれないなかった、何もかもを。だから、アベルにはもう道が残されていないなかった。己が決めたただ一つの道を、まっすぐ、まっすぐ、たとえそれがどこへつながっていても、歩み続けるしかない、そう思っていた。

アダムはひとつ、息を吐いた。後に彼が聞いた話では、王子たちの死体は、骨も残らぬほどに焼かれたそうだ。その灰は、さらさらと風に舞い散り、あっけなく彼方へ消えたという。

神様は君だった つながり

ラインハット王国が魔物に襲われ、ぽつりぽつりと荒廃した城跡や空になった城下町に国民が戻ってきたころ。そこに広がっていたのは、絶望だった。

結界が破られ、魔物の闊歩する住居だった場所。住む家を追われた浮浪者が、魔物に怯えながらも我が物顔で残された家に住み着く。多くの者が亡くなった城からは、何やらよからぬ雰囲気か漂っていた。故郷に戻ることは諦め、避難先に本格的に住むことを決める者。それでも、己の生まれた土地を取り戻そうとする者。その有様を目にした者たちの反応は、それぞれだった。

「わしは、ラインハットが好きじゃ」

そんな中、とある老人がぽつりと呟いた。周囲にいた人々は、不思議とよく響くその声に、耳を傾ける。

「何が起ころうと、この国を案じ、良くしていきたいという気持ちに変わりはない。諦めるには、もう年を取りすぎてしまったようでのう」

誰かが、「私だって」と声を上げた。

「この国が、好きだわ。陛下の守ってくれた命だもの。この国のために、使いたい」

誰かが、力強く頷いた。

「魔物なんかには負けちゃいられねえよな。陛下の愛したこの国を、俺たちで守ろう」

ぽつり、ぽつり。こぼれ落ちるような声に呼応して、どんどん声たちは大きくなった。共鳴し合い、響き合い、それはまるで歌のように、流れる河のように、絶望をすすいでいった。

「守ろう、この国を。だって、今まで守ってもらっていたんだから」

それから、ラインハット王国は、名を変えずそこに在った。国民を愛し、国民に愛され、善政を敷き、どんな困難にでも立ち向かう、偉

大な王がいた。そのことを、誰もが忘れることはない。この国は、何があつても、国民を守つてくれた。だから、今度は国民が「偉大な王」がいたことを、永遠に守り続ける。

そういうわけで、ラインハット王国は、王のない王国となった。

——という情報を耳に入れたとき、オジロンは幼いラインハットの王子たちへ何と伝えるべきか、大いに迷っていた。まあ、そわそわと伝えたところで、当の本人たちがさほど気にした様子を見せなかったため、肩透かしをくらった気分となったものだが。

「王のない王国」の国民たちの様子が随分と落ち着いてきたようだとその報告を受けて、しみじみとその頃のことを思い出していたオジロンは、すくすくと育っている少年たちを見やる。

あの痛ましい事件——前王と、グランバニアにとつてかけがえのない忠臣を喪つてから、三年。子どもたちはいつも鍛錬を怠らず、勉強に励み、あまりに健気に過ごしていた。それにほつとする気持ちと寂しく思う気持ちを抱き、オジロンは己の中に生ずる矛盾を、ふるふるど頭を振つてどこかへ追いやった。

こちらへ来たばかりのときは、仇を討つのだ、魔物を殺すのだ、母であるマーサを探すのだ、天空の勇者を探すのだと騒いでいた彼らも、オジロンが幼い子どもが旅をすることの危うさ、魔物の恐ろしさ、その他もろもろについて、こんこんと伝えていたら、ある日ぱったり何も言わなくなった。きつと、自分たちなりに納得したのだろう。

オジロンとて、子どもたちの言い分は分かる。兄であるパパスは、偉大な人だった。国民の誰もが彼を慕っていたし、それは弟であるオジロンも同じことだった。パパスが己に頼んだことを、なんとしてでもやり遂げたいという気持ちは痛いほど分かる。

それでも、そうだとしても、それは子どもがやることじゃない。やるとするならば、大人になってから。しかも、彼らには「子どもだから」という理由で命を狙われたこともある。

悲劇のもととなった「光の教団」の本拠地はセントベレス山という場所にあり、人間の足で登れるような場所ではないこともあって、き

ちんとした抗議はできなかった。しかし、オジロンが世界中の国々にその脅威を伝えたことが功を奏しているのか、近年は不気味なほど目立った話は聞かない。とはいえ、子どもだけの旅が危険であることに違いはないだろう。誰か従者を付けるにしても、適当な者が中々いない。

それゆえ、気持ちは分かったとしても、オジロンは何度も何度も「全員が十八歳以上になってから」と言い聞かせてきたのである。

オジロンが日課である王子たちの見守りを終えて政務をこなしてしばらくすると、バタバタとにわかに関内が騒がしくなった。

「何かあったのか？」

「実は……」

受け答えたのは、頭を抱えた大臣であった。気まずそうな兵士たちを一瞥してから、彼は「このようなものを侍女が発見いたしました」と一枚の紙を、心配性の国王へと見せた。

「王家の紋章」を取ってきました。戻ってきたら、旅立ちの許可をください」

間違いなく、リュカの筆跡である。子どもたちには、旅立ちはおろか、グランバニア国内から出ることすら許可をしていない。三人は死んだことになっていて、万が一外出したときに、誰かに勘付かれてはならないからだ。グランバニア国内でも、三人が王子であることを知っているのは上の役職の者や、サンタローズの村で戦った兵士たちだけという建前になっている。実際は、ヘンリーとデールはともかく、前王によく似たリュカは町の人たちの知るところとなっているが。

「部屋には、リュカ殿下やヘンリー殿下、デール殿下はもちろん、ゲレゲレもおりませんで……」

「一体誰が、あの子たちに『王家の紋章』のことを？」

「国史の勉強の際に出てきたのでしょうか。既に兵士に後を追わせました。陛下は御安心なさってください」

オジロンは深く深く、ため息を吐いた。グランバニア王国の筆頭王位継承者であるリュケイロム・エル・ケル・グランバニアは、父親で

あるデウムパポスト、そんなところばかりがよく似ている。顔立ちは母親に似て、可憐な少女のようなのに、誰より頑固だ。「こう」と決めたらそれに向かって止まらない。素直なので大人の言うことはよく聞くが、やはり内心は「子どもだから」という理由で旅立てないことに相当焦りや悔しさを感じていたのだろう。

まあ、ヘンリーもデールもいるし、ゲレゲレもついている。子どもだから、魔物にとって死んだことになっているからと国から出ることを禁じてはいるが、彼らは強い。子どもながらに、ほとんどの兵士には勝てる實力を持っているのだ。

ただ、だからと言って心配しない理由にはならない。兵士が向かっているのならば最悪の事態にはならないだろうが、オジロンは兄とラインハット王国の遺児たちの元気な悪戯顔を思い浮かべて、困ったように笑うしかなかった。

*

九歳になったリユカ、十歳になったヘンリー、七歳になったデールは、久々に外に出られてご機嫌なゲレゲレを連れて、にやりと顔を見合わせていた。

「上手くいったな」

「当たり前ですよ、兄さん。ボクたちはあの『悪戯四人組』ですからね」
城を抜け出して、王家の証があるという洞窟に向かう道すがら、彼らは子どもとは思えないほど順調に魔物を倒していた。

「大臣のやつも、馬鹿だよなあ。『王家の紋章を取って来れるほどの實力なら、陛下も認めてくれるでしょうに』なんて聞いたら、オレたち抜け出すに決まってるじゃん」

「……うん、そうだね」

にこり、リユカは微笑む。城の方をちらりと見て、再び歩を進めながら。

「本当に、お馬鹿さんだよな」

あまりに順調な道のりだった。城の者たちには気付かれていない

が、彼らは気付かれないうように毎日のように城を抜け出しては、鍛錬の間に魔物を倒し、「戦い」の感覚を忘れないようにしていた。城での訓練、魔法の勉強、城外での実践。三年間、欠かすことなく積み重ねてきたそれらは、「ただの子ども」というにはあまりにも凶抜けた実力を彼らに与えた。

「王家の紋章」もすぐに、何の問題もなく手に入れた一行は、追ってきた兵士たちに悪戯小僧の笑みを向ける。

「殿下！ 探しましたぞ！」

「まったく、何をお考えですか！ こちらへ……」

「何を、じゃないよ。僕たちは大臣の『誘い』に乗ってあげたんだ」

リュカは黒い目を細めたまま、どたどたと走ってくる兵士たちの言葉を遮った。彼の目は、雪を溶かし、草花を芽吹かせる、あたたかな「春の日差し」と喻えられることがある。

——とんでもない。

ごくり、と兵士たちの喉が鳴った。その目は、やわらかな日差しなどでは到底ない。迂闊に近づけば身を焦がす灼熱、あるいは見る者を芯から凍らせる絶対零度の眼差しだ。

「僕ら、魔物には敏感なんだ。それも、人間に紛れているようなやつには、人一倍」

「な、何をお言いで……」

兵士は顔を引きつらせた。身に覚えのない言葉に対する困惑ではなく、どうにか誤魔化そうとする者の表情だ。それを子どもたちが見逃すはずもない。ひゅん、と音がしたかと思ったら、リュカの小さな体は兵士たちの目の前から消えた。

「分かっていたんだ。大臣が魔物と手を組んでたってことは」

「オレたちを城から抜け出させて、始末するつもりだったんだろ？」

さすがにちよつと分かりやすすぎるぜ。まあ、倒されてやるつもりもないし、腕試しにはいいかと思ってな」

いつの間にか、リュカとゲレゲレは兵士たちの背後を取っていた。にやにやと笑うヘンリーと、呆れ顔のデールも剣を構えていて、そこに一切の油断はない。

「ボクたちを挑発したかったのか、それとも本当に引つかかると思っていたのかは分かりませんが、もう少しよく考えた方がいいですよ」
「お、俺たちは人間だ！ 大臣に脅されて……っ」

一人の兵士がそう叫んだ瞬間、ゲレゲレの牙が足に食い込んだ。悲鳴をあげた兵士は、カバのような魔物に姿を変え、周りの制止も聞かずに、ゲレゲレへと斧を振りかぶる。

「今、デールに『よく考えろ』って言われたばっかだろ？」

魔法の光に包まれたと思った瞬間、魔物は首を切られていた。あまりに速い連携。ヘンリーがルカナンを掛け、その直後、魔物の柔らかくなった皮膚にリュカが剣を滑り込ませたのだ。

「一応、魔力は温存しとくか？」

「城に戻った後にも何か罫が用意されてないとは限りませんからね」

「だから、デールとゲレゲレは城に残って大臣の監視してくれって言っただろ。別にこんなやつらオレたちだけで平気だよ。なあ、リュカ」

「そうだね。でもまあ、万が一のこともあるし、別行動は嫌だな」

元の姿に戻り、脱兎のごとく逃げ出そうとした魔物たちに、リュカがバギマの呪文を放ち、足を止めさせる。背を向けた彼らに、デールが跳躍し、魔物たちの足へと浅く傷を付けた。

「じゃ、ちやつちやつと片付けるとするか」

少年たちの言葉通り、魔物はすぐに倒れた。ふう、と息を吐いたヘンリーは、憂いを帯びた顔をしている親友へと視線を向ける。

——別行動は嫌だな。

何気ない一言でも、思い出さずにはいられない悲劇。永遠に忘れることはない。あるいは仇を取ったとして、消えることのない、脳裏に刻まれた深い絶望。

ヘンリーは憤っていた。魔物たちの杜撰な計画は、まるで自分たちの国のときのようだったからだ。国の重鎮に取り入り、内部から魔物を侵入させる。今では誘いに乗ってやっても負けないだけの力を付けたから良いものの、やり口が気に入らない。欲に付け込まれる人の弱さ、人の欲につけこむ魔物の醜悪さ。そのどちらもが、ヘンリーに

とつては唾棄すべきものだった。

大方、リユカたちを「事故」として処分した大臣は、あの人の好いオジロンを言いくるめ、内部からじわじわと魔物の力を使って国を乗っ取るつもりだったのだろう。そうはさせるか、と少年たちはあからさまな大臣の話を聞いて、作戦を練った。

まず、万が一にも魔物に「処分」なんてされないように、準備は万端に。次に、大臣の後ろ暗いところを徹底調査。証拠はまだ不十分だったが、いくらか揃ったものは万が一のために、他者に預けてある。バーテンの娘でよく酒場に遊びに来ているルイーダという少女だ。ヘンリーより二つ年上だが、賢くて他人の事情を察する力と、余計なことは言わない性格の、十二歳にはとても思えない女の子である。「時が来たらオジロン陛下に渡してほしい」と伝えて証拠の束を渡すと、「ええ、大事に持っておくわね」と思春期の危うさを持ったどこか煽情的な微笑みを浮かべていた。

大臣を追い出した後は、魔物の恐ろしき、醜悪さをオジロンに伝え、まずは四人で「ラーの鏡」を探しに行く許可を得るつもりである。いきなり母を探したい、天空の勇者を探したいと言っても、あの心配性な国王は頭を縦には振らないだろう。となれば、ラインハット地方で伝説として残る「ラーの鏡」を、魔物の脅威から国を守るためという理由で探しに行く。具体的な物であれば、不確かな「探しもの」よりはよほど簡単に許可が下りるはずだ。

そういったことを積み重ねながら、少年たちはいずれは世界中を旅して回る予定だった。大人になるまで待つてなどいられない。けれど、オジロンの言うことも痛いほどに分かる。彼らはまだ子どもで、そこそこ戦えるようになったものの、慢心はしていない。世の中には、あのパスが敵わなかった魔物がいるのだ。だから、小さなことから積み重ねて、その果てに必ず悲願を遂げて見せる。少年たちにはその覚悟があった。

「……おい、城の方、なんか変じゃないか？」

ぼつり。ヘンリーが眉を顰めて呟く。グランバニア城の上空には、分厚い雲が掛かっていた。紫色のそれは、どうにも不気味な雰囲気をも

漂わせている。

「灰色の、雨？」

次に呟いたのは、デールだった。すん、と鼻を動かしたゲレゲレが、困惑したようにリュカを見る。

「——急ごう」

喉がからからに乾いていくのを感じたりユカは、掠れた声で友人たちへそう告げた。嫌な予感がする。とてつもなく、良くないことが起こっているような気がする。

雨はすぐに止み、一行が城へと着いたときには、不気味な雲も、灰色の雨も過ぎ去ったあとだった。地面には水溜まりがあり、城は妙な静けさが漂っていた。

いつもはいるはずの門番はいない。しかし、城内に入れば、その姿を確認できた。慌てた表情の若い兵士に、呆れたような顔でタオルを渡す壮年の兵士がいる。

「何が……」

デールが啞然とした顔で呟く。しかし、彼らは何も言わない。時でも止まったように、彼らは動きを止めていた。

「おい、みんな！ どうしたんだよ！ 誰か動けるやつはいないのか！？」

ヘンリーが叫ぶ。やはり答える者はない。皆一様に、朗らかな普段の生活を送っているように見える。動きを止めた人々は、精巧に創られた人形で、ここは等身大の人形を配置した壮大な箱庭なのだと言わんばかりの、悪趣味さがあった。

「リュカ、城の中を見て回ろう。動けるやつ、話だけでもできるやつがないか探すんだ」

ヘンリーの提案に、リュカは頷いた。しかし、そんな者は誰もいなかった。グランバニア城は、パパスの代より、城内に町がある。国民を守るために、パパスが国王となったときに真つ先に着手した政策だった。堅城に守られた国民たちは、誰もが不安を宿すこともなく、穏やかな表情を浮かべている。謁見の間には、困り顔の兵士と、頭を抱えるオジロンがいたが、それも悪戯小僧たちに頭を悩ませる大人と

思えば、微笑ましいものだろう。

雨は確かに降っていた。それが呪いの雨だとして、けれどグランバニアの国民はみな屋内にいた。唯一、大臣だけが城の外で、誰かを待っているかのように苛立った表情を見せながらひっそりと立っていたが、そうだとしても、それ以外の者は雨に打たれていないはずなのである。

「一体……グランバニアに何が起こったって言うんだ!？」

「こんな呪い、城の文献にもありませんでした。時を止める魔法でしようか?」

兄弟の言葉に耳を傾けながら、リュカは目の前に立つ大臣をまじまじと見つめていた。

「大臣だけは、石化してるように見えるよ」

「まあ、確かにそりやそうだが——」

リュカの言葉に反論しようとしたヘンリーが、ハッと何かに気が付いたように目を見開く。

「待て、あの不気味な雨が、『石化の呪い』の効果を持つんだとしたら、城の中にいたみんなは、不完全な呪いに掛かってるって考えることもできるか……?」

「それなら、『ストロスの杖』に、石化の呪いや麻痺の解除の効果があるはずですよ」

少年たちは目を合わせた。リュカがちらりと城へと視線を向ける。

「城に張ってある魔物除けの結界は有効だと思う。一応、後で点検に行くけど。……旅の目的が、また一つ増えたね」

「今更さ。オレたちで、みんなを絶対治してやろう」

「魔物たちの目的は、グランバニアの人々の『口封じ』でしょうね。そうになると、ラインハット地方も危ないかもしれません。ラーの鏡を探しに行く際に、様子を見に行きましよう」

子どもたちは、めげなかった。どんなに苦しくても、前に進むと、三年前に誓ったからだ。

「僕は城の結界を確認してくる。デールも一緒に来て。ヘンリーの髪は目立つから、僕たちが確認してる間になんとかしておいてね。ゲレ

ゲレ、ヘンリーを頼んだよ」

デールの手を取り、リュカは歩き出した。ヘンリーは「へーい」と気の抜けた返事を返し、緑色の髪をがしがしとかく。

「……アイツはまだ、教団なんかにいんのかなあ」

なぜか、赤い眼をした黒髪の少年のことを思い出した。あれから、リュカは彼について何も言わない。ヘンリーたちも、あえて話題に出すことはしない。

頭を振って、ヘンリーはゲレゲレのたてがみを撫でた。つやつやとした毛皮は、相変わらず手触りが抜群にいい。

「さ、染め粉を取ってくるか。母上譲りの髪、気に入ってるんだけどなあ」

王子を連想させるものは全て手放して、少年たちは予定とは違う形で旅立つことになった。身分を偽り、名を偽り、姿を偽り、地図を片手に。

亡国の王子たちは背筋を伸ばし、大地を踏みしめた。

——目を覚まさない。

誰かに、声を掛けられた気がして、私はまどろみの中、耳を澄ませた。水の音が聞こえる。それは潮が満ちた穏やかな海のようにであり、山奥に湧き出る泉のようであり、そのどちらも全くもって的外れであるような感じの音だ。

全身がひどく怠くて痛いのが、昔むかし、己の記憶にすらない母の羊水に浮かび守られているような感覚に、不思議と安心感を覚える。このままより深く沈んでいきたいとさえ思ってしまう。

「アルマー」

誰かの心配そうな声が聞こえた。私は顔も知らぬその人の呼んだ名前を知っている。賢く、頑固で、優しく、責任感の強い、小さな女の子の名前だ。海で溺れているところを助けたことをきっかけに、一緒に旅をしていた。旅がひと段落しようかという頃、今度は魔物の魔

手から助けようと、無我夢中で腕に抱いた幼子だ。

「アルマ……」

口からこぼれる名前。そうだ。自分は今、どんな状況にある。あの子は無事なのか。魔物はどうなった。アダムは魔物の呪縛から逃れられたのか。サンタローズへ逃げた王子たちは。——リュカは。

「ベホマ」

あたたかな光に、全身が包まれる。あれほど開けるのを拒んでいた瞼が、自然と開いた。

「どこか痛いところはありますか？」

柔和な顔。さらりと顔に掛かる黒髪。緑色の帽子と洋服。よく日焼けした青年は、自然な動きで私の横で眠る少女——アルマを抱きかかえた。私は恥ずかしいことに、彼が抱き上げるまで、隣で眠る少女の存在に気が付けなかった。

我ながら情けないほどの緩慢な動きで身を起こし、「ここは……」と、青年の問いには答えず、思わず漏れ出た言葉と同時に見慣れぬその場所をきよろきよろと見回す。

楽園のような場所だった。さらさらとした肌触りが心地よい白い砂。うららかな春を思わせるやらわかな日差し。取り囲む緑と、音さえ吸い込みそうな岩肌。それに、なんと言っても水が美しい。陽の光を浴びた水面が、きらきらと七色に光っているのだ。

「ここは七色の入り江という場所です。僕はアルス。あなたの名前を聞いてもいいですか？」

他人に聞かせることを意図していなかった眩きに、はつきりとした返事をされたために、私は「あ、ああ」と戸惑いながらも頷いた。そして、改めて上級魔法をいとも簡単に使ってみせた青年をじっと見つめる。

一見、頼りなさそうに見えるその青年が只者ではないということ、目を見れば瞭然だった。

息子のリュカと同じ、黒目。その目を見て、私はなぜか確信を持った。彼こそが、アルマの言っていた「勇者のアルス様」なのだ。

「私はパパス。回復呪文を掛けてくれたのはあなたでしょう。感謝致

します」

遅くなってしまった謝意を述べれば、青年は気にした素振りもなく、素朴で無害そうなその顔を綻ばせる。

「いいえ。それより、怪我の割に元気そうでよかった。あれくらいの怪我だと、傷が塞がってもしばらくつらいだろうと思ってましたけど」

にこにここと、見た目に違わぬ穏やかな口調で返すアルス殿に、私はどうしても聞かねばならぬことがあった。

「すまぬが、アルス殿。ここは、グランエスタードという国でしょうか？ あるいは、コスタールでしょうか」

ぱちくり。子どもがそうするように幼い挙動で、アルス殿は瞬きを数回した。けれど、そこには馬鹿にしたような雰囲気は一切ない。

「ここはエスタード島にある入り江なので、コスタールよりはグランエスタードの方が近いですね。良ければ、僕の家で話をしませんか？

アルマが見つかったこと、皆にも伝えてあげないといけないし」

神のつくった遺跡だというその場所を通りながら、その空気の神聖さに目を奪われそうになる。存外きびきびと歩くアルス殿の背を追いながら、「随分遠いところに来てしまったようだ」と今更ながらに、たった一人で親元を離れ、見知らぬ土地に来てしまったときのアルマの心細さを想った。

父親

熱い、熱い、熱い。うねる炎に呑み込まれたように、濁流に押し流されるように、私は自分の胸を中心に体が溶けていくような感覚を覚えた。

意識を保っていられないくらいの、抗いがたい「引力」。そのとき、なぜそれを「引力」と感じたのか、今となってはよく分かる。

——まさしく、それは「引力」だったからだ。

「アルマ」

幻聴が聞こえる。勇者様の声だ。私は死んだのか。でなければ、別の世界にいるはずの勇者様が私の名を呼ぶはずがない。まさか、あの場に来て、私とパスさんを救ってくれるなんて、そんな都合のいい話があるわけがないのだから。

「アルマ、僕だよ。目を覚まして」

ああ、ああ。

涙がこぼれそうになる。何も守れなかったくせに、幻の中で勇者様を求めている己の浅ましさに。

「アルマ、大丈夫だよ。怖い目に遭ったのかな。僕だけじゃない。シャークアイさんも、みんなここにいるよ」

頬に柔らかな布を押し当てられて、それが涙を拭ってくれたのだと理解し、私は甘美な幻に抗うことができず、ゆるりと目を開けた。

そこには夢にまで見た人々。私を抱きかかえるシャークアイ様に、その隣から顔をのぞきこんでくる勇者様。

「う、うえ……」

嗚咽が漏れる。なんと残酷な幻だ。愛する人たちのところに私は戻れなかった。約束も果たせず、何も守れず、ただ大切な人たちの居場所をめちゃくちゃにしておいて、それなのに、最期は楽になろうと愛する人を求めてしまう。

「アルマ、戻ってきてくれて本当によかった」

「私——！ なにもできなかつた！ 助けてあげるって、そう思ってたのに！」

私はわんわんと泣いた。まるで、赤子が産声をあげるように。死んでおきながら、酸素を求めるように泣いた。

——と、思っていた時期が私にもありました。

泣き疲れて眠り、目が覚めても、勇者様とシャークアイ様、それからマリベル様やガボ様、普段はグランエスタード城にいて王族の方々をお守りしているはずのアイラ様や、天上の神殿で過ごしていらつしやるはずのメルビン様までいた。それから、——。

「おお、目が覚めたか」

パパスさんが、いた。魔物にやられた傷も、なかつたかのようにきれいに治っている。

「アルマ。混乱していると思うけど、君が大変なことに巻き込まれたっていうのは、パパスさんから聞いたよ」

「え、あ、はい」

私は一旦深呼吸をして、ひたすらシャークアイ様を見つめた。うん、私のお父さんは今日もかつこいい。現在、マール・デ・ドラゴーンの自室にあるベッドにて横たわっていた私は、上半身を起こして一方ずつ、視線を合わせていった。記憶と違わない大切な人たち。それに心の底から安心を覚える自分と、戸惑いと罪悪感を抱く自分があった。

「えーと……どこからお話しすればよいのか分かりませんが、私が石板に呑み込まれてからのことを、伝えたいと思います」

シャークアイ様は私の頭を撫で、それから水の入ったコップを差し出してくれた。優しい。一口水を飲んだ私は、ぽつり、ぽつり、と「冒険の書」に記録したのと違わないこれまでの冒険を話し始めた。「お化け退治」も「妖精の国」も、誰一人として子どもの妄言だと笑わなかった。以前笑っていたパパスさんでさえも、真剣な顔で聞き入って

いる。

「私とパパスさんは、魔物から嘔き出した黒い霧に吞まれました。そのはずが……胸が、ひどく熱いと思って。そうして、気が付いたらここにいました」

「以前、君に『水のアミュレット』をお守りとしてあげたよね」

「はい。今でも……あれ？」

アルス様の言葉に、私はいつも付けているお守りを見せようと、服の中に手を挿し入れた。しかし、お守りはない。

「壊れていたんだ。水の精霊の力が宿ったアミュレットが。そして、『石板に吸い込まれていなくなった』とシャークアイさんから報告を受けていた僕が君とパパスさんを見つけたのは、七色の入り江だった」

「水の精霊は何にも教えてくれないんだけど、状況的に、アンタの危険を察知して水の精霊が旅の扉を作ったんじゃないかっていうのが、あたしたちの考えよ」

アルス様に続いたマリベル様の言葉に、私はどうしても胸につつかえていたことを吐き出した。

「それじゃあ、あの……石板はどうなったんですか？ 私を呑み込んだ、あの石板は」

「旅の扉が消え去った後、ばらばらに砕けてな。竜巻に巻き込まれたように、どこかへ散ってしまった」

端的に質問に答えてくださったシャークアイ様の言葉に「そんな！」と悲鳴のような声が出る。シャークアイ様は何も悪くないのに、責めるような言い方になってしまった。しかし、それを謝る余裕は今の私にはない。

「私、私、あの世界に戻らないと！ リユカとヘンリーとテールを、ゲレゲレを助けないと!!」

「……その話、アンタの目が覚める前に、そこのパパスさんともしたわ」

マリベル様がため息をついて、私の頬を両手で挟んだ。怒ったような表情だ。

「アンタ、分かってる？ 魔物に利用されて、殺されかけたのよ」

翡翠の目は、感情的であるけれど、極めて冷静だということが、痛いほどに伝わってくる。

「アルマ、アンタはただの子どもだわ」

息が、上手くできなかつた。全くもってその通りのことであるのに、勇者様たちは、マリベル様は、なんだかんだと言って私のことをいつだって応援してくれると思っていたからだ。

何か言いたいのには、言葉はひとつとして出ない。鼻の奥がつんと熱くなり、私は伝えることを放棄してせりあがろうとしてくる涙を、必死で堪えた。

「でも、私——約束して——」

そんなとき、ぽん、と頭に大きな手が置かれる。視線を上げれば、パスさんが「心配ない」とでも言うようにやわらかく目を細めて私を見ていた。

「ただの子どもだが——アルマ、おまえはオレの娘だ」

にやり、と笑ったのは、シャークアイ様。堪えていた涙が、ぽろり、とこぼれ落ちる。パスさんの手が私の頭から外れて、代わりと言わんばかりにシャークアイ様が私の髪をいつもよりは些か手荒に、ぐしやぐしやとかき混ぜた。

「おまえとパス殿をアルス殿が七色の入り江で見つけてから、目を覚ましたパス殿に事情はあらかた聞いていた。目が覚めたおまえが再び眠ってから、皆で話し合ったのだ」

頭から離れた大きな手が、小さな私の両手を包む。この人さえいれば安心できて、その背中について行けばよくて、どんな恐怖も勇氣に変えてくれて。大切な、私のお父さん。

——ヘンリーとデル、リユカからは、私が奪ってしまった。

「アルマ。一度決めたことは、やり遂げたいだろう。それも、大切な友のためだ。オレは、どんなことがあっても、おまえならば乗り越えられると信じている」

目を見る。広大な海のような、見る者の心を落ち着ける目だ。シャークアイ様は私にとっての海だった。すべての始まり。潮騒の

音と共に、私の波立つ心を鎮めてくれる。自ら命を絶った親不孝者に、もう一度やり直せるのだと、人は変われるのだと、語らずともそう思わせてくれる、絶対の寄り辺。

「私、何もできなかったんです。災いを招いたのは、私なのに」
ぼろり。涙と同じように零れ落ちた。

「それなのに、誰も私を責めなかった。責めてくれなかった！『この城に来てくれてよかった』なんて、そんなはずない！私が何もかもを奪ったんです！私、赦されちゃいけないはずなのに！！なのに、私の『罪』を、誰も罰してはくれない！！」

「アルマ」

息を荒げながら吐き出される私の言葉に対して、被せるように勇者様が言った。

「無知はつらいよね。非力は苦しいよね」

いつもの穏やかな顔は、少しだけ、悲しみをはらんでいるように見えて、喉の奥で、ひゅつと息を呑む。目の前の人の抱える深淵に引き込まれそうな錯覚に陥りながらも、私はその人から目を逸らすことができなかった。

「僕たちもそうだったよ。『世界を救った』と一言で伝えられても、救えなかったものだってたくさんある。だからね、アルマ」

勇者様が、にこりと笑った。いつもの勇者様である。ほつとしていいのか、それとも深淵を見入ったままでいたかったのか、自分でも分からないまま、私はただ勇者様を見つめた。

「僕たち、決めたんだ。君が旅立ちたいなら、それは構わないと思う。だけど、さつき言ったように、無知はつらいし、非力は苦しい」
「マリベルの言う通り、あなたは子どもで、大人が旅する以上に危険なこと、怖いこともたくさんあるわ」

子どもの我儘を仕方なく受け入れる母親のような表情をしたアイラ様が勇者様の言葉を引き継ぐ。私は思わず、手を握ってくれているままのシャークアイ様を見た。相変わらずかっこいい。

「あんま弱つちいままだと、オイラたちも心配だしな！」

「アルマのためにも『試練』は必要でござろう」

ガボ様はいつも通り元気だし、メルビン様も孫を見るおじいちゃん
の目でこちらを見てくれている。

「だから、条件を付けるわ」

私は、むすつとした表情でそう言ったマリベル様に、不思議と安心
感を覚えた。なぜだろう。マリベル様って、表面上では厳しいしキツ
い感じもするけど、こつちを思いやってくれるのがすごく伝わって
くるんだよなあ。鈍感な人には分からないみたいだけど、マリベル
様って、やっぱ良い人だよなあ。

なんて、思わず現実逃避をしていたら、つらつらと「旅立つための
条件」を説明された。

ひとつ、世界中に散らばった（と思われる）石板は、パパスさんと
二人で集めること。ひとつ、陸海空すべての移動手段において、対価
なしに勇者様やマール・デ・ドラゴーンを頼らないこと。ひとつ、パ
パスさんと二人で、マリベル様を倒せるようになること。

「ま……マリベル様を、倒す、ですか？」

私が聞き返したのは、最後の条件である。その前の二つに関して
は、「当然だろうな」という感じがするし。

「ええ。やりたかないけど、アルスは漁があるから、アンタたちのタイ
ミングに合わせてあげられないし、それを言うと、仕事をしているア
イラやメルビンもそうでしょ」

つん、と顎を斜め上に逸らして、マリベル様が拗ねたように言う。
私はまだ、いろいろと脳みそが追いついていなかった。

「オイラでもいいけど、マリベルが『自分にやらせる』ってうるさくつ
てよお」

「余計なこと言うんじゃないわよー！」

「いってえー！」

ゴン、と頭にゲンコツを落とされ、ガボ様が涙目になる。

「しかし……その、マリベル殿は女性。アルマだけでなく、私とも戦う
のは、負担になりませんか？」

そのやり取りをスルーして話を進めたのは、困った顔をするパパス
さんだった。ある意味真つ当で紳士的な反応に、マリベル様はニヤリ

と笑って指先に火の玉を灯す。

「あら、それなら確かめてみましょうか？ もし『女は斬れない』とか、そういうこだわりがあるなら痛い目見る日が来るだろうし、信条に反するなら尚のこと、鍛えておいた方がいいわよ」

「ちよつと待つてくれないか、マリベル殿。ここは船上。やるなら、もつと広いところで頼む」

私が展開についていけない間に、マリベル様とパパスさんが戦うことになっている。シャークアイ様が冷静に言葉を挟んでいて、私のお父さんさすがだなと思った。

おろおろしていると、あれよあれよと私たちはエスタード島の東、特に何も無いところまで行き、二人の試合を観戦することになった。ちなみに、陽気な海賊たちは賭けることもしていない。賭けが成立しないからだ。——もちろん、全員「マリベル様が勝つ」と確信しているからである。

「じゃあ、パパスさん。僕が審判を務めますね」

朗らかな顔でそう伝えたアルス様が、試合開始の合図を出す。私は試合展開はさることながら、自分の気持ちやら今後のことやらを整理する暇もなくこんなことになっていて、眩暈がした。

さて、試合結果はもちろんマリベル様の勝ち。マリベル様はすばやい。試合開始直後から己に補助呪文を掛けまくり、パパスさんの攻撃をほぼ全部回避。器用かつ正確にパパスさんにメラミなどの中級魔法を当てて（多分）パパスさんの実力を測りつつ、最後はヒヤダルコでパパスさんの足を凍らせ、華麗にフィニッシュ。

「なんと……お強い……」

信じられないものを見る目でパパスさんに見つめられ、マリベル様は得意げな顔になった。

「パパスさんも、思ったよりは強かったわ」

ちなみに、とても怖い話をする、マリベル様は現在無職——言い方が悪いな。マリベル様は現在、ダーマの神殿で就くどの職業でもなく、「網元の娘」として過ごしている。

ダーマの神殿には、大別して三種類の職業がある。初級職と呼ばれる誰にでもなれる職業と、上級職と呼ばれる、一定の条件を満たさないと成れない職業。それから、モンスター職と呼ばれる「モンスタアの心」という道具がなければ就けない職業。

それぞれメリットとデメリットがあり、初級職は誰でも就くことができるが、身に付く特技や魔法も基本的なもの。しかし、覚えた特技や魔法は、その職業をやめてからも使い続けることができる。

上級職は条件こそ厳しいものの、強力な特技や魔法を身に着けることができ、職業に合わせて身体能力も向上するそう。しかし、神殿に規制されているため、その職業をやめると覚えた特技や魔法は使えなくなる。

モンスター職は、極めるのや希望の職業に就くまでにとっても時間が掛かるが、神殿に規制されていない分、強力な特技や魔法を一度覚えれば、ずっと使い続けることができると聞いたことがある。

つまり、マリベル様は以前身に付けた初級職の特技や呪文しか使えない中、戦いのセンスと経験を駆使して、パパスさんを圧倒したことになる。

もちろん、パパスさんは弱くない。むしろ強い。この世界においても、多分強い部類だと思う。

しかし、マリベル様はアルス様たちと一緒に、この世界を創造した神様さえも倒したお方だ。平和になった世界で退屈しているのか、それとも戦いの感覚を忘れないようにしているのか、はたまた別に目的があるのか、勇者様たちはたまに神様に戦いを挑んでいる。もちろん、互いが互いを滅ぼすためのものではなくて、平和的な真剣勝負だ。

神様は、「移民の町」と以前は呼ばれていたらしい「シムティアの町」に住んでいるため、非常に気軽に会いに行くことができる。私も会ったことがある。しかし戦っているところは見たことがないので、気のいいおじいちゃんという印象を受けた。もちろん、恐れ多くて誰かにこんなこと言えやしないが。

ともかく、単独ではないとはいえ、この世界の創造神に、勇者様方

と共に何度も勝っているらしいマリベル様はどう考えても世界最高峰の実力をお持ちだ。待つて、そんな人に二人掛かりと言えど、勝てるかな。不安しかない。でもマリベル様御本人からすると、「私はしばらく旅から離れてたし、一番弱いわよ」らしいし……。

「アルマ、おいで」

パパスさんに何事か話し掛けているマリベル様に怖いっていると、ここにこ笑うアルス様に手招きされる。

「マリベルに『勝てない』って思った？」

「今のところ、勝てる要素がひとつもないです……」

うなだれて答えると、アルス様はしゃがみこんで、私と視線を合わせた。いつ見ても、世界最高峰の実力をお持ちの方とは思えない。それは馬鹿にしているわけではなく、素直な感想というか、人柄の良さが顔とか雰囲気とかすべてに表れている勇者様だからこそ抱いてしまう、ひとつの「ギャップ」だった。

「一見遠回りに見える道でも、結果的に近道になることがある」

穏やかな声。まるで朝方の凪いだ海のような静けさがある。

「視点を変え、方法を変え、発想を変え、それでも目的だけを真っ直ぐ見るんだ」

あるいは、山奥にある川の源流のような清々しき。初夏の澄んだ湖面。時の流れのごとくゆるやかかつ力強い大河。

「アルマ。君ならマリベルに勝つことだってできる。だって君には『目的』があつて、『仲間』までいるんだから」

七色の入り江。私とパパスさんが倒れていたという、水の精霊が拠点とするその場所。きらきらと陽の光に照らされるその場所を初めて見たとき、私は「きれい」だとか「幻想的」だとか「神秘的」だとか、そんな感想ではなく、「勇者様の場所だ」という気持ちをも、納得とともに抱いた。

「——『やりたいことをやり遂げるのは、いつだって自分しかない』、ですね」

本当に、不思議だ。勇者様は小柄だし、絞り込まれてはいるのだろうが、見た目には筋肉質のように思えない。戦いを好むような性格で

もないし、富や名声を求めするようなタイプでもない。両親と仲が良く、お世話になった人たちとのつながりを大切にしてお人である。そんな人が、巨悪を倒し、世界を平和に導いた。悲劇のヒーローでもなんでもない、平凡だった漁師の息子が。

私は上手くできたか分からないけれど、精一杯の笑顔を勇者様へと向けてから、パパスさんへと駆け寄った。

俯くのではなく、前を向かねば。目下のやるべきことを、与えてもらったのだ。己の罪や、そのために与えられるべき罰に頭を悩ませるのではなく、できることをやる。

どうか、どうかそれまで。再会のそのときまで、私の大切な友達が、穏やかな日々を過ごせますように。そんな祈りが、せめて届きますように。

たとえこの空が、あなたたちの世界とつながっていないなくても。

夜。海上に停泊するマール・デ・ドラゴンの一室で、パパスとシャークアイは向かい合っていた。お互い、琥珀色に輝く液体の注がれたグラスを手に、一方は真剣な眼差しで相手を見つめ、一方はそれを受け流すような穏やかな表情を浮かべていた。

「良い酒ですな」

「荒くれ者どもには酒好きが多くてね。中でも一等良い物が手に入ると、自慢げに寄越してくれる」

コトリ。偉丈夫たちはほとんど同時にグラスを机に置き、しばし夜の静まり返った船上にて波の音に耳を傾ける。

「御息女を危険な目に遭わせてしまい、申し訳なく思う」

「何を言う。あなたが守ってくれたからこそ、今あの子がここにいるのだらう」

「私が旅に誘わず、誰か信頼のおける者のところに預けていれば、あの子は怖い目に遭うこともなく、自分のせいだと己を責め立てることも

なかった」

「しかし、あなたが我が娘を旅に連れて行かなければ、おそらくここに戻ってくることもなかったでしょうな」

シャークアイが首を振ったのに合わせて、その豊かな黒髪がさらさらと揺れる。アルマには「切るのが面倒なだけだ」と言っているその長髪は、彼女に物心がつく前まではその通りの理由で伸ばしたままにしていた。しかし、物心がついた娘がきらきらした目で「シャークアイ様の髪の毛、とつてもきれいな」と褒めたことに始まり、時折娘が結ったり編んだりしてくるのが微笑ましくて、切るに切れなくなってしまうといういきさつがある。

「我が息子のため、これからも危険に身をさらすことになりましょう」「何を言っているんです。『大切な友達のため』。男だろうが女だろうが、そこに命を懸けるべきと思つたのなら、自分の思う通りにすればいい」

「——あなたは、アルマが心配ではないのですか？」

シャークアイはそのとき初めて、その美しい顔貌に皮肉を帯びた笑みを浮かべた。始終穏やかだが、アルスの持つ穏やかさと比べると、緊張感をはらんでいるシャークアイである。「正義の」と枕詞が付いたとしても、海賊にしては上品すぎるその男も、そうして皮肉げな表情を浮かべると、「賊の頭領」としてふさわしい貫禄が見て取れた。

「危険に立ち向かいながら、その背を見せ、自らそう教えてきたのだ。アルマが危険に飛び込みたいと言つたとして、それを止める権利はオレにない。心配して、可愛がるだけなら船に乗せなければよかった」
パパスに、というよりは、自分自身に言い聞かせるような言葉である。

シャークアイは、海で溺れていて、今にも死んでしまいそうだった赤子を思い出していた。昨日のこのように、鮮明に脳裏に浮かぶ。あの時は天気が荒れていて、泣き声も雨音に紛れていた。けれどなぜか、彼女の声はシャークアイに届いたし、嵐の海の中、首も座っていない赤子は何かに守られるように、暗い水底に命を落とすこともな

かった。

彼女が目を覚ましたときのことだ。シャークアイは衝撃を受けた。その赤子はまるで全てを諦めているように、子どもらしい無垢さを瞳に宿さず、ほの悲しくシャークアイを見つめたのである。生まれたばかりの赤子が、世界に絶望するなど、そんなことはあつて良いはずがない。彼はその目を見て、自分の娘とすることを決めた。世界には「光」があり、それを求め、掴み、幸せになる権利が誰にでもあるのだと、彼女に知ってほしかったから。

シャークアイは、妻のアニエスにしばらく赤子の面倒を任せた。彼らは二人で考え、赤子を「アルマ」と名付けることにした。その日から、マール・デ・ドラゴーンの「姫」は、今もなお、船員みんなに愛されている。

すくすく育ったアルマは、次第に笑顔を見せるようになった。基本的に聞き分けの良い子どもだが、身ごもったアニエスをコスタールに置いて魔物の討伐に行くことになったとき、「コスタールに残るか」という質問には、頑として否と応え、珍しいなと思ったことも、よく覚えていいる。

「あのとき——我が妻、アニエスと共に陸に置いてくればよかったのだ」

それから、シャークアイはグラスを仰ぎ、中に残った液体を飲み干した。顔色は変わらない。

「さて、たればの話をして来たのではないだろう。パパス殿、あなたはオレから花嫁を奪う婿のように、許しを請いに来たのか？」

言い得て妙だ、とパパスは感じ、ふと笑みを漏らした。

「私が花婿で、アルマが花嫁ならばどれほど簡単なものだったか。私自身が妻にそうしたように、愛する気持ちそのままに、奪い去ればいいだけなのですから」

在りし日を思い出し、パパスはシャークアイをまねてグラスの中身を飲み干す。芳醇な香りが鼻から抜け、酒精がほのかに彼の口を軽くする。

「だが、アルマは私の愛する妻でなく、私はあの子の人生に対して責任が取れない。あの子は賢く、優しい。だからこそ己の選択に対して、気に病んでしまう。やはりまだ子どもで、導くことが必要だと感じます。ですが——導く先が、茨の道であると分かっている、その道を歩めとは、私には言えないのです。私たち家族と、魔物との因縁に、巻き込むわけにはいきません」

とぶとぶと、瓶からグラスなみなみになるまで水を注いで、シャークアイは立ち上がった。

「酒を一息に煽つたのだ。水の一杯も欲しかろう。なあ、パパス殿」

見覚えのある笑顔。それは、アルマが少年たちと悪戯をするときに浮かべるものとそっくりだった。そして、何となく嫌な予感がした。パパスが避ける間もなく、悪戯少女の父親は、グラスに入った水をパパスの顔に勢いよく掛けてきた。

「巻き込むわけにはいかない？ もう巻き込んでおいて？」

シャークアイは一見、子持ちどころか妻帯者にすら見えない。顔立ちが整っていること、自由気ままに物事に執着しない雰囲気、海賊の頭領という肩書き、それらの全てが、彼を一人の「男」として成立させていた。むろん、アルマを前にすれば、あたたかみのある「父親」の顔にはなるが、彼女なしで話すときは「家庭」という背景を感じさせない男だと、短い間でパパスはそう思っていた。

「重ね重ね、溺れていたアルマを助けてくれたことには感謝する。だが、今の発言はあまりに聞き捨てならないな」

シャークアイは間違いなく、父親であった。それも、パパスのように息子を持つ父親ではなく、娘を持つ父親である。特有の怒りが、ぴりぴりと肌を刺すように感じられた。

「アルマは自ら、その茨の道を進みたいと言ったのだ。あのアルマが」
パパスには、その一言が全てに思える。彼はシャークアイとアルマが実の親子でないことは知らない。それでも、この父親が娘に対して本物の愛情と、期待と、願いを抱いているのだということは十分に感じられた。

「あなたの取るべき責任は、アルマの人生に対してではない。子ども

が健やかに育つよう見守る、大人として当然の責任だけだ。あの子の人生はあの子のもの。責任を取るべきは父親であるこのオレだ。こればかりは他人になんぞ譲れんな」

ふん、と鼻で笑ったシャークアイに対し、パパスは思わず「ワツハツハ！」と笑いながら膝を叩く。

「これは参った。親馬鹿殿にする話ではありませんでしたな」

「こんなもの親馬鹿でも何でもない。普通だろう。それに、アルマはまだ旅立ってもいないんだぞ。パパス殿の心配はまだ先のことだ」

「いやはや……それはどうでしょうな。私も覚悟が決まりました。息子と妻に、再び会うために一から鍛え直します。アルマをシャークアイ殿のところへ無事送り届けるためにも」

にやり、水を掛けられたお返しのように笑ったパパスへ、シャークアイは手を差し出した。

「娘をよろしく頼む。あの子は頑張りすぎるくらいがあるからな」

ぎゅうう、と力いっぱい握られた手に、パパスも負けじと力を籠める。

「うむ、頼まれた。そういえば、我が息子のリュカはアルマを随分可愛がっておりましてな。我が家族になることもあるやもしれぬ。その時には、こちらこそよろしく頼みますぞ」

「幼子同士のじゃれ合いに、なんとも気が早いことだ。それに、アルマの伴侶となる相手はオレが見定める。せめてアルス殿のような男ではなくては」

「アルマの人生はアルマのものでしょうか？」

ぎりぎりぎりぎり……とお互いの腕に血管が目立ってきたころ。

当のアルマは「眠れない」と相談した相手のマリベルにラリホーの呪文を掛けられて強制的に眠りにつき、すやすやと何も知らずに寝息を立てていたのであった。

前だけ見ていたい

僕たちの当面の目標は、相手の真実の姿を映し出すという「ラーの鏡」を手に入れることだった。ラーの鏡はラインハット地方に伝わる道具で、「神の塔」にあるそうだ。ラインハットのお城で過ごしているときに、どういう流れかは忘れたけれど、ラーの鏡の話題が出た時にアルマが食いつき、ヘンリーが興味もなさそうに答えていたことをよく覚えている。城の書物に書かれていたらしいが、当時のヘンリーとしては「探しにも行けない伝説」よりも「城でできる悪戯」の方が大事だったらしく、質問を重ねようとしていたアルマを軽くあしらっていた。

「はあー。ようやく陸に着いても、すぐにまた海か……」

アルマと違って海より陸の方が好きなヘンリーは、忍び込んだ商船からこっそり出るやいなや、ぐっと伸びをしてそんなことを言っている。

ヘンリーは特徴的な緑色の髪から、デールと似たような色の茶髪になっている。髪型も、おかつぱからぎくぎくと切ってしまって、僕らの中の誰よりも短い。何でも、「染粉の節約」らしい。ちなみに、ヘンリーが髪を切るときになぜか僕まで巻き込まれて、お父さんのまねをして伸ばしていた髪も、今は短くなって、なんだかうなじがスースーする。ヘンリーは器用なので、自分のも人のも散髪が上手だった。

「仕方がないですよ、兄さん。グランバニア地方からちようどよく出る商船が、ポートセルミ行きしかなかったんですから。大きな港に連れて、幸運だったと考えるべきです」

「そりゃあ、分かってるんだけどよお」

頭の後ろで手を組んだヘンリーは、くすくす笑ってしまった僕を睨み込める。

「なんだよ、言いたいことがあるなら言えよ」

「ごめんね。ただ、君つてばあんなに船に弱いなんて思わなくて。ずっとゲレ——ギコギコにしがみついていたじゃない」

こほん、とまだ慣れなくてゲレグレと言い掛けてしまった僕は、小さくて可愛い変わった「猫」から、大きくて頼りがいのあるカツコいい「猫」へと成長した相棒を見つめた。

僕らは今、偽名を使っている。みんなで考えるときに、以前ゲレグレの名前を決めるときにビアンカが出していた候補をなんとなく思い出して言ってみたら「それにするか」とヘンリーが言ったので、僕はソロ、ヘンリーがアンドレ、デールがリンクスという名前に決まった。そして、ゲレグレはギョギョになった。まだまだ慣れないけれど、慣れていかなくちやならない。

子どもだけで思いがけず旅立つことになったとき、僕たちはグランバニアで戸締りをしたり貴重品を金庫に入れたりしながら、たくさん話し合った。

絶対に守らなくちゃいけないことは、僕たちの身分が他の人に知られないようにすること。アベル——僕は彼のことをそう呼び続けた——が僕らを「死んだこと」にしてくれた理由は分からないけれど、ともかく、光の教団は僕らが死んだと思っっている。

だから、世界中の「高貴な身分の子ども」を集めているらしい教団から身を隠すこと、これは僕らの絶対のルールだった。死んでいたはずのグランバニア王子とラインハットの王子たちが生きているなんて、思われてはいけない。それは、僕らを生かしてくれた人たちの努力を踏みにじることにつながる可能性があるからだ。

あのとより強くなつたとはいえ、オジロン叔父さんに口を酸っぱくして言われ続けていた通り、僕らはまだ子どもだ。僕らより強い人、魔物なんてたくさんいるだろう。油断は常にできない。

それから、目的を絶対に間違えないこと。お母さんを探し出して、救い出すこと。そのために天空の勇者を探すこと。グランバニアの人たちを元に戻すこと。それから——これはヘンリーたちには言っていないけれど、ヘンリーたちが、ラインハットに戻るようになること。

僕は魔物が憎い。けれど、その感情に支配されてはいけない、とも

思う。魔物は僕の大切な人たちの仇だ。けれど、大きくなって「ただの猫」からは遠ざかっているゲレゲレが、きつと魔物であるように。魔物だから悪いわけじゃないんだと思う。人間にだっていい人と悪い人がいるように、きつと魔物にだって、仲良くできる子はいるはずだと、僕はそう思う。

「たまたま海が荒れてたんだろ。貨物に紛れてたから、外の様子は分からなかったけど」

「君が自分の体の上で戻しちゃうんじゃないかって、ギコギコはずつとはらはらした顔をしていたよ」

「うるせえ。そんなときはオレ様自ら洗ってやるよ。な、うれしいだろ？」

「なうん……」

ゲレゲレは迷惑そうな顔をする。デールがくすくす笑いながら、ヘンリーの肩に手を置いた。ヘンリーは不服そうに弟の顔を睨み、僕はそんな様子がおかしくて、ゲレゲレの方をちらりと見る。目が合つて、彼は「なーお」と甘えた声を出しながらすり寄ってきた。僕はそのたてがみをいつも通り撫でる。ビアンカに贈られた、すっかり色あせたリボンが風に揺れて、僕は理由も分からないまま、胸が締め付けられるような気持になった。

「……リユカ、さつきと行くぞ」

ヘンリーの言葉を受け、僕らは船着き場から出て、食事にすることにした。大きな港町らしく活気付いていて、僕らくらいの年頃の子どもたちも、大人の手伝いなのか網縄や荷物を持ってちよろちよろしている。

「じゃあ、オレはギコギコと外で待ってるぜ」

「うん。何か買ったらすぐに持っていくから」

ゲレゲレは目立つ。ラインハットが魔物に襲われた事件があつてから、世間は魔物に対して、以前に増してピリピリした感情を抱いているらしい。僕らが商船に忍び込んだのも、お金を払いたくなくなったわけじゃなくて、ゲレゲレを連れて乗船しようとしたら断られたからだ。

だから、あんまり離れたくはないけれど、町や村など、人がたくさん集まる場所では情報を集めたり食料や必要な道具を補給する二人と、ゲレゲレと一緒に町のはずれが外で待っている人の二手に分かれることに決めている。

今回は、船の中でゲレゲレをクッション代わりにしてくつろいでいたヘンリーが体調の回復とゲレゲレへのお礼を兼ねて、外で待っていることになった。

「兄さんったら、どうせ待っている間にギコギコを撫でまわして、迷惑がられているんですよ。ギコギコのためにも、早く戻ってあげましよう」

「そうだね。アンドレったら、暇さえあればずっと触ってるからね。気持ちは分かるけど」

「すべすべで気持ちいいですからねえ……お腹はふわふわだし……」

そんな話をしながら、僕たちは食べ物屋さんに向かった。武器や防具はまだ傷んでいないし、道具も特に使っていない。必要なのは食べ物と水くらいだった。

「小さいのに、お使いかい？ 偉いねえ」

「えへへ……」

わしやわしやと頭を撫でてくる店のおじさんにお金を渡して、僕たちはそれとなく町の様子を観察しながら、ヘンリーのとゲレゲレを探す。彼らは町の外で待っていることにしたらしく、町の西側でひなたぼっこをするように座っていた。予想通り、ヘンリーはゲレゲレを撫でている。

「お待ちせしました、兄さん」

「おう。待ってたぜ」

食べながら、僕らは今後のことを改めて話した。「ラーの鏡」を手に入れながら、ストロスの杖と天空の勇者についての噂を集めて回り、有益な情報がありそうなどころへ足を延ばすことは、当初から決まっている。ちなみに、ラインハットに顔を出すことはしない予定だ。あ のときから僕らも成長したし、見た目の雰囲気も違うとはいえ、「有名」だった僕らは、いろいろな人に顔を覚えられている可能性が高い。

本当は立ち寄って、元気でやっているらしいラインハットのみんなを見てみたい。だけど、それはしない方がいいってことは、よく分かっていた。

ヘンリーもデールも、「ラインハットに戻るのは光の教団をなんとかしてから」という強い思いをもっているらしく、二人がそう言うなら、僕から言うことは何も無い。

だけど、サンタローズには立ち寄ってもいいかもしれない、とは二人とも言っていた。サンタローズの人たちはグランバニアに避難していた人がほとんどだから、僕たちが生きていることを知っているのだ。絶対に口外してはならないっていう約束を叔父さんとしていたけれど、もともと口が軽い人たちではないので安心していいと僕は思っている。

「残念だけど、修道院行きの船が明日、ビスタ港行きの船が二日後の出発だって」

僕が言えば、ヘンリーがぴくりと眉を上げた。

「それ、客船か？」

「東行きの客船は五日後とのことだったので、それ以外を中心に聞きました。修道院行きの船が貨物船、ビスタ港行きが商船です。で、ここで新たな情報なんですけど……」

デールは戸惑ったように一度、僕の方を見た。僕はこくりと頷いて、デールに話の続きを促す。

「実は、ここポートセルミから南西にあるサラボナという町に住む大富豪が、『天空の盾』を持っているという話を聞きました」

僕たちは子どもだ。「伝説の勇者」の話その辺の人たちにすれば、「勇者に憧れる子どもたち」として、みんな本当か嘘かも分からない話を聞かせてくれる。だから、他のどの情報よりも、「勇者」に関するものはたくさん集まった。

「それ、本当か？」

「はい。どうやら、ここらでは有名な話のようです」

「うーん。リュ……じゃなかった、ソロはどう思う？」

「話自体は信じて信じなくてもいいと思うけど、僕は盾より先に鏡を

手に入れた方がいいと思ってる」

光の教団は狡猾で、魔物が人に化ける術を持つ。アベルだけがその力を持つのか、他の人にもできることなのか、それは僕には分からない。けれど、分かっている以上、対策はした方がいいだろう。

「そうかもな。盾も鏡も逃げねえだろうが、盾はオレらにや使えねえ。無用の長物になるくらいなら、後回しにしておいて、使う機会が多くなりそうな鏡を優先するか。それで、鏡が手に入ったら盾を譲ってもらえないか交渉しつつ、勇者について何か伝わっている逸話がないか聞けばいい。今後の具体的な予定が経ったな！」

僕の思惑を知ってか知らずか、いつもの笑顔を浮かべるヘンリーに、僕は頷いた。

「善は急げって言うし、明日の修道院行きの貨物船に乗り込むとしようぜ」

僕らは夜になる前にポートセルミの町に忍び込んで、船着き場でこっそりと夜を明かした。それから、みんなが起き出す前に貨物船に乗り込み、朝の布袋を布団代わりにして寝そべる。

「おい、なんか騒がしくないか？」

見つからないように静かにしていたら、いつの間にかうとうとしていた僕を、ヘンリーが揺すった。ちなみに顔色が悪い。やっぱり、ヘンリーは船が得意ではないようだ。

「……たしかに」

貨物船が騒がしくなる理由なんて、三つだけだ。一つが、船員の喧嘩。もう一つが、天候の悪化。最後の一つが、魔物の襲撃である。そして、今回は最後のやつだろうな、というのは予想がついた。ゲレゲレの耳がピンと立っているし、僕自身の勘も「そう」だと告げていた。「行くぞ」

甲板に出ると、案の定船は魔物に襲われていた。しかも、天候まで悪い。

「ボウズたち、どっから湧いて出てきやがった!？」

「何でもいい、ここは危ねえぞ！ 下がってろ！」

「僕たち、戦えます！」

船の上での戦闘は慣れてないけれど、できないことはなかった。荒れ狂う海、容赦のない魔物の大群。揺れる船の上でバランスを取りながら魔物の攻撃を避けるだけでも精一杯なのに、向こうは慣れたものなのか、こちらの攻撃は中々当たらない。

「ツチ、剣じや塚が明かねえ！ ソロ！」

顔色の悪いヘンリーが、イオを唱える。小爆発は確実に魔物たちの足を止め、その隙にゲレゲレが軽い動きですばやく敵の顎に食らいついた。僕もヘンリーを見習い、バギマを放つ。負傷した船員の手当てをしつつこちらに補助呪文を掛けてくれていたデールは、ゲレゲレが敵の反撃を受けたことに反応して、その傷を癒そうを手を伸ばした。

「ボウズ、やめろ!!」

誰の叫び声かなんて、どうでもよかった。

荒れた海の一際大きな波は船を傾け——魔物と組み合っていたゲレゲレと、彼に近づいたデールを海に落とした。

「デール!!!」

偽名を呼ぶことも忘れて、僕らは叫び、手を伸ばす。けれど、反対側から腕を掴まれて、短い僕らの腕は大事な仲間のもとへ届きやしない。

「放せよ!! 弟なんだ!! オレが守ってやらなきゃいけないんだ!!!」

「馬鹿野郎! こんな状態の海に飛び込んだら、お前らだつてただじゃ済まねえんだぞ!!!」

ヘンリーが船乗りたちに羽交い絞めにされながら、暗い海へ向かって、それでも手を伸ばす。

——どうして僕たちは、失ってばかりなんだろう。

そんな空虚が胸を支配したのは、海が穏やかに戻ったときだった。涙も枯れ、朝陽はあまりに眩しく、白んだ空は、いつかアルマとピアンカと一緒に見た時とは違って、絶望の色に見える。

船乗りたちは、僕らが魔物と戦ったこと、大切な人たちを失ったことを加味してくれたのか、修道院まで無事に送り届けてくれた。

修道院は、静かで質素で、けれど美しい場所だった。浮浪児だと思っただのか、僕らを甲斐甲斐しく世話してくれ、何も聞かずに、ただ

僕らに「休息」を与えてくれた。悪夢を見てうなされる僕らに、シスターは手を握って、かさかさとした初老の女性の手のぬくもりに目をうつすら開ければ「大丈夫ですよ」とにこりと微笑んでくれる。

ただ、涙が出た。

その手は、生活が決して楽ではないことを物語っている。けれど、ここにいる人たちは温かい。傷付いた人たちを、ただ受け入れてくれる。つらいときにただ傍にいてくれて、僕にとっては見たくもない朝陽に目を細めながら、「おはようございます」と一日の始まりを教えてください。

「デールとゲレゲレを探そうよ」

ある日、ヘンリーと二人きりになったタイミングで、僕はそう提案した。

海に落ちただけだ。運よくどこかに打ち上げられて、生きているかもしれない。通りかかった他の船に助けられているかもしれない。

けれど、ヘンリーはふるふると頭を横に振った。

「探さない。——あいつらが生きてたら、オレたちとの合流を目指すはずだ。オレたちはただ、目標に向かってまっすぐ歩けばいい。な、リユカ。大丈夫だって信じればこそ、オレたち、常に前を向いてなくちやいけないんだぜ」

ヘンリーの浮かべた笑顔は、下手くそなものだった。ヘンリーだって、二人が心配でたまらないってことを、まるで隠せていない。だけど、そうだった。ヘンリーはつらいときこそ、気丈に振舞うやつだ。自分だってつらいのに、僕に心配を掛けまいと、笑ってみせる。

僕はその笑顔に救われて、大好きで、大嫌いだった。

ヘンリーは太陽みたいな人だ。明るくて、勝気で、優しく、賢くて——人一倍繊細だからこそ、豪快なふりをする。

その笑顔は、常に太陽で在ろうとするヘンリーの良いところであり、悪いところでもあった。

「ヘンリー。僕、君が言うならそうするよ。前だって向いてみせる。だけど——僕たち、せっかく二人なんだから。前だけじゃなくて、隣も見たっていいと思う。それに、前だけ見えて、デールとゲレゲレが

追い付けなかつたら困るもの」

僕とヘンリーはどちらからともなく手を差し出し、互いの手のひらで乾いた音を出した。

「ああ、そうだなリユカ。オレたち——せっかく二人なんだもんな」

ニツ、とヘンリーは悪戯小僧の笑みを浮かべた。

それから僕らは、世話をしてくれたシスターたちにお礼を言つて、「ラーの鏡」について何か知らないか聞き込みを始めた。

『ラーの鏡』を？ なんのために？」

反応したのは、よく僕らの手を握つてくれる初老のシスターだった。他のシスター『神の塔』は魂の記憶が宿る場所」だとか「己の見たものしか信じぬ者は神の祝福を受けられない」だとか、本に載っている伝説をそのまま教えてくれただけだったけれど、そのシスターだけは何かを知っている様子だった。

「僕たち、事情があつて旅をしているんです。どうしても『ラーの鏡』が必要で」

昼下がり。良い天気の中、教会の書架を整理していたシスターは手を止めて、子どもの質問に対しては妙に律義に僕らの正面に向き直つた。そうでない人も多いことは知っているけれど、大人は子どもの質問に対して真面目に答えなかつたり、何かの片手間に答えたりすることが多い。

特に「リユカとヘンリー」ではなく、「浮浪児のソロとアンドレ」になつてからは、そういう対応をされることがほとんどだった。だからこそ、このシスターの真摯さには、僕ら二人とも城で教育係にいつけられた通りに、背筋をスツと伸ばしてしまう。それが浮浪児には似つかわしくないと思つていても。

「……鏡の伝説をお話するのはかまいませんが、二人が『ラーの鏡』を手に入れたいとおっしゃるなら、私は賛成できかねます」

「なぜですか？ オレたち別に、悪用してやろうつてわけじゃありません」

シスターはヘンリーの言葉を聞いて、呆れたような微笑ましそうな表情で息を吐き、僕たちの頭を優しく撫でた。

「もちろん、この数日であなたの方が悪事をたくらむような子ではないというのは、分かっていますよ」

僕はなんとなく、彼女が僕らを「子どもだから」という理由で話すのを躊躇っているわけではないことを感じ取っていた。だって、彼女は一度だって、僕らを「子ども」だとないがしろにしなかったから。「これから苦しむ人たちが出不来ないようにするために、ラーの鏡は絶対に必要なんです。鏡と塔の伝説は知っていても、具体的なことを知っている人はいない。何か知っているなら、どんなことでもいいから教えてほしいんです」

僕の言葉を聞いて悲しそうに微笑んだ彼女は、僕とヘンリーの目をじっと見て、どこか観念するような雰囲気滲ませて口を開いた。

「危険なのです。『神の塔』は試練の塔。真実は時に人を傷付け、苦痛を与えるもの。真実を映す『ラーの鏡』を手にする者は、見た目に惑わされない慧眼、甘いまやかしよりもつらい真実を受け入れる心、真実を知ることを恐れることのない勇氣、それらを併せ持つ者でなくてはなりません」

僕はシスターの言葉に、思わずヘンリーを見た。それなら、ヘンリーは鏡を手にするのにびったりの人間だ。僕にはこの親友ほどふさわしい人間はいないとすら思えた。

「そして——私を含む多くの人は、弱い。楽な方に手を差し伸べてくれる誰かがいるのなら、その手を取りたい気持ちは自然なこと。けれど、『試練』はそれを許しません。『神の塔』は、『ラーの鏡』にふさわしくない者に対して、厳しい罰を与えます。命を落とすこともあるのです」

「覚悟の上です」

とはいえ、僕だってヘンリーに任せっきりにするつもりはない。つらいこと、苦しいことはたくさん経験してきた。だけど、その経験こそが僕の背を押してくれている。蹲って、何かに縋りたい気持ちを蹴飛ばし、「こんなところで立ち止まるな」と叱責してくれる。

「お願いします。どうしても、必要なんです」

ヘンリーが頭を下げたのに合わせて、僕も同じように頭を下げた。

シスターが僕たちの肩に手を置く。その手は少し震えていて、僕はなんとなく、もしかしたらシスターは昔、大切な人を「試練」で喪ったのではないかと思った。

「あなた方はまだ子どもです。なぜそうも生き急ぐのですか。困っていることがあるのなら、大人に頼ればよいのです」

「困ってることがあって、大人が助けてくれるって、すてきだよな」

ヘンリーは顔を上げて、くしやりと笑った。

「オレたち、早く大人になりたいんです。大人になるには、頼ってばかりじゃ、ダメじゃないですか。自分たちで、乗り越えていかないと」
——助けてくれる大人だって、どんなに強いと思っていた人だって、僕らを置いて岸を渡る。僕らを置き去りにして、時を止める。

「僕たち、乗り越えなくちゃ進めないんです」

午後。開け放たれた窓から一際強い風が吹き抜けた。それはシスターが整理していて、机に置かれていた本のページをパラパラとめくる。

「……お話ししましょう。あなた方も御存知の通り、『ラーの鏡』は『神の塔』にあります。塔はこの修道院よりずっと南にあり、深い森を抜けたその先にそびえ立っているのです」

ぱたり。ページを折らないように、シスターが慎重な手つきで本を閉じた。分厚い表紙が重しになって、風通しの良い室内でも、もうページはめくられなかった。

「しかし、塔の入口には鍵が掛かっております。どんな鍵でも開くことのないその扉を開ける方法はただ一つ。修道女の祈りだけなのです」

「じゃあ——！」

僕らは声を揃えて、期待に満ちた表情でシスターを見つめた。けれどシスターは首を縦には振らなかった。

「私は行けません。昔……いいえ。ともかく、私では扉は開かないでしょうから」

静かな拒絶だった。しん、と沈黙の下りた室内で、風の音だけが妙に響く。

「とはいえ、あなた方がこの修道院にいらぬあなたにお声を掛けようと、それは自由だと思えます。危険に自ら飛び込むことに関心はできませんが、入り口を開けるだけならば協力してくれる者もいるかもしれません」

シスターの言葉に、僕らは気のない返事をして、部屋を出た。

「あーあ。塔の場所も、中に入る方法も分かったのになあ。誰か誘ってみるか？」

太陽はまだ高い位置にあるけれど、少しずつ西に傾いている。じわじわと雲が動いてそれを隠すのをぼんやり見つめながら、誰がいいだろうか、と考えてみる。

そもそも、僕はあるシスターの名前も知らない。ここにはたくさんシスターがいて、それぞれにもちろん名前はあるけれど、彼女だけは誰からも「シスター」と呼ばれていた。それに、他の修道女たちを取り仕切っているのも彼女だったから、その人をもってして「扉が開かない」のならば、一体他の誰を誘えばいいのか分からない。

「あの。困っているなら、私が一緒に行きましょうか」

ふいに、声を掛けられた。振り向くと、そこには僕らよりも同じくらいの年の女の子がいる。特徴的な青い髪に、修道女にしては些か目立つ大きなリボン。けれど服装は子ども用の修道服だ。くりくりと大きな目のその女の子の名前はフローラ。なんでも、お金持ちの家の子だけれど花嫁修業のためにこの修道院に預けられているとか。これは本人からも周りのシスターたちからも聞いた話だ。

「気持ちはどうだいけど、お断りだ。フローラ、お前何歳だっけ？」

「七歳です！ あなたたちよりはちよつぱり年下かもしれないけれど……でも、扉を開けるくらいなら、私にだって協力できるかもしれないませんわ」

小さな拳を握りながら、顔を真っ赤にして、どういうわけか必死になつて言うフローラ。この内気で大人しそうな少女とは、あまり関わったことがない。年が近いからかこちらをじつと見つめていることとはあるけれど、あまり話し掛けられたこともないし、僕たちは僕たちで話し掛けてほしそうな女の子に優しくできるような心の余裕が

なかったのだ。だから、なぜそんなに必死になっているのかは不明だった。

「でもホラ、お前修道女じゃねえじゃん。花嫁修業に来てるだけのお嬢様だろ？ いいよ、他の人に頼むか、どうにかシスターを説得するから」

ヘンリーが冷たくあしらうと、フローラは涙目になって俯き、ぷるぷると震え出してしまふ。途端に面倒そうになったヘンリーだったけれど、「しかたねえなあ」とは言わなかった。

「お前、どつから聞いてたのか知らねえけど、危険だつてシスターも言つてただろ」

「で、でも、でも、ソロ様もアンドレ様も危険を承知で、それでも『ラーの鏡』が必要だと、そう言つてたじゃありませんか」

「それにお前を付き合わせる理由がねえよ。それに、危険なのは何も塔の中だけじゃねえだろう。外には魔物もいるし、だったらなおさら、お前を連れてく理由がねえ。旅慣れてるオレたちと違って、お前はお嬢様だ。塔がこつからどんだけ離れてるかは知らねえが、ついて来れなくなつたやつをおんぶに抱っこしてやるほど、オレは優しくねえし」

ため息を吐いたヘンリーは、ぽろぽろと泣き出してしまったフローラに何か言いたそうに口を開きかけたけれど、結局「行くぞ、ソロ」と僕に言っただけで、彼女に対して声は掛けなかった。

「お役に立ちたい」

その日の夜。僕はヘンリーにたたき起こされ、押し殺した声で「今から『神の塔』を見に行くぞ」と囁かれた。

「どうしてまた……こんな夜中に？」

「ただの下見だからな。塔を実際に見てみれば、塔にとつての『修道女』の定義とか、手掛かりがあるかもしれないだろ？ さつと行つてさつと帰るぞ」

「なるほどね。あんまり遠くないといいんだけど」

「ま、一応書置きだけは残しておくか。シスター、オレたちがうなされてるんじゃないかって、ちよくちよく様子を見に来てくれるもんな」

ヘンリーは言いながら、真つ暗だというのに器用に端的な書置きをしたためている。僕は寝ている人々を起こさないように、そうつと修道院を出た。海辺にあるこの修道院は、敷地を出るとすぐに砂浜がある。その先に広がる真つ暗な海は、デールとゲレゲレを呑み込んだときは打って変わって、不気味なほど穏やかで静かだ。

アルマが愛してやまない海を、けれど僕はこわいと思った。魔物相手なら、戦える。人間相手でも、必要があれば戦える。けれど自然とは戦えない。相手にしてもらえない。

心のどこかで、デールとゲレゲレはあの暗い海の底に沈んでいってしまったのかもしれないと思っっている自分がいる。それに反論する、希望を棄てたくない自分もいて、僕の思考は散り散りになっていた。「おい、ボーつとすんなよ。フローラに言った通り、道中魔物と戦わなくちゃならねーんだぞ」

「そういえば、フローラに随分厳しかったね」

意図的に不安と期待を封じ込めて、僕はランプに照らされるヘンリーの横顔を見つめる。グランバニアのお城にあったランプは、いつの日かレヌール城でお化け屋敷をしたときに灯していた松明とは違って、使い勝手がよく、火に直接触れてしまう危険もない。

「……戦えないやつを連れて行つても、足手まといになるだけだろ。」

オレは自分が何でも守れるなんて、口が裂けても言えねえからな。オレはお前を守ってやるって決めてるし、チビのフローラは守ってやれない」

灯に照らされてオレンジ色に見える茶色の短髪は、一見活発な少年そのものに見えるだろう。けれど、その目を見れば、やんちゃそうな見た目や粗野な言動がヘンリーの本質ではないことくらい、きつと誰にだって分かる。

「それに、フローラは子分でもないしな」

白い歯を見せて、こちらに笑みを向けたヘンリーに、僕は笑った。

「なんだ。僕はもう、子分じゃなくなったのかと思ってた」

「バーカ。お前は親友で子分だ。大人になったって、ずうつとな」

静かな夜の道を、僕らはくすくす笑いながら歩いた。そこにデールとゲレゲレがないことはすごく寂しかったけれど、それでも、心細さはなかった。

魔物には何度も襲われたものの、大きな橋を通って、森に入り、僕らは確実に「神の塔」に近づいていることに安堵しながら、森の中にあつた小さな祠の近くを野宿の場所に決めた。あとどれほどで塔に辿り着けるのかは分からないけれど、休憩できそうな場所があるのは正直ありがたい。

石造りの祠の周りには神聖な空気が流れていて、魔物は近づけないようだった。周囲を泉に囲まれたその祠は古めかしく、支柱の一本は崩れて透き通る泉に沈んでいた。

交替で仮眠を取ることにすると、ヘンリーが床にねそべって、さつそく寝息を立て始めたのが聞こえる。

僕はふと、空を見上げた。深い森だけあって、枝葉が頭上に生い茂ってはいいたが、その隙間から星々が光っている。

——「試練」なんて、どうして受けなくちゃならないんだろう。

ただ、大好きな人たちと一緒に暮らしたいだけだった。けど、僕たちにとって、それはとても難しくくて。数々の悲劇が全て「神の与えた試練」ならば、僕は何度も試練に敗れていることになる。乗り越えられなくて、誰も守れなくて、いつも守ってもらってばかりだ。

時々、思うことがある。

何を馬鹿な、と自分でも思う、くだらない考えだ。ヘンリーに話したら一蹴されて、ついでに殴られるだろう。

だけど、どうしても、脳の片隅にこびりついて離れないそのくだらない考えは、こうして一人ぼんやりしていると、度々存在を主張してくるのだ。

——僕がいなければみんな笑ってくらせたのかもしれない。

分かっている。そんな考えは、僕を生かしてくれたお父さんへの、アルマへの、サンチョへの冒涇だつてことくらい。だから、この想いは誰にも話せない。話せないから、ただただこびりついて離れないままなのだ。

僕が弱いから、アルマは僕を逃がして自分は魔物の前に立ちほだかった。僕が弱いから、お父さんは僕を逃がした。僕が弱いから、サンチョは僕を、サンタローズを守るために戦い続けた。

僕がいなければ、グランバニアは狙われることもなく、みんな石になることもなかった。僕の旅に付き合わせなければ、デールもゲレゲレも海に消えることはなかった。

鬱々とした考えのまま星空を見上げていると、つんと肩を指でつつかれる。いつの間にか目を覚ましていたヘンリーが「交替」と短く言ってきた。親友の声と顔にひどく安心した僕は、軽く頷いて目を瞑った。

*

体格のいい男性と、細くすらりとした女性が、祠で話をしていた。どうやら男は盗賊で、女は修道女のようなだった。奇妙な組み合わせだが、なんのことはない、脅迫した者とされた者の関係で、女は明らかに男に対して怯えを見せている。

『ラーの鏡』は、神聖なものです。あなたのように欲望にまみれた人には、決して神の試練は越えられません」

「ハッ、そんなんはやってみなくちゃ分からねえ。欲にまみれようが

関係ねえさ。試練って言っても、要は塔の攻略だろ？ 大盗賊であるこの俺様にできないわけがねえ」

青白い顔をした女性とは対照的に、男は彼女の言葉を鼻で嗤ったのち、威嚇する肉食獣のように歯をむき出しにして笑った。

女は海辺の修道院で粛々と暮らす、しがない修道女だった。よくある身の上で、両親が亡くなり、親戚も金銭的に余裕がないからと、子どものころから修道院にあずけられただけの存在。罪過を償うために人生を神にささげたわけでもないし、華やかな良家の子女の花嫁修業でもない。

女にはそこしか居場所がなかったから。神様しか頼るものがあったから。

だから、優しくしてくれた修道院のシスターを見習って、「立派な人間」になるために、自らも修道女になった。ただそれだけ。

そうして暮らしていたら、先日、少しでも休ませてくれ、と体調の悪そうな男が修道院を訪れた。来るものを拒まない神に仕える者たちの家は、むろん快く男を迎え入れた。

けれど、男は盗賊だった。その夜、どこで知ったのか、「ラーの鏡」を手に入れるためには「修道女の祈り」が必要だからと、男は彼女を攫い、「自分のために祈れ」と刃を突き付けてきた。

殺されるかもしれない、と思つて、女は従うことにした。

きつと神様が天罰を与えてくれる。こんなやつに神の試練は乗り越えられない。扉を開けたら、自分はなんとか魔物から逃げ延びて、修道院に帰ればいい。

決して近くはない距離だが、それでもきつと、神様は導いてくれるはず。だって、自分は何も悪いことをしていないのだから。真面目に生きてきて、その結果が誰にも看取られない森の中で魔物のえさになつて死ぬことだなんて、そんなことは受け入れられない。

女は唇を噛み、ぎつと男を見た。男は愉快そうに笑った。

——悪人のくせに、よく笑うやつだ。

きつと、これまでも笑いながら人の大切なものを奪ってきたのだろう。女から、平凡で代わり映えのない、安寧だけがある日常を奪った

ように。

*

夜が明けて、僕は騒がしさに目を覚ました。ヘンリーが誰かと口論しているようだ。でも、誰とだろう。そう思つて、目を擦りながら声のする方を見た。

「そんな言い方ひどいですわ!」

「何言つてんだこの馬鹿! 世間知らずのお嬢様が! バカ! 馬鹿!! オレが見つけなかったら、お前こんな森の中で誰にも見つけてもらえず、死んでたかもしれないねえんだぞ!」

「だ、だから! その節はありがとうごさいましたとお礼を申し上げたはずです! そんなに怒鳴らなくても、自分が危険なことをしたというのは分かっていますもの!」

フローラだ。内気で大人しい小さな女の子が、涙と鼻水で顔をべしよべしよにしながら、真つ赤な顔でヘンリーに向かって怒鳴り返している。よく見れば、いつも着ている修道服は汚れてしまつていて、彼女が何度も転んだのだろうということを実に物語っているし、きれいに整えられているところしか見たことのない青い髪は、リボンがひん曲がつてハーフアップが崩れてしまつていた。

「おはよう、アンドレ。これ、どういうこと?」

僕が声を掛けると、ヘンリーは大きな大きなため息を吐いた後、ことの顛末を語り始めた。なんでも、明け方に祠の北側が騒がしいような気がして、様子を見に行ったそうだ。祠の傍に魔物は近寄れないし、僕はよく眠っている様子だから、とりあえず起こさなまま、様子だけ見に行つて、危なそうなら爆発呪文などで大きな音を出して知らせようと思つたらしい。

けれど、ヘンリーが見つけたのは泣きながら魔物に追い掛けられているフローラだったんだとか。

仕方がないから魔物を倒して祠に戻り、こんなところにいた理由を聞くと、どうにも彼女は僕らの後を付けてきたそうだ。けれど、歩く

速さが全然違うために案の定すぐに引き離され、それでも修道院に戻るのも怖くて一人で聖水を振り撒きつつ魔物から逃げながら僕らを追い掛けていたらしい。

頭を抱えたヘンリーがこんこんと説教をすると、いろいろな限界を超えたフローラが泣きながら叫び出し、僕が起き出すほどの口論に発展したのだとか。

「……えーと、フローラ。どうして君はそこまでして僕らを追い掛けてきたの？」

「だ、だって。あんな突き放され方をされたら、誰だって見返したくありませんわ。それに私、ソロ様に確かめたいことがあって……」

「確かめたいこと？」

首を傾げると、フローラは取り出したハンカチで涙をぬぐってから、じっと僕の顔を見つめた。

「ソロ様、私とお会いしたことがありませんか？ 三年くらい前、ビス夕港で……あのときは髪が長くて、お父さまと、海で助けた女の子と一緒にでしたわよね。確か、その女の子に私の服を貸してあげたと言って、お詫びをお礼を言われましたわ」

僕は思わず、ヘンリーを見た。なんて答えればいいのか、正解が分からなかったからだ。フローラが、僕の父親をパスと知らず、僕の本当の名前も知らなければ、なんの問題もない。けれど、そのどちらかを知っていて、うっかり他の人に話してしまったとしたら。

「なんだ。お前、それでソロのことじろじろ見てたのか。惚れてんのかと思っただぜ」

言葉に詰まった僕の代わりに、彼女に返事をしたのはヘンリーだった。僕はその軽口にはっとしながら、感謝と、ほんの少しばかりの呆れの視線を彼に向ける。

「なっ……なっ……！ 何をおっしゃいますの！ アンドレ様はもう少し、女性に対する口の利き方を気付けた方がよいかと思いますわ！ わ、私、別にソロ様のこと……！」

顔を真っ赤にして再び涙目になり、ヘンリーの胸倉を掴んでいるフローラはすぐく必死だ。いくらヘンリーがくだらない勘違いをした

からといって、そこまで迷惑がられると僕としても気まずい。

「はいはい、お前の気の強さと馬鹿さと執念深さはよく分かったよ。こんなところで死なれても困るし、しようがねえからついてくるのは許してやるけど。戦えねえなら、魔物が出たらすっこんでろよ」

「本当、アンドレ様ったら失礼な人!! そんなことでは、女性に好かれませんかわよ!!」

「うるせーな、別にいいんだよ。オレ、好きな子には優しくするし」
「まあまあ」

宥めつつ、簡単に朝ごはんの準備をする。その間にフローラは身だしなみを整えていた。修道服についた汚れは落ちていないけれど、それでも大泣きする。「お転婆お嬢様のフローラ」ではなく、それだけで「修道院で暮らすお嬢様のフローラ」に早変わりするのだから、不思議なものだと思う。朝食は白湯と干し肉、それからパンくらいだけど、フローラは文句も言わず出されたものを食べて、僕らにお礼を言った。

なんだかんだ言っつて、ヘンリーはフローラを守ってあげていた。ひやあひやあと慣れない戦闘にちよろちよろするフローラに敵が向かわないように率先して倒していたし、フローラ本人は気付いていないだろうけど、さりげなく庇ってあげてもいる。僕もできる限りフローラはしているけど、全く戦えない人を連れ立って歩くのは初めてだから、いつもと勝手が違ってヒヤリとする場面も多い。

ビアンカも初めは戦い慣れていたわけではなかったけれど、大人の動きを見て戦いの邪魔にならない場所に避難したり、自分で戦うようになってからは周りをよく見て連携したり、とにかく巻き込まれたり巻き込まれないようにしたり、そういうのが上手だった。

でも、多分フローラは大人に護衛された経験しかないだろう。だから、戦いの最中において安全な場所が、傍に控えてくれる人がいないれば分からない。イライラしはじめたヘンリーがついに「オレがやるからソロはフローラ見ててくれ!」と怒鳴った。それにびくりと肩を揺らしたフローラは、僕のマントの裾をぎゅっと握って俯いてしま

「フローラ。怖い？」

「え、ええ。アンドレ様、乱暴な人で、少し怖いです……」

僕は笑った。

「僕も最初は、乱暴で嫌なやつだと思ってたよ」

なんとなく、それ以上は言わないようにした。なんでだろう、ともかく、「教えてあげるのはもったいない」と思ったのだ。ヘンリーはいやつだけど、誰がどう言ったって、実感がなければそれは分からないだろう。僕は嫌なやつだと思っていたヘンリーがいいやつだと分かって、すごく好きになった。だから、フローラもきつと、そのうちヘンリーのことを好きになると思う。フローラが、ヘンリーをちゃんと理解しようとするれば。

僕がヘンリーの邪魔にならないようにフローラを守りつつ、呪文で援護するようにしたら、戦闘は大分スムーズに進むようになった。歩みのゆっくりなフローラの手を引いてさらに南へ下ると、ようやく神の塔が見えた。森にあった祠と同じように、神聖な空気を感じる。といつても、森の祠とは違って、こちらはどこかピリリと肌を刺すような緊張感のある神聖さだ。

「おーおー……こりゃ、押しても引いてもびくともしねえな」

塔の入口で、扉を押ししたり引いたり、上に持ち上げようとしたり横にずらそうとしたり、いろいろな方法を試していたヘンリーだったけれど、ついに諦めて腕組みをしながら扉を見つめている。

「わ、私の出番ですわ！ 私だって、修道院で修行している身ですもの！」

ヘンリーを押しわけ、そう言ったフローラが手を組み、祈りを捧げ始めた。その横顔は幼いながらに真剣で、目の錯覚か、彼女の目の前にうつすらと光すら見える。

けれど、扉が開くことはなかった。

「フローラはまだ子どもだし、修道女ってわけじゃないんだし、祈りが届かなくても仕方がないよ」

フローラは目に見えて落ち込んでいて、僕はそんな彼女を見ていられず、背中をさすって慰めた。ヘンリーは塔の周りに手掛かりがない

かうろついている。

「ですが……私……毎日真面目にお祈りも捧げているし、神の教えも学んでいます。それなのに……ソ口様のお役に立てないばかりか、これじゃあ、御迷惑をお掛けしただけですわ……」

背中をさすってあげると、フローラは「私、感動したんです」とぽつぽつ話し始めた。シスターと話している僕らの会話を聞いたこと。自分とそう変わらない年齢の僕らが、誰に言われるわけでもなく、自分のやるべきことに覚悟を持って挑戦しようとしているのを知ったこと。

「私……本当は花嫁修業になんて来なくなかったです。オラクルベリーという町で、お父様が古い師に『修道院へ修業に出した方がいい』と言われて。それで、家族と離れることになって。修道院の暮らしは学ぶことも多いし、皆さまとても優しいけれど……私、お父様やお母様、お姉様と一緒にいたかった。家族に会えないのは、寂しいんです。でも、言えなかった。手紙は送り合っているけれど、本当の気持ちを書けないままなんです」

膝を抱えながら、フローラは顔を上げて塔の周囲をうろつくヘンリーを見た。

「お二人の話を聞いて、私、勇気をもらえましたわ。それと同時に、自分が情けなくなりました……」

僕が何かを言う前に、ヘンリーが「しようがねえ、撤退するか」とからりと声を掛けてきたから、僕は代わりに彼女の背中をぽんと押した。

「くよくよしても仕方がないよ。やれることはやったし、戻ろう。暗くなる前に祠に着けるように出発しなくっちゃ」

僕ら二人だったら、急いで帰れば日が変わるまでに修道院に戻れるだろう。ただ、旅慣れないフローラに無理をさせられない。僕は、誰かのために役に立ちたいという彼女の気持ちに痛いほどによく分かった。僕がお父さんの役に立ちたいとあれこれ考えていたように、きつとこの子もそういう気持ちで、僕たちについて来てくれたんだろう。口が悪くて素直じゃないヘンリーも同じことを思っているのか、

それとも違うのか、それは分かりやしないけれど、彼は僕の案に対して異論はないようで、「ああ」と頷いていた。

帰り道は、僕とヘンリーの場所を交替することにした。一人で多くの魔物を相手にしなければならぬ前衛は疲れる。ヘンリーばかりに任せていられない。

なんとか夕方前には祠に戻って来れて、フローラに無理をさせるわけにもいかないし、僕らは今夜もここで過ごすことにした。

「朝起こしちまったから、今日はソロから寝ていいぞ」

夕飯も食べ終わり、僕らが見張りの話をしていると、フローラが「あ、あの」と小さく声をあげた。二人の視線が一気に自分に集まったからか、それとも単純に発言するのに緊張したのか、フローラの顔は赤い。内気で大人しそうに見えて、表情がくるくる変わる様子はなんだか微笑ましく感じる。

「わ、私も見張りくらいしますわ。祠の近くは魔物も出ませんし、何かあってもお二人を起こすくらい……」

「いや、いいよ。慣れないこととして明日疲れて帰るの遅くなるよりは、寝てもらった方がお互いのためだと思うしな。地面で寝られねーなら慰め程度に膝枕でもしてやろうか？」

直後、乾いた音が響く。ニヤリと笑ったヘンリーの頬を、フローラが平手打ちしたのだ。

「あなたはっ……どこまで人を馬鹿にすれば気が済むんですか!? もちろん、私だつて危険なことをして、お二人に御迷惑をお掛けしていることくらい分かっています! でも、だからこそお役に立ちたいのに!」

立ち上がって声を荒げる彼女は、真剣に僕らのためにと提案したようだった。暴力とは縁遠い生活のフローラの手は、赤い。その手をもう片方の手でさすった彼女は、涙目になりながら「少しは人の気持ちも考えてください」と、ヘンリーを睨んでいる。

それに対して、ヘンリーは睨むでも怒るでも動揺するでもなく、静かな目で見つめ返した。青い目。無彩だった僕の世界に飛び込んだ

初めての色。

その目に見つめられたフローラの方が、ぐっと気圧されたように一歩後退した。

「別に取って食いやしねーよ」

座ったまま、立っているフローラを見上げるヘンリーはふっと笑った。

「初めてだらけで緊張して冷静さを失ってるっつーのはよく分かるが、お前こそ状況考えた方がいいぜ。ソロ、寝ていいぞ。膝枕でもするか？」

「君が動けないと困るじゃないか。僕は普通に座って寝られるし。おやすみ、アンドレ」

二人のことはあえて気にしないことにして、僕は目を瞑った。ほとんど一人で戦闘を担っていたからか、そこまで強敵はいなかったけれど、体はかなり疲れていたようで、僕はすぐに眠りに落ちたのだった。

*

女の祈りに応えた扉は、それまでびくともしなかったのが嘘のように、二人を招き入れるような軽い動きで開いた。

「ここまででいいぞ」

「当たり前です。私、役目は果たしたものです。それじゃあ、あなたに天罰が下ることを祈っています」

「なんつうシスターだ。そこは神の御加護をって言うところじゃねえのかよ」

「あなたみたいな悪人に神の御加護があるはずありません。それも、神の試練で」

「信じらんねえ聖職者だな。神は隔てなく加護を与えるもんじゃねえのかよ」

男は呆れたように息を吐き、がりがりと頭をかいてからその手をひらりを振った。

「じゃあな。もう会うこともねえだろう」

「ええ、きょうなら」

男は塔の中へ、女は修道院へ戻るために歩き出した。しかし、彼女はすぐに神の塔へと引き返すこととなる。

魔物から逃げ回っていたら方角を見失い、祠にも辿りつけないうまま陽がすっかり落ちてしまったのだ。そうなると、分かりやすい目印である神の塔で休もう、という発想になるのは自然なことだった。

塔の周りは神聖な空気に包まれていて、魔物は近寄れない。中がどうなっているのかは分からないが、魔物が出てくるということもなく、彼女は那点だけは安心して、けれど眠れるほど緊張感を緩められるはずもなく、眠れぬ夜を過ごした。

——— そういえばあの男、出てこないわね。

うつらうつらとしながらも、何があるか分からない中で眠ることもできず、ぼんやりとそんなことを考えた。

夜が明けて、それでも男は戻って来なかった。あれだけ「天罰が下ればいい」と思っただけでも、女は善良で心優しく在れと育てられてきた人間である。悪人だとしても言葉を交わした人間が中で亡くなっていることを想像すればゾツとしたし、怪我をしているなら手当をしてやり、亡くなってしまうにしてもそれを弔うくらいはしてもいいだろうと考え、恐る恐る、塔の中に足を踏み入れた。

寝不足の頭には、夢か現か分からないやわらかな空間が広がっていた。朝陽の差す中庭には花々が先、美しい池があり、そして——— 女の両親がいた。

幼い頃病に倒れた母と、傭兵稼業をしていて魔物に殺された父。時を止めた若い夫婦は、女へと笑みを向けた。

「あら、そんなところにいたの。こっちへいらっしやいな」

ずっと焦がれていた母の手。修道院ではシスターが平等な愛情をみんなにくれる。けれど、女が望んだのは、自分だけに与えられる特別な愛情。

「おまえがずっと頑張っていたのを、知っているよ」

逞しい父の腕。それらに向かって、女は飛び込もうとした。なんだ

か、己まで幼い時分に戻ったような気さえしていた。

「まやかした、馬鹿！」

父と母のぬくもりを、野暮で乱暴な言葉が打ち消した。剣を構えるその悪党は、こともあろうに女の父と母を親の仇でも見るかのように睨んでいる。

「これがまやかしならば——私、まやかしの世界で暮らしていたいわ。だって、その方が幸せなもの。自分の心を押し殺した現実なんていない！ 真面目に生きてきたのに、報われない日常なんていらぬ！ 私がここに来たのも神のお導きだわ。私だって、幸せになりたい！」

よく見れば、男は血まみれで、息も絶え絶えの様子だった。

——これなら、自分でも勝てるかもしれない。

女から見て、男はせっつかく見つけた幸せを奪おうとする大罪人である。

「目を覚ませ！ 真実を見ろ！」

——なによ、盗賊の分際で。

優しい表情の父が、剣を渡してきた。

——そうよね、父さん。邪魔者は殺してしましましょう。

女はその剣を受け取ろうとして、ハッとその手を引っ込めた。

自分は今、何を考えた？

そもそも、父はなぜ笑顔で人殺しを娘に進めるのだ。

一度気が付いた違和感は、ぞわりと女の肌を泡立て、求めていたぬくもりが己の体を芯から冷やすものだど悟らせるに至る。

「トヘロス」

それは聖なる呪文。本来は術者の周囲に聖なる結界を張る呪文であるし、術者の練度によって結界の強さにもかなり差が出てしまうものであるが。

己の周りに聖なる結界を展開させたことで、女には真実が見えた。両親なんていない。そこにあるのは草花咲き乱れる中庭に、両脇に

ある泉に安置された銅像のみ。武器を手渡そうとしていた父も、笑みを向けた母も、ただの魔物。

女が結界を展開したことで怯んだ魔物だったが、すぐに気を取り直したのか武器を振りかぶってきた。さまよう鎧という、鎧に意思が宿ったような魔物と、エンプーサと呼ばれる、腰みのを付けた女型の魔物だ。

「ツオラー！」

さまよう鎧へ斬りかかり、相手が体勢を崩した隙を見逃さず、男は女の腕を掴んで塔の外に駆け出た。

「ハア……なんで、中に入ってきた!! 修道院へ帰るんじゃないのか!!!」

女は助かった安堵と死ぬかもしれない恐怖から腰を抜かしながら、ぐずぐずと泣きだした。それから、魔物から逃げ回っていたら陽が落ちてしまったこと。安全のため塔の傍に避難していたこと。ふと、男が戻ってこないの心配になり見に行ってみようと思ったこと。それらを途切れ途切れに話す。

「……聖職者ってのは、ピンキリだな」

男は大きなため息を吐いた。女はようやくその体が傷だらけであることに意識が向き、回復呪文を施し始める。

「おう、ありがとな」

「こちらこそ、助けてくれてありがとうございました。あの……あなたはなぜ盗賊を?」

「いや、大した理由じゃねえさ」

「聞かせてください。私、あなたのこと悪党って決めつけていたけれど……私の目を覚まさせてくれたあなたのこと、どうしてもただの悪人とは思えません」

男は照れたように頬をかき、それから昔話を始めた。女はときに眉をひそめ、時に表情を曇らせ、時に笑顔を見せ、男の話に聞き入る。陽が高く上り、再び夜が訪れても二人の会話は止まらなかった。

「私、もう止めません。あなたの目的を、神も分かってくださることでしょう。どうか、お気を付けて。あなたに神の御加護を」

女は再び祈った。神の塔の扉は祈りに応じて再び開く。傷が治り、晴れやかな顔の男は塔の中へ足を踏み入れ——二度と戻ることはなかった。

神の試練

女の人のすすり泣きが聞こえた気がして、僕は目を覚ました。けれど、気のせいだったようだ。この場に泣いている女の人なんていない。僕もヘンリーも男だし、フローラはすすうと寝息を立てて、結局ヘンリーに膝枕をしてもらっている。僕は寝てしまっていたから分からないけれど、二人は分かり合えたんだろうか。

僕に気が付いたヘンリーがフローラを指差してから肩をすくめてみせ、それから目を瞑り、僕らは無言で見張りを交替した。

夢を見ていた気がする。どんな夢かは忘れてしまったけれど、かなしい夢だった気もする。

僕はぼんやりと空を見上げながら、目覚めと共に消えてしまった夢について考えていた。変な感じだ。時間と共に明るくなる空は、時間と共に僕が見ていたはずの夢の名残も完全に消し去って、やがてまた朝が来た。

「わっ……私、私、ごめんなさい！」

起きてから、自分がヘンリーに膝枕をしてもらっていることに気が付いたフローラは、すごい勢いで頭を下げていた。どうやら打ち解けたわけではなく、寝ている間にずり落ちて行って、ヘンリーの膝に収まったらしい。あれだけ怒っていたわりに、遠いところで寝るのは怖かったのか、それともヘンリーに何かしら説得されたのか、僕とヘンリーの間で眠っていたフローラは、本人にとっては不幸なことに、僕の方ではなくヘンリー側へ重力に従い傾いていったようだ。最初から床にねそべっていればよかったのに。僕のまねをして座って寝たんだろうか。

「別に謝るようなことじゃねえさ。それより飯にしようぜ。それで、さっさと帰って修道院でちゃんと寝るぞ」

「うう……私ったら、はしたないまねを……」

「お嬢様はちいせえことを気にすんだなあ。別にオレが気にしてねえ

んだからいいだろ。言つとくけど、こんなモンで責任取れとか言うなよ。オレはお前みたいな世間知らずなお嬢様、ごめんだからな」

「なっ……い… なっ……!! そんなつもりで言っただんじやありませんわ！ 自分の行動を反省してただけですから！ 本当、アンドレ様は失礼すぎます！」

ぷりぷりと怒り出すフローラを見て、ヘンリーはカラカラと笑っている。最初の印象と打って変わって、撃てば響くフローラの反応を面白がっているらしい。からかいすぎもよくないと思つて、「ほどほどにしなよ」とだけ声を掛けた。

修道院への道中はなんの問題もなく、戻ることができた。シスターたちが目に涙を浮かべながら、僕らを抱きしめ、フローラへの説教が僕らへも飛び火し、「そもそも子どもなんだから危険な旅はするな」だとか「ここにずっといたって誰も迷惑だなんて思わない」だとか、いろいろなことを言われてしまい、ヘンリーと二人で目を見合わせる。「すみませんね。ゆつくり休みたいだろうに、騒がしくしてしまつて」僕らに神の塔のことを教えてくれたシスターが、僕らを客室へ案内して、お茶を出しながら困つたように微笑んだ。

「ごちんこそ、皆さんに御心配をお掛けしてしまい、すみませんでした」
「いいですよ、フローラ。あなたが無事ならそれだけで、私はうれしい」

シスターの細い指がフローラの髪をすき、「結い直しましょうか」と彼女のリボンを取り去つた。されるがままのフローラは、シスターの指が器用に己の髪をまとめていくのを、撫でられている猫みたいに気持ちよさそうな顔で受け入れていた。

「本当に、無事でよかつた。三人とも」
「あー。道中はまあ、そりや別に楽勝だつたんだが。問題は塔に入れなかつたってことなんですよ」

フローラの髪を結び終わったシスターがしみじみ呟くと、ヘンリーがそれに反応する。しゅんとした表情になつたフローラが「私が未熟

なせいで……」と言うと、シスターはふるふると頭を振った。

「恥じることはありません、フローラ。あなたは神に仕える身ではありませんから。ここで修行したことを生かし、神のためではなく、自分のために生きれば良いのです。誰のためであっても、それが自分で決めたことならば、己の人生に、在り方に、当然優劣はありません」

自分の胸に手を当てたシスターは、少しの間だけ、何かを考えるように、思い出すように、目を伏せた。

「さあ、今日はゆっくりお休みなさい。フローラ、あなたも部屋に戻って横になるといいでしょう。修道院を抜け出した理由は、部屋に戻ってから正直に話してくださいね」

「うっ……わ、分かりました」

しゅんとした顔で部屋から出て行くフローラの背中に、シスターはやさしい視線を向けていた。

*

部屋に戻って、フローラはシスターの顔を盗み見た。その表情は怒りでも軽蔑でもなく、普段通りの穏やかそうなシスターそのもので、少女は内心ほっとしながら、自分が話し始めるのを待っている様子の老女へ向かって口を開いた。

「シスター。私、シスターとお二人の話を聞いてしまって。どうしても、お二人のお役に立ちたい、とそう思ったら、居てもたってもいられなくなってしまうて……」

「ええ、ええ。あなたは幼い。衝動を抑えられないもあるでしょう。それが『誰かのため』であることに、あなたらしさを感じます」

優しい言葉に、フローラはじわりと涙が浮かぶ。シスターの優しきは、ヘンリーや他のシスターがしてきたように説教をされるよりも、己の愚かさを突き付けられているようで胸が苦しくなった。

「私——、私、それだけじゃないんです。身勝手な理由で、みなさんに御心配と御迷惑をお掛けしてしまいましたわ」

「身勝手な理由？」

ぐ、とフローラは膝の上で拳を握った。着替えた清潔な修道服に皺が寄る。

「はい。私、ソロ様を昔見たことがあった気がして。三年ほど前のことですけど、どうしても忘れられなくて、確かめたかったです。でも、そんな簡単なことなのに、いざソロ様御本人に確かめようとすると、恥ずかしくなってしまって、聞けなくて……」

フローラは恥じていた。そんなこと、修道院でいつでも聞けることだ。それを、危険を冒してまで夜中に飛び出して、ソロの役に立ってみせるのだと勇んではみたものの、失敗。そういえば、三年前のことがフローラの勘違いだったのかどうか、ソロ自身の口から答えを聞いていない。

「フローラは、ソロの役に立ちたいと思い、ソロを前にすると恥ずかしくなってしまうのですか？」

「は、はい……。ソロ様は落ち込んだ私を慰めてくださったり、無理やりついてきたのに何も言わずに守ってください、アンドレ様とちがつてとてもお優しい方なんです。なのに、『失礼じゃないかな』『嫌われたらどうしよう』って、不安になってしまって。そんなにくじなしな自分が恥ずかしくって」

「ふふっ」

シスターは笑い、普段の物静かな雰囲気とは打って変わって、フローラのやわらかな頬を両側から手のひらでつつみ、それから細く長い指でその頬をふにとつまんだ。

「ひゃっ!?!」

「可愛らしいことね、フローラ。良いことを教えてあげましょう。その人のことばかり考えてしまって、その人の反応が気になって、その人のことが知りたくて、その人のためにいてもたってもいられなくなる——その感情を、人は『恋』と呼ぶのです」

数秒。フローラの思考は停止した。ふにふにと幼くやわらかな頬を弄ぶ老女の指だけが、時が止まっていないことを証明している。

「そ……い……こ……つ……い……こ……恋ではありませんわ！ 人をからかつて楽しむなんて、シスターらしくもありません！ わわ、わたっ、私

は、ただっ、三年前はソロ様が『リユカ』と呼ばれていたような気がして……！　それで気になってただけなんです！　私はまだ子どもですもの！　それに、修行中の身ですわ！　ここここ恋なんてまだ早いですし……！」

パツとシスターの手が離れて、フローラはバクバクとうるさい自分の心臓をなだめるように手を当てた。それから、真っ赤に火照った顔を手であおいでいる。

だから、フローラは気付かなかった。そのとき、シスターが「子どもをからかう老女」ではなく、「聞きたくなかったことを聞いてしまった者」の表情となっていたことに。

「フローラ。からかってしまって、すみませんでした。あなたの反応があまりに可愛いものだから。さあ、もうお眠りなさい。興奮してしまったようなら、気分を落ち着けるお茶でも入れましょうか？」

「結構です！……おやすみなさい、シスター」

「ええ。起きたら菜園の草むしりを手伝ってくださいね」
小さなフローラはすぐに眠りについた。緊張と恐怖と、それから興奮で疲れ切っていた体は、あたたかくやわらかな寝具に横たわると、すぐに休息を受け入れたのだった。

*

フローラを部屋まで送ったシスターは、しばらくしてから僕らの使っている客室に戻ってきた。「やはり、起きていましたか」と悪戯をした子どもを嗜めるように、けれどそれを受け入れてくれる優しさ滲ませながら微笑んでいる。

「皆さんが塔へ向かって、私も思うところがありました」

僕は再び目線をこちらへ戻したシスターに、ずきりと胸のやわらかいところを鷲掴みされたように感じてしまう。彼女は穏やかな表情だ。けれど、それは決して子どものわがままを優しく受け入れる類のものではなく、どちらかと言えば覚悟を決めた人のものであるように感じた。——つまり、死を前にしたサンチヨが浮かべたそれと、ひど

く似通っていたのである。

「私の祈りが、神に受け入れられるかは分かりませんが。祈りましよう、あなた方のために」

それはうれしい言葉のはずだった。だから、僕はヘンリーと手を打ち合わせて喜びながら、シスターにどうしても譲れないことを口にする。

「シスター、扉を開けたら、修道院に戻ってくださいね。さつき聞いた話だと、僕らがいなくなった間に行商人が来たとか。まだいるそうなので、キメラの翼を使つて、どうかすぐにここへ戻つてくることを、約束してください」

「……神の塔の周辺は聖なる空気に覆われて、魔物は近づけません。キメラの翼を使うのは、帰ってきたあなた方と一緒にでもよいのでは？」

「いいえ、いいんです。僕たち、絶対に帰つてくると約束するから。シスターはここで、フローラと一緒に僕らの無事を祈ってください」

そこまで言えば、シスターはハツとしたような顔で「そういえば」と話題を変えた。

「フローラのことなのですが、一緒に連れて行つてはもらえないでしょうか？」

「はあ？」

その言葉にすばやく反応したのは、もちろんヘンリーだ。「一切理解できない」というのを隠そうともせず片眉を上げている。

「御存知の通り、あの子は花嫁修業としてこの修道院で過ごしています。しかし、それは真の目的ではないのです。そのため、フローラも『神の試練』に同行した方がよいのではないかと私は考えています」

「あの、目的って何ですか？」

ヘンリーの口が悪くなる前に、僕は先んじて質問を飛ばした。シスターは、真剣な顔つきで、その理由を教えてくれた。

「彼女の御父上は、有名な占い師に『この子は不思議な運命を背負っているから、それに耐えられるような澄んだ心を持たせなさい』と言われて、修道院での生活をすすめられたそうです。彼女は既に、純粹で

優しい子です。けれど、それだけではならない。何かに耐えるのなら、強く在らねばならない。それが見えないものであるのなら、なおさら。だから、危険は承知でお願いいたします。どうか、あの子と一緒に連れて行ってください」

僕たちは首を縦にも横にも振ることができないまま、二人同時に「考えさせてください」と答えるだけで精一杯だった。シスターは深くお辞儀をして、部屋を出て行った。

それから僕らは少しの時間眠り、起きてからは勝手にいなくなつた罰として畑の草むしりをしているフローラに付き合うことにした。青い髪の女の子は「あの」と旅の道中が嘘のように大人しい声色で静かに、ぽつぽつと話した。

「シスターからうかがいましたわ。その、お二人は私を『神の塔』に連れて行くよう頼まれたんですね」

「まあな。お前の意見はどうなんだ？ 命の危険もあるし、オススメはしねえけど」

「あの……私、自分の気持ちが分からなくて。シスターのお考えも」

「フローラ。シスターは昔、神の塔に行ったことがあるんだよ」
「えっ？」

突然話題を変え、きよとんとしたフローラとは違い、ヘンリーは「だろうな」と草むしりの手を止めながら頷いている。わざとなのかどうかは判断に困るところだ。

「なんでそんなことが分かるんですの？ シスターはそんなこと一言も……」

戸惑いながらも、替えられた話題を素直に受け止めるフローラは、今度はその内容に混乱している。彼女もまた、草むしりの手を止めて、僕とヘンリーを交互に見た。

『神の塔の扉は自分の祈りでは開かない』、『神の塔の周りには魔物が近寄れない』、一個目は何かしらの負い目があるとしたら出てくる言葉かもしれないけど、二個目は実際に行ったやつじゃないと、おそろく分からないぜ。予想自体はできても、断言はできないはずだ」

「で、でも、もしかしたら何かの本に書いてあっただけかも……」

「修道院にある本はここに着いたばかりのときに、静養がてらほとんど目を通した。それに、昔読んだ本にもそんな情報どこにも書かれてなかったからな。そもそも、行ったやつの手記とかじゃなければ書かれない類の情報だ」

すらすらと喋っていくヘンリーは「だよな？」と僕に同意を求めてくる。それに頷きながら、僕自身は草むしりの手を止めないまま、彼の言葉に補足をするここととした。

「これは僕の推測というか、ほとんど勘だけど……シスターは神の塔に行ったとき、何かつらい出来事があったんだと思う」

そう考えると、最初に神の塔について聞いたときの静かな拒絶も、今回の覚悟を決めた穏やかな表情も、しっくりくる。

「ただの、僕の想像なんだけどね。でも、シスターがフローラを塔に連れて行きたい理由もちよつとは予想しやすくない？」

つらい出来事を乗り越えるのは簡単なことじゃない。僕がまだ、そんなことできやしないように。

でも、例えば何かつらいことがあって。それがまだ傷として心に残っていて。「耐えなきゃいけない何か」に見舞われるかもしれない子が目の前にいて。あのやさしいシスターだったらどう思うだろうか。

これはただの想像だ。けれど、想像してしまうからには、シスターの頼みを聞いてあげなくちゃいけないような気がしてくる。もともと、修道院にはお世話になっているし、危険なお願いをしているのはこちらなのだ。

ふと、シスターが気に掛ける「不思議な運命を背負った子」を見た。小さなフローラは、うんうん唸りながらシスターの真意を一生懸命考えているようだった。

*

出発の準備が整って、僕らは再び神の塔を目指す。陽が沈む前に祠

に着いたので、焚火を用意してのんびりと夕飯の準備をしていると、ふと、思い出したようにシスターが「この祠は、ラインハット王国の管理するものだそうです」と何気なく話し始めた。僕たちはどんな表情をしていいのか分からず、顔を見合わせる。少なくとも、僕はラインハットを隅々まで知り尽くしていたはずだけれど、そんな場所は知らなかった。

「この祠の『旅の扉』は、ラインハット城内の秘密の場所につながっているそうですよ。とはいえ、扉を潜り抜けた先の場所には鍵が掛かっている、そこが本当にラインハット城内なのかは確かめようがないんですけど」

僕らの反応をどう受け取ったのか、シスターは「そういえば、もうすぐラインハットに通じる橋がオラクルベリーの北にできるそうですよ」と雑談を続ける。

「あつ。それ、私も聞きました。行商の方が言っていましたよね」

フローラは僕らと一緒に来ることを決意して、あれから真剣な目で僕らに同行の許可を求めてきた。ヘンリーは渋っていたけれど、僕が「シスターが言うのなら」と答えれば、大きなため息を吐きはしたものの、フローラの同行を受け入れてくれた。

「ええ。橋ができれば、随分商売が楽になると。ラインハットはすばらしい国です。国民みんなが力を合わせて、惨劇にも負けず、『王国』を敬愛して」

すん、とヘンリーが鼻をすする。涙は出ていないけれど、そこには言いようのないよろこびが浮かんでいた。けれどそれを決して悟らせまい、と口を引き結び、変な顔になってしまっている。

それからシスターとフローラは食事の間もラインハットやこの近隣の町のことなど、思い出話や行商たちをはじめとした修道院を訪れる人々の噂話を楽しそうに話し続けていた。

「ふふ。教会の敷地から出たのが久しぶりで、ついお喋りになってしまいました。あなた方はラインハットには行ったことがありますか？」

夕飯の片付けを終え、僕らは祠の支柱にもたれ掛かりながら、焚火

を眺めつつシスターの話に相槌を打っていた。

「……ああ、ありますよ。良い国でしたね、すごく」

ヘンリーの答えに、シスターはますます楽しそうに笑みを浮かべて、それから少しだけ顔を曇らせる。

「昔はお転婆な王子様とそのお友達が、とても賑やかにお城の中でも外でも遊んでおられたそうですよ。生きていらっしゃったら、あなた方と同じくらいの年頃かしら」

三年も経つのに、まだ消化しきれていない話題にどう対応すればいいのか分からなくて、僕は「それより」とどちらからともなくシスターの言葉を遮ってしまった。

「シスターの話を聞きたかったですよ。神の塔に行ったことがあるんですよね？」

「そうそう。ぜひ、教えてください」

「そうですね——これは誰にも言ったことがなかったのだけれど」

シスターはくすくす笑って、それから大好きな本のページをめくる瞬間のように、思い出の品を見つめるように、愛おしそうな懐かしそうな顔になる。

「昔のことです。私は子どものころから修道院にいたのだけれど、その事件があったのは、もう既にあなたたちより年上の、十代の後半くらいの出来事で、私に大きな衝撃を与えました」

せがむ子どもに眠る前の絵本を読み聞かせるようなあたたかな声。やわらかく、慈しみがあふれ、シスターの人柄を表す「朗読」だった。「ある日、とても具合の悪そうな男性が修道院を訪れました。私を含めた修道女たちはみんな、彼の体調を気遣って、休める場所と水と食べ物を用意し、いつも通り彼を『迷える者』として受け入れました。しかし、その男性は実は『ラーの鏡』を狙う盗賊で、どこで知ったのか、神の塔に入るために修道女の祈りが必要なために、修道院にも修道女の一人を攫うために立ち寄ったに過ぎなかったのです」

パチリ。焚火の薪が静かに爆ぜる。小さな火の粉が夜の地面に吸い込まれた。

「その夜、たまたま彼の様子を見に行った私は、まんまと彼に捕えら

れ、神の塔まで一緒に行くことになってしまいました」

心地の良い声だった。お父さんやサンチョがしてくれた読み聞かせとも違う。シスターが物語を続ける。悪人であるはずの盗賊と仲良くなってしまうたこと。心から、彼が試練を突破して鏡を持ち帰るのを待ちわびたこと。

「そうして、彼は勇んで再び神の塔へ向かいましたが、神の試練の前に帰らぬ人となりました——」

僕はどンドン眠たくなり、落ちた瞼とは裏腹に幕の上がった夢の世界を見つめていた。

*

彼は「もう中には入ってくるな」と言った。危険だからと、女を塔の外へ留めた。初めて入ったときには塔の試練の難解さに何度も挑戦しては魔物に襲われ、心が折れかけていたが。

——楽しかったんだ。

くるくる変わる表情。こちらの話に真剣に耳を傾け、一々いろんな反応をして。女の純真さは、男にはあまりに眩しく映った。

男は両親が嫌いだった。男の両親は聖職者で、それゆえ人を疑わず、友人だと思っていたものに騙されてもとより少なかった財産の全てを奪われ、まだ子だった男に謝りながら首を吊って死んだ。

けれど自分だけは連れて行ってくれなかった、と男の胸の内には両親の愚かさ、弱さへの憎悪と、両親を騙した者への復讐心がくすぶった。

——そうだ、全部奪い返してやろう。

男は賢く、機転もきき、運動神経も良かった。両親を騙した者と同列になりたくなかったから、騙すなんてやり口はせず、鮮やかに盗みを働いた。

けれど、胸にくすぶった感情は消えてはくれない。

男は金持ちから金品を奪っては虚しい気持ちになり、必要な分だけを使って、後は貧しい者たちにくれてやった。けれど、感謝を受けよ

うが物足りない。やがて、男は金品よりもより希少価値が高いものに目を付けるようになる。

それは古の道具。複雑な魔法が掛けられた品々。そういうもの噂を聞けば、わくわくとした期待感が胸を躍らせ、鬱屈とした気持ちを忘れられた。

けれど、そういった品は中々手に入らない。ただの金持ちなんかとは比べ物にならないような地位を持つ者が持っていたり、人が立ち入るには命の危険がある場所に眠っていたりするからだ。

「知らないのかい？ 真実を映すっていう、『ラーの鏡』だよ」

「いや、知らねえな。そいつは一体どんな品なんだ？」

「今言った通りさ。その鏡に映った者は真実の姿が暴かれるらしい」

男はそれを聞いて、小さくて大きな勘違いをした。「ラーの鏡」は物理的に変化した者の偽りの姿を暴き、真実の姿にする力を持つ。しかし男は、その情報を聞いて「その者の本質をあらわす」と誤認したのだ。

男はラーの鏡を求めた。どうしても手に入れたかった。

——自分は両親のようにはならない。

けれど、そうは思っていない、他人を信じてみたかった。でも、信じたら騙される。裏切られる。それが恐ろしいから、己の心を守ってくれる伝説の品を、手にしたかった。

そして、満を持して男は試練を受けた。あるはずのないまやかしに惑わされ、こちらの様子にはお構いなしどころか好都合とでもいうように襲い掛かってくる魔物。己すらも信じられなくなりながらも、周りを疑い続けた経験が男を生かした。けれど、細い通路で魔物と戦っているときに、うっかり階下に落ちてしまい、体を強く打った。

——このままじゃ、上を目指すのは無理だ。

一度、塔の外へ出て傷を癒そう。そう思い、彼は息も絶え絶えになりながら塔からの脱出を試みた。そこで、愚かにもまやかしに惑わされる修道女を見つけた。どうして声を掛けたのか、男自身にも分かりやしない。けれど、愚かで心が弱いせいで神にすがっていると決めつ

けていた聖職者が、まやかしを打ち破った。男にも、打ち破ることができなかったのに。打ち破れなかったから、逃げるように上を目指したのに。

治療を受けながら話をしていると、男は女を憎からず思うようになっていった。

『ラーの鏡』を手に入れて、偽りに惑わされ、騙される人を減らしたいんだ」

だから、二回目に挑戦してみようと思った。女に言ったことは嘘ではない。

随分恰好をつけたものだ、と自分でも呆れてしまう。けれど、どういうわけか、あの修道女には己が傷付かぬためという恰好の悪い理由を話したくはなかったのだ。

今度は絶対に、悲願を果たしてみせる。とにかく、上を目指した。息も絶え絶えになりながら、階段を駆け上がった。

それなのに、目の前に宝箱があるのに、最上階には道がなかった。

——騙された。

男は絶望した。決して飛び越えられる距離ではない。落ちたらあつけなく死んでしまうだろう。こんなものは、試練でも何でもない。伝説をえさにぶらさげて、引っ掛かった愚か者を弄ぶだけのもの。

男はせり上がる吐き気と涙を堪えて、階下へ向かった。

——あいつに言つてやらなくちゃ。神なんて、信じるもんじやない！

一階の草花咲き誇る中庭で。塔の外にいろと言ったのに、女はまた、そこにいた。涙に濡れる男を抱きしめるように腕を開いた修道女に触れることは叶わない。それはただの幻だった。男の魂が焦がれ、それに呼応したために塔が見せた、都合のいいまやかし。

男は背後にいた魔物に気付かないまま、絶望ばかりつまつた胸を、背中から貫かれた。

すぎるもの

特に何事もなく塔まで着いた僕らは、足を止めずに扉の前まで歩いた。ゆったりとした歩調で、シスターは僕らの先頭に立って緊張したように扉を見つめている。そんなシスターの様子を見ていたら、その目に涙が浮かんだように見えたけれど、それは雫にもならず、もちろん零れることもなく、僕は見間違いだと思うことにした。

「ああ、神よ……」

両手を組み、神に向かって祈るシスター。錯覚なんかじゃない光が、彼女に降り注ぐ。けれど扉は開かない。

「私の罪を——清算しにまいりました」

ぼそり。シスターがそう呟き、祈りを続ける。それはとても長い時間にも、短い時間にも思えた。シスターに降り注いだ光がさらに強くなり、そして、静かに、ゆっくりと扉が開いた。

「ああ、神よ」

ぼたり、ぼたり。シスターがその場に跪き、顔を覆って涙を流し始める。僕たちのような子どもには、この人にどんな過去があったのかは分からない。だけど、その涙は確かに、修道院に懺悔しにくる迷える人々のものと同じで、僕にはシスターの心が救われたのだと思えた。

「シスター。これを使って修道院に戻ってください。僕たちも、鏡を手に入れたらすぐに戻りますから」

キメラの翼を手渡すと、彼女は顔を覆っていた両手で、大事そうにそれを受け取った。

「どうか、どうか。あなた方を見送らせてください」

「ああ。それなら、塔に入ってくオレたちの勇姿、しっかりと焼きつけていてくださいよ。涙なんか拭いてさ」

ヘンリーがハンカチを渡して、自分自身の言動に少し照れたのか、僕の背中をバシッと叩きながら「行くぞ！」と歩みを急かした。

「あつ、あの！ シスター。私、行ってまいりますわ」

「ええ。フローラ、ソロ、アンドレ。どうか皆さん、御無事で。あなた方に神の御加護があらんことを」

小走りで僕らについてきたフローラが塔の中に入ると、扉がぼたんと閉まった。びくりと肩を揺らした小さな女の子が、こわごわと僕のマントの裾を掴む。

「さっそく、扉があるな。開けるぞ」

ヘンリーの言葉に無言で頷くと、古そうに見える扉は、案外簡単に開いた。扉の向こうには、中庭がある。風もなく穏やかに生える草花と、通路を挟んだ両脇にある、中央に像の安置された泉。奥にはもう一つ、扉があった。

「あ……誰か、いらつしやいますわ」

フローラの言葉を聞く前に、僕は自分の目を疑った。

そこにいたのは、幸せそうに笑う人々。向かい合う男女のうちの一人は、間違うはずもない、僕のお父さん。もう一人は、長い黒髪の、優しそうできれいな女の子だ。その人たちの周りには、海に吞まれたはずのデールと、気持ちよさそうに寝そべるゲレゲレがいる。それから、日焼けをした黒髪の女の子——アルマ。

今のフローラよりも小さな、あのとときと同じ姿のアルマがこちらに気付いて、にこりと笑いながら手を振っている。

「お二人とも、顔色が……」

フローラが何か言っているけれど、僕はその光景から目が離せなかった。きつとヘンリーも同じにちがいない。

ああ、なんて——なんて、残酷な試練なんだ。

「ソロ様！ アンドレ様！ 魔物ですー！」

フローラが叫ぶより早く、僕は剣を振るっていた。魔物の断末魔と共に、幻想はほどけて消えた。みんな、笑顔のまま。いなくなってしまう。

本物じゃないことなんて、痛いくらいに分かっていた。だって、みんなの体は透けていた。ぼんやりしていた。だけど僕には、はつきり見えてしまった。きつと何よりも望んでいる光景だったから、僕自身

がぼんやりしていたはずの幻を鮮明にとらえたただけだ。

「行こう、——『アンドレ』。鏡を手に入れなくちゃ」

「ああ、『ソロ』。お前が前衛をしてくれ。オレがフローラを守る」

隣を見れば、ヘンリーは名残惜しそうに、その人たちがいた場所を見つめていた。けれど、僕の視線に気が付いてか、真剣な表情になって頷いてくれた。

「フローラ、ありがとうな。お前の言葉で目が覚めたぜ」

「い、いえ……私、どなたかがいたのは見えたんですけど、きつとお二人のようにハッキリ見えなくって。お役に立てたようなら、うれしいです」

はにかみながらも気遣うように返事をしたフローラは、三人で塔を目指したときのようにキヤアキヤアとは騒がなかった。口を引き結び、緊張を露わにしながらも、僕らの邪魔にならないように、一生懸命考えて守られてくれている。

それからは、特別な仕掛けもなく二階への階段を見つけた。魔物は襲い掛かってきたけれど、二人でフローラを守りながらの戦いも板についてきたようで、そこまで苦戦はしていない。魔物の数が多くて危ないときは躊躇なく魔法を使う。この先も何があるかは分からないので、魔力は温存しておきたいけれど、ここで死んでは元も子もないからだ。

「通路、だな」

「うん。一本道だ。道幅はあるけど、魔物が来た時に落っこちないように気を付けよう」

何か罫があるのでと明らかに疑っている表情のヘンリーに言葉を返し、僕は二人より先にその道へと足を踏み出した。

『先へ行くの?』

声だ。幼い子どもの声。後ろからついてきているヘンリーやフローラのものではない。さっき僕に手を振ったアルマでも、にこにこ微笑んでいたデールのものでもない。

『ほら、魔物がきた。危険だよ。また後悔するかもしれないよ』

襲い掛かってきた魔物たちを切り伏せたり、通路から突き落としたり

りしながら、僕は心臓がバクバクと異常な速さで鳴っているのを感じていた。

それは明らかな幻聴。けれど、妙に耳に、脳みそに、こびりつく。おどおどとして、本気でこちらを案じているような、幼い——あまりに幼い声。

「そんな……私、そんな風に思っていないせん」

頭の中に響いてくる声と違って、耳に入ってきたのはフローラの声。あの声に返事をしているとしたら、答えがちぐはぐだ。だから多分、僕とフローラは別の声を聞いているんだと思う。

『挑戦なんかしなくたっていい。君だって、本当は休みたいと思っ
ているはずだ』

容赦なく襲い掛かってくる魔物に、僕はただ剣を振るった。一階で見た幻想のように、まやかしたと分かっていのに。

「二人とも、耳を貸すな。幻聴だ。」

同じくフローラを守りながら魔物と戦うヘンリーの顔は、歪んでいる。それを間近で見ているフローラが、胸の前で両の拳をぐつと握ったのが視界に入った。

『フローラだけじゃない。ヘンリーだって、本当はこんな危険なことに巻き込まなくたってよかった』

はつきりとしたヘンリーの声と対比され、その声の主が一体誰なのかようやくピンと来て、一つ息を吐く。

『僕が、旅を諦めれば。お父さんの意思なんか継がなくても、仇を討たなくても、幸せはきつと見つけられる』

それは幼い僕自身の声だった。

「それはできない」

僕の言葉に、驚いた顔のヘンリーがこちらを見る。見開かれた青い目に、ふつと微笑んだ僕自身の顔が映った。あの時から三年も経った。まだ子どもだけれど、六歳の僕よりは背も伸びて、顔つきも少しずつ変わってきている、「今の僕」の顔。

「旅は、僕の生きる目的だ。僕は、旅の果てを見たいから、歩いているんだ」

それが、どんなにつらくても。

昔、アルマと一緒に出逢った不思議な青年のことを、ふと思い出した。顔はもうぼんやりとしか思い出せない。けれど、その人の言葉に「言われなくても分かっている」と生意気な返事をしたことはよく覚えてる。

「僕は負けられない」

夢中で魔物を倒して、夢中で歩いていたら、いつの間にか一本道は終わっていた。ヘンリーとフローラの顔をそれぞれ見てから、改めて、今の僕の意味として、僕は二人にはつきり告げた。

「行こう」

ヘンリーはどこかうれしそうに、フローラは震えながらもしっかりと頷いてくれた。

*

子どもたちを扉の向こうに呑み込んだ塔を見上げながら、老女は静かに祈りを捧げた。それは親心にも似た純粹な心配であり、数奇な運命のもと生まれてきた子どもたちのこれからを想うゆえの憂いであり、試練を乗り越えてほしいという期待であった。

懺悔は終わった。この扉の前で、神に全ての告白をした。

若いとき、老女は信じていた神に裏切られたと思い、自身の寄る辺であった存在を憎み、恨み、善く生きれば救われるのだと信じて生きてきた己があまりに愚かに思えて、あやまちを犯した。

悩み、苦しみ、現実と向き合うことをやめ、流されるまま生きるようになった。善い行いなどただの徒労だと、汗水垂らして質素な生活を送る修道女たちを軽蔑し、嘲笑した。

誰にだって幸せになる権利はある。あつていいはずだ。それなら、貴重な人生の時間を「そんなもの」のために費やすなんて、馬鹿げている。

夢を見ても、それは泡沫。あるとき、あつけなく爆ぜて目が覚めるだけ。胸に残るのはむなしさ。その手には何一つ、残りやしない。

だから、もがくことも、足掻くことも、初めからしない方が賢明だ。善く生きることには一生懸命になんかならなくなつていい。一生懸命になるべきは、いかに自分の思い通りに生きるかだ。

——なんと、未熟な考え。

けれど、若い時分の女は本気でそう思っていた。

短い時間とはいえ、言葉を交わし、無事を祈って送り出した人が、無情にも命を落とす。悪趣味な幻想を見せて惑わせて、人の心を弄ぶ「試練」は、なんとおぞましいことか。

若く、純朴な修道女だったその女は、その日から盗賊として生きることを決めた。欲しい物は奪う。いらぬものは切り捨てる。仲間を作らない。嘘を吐いて、騙して、享楽を求め。

人生なんて、それでいいのだと思っていた。

そんな風に欲望に忠実に生きていて、あるとき女の胎には命が宿つた。どこの誰とも知れない男の子どもなど育てる気はなかったが、女には産まないという発想はなかった。

悪事に手を染めながら生きてきて、それでも、女は殺人に手を染めたことはなかった。幼い頃より神の教えを愚直に守ってきたゆえか、簡単に死にゆく人々を見てきたからか。命の尊さをせせら笑いなながら、生んだら棄ててやろうと簡単に考え、小さな命を育んでいった。

子が生まれ、棄ててやろうとしたとき、女はあの海辺の修道院を訪れた。ふにやふにやと、まだ弱い声帯を震わせながら泣く我が子を、夜の教会へそつと置き去りにすると、無我夢中で走り出す。それはまるで、魔物や盗みを働いた相手から、武器を振りかざして追い掛けているときのように。

それからのことは、あまりよく覚えていない。月日が経ち、体力も衰え、女は段々と盗みをやらなくなつていった。あてのない生活を繰り返して、今より十数年ほど前のこと。盗んだ物を売った金は、どんどん減っていくばかりで、酒浸りになった女は、その日もいつものように、酒場の主人に管を巻いていた。

カラン、と戸口のベルが鳴って、何気なくそちらに目を向けた女は、

思わず息を呑む。店に入ってきたのは、目を瞠るような美しい青年だったからだ。

薄暗い照明に照らされてなお際立つ白磁の肌。やわらかそうな黒髪。切れ長で涼やかで、どこか吸い込まれそうになる黒い目。

明らかに、場末の酒場に来るような人物ではない。

青年は神秘の道具や天空の勇者にまつわる情報を集めていたように、女は店主に話し掛ける青年へ得意になって「ラーの鏡」のことを話した。修道女の祈りがないと扉は開かないが、女はその昔扉を開いたことがあると聞くと、青年は彼女の手を取って、自分と共に「神の塔」へ行こうと誘った。

女は断った。

あの性悪な試練の塔に、この美青年の命をくれてやるのはもつたいないと思っただからだ。しかし青年は、「それならば別の修道女を誘う」と言っただけで諦めない。これほど美しい青年だ。彼の頼みを聞く女はいくらでもいるだろう。

そういうわけで、女は頼みを断りつつも、気になって青年の後を付いていくことにした。協力してくれる修道女はすぐに見つかり、彼女はきちんと道案内を果たした、はずだった。

「何も無いじゃないか」

青年は、ひどく冷たい目で修道女に言い放った。そんなはずはない、と彼女は目の前にそびえ立つ試練の塔を必死に指差す。けれど、青年は頭を横に振り、人形のように整ったその顔に失望を浮かべて、修道女に手をかざした。

——そういえば。

女は思い出していた。昔読んだ文献に書いてあったことを。

神はすべての者に試練を与えるが、悪しき者にはその資格を与えない、と。

魔物というだけでは、悪しき者ではない。魔物は狂暴だが、闘争本能が備わっているだけで邪悪ではない。邪悪な存在というのは、絶望を望み、世界を腐らせ、破壊を好む者。ゆえに、人であろうが魔物であろうが、悪しき者は試練を受けられない。

目の前で、道案内をした修道女がはじけて肉片となる。

女は呼吸を忘れていた。見つかったら殺される。あの美しい青年は、ただの悪党程度には見える「神の塔」が見えないほどの、本物の悪。

「見ていたのか」

けれど、無情にも女は見つかり、捕まってしまった。そして、地上の地獄に招かれる。

魔物の巣窟。そこに神殿を建てるのだと言った青年は、険しすぎる山脈の主だった。人が暮らすには適さない、空気の薄い武骨な岩肌。魔物を、人を使役して、青年はにこりと笑った。

「ここは救いの場所になるんだ。神なんて馬鹿げたものじゃなく、本当の救いを愚かな人々に与えよう」

女は奴隷となった。来る日も来る日も働き、鞭で打たれ、己の人生とはなんだったのかと、自ら命を絶ってしまった方が楽になるのではと、苦悶の中、――神に祈った。

罰が当たっただけなのだ。神様はいつでも見ている。悪事を働き、我が子を棄て、周りの人々をないがしろにした自分への罰。

――これはきつと、神様からの試練に違いない。

そう思っ、女は賭けに出る。鞭打つ魔物たちにわざと歯向かうことを続けた。そうした中で、あるとき特に手酷い折檻を受けたとき、「どうせもう死ぬだろう」と死体を入れる樽に入れられ、空高くそびえ立つセントベレス山から、海へと投げ捨てられた。

女は樽の中で己に回復魔法を掛け続けながら、神に祈った。

そして、祈りは届いた。よっぽど縁が深いのか、樽は海辺の修道院のすぐ近くの砂浜に打ち上げられる。女は過去を語らず、それからただ真摯に神へ、苦しむ人々へ、祈りを捧げた。

「光の教団」。そんなものに誰も惑わされないように。正しき道を歩むことが、何にも代えがたい尊いことなのだ。

――神様。私に、すべての罪を清算させてください。

青々とみずみずしい、若木のような少年たち。教団に命を奪われたと伝え聞いたグランバニアの王子の名前は、たしか「リュカ」だった。ラインハットの話題で表情を変えた少年は、ならば第一王子「ヘンリー」か、第二王子「デール」だろう。それから、無垢で愛らしく、どこまでも澄んだ心を持つ少女。不思議な運命を背負うと言われた彼女は、悲劇の王子に心惹かれているのだと言う。

それが、ただの深読みであればよい。占いとやらが、ただの妄言であればよい。けれど、「そうであってほしい」という己の願いとは裏腹に、女は確信していた。

彼らのたどる道は、ただの試練などではない。険しい茨の道なんて表現では、おそらく生ぬるいだらう。

だから、女は彼らとの約束を破り、再び扉を開けた。もう二度と後悔しないように。送り出した男の生死を確認する勇気もないまま、「神などいない」と逃げ出したこの塔に、もう一度入らなければならぬ。

老いた手。子どもころから祈りに暮れ、道を踏み外して多くの人々の幸せを奪い、邪悪な存在の根城を作るために酷使し、あやまちに気が付いて再び祈りを捧げ続けた手だ。

老女は、水分の少ないその手に、扉がぴったり吸い付くように感じた。軽く力を入れれば、筋力の落ちた細い腕でも容易に扉は開く。

懐かしい光景に、老女は胸がずきりと痛んだ。

——あのととき、見送らずに自分もついて行けば。

——あのととき、約束を違えて様子を見に行っていたら。

男は鏡を持ち帰らずとも、女の隣で笑って暮らしていたかもしれない。女はその手に、子を抱いていたかもしれない。

けれど、それはこの塔が見せる幻想となら変わりなく、詮無いことだった。

一步、一步。塔の中をあるけばあのとときの光景、感情がよみがえってくる。

女は、あの時のようにまぼろしに惑うことはないだろう。己の魂が焦がれる光景を塔が見せたとして、ただ、それを受け入れるつもりだ。

未熟な己を受け入れ、そして現実を受け入れる。

祈りの必要がない、あの中庭に続く扉。

それは塔の入口よりは少し重く、女は力を込めてゆっくりと開いた。

*

咽る少年の背を、男は少々ばかり強すぎる力でたたいた。体格もよく、筋肉粒々の荒くれ者だ。バシバシと強い力で叩かれる少年は、涙目になりながら口元をぬぐう。

「助けていただいたのには感謝しますけど……」

死に掛けていたわりに、眼力の強い少年だった。荒れ狂う波に運ばれたいろいろな物で体を傷つけたのだろう。痛々しく怪我をしているわりに、彼の表情は凜としていた。そして、男の隣を見て、眉を寄せる。

「おう、なんだ」

男の隣には、鉄製の檻がある。そこには、濡れそぼり、ぐったりした様子の魔物が捕えられていた。少年と同じく溺れていたわりに、魔物の体には傷一つない。

「その子、出してください。友達なんです。彼は人を襲いません」

「可愛いこった。魔物がオトモダチとは」

その発言に、柔和そうな少年はさらに眉を寄せ、男へ鋭い視線を送った。それを見て、荒くれ者は上機嫌に笑う。大人の男であつても、彼と対峙するときには怯むものだ。しかし、怖いもの知らずなのか、よほど魔物が大切なのか、少年は男を睨みつけているではないか。

「人間と魔物が友達になつてはいけませんか？ 檻なんかに入れてないで、出してください」

しかも、それは到底虚勢には見えない。相手がたとえ誰であろうと、「友達」のためなら戦つてやるといふ覚悟が見て取れる。

「おいおい、自覚がねえな。こいつもお前も、俺様がいなくちゃ二人まとめて死んでたところだぜ」

「それについては、感謝しています。ボクにできるお礼なら、いくらでもします」

「いいや、『礼』じゃ足りねえ」

荒くれ者が少年の鼻先に太く武骨な指を突き付けた。普通の子どもならそれだけで泣いてしまいそうな状況なのに、彼は怯むどころか、睨むことをやめない。

圧倒的不利だ。しかも少年は丸腰。海で溺れながらも、沈まぬように武器や防具は全て棄てた。海水を多量に飲み、体は憔悴しきっている。それに何より、少年には攻撃魔法の適正がない。使えるのは補助や回復の魔法ばかりだった。あるいはもう少し経験や修行を重ねれば、使えるようになったかもしれないが、今の少年には使えない。

体格で負けている相手に攻撃されたとして、少年ができることと言えば逃げることに、武器を奪うことくらいか。しかし、大切な友人が捕えられている。絶対に見捨てるつもりはない。

「俺様がいなかったらお前らは死んでたんだ。ってことは、それを助けてやったお前らの命は俺様のモンってことだ」

拾われたのは、カジノ船だった。

負けてむしゃくしゃしていた荒くれ者が、嵐の中外の空気を吸おうと、周りに止められながら船室から出たその時。男は、光を見た。それは、流木にしがみつきながら、ぐったりする魔物に、少年が懸命に掛けていた回復魔法の光だった。

それを見た時、何かを考える暇もなく、海に飛び込んでいた。自分で豪語するほど泳ぎが上手く、悪運の強い男であったとしても、荒れ狂う海に入るなど、ほとんど自殺行為である。しかし拍子抜けするほどあっさりと上手くいった。

まず、あまりにあっさりと男は少年と魔物のもとまで辿り着いた。そして彼らを腕に抱えると、男がえつちらおつちら泳がずとも、波が船へと運んだのだ。まるで、何かに導かれるように。

その様子を見ていた者たちは、口をそろえて「奇跡だ」と言った。「本当に、助けていただいたことには感謝しているんです。でも、ボクにはやらなくちゃいけないことがある。会わなきゃいけない人がい

る。行かなきゃいけない場所がある。ボクの人生を、あなたに捧げるわけにはいきません。どうか、ギコギコをそんな場所から出してください。震えているもの。あたたためてやらなくちゃ」

男はため息を吐く。

「いやだね。こいつは俺様のモンだ。このまま殺すのも、見世物にするのも、俺様の自由だ。お前の頼みを聞いてやる義理はねえ」

衰弱しているはずの少年から、存外力強い蹴りが放たれた。至近距離で、足を狙った容赦のない攻撃を、しかし男は正面から受け止める。少年の細い足が男の腕に掴まれ、友達思いの心優しい少年は宙吊りの姿勢になった。

「そうだな……。俺様はカジノで負け続けて、金が全くねえ。だが、賭け事は好きだ。お前らの人生を、二人まとめて百万ゴールドで売ってやろう。それを嫌って言うなら、売りさばく。お前が選べるのは二つに一つだ。自分の人生を自分で買うか。それをつっぱねて俺様に売られ、奴隷として一生他人のものになるか」

少年の目の色には、明らかに憎悪が満ちる。

「ボクらを売ったところでそんな値はつかないはずですよ」

「なんだア？ 嫌ならどっかの変態に売っぱらっちゃってもいいんだぞ。愛玩用でも、労働力としても、ガキは売れるからな」

逆さになったままの少年は、「それなら」と男に向かって先程までとは打って変わった穏やかな声を出した。

「あなたの大好きな賭けをしませんか？ ボクが勝てばギコギコを檻から出してボクらを自由にしてください。あなたが勝てば、あなたのおっしゃる通り、ボクのごときは好きにしてかまいません。いくらあなたが賭け事に弱いと言えど、子どものボクに勝つ自信もないというのなら、話は別ですが」

男は少年の足を放した。突然のことであるはずだが、予想していたかのように、少年は受け身を取る。頭に上っていた血が重力に従って胴をめぐるっていくのを感じながら、少年はいかにも無害そうに目元をやわらげた。

神の導き

体を休めつつ情報収集する中で、私はアルス様からいくつか不可解な話を聞いた。そのほとんどは、無理やり理由をこじついたり変に深読みしたりしながら頭を悩ませるよりも、普段は胸の内にしまっておいて、手掛かりがあつたときに引つ張り出しながら解決していけばいいと思っっている。

「じゃあ、行ってまいります。見つけたら、必ずお渡ししますね」
「うん。行ってらっしゃい。よろしく頼むよ」

その中でも、一際謎だつたのが、勇者様の「冒険の書」がなくなつてしまったこと。冒険を終えてからは、アルス様は御自宅の机の上に置いていて、基本的に持ち出すことはなかったそうだ。それが、私とパスさんがこの世界が来たその日、家に戻ったら忽然と姿を消していたとのこと。

アルス様のお母様であるマーレさんはその日は買い物以外に外出していないそうで、村の人たちも人の家に勝手に勝手にお邪魔して物を取っていくような人ではない。

だから、私が帰ってきたことと何か関係があるかもしれないとして、勇者様は「僕の冒険の書をどこかで見つけたら持ち帰ってほしい」と私にお願いしてきたのだ。

不思議な話だつた。他にも不思議な話はあつたけれど、例えば私が向こうの世界に行った時間とこちらの世界でいなくなっていた時間が噛み合わないとか、そもそもなぜ石板が砕けて飛び散ってしまったのかとか。そういうものとも少し違う種類のように感じた。

私とパスさんはまず、石板について「何か知っていそうな人物」を訪ねることにした。シムティアの町にいる、神様である。

「その……『神様』というのは、そう名乗っている御老人ではなくて、本当に『神』なのか？」

「パパスさん、そんなこと言うとメルビン様に怒られますよ。神様は本当に神様ですから。宙に浮いてるし」

マール・デ・ドラゴーンに運賃として十ゴールド払って（シムティアの町は近いから、一人五ゴールドでいいと言われた。正直甘やかされてるなどは感じる）、私たちは小さな島に上陸した。

困惑気味のパパスさんの腕をぐいぐい引いて、活気あふれる町に足を踏み入れると、いつもと変わらず、神様は町の中心にそびえる岩の前にいらっしやった。

「神様！ お久しぶりです！」

姿が見えてすぐに、大きく手を振ってこちらの存在を示すと、神様は孫を見る老人のように顔を綻ばせてくれた。

「おお。久しいのう、アルマ。大変じゃったな。その者は……」

「私はパパスと申します」

パパスさんがやはり困惑気味に頭を下げると、神様は「うむ、うむ。知っておるよ」と鷹揚にうなずいている。まあ、びっくりするとは思う。町の人たちは誰も信じていないらしいけど、神様は普通に隠れもせず光ってるし浮いているのだ。町の人たちはみんな元は魔物だった人らしいし、そもそも感覚が人間とは違うのかもしれない。

「では、アルマとパパスや。わしに何か用かね？」

「御存知かとは思いますが、私たち、パパスさんが住んでいた世界につながる石板の欠片を探しているんです。何か手掛かりがほしくて、神様をお訪ねしました」

「うむ、よい判断じゃな。……では、わしと戦ってみるかの？」

「えっ!？」

急に何を言い出すんだ創造主。心臓に悪いからやめてほしい。神様と言えば、アルス様たちが四人掛かりで戦う相手というイメージしかない。一度も観戦したことはないけれど、ただ倒すのではなく、時間をあまり掛けずに倒せると御褒美をくれるらしいということは、話に聞いたことがある。聞いたことはあるけれど。

私は冷や汗が噴き出るのを感じた。無理無理、やめて。

「そ、そういうつもりはなくて。お話を伺いたいなーと思ってまして

……」

顎髭を撫でつけながら、にこにこ神様がこちらを見ている。本気だ。あれは多分本気の目だ。

「ふむ。残念じゃのう。わしはそなたらの探す石板の欠片を持っているのじゃが」

スツ、と懐から出される石板の欠片。神様が言うのなら、あの世界への石板で間違いないのだろう。まさか神様が、暇つぶし相手欲しさにくだらない嘘を吐くとは思えないし。

「どうか、それをお譲りいただけませんか？」

「もちろん、そのつもりじゃよ。わしに勝てたらの話じゃのう」

「いえ今日はお話だけに参りました」

パパスさんが何かを言う前に、私は早口にそう返した。冗談じゃないぞ。二人掛かりでマリベル様に勝つどころかそもそも挑戦するレベルにも達していないというのに、そのマリベル様が一人では勝てない神様になぜ挑まねばならんのだ。

「つまらんのう。別にアルスたちのようにわしを本気にさせろとは言っておらんのに。して、話とはなんじゃ？」

私は前半を聞かなかったことにして、後半のみに返事をした。

「その、石板のことなんです。勇者様たちが閉ざされた世界の封印を解くために使っていた石板は、神様がお作りになった物ですよね？」

では、私をパパスさんのいる世界に運んだ石板は、一体誰がどんな目的で作った物なんですか？」

神様は変わらず、顎髭を撫でてこちらを見つめている。妙に緊張して喉が渇き、試されているような沈黙がおそろしくて、私は何かを言おうとした。

「石板は誰にでも作れるものじゃよ。誰が、どんな目的であろうとも」「ええ……」

けれど、その前に告げられた神様の言葉に対し、素っ頓狂な声を上げてしまう。私はただ、言葉としてではなく、その意味するところが分からず、真意を知りたくて、この世界の創造主たるお方を見つめた。

「さみしいことに、最近はアルスたちも相手をしてくれんのじゃ。わしの遊び相手になつてくれるのなら、もつと会話も弾むかもしれぬが……」

遠回しな脅し文句に、私は頬を引きつらせたのを悟らせないために、頭を下げる。本当にやめてくれ。死んでしまいます。

「いえ、少しお話しできただけでも十分です。また実力を付けたら、挑戦させてください」

そう言つて、踵を返そうとすると、「そう急くことなからう」と体が動かなくなつた。ギギギ、と強制的に体の向きを神様の方へ向けられる。それはパパスさんも同じようで、驚いた顔をしていた。

「アルマや。そなたの探す石板の欠片は、たしかにこの世界のいたるところに散らばつておる。しかし、この世界以外にもまぎれこんでしまったようじゃ」

ちらり。意味深長な感じに、神様は自身の背後にそびえる岩を見た。その岩は、地下に入る階段の目印ともされる。地下には台座があり、そこに石板をはめると、それは過去の世界ではなく、不思議な異次元につながっているのだとか。

「だが、心配することはない。そなたが真摯に他者と接し、自己と向き合えば、おのずと手元へ集まろう。パパスと力を合わせ、頑張るのじゃぞ。わしはいつでもここで待つておるからな」

「……はいっ！」

今度はしっかりと目を見て返事をして、頭を深く深く下げる。いつの間にか自由に動かせるようになった体で、パパスさんの両手を握つた。

「パパスさん、行きましょう！ 世界の地理には、詳しいんです」

世界地図を完成させてくれた人たちに、いろいろな話をしてもらったから。神秘の力の宿る場所。精霊の御座す、自然の力が満ち満ちる場所。

「アルマ。この世界の神は……とても大きな方なのだな」

町を出るときに、パパスさんが一度だけ神様の方を振り返つて言った。

「そうなんです。まあ、その分……すごくお強いそうですけど……」
私たちはマール・デ・ドラゴーンに乗って運賃を払い、コスタールに向かった。人が集まるところは情報が集まるところだ。それに、珍しい物があればカジノの景品として扱われることもある。

波に揺られながら、私はパスさんにアルス様たちの冒険を、まるで自分の体験かのように話して聞かせた。どこかの誰かが脚色して書籍化したものとは違い、子どもに語って聞かせるという意味での配慮はあるだろうけれど、勇者様たちのその時の悲しみと、感動と、出会いと別れをありのままに聞かせてもらった、長い長い物語だ。とても、一日じゃ終わらない。

「アルス殿たちは……あまりに過酷な旅をしてこられたのだな」
「うん。でも、旅をする中でお辛いことはたくさんあったと思うんですけど、アルス様がいつも言っていたのは、戦いの中でのことらしくて」

「戦いの中で？」
「いつも、私に『気を付けなくちゃだめだよ』って、悲しそうな顔をするんです」

それは、あまりに単純なこと。誰もが一番「気を付けているはずのこと」。

『死んじやだめだし、仲間を死なせちゃだめだよ』って」

世の中には、蘇生呪文というものがある。しかしこれは聖なる呪文として扱われ、禁忌の術としては扱われない。というのも、誰にでも効くものではないからだ。

たとえば、誰もが言われずとも理解しているように、寿命や病で亡くなった者は生き返らせることができない。それは、蘇生呪文が「魂を呼び戻す魔法」と「肉体の時を限定的に巻き戻す魔法」を組み合わせた極めて高度な呪文であることに起因する。

寿命で亡くなった者や病で亡くなった者の魂を呼び戻したとしても、肉体の時はほんの少し戻るだけだから、嫌な言い方をすると、そのひとたちは「永遠に死に続けることになる」だけ。だから、説明されなくても本質的に魂というのはそういうことを理解しているらし

くて、どれほど呼び掛けても、肉体には戻ろうとしないらしい。

さらに、戦いの中で亡くなってしまうた人の中にも、蘇生呪文が効かないひとがいる。至極簡単な理由で、そのひとたちは「呼び掛け」に応じてくれないからだ。

回復魔法は万能ではない。初級魔法で、怪我が治っても慣れていない人はどつと疲れてしまうように。上級魔法でも、ひどい怪我であればあるほど「時間」は戻っても肉体の「記憶」は残り、そのちぐはぐさに「酔う」（と表現される症状が出る）人がいるように。

死ぬことはつらい。

『でもね。もつとつらいのは、生き返ることなんだ』

それは私に言い聞かせるというよりは、誰にも言えなかった本音を呟くような調子の言葉だった。私があればほど妄信している勇者様はそのとき、「勇者アルス」ではなく、一人の青年に見えた。当然、分かっていることではあったけれど、そのとき真の意味で私は理解した。

勇者は、人であることを。

「目的がはつきりしている旅ほど、『生き返らせなくちやいけなくなる』。だから、私たち、頑張つて死なないようにしましょうね。もちろん、死んでしまったそのときは、生き返らせてほしいですけど」

そう伝えれば、パパスさんは私の頭を撫でた。船は穏やかに、享樂の国コスタールを目指している。船の中でありながら一つの町と言っても過言ではないマール・デ・ドラゴーンは慣れた様子で、眠りにについているその間に在り方を変えた祖国へ向かった。

途中でフローラを守る役割を交替した僕らは、ヘンリーを前衛に据えて、ようやく塔の五階まで到着した。しかし、階段を上り切るやいなや、前を行くヘンリーが突然襲い掛かってくる。彼は見事、魔物の攻撃を正面から剣で受け止めた。

いや、それは魔物のように見えただけだ——人だった。

奥に伸びる通路をふさぐように、やせ細った老人が立っている。汚

れすぎた頭は、白髪があること以外には、元の色が何色だったかさえ分らない。身にまもっているのは、擦り切れそうなぼろきれ。骨と皮の魔物と言われたら信じてしまう人がいるかもしれないと思うくらい、ひどい状態の人だった。

「ああ……ようやく」

掠れた声は、とても聞き取りにくい。伸び放題の髪の毛の隙間からぎよろりと覗いたその目は、僕でもヘンリーでもなく、間違いなくフローラをとらえていた。

「ようやく、修道女があらわれた……」

のそり。性別さえわかりにくいがおそらく男性だと思われるその老人は、ゆつくりと立ち上がった。剣なんて持ち上げられなさそうなくらい細い腕で、抜身のさびついた剣をこちらに向けてくる。

あれでは斬れない。殴打するくらいがせいぜいの、手入れもロクにされていない、かつて剣だったもの。

ぶつぶつと何事かを呟く老人は尋常じゃない様子で、ふらふらとこちらへ向かってきた。僕とヘンリーはフローラを背に庇い、互いの武器を構える。

「なあ、ガキども……修道女を寄越せ……俺は……塔から出たいだけなんだ……」

「だったら、一人で勝手に出ればいいだろ。武器を向けてきて、そんなの人にお願ひする態度じゃないぜ！」

ヘンリーの毅然とした言葉に、老人は「無理だ」と消えるような声で言った。

僕たちが目指したいのは、彼の立ちふさがる向こうにある細い通路だ。二階の幻聴に語り掛けられる通路と同じくらいの道幅だろうか。魔物たちは出てこない。

僕は気が付いていた。老人の背後に伸びる通路は、途中で道がなくなっている。そして、途切れた道のその先にある物が、おそらく僕らが求めている鏡であることに。

「扉は修道女しか開けられない。……出るときもな！」

老人が剣だったものを振りかぶってきた。弱々しく、衰弱している

ように見える老人だけれど、その目のぎらつきが、決して油断していない相手ではないと物語っている。

「メダパニー！」

ヘンリーが混乱の呪文を唱えた。相手から正気を奪い、戦いを成立させなくする呪文だ。

「スカラー！」

僕は、万が一の時のためにフローラに守りの呪文を掛ける。よろよろと動きの速くない老人だけれど、ヘンリーも相手は人だということに気が付いているだろう。話し合いが通じる状態ではなさそうだが、問答無用で切り伏せるつもりはないらしく、鏑迫り合いの中ふつと力を抜いて相手の体勢を崩し、側方から剣を弾き落とそうと、鞘で思い切り殴打した。

「修道女を寄越せえ!!」

しかし、老人は剣を離さない。さび付いた棒きれのようなそれを握りしめながら、混乱している様子もなかった。

「チッ！ 最初っからイカれてるやつには効かねえか！」

ヘンリーは悪態を吐きながら、狙いをフローラから自分に誘導しようとう攻撃を重ねていたけれど、老人は決して視線をフローラから外さない。恐怖で青白い顔をした彼女は、自分を守るために前にいた僕の背中をトン、と押した。

「わ、私！ 扉を開けられません！」

そして、一歩前に出たフローラがそう叫んだ。

「入口は修道院のシスターに開けてもらいました。だから、だから、私たちとあなたは同じ立場のはずです。武器を収めてください！」

ぶるぶると震えながら、狂気の宿る老人に真剣な眼差しで訴えかけるフローラ。僕らが呆気に取られていると、老人は「騙されねえぞ……」と狂気に怒りを宿しながら、ヘンリーの攻撃に痛みを感じていないのか、フローラへ一直線に向かってくる。

「させないー！」

僕は剣を鞘に入れたまま、老人に振りかぶった。老人の目はこちらに向くことすらしない。

「俺はここから出るんだア!!」

空気を、大地を震わす獣のような咆哮。その雄叫びに、僕はほんの一瞬怯み、動きを止めてしまった。

「さ、せ、ねえって……言っただろうが!!」

老人から出たとは思えないような雄叫びに、ヘンリーは自分を奮い立たせるように大声で叫び返した。僕と老人の間に滑り込み、さび付いた剣を正面から受け止め、再び鏢迫り合いになる。いくらやせ細った老人とはいえ、もともと体格の良い人だったのだろう。打ち下ろす姿勢の老人と、上へと力を籠めなくてはならないヘンリーでは、力で押されてしまう可能性がある。

僕はようやく言う事を聞いてくれるようになった足で、踏ん張っている老人の膝の裏を思い切り蹴る。体勢を崩したのを好機として、ヘンリーが剣を喉元に突き付けた。

「おいおいジイさん。こんな強行突破しなくたって別にいいだろ。フローラの言ったことは本当だ。フローラじゃ塔の入口は開けられない。つーことは、オレたちはどうにかして塔から出る方法を考えなくちゃいけないっつー意味では、不本意ながら同じ穴の貉だぜ。そう殺気立たずに、仲良くやろうや」

「そうですね。一緒に出る方法を考えましょう。それに、おじいさん。あなたもしかして、……昔、海辺の修道院から修道女をさらった、盗賊さんではありませんか? それなら、きつとシスターが喜びますわ」

恐怖を押し殺しているフローラがにこりと微笑み掛けて、老人に手を差し出す。その小さな手はかたかたと震えていたけれど、それでも目の前の「苦しんでいる人」に対して、精一杯の優しさを向けていた。「アンドレ様。剣をどけてくださいませ。よく見れば、この方、怪我をしないでいらつしやいますわ。手当をしなければ」

「……分かったぞ」

その暗く、低い声を聞いて、僕は再びフローラを庇うように立つ。「これもまやかしか! クソツ、クソツ!! ここには何も無いと思っていたのに! 憎たらしいあの『鏡』しか、ないと思っていたのに!!」

男はさびた剣を右手で握りしめたまま、左手で狂ったように頭を掻きむしった。力加減が出来ていないのか、もともと脆くなっていたのか、爪がはがれて頭からも手からも血が滲んでいる。前から剣を突き付けられていることなど、気にもしていない様子だった。尋常ならざる様子に、僕とヘンリーは視線を交わす。

残念だけれど、この人はもう――。

「やめてください！ 私たちはまやかしなんかじゃありませんわ！
今、怪我を治しますから、」

僕らの決断を知ってか知らずか、フローラが悲しそうな顔で頭を横に振り、一步を踏み出そうとする。けれど、彼女の言葉をかき消し、その一步を止めたのは、獣の咆哮と表現するのも生ぬるい、言葉にならない呪詛のような怨嗟の叫びだった。

「まやかし、まやかし、まやかし……まやかしばかりの塔だ。こんなところに真実は何もない!!」

ヘンリーが、喉元に突き立てていた剣を少し浮かせて、勢いをつける。僕はその隙に、魔法を展開させた。

「あの鏡さえも！ まやかしだ!! ここはそうして、人を苦しめるだけの塔なんだ!!」

奥は狭い通路。下手に魔法で攻撃すれば衝撃で吹き飛ばされ、落ちてしまう可能性があった。ここは五階で、四階も三階も吹き抜けの構造だったことを覚えている。つまり、落ちれば一気に二階まで真つ逆さまだ。そうすれば、ただでは済まないことは誰にだって分かる。

「バギマツ！」

僕が叫んだ瞬間、老人の棒きれみたいな体が浮く。しかしその狂人は、咄嗟に近くにあったヘンリーの剣を、手が切れるのも構わず握りしめた。――柄を、まだヘンリーが握っている。

二人の体は通路の方へと投げ出された。体重の関係か、風の呪文で老人よりも高く舞い上がったヘンリーに対し、空中で彼の剣を離していた老人は通路の上の既に放り出されている。勢いを殺せないまま、通路の端ぎりぎりのところにしがみついため、老人は切れている手の平もお構いなしに腕を伸ばした。

「イオッ！」

あともう少しで手が届く、その時。ヘンリーが爆発呪文を放った。しかし、その衝撃で無情にも老人だけでなく、宙に浮いたままだったヘンリーの体も、通路から遠ざけてしまう。

「ヘンリー!!」

「リユカツ！ 下で待ってるから、鏡取ったらすぐ来い!! 取って来なかったらぶん殴るからな!!」

ヘンリーと視線が合う。僕は彼の青い目に覚悟を見た。サンチヨのものとも、シスターのものとも違う覚悟の目。頼りない僕を何度も見ているくせに、呆れるほどに僕を信じる、僕の親友。

「ソロ様……い。お二人が!!」

「……いいんだ、フローラ。僕たちは鏡を取らなくっちゃ。そしたらすぐに下に行こう」

ヘンリーは信じているんだ。

僕が、彼を必ず「生き返らせる」と。そして覚悟している。「何があっても、必ず生き返る」と。

腰が抜けた様子のフローラを抱き上げる。驚いたのか、「きゃっ!!」と顔を真っ赤にしていたけれど、この階は魔物も出ないとはいえ、一人で置いていくよりは、抱きかかえてでも一緒に行った方が安心だろう。

「通路が……途切れてますわね」

「……『見えない橋を渡れ』」

途切れた通路は、きつと大人だって飛び越えることはできない幅だ。

だけど、僕は思い出していた。一階の中庭で僕に手を振った女の子。その女の子は、ラーの鏡と神の塔に興味津々で、お城にある本を読んでは僕に聞かせてくれた。

だから、一見ヘンリーたちが落ちていった階下へ続くものと思われ「何もない」空間に、僕は足を踏み出す。

——アルマ。君はいつも、僕を助けてくれるね。

見えない橋。目に見えるものばかりを信じる者は、神の祝福を受け

られない。目に見えぬものを信じることは、こわい。こわいけれど、確信もしていた。中央ではなく、目に見えぬ道は端にある。

こつり。

何もないはずの場所に、僕は立っていた。他に人がいれば、宙を歩いているように見えるだろう。だけど、僕は確かにラーの鏡へと至る橋を渡っている。

「鏡だ」

渡り終えた先にあるのは、曇りなき鏡。僕と、その腕に抱えられたフローラを映している。

「すごい……」

ゆつくりフローラを下ろして、僕は鏡を手を取った。そこに映るのは、どこかほっとした顔の僕。

——いいや。まだほっとしている場合じゃない。

僕は鏡を床に座り込むフローラに手渡した。

「君が持つてて。さあ、立てる？」

彼女は鏡を片手で抱え、もう片方の手で僕の手を取りながら、自分の足でしっかりと立ち上がった。

「はい。行きましょう、ソロ様——いいえ、リュカ様」

「うん。ねえ、フローラ。ちよつと怖いかもしれないけど……」

僕は彼女の手をしっかりと握り直し、にっこりと微笑み掛ける。

「なんとかするから、近道するね」

見えない道のない、中央の穴。

僕はフローラの手を握ったまま、そこへ飛び込んだ。相談もせずになんかことをしたから、怒っているかと思っただけで彼女の方を見ると、青い髪をなびかせたフローラは、彼女らしくなく、大きな声で笑い出した。

「もうっ、もうっ……！ 信じられません！ 私、空を飛ぶ日が来るとは思いませんでしたわ。リュカ様、なんとかしてくださいませ！」

僕もつられて笑いながら、空いている方の手を下に向けて、ヘンリーたちを落としてしまったのと同じ魔法を唱える。

「バギマー！」

二階の一本道、その通路に向かって放たれた真空の刃は、その衝撃で僕たちの落下速度をゆるめてくれる。

「バギツ、バギツ！……よいしょつ、と。フローラ、怪我はない？」
「ありませんわ」

「よし、じゃあもう一回行くよ。次は一階分の高さだから、さつきよりは楽しくないかもしれないけどね」

フローラはまた笑った。紫がかかった、ヘンリーのものとはまた違う青い目が、三日月の形に細くなる。

「まいりましょう、リュカ様。私きつと、あなたとならどこへでも行けますわ」

その笑顔に、僕は鼓動が早鐘を打つのを感じた。体の底から、勇気の湧いてくる笑顔だった。

——きつと、ヘンリーを生き返らせてあげなくちゃ。

覚えたときは「使うことがなければいい」と言っていた、蘇生呪文。ザオリクほど強い呼び掛けではないザオラルの呪文は、一度では祈りが届かないこともあるそうだ。

だけど、きつと、うまくいく。

僕は手をつないだまま、優しい幻想をみせる中庭へと飛び降りた。

魂の記憶が宿る塔

自分から落下したのはいいものの、痛いのは御免被りたいたので、オレは自分にメダパニでも掛けようかと思いついていた。通路から落ちただけなら、二階の通路にぶち当たっていたところだろう。しかし、オレたちは魔法で通路のさらに外側の空間に放り出されたので、多分というかどうか考えても一階まで直通だ。

「嫌だ……！ 下は嫌だ……!!」

性懲りもなく、というかもう体の一部みたいになっちゃってるのか、さびついた剣を手にしたままのジイさんが何やらぶつぶつ呟いている。もともと尋常じゃねえ様子のジイさんだったが、狂人だな、こりや。

まあ、フロラの言っていたことが「そう」だってんなら、このジイさんは約四十年間一人でこの塔に閉じ込められていたことになる。まやかすと魔物のはびこるこの塔で、信じられるものは何もなくて、何にも縫れない状態で、せめて魔物もまやかしてもない五階にいたってんなら、下の階にトラウマを持つちまつてるのは、理解できなくはないが。

——だけどな、ジイさん。「試練」は悪いことばつかじやねえんだぜ。

オレだって、一階でパスとデール、ゲレゲレにアルマを見たときはびっくりしたし、びっくりしている間に魔物が襲って来やがったのには、「汚ねえやり口だ」と腹が立った。

だけど、元々伝説にもあったように、ここは「魂の記憶の宿る場所」だ。もし、試練と魔物を切り離して考えるとしたら、そこまで性悪なものでもないような気がする。

なんて。オレはあの優しい光景が、性悪な試練に利用されただなんて思いたくはないだけかもしれないが。

幻聴に耳を貸すなど言ったオレに、リュカが「それはできない」と

言ったように。あのまやかしたちは、受け取る相手によって意味を変えらるのだろう。

幻覚や幻聴から目や耳を背けて逃げるのか。目を逸らさず、きちんと受け止め、前に進むのか。

オレに語り掛けてきたのは、オレ自身の声だった。今のオレ。いろいろな人を喪って、魔物たちから隠れて生きるオレが、「リユカとアルマさえラインハットに來なければ」と嘆いていた。「ラインハットの王子」であつた自分に、我儘だつた自分に戻りたいと、こんな人生を歩むはずじゃなかつたと、ぐちぐち言つていた。

オレはそれを「うるせえ」つて思つて聞こうとしなかつたけれど。

——そういう自分もいるのは、本当かもしれない。

そう思いたくなかつた、そんな醜い自分があるなんて認めたくなかつただけで。

こうして長いような短いような時間、真つ逆さまに落下する中、命を失う危機の中、オレは思つていた。醜い自分を認めてやろう、と。そういう感情が、一瞬でも、ほんの少しだとしても、生まれたことは否定しちやいけない。そして、そのうえでさらに認めてやるんだ。

リユカとアルマさえラインハットに來なければ、ラインハットに魔物は襲撃してこなかつたかもしれない。けれど、オレは攫われて、殺されるか奴隷になつていただろう。

「ラインハットの王子」であつた我儘な自分に戻つたとして、あの頃は全然楽しくなつてなかつた。

リユカとアルマがラインハットに來てくれたから、友達ができた。毎日が輝いて、楽しかつた。夢に見るほどに、涙が出るほどに、大切な思い出になつた。それさえあれば生きてゆけるほどの、オレにとつて最高の宝物になつた。

「……リユカ。頼んだぜ」

近くなる地面に、覚悟を決めながらそう呟く。一緒に落ちてるジイさんはうるせえままだ。

と、オレが地面にたたきつけられる直前に、ふわりとした風が体を包んだ。あたたかな風は、オレとジイさんを、優しく地面に運んでい

く。

——試練は、何度でも挑戦できるんだ。

諦めなければ。挑戦し続ける心を持ち続けられれば。恐ろしくても、勇気を出して一步を踏み出せば。

放心状態のジイさんより先に立ち上がって、今度こそ襲って来ねえように剣を向けようとする。「まあ」と聞き馴染みのある声が聞こえてきた。

左右の泉の中に立つ像の丁度間に、祈るようにたたずんでいたシスターが、目を見開いてこちらを見つめていたのだ。

「シスター!! なんで中にいるんだよ! キメラの翼で帰れって言っただろ!」

「私は一度……約束を守って、後悔をしました。なので、あなた方には申し訳ないと思いつながら、今回は、初めから約束を守る気はなかったのです」

シスターが祈り続けていたおかげなのか、それとも別の理由なのか、今のところ中庭に魔物の気配はない。

「いや、正直助かったぜ。実は、入り口の扉なんだけどき、行きも帰りも修道女の祈りがないと開かないらしくて。オレたち、閉じ込められちまうところだったんだ」

約束を破ったとはいえ、その約束はもともとシスターを案じてのものだ。シスターには怪我もなさそうだし、偶然とはいえここから出る方法を考える手間も省けた。オレはシスターに礼を伝えようと口を開きかけたとき、うずくまっていたジイさんが立ち上がったのを視界の端にとらえる。

「嘘だ……今日はツ、今日は悪い日だツ!!」

シスターを見たジイさんは錯乱し、さびついた切っ先を彼女へ向け、走り出した。

「イオツ! ……悪い事ってのは重なるモンだな。そうはさせねえぜ」

もう容赦はしない。怯えるフローラの前でこのジイさんを殺しちゃうのは良くないかと思つて、一応配慮はしていたが。リユカと視線

を交わしたとき、同じことを考えていると分かった。

このジイさんは、もう狂っちまってる。取り返しのつかないほどに、誰かの言葉も耳に入らないほどに。そうして、苦しみ続けている。少しでも話を聞いてくれりゃあ、あるいは一緒に鏡を取りに行つて、長年の悲願を果たさせてやることもできたかもしれねえが。それもできやしない。

——だったら、楽にしてやった方がいい。

一人で苦しみ続けるだけの人生なら。すぐそこにある出口に気付けないほどに、誰の声も届かないのならば。

「……あなたは……もしや……」

シスターが、倒れたジイさんに歩み寄ろうとする。オレはその腕を掴んで、それを止めた。

「シスター。『そう』かもしれないねえが、もうこのジイさんには、誰の言葉も届かねえんだ。見たくなかったら目を背けててくれよ。……オレがやるから」

シスターは手を離してジイさんのところへ向かおうとしたオレの腕を、両手で掴んできた。止める者と止められる者が逆転して、オレは眉を顰めた。

ジイさんはまだ生きている。このままでは、シスターをまぼろしだと勘違いして、命を狙い続けるだろう。

「人は……人は誰しも……あやまちを犯すものです……それが、大きかろうと、小さかろうと」

ぼろり、涙が地面に落ちる。シスターの皺だらけの頬を伝って、ひとつ、またひとつと。

やがて——それは誰かの魂の記憶なのか、オレにはいつの間にか、シスターが若い女性に見えていた。

「どうか、そんなことを『救い』にするのはやめてください……！ 彼にとつても、あなた自身にとつても、誰の『救い』にもなりませんから……！！」

オレは思わず頷いて、立ち上がろうとしているジイさんを見る。まだ狂気をはらんだ目で、シスターへ憎悪の視線を向けるジイさんは、

明らかに殺気立っていた。

「……ほら、誰のもとにも、救いは訪れる」

未だ涙に濡れる目を細めて、シスターが微笑んだ。離された手は上を指し、オレはつられてそちらを見る。

笑い声。殺気立ち、悲しみのたちこめる中庭には不釣り合いな、子どもの明るい声だった。

「ヘンリー!!」

「ヘンリー様っ！ お待たせいたしましたわっ！」

「バッ……おいてめえリユカ！ 魔法使うなよ!? 下にオレらがいるだろうが！ あと普通に草花が可哀想だろ！ 普通に下りれるから!!」

たぶんこいつらは、上から落ちてきて、身を任せず力尽くで着地してきたのだろう。こちらに向けてバギを放とうとしてきやがった。なぜ分かるのかって、そりゃあ数えきれないくらい一緒に戦っているのだ。相棒の使える魔法はもちろん、なんとなく考えそうなこと、雰囲気など手掛かりはどこにでも転がっている。

「えっ、そうなの!?!」

「大丈夫だからそのまま下りてこい馬鹿共!!」

「あーっ、また馬鹿って言いましたわ!」

ていうかフローラのやつ、普通にオレの名前呼んでやがった。まあ落ちるときオレらお互い普通に名前叫んでたからな。これから気を付けよ。

そんな風に現実逃避をしていたら、二人がふわりと風に包まれて着地する。フローラの手には、美しい鏡があつた。リユカと手を離して、両手で大切そうに抱え込んでいる。

「よかった！ あれっ、シスター?」

「シスターがヘンリー様を生き返らせてくださったんですの?」

「いやお前馬鹿だろフローラ。お前らが着地できたように、オレも死んでねえよ。……そっちのジイさんもな」

リユカとフローラに微笑みを向けたシスターは、もう本来の初老の女性に戻っていた。涙をぬぐいながら、眩しいものでも見るように、

手を繋いで立つ二人を見つめている。

オレがジイさんを警戒していると、シスターは二人から視線を外して、ジイさんを見た。いつの間にか立って切っ先をシスターの方へ向けている哀れな男。

「三人とも、動かないでください」

リユカがオレに視線を超越してきて、オレは無言で頷いた。

シスターはどうあっても、あのジイさんを救ってやりたいらしい。そして、それができると信じている。それなら、「目に見えぬものを信じる者に祝福を与える」この塔に、そして何より、シスター自身に。

賭けてみよう。どんな結果になったって、もう手出しはしない。

「だから……だから、嫌だったんだ……下はまやかしに満ちているッ！ 見たくないもの、聞きたくないものばかり、突き付けてくる！」
一歩、一歩。シスターは恐れもせず、凶器を手にしたジイさんに近づく。ジイさんの方かというと、怯えた表情で震えるばかりだ。

「よく、頑張りましたね」

シスターがジイさんに向かって、腕を広げた。そのまま、やせ細った長身の老人を抱きしめる。老人は動けない。

「もう苦しまなくていいのです。——もう、何も疑わなくていい」

ぼろり。男の手から、錆びた剣が落ちる。

不思議なことが起きた。男の手から剣が離れた瞬間、男の体は光に包まれ、やせ細った老人が、若く筋肉質な青年に姿を変えたのだ。

「俺……俺……」

シスターを抱きしめ返しながら、青年の目には涙が溜まる。

「試練から、逃げ出したかった……この塔から出たかった」

「ええ、ええ」

「出られないのはあんたのせいだと思って、恨んだ」

「私も、あなたの後を追わなかった自分を恨みました」

男の体が、光輝く。オレは「まさか」と思って、フロラーの手に抱えられる「ラーの鏡」を見た。

——ああ、やっぱり。

そこには、誰かを抱きしめるような恰好をしているシスターしか、

映っていないかった。

光の粒となつて消えゆく男を、シスターは大切そうに抱きしめ続け、大粒の涙を流している。男の体が消滅したとき、地面にあつたさびた剣が、ぼろぼろと乾いた泥のように崩れ落ちた。

静寂。文字通り、静けさとさみしさとが、この場を支配していた。「祈りは——届いたのですわ」

それを破つたのは、天を見上げるフロアだった。オレたちもつられるように、顔を上げる。もちろん、見上げたとして、太陽は見えない。けれど、吹き抜けのその先にある天井なんかを見ようとしたわけじゃないし、別に何も見えなかったってよかった。

心配しなくても、ジイさんは塔から出られただろう。

修道女の祈りは、塔の扉を開く。試練に向かう人々を送り出し、試練を越えた者も、越えられなかった者も、平等に迎え入れるために。

*

シスターは僕たちにキメラの翼を返して、「ここに残ります」と言つて聞かなくて、でもあの光景を見たら何も言えなくなってしまつて、僕らは三人で修道院に帰つてきた。

シスターが塔に残ることを話せば、動揺している人も多かつたけれど、みんなそれぞれに受け止めて、深くは聞いてこなかった。もともと、この修道院に訪れる人たちの事情は様々だそうで、相手が語りたがらないなら聞かない、というのは暗黙の了解になっているのだから。

「なんか、どつと疲れたなあ……」

体を拭いて客室へ戻るなり、ヘンリーがベッドに横になり、呟く。相槌を打ちながら、僕もベッドに上がる。隣のベッドの方を向くと、ヘンリーはにやりといつもの悪戯な笑みを向けてきた。

「とりあえず、目標一個達成だな。次はどうする?」

「オラクルベリーは大きな町みたいだから、そこで情報収集をしようかなと思つてるよ。良い情報が入らなかつたら、サラボナを目指して

『天空の盾』のことを聞こう」

「……そういえば、フローラのやつ、サラボナに家があるって言ってなかったか？」

そんなこと言ってたっけ、と思いながら首をひねると、「あ、お前寝てたかも」とヘンリーは一人で納得している。

「ほらほら。あいつが『神の塔』までついてきた帰り。アイツ、『見張りやる』って言って聞かなかっただろ。興奮しててどうせ寝そうになかったから、雑談してたんだよ。で、そしたらオレらの出身地を聞かれたわけ。オレは適当に答えたんだけど、フローラに聞いたら、歯切れの悪い言い方で『サラボナに両親がいる』って答えてさ」

「じゃあ、ちよつと休んだらフローラに『天空の盾』のことを聞いてみようか」

「ああ。シスターに言われたことも確かめなきゃいけないし……って、こんな話は後でもいいか。今は寝ようぜ」

自分から話してきたくせに、ヘンリーはそう言うなり目を瞑ってしまった。クタクタだった僕も、目を瞑ることにする。そうして、まどろみの中で別れ際にシスターに言われたことを思い出していた。

「私がかつて、『光の教団』で奴隷として働かされていました」

衝撃的な告白に、僕は雷に打たれたような気持になった。僕ら二人だけでなく、フローラさえもその名前くらいは聞いたことがあるのか、驚いた顔をして『光の教団』って、ラインハットに魔物を差し向けたという？」と確認を取っていたほどだ。

「はい。『その』教団です。リユカとヘンリーはもう知っているかもしれませんが、教祖の名はイブール。総本山はセントベレス山にあります。表向きは『苦しむ人々に救いを与える』ことを教義としています。が、本当の目的は世界を支配することなのです」

塔の中庭で、シスターは静かに語った。教団の脅威。大神殿を建てるために苦役を強いられる人々のこと。

「奴隷として連れて来られるのは、魔物に攫われた人だけでなく、闇オークションで売られた人も多くいました。闇オークションで売ら

れた人たちは、借金の返済ができなくなつて家族を守るために自ら売られる場合や、怨恨やお金欲しさに悪い人に騙されて売られる場合など、理由は様々でした。……オークションでは人間だけでなく、高価で珍しい品々、表に出せない盗品などが売りに出されています」

シスターは少し目を伏せてから、僕らの目をしっかりと見た。

「もしも『ラーの鏡』のような神秘の品が必要で、しかしながら何の情報も得られないときは、立ち寄ってみるといいでしょう。いろいろな危険が付きまとう場所ですが、あなた方なら上手くやれると信じています。そして……フローラ」

名前を呼ばれたフローラは、緊張した顔でまっすぐにシスターを見ている。その様子を見て一瞬だけ口元を綻ばせたシスターは、すぐに真面目な顔に戻った。

「リユカとヘンリーは理由あつて名前を偽り、生活を送っています。もしかしたら、あなたも察しがついているかもしれませんが……これからは、決して他人に彼らの本当の名前を伝えてはいけませんよ。……『ラーの鏡』を子どもが手に入れたということも。修道院のみんなには、手に入れられなかったと言いなさい」

しっかりと頷いたフローラを見て、シスターは僕たちへと視線を戻す。僕たちは事前に『ラーの鏡』を取ってくる」と修道院のみんなに言つてしまつていたので、上手く誤魔化さないといけない。あんまりよくないことかもしれないけれど、そういう「演技」は過去の悪戯三昧の日々により上達していた。きつと大丈夫だろう。あとでヘンリーと「設定」を練らなくちゃ。

「子どもが珍しい物を持っていると、それだけで危険を呼ぶこともある。——『ラーの鏡』は、その性質上、『使われると困る』存在がいます。本当に必要になつたときまで、それは大事にしまつておくように」

「はい。御忠告ありがとうございます」

ヘンリーが、「アンドレ」としてではなく、お城の教師たちに教わつた（というよりは、植え付けられた）「王子様の礼」をする。そのあんまりに綺麗な仕草に、シスターは珍しくきよとんと呆氣にとられた顔

をして、それから口元に手を当て、上品に笑った。

「いいえ、ヘンリー殿下。畏れ多いことを申し上げました。両殿下ならびにフローラ嬢におかれましては、ますますの御健勝をお祈り申し上げますわ。——いつまでも、心より」

畏まってスカート裾を持ち上げながら淑女の礼を返したシスターは、少しだけ照れくさそうに、「この塔は悪しき者には見つけれません。何か困ったことがあれば、いつでも戸を叩いてください」と早口に付け足した。

僕らはシスターに別れを告げて、中庭から出て塔の入口まで向かっていた。

「リユカ様、ヘンリー様……殿下という事は、もしかして、王子様だったんですの……？」

ヘンリーとシスターのやり取りを見てからなんだか挙動がぎこちなかったフローラが、耐えきれず、という感じで右手で僕の、左手でヘンリーの服の裾を掴んだ。

「え？ ああ、まあな。別に気にする必要はねえぞ。塔から出りや、オレらは『浮浪児のアンドレとソロ』に戻るんだ」

「わわ、私、なんて無礼なことを……」

僕らは顔を真っ赤にして震えつつも、服の裾は掴んで離さないままのフローラを見て、二人同時に笑い出した。

「フローラ。お前は最初から今の今まで、無礼なことなんて一つもしちやいないぜ。悪かったな、意地悪ばかり言っちゃまって」

ほん、とヘンリーの手がフローラの頭に置かれる。

「そうそう。ヘンリーったら、ちよつと厳しかったよね。怖い思いもいっぱいさせちゃっただろうし」

僕は服の裾から彼女の手を外して、その手を握った。

「さ、修道院に戻ろう」

「そうだなあ。なんだか腹も減ってきたし」

ヘンリーがその様子を見てニヤッと笑い、僕と同じようにフローラの手を服の裾から外して、その手を握った。それから、二人で塔の扉

をそつと押す。

扉は軽く触れただけで開かれて、太陽が僕らを照らしていた。

*

少年は勝ち誇った顔で、カードを表に向けた。ロイヤルストレートフラッシュ。ディーラーが感心したように、コインを配当する。対する荒くれ者は悔しそうな顔で「やめだ、やめだ！」とカードを投げ捨てた。

「さあ、約束通りギコギコを檻から出してください」

「ああ、出してやるよ！ でも『出すだけ』だ！」

少年が提案したのは、ポーカーでの勝負だった。旅の共有資産は仲間が持っていたために、彼個人の小遣いとしては心許ない金額しかなかったけれど、幸運なことこの荒くれ者はあまりにカードが弱かった。城での暇つぶしに、チェスやカードゲームはいくらでもやっていた彼である。しかも、相手が悪戯好きの兄と負けず嫌いの友人であったから、少しばかり自信があつたのだ。

「ええ、『出すだけ』でかまいませんよ。それより、負けっぱなしでは悔しくないですか？ まあボクは別に、勝ち逃げできるのならそれでもいいんですけどね。……どうです？ あなたさえよければ、もう一勝負」

友達の入れられている檻がある休憩室へ行き、ようやく彼を解放してやり、船員から借り受けたタオルで丁寧に体を拭いてやる。ちなみに、少年自身は気のいいカジノ船の船員たちに賓客用の風呂を特別に使用させてやるから、と海の中で冷え切った体を温めてもらった。

このカジノ船のオーナーであるルドマンという大富豪は随分気のいい人物らしく、「カジノ船」という、一見アングラな場所においてもルールを守ることを徹底している。そして、彼を慕う船員やカジノの従業員も、子どもにも優しく、親切な人ばかりであることは、少年にとってありがたかった。

魔物が解放されたことで、休憩室の様子を見てくれていた船員は

おっかなびつくりしているものの、暴れないことが分かったのか、ほっと胸をなでおろしている。二人で温かいミルクを飲みながら、「もう一勝負だ!」と叫ぶ荒くれ者に、少年は「もちろん」と頷き、彼に手を差し出した。

「その前に、僕はリンクスです。こっちはギコギコ。あなたの名前を教えてくださいませんか?」

「ツチ。俺様はカンダタ。泣く子も黙る大盗賊よ!」

「では、カンダタさん。次の勝負で勝ったら、ボクたちを自由の身にしてください。助けていただいたことは本当に感謝しているので、勝ったらボクの分のコインはそのまま差し上げます」

「後悔すんなよお……俺様が勝ったらお前らまとめて、俺様のしもべにしてやる!」

少年は朗らかに笑った。

「それは尚更、勝たないといけませんね。ボクの親分はただ一人ですから」

結果として言えば、カンダタの惨敗である。というのも、元々彼が賭け事に向いていない性格であることに加えて、少年は友人の耳やしっぽを見て、ディーラーの持つカードの内容を把握していたのだ。これでは勝ちようがない。ちなみにこれはどこかの国の第一王子に仕込まれたイカサマである。

「ま、待ってくれ! お前がポーカーに強いのは認める! だが、よく考えればこりやあ、お前の土俵だったんじゃないか!? 次はスロットにしよう! な、な!」

「スロットですか……元のコインから、より増やした方が勝ちということでもいいですか?」

ところで、少年は非常に目がよかった。もともと、人の顔色を窺って生きてきた彼である。人の表情や顔色だけに留まらず、祖国を離れて修行に明け暮れる日々の中で、動体視力も成長した。

一方、カンダタは盗賊であり、日頃は薄暗いところを好んでいる。その生業ゆえに目は良いが、カジノのようなギラギラと明るい場所よりは、仄暗いところの方が本来の力を発揮できた。

結果。

カンダタは惨敗した。意外な才能を発揮した少年は、スロットの回る「目」をとらえ、記憶し、確実に列を揃えていったのである。

「ま、待ってくれ！ リンクスー！」

頭を抱えたカンダタの顔には、「こんなはずでは」という気持ちが如実に表れていて、初めの恐ろしい印象はかなり薄れていた。

「何ですか？ コインは全て差し上げると言いました。これでボクらの恩はお返しできたと思いますが」

「このカンダタ！ 他人から奪うことは良くても、施してもらうのは我慢ならねえ！ でもコインは欲しい！」

「いや、何言ってるんです？」

呆れを多分に含んだ、年に見合わぬ冷たい視線を荒くれ者に向けて。そののち、彼は「それなら」と再び笑顔に戻った。さすがに二度もやられたので学習したカンダタは、この少年の笑顔が無垢なものだとは決して思っていない。

「ボクはあなたに盗賊としての『仕事』を依頼する。そして、このコインを報酬とします。で、あなたはボクとギコギコができる範囲の『依頼』をする。ボクは命を助けていただいたお礼ができるし、あなたはボクから施されることなくコインをもらえる。どうでしょう？」

カンダタはうんうんと唸りながら「分かった」と言って、人差し指を立てた。

「お前がちよつとばかり頭が働いて、運がいいことは、よく分かった。だから、俺様からの『依頼』は今度の『仕事』を手伝うこと！ その一回で勘弁してやる」

「肝心の内容を聞いていないので領けません……ボクからの『依頼』は『ストロスの杖』を取ってくる……どうですか？」

「おう、それでいいぞ。俺様が狙うお宝を知りたいんだ。聞いて驚け、『空飛ぶ靴』よ！ これさえ手に入れば、どんな場所のお宝だろうと、俺様に手に入れない物はなくなる！」

少年はその名に覚えがあった。「空飛ぶ靴」は、はるか昔、天空の勇者の仲間、「戦士ライアン」が魔物にさらわれた子どもたちを助ける際

に使った道具だ。しかし、英雄譚でその道具が語られるのは「ライアの章」の、子どもたち救出の場面のみ。それから、一度も出てこない道具なのである。ゆえに、本当にあったのかどうか存在を疑問視させられている代物であった。

「ボクは『手伝えば』いいんですね？　ところで、アテはあるんですか？」

「どうにも『光の教団』がキナ臭えっていうんで、子分共に調べさせたら、大当たりですよ。『光の教団』にいる魔物が持つてるって噂だけ」

「ああ、それなら——」

カンダタには少年の表情が、ひどく暗く、殺気立ったものに見えた。「ボクも力になれそうです」

けれど、それはすぐに胡散臭い笑顔に変わる。友人のたてがみを撫でてから、少年は改めてカンダタに箱一杯のコインを渡したのだった。

それぞれの思惑

箱一杯の戦利品を眺めてにこにこしていると、その箱をパパスさんがひよいっと持ち上げた。お礼を言うと、彼は複雑そうな表情でこちらを見ている。

「アルマ……コスタールには情報収集に来たのではなかったのか？
これだけ勝ち続けるのは大したものだとは思うが……」

「パパスさん。予想通り、石板の欠片はカジノのコインとの交換商品の中にありました。しかもたったの二千枚ですよ！ アルス様が受け取って以来品切れ状態だったのが、つい先日補充されたそうです。これはもう、誰かに取られる前に取らなくては！」

「しかし、『ラツキーパネル』はコインが増える遊びではないと聞いたぞ」

「ふふふ。甘いですね、パパスさん。カジノでものを言うのは軍資金です。しかも、余剰のお金で遊ぶのが鉄則。そうになると、余剰のお金を増やすことが第一なのです。『ラツキーパネル』は確かにコインは増えませんが、その分成功すればいろいろなアイテムを手に入れることができます。それを売ってお金にする。そうして軍資金を増やせば、気付けば賭け事でコインを増やさなくても二千枚のコインを買い取り、そのまま石板を手に入れることもできるといわけです！」

私が胸を張ると、パパスさんは「それは誰から教わったのだ？」と呆れながら聞いてきた。

「メルビン様です！ メルビン様はスロットが弱すぎて、それでもお小遣いの中からどうしてもやりたくて、ある日この方法を思いついたそうです」

「ラツキーパネル」はその名前とは裏腹にラツキーでなくとも攻略できる遊びである。平たく言えばシャッフルパネルとチャンスパネルという特殊カードの含まれた神経衰弱で、最初に自分で選んだ六枚のカードの中身を確認できる。カードには星座の記号が描かれたも

のと、アイテムやお金などの絵が描かれたものがあり、後者はペアを揃えただけではもらえず、全てのカードを揃えてゲームに勝つとまとめてもらうことができる。三回外れるとゲームオーバーだが、シャッフルパネルさえ引かなければ割りと容易に勝てるのだ。

もちろん、メモなどは取つてはいけないので、記憶力に自信がない人にとっては難しいだろう。しかし、私はこのゲームがかなり得意だった。別に記憶力が特別いいわけではなく、攻略法を知っているのだ。

人の記憶が一気に覚えられるのは、プラスマイナスして大体七つの事物についてである。つまり、最初に開く六枚のカードくらいなら、大抵の人は覚えられるのだが、馬鹿正直にそこで脳の容量を使うのはもったいない。「七つの事物」としてより多くのことを覚えるために、隣り合うカードなどに「意味」を持たせるのだ。

どういう事かというと、暗記科目で語呂合わせをしていくように、星座のシンボルやアイテムのマークを組み合わせて覚えていく。こうしてエリアごと覚えるようにすることで、二十枚のカードの位置関係を簡単に覚えられるようになる。不意にシャツフルパネル以外を引いてしまったとしても、かなりの確率でリカバリーが可能だ。負けることも当然あるが。

「……もしや、お前を初めにカジノへ連れてきたのもメルビン殿か？」
「はい。『今の』コスタールに行ってみたって言ったら連れてきてくれて、ついでにカジノで遊ばせてくれました！」

初めて連れられてきたときにすぐ各ゲームのルールを覚えた私は、負け続けて平常心を失っていたメルビン様に、「絶対勝つのでやらせてください」と言って、一山当ててあげたのだ。それから、メルビン様は天上の神殿でのお勤めをお休みされるときに、息抜きと称して私をカジノに連れてきてくれるようになった。私がメルビン様からお金をもらい、そのお金で稼いだコインはそのままメルビン様のカジノでの軍資金になる。

ちなみに、お小遣いと称した口止め料を結構な額いただいているが、アルス様とアイラ様にはバレている。マリベル様にバレるととつ

ても怖いだろうし、ガボ様はうつかりマリベル様に言ってしまう可能性があるので、みんな気を遣ってメルビン様の「休日の過ごし方」には口に出さないことになっているようだ。

シャークアイ様は、娘の私をお金というかコイン稼ぎに使うメルビン様に時折苦言を呈していたが、メルビン様にキリツとした顔で「シャークアイ殿。アルマには才能があるし、何より楽しんで遊んでおります。何も、わしは自分のためだけにアルマを連れまわしているわけではござらんよ」と言われてからは、もう何も言わなくなった。

私は気休め程度に「メルビン様、カジノだけじゃなくてたまにマーデイラスに音楽の演奏を聴きに行ってくれたり、クレージュで世界樹を見に行ったり、いろいろなところへ連れて行ってくれるんですよ」と言っておいたが、まあほとんどカジノに連れて行かれていたことはバレていて、「お前は何も言うな」みたいな顔をされてただ頭を撫でられただけだったなあ。

とはいえ、今実際に役に立っているのは事実だ。コスタールの人たちの間で、私はちよつとした有名人になっていて、ラツキーパネルのディーラーさんは目の色を変えてシャツフルをし始める。苦手な人でも少しは勝つていい思いができるように、パネルの並び方には法則があるのだが、得意な人に対してはそんな優しさは見せず、ぐつちやぐちやに毎回シャツフルされる。まあ私はそれでもほとんど覚えられないので勝つけど。

「……アルマ。お前は大した子どもだな」

出禁にならない程度に勝って、アイテムたちを換金する。結構なお金になり、無事にコイン二千枚分で石板の欠片を手に入れることができた。

「えへへ。無事に一枚手に入ってよかったです！」

につこり。石板の欠片は手に入るし、余分にお金もアイテムも手に入れることができてウハウハな私である。……まあ、石板を揃えてリユカたちのところに行くには、神様とマリベル様を倒さなくちゃいけないんだけど……。私は何も考えないことにした。

「今日はコスタールに泊まるか？」

「パパスさんが陸で泊まりたければ、そうしましょう」

とはいえ、水の都コスタールは「陸の上」でありながら、「水の上」でもある。船のようにゆらめきはしないが、窓からひよつこりと顔を出せば、町のいたるところに水が流れているのだ。とても美しい町で、マール・デ・ドラゴンから見渡す海の景色の次に、私はこの町から見る海が大好きだった。

何かを考えた表情になったパパスさんは「やはりマール・デ・ドラゴンに泊めてもらおう」と言っ、水の都を後にした。まあ、マール・デ・ドラゴンの人たちは私たちをかなり甘やかしてくれるので、宿代わりにするにしても格安だ。ちなみに私はお金を取られない。自分の家だからだ。パパスさんは甘えるわけにはいかないと言っ、三ゴールド払っている。シャークアイ様が値段を決めていたが、基準はよく知らない。

船に戻った私たちは、カジノで遊びつつも手に入れた情報を整理した。私だっただだ遊んでいたわけじゃない。

「私が聞いたのは、『マーデイラスで近々音楽の大会が開かれ、グレイテ姫様が特別な賞品を用意している』こととか、『大灯台に星が降るのを見た』とか、そういう話でした。マーデイラスは行ったことがあるので、キメラの翼で行ってグレイテ様にどんな賞品なのか聞いてみるのはアリだと思います。大灯台は魔物が出るので……」

「うむ。私も大灯台のことは聞いた。あとは『砂漠の三馬鹿が家に落ちてきた石板を取り合っ喧嘩している』という話も聞いたが、教えてくれた相手が酔っばらっいて詳細はよく分からなくてな」

「……いえ、私にはよく分かりました。大丈夫です」

「砂漠の三馬鹿」はかなり有名な人たちだ。砂漠の村の村長の三つ子の息子たちのことである。くだらないことでいつも張り合っ喧嘩をしているのが特徴で、みんな次期村長の座を狙っているが、「次期村長は三つ子の弟のサイドさん」というのが村人たちの総意であるそう。私は実際に会ったことはないが、マリベル様曰く「あんなやつらに村を任せるくらいなら、村長と血縁関係にないどっかの誰かを

あてがった方がマシ」とのことである。

「じゃあ、最初はマーティラスで大会のことを聞いた後に、砂漠へ向かって三ば……いえ、村長さんの息子さんたちに話を聞くとしましょう。大灯台の魔物は強いので、その間に鍛えればいいですし。あつ、でも、鍛えるならダーマの神殿に寄るのが先かなあ……？」

ぶつぶつ言いながら、頭の中で今後の予定を組み立てていく。ルーラが使えれば楽なんだけど、あいにく私には使えない。コストルからダーマの神殿は近いし、先に船で行って魔法使いに転職するのもいいかもしれない。パパスさんはどう考えても前衛向きだし、だとすると私の役割は後方支援だ。攻撃手段と回復や補助の手札がバランスよく習得できればよいが、一つの職業でそれを望む必要もないだろう。

マーティラスの大会とやらは気になるが、まだ石板があると決まったわけではないし、遠いので船で行くよりキメラの翼を使いたい。そうになると、船でダーマに向かい、そこからキメラの翼を使えば安上がりだろう。

「アルマが世界の事情に詳しいのでとても助かる」

パパスさんに言われて、思考に耽っていた頭を切り替え、笑みを浮かべる。

「いいいえ。アルス様たちのおかげですから。今日も、冒険の続きをお話ししましょうか？」

私が話したいだけの英雄譚を、パパスさんは快く聞いてくれた。今日もまた領き、話すことを許してくれる。

「そうだな。昨日はダイアラックのある島が復活したところまで聞いた」

「じゃあ、次はオルフィーの町ですね。ここは何と、動物の暮らす町だったそうです」

私はまた、自分の冒険のように話を始めた。それは一種の現実逃避だった。勇者様たちの英雄譚は、私が救えなかったものを少しの間忘れさせてくれる。勇者様たちの苦勞を、つらさを、それでも頑張ってきた道程を想うと、私も落ち込んでいないと励ましてくれ

る。

シャークアイ様と一緒に眠っていれば悪夢を見ないし、目的があれば私は歩くことができた。

恵まれている。そのことを素直に喜ぶことができない自分の心が恨めしい。

——だって、リユカとゲレゲレ、ヘンリーとデールは、きつとつらい目に遭っている。

考えてもどうしようもないことだとは分かっているから、私は他の事で頭をいっぱい使って、考えないようにしていた。だって、彼らのもとへ行くために、今はただ石板を集めて、強くなるしかない。祈るしかない。

「……しかし、そこは本当は『動物の暮らす町』ではなく、『動物にされた人々が暮らす町』だったんです」

ふと、窓の外を見ると夕日が海をオレンジ色に染めていた。うすい紫と青とオレンジの混ざる空は美しく、なんだか涙が出そうになるくらいだ。

だけど、涙は流さない。私は恵まれている。だから、涙はリユカたちの再会の時まで、取っておこう。自分の不甲斐なさには、もう十分泣いたから。

リンクスと名を変えたデールは、同じくギコギコと名を変えたゲレゲレに抱き着きながら、この世の終わりのような顔をしていた。

「絶対に……絶対に嫌です！ ボクは仕事を一度だけ手伝う、それだけですよ！ あなた方の仲間ではありません！」

「そうは言ってもよお。相手が魔物だろうが人間だろうが、盗みを働くからには顔は見られない方がいいだろう」

「その理屈は分かりますよ！ でもなぜそんな恰好をしなければならぬんですか!!」

デールは半狂乱になりながら、拒否の姿勢を崩さなかった。目の前

にいるのは、ただの荒くれ者だったはずの男。現在は覆面にパンツ一丁の、どう見ても変態としか思えない恰好をしていて、その手にはさらに、デールが着用できそうなサイズの同じ衣装を持っている。

「諦めろ、新入り。これは盗賊の伝統衣装みたいなもんだ。なあお頭」
その後ろで、似たような覆面パンツスタイルをしているカンダタの子分が笑った。ちなみに、デールとゲレゲレは現在、覆面パンツ集団に囲まれていた。カンダタを含め、その数総勢八名。デールとしては、なんとしても自分が九人目となることは避けたい。

「絶対に嫌です！ そんな恰好するくらいなら……」
「するくらいなら？」

「女装でもした方がまだマシですッ！」

その発言により、デールには偽名が増えた。リンクス改め、リンは長い茶髪が特徴的な柔和で愛らしい少女の外見をしながら、しかしその目は冷え切って変態どもを見つめている。

「で？ ささらに素顔がバレないようにこの仮面を付けなければいいわけですかね？ ええ、もう覆面パンツ以外ならなんでもいいですよ」

しかし変態たちはその視線をうれしそうに受け止めていた。リンの目は死んだ魚のように生氣のないものとなったが、相棒のギコギコに顔をペろりと舐められて生氣を若干取り戻し、涙を浮かべている。

少女盗賊のリンは変態どもの要望で、活動的なショートパンツにニーハイソックス、皮のブーツをはいていた。上半身は動きやすく急所も隠せる黒いハイネックのノースリーブで、その腕にはアームカバーと指先の巧緻性を保証した指ぬきグローブを身に着けている。さらに武器を隠せるマントと、顔を隠すための仮面を渡され、全体的に見れば露出は控えめながら、太ももや脇などは惜しげもなく白い肌をさらすフアッシュョンとなったのだった。

ちなみに「ニーソックスがずれると困るだろうから！」とガーターベルトをすすめられたが、それだけは断固拒否した。ニーソックスをタイツに変えるという案は、大論争を巻き起こしたため、なんだか全てが面倒になり当初提案されたニーソックスを素直にはいたリンである。

「お前ら、ちよつと静かにしろ。これから各々の役割を分担するぜ」
「お頭！ 俺、リンちゃんと一緒がいいです！」

「あーっ、ずるいぞ！ お頭、俺も俺も！」
「お前ら、ちよつと静かにしろ」

覆面パンツの親玉がぎらりと斧を見せつけると、子分たちはいつせいに黙った。静かになったところで、カンダタはまだ情報が少ないことから、まずは情報収集をしたい場所を子分たちに伝え始める。

「まずはグランバニアだな。あそこは大臣が『光の教団』とつながりがあるって話だ」

気落ちしていたリンの目に、激情の光が宿った。しかしそれに気が付いたのは、友人を案じていたギコギコ以外にはいない。グランバニアが灰色の雨に降られてまだ数日。城塞に守られた国が閉ざされたことを知る者はまだ少ないのかもしれない。

「……知りませんでした。それって、有名な話なんですか？」

「裏社会ではな。野心家で、お人よしのオジロン王をどうにかして王座から引きずり落とすつもりだったみたいだぜ。まあ、ラインハットのことがなくても、前々からキナクせえって噂のあった『光の教団』だ。悪いことを考えるやつらってのは惹かれ合うもんさ」

「ふうん。『裏社会』って、面白そうですね。少し興味が出てきました」
ちらり。ギコギコの方を見たリンは相棒を安心させるようににっこりと笑った。その胡散臭い笑顔を見て、カンダタはため息を吐く。
「やめとけ。お前さんみたいに小賢しいやつに限って、最初は上手くいくから調子に乗って大きなヘマをやらかすもんだ」

「ボクは盗賊を続けるつもりなんてありませんから、心配いりませんよ」

リンが笑顔のままそう返すと、カンダタは肩をすくめて話を続けた。

「さて、次の場所だ。ここは簡単だな。いつもの闇オークション会場だ。あとは……やつらの根城だな。セントベレス山に潜入する」

「潜入って、そんなことできるんですか？」

「『教団』なんだ。信者のふりをすれば簡単だぜ、リンちゃん」

すかさず質問をしてきたリンを嗜めるように子分の一人が返事をする。リンは片目を瞑りながら、その危険性と、成功したときに得られるであろうあれこれに考えを巡らせた。

「……なら、潜入についてはボクはやめておきます。この中では闇オークションが気になりますね」

そして、辞退した。ここで引き受ければ、敬愛する兄はリンを——いや、デールを許さないだろう。まだそのときではない。セントベレス山には、三人で行けばいい。自分が合流して、今よりもっと力を付けて、三人で「光の教団」を壊滅させる。ここで危険を冒す意味はないはずだ。

「ま、お前は『お客さん』だ。じゃあ、お前らは光の教団に潜入しろ。そんでお前らがグランバニア。リンとギコギコには、俺様が直々に闇オークションってやつを見せてやるよ」

「ええ、よろしくお願いします」

子分たちはぶうぶうと文句を言っていたが、再びカンドタが斧をちらつかせるとすぐに静かになった。

一行はそれぞれ決められた通りに目的地へ向かう。

しかし数日経って、グランバニアに向かった他の子分たちは、閉ざされた国で「空飛ぶ靴について」なんの手掛かりも得られないまま、カンドタたちに合流したのだ。ちなみに、オークションは開催される日が決まっているので、現在オークション会場にいるのは情報交換をしに来た者や、手に入れた物品を先に預かってほしい者、オークションの主催者くらいである。

「なんだア？ グランバニアはそんなことになってんのか」

報告を受けたカンドタは分厚い覆面の中で眉を上げた。生来悪運の強さで生き延びてきた男である。彼は子分たちに潜入捜査をさせたことを「失敗だった」となぜかそこで直感していた。そして、その直感は当たることとなる。

セントベレス山に潜入した子分たちは、とうとう戻ってくることはなかった。

もちろん、カンドタたちは「空飛ぶ靴」と「ストロスの杖」につい

て情報を集めながら、アジトにも定期的に足を運んで、潜入しに行つた子分たちが帰ってきていないか確認していた。それでも彼らは、姿を見せることも、手紙を寄越すこともなかったのだ。

教祖イブールは、鋭い爪で、しかし紙を傷つけぬよう見た目にそぐわに繊細な手つきで文字をなぞる。

〈魔封じの洞窟では、僕らは魔法を使うことができず、魔物との戦いはとても苦勞した。〉

あるとき手に入れたその本に書かれた出来事は、イブールにとつて青天の霹靂だった。その書物は、時折意味の通じない文章やよく分からない表現があつたが、大まかなことは読み解けるもので、イブールは夢中になって読みふけた。「書かれた時代が違うのだろう」と思い、意味の通じない文章や不可思議な表現の使われている部分の解明に頭を悩ませ、「光の教団」についてはしばらくの間部下たちに任せただ。ほ。ど。だ。

それほどもまでに、その書物には価値があつた。

——これがあれば、わしは世界を支配できる。

それは、愚かな者どもが読めばただの英雄譚だろう。しかしイブールにかかれば、それは「世界を絶望に導く手引き」だった。

数々の絶望に支配された世界。その闇を晴らそうと奮闘する、書物の中の人物。そして闇は晴れ、封印されていた世界は自由を取り戻す。

つまり、その書物には世界を絶望で支配する方法と、その対抗手段についてが書かれているのだ。イブールはそこらへんの愚か者とは違う。「対抗手段の対抗手段」を考へることができる。

——人間界を支配し、ミルドラース様に認められれば、あるいは。

自分の望みもようやく叶うと、イブールは信じて疑わなかった。

「アダムはいるか」

「ハイハイ」

自分の血を引くこの少年をイブールは心底嫌悪していたが、その能力は何物にも代えがたいので、手元に置いている。

「お前に指令を与える。以前のラインハットでの失態を挽回できる機会だ」

「御意のままに」

その顔立ちが、魔物の血を引く深紅の眼差しが、どうしても許せなかった。だから、イブールは息子を極力視界に入れないし、何か伝えるときも必ず首を垂れさせる。

「それと、ラマダに掛けていた魔法を掛け直しておけ。そろそろ効果が切れる頃合いだ」

「承知致しました」

息子が部屋を去り、イブールは再び書物に視線を落とした。手始めにグランバニア王国に「灰色の雨」を降らせたときは、上手くいった。もちろん、この「雨」の原理はよく分からないため、魔法や魔法道具でそれっぽく再現しただけなのだが、思いの外上手くいったようで、今回と同様、汚名を返上するために息子に任せたグランバニア王国は「封印された国」となったと報告を受けている。結果については複数の部下から報告させたため、間違いはないはずだ。

ただし、国が城の中におさまっているような、特殊な場所である。国民も慎重な性格の者ばかりなのだろう。城は施錠されていたというのと、結界が未だに効力を保っていることで、中にある石と化した人々を壊して回ることができなかった、との報告も同時に受けた。

野心家の大臣だけは外に呼び出していたようだが、その大臣が国民を誘導する前に装置が誤作動を起こして、他の国民は全員屋内にいたままだったとのことだが、まあ些末なことだろう。

何せ、この世界には「天使の涙」などという道具は存在しないし、作らせることもない。であるならば、中の国民も呪いを受けたまま、誰に解放されることもないのだ。「灰色の雨」を降らせる装置については、今後改良していく予定だ。

「ゲマがいたら容易かったかもしれないが……」

一人呟きながら、イブールは首を横に振る。一応部下ということになってはいるが、ゲマは自分に対して忠誠を誓っていないことなど丸分かりであった。ミルドラースに派遣された、教団の御目付役。人の悪意や絶望、憎しみ、悲しみなどを悦びとする、魔王の腹心たるにふさわしい邪悪な魔物。

いつも本気を出さずに人間をいたぶるのが趣味のあの魔物が本気を出し、なおかつ力のほとんどを使い切って相手を仕留めたというのには少々驚いたが、あの魔物は「復活する」。

世界が邪悪に染まるほどに、ゲマの力は強くなる。他者の負の感情を力の源としているので、「核」から破壊せねば、ゲマが本当の意味で滅びることはない。その「核」も、魔王ミルドラースの指示のもと、現在は魔界に送られているため、弱まっているところを仕留めようと思っても不可能だ。

これからゲマは急速に力を取り戻すだろう。イブールの手元に「世界を絶望に陥れる方法を記した書物」がある限り。人間世界を絶望で支配し、「光の教団」は力を取り戻す。

イブールは神など信じていないし、いるならそれは魔王ミルドラースのことだと思っていたが、福音のようなその書物には、神に抱くような信奉を抱いていた。

兆し

フローラは逸る胸を落ち着けるために、一つ息を吐いた。それから、丁寧に、一文字ずつ言葉を紡いでいく。家族へ宛てた少女の手紙は、それまで送っていたものとは少々趣が異なっていた。

修道院に訪れた少年たちと、冒険をしたこと。怖かったけれど、二人が守ってくれたこと。冒険を通して、「強い心」とは、「救い」とは何なのかを、学ぶことができたような気がする。

少年たちは、ソロとアンドレという名前で、わけあって実家にある「天空の盾」を必要としていること。

普段ならば、修道院での生活で起きた出来事、感じたことを、どこか遠慮がちに綴られていただけの手紙。それが今回は、活き活きと、少女の胸の高鳴りをそのまま表すかのような文章となっていた。

家族は驚くだろう。フローラという控えめな少女が冒険に出掛けたことそのものよりも、自分たちに本音をぶつけてきたことに。

本当は家族で一緒に過ごしたかった、修道院での日々は不安だった、私は姉と違っていらな子なのかと思った、——けれど、今はそう思っていない。

そんな少女の赤裸々な思いを読み取り、父は、母は、姉は、一体どんな顔をするのだろう。フローラは、くすくす笑いながらそれぞれの反応を想像した。

「ちょっとした事情」のために冒険について、その成果について具体的なことは一つも書けやしないが、実家に戻ったときに話して聞かせるのもいいだろう。そのときはきつと、そんな旅を自分がしたことに対する家族の反応を、この目で見ることもできるはずだ。

「……はやく、会いたいです」

書き終えた手紙を封筒に入れて、蠟を垂らす。少女の瑞々しい体験が閉じ込められたその手紙を見つめながら、フローラの口からはそんな言葉が漏れていた。

その言葉は、手紙を宛てた人々に向けてのものでもあり、手紙に綴った人々に対してのものでもあった。

ソロとアンドレと名を偽る、リユカとヘンリーは、修道院を出て行った。フローラに「サラボナの大富豪」の話を聞いて、今度はオラクルベリーに情報を集めに旅立ってしまったのだ。

フローラは彼らに『天空の盾』を譲ってくれ」とは言われなかった。そんなことを言ったところで、彼女を困らせるだけだということ。あの賢い少年たちは正しく理解していたのだろう。

「また会おう」と握手をした二つの手のひらを、どれほど離したくないと思ったことか。

「私も連れて行って」と衝動のままに言えたなら、どんなによかったことか。

けれど、フローラはそれをしなかった。旅立つ少年たちの手を離し、その姿が見えなくなるまで手を振った。「お元気で」と、我儘な子どものせりふを呑み込んで、聞き分けの良い子どものせりふを口にした。

しかしそれは、フローラが内気で控えめな少女だったからではない。

彼女は確かに内気で控えめな少女だったけれど、それ以上に賢く、思いやりのある女の子だった。大好きな人たちを困らせたくない。その「大好きな人たちは、旅立つ少年たちだけではない。家族も、修道院でお世話になっている人々も。皆、フローラにとっては大好きでかけがえのない人たちだった。

せめて、彼らの無事を祈ろう。そしていつの日にか、大人になった自分を見てもらおう。

修道院の鐘が鳴った。澄んだ音色は、旅立った少年たちに、塔で祈り続けるシスターに、きつと届いているにちがいない。

フローラは立ち上がり、背筋を伸ばした。海辺の修道院の風は、潮のにおいがする。それは時折強く吹き抜け、浜辺の砂をつれてくるのだ。

苦しみを抱えた誰かが、導かれるようこの地を訪れるように。世の

不条理に溺れた人を波に乗せて運ぶように。

「フローラ……あなた少し、背が伸びました？　そういえば、髪の毛」

美しい姿勢で歩く少女に、修道女の一人が声を掛ける。立ち止まり、青い髪をひと房手に取った彼女は、恋する乙女のように破顔した。「ちようど、これから髪を伸ばそうと思っていたところなんです」

ぱつと手にしていた髪を放し、少女は再び歩き出す。

「きつと、似合うわ」

修道女は、どこか大人びた少女へ向けて、心からの言葉を送った。

*

オラクルベリーは、昼間よりも夜の方が騒がしい町だと、ここに来る途中商人のおじさんが言っていた。そういうことなら、と僕らはいつもは寝ている時間に宿を出て、町を見て回ることにした。

確かに、夜のオラクルベリーはきらびやかで、なんだか目がちかちかする。特にカジノは、びかびかと過剰なほどの明かり、大きな音、お酒のおいが交じり合って、独特な雰囲気があった。僕は、正直に言えばちよつとだけこの雰囲気苦手だと感じていたけれど、ヘンリーに馬鹿にされそうなので、それについては何も言わない。

ゲームをやりたいがるヘンリーをひっぱってあれこれ聞いて回っていたら、お酒が入って口の軽くなった大人たちがいろいろなことを教えてくれた。ほとんどはご機嫌になった酔っ払いたちが昔語りとして、自分たちの出身地に伝わる伝説を気分よさそうに話すばかりだったけれど、参考になりそうな話もあった。

『『天空の装備』を探してるなら、テルパドールっていう砂漠の国の女王様が持つてるって話だぜ』

「珍しい武具なんかは、カジノの景品になつてること多いぞ」

「小さなメダルを集めて交換すると、珍しい物がもらえるって話も聞いたことあるな」

こういつた話を突き詰めていき、とりあえず僕らの中では南の方へ

行くのが決定した。テルパドールという砂漠の国も、小さなメダルを集めている「メダル王」という人のお城も、南の方にあるらしいのだ。「いろいろ聞けたし、『オラクル屋』ってところと『占いババ』って人のところに行ったら、宿に戻って休もうか」

「うーん……掘り出し物が売ってるかもしれないねえっていう『オラクル屋』は分かるけどよお、占いは別にいいんじゃないか？」

「言いたいことは分かるけど、リンクスとギコギコのことには誰に聞いても知らないって言うし、占ってもらおうくらいはいいんじゃないかな。何か手掛かりがあればもうけものだよ」

占いを信じていないらしいヘンリーが「しゃーねえなあ」と頭の後ろで腕を組みながらついてくる。「占いババ」さんは有名人らしくて、酔っぱらったおじさんが押してくれた場所には順番待ちの列ができていた。特に女の人が多くて、占い終えてもらった人の中には友達らしきひとに興奮した様子で結果を伝えている。

「……恋占い専門ってことはないよな？」

「もしそうだったら、おじさんたちがそう言いそうなものだけ……」そんな不安を抱えながら並んでいると、僕たちの番になった。お金を払って、「人を探している」というと、紫色の「いかにも」といった服装のおばあさんは、水晶玉に手をかざし始めた。

「お前さんの探し人は遠いところにいるよ。どれほどお前さんが探すうが見つかからないが、必ず再び出会う……焦らず、お前さんは自分のやるべきことをじっくりやりな。そうすればきつと、向こうがお前さんを見つけてくれるよ」

「探し人はいない」とは言われなかった僕は、ほっとした気持ちになっってお礼を言った。

「待ちな。そっちの茶髪の小僧」

「ああ？ オレが知りたいのはこいつと同じ内容だから、別に占ってもらわなくていいぜ」

呼び止められたヘンリーが、少しの興味もなさそうに「後ろで待ってるお姉さん方を占ってやりなよ」と顎で僕らの後ろに並ぶ人々を差す。ヘンリーは生まれも育ちも王子様のくせに、「そこら辺の悪ガキ」

のまねが本当に上手だ。別に羨ましくはないけど。

「いいや、待ちな。お前さん……今すぐにじゃないが、女難の相が出てるよ」

「そりや、御心配ごーも。悪いが、そこらの女に引つかかるようなタイプじゃないと自負してるんでね」

僕の腕をつかみ、空いている手でおばあさんにひらりと手を振ったヘンリーは、そのまま無言で宿まで歩いていった。その横顔は、不機嫌というよりは苦しいのを耐えている顔である。僕は彼が——アルマのことを思い出しているのだと、分かってしまった。

部屋に鍵を掛けた僕は、ベッドに横になりながら、「ヘンリーってさ」と浮かない顔のままの親友に声を掛ける。

「アルマのことが、本当に好きだったんだねえ」

「……そりや、お前もだろ」

「うん。僕、今でも覚えてるよ。お別れ会での試合の時、君、『強くなつたね』って言った僕に『お前より強くならなきゃ、アルマを奪えないだろ』って——すごく真剣な目で、そう言つてた。僕、あんまりびつくりして動けなくなっちゃって、試合にも負けちゃった」

もちろん、僕にとってもアルマは「特別な女の子」だった。大好きで、ずっと一緒にいたかった。でも、あのときのヘンリーの青い目が、あまりに真剣で。

「僕、『勝てない』って、思っちゃったんだよ、あの時。試合になのか、君の気持ちになのかは、分からない。でも、試合に負けて、本当に、本当に——悔しかった」

横になつたまま、顔だけヘンリーに向ける。彼が何を考えているのかは分からない。

「オレも、今でも覚えてるぜ」

小さな、だけどしっかりとした呟きだった。

「お前の独占欲。毎日毎日、至るところで感じてたよ。ま、残念なことに、オレたち二人とも、アルマにとっては眼中になかったみたいだけどな」

「ふふ。アルマったら、いつもいつも『お父さんが一番好き』って言っ

てたもんね」

その日僕たちは、久しぶりに昔の話をした。今まで、つらくて、思っ出したくなくて、どうしようもなく胸が締め付けられるからできなかった話だ。僕ら二人とも、アルマが好きだったこと。もしかしたら、デールだってそうだったのかもしれない。だけどアルマはいつも、僕でもヘンリーでも、デールでもなくて、海のそのまた向こうの、誰かを探していた。あのとき、僕はその感情の名前を知らなかったけれど。

散ってしまった初恋の話をして、ヘンリーは昇る朝日に照らされながら「でも、まだ好きだから」と晴れやかな顔ではつきりと言った。

「だからさ、オレに『女難の相』なんて、おかしな話だよな。いや、たぶらかされるとかじゃなくて、迷惑な女にでも出会うのかな？」

「なんだ。君、すっかり占いを信じてるんじゃないか」

「うるせえ。信じちゃいねえけど、話のタネとして使ってやってるんだよ」

むっとした顔になったヘンリーに、僕は笑った。ここに長居するつもりはないし、朝ごはんを食べたらテルパドールに向かうための旅程を立てよう。

「勇者って、どんな人かな。僕、探し人はあの二人のつもりで言ったんだけど、勇者のことも聞けばよかったね」

「まだ自分が勇者って気づいてもねえようなぼんやりしたやつかもしれないぞ。じゃなきや、装備だけじゃなく本人の噂がもうちよつとあるはずだろ」

にやっと笑いながら、ヘンリーがまだ見ぬ「伝説の勇者様」に対して、小馬鹿にしたようなことを言った。僕は曖昧に笑って肯定も否定もしなかったけれど、ヘンリーの意見に概ね同意している。

——いつか、その人に会えたなら。

なんて言葉を掛けようか。「力を貸してください」「あなたでなくてはだめなんです」——そんな言葉は、言いたくなかった。どんな人は分からないけれど、たまたま選ばれてしまっただけの人に、僕は自

分の都合を押し付けなければならぬのだ。

闇を打ち払う伝説の勇者。その人に、会ってみたい。協力はしてほしいけれど、その人だけに任せたくはない。母を救い出すのは、光の教団を打ち倒すのは、その人ではなくて、僕——僕らでありたかったから。

*

ビアンカはほとんど困り果てた表情で、サンタローズの洞窟内を歩いていった。子ども一人とはいえ、レヌール城のおばけたちよりも魔物たちは弱く、そういう意味では困ってはいない。

では、何に困っているのかというと、薬師のおじさんに言われた材料が全然見つからないのである。見つかったのは、きれいな石だけだ。

「あーあ、困っちゃうわ。まさかお母さんが病気で倒れるなんて」

眩きながら、少女の胸には不安と焦りが飛来する。父のダンカンはよく風邪をひくなど体調を崩しがちだけれど、母が倒れることなど滅多にないことだった。宿の運営と母の看病がある父では薬師に依頼することもできず、こうしてサンタローズを訪れたビアンカだったが、薬師は薬草などの調査をしていて中々手が空かない。日に日に、魔物が狂暴になってきて怪我人が増えているらしかった。

「だったら私が材料を取りに行くわー」と勇んだのはいいものの、どんなに探しても材料である薬草は見つかっていないというのが現状である。

「……サンタローズ、来なくなかったなあ」

つい、らしくない弱音まで零れてしまい、ビアンカは慌てて自分の口をふさいだ。弱気になると、魔物に狙われやすくなる気がする。それは避けたかった。

サンタローズの人たちは、相変わらず親切で優しい。この村が嫌いになったわけでは、もちろんない。

けれど、サンタローズに来れば会えると思っていた人たちが、みんななくなっていた。友達のリュカとアルマとゲレゲレも、頼もしく格好いいパパスも、料理上手なサンチョも、もうこの村には誰もいない。

——誰か、嘘だつて言ってくれたらよかったのに。

ビアンカだつて、死んでしまった人たちが戻らないことは知っている。それでも、そんなことを考えてしまうのは仕方のないことだろう。

三年前、ラインハットを襲った魔物はサンタローズまで襲来した。幸いアルカパまでは来なかったけれど、多くの人が亡くなったらしい。その中に、ビアンカの大切な友達とその家族も含まれてしまっていた。大好きな人たちのことだからよく分かる。きつと、彼らは魔物に襲われている人たちを守り、勇敢に戦ったに違いない。

涙が出そうになり、ビアンカはふるふると頭を横に振った。ぴよこぴよこ金色の三つ編みが左右に振れる。

「……今日はもう、やめようかしら」

また明日、探せばいい。沈んできた気持ちのままに、ビアンカは洞窟を出た。

村の人は、暗い表情のビアンカを見て「明日はきつと見つかるさ」と慰めの声を掛けた。彼らとて、本当ならば手伝つてやりたい気持ちでいっぱいだろう。しかし、冬に差し掛かるこの季節、寒さに備えるためにやらねばならないことはたくさんあったし、何より魔物への対策や怪我人への対応など、子どもにかまっている暇はあまりなかった。しかも、ビアンカは子どもの中でもそれなりに戦えることが分かっている。

とぼとぼと歩いていたら、ビアンカは無意識にリュカたちの家だった場所に足を運んでいた。そこは取り壊されることもなく、村人たちの手できれいに保存されている。中に入らせてもらおうと、木の枝が落ちていて、ビアンカは何気なくそれを拾った。

寒くなってきたからか固く閉ざされている蕾を見て、洞窟の中では堪えていた涙があふれて止まらない。なぜかは分からないけれど、そ

の蕾が綻ぶところを、どうしても見たかった。

——今日は家に帰ろう。

幸い、まだ陽は沈んでいない。今から帰れば、日没前にアルカパへ戻ることができるだろう。ビアンカは寂しげな枝をポケットに突っ込み、サンタローズの村を後にした。

門番に心配されながら村を出て、魔物を倒したり避けたりしながら歩く。すると、ビアンカは自分より小さな男の子が蹲っているのを見つけた。

「ねえ、大丈夫？ あなた、一人なの？」

声を掛けながら、ビアンカはぎよつと目を見開く。少年は胸に見過ごせない程の怪我を負っていたのだ。左腕がひしゃげ、どう見てもこの辺りの魔物にやられたとは思えないような傷だった。

「私、薬草ならたくさん持つてるわ。毒消し草も……」

「おれに構うな」

ぎろり。ビアンカを睨んできた少年の顔は、美しかった。切れ長の目は深紅。夕日に照らされる黒髪はつややかで、幼いながらに目、鼻、口、全てのパーツが均整で調和していた。

「あなた……まさか、『アベル』？」

ビアンカは少年の名前を知っていた。昔、リユカが手紙で「新しい友達」として特徴を紹介してくれたからだ。リユカとアルマの友達なら、きっといい子だろう。そう思って、ビアンカはラインハットへ行った友人たちとの再会とともに、まだ見ぬ少年に会ってみたいと思っていたことをよく覚えている。

名を呼ばれた少年は表情を変え、ビアンカの肩を押して地面に叩きつけた。受け身も取れなかったビアンカは、視界がチカチカして、呼吸が上手くできなくなってしまう。突然の暴力に対して怒鳴りつけてやろうとした彼女は、しかし己の目を疑った。

ここら辺では見掛けない、狂暴そうな魔物が少年に向けて牙をむいていたのだ。

ビアンカは知らなかったが、それはアームライオンと呼ばれる腕と足が四本ずつある獣型の魔物だった。

「ツチ！ イオラー！」

少年がビアンカを庇うように立ち、開いた魔物の口の中に爆発呪文を打ち込む。倒れ込み掛けたところを踏ん張った魔物は、当然まだ息絶えていない。血走った両眼で少年を睨み、追撃をしようと四本の腕を振りかぶる。

「フリホー！」

少年しか見えていなかったらしい魔物は、少女から発せられた眠りの魔法に成す術なく瞼を閉じた。恐怖で震えながら、少女は肩で息をしている。少年が魔物の相手をしている最中、無謀にも立ち上がって参戦したらしい。

「……別に必要はなかったが、手間は省けた。礼を言う」

躊躇なく、少年は魔物の心臓に杖を向け、再び爆発呪文を打ち込む。防御も何もできないまま心臓を爆散させられた魔物は当然のように息絶える。

「な、なに……あの魔物……。こんなやつ、見たことない」

「……まあ、この辺にはいないだろうな。それと、おれの名前はアベルじゃない。人違いだ」

恐怖で震えていたはずなのに、どこかこちらを馬鹿にするような視線を向けてくる少年に対して、ビアンカはカチンときた。身長だつてビアンカの方が大きいし、線の細い少年はどう見たって彼女より年下だ。生意気な少年の右腕を掴んで、キツと睨みつける。

「こんな怪我をして、どこへ行くこうつて言うのよ。一緒にアルカパへいらつしやい。それで、シスターに怪我を治してもらうのよ。夜は危ないし、うちの宿屋へ泊めてあげるわ。お代はお母さんの薬に使う材料を一緒に集めてくれればいいから」

「何を勝手なことを……。必要ない、おれは忙しいんだ」

「うるさいわね。わたしの方がお姉さんなのよ。いいから言う事聞きなさい」

あまりに横柄なことを言ったビアンカに、少年は眉を寄せて不機嫌を露わにした。もともとご機嫌な表情など浮かべてはいなかったが。

「わたし、ビアンカよ。『アベル』じゃないあなたは一体誰？」

「……お前に名乗る必要はない」

「じゃあわたし、アベルって呼ぶわ。あなたが誰だって、別にいいし。ともかく、見てるだけで痛いその怪我を早くどうにかしなくっちゃね。さっきの魔物にやられたの？」

「油断してただけだ」

「まあ、あんな魔物がいるなんて思わないから、それはそうでしょうけど。あなた、お家はどこ？ サンタローズの子じゃないわよね？」

意外にも抵抗しないアベルの腕を引きながら、ビアンカはぺらぺらといういろいろなことを話した。アベルは質問に答えたり答えなかったりしたけれど、少女にとつてはそんなことどうでもよかった。口数が多くなってしまうのは、不安や恐怖を紛らわすため。それくらい、あの大きくておそろしい魔物はビアンカにとつて衝撃的だったし、自分より小さな少年があんな化け物に果敢に立ち向かったこともまた、衝撃的だったのだ。

ビアンカの口添えで、少年はすぐに治療が施され、美味しい食事とあたたかな寝床を用意された。

「必要な材料とやらを言え」

「あなたねえ、どうしてそう偉そうなのよ。でもまあ、わたしはお姉さんだから許してあげる。えっと……薬師のおじさんからもらったメモがあるわ」

ビアンカからメモを受け取ると、少年は腰に下げていた袋の中から、薬草やら怪しげな粉末の入った袋やらを取り出し始める。それから、全て出し終えたのか、それらをメモと一緒にビアンカへと手渡した。

「宿代くらいにはなるはずだ」

「え？ これってもしかして……」

言葉足らずな少年の意図を汲むとしたら、メモに書かれていた薬の材料を譲ってくれたということだろうか。礼を言うべきか、詳細を尋ねるべきか迷った少女の言葉を待たず、少年はさっさとベッドに乗り込み、布団をかぶってしまった。

「もうっ。せつかくいろいろお話しようと思ったのに！」

ビアンカは頭の中をぐるぐるしただけで、行き場を失ってしまった言葉たちの代わりに、腰に手を当ててぶんすかと言って、それから眉を下げ、ふにやりと笑う。

「……命があつてよかつたわ。アベルも、わたしも」

ぼん、と布団にくるまった少年の黒髪を撫でる。本当に寝てしまったのか、今更寝たふりをやめられないのか、少年は大人しく撫でられるがままとなっていた。

予感

翌朝になると、アベルは宿からいなくなっていた。「挨拶くらいしていきなさいよ」とぷりぷり怒っていたビアンカだったが、彼女も暇なわけではない。昨日もらった材料を薬師のおじさんに渡すため、父と母に声を掛けてから、サンタローズの村へと歩いて行った。

アベルのくれた材料を渡すと、おじさんはすぐに薬を作ってくれ、ビアンカは出来上がった薬をいそいそとアルカパへと運んだ。母に薬を飲ませれば、お礼を言われてまたすぐに眠ってしまった。ビアンカは少し寂しかったけれど、まずは体調第一である。少し痩せてしまった母の手を握って、寂しさを我慢してから、宿の手伝いへと向かった。宿は大忙しというわけではなかったけれど、それなりに旅人は来る。ビアンカは不安な気持ちから逃げるように働いた。

その夜、くたくたになってベッドに倒れ込んだはずだったけれど、夜中にふと目が覚めた。

トイレに行きたくなったわけでも、体調が悪いわけでもない。けれど、嫌な予感がざわざわと背中をくすぐっているような感覚がして、妙に目が冴えてしまったのだ。水でも飲もうか、もう一度目を瞑ってみようか考えていると、明かりも灯さずこそそと話合う声が聞こえてくる。ビアンカは寝たふりをして耳をそばだてた。

「滅多なことと言うもんじゃやない。ちよつと弱気になつてるだけさ」「いいや、自分のことくらい自分でよく分かつてるよ」

それは間違いなく、両親の声だった。ビアンカはもう十一歳だったけれど、両親とは同じ部屋で眠っている。去年、「十歳になったから」という理由で「パパ、ママ」と呼ぶのは卒業したが、こればかりはまだ卒業できなかった。

ビアンカは時折、不思議な夢を見る。その夢は別に、恐ろしい夢ではないのだと思う。けれど、目覚めたときに両親がいなくなってしまうのではないか、と妙な不安に駆られてしまい、どうしても一人で寝

ることができなかった。

今、彼女はその夢を見た後と同じような不安に駆られている。

「ビアンカがもらってきてくれた薬で、薬にはなった。でも、きつと根本は解決しちやいないのさ。アタシはもう長くない」

——そんな。

それからは、ビアンカは両親が何を話しているのか、まるで耳に入ってこなかった。

母がいなくなってしまうかもしれないと恐怖の中で、少女はぐるぐるといろいろなことを考えた。お伽噺で出てくる、どんな病気もたちどころに治してしまうパデキアの根っこ。聖なる癒しの力を持つ世界樹の雫。思い描きはしても、そもそも存在するのかどうかすら分からないそれらを手に入れることなど、現実的ではないことくらいビアンカにも分かっている。

——ううん、諦めちやだめ。

ビアンカは一生懸命考えた。そこでようやく、ひとつだけ現実的な方法を思いついた。

アベルなら、何か知っているかもしれない。

だって、あの少年は薬師のおじさんが言っていた材料を既に持っていた。ビアンカよりも年下なのに、一人で行動していて、なんだか事情がありそうだった。もしかしたら、ビアンカの知らないことをたくさん知っているかもしれない。根本的な治療が難しいとしても、薬を飲んで楽になったと母が言っていたように、病気の進行を遅らせることくらいはできるかもしれない。

昔から、思い立ったらすぐ行動に移すビアンカである。

その日、彼女は朝からメモを置いて、アルカパの町を飛び出した。サンタローズの村へ立ち寄って聞き込みをしても、アベルらしき子ども見たという話は聞かない。ビアンカはラインハットへ行ったこととはないし、それも一人でこんなに遠出をするのは初めてだったけれど、大好きな母のため、関所へ向かった。

以前は緊張状態が続いていたラインハットだが、王妃がよからぬ輩と手を組んでいたのも今は昔であるし、現在は復興して国が安定した状態である。もちろん、まだまだ復興が完了したとは言えない状態ではあるが、関所に立つ兵士も、一人訪れた女の子を邪険にすることはなかった。

「あのっ、男の子が通りませんでしたか？ わたしより年下くらいのも、黒髪で、赤い目のきれいな顔をした男の子なんですけど」

「うーん……黒髪の男の子ならいたけど、目は赤くなかったなあ。お嬢ちゃんのお友達かい？」

「……そうなんですー！」

ビアンカは咄嗟に嘘を吐いた。ビアンカとアベルはちよつと話しただけの相手であり、さすがの彼女もそれだけで「友達」になったとは思っていなかった。それで言うなら、アルカパの悪ガキ二人組も友達ということになってしまう。ビアンカに対して淡い恋心を抱く少年たちにとつては気の毒なことだが、ビアンカはあの二人を友達だとは思っていなかった。

「えっと、それで、お別れの前に渡さなくちゃいけないものがあつたんですけど、渡しそびれちゃって！ どうしても渡したくって！」

どういうわけか、ビアンカには「アベルはこの関所を越えた先にいる」という予感がある。そう思い込みただけかもしれないけれど、ともかく、どうしてもこの先へ行きたかった。ラインハットはいろいろな人々が行き交う大きな国だ。アベルにもし会えなかったとしても、誰かが母の病気に効く薬のことを知っているかもしれない。

「うーん……お嬢ちゃん、親御さんはどうしたんだい？」

「お母さんは病気で、お父さんはその看病をしてるんです。だから、わたし、友達とはやく会ってはやく戻らなくちゃならないんです！ 悪い事なんて絶対にしないから、ここを通してくださいー！」

必死な様子の美少女に胸を打たれたのか、兵士は「仕方がないなあ」と道を空けた。ビアンカはお礼を言いながら駆け抜け、初めて見る景色に胸を躍らせる暇もないまま、ともかく必死でどこにいるかも分か

らないアベルを探した。

道中見つけ出すことはできず、ラインハット王国へと向かった少女は、くたくたになりながら、いつの間にか陽が落ちかけていることに気が付く。そして何とか陽が落ちる前、崩れ掛けて未だ修繕されていないお城とは裏腹に、活気に満ちたラインハット城下町に辿り着くと、まず初めに宿をとった。

「ねえ、ここらへんで黒髪で赤い目をした男の子を見なかったかしら。私より背が低くて……」

「うーん……見てないなあ。それよりお嬢ちゃん、一人かい？ 女の子一人で、旅なんて、危ないよ」

「あつ、えーと、大丈夫です。おつかいを頼まれただけなの。用事が済んだらキメラの翼を使って、すぐに戻るもの」

「キメラの翼を持つてるなら安心だ。何せ、店で買おうと思ったら高いからねえ。子どもの小遣いじゃあ買えないだろう」

ラインハット地方では、キメラの翼の価格が以前からかなり高騰していた。三年前の魔物の襲撃があつてから、誰もが万が一のために備えるようにしたからである。

「心配してくれて、どうもありがとう。わたし、もう休むことにするわ。もしも黒髪の男の子を見掛けたら、教えてね」

そう言つて、ビアンカは内心ひやひやしながら用意された部屋へ向かった。本当はキメラの翼なんて持っていなかったのである。

「参ったなあ、わたしの勘だと、アベルはここにいると思つただけど。明日の朝、町の中を探してみようかしら」

眉を八の字にしながら、ビアンカはため息を吐いた。もう寝てしまおう。何もしていないと、いろいろなことを考えてしまつて、不安や心配に襲われる。

翌日、ビアンカは早起きをして、町の中をすみずみまで見て回った。けれど、朝から活動している人たちなんて、自警団の人や早起きが得意な老人、それから家を持たない人々くらいで、アベルの情報は何も得られなかった。

「この辺りを探すなら、お嬢さん。東へは行かない方がいい」

一人の老人が、神妙な面持ちでそんなことを言った。

「東にある『古代の遺跡』は魔物や人攫いの根城になっていると噂があるんじゃない。それに、ラインハットに立ち寄った多くの人が、できたばかりの橋を通ってオラクルベリーへ向かう。人探しなら南にしなされ」

「ありがとう。気を付けるわ」

礼儀正しくお礼を言うと、老人は目元をやわらかくして彼女の両手を、皺の刻まれたその手で包んだ。

「澄んだ目をお持ちのお嬢さん。あなたの旅路に幸多からんことを」

慈しむような目で自分を見る老人へ、ビアンカは重ねて礼を告げる。それからこやかに手を振って、ラインハットの町を後にした。

あまり長い事家を離れても、父と母に心配を掛けるだけだろう。そう思ったビアンカは、昼までに見つからないのなら、大人しく戻ることにしようと決めて、その周辺で旅人に聞き込みをしようと歩き出した。帰り道にサンタローズに立ち寄って、薬師のおじさんに、ビアンカにもできることを聞いてから帰ればいい。

ただし、人のいない時間というのは、人目に付きたくない者たちが活動する時間でもあった。

「お嬢ちゃん、人を探してるんだってな」

「うん。黒髪で赤い目をした男の子よ。おじさんたち、知ってるの？」

町の外れまで来た時、にやにやと笑う男たちに囲まれて、ビアンカは警戒を露わに眉を寄せた。

「ああ、知ってるぜ。おじさんたちが連れてってやろう」

「……遠慮しておくわ。知らない人にはついて行っちゃいけません、っってお父さんとお母さんに言われてるもの」

後ずさりながら、ビアンカは相手の出方を油断なく伺っていた。相手は三人。馬鹿正直に立ち向かっても勝ち目はないだろうが、ビアンカは魔法を使える。上手くやれば、逃げるくらいはできそうだった。

「なんだ、おじさんたちが誘拐でもすると思ってるのか？」

「親切心で声を掛けただけなのに。傷付くなあ」

「あら、それはごめんなさいね。だけど、案内は必要ないわ。もし知っているなら、どこへ向かったか教えてほしいのよ」

「いいから来いッ！」

しびれを切らした短気な男へ、ビアンカは眠りの呪文をぶつけた。ふにやふにやと体の力が抜けて地面に倒れ込んだ男は、そのままやすやすと眠っている。呪文の余波で、近くにいた男もふらふらと倒れ込んだが、あと一人は眠ってくれなかったようだ。

「とんだじゃじゃ馬だったみたいだな。まあ、子どもはそれくらい元気じゃなくつちやな！」

残りの男が飛び掛かってきても、ビアンカは冷静に攻撃を避けた。それから、相手に向かって幻惑の呪文を掛ける。

「まったく、大きい町ってこうなのかしら？ アルカパって安全な町だったのね」

見えない何かに向かって腕を伸ばしている男を横目に、ビアンカはさっさとラインハットの町から退散した。しかし、嫌なことばかりでもなかった。町から出て最初に会った旅人が、「行商人から大量の食料を買い込んでた少年が、黒髪に赤い目をしていた」と教えてくれたのだ。

少年は東の方へ向かっていったらしく、ビアンカの頭には老人の忠告がかすめたが、もともとアベルに会うためにアルカパの町を飛び出したのだ。危険があるなら、警戒していればよいだろう。そう思っ
て、東へと歩を進めた。

老人の言っていた「古代の遺跡」と思わしき場所に辿り着いたとき
には、もう昼になっていた。お天道様が真上にある時間帯だからか、
怪しい人影もない。ビアンカは、意を決してその場所に足を踏み入れ
た。

*

船を何度も乗り継ぎ、行商の人に同行させてもらって、僕らはよう
やくテルパドールに辿り着いた。

途中メダル王の城にも寄ったけれど、残念ながら僕らの欲しい物も情報も特にはなくて、穏やかなその島はすぐに出立することにした。

子ども二人だからと言って、騙そうとしてきたり身ぐるみをはがそうとしてきたりと、悪い人たちにもそれなりに出会ったが、あいにく僕らは誰かれ構わず信じるような人間ではないし、襲われれば返り討ちにするくらいの実力も持っていたので、疲れはしたけれど窮地に陥ることはなかったのは幸いだった。

「しっかし暑いなあ……。それなのに夜になったら寒いって、この国民はすげえよ。魔物と自然と、常に戦ってなくちやならねえんだもんなあ」

ヘンリーの言葉にうなずきながら、僕はオアシスで買い取った水を一口飲んだ。旅をする上で、水は常に持つようにしているけれど、砂漠では気を付けていてもすぐに減ってしまう。全部なくなってしまう前に、テルパドールまで来れたのは本当によかった。

くたくたのよれよれのまま女王様に会いに行くのは失礼だろうか、と僕らは宿で休んでからお城に向かうことにした。お城の中は外よりもひんやりしていて過ごしやすい。テルパドールでは、夜以外は常にお城は開かれていて、旅人でも自由に見て回っていいらしく、僕らはこれ幸いと異国の城を見て回った。ラインハットともグランバニアともちがう趣のある立派なお城だ。

この国の人に話を聞いて回ると、ここテルパドールは天空の勇者と共に旅をした仲間の一人が建国した場所らしくて、そういう縁があつて「天空の兜」があるのだとか。世界が窮地に陥ったときに目覚めるとされる「天空の勇者」が再び現れたときのために、代々兜を守っているらしい。

ただ、勇者が「天空の血」を引くことは分かっているけど、その子孫がどこにいるかまでは分からないらしくて、勇者本人の手掛かりはなかった。

とはいえ、兜が本当にこの国にあると分かっただけでも収穫だ。「天空の兜」は勇者のお墓に祀られているらしく、さすがにその場所は

一般には解放されていなくて、鍵は女王様が管理しているのだとか。

その王女様が玉座の間ではなく地下の中庭にしていると聞いて、僕らは地下への階段を下った。そこは砂漠とは思えないくらい水も緑も豊かで、手入れの息届いた美しい場所だった。

「おい……王女様って、あのすっげえ美人じゃねえか？ ほら、服装とかもそれっぽいし」

ヘンリーがあんぐりと口を空けながら、中庭にある椅子に腰を掛ける一人の女性を見つめている。

たしかに、そういう反応になるのもよく分かるくらい、きれいな人だった。艶やかな真っ直ぐとした黒髪は肩口で切りそろえられていて、切れ長の目も相まって意志の強そうな感じも見て取れる。さらに、神秘的な雰囲気のある褐色の肌や、彼女自身を引き立てる異国情緒溢れる豪華な服装や装飾品は、誰に紹介されなくとも、「この国の王族だ」と理解できた。

ただし、「女王」というには若く見える。僕らより年上だろうけれど、十代後半か、二十代前半くらいに見えた。

僕らがその美貌に呆然と立ち尽くしていると、その人は椅子から立ち上がり、自ら僕らの方まで歩いてきた。

「あなた方も、伝説の勇者様のお墓をお参りに来たのですか？」

見た目通りの涼やかで凜とした声。彼女は御前で立ち尽くす旅人の無礼を何も気にしていない様子で、見た目とは裏腹な気さくな態度で話し掛けてきた。

「あ……はい。僕たち、『天空の兜』がこの国にあると聞いて」

びつくりしながら答えると、彼女は目を細めて、僕とヘンリーをまじまじ見る。

「そうですね。ようこそいらっしゃいました。私はこの国の女王、アイシスです」

「僕はソロといいます。それで、こっちは……」
「アンドレと申します」

そう名乗ると、アイシス様は口元に手を当てて、くすりと笑った。
「今はそういうことにおきましよう。いずれ、時が満ちたら本当

の名を聞かせてください」

その表情が、何もかも見透かしているようで、何の反応もできなかった。

「あなたには何かしら感じるものがあります。案内しましょう。私についてきてください」

そう言うなり、アイシス様はすたすたと歩き出してしまい、僕らは慌てて彼女を追い掛ける。意外にも歩く速度が速くて、小走りになりながら行って行った。旅慣れていることもあり、息こそ上がらなかつたが、僕ら二人とも、彼女が立ち止まったときには汗がじわりと額に浮かんでいた。

「さあ、こちらへ」

鍵が開いた扉の先は、滲んだ汗を冷やすような、ひんやりした空気が流れている。心地よいけれど、緊張感のある厳かな雰囲気のある空間だ。アイシス様は、この場所は「勇者の墓」と呼ばれてはいるものの、実際に勇者の遺体があるわけではないという話を聞かせてくれた。そして、祀られている天空の兜を手にとると、そつと僕の頭に乗せた。

「うわっ……!」

僕は思わず、頭を押さえて蹲ってしまう。兜は重くて、とてもじゃないけれどずつと被っていることはできない。僕の反応を見たアイシス様は、そつと兜を頭から外し、再び「勇者の墓」に安置し直した。「あなたなら、もしやと思ったのですが……」

顎に手を当て、勘が外れたとでもいうように少々納得のいつていなさそうな顔をしながら、砂漠の女王はそんなことを呟いた。

一応ヘンリーも兜を被ってみるかと提案されたものの、彼は辞退していた。それはそうだろう。僕だって自分が勇者だなんて思っていないし、突然のことではびっくりしている。僕が天空の勇者ではないことなんて、父さんの形見である天空の剣を手にしたときに、とっくに分かっていたことだったから。

墓を出た僕ら三人は、アイシス様がもともといた地下の中庭に戻り、少し話をした。

「なるほど。あなた方は天空の勇者とストロスの杖を探しているのですね」

「恩人」に天空の勇者を探すよう言われていること、グランバニアの出身で、国中の人が石化してしまったことを話すと、アイシス様は侍女に出されたお茶を一口飲んでから、そう言った。

「はい。何か御存知でしょうか」

「私も、世界を覆わんとする闇の力が徐々に増大しているのを感じます。天空の兜を預かる砂漠の女王として情報は常に集めておりますが、今のところ勇者様御本人についてはなんの手掛かりもありません」

意図せず、僕は肩を落とした。この美しく不思議な女王なら何か知っているかもしれないと、期待していたようだ。

「いえ。陛下のお耳に届いていないと知ることができて、もう少しのんびり情報収集をしようと心構えができました。貴重なお話をありがとうございます」

ヘンリーの返事を耳に入れながら、僕は勝手に期待しておいて、勝手がっかりしている自分を恥じた。

「もしも今後何か新しい情報が手に入ったら、人づてにあなた方へ届くようにしましょう。ストロスの杖についてですが……少なくともこの国にはありません。しかし、天空の装備のように、世界にただ一つだけの品というわけではありませんから、もしかしたら珍しい品を蒐集している富裕層や、それらを取り扱っている商人が持っているかもしれませんね」

女王陛下は茶器から手を離して、その細い指を重ねるように膝の上に置く。それから僕らをじっと見つめて、「我が一族は、昔から未来予知の力があるそうです」と話を始めた。

「そしてどうやら、私にもその力が備わっているようです。ソロさん、あなたからは不思議な力を感じる。あなたは天空の勇者様ではありませんが、いずれ巨悪と戦うことになるでしょう」

僕は言葉を返せなかった。それは、僕がその話を聞いて、戦いと切り離せない運命に失望したからではない。そんなのは、覚悟の上だからだ。ではなぜ、何も言えなかったかと言えば、「巨悪」の言葉が出た時に、僕の頭には幼き日のアベルの顔が思い浮かんだからだだった。

「辛いことを申し上げたかしら。顔色が優れませんか。侍女に場所を用意させますから、そちらで休むといいでしょう」

僕が何かを言う前に、アイシス様は侍女を呼んで、連れて行くよう指示している。「それじゃあ、オレも……」と僕について来ようとしたヘンリーの腕を、彼女は涼しい顔をして掴んだ。

「そういえば、ストロスの杖について昔聞いたことを思い出しました。アンドレさんにはその話をしますから、そのあとソロさんの休んでいる部屋を案内させるようにしましょう」

「えっ。あの、僕、具合なんて悪くなってません。一緒に話を……」
「いや、ソロは休んで来いよ。陛下、御厚意に感謝します」

「ばちん、とキザなウインクをされて、僕は占いババに「女難の相が出てる」と言われたばかりなのに、と少し呆れた。

新たな一歩を

無理やり水分を摂らされ、ベッドに横たわらされ、至れり尽くせりの待遇を受けていると、ヘンリーが困ったような、呆れたような顔をして迎えに来た。

「お前つて、昔から年上の女の人に可愛がられるよなあ。まあ、オレはアイシス様と二人で話が出来たからいいけど」

「アンドレつてば、心に決めてる人がいるって言うわりに、美人に弱いよね」

「馬鹿。アイシス様は美人に弱いとか強いとかの問題じゃねえだろ。それより、ストロスの杖のこと、聞きたいだろ？」

どかりとベッドの傍にあった椅子に座ったヘンリーは、真剣な顔つきになった。

「結果からすると、ストロスの杖じゃグランバニアを救えないかもしれないねえ。アイシス様は『お前が』グランバニアの出身って聞いたから、気を利かせてくれたんだろう」

「え、それつて、どういうこと？」

ヘンリーは短い茶髪の頭をがりがり搔きながら、「それがなあ」と眉を下げた。

「なんでも、ストロスの杖つてのは一人にしか使えない挙句、強い呪いを解くと、砕け散るそうさ。だけど多分、グランバニアの国民全員を元に戻すほどの数はこの世に出回ってない。ってなると、別の方法を探した方がいいんじゃないか？」

「それなら、『ラーの鏡』は？ 石になった姿は、その人たちの真実の姿じゃないはずだもの」

「試してみる価値はあるかもしれないねえが、期待はしねえ方がいいだろうな。そういうわけで、新しい方法を探していった方がいいんじゃないか？ オレは思う」

新しい方法を探すのはもちろんだけれど、僕は天空の勇者の手掛か

りが無いと言われたとき以上にがっかりしてしまって、少し返事に詰まってしまう。女王様の配慮は、正直迷惑ともありがたいとも言えないものだった。

二人で一緒に聞いたのなら、同じ時に二人で気持ち分け合えた。けれど、二人で一緒に聞いたのなら、きつとヘンリーは僕のように落胆も怒りも露わさず、今こうして僕を氣遣う視線を向けているように、「親分」のヘンリーのままでいただろう。

「ま、簡単にいくことばつかじやねえってのは最初から分かってたことだ。地道に行こうぜ。やることはいつぱいあるんだ。幸か不幸か、立ち止まってる暇はねえぜ」

「……そうだよ。いつも気を遣わせてごめん」

「馬鹿言うな。気を遣う云々の前に、旅に関しちゃオレも当事者だ。お前、自分の旅にオレを付き合わせてるって思ってたんなら許さねえぞ。オレはオレの考えで、オレがそうしたいから旅をしてるんだ」

ほかり、とヘンリーが僕の頭を軽く小突く。あまりに彼らしい優しさに、僕は思わず笑ってしまった。

「ところで、アンドレ。君も『未来』について何か言われた？」

「……ああ、まあな。探してるやつがいて、そいつらに会えるか聞いたら、まあ、会えるだろうって言われたよ」

らしくなく歯切れの悪い言葉に、僕は首を傾げる。

「それって、会えないかもしれないって言われたの？」

「いや、なんでそうなるんだよ。会えるって言われたって言っただろ。なんというか、タイミングが悪いっぽいらしいけどな」

大きくため息を吐いた彼は、「そんなことより、行くぞ」と僕の腕を引っ張った。

「陛下が特別に、今日の昼過ぎ出発の定期便に乗ってもいいって許可証をくれてな。行き先はサラボナだ。フローラの家族がいる町だし、何よりフローラの父親は世界でも有数の大商人らしいから、珍しい道具のこともよく知ってるだろう。それに、ストロスの杖も諦める必要はないから、そういうこと、ガンガン聞いてこうぜ」

僕が頷くと、それを見たヘンリーも力強く頷く。

「そうだね。フローラは僕らのこと、家族への手紙に書くって言ったし、いろいろな話が聞けるといいな」

無理やり笑った。それから、城の窓から黄金に輝く砂漠を見つめる。

「今度この国に来るときは、もっとゆっくり楽しみたいね。きつと、僕らが驚くような文化や食べ物があるだろうから」

「そうだな。次は天空の勇者も一緒に、だな」

僕らは他愛のない話をしながら、船に乗った。船乗りたちは気さくな良い人ばかりで、アイシス様に言付けられたこともあってか、僕らは快適な船旅をすることができたのだった。

*

敬愛する勇者様の発言に頭を悩ませながら、私は今後の方針について考えていた。アルス様はマリベル様に内緒で私たちに情報提供してくれるのだが、それがなんとというかまた、タイミングが素晴らしくよかったのだ。

私たちがマール・デ・ドラゴンでダーマの神殿へ向かうと、「ダーマに向かつてるって聞いたから」と、移動呪文で先回りしたアルス様が待っていてくれた。

というのも、アルス様はこの世界の王族と親交が深いのだが、その中でも特に仲良し（というか好意を寄せられている）マーディアスのグレーテ姫に「近々音楽の大会をやるから、賞品の『石板』が欲しかったら参加するといい」と言われたそうで、そのことを伝えに来てくれたのである。

「……ちなみにパスさん、音楽の経験は？」

「幼い頃に国で嗜む程度には習ったが、武術の方が好きでな。経験という意味で言えばあるが、『経験した』だけだ」

「そうそう。グレーテ姫から『ヨハンは参加禁止』って言われているから、残念だけど他の人を頼るか、自分たちで頑張るしかないかな」

多分、グレーテ様はアルス様に出場してもらいたんだろう。賞品が「石板」で、アルス様が参加しないわけがないと普通は思うし。トウーラという楽器の奏者として（過去の素行の悪さも）名高いヨハンさんは、出場したら優勝が決定するような腕前を持っている。以前もマーティラスで開催された大会で、ぶっちぎりの優勝をしたらしい。

「開催は一か月後くらいを予定していて、楽器でも歌でもいいみたいだよ」

というわけで、私は当初の予定だった「魔法使い」への転職を諦めて、「吟遊詩人」になるべきか悩んでいた。素人の私程度でも、ダーマの神殿で転職して、めちやくちや修行を積みめば、大会に出ても恥ずかしくない程度には聴ける歌を歌えるようになるだろう。

しかし、「ルーラ」の利便性は捨てがたい。とはいえ、前衛職のパパスさんに吟遊詩人やらせるのはなんか違うし。

「じゃあ僕、そろそろフィツシユベルに戻るね。大会には見学に行くつもりだから、アルマが出るようなら楽しみにしてるよ。また何か、誰かから聞いたことがあったら伝えるから。あつ、マリベルには内緒だよ」

うーうー唸る私を見てくすくす笑い、ぽんと頭に手を置いて、アルス様は私が喉から手が出るほど欲している呪文、ルーラを唱えてフィツシユベルへ戻っていった。

「パパスさん」

「どうした、改まって」

「私、『吟遊詩人』になります」

勇者様が見に来る。これだけで、私のモチベーション維持には十分だと判断した。勇者様に下手な歌は聴かせられない。つまり、死ぬ気で修行を頑張るしかない。吟遊詩人はその歌声で魔物の心をも掴み、死者の魂しら呼び戻す職業。一人で戦闘しろと言われたらしんどいが、パパスさんもいるし、まあなんとかなるでしょう。

「うむ。それなら私は『武闘家』になろう」

「えっ、戦士じゃないんですか？」

「アルマが戦闘向きの職業ではないのなら、なおのこと素早い動きが

求められるだろう」

私は感動した。パパスさん、私が以前勇者様から聞きかじっただけの、職業ごとの特徴をよく覚えてくれている。

「じゃあさっそく、転職しに行きましようか！ カジノで稼いだお金がちよつと余ってるので、装備はそれから揃えましよう。そしたらすぐに修行です！ おすすめはクレージュ周辺だそうです！」

なんでも、世界樹の木がある島、クレージュ周辺にはスライム系の魔物ばかり出現するそうで、別名「スライム島」なんて呼ばれているらしい。まあ、スライム系だからって弱いとは限らないんだけど、見た目の威圧感とかも考えると、とっかかりやすいだろう。

私たちはさっそく、神殿の中央にある長い階段へ向かった。

無事に吟遊詩人と武闘家に転職できた私たちは、装備を揃えてキメラの翼を買い、最低限のお金だけを残して銀行に預け、情報収集がてら今日はダーマに泊まることにした。ここダーマは、旅人だけじゃなく、普段は旅をしないけれど転職したい人々の集まる場所である。つまり、あらゆる情報が手に入りやすい。しかも宿屋の宿泊代が安いので、滞在もしやすいのだ。

「クレージュ？ ああ、あそこは良いところだよな。空気はうまいし、値は張るが、『世界樹のしずく』には買いに行くだけの価値があるし。何もしなくても、世界樹を見に行くだけで満足できるぞ」

「エンゴウのパミラの婆さんの占いはよく当たるぜ。探し物があるなら占ってもらったらどうだ？」

「リートルードのかつこよきランキング、ローズって人が一位じゃなくなっただと思ったら、今度はグランエスタードのアイラって人がずつと一位のまんまだってよ。あーあ、俺もそんな美人なら見てみてえなあ」

「モンスターパークという場所を知っていますか？ なんでも、人を襲わない魔物が暮らす場所なんだとか」

「シムティアの町には神様がいらっしゃるらしいぜ」

等々、「それ知ってるな」ってことが多かったが、まあ私は知らない

い人ともわりと楽しく話ができる方なので「やっぱ勇者様たちは最高！」っていう気持ちに改めてなれたし、いい時間だった。ていうかアキラ様、かつこよさランキング一位に君臨し続けてたのか。マリベル様も「スーパースターだったときにとったわよ」って言ってたけど、アキラ様も美人だもんなあ……。可愛い系のマリベル様とは違って、美人な大人のお姉さん、という感じだ。

「うーん。とりあえずクレージュで修行しつつ、私の修行に余裕がありそうなら途中で砂漠に行つて、なさそうならパパスさんのみに話を聞きに行つてもらうのはどうですか？ 大灯台も無理のない範囲で行きたいですね。一か月でどこまでできるかは分かりませんが……」
「ああ。それよりアルマ」

宿で情報をまとめつつ（とはいえ、あまり有用な情報はなかったが）、今後の方針を話していると、パパスさんが真面目な顔をしていた。訂正。パパスさんはいつでも真面目だ。

「アルマはシャークアイ殿やアルス殿には畏まった言葉を使うが、マール・デ・ドラゴンの船員にはそうでもない。私には、妙に畏まっているときもあれば、そうでもないときがあるな」

「あつ、失礼だったらすみません」

ペこりと頭を下げると、パパスさんは「いや」と頭を振った。

「責めているわけではない。どちらの喋り方も、おまえにとって『自然』なのだろう。ただ、無理をする必要はないが……。私には、マール・デ・ドラゴンの人々に話すように、楽に話してほしい。私たちは『仲間』だろうか？」

「そう……。だね。うん。私たち、『仲間』だもんね。確かに、そっちの方がいいかも」

目から鱗だった。確かに、私はパパスさんに対して言葉遣いが安定しないのを自分で感じていた。けれどこれまで子どもの演技をして散々タメ口（と変な敬語）で話していたのに、急にシャークアイ様たちに話すような「普通の敬語」に切り替えるのには抵抗がある。素が出てきてしまつて（というかもう演技する気があんまりなくて）中途

半端な状態だったのを、「仲間だからタメ口」と思えば、変に気を遣わなくてもいい。計算を含めると、もし親子の演技をする必要が出てきたときに、日頃からタメ口の方がきつと自然にできるだろう、という気持ちもあった。

「ああ。その方がシャークアイ殿の反応も面白そうだしな」

「シャークアイ様は別に私がパパスさんにタメ口聞いてても『失礼だからやめなさい』とは言わないと思うけど……海賊だし……」

「いや、こっちの話だ。さあ、もう寝るとするか。クレージュには明日の朝一番にキメラの翼を使って行くんだらう？」

「うん！ おやすみ、パパスさん」

「ああ。おやすみ、アルマ」

明かりを消して、目を閉じる。

夜は嫌いだった。毎日悪夢を見るからだ。見ない日と言えば、シャークアイ様と一緒に眠っているときくらい。起きていれば、思考を切り替えるともではいかなくとも、なんとかして気分転換をすることはできるし、己のできることに目を向けて、どうにか努力すればいいだけだ。

けれど、夢の中ではそうはいかない。色々な嫌なことをさめざめと見せつけられる。

私を赦し、微笑みながら光となった人のこと。ラインハットを滅ぼすきっかけを作ってしまったこと。リュカとヘンリー、デール、ピアンカ、ベラ、ポワン様、いろいろな人との約束を一つも守れないこと。海に棄てられたこと。海に身を投げたこと。何時になつても帰れないまま、薄暗い会社で眠気に気が狂いそうになりながら仕事をしたこと。

そんなこと、今更どうしようもない。だから、今度はどうにかしたいと思つて、前に進みたいと思つて、これからのことを考えるのに。夢は過去ばかり私に見せつける。何度「ごめんなさい」と叫んでも、何度「こんなはずじゃなかった」と悔やんでも、何度泣きわめいたとしても、淡々と過去を見せ続けるのだ。

——修行がひと段落ついたら、アニエス様にも会いに行こう。

大切な人。私のお母さん。優しくて、美しい人。死にかけて衰弱していた私を力強く救い出してくれた父と、温め、やわらかく包んでくれた母の腕を、私はずっと忘れないだろう。

「アルマ、こっちへ来るか？」

「……ううん、パパスさん。うるさくしちゃったら、ごめんね。一人で寝てみる」

抱きしめたのは、私の「冒険の書」。リュカとゲレゲレの手形が付いた、宝物の一つ。楽しいことも、悲しいことも、全て経験として記している私の分身。

「そうか」

早く朝になればいいと思った。誰にだって夜明けはくる。勇者様が闇を晴らしたように。今度は私が、友達の背負う苦難を軽くしてあげられたらいい。そして、リュカにもまた、父と母の腕に抱かれてほしいのだ。

デール少年改め、少女盗賊リンは闇オークションの妙な熱気に慄きながら、人や魔物が悪びれもせず人を売る様子を眺めていた。異様な光景だ。胸のむかつきが止まらない。けれど、態度に出してはいけない、と冷静な自分が釘を刺してくる。相棒のギコギコを撫でながら心を落ち着けつつ、人身売買の時間がようやく終わって、次は珍しい品物の売買となった。

呪われた品々や、いわく付きの拷問道具、真偽の定かではない怪しい薬……。

そんな物ばかりが売られていて、リンはイライラしていた。神秘の品などありはしない。出されるのは悪趣味な商品ばかりだ。盗賊であるカンダタの方が「道具」としては使える物を揃えている。その代わり、希少価値が低い物も多く、売値はさほど高くないが。

「さあ、お次は精巧にできたこの石像！ どうですか？ この生きた人間をそのまま石に変えたかのような、あまりに生々しい表情、仕草！ きつとあなたに不幸が降りかかるとき、身代わりとなってくれますよ！」

その石像を見て、リンはハツとした。グランバニアで石になった人とそっくりの石像は、しかし、グランバニアで見かけたことのある人ではなかった。そして、少しホツとしてしまったことにさらに苛立ちを募らせる。

——あれは絶対、魔物に石にされてしまった人だ。

「なんとこの石像、まだまだありますよ。こちらの戦士像なんかは、きつと魔除けになるでしょう。こちらの少女は幸福を連れてくるかもしれません。こちらの踊り子は、もう見ているだけで幸せな気持ちになれますねえ。年を取らない石像ならば、手元に置いておいても奴隷とは違った趣がありますよ！」

司会者の煽り文句を聞いて、客がざわざわとその気になり始める。

リンはちらりと相棒を見た。彼はオークションが始まってから、常に周りを警戒しているように耳や鼻をぴくぴくと動かしていた。今も、当然警戒は解いていない。

心に暗い気持ちを感じながら、リンはそれでも、グランバニアを施錠しておいてよかった、と心の底から思った。過去の出来事から、城に張り巡らされている結界も強めておいた。人だろうが魔物だろうが、簡単に侵入などできまい。カンダタの子分たちでさえ、「グランバニアは閉ざされていて、人の気配がなさそうだった。廃墟のようだった」と言っていたのだ。ただし、念のため、今後は何かと理由を付けてグランバニアの様子を見に行こう、と心に決める。

「さあ、次は今回のオークションの目玉！ 魔物です！」

呪いについて、グランバニアについて、自分が人々を守るためにできることについて、リンが幼いが聡明な頭で考えていると、石像はいつの間にか売れてしまったようだ。とはいえ、ここで「それは呪いで人が石になっていてるだけです！」などと言っても、こんなオークションに来るような客は喜ぶばかりで、胸を痛める者などいないと考えていいだろう。気の毒だが、リンにはリンのやることがある。そうしたいと思っても、すべての人は救えない。

「ぐるぐる……」

魔物の呻き声に、己の罪悪感を取っ払い、リンは耳に下がっていたキラールピアスをそっと外した。

「な……」

そして顔を上げ、絶句する。そこにいたのは、相棒のギコギコと同じ魔物だったのだ。

牙を抜かれ、爪を切られ、血まみれでやせ細り、ぼろぼろになった若いキラールパンサー。体格からして、ようやくベビーパンサーからキラールパンサーと呼ばれるようになったくらいの歳だろう。会場から聞こえた唸り声の他に、小さく相棒の声も聞こえた。

ギコギコは怒っていた。同胞のあまりに哀れな姿に。自身は心優しい子どもたちに救われたとはいえ、親とはぐれて人間に傷つけられ、それを噛われた経験もある。

「ちよつと、待ってください」

リンの声は、子どもながらによく透るものだった。ぼそぼそと自信がなさそうに話していたのも、昔のこと。「腹から声出せ!」とバンバン背中を叩いてくる兄に、背筋の伸ばし方、「人に聴かせる」声の出し方を習った。立ち上がり、オークション会場全員の注目を集めても、彼女——彼は怯まない。これくらいのことには「恐怖」には含まれない。「そんな魔物、売り物になりませんよ。ボクはこの子を連れていきますからね。人一倍詳しいと自負しています」

「おい、リン。お前……」

カンダタにマントを引つ張られても、リンは座らなかつた。覆面パントの「ビジネスパートナー」を睨みつけると、それからこりと柔和そうな笑みを浮かべる。もちろんその顔には仮面が付いていたけれど、目元のみが覆われているために、その奥で細められた瞳の優しい光や、露わになっている口元のやわらかさは隠せない。

「見るからに弱っています。魔物の生命力、回復力が凄まじいことを差し引いても、それは『野生があれば』の話です。牙を抜かれ、爪を折られ、戦う力を失くした魔物は本能で『生きていけない』ことを察しているんです。もちろん体も弱くなり、病気にもなりやすい。買ったところでもただ看病、介護の毎日になるだけです。そんな姿では、『魔物を飼っている』というステータスさえ満たされません。生かしておくのにも金が掛かり、処分したとしても死肉は別の魔物を引き寄せるから、危険がないようにするには手間が掛かる」

司会が顔を引きつらせたが、そんなことはお構いなしに、リンはにこやかな表情のまま続けた。

「ボクは親切心で言っているんです。ここは素晴らしいオークションだ。珍しい品々、本来なら価値を見出されない物たちが行き交っています。だから、こんなモノを売るなんてあんまりだと思っただんです。売る方にも、買う方にもケチが付く」

出品者が、イライラしたように「おい、お嬢ちゃん」と穏やかではない様子でリンに近付こうとする。黒服の者たちが止めようとするものの、魔物を捕えたのはこの男であるようで、歯牙にもかけず突き

飛ばされ、尻もちをついていた。

「おう、なんだ。うちの『姫』が喋ってんだぞ。お前さんにケチが付かないようにな」

「カンダタ……い。てめえ、ガキの教育はちゃんとしやがれ」

顔見知りなのか、隣に座っていた覆面パンツがリンと男の間に割つて入る。睨み合う二人を他所に、リンは相棒のすべらかなたてがみを撫でつつ、「ボクが引き取ってあげましょうか」と変わらず穏やかな口調で、いかにも親切そうに提案した。

「この通り、ボクは魔物に詳しい。商品になると思ってたならなかった心中、お察しします。ですが、先ほども言った通り、アレでは商品にならない。処分も御面倒でしょう」

男はカンダタと、幼いけれど肝の据わった少女、それからその傍らにいる艶やかな毛並みの魔物を順繰りに見た。

カンダタの表情は覆面に隠れているが、その目には怒りもなければ、嘲りもない。あるのはただ、愉悦。実際に、彼は今の状況を楽しんでいた。

少女は変わらず、穏やかな表情を浮かべている。「闇オークションにいる」少女としては場違いなほど冷静で、恐怖を押し殺しているような感じもない。

魔物については、分かりやすくこちらを威嚇していて、男はむしろ、そのピリついた雰囲気になんか安心すら覚えた。

「当事者」から微妙に外れており、男と戦闘になったところで全く困らないであろうカンダタはともかくとして、幼く、小さな少女の異様さはなんだ。

男は彼女に興味を湧いた。

「お前、名は？」

「ボクはリン。こちらはギョギョです」

「そうか。俺はゴロステ。そんなに言うなら、アレは出品を取り下げる。それで、お前にやろう」

ゴロステと男が名乗ると、カンダタはリンへそつと「大昔の大盗賊の名前を勝手に名乗ってるだけのやつだぞ」と耳打ちした。当然、ゴ

ロステにも聞こえていたが、彼は話が進まないと察して、咳ばらいをしてから言葉を続ける。

「オホン！ その代わり、別の魔物を調達してこい」

「え、嫌ですよ。ボクは死にゆく魔物を引き取るだけです。この状況ではもう誰も買わないでしょうから、出品と取り下げるのは賢明な判断だとは思いますが。でも、ボクに条件を突き付けてくるのは納得がいきません」

「それなら、この場でアレを殺しちまってもいいんだぞ!？」

「どうぞ自由」

呆れたようにため息を吐いたリンは、ギコギコを見つめてから意味深長な視線をゴロステに向けた。

「ですが、ギコギコも魔物。同胞が痛めつけられた末に殺されたとなれば、アナタにどんなことをするのかは分かりません。しかも、彼は訓練された魔物ですから、野生の魔物よりははるかに強いでしょう。ボクの言うことは聞きますが、怒りに支配されていれば、それも分かりません」

ゴロステはその言葉に、直後に見たギコギコの殺気立つ視線に、怯んでしまった。

「ツチ！ いいさ、あんな死にぞこない！ 持ってけ持つてけ！」

「はい。責任を持ってお預かりしますね」

話がまとまり、リンはすぐにかわいそうなキラパンサーの元へ駆けつけ、ギコギコとカンダタを連れて会場を裏口から出て行った。ちなみに、子分たちはめぼしい物があるかもしれないとのことでは会場に待機させられている。

「知らなかったぜ。魔物つて戦えなくなると死ぬんだな」

「そんなわけないじゃないですか。僕の魔法では抜かれた牙や爪までは回復しないかもしれませんが、普通に生きると思えますよ」

「……お前、ワルだなあ……」

「今のところ、『盗賊のリン』ですからね。ワルにもなりますよ。じゃ

あ、すみませんがボクはこの子を連れて先に離脱します。あのゴロス
テって人に、この子の元気な姿を見られてはよくないでしょうから」
「おう、俺様も行くぜ。お前はどこで何をやらかすか分からんから
なあ。ちよつくら子分共に言ってくる」

こうして、リンはカンダタと二匹のキラーパーンサーと共にアジトへ
と戻ってきた。ちなみに、リン自身はこのアジトの換気の悪さと盗賊
たちの不潔さがマッチしてしまった結果の悪臭が大嫌いなため、アジ
トに戻ったときは仮面を外して口元に布を当てるようにしている。

「怖い思いをしましたね。ベホイミ」

ぐったりと、威嚇する元気もなくなっていたキラーパーンサーへ回復
魔法を掛けるが、体力の消耗が激しいのか、魔物そのまま眠りにつ
いてしまった。

「ギコギコ。この子の食べられそうな物が分かるかな？」
「なうん！」

キリツとした顔で外に飛び出していった相棒の後姿を見て、リンは
くすつと微笑む。それから、温めた濡れ布巾で、汚れ切った魔物の体
を拭いてやった。

「この子……女の子ですね。名前を考えてあげなくちゃ」

リンは偽名を考えるときに浮かんだいくつかの候補を口に出しな
がら、真剣な顔をして魔物の顔を見つめる。

「プツクル、チロル、モモ……うーん、どれも似合うかな」

「キバナシとかツメオレでいいんじゃないかねえの」

「最低です」

カンダタの茶々をばつさりと切り捨てると、リンは魔物のたてがみ
をひと撫でして「プツクルかなあ」と、「相手に見せつけるため」では
ないやさしい視線を向けた。

「プツクルが一番、元気ではつらつとした感じがします。チロルとモ
モはちよつと可愛らしすぎる感じもしますからね。甘やかしてやり
たい気はしますが、それを望むかどうかは彼女次第ですし」

「ふーん。じゃあ、そのプツクルの面倒はお前が見ろよ。今後、ゴロス

テの野郎と鉢合わせたとしても、お前が全部責任取れ」

「それはもちろんですよ。それに、『飼う』だなんて僕は思っていないせ
んから。彼女が望めば一緒にいますし、望まなければ野生へと戻って
いけばいい。それだけのことです」

「……リンクス、お前、いくつだっけ?」

「七歳です。それが何か?」

「いや……なんつーか……お前はガキだけど、大人だなと思ってよ
……。お前絶対育ちいいだろ。盗賊やるならもうちよつと下品に
なつた方がいいぞ」

少女のふりをした少年は、年相応に、屈託なく笑った。

「よく言われます。でもボク、これが楽なんです。まあ多分、『悪ガキ』
の演技は得意ですよ」

——だって、大好きな人のまねをするだけだから。

離れていても忘れることのない話口調、声のトーン、表情、仕草。
ずっと追い掛けていた。今でも追い掛けている。その人になれない
ことを知ってはいても、きつと永遠に揺らぐことのない憧れであり、
目標。

「カンダタさん、思い出したことがあるんですが……。グランバニア
の北に、山に囲まれた塔があるそうなんです。噂では、そこは邪悪な
魔物が巣食うとか、貴重な財宝が眠っていると、太古の昔に封じら
れた魔具があるとか。全て眉唾物ではありませんが、グランバニアは閉
ざされているそうですし、光の教団に向かった人たちはまだ戻ってこ
ない、闇オークションでも手掛かりはなし。ということ、暇つぶし
がてら行ってみませんか? もちろん、情報収集も並行して」

「あのなあ。このカンダタ、お前みたいなチビに指図される覚えは
ねえぞ」

「ボクはまだチビかもしれませんが、それでもあなたのビジネスパー
トナーであり、依頼人でもありますよ」

「……いつかそのよく回る口のせいで危険な目に遭うぞ、お前。絶対
だぞ」

「御忠告どうも。気を付けます」

つんと顔を逸らした少年だったが、依頼人、子分たち、同業者など、それなりに多くの人間を見てきたカンダタは思った。こいつ絶対、気を付ける気ないな、と。

*

サラボナへの道中はとても平和で、僕たちは船員のみんなにお礼を言って、大きく手を振ってから、サラボナで一番大きなお屋敷へと向かった。

「ワンワン〜」

屋敷の扉をたたくと、開いたと思ったら大きくて白い犬に押し倒される。ゲレゲレとはまた違った違った手触りの毛並みだなあ、と僕はその犬を押しつけることもなく、やわらかくてふわふわとした感触を堪能していた。

「ホラ、どきなさいよりリアン。どこの誰かは知らないけど、一応お客様でしょうから」

「ワン」と返事をしたりリアンと呼ばれた白い犬が退くと、派手な格好をした女の子がいた。癖のある黒髪を高い位置で結っていて、緑がかかった透明感のある青いつり目、丈の短いワンピースを着ている。僕はその女の子に見覚えがある気がした。

「……アンタたち、『ソロ』と『アンドレ』でしょ。フローラからの手紙で聞いたわ。上がりなさいよ。パパとママがアンタたちに会いたがってたから」

つん、と顔を逸らした女の子は、多分、フローラのお姉さんだろう。見覚えがあるのも、昔アルマを助けた船の持ち主の娘だったからで間違いないようだ。フローラも、それで僕を覚えていると言っていた。当然、あの時のフローラより大きかったお姉さんと、彼女の両親はやはりつきりと「パパスの息子であるリュカ」を覚えていると思っただけ、僕は少しだけ、気を引き締めた。

「おお、君たちがフローラの言っていたソロ君とアンドレ君かね！
さ、座りなさい。ぜひ君たちに会いたいと思っていたんだ。こんなに
早く会えるとは、うれしいよ。知っているかもしれないが、私はフ
ローラの父親のルドマンという。妻と、娘のデボラだ」

ふくよかで気さくな雰囲気のルドマンさんと、彼に寄り添うように
にこにこ笑みを浮かべる優しそうな奥さん、こちらを値踏みしてい
るように見えるデボラさんは、親子と言われてもあまりに似ていな
い。まあ、デボラさんだけじゃなくてフローラとも御両親は似ていな
いし、ビアンカも両親とはあまり似ていなかったし、そういうことも
あるのだろう。

「初めまして。僕はソロです」

「オレはアンドレです」

お茶と王宮で食べていたような高級そうなお菓子が運ばれ、僕らは
ぺこりと頭を下げた。

「うむ、うむ。フローラの手紙で、君たちには大変世話になったと聞い
ているよ。『神の塔』へ冒険に行くなんて、まさかあのフローラがそん
な大冒険をするとは思わなかった。君たちは娘にとっていい刺激に
なったようだ。冒険の中で娘を守ってくれたことも含めて、お礼がし
たい」

「そんな、僕たちだって、フローラに助けてもらいましたから」

「わっはっは。遠慮はいらないさ、君たちの求めている『天空の盾』は
やれんが、できる限りのことはしよう」

その言葉に、僕たちは思わず目を見合わせる。そうだ、「天空の盾」。
もちろん忘れていたわけではないけれど、フローラの家族に会えたこ
との方が先行してしまっていた。

「あの……フローラからどこまで聞いているか分かりませんが、オレ
たち、大恩人の遺言で、天空の勇者と、その人が身に着ける装備を集
めているんです。どうしても、お譲りいただけませんか？ もちろん
ん、ただで欲しいなんて思ってもありませんから」

「ふむ……」

ルドマンさんは顎髭を撫でて少し考える素振りをした後、家族と使用人に部屋から出て行くよう促し、僕らに悲しげな視線を向けた。僕はその視線を、まっすぐに受け止める。

「ソロ君。君のお父上はパパスという名だろう。君自身、その名前は本当の名ではないのではないかね？ ああ、これはフローラから何かを聞いてそう思ったわけではないよ。君が覚えているかは分からないが、君が幼い頃、君の父上と君、それから海に溺れていたという女の子を私の船に乗せたことを、私はよく覚えている。あの時、君の父上は小さく船に上れなかったフローラを抱き上げて乗せてくれたね」
「やっぱり、と僕は思った。だから、静かに懐かしむように語るその人の言葉を、遮りはしなかった。

「アンドレ君。君の言う『大恩人』はパパス殿のことだろう。風の噂で、パパス殿が『天空の勇者』について調べていることは知っていた。だが、『天空の盾』は我が家の家宝であると同時に、娘たちの物なのだよ」

家族なのだから、家宝を継ぐのはフローラかデボラさんのどちらかになるというのはよく分かる。けれど、ルドマンの真剣な眼差しの中には、それ以外の意味も含まれているような気がして、僕はそのことを指摘できなかった。

「だから、私は昔からあの盾を譲るのは、私が認め、娘たちのどちらかと結婚して我が家の婿となる人物と決めているのだ。そういうわけで、譲るわけにはいかない。もちろん、本物の『天空の勇者』が現れたら、それは世界が闇に覆われるとき。本来の持ち主に盾を返すことは厭わんがね」

ふう、と息を吐いたルドマンさんはメイドさんに出されていたお茶を飲み、一息ついた。

「光の教団の噂は私も聞いているし、フローラに『塔に残ったシスター』と『光の教団の恐ろしさ』も聞いた。光の教団が世界の『闇』で、今こそ我々の平穏を脅かさんとしているのなら、なぜ『勇者』は現れ

ないのだろうか？ 伝説では、『世界が闇に覆われるとき、闇を打ち払う勇者もまた生まれる』とあるのに……。今がそのときではないということだろうか」

「僕たち……」

ぐつと拳を膝の上で握る。

『勇者』はまだ自分のことに気が付いていないんだと思います。でも、探し出せたのなら、すぐに次の行動に移りたい。だから、『天空の装備』を揃えておきたいんです」

僕がそう言うと、ルドマンさんは眉を八の字にして、口を開きかけた。そのとき、ヘンリーが手を上げて「まあまあ」と先に話を始める。「ソロの言うことはオレたちの考えですが、オレとしては『所在が分かっていればいい』という部分もあります。持ってたつてオレたちには使えませんからね。『天空の兜』だって、テルパドールにあることは分かっている。当然ながら、勇者でもなんでもないオレたちには譲ってもらえませんでした。でも、今思い付いたんですが、一か所に集めておいて、万が一魔物に襲われ、全て奪われたら、それこそどうしようもない」

ヘンリーはニツと僕に笑い掛け、それからルドマンさんを真剣な目で見つめた。

「身勝手なお願いですけど、だから、ルドマンさんには、『そのとき』が来るまで盾を誰にも譲らないでほしいんです。もしもフローラかデボラさんが結婚することがあれば、呼んでください。世界のどこにいても駆け付けますから。どこの誰が持っているか分かれば、オレたちも安心して旅を続けられる」

ヘンリーを見つめ返していたルドマンさんは「わっはっは。やあ、ゆかいゆかい！」と膝を叩いて笑い始めた。目には涙まで浮かべている。

「君たちは、だったらフローラかデボラと婚約したい、とは言わないのだね」

「そりゃ……家宝目当てで結婚って、失礼すぎますよ。オレたちまだ

子どもだし。こんなこと言ったら不愉快かもしれませんが、フローラは妹みたいなもんだから、結婚するなら幸せになつてほしいし、好きな人と結婚するのが一番だと思います」

「僕も、フローラだってデボラさんだって、結婚相手は自分で決めた方がいいと思います」

そう言うと、ルドマンさんは目元の涙を拭って、今度は「父親」の顔で微笑んだ。ただ、僕がお父さんに向けられていたものとは少し種類が違うような気がするけれど。

「そう言つてくれるかね。まあ、結婚してから芽生える愛もあるとは思うが……。ともかく、私は君たちを気に入つたよ。盾はやれないが、私で役に立てることがあれば、融通しよう」

僕たちは、グランバニアの現状と、石化したみんなを元に戻したいこと、仲間を探していること、光の教団や人々を苦しめる魔物をどうにかしたいこと、魔界に連れ去られたという母について手掛かりを得たいことなどを伝えた。当然、それらを全てどうにかしてほしいというわけではなく、何か知つていることがあつたら教えてほしい、という意味で。

「君たちが子どもながらに、いろいろなものを背負つて旅をしていることはよく分かった。『隠していたいこと』も多いだろうに、話せる範囲で、話しにくいことも話してくれたこと、うれしく思う」

ルドマンさんは机の上を、指でトントンと叩くと、考え込むように突然沈黙した。

僕らが話したのは、僕がグランバニアの王子であること、ヘンリーがラインハットの第一王子であり、探している彼の弟が第二王子であること以外のほとんどだ。

フローラの父親であるだけでなく、少し話した感じで僕にはルドマンさんが「善い人」に思えた。子どもだからと侮られ、騙そうとしたり軽んじたりする人の多い中、ルドマンさんは僕らを「フローラの友達」として接し、「子ども」という土台はありながらも「人」として接してくれている感じがしたのだ。

「ひとつずつ、今の私が言えることを伝えていくとしよう。まず、石化した人を戻す道具といえば『ストロスの杖』だが、アレは強力な呪いを一度解くと壊れてしまうと聞く。本当にあるのかは別として、可能性があるとすれば『時の砂』か……。ともかく、残念だが君たちに『コレだ』と言えるような物を今のところ私は知らない」

僕は肩を落とすこともなく、頷いて話の続きを促した。

「次に、仲間の話だったな。茶髪の少年と若いキラパンサーならば、少し前に私の所有するカジノ船で、海に溺れた少年と魔物を保護したという報告を受けた。君たちの尋ね人は分からないが、魔物は少年に随分懐いていて大人しく、溺れて衰弱していたはずなのに、少し休んでカジノで大勝ちして、溺れていた彼らを助けた荒くれ者と共に船を降りて行ったそうだよ」

「……！ よかった……」

ヘンリーが安堵と喜びにうつつすらと涙を浮かべ、それ以上は言葉にならないというように震えながら俯く。僕も、その少年と魔物が、デールとゲレゲレであることを確信していた。デールは僕らとよくカードゲームをしていたし、ヘンリーがゲレゲレに協力してもらおうイカサマ方法を編み出して、そのやり方をよく知っている彼がカジノで大勝ちするのは全く意外なことではなかったから。

「残念ながら、今彼らがどこにいるのかは分からない。ただ、荒くれ者の方は、滅法弱い賭け事は好きなようで、カジノ船にはよく来るそうだ。入れ違いがないよう、私からカジノ船の従業員たちに魔物を連れた少年を見掛けたら、君たちが探していたと伝えるよう言っておこう。そうだな、私のところにも連絡を入れるよう指示しておく」

「僕たち……今、本当に、何とお礼を申し上げればいいのか分かりません」

「わっはっは！ さっそく役に立てそうで何よりだ！ しかし、その次の話題についてはあまり役に立てそうにない。グランバニアのオジロン陛下が世界に向けて『光の教団』の脅威について伝えて以来、どうにも表立った行動がないようだな。私も目を光らせているが、今のところ信者にすら会ったことがないのだ」

ルドマンさんは「そして」と僕をじつと見た。

「魔界に連れ去られた君の母上のことだがね。これでも私は若いとき、君たちと同じように旅をしていた。商人として経験を積むために、珍しい品々を自らの力で見つけるために」

懐かしむような顔になったその人は、一口お茶を飲んでから、ふう、と息を吐いた。

「そこで、エルヘブンという村——集落と言うべきかな。隠れるように住む、神秘の民がいる場所へ辿り着いた。私が探し求めたのは『命のリング』という聖なる力の宿る指輪なのだが、あまり教えてはもらえなかった」

言葉を切って、ルドマンさんは僕らに「君らも遠慮なく飲んでくれ」とお茶を飲むことを促してくる。僕らがその言葉に従って喉を潤すと、彼はようやく話し続きの始めた。

「私がそこへ向かう前に集めた情報によると、エルヘブンの民は魔界の封印を守る一族らしい。ゆえに独特な掟があり、閉鎖的で、伝統を守り、伝説に従い、強力な魔法の力を込めた様々な道具を『いつか来るその日』のために受け継いでいるらしい。行くにはかなり面倒な場所だった記憶があるが、君たちにとって、行く価値のある場所だと思う。どうかね？」

エルヘブン。その地名になんだかざわざわと胸が騒ぐ。けれど、それはルドマンさんから前に進めそうな情報を一気に聞けたから、その興奮のせいかもしれない、と思った。だって、そんな場所、今初めて知ったのだから。

「ありがとうございます」

僕らはどちらからともなくお礼を言って、それからはフローラとの冒険の話をした。ルドマンさんがとても知りたがったからだ。

その日は、「聞かれたくない話もあるだろうから」と、ルドマンさんの別荘の一つを借りて、僕らは興奮気味にこれからのことをたくさん話した。

デールとゲレゲレが生きていた。それだけで、何事にも代えがたい

くらいうれしいのに、八方塞がりかもしれないと思っていた旅の、次の行き先まで決まったのだ。ルドマンさんには本当に、感謝してもしきれない。

ただ、ただうれしくて、僕らは興奮冷めやらぬまま、眠りにつくこともできずに夜を語り明かした。

まもののすむばしよ

ビアンカは、自分では認めないけれどちよつぴり怖がりな女の子だ。お化けだつて怖いし、魔物だつてもちろん怖い。しかし、それが立ち向かえるものならば、我慢ができる。程度は違えど、多くの人がそうであるように、彼女もまた、そうだった。

「こ、子ども……!?!? が、がおー! こんなところで何をしている! 食べちゃうぞ!」

「……………」

見知らぬ魔物だ。この辺りの地域では見掛けない、体が大きな一つ目の魔物である。体を覆う茶色い毛皮はみるからにふかふかしていて気持ちが良いさそうだ。

そんな魔物が牙をむいているというのに、ビアンカは全く怖くなかった。付け足せば、慣れていなさそうな脅し文句を言っている魔物に対して、聖母のような優しい視線を向けている。

「へたつぴー! そんなんじや、いくら子どもだつて怖がるわけないさ! こうやるんだ、ガオー!」

今度はちよつと頭の悪そうなドラゴンっぽい魔物が出てきた。

「あの、怖くないわ」

ビアンカは思わずそう言ってしまった。

「私、知っているもの。魔物だつて、優しい子もいるつて」

にこり。可憐な美少女の、邪気のない笑みを見て、魔物たちはうろたえるように周囲を見回した。

「それじゃ困るんだよお。出てつてくれないとさあ」

「馬鹿! 余計なこと言うんじやないよ! お嬢ちゃん。魔物は怖いもの、そんなの当たり前のことさ。あたしらだつて、ちよつと本気を出せば……………」

一つ目の魔物が、大きな目をうるうるさせながら言うと、その大きな体を、ドラゴンっぽい魔物が尻尾でたたく。ビアンカはくすくす笑

いながら、「あなたたち、お名前は？」と彼らの発言をさらりと流して首を傾げた。

「私はビアンカよ。ここへはアベルっていう黒髪で赤い眼をした男の子を探しに来たの」

「アベル……？　黒髪で赤い眼をした男の子って、もしかして……」

「ゴホン！　あたしはカンデラさ。ビアンカ、なぜその男の子を探しているんだい？」

一つ目の魔物が何かを言おうとして、カンデラと名乗ったドラゴンっぽい魔物が遮る。なまずのようなひげをぴくぴく動かしながら、カンデラは外見とは裏腹に、目には知性を宿してビアンカを見つめていた。

「話を聞きたいのよ。私、お母さんが病気になっちゃって、どうにかして助けてあげたいの。アベルは私に、お母さんの病気をよくする薬の材料をくれたから、病気を治したり、治せないまでも、進行を遅らせたりする方法を知ってるんじゃないかと思って」

「そりゃ諦めな、お嬢ちゃん。医者でもなんでもない男の子を頼るってことは、医者や薬師には見放されてるってことだろ？」

カンデラという魔物は、女性とも男性とも分かりにくい声と口調である。人間のよう話すことに適していない口から出される声はどこかくぐもつたような、掠れたような、がさがさした聞き取りづらさがあった。大人数でごちゃごちゃと話していれば、何度も聞き返してしまうような不明瞭さ。

しかし、カンデラの言葉は、人の気配がしない古代の遺跡の中で妙に静かに響き渡り、ビアンカの鼓膜へ正確に届いた。

「べ、つに……お医者様や薬師のおじさんに何かを言われたわけじゃないわ。私が、お母さんに何かをしてあげたくて、アベルに聞いてみようって思っただけだから」

「子どもってのはさ、敏感だアね。それも、大切な人のこととなると、余計に。大人は悟らせまいと必死に隠してることだって、簡単に嗅ぎ付けちまう。そりゃ、医者や薬師は子どものビアンカお嬢ちゃんに真実を伝えるはずもないさ。親は何と言った？　その分だと、何も言わ

れてないんだろ？」

カンデラはぺたぺたとビアンカへ近付き、顔つきとは裏腹な鋭い視線で、幼く健気な少女を射抜く。

ひゆう、とビアンカは己の呼吸を、その魔物に奪われてしまったような錯覚を覚えた。もちろん、それは錯覚だ。けれど、どうにも呼吸が苦しい。医者、薬師の、彼女を見る気の毒そうな顔が。両親の申し訳なさそうな顔が。あの夜の聞きたくない言葉が。

ビアンカの胸を締め付け、不安を増大させ、視界を涙の膜でぼやけさせる。

「賢い子は、いつもそうだ。人一倍、苦勞と不幸を背負いこんじまう。もう一度言うよ。医者に見放されてるような病人を、名前と外見しか分からない男の子に何とかしてもらおうって言っても、そりゃ無理な話さ。もうここには来ないことさね。あたしらは気のいい魔物だが、他の連中に見つかるはず。さあ、出てった出てった！」

残酷な現実を受け止めたくなくて、ビアンカは当初の予定を達成しないまま、遺跡から逃げるように出て行った。荒くなった呼吸が、全然もとに戻らない。苦しくて苦しくて、咳き込む。

——じゃあ、どうしろって言うのよ！

泣き叫びたいのを堪えながら、彼女は一度、大きく息を吐いた。

「いいわ、南へ行く。こうなったら『オラクルベリー』とやらで、情報を集めようじゃないの！」

魔物を倒しながら歩いてきたから、キメラの翼を買う余裕くらいはある。ふんつ、と鼻から息を吐いて、日本の三つ編みをしっぽのように跳ねさせながら、少女は大股で歩いた。

できたばかりの橋は、確かににぎわっていて、アルカパやサンタローズののどかな雰囲気とも、復興で盛り上がっているラインハットとも、また違った活気がある。

「あつ、あの子……なあんだ、人違いか」

アベルと似たような背丈をした黒髪の男の子を見掛けた気がしたけれど、顔立ちも目の色も全然違った。ビアンカは、カンデラに言わ

れたことを忘れるために、必死で行き交う人々を観察し、ときには話し掛けていく。有益な情報はないながら、有名な占い師がいるというオラクルベリーへ向かった。

「探し人については、お前が行ったことのある場所に現れるよ。薬のことは古きに身を寄せる隠者に聞くとよからう。……それから」

占いババと呼ばれる老婆へ、知りたいことを矢継ぎ早に話してから、ドキドキしていた気持ちで結果を聞いていたビアンカは、ふいにじつと見つめられて首を傾げた。占いババの正面に置いてる水晶には可愛らしい少女が少し歪んで映っているだけで、何か特別なものが浮かび上がるというようないでもない。

「お前さんもまた、不思議な運命を背負っているね。しかし、大きな悲しみの渦に何度も飲み込まれて、それでも希望を目指す芯の強さと優しさが、お前さんにはある。つらいときは優しい人を、苦しいときは勇気をくれた人を、悲しいときはお前さんより悲しんでいる人を出すと良い。お前さんの在り方もまた、誰かのつらさを、苦しみを、悲しみを晴らすだろう」

「よく分からないけれど……分かったわ。ともかく、アベルは私が行ったことのある場所に来て、薬については、えーと……隠者を探せばいいの?」

「お前さんがもつとも足を運びたくない場所にいるよ」

「あの、それって……人間よね? 魔物じゃなくって」

占いババは「カカツ」と笑い、しわくちやの手で、ビアンカの小さな手を包んだ。

「ああ、人間さ。心清き、運命の子よ。わしの言葉を、どうか覚えていておくれ」

いまいち理解しきれない話だったこともあり、ビアンカはこくんと控えめに頷くと、ババに料金を払ってオラクルベリーを後にすることにした。大きな町だけあって、オラクルベリーはまた陽も沈んでいないというのに酔っぱらった大人がたくさんいるし「将来有望」とか何とか言って、少女に「踊り子にならないか」とか「お金持ちになりた

くないか」とか、胡散臭い誘いばかりしてくる。

こんな町はとつと出て行った方がいいと判断した賢いビアンカは、キメラの翼を放り投げて、アルカパに戻った。

両親は心配してビアンカを抱きしめてくれ、その数日後に、娘に引越しを提案した。

「母さんの体調のためにも、空気の良いところがいいんじゃないかと思つてな。山奥の村に引越そうと思うんだ。買い物の面など、少し生活が不便になる面もあるかもしれないが、いいところだよ」

「空気も水も、食べ物も美味しいってんで、母さんから頼んだんだよ。しかも、毎日温泉に入りたい放題さ！ 素敵だろ？」

嘘だ。ビアンカは直感した。母は宿屋の女将という仕事が好きだったし、ビアンカの目から見ても、誇りを持って働いていた。父だってそうだ。大きな宿屋の経営を、従業員たちの生活のことも考えながら、手堅くやっていた。それなのに、それらを手放して山奥の村に移り住みたいなんて。

「それ——いつの話？」

「宿のこともあるからねえ、一か月後くらいには引越せたらいいと思つてるよ。サンタローズの人たちには世話になつてるし、そのうち挨拶に行かなくちゃあね」

「それなら、私、一か月間は毎日冒険に出掛けてもいい？ 絶対に夜まではないは帰ってくるから。ねえ、いいでしょ？」

両親は顔を見合わせた。キメラの翼は価格が高騰しているとはいえ、魔物を倒す力のあるビアンカにとっては毎日一枚買えるくらいの値段である。これ以上値が上がれば子どもが自分の小遣いで購入するには厳しくなるかもしれないが、生憎、ダンカン夫妻はお金には困っていない。

「しかたないね。ただし！ 怪我をしたり体調の悪かったり、本調子じゃない日は出掛けないこと！ 夕飯までには絶対に帰ってくること！ いいね？」

ビアンカは子どもだけけれど、両親は知っていた。彼女が「レヌール

城のお化け退治」をしてから、冒険の心得をわきまえていて、無茶をしなくなったことを。

そして、両親は知らなかった。ビアンカが使う予定のキメラの翼は、一日一枚ではなく、二枚であること。危険だとラインハット地方の人々が噂して近寄らない古代の遺跡に乗り込む気満々であることを。

*

プツクルは人間にこそ懐かなかったが、同じキラーパンサーであるギコギコに対しては甘えを見せ、よく後ろを付いて回るようになった。リンクスが危惧していたように、抜かれた牙は元には戻らなかったけれど、爪はきれいに生えそろう、戦闘にも徐々に参加している。「リンちゃんにくらい懐いてもいいのになあ」

「別に懐かれなくたって構いません。食べ物もギコギコが用意すれば食べるし、今はふつくらしてきて、以前より毛艶も健康的になりました。それで十分じゃないですか」

カンダタ子分の一人が呟くと、ふつと微笑みながらプツクルを見ていたリンクスがそう答えた。ちなみに、彼らはプツクルの体調回復を待ちつつ、グランバニアの北にある塔について調べている最中だ。

グランバニアから大きな湖を船で渡った先にあるその塔は、近くにある教会で生活する神父によれば、以前までは「お宝が眠る」という細々とした噂があり、冒険家や盗賊などが目指すこともあったそうなのだ。

しかし、宿替わりに使われていた教会を訪れる人々も、塔から帰ってきて「大したものはない」と愚痴る人々もめつきり減り、後者に関しては一人もいなくなってしまうたそうで、神父としては「何か良くないことが塔で起きているのでは」と心配しているらしい。

「塔に向かったやつらが帰って来ねえってのは、引っ掛かるな。強い魔物が棲み始めたのか、グランバニアみたいに何かしらの呪いに掛かっちゃまったのか」

自分からの報告を受けながら、カンダタが顎に手をやり、思案顔をする。ちなみに、まだ仕事ではないため今は荒くれ者の恰好をしていて、覆面パンツではない。リンクスは、「普通の恰好をしていればただのおじさんなのにな」とビジネスパートナーを冷えた目で見た。

「お、なんだ？ リンクス。俺様になんか言いてえことでもあんのか？」

「いえ……別に……言いたいことは最初に言いましたし……」

カンダタ子分たちが、リンクスが女装をしていなくても「リン」と呼ぶのに対し、カンダタ本人は「リンクス」と呼ぶ。ゆえに、たとえ変態だとしても、リンクスにとってはカンダタが一番気安くて話しやすい相手となっていた。

「うーん……光の教団に向かったやつらも帰って来る気配はねえし、ここは慎重になった方がいいかもな。塔に行ってみなけりや始まらねえが、深入りはせず、ちまちま調査するか」

そこで、カンダタは子分の一人と、リンクスとギコギコ、それからギコギコについてきたプツクルを伴って、北の塔へ向かうことにした。

「禍々しい雰囲気ですね。呪いというよりは……」

「ヤベエ魔物がいるときの雰囲気だな。まっ、俺様たちは盗賊。魔物とやり合うことにやあ興味はねえ。お宝が見つかったらとつとトンスラこくだけさ。リン、お前、リIMITが使えたな？」

カンダタの言葉に頷くと、リンクスはギコギコを見た。毛を逆立て、警戒心を露わに塔を睨みつけている。その後ろにいたプツクルはというと、尻尾をしょんぼりさせて、ぶるぶると震えていた。

「……やつぱり、プツクルにはアジトで待っていてもらおうか。ギコギコ、一緒にいてあげてよ」

リンクスがプツクルに向けて微笑み掛けると、ギコギコは警戒はそのままに、「ウガア」と不満げな声を上げた。彼の本当の主人がよく言っていた「離れたくない」という言葉は、もちろんギコギコ——ゲレゲレにだって刻み込まれている。

「にや、にやうん！」

リンクスが判断に迷っていると、プツクルが声を上げた。牙の抜けた口で少年の手を甘噛みすると「馬鹿にするな」とでも言うように、尻尾を膨らませてみせる。それを見て、リンクスはふっと笑い、ようやく触れさせてくれた新しい「仲間」のたてがみを優しく撫でた。

「ごめんね。プツクル、君は強い子だ。一緒に行こう」

北の塔——魔物の間ではデモンズタワーと呼ばれるその塔には、「悪魔」が棲みついていている。そいつは破壊を好み、力と恐怖を振り撒き、魔物からも恐れられ、幽閉されていた。

オオオオオオオオ……。

悲鳴のような、慟哭のような、はたまた呪詛のような。獣の鳴き声というには不快で不安を煽るその声は、どうにも塔の上の方から聞こえてくるようだった。

「上は近付かねえ方がいいな。行くにしても、この塔を調べ尽くして、情報を十分集めてからだ」

リンクスとカンダタ子分がその言葉に頷いたのを見て、カンダタは先頭を切って塔の中へと足を踏み入れる。

カンダタが求めるのは、スリルとロマン、それから子分たちを十分に食わせていくための金と、ときには娯楽。どうして盗賊だなんて稼業を始めたのかは覚えちゃいないが、彼は悪運の強い男で、これまであらゆる困難を乗り越えてきたし、目的に達しないまでも、生きながらえてきた。それは悪運だけの問題ではなく、危機管理意識や本能的な直感に優れていることに起因する。

「いいか、お前ら。はぐれたとしたら、絶対に塔の外を目指せ。お宝は二の次三の次だ。残ったやつらも、誰か一人がはぐれた時点で外を目指す。いいな？」

大胆かつ、慎重。リンクスにとっても、彼が臆病風に吹かれているようには見えなかった。魔物とは何度も戦ったことのあるリンクスだが、しかしカンダタのように自ら魔物の巣食う場所へと探索へ出掛けたことはない。普段は憎まれ口をたたいていても、この場において

はカンダタの言葉は絶対だということを、賢い彼は肌で感じ取っていた。

塔の魔物は手強かったが、前衛のカンダタとギコギコ、彼らを補佐する子分とプツクル、全体を見て必要なところに補助や回復を施すリンクスというメンバーは意外にもバランスが取れていて、危なげなく塔の中を進んでいた。

「ツチ、メガンテの腕輪か」

ようやく見つけた宝箱を開けたカンダタが、舌打ち交じりに腕輪をリンクスへと投げて超越す。

「俺様はそのテの魔法が大嫌いだな。煮るなり焼くなりしていいから、お前が持つてろ」

「構いませんが、何か理由が？」

「理由？ そんなもんは別にねえさ」

カンダタは吐き捨てるようにそう言った。腕輪を受け取ったリンクスが袋の中に仕舞ってから、油断なく周囲を警戒しつつ、カンダタへ質問を重ねる。

「そういう風には見えませんでしたけど」

「——俺様は生粋の盗賊だ。全ては自分のためさ。他人のため前提の魔法ってやつは、どうにもな」

その割に、彼は責任感の強い男だ。賭け事で金遣いは荒いくせに、子分たちを食わせていくことに頭を悩ませているし、怪我をした者には自ら回復魔法を掛けてやることも多い。

なんとなく矛盾を感じながら、リンクスは再び歩き出した覆面パンツの男の背を追った。

半日探索をし続け、一行は一度塔の外へ出ることにした。慎重に歩を進め、窮地に立たされることはないながらも魔物との戦いに疲弊した結果、カンダタが提案し、全員がそれを受け入れたのである。

「教会で休ませてもらいましょう。きつと、ボクたちの顔を見たら神父様も安心しますよ」

「じゃあ、俺様は外で寝るぜ。お前のせいで嫌なことを思い出した。

俺様は教会も嫌いなんだった」

「ええっ？　塔に入る前は普通に立ち寄ってたじゃないですか」

覆面を取って素顔をさらしたカンダタは不機嫌顔になって「入らん。俺様は外で寝る」と言っただけで聞かない。親分にそう言われてしまつては、自分もそれに倣うしかなく、リンクスは呆れながらもギコギコとプツクルを伴って教会に一晚泊してもらえるか交渉をした。

「もちろんかまいませんよ。それより、来るときに一緒にいた方々は……？」

「まあ、なんというか、機嫌を損ねてしまつたみたいで。彼らも建物の外にいますので、敷地内で休ませていただくことをお許しください」

神父はリンクスと彼らが喧嘩でもしたと思つたのか、くすくす笑われてしまう。リンクスはその微笑ましそうに見てくる視線からぶいっと目を逸らしながらお礼を言い、ギコギコのたてがみを撫でた。

「あなたは——魔物とも、仲が良いんですね」

「はい。この子はボクの友達であり、今は家族みたいなものなんです」
「良ければ、昔話をさせてくれませんか」

きよとんとした顔になつたリンクスは、ギコギコとプツクルをそれぞれに見てから、再び神父を見る。二匹とも特別な警戒はしていないし、神父もこれまでの印象と変わらず、穏やかそうな、どこか憂いを帯びた表情を浮かべたままだ。

「はい。聞かせてください」

神父は彼らにお茶と水を出し、椅子を用意して座るよう促した。

「これは昔むかしの、世界が闇に包まれ、いつか現れると言われた天空の勇者を人々が待つていた時代の話です」

リンクス——デールは、天空の勇者の物語には詳しくあった。当然である。彼らはその物語に出てくる「勇者」と、その人が身に付けていたという天空の装備を探していた。グランバニアの城にある文献は全て読み、立ち寄った町や村では情報を集めた。

今と同じく、天空の勇者が現れるのは「世界が闇に覆われたとき」、「闇を打ち払うため」。導かれし者たちと呼ばれる、ライアン、トルネコ、アリーナ、クリフト、ブライ、マーニヤ、ミネアの七名と共に旅

をし、魔王を打ち倒す物語。

「天空の勇者の物語は、五章に分かれた長いお話です。有名なのは、第五章である『勇者と導かれし者たち』の、勇者が生まれ故郷を魔物に滅ぼされて旅立ち、魔王を倒すまでの話でしょう。あなたは『ライアンの章』として、バトランド王国の戦士ライアンが勇者を探し求めた話を知っていますか？」

「はい。本で読んだことがあります」

「そうでしたか。それなら話が早い」

神父は優しい顔をしていた。

「戦士ライアンは、伝記や物語の上では一人で旅をしていたことになっていますが、実は仲間がいたそうです。その名も、ホイミン」

「……変わった名前ですね」

「ええ。ライアンは、魔物であるホイミスライムを仲間とし、共に勇者を探す旅をしていたそうなんです。あなたたちを見たら、そんな話を思い出しまして」

デールは、一瞬言葉を失った。勇者の仲間と魔物が旅をしていたことを公に記録できなかつた事情はなんとなく分かる。それならば、なぜ記録にないそんな逸話を目の前の神父は知っているのか。

「ええと、神父様は物知りなんです。そんな話、聞いたこともなかったし、本にも一言だつて書かれていませんでした」

ようやく捻り出した言葉と、疑念をはらんだ視線。デールは自分を諫め、すぐに無害そうで穏やかな笑顔に取り繕った。

「私の出身はグランバニアでして、グランバニアには、嘘か真か、こんな言い伝えがあります。すなわち、『導かれし者』のその後の話です」
「その後？ サントハイムのアリーナ姫とその家臣たちは国に帰り、踊り子マーニャと占い師ミネアも故郷へ戻り、トルネコは自分の店があるエンドールで商売を続け、戦士ライアンはバトランドへ、勇者は天空の城へ行つたと、物語の締めくくりは決まってそうになっていると思っていましたか」

故郷が滅ぼされてしまった勇者を除き、皆帰るべきところへそれぞれ帰り、その後は平和になった世界で幸せに暮らした、というのが通

説だ。それに、デールはグランバニアの王子でるリユカと共にグランバニア国史を学んでいた。それが天空の勇者にまつわる話であるならば、知らないわけがない。つまり、その「言い伝え」は所詮「言い伝え」でしかなく、信じるに値しない情報であることも、大いに想像できる。

それなのに、デールの心臓はバクバクと脈打っていた。

「ええ、ええ。その通りです。しかし、人生というものは旅が終わって家に帰ったからと言って終わりにはならない」

息を長く吐き、胸に手を当て、デールはなんとか落ち着こうとした。彼が感じていたのは恐怖でも、不安でもない。興奮である。

期待もしていなかったところに、とんでもない手掛かりが降ってわいてきたような。

「というのも、グランバニアという国は、戦士ライアンの子孫が興した国だと言われているのです。そして、戦士ライアンはホイミンに『友』であり『仲間』である証として、真実を記した手記——彼自身の冒険の書を渡したそうな」

「では、グランバニア王族の方々は戦士ライアンの——『導かれし者』の血を引いているということですか？　神父様はその手記をお持ちなんですか？」

ふるり、と神父は首を振って、目をきらきらと輝かせる少年とは裏腹に、さみしさを滲ませる視線を彼へ向けた。

「いいえ。ライアン自身にはかけがえのない真実でも、周りにとっては『魔物』と仲間であつたことは伏せたいでしょう。グランバニア王族の方が『導かれし者』の血を継いでいるという話も、血筋の正当性を持たせるための話かもしれませんし」

デールは明らかに落胆した。賢く、要領よく立ち回ってきた彼ではあるけれど、年相応の振る舞いをする事だってある。

「すみません、夢のないことを言いましたね」

がっかりと肩を落とした少年へ、神父は申し訳なさそうに言い、話を続けた。

「戦士ライアンとホイミンは旅の途中ではぐれ、その後再び出会った

そうですが、立場あるライアンのことを慮り、ホイミンはそつと姿を消したそうです。そして、人間以外の暮らす村の話聞き、そこへ移住したんだとか」

「それってまさか、『魔界』とか言いませんよね？」

神父の瞳にあつた憂いがやわらぎ、夢見る子どもへの慈愛に満ちたのを感じて、デールはサツと顔を赤くする。彼とて、何の情報もなければ「魔界」だなんて、あるのかないのか分からないお伽噺に出てくるような世界の話はしない。けれど、友人の母親がそこに攫われたという情報が彼にはあつたから、口について出てしまったのだ。

「その村の名前はロザリーヒル。天空の勇者たちが、魔王を倒すうえでとても重要な情報を得た場所だそうですよ。ただし、これも多くの物語には記されていない逸話です。先ほどもお伝えした通り、魔物に力を借りたとあつては、勇者たち本人がどう思つていても、周りかどう思うかは想像に難くないことですから。その村を守るという意味もあつたのでしょうか」

「……その村は、今もあるんですか？」

神父の落ち着いた対応に、冷静さを取り戻したデールは、目の前の男性の目をじつと見た。目は口ほどに物を語る。多くの大人に囲まれ、人の顔色をうかがつて生きてきて、人に化けた魔物に人生を変えられたデール少年は、何かを知りたいときほど、相手に本気で向き合うときほど、その目をよく見る癖があつた。

顔色、仕草、日頃の言動、性格、さまざまなことを観察し、敵か味方か、あるいはどちらでもないのか、利で動くか情で動くか、様々な情報を得る。

この神父の目は、どこかリユカに似ていた。慈愛、穏やかな気質、けれどどこかさみしきさや憂いを感じさせる深く、引き込まれるような瞳である。

「ロザリーヒルという名前の村は、今の世にはありません。しかし、その子孫たちが生きる村はあります」

「その村の名前は？　あなたはグランバニア王族と何か関わりが？」

神父は今一度、デールとゲレゲレ、プツクルの三者を見つめ、それ

から静かな口調でこう言った。

「その村の名前は、エルヘブン。人ではない、様々な種族を祖に持つ、伝統と掟が深く根付く村です」

その村の名前を、デールは聞いたことがあったような気がした。兄と二人で、大臣の不正を暴こうと夜に抜け出したときだ。リュカは眠っていたし、いつも気を張っているから寝かせておこう、ということになって、珍しく二人での行動だった。

たしか——その村は、リュカの母親の、生まれ故郷ではなかったか。オジロンは、リュカにその事実が漏れないよう、細心の注意を払っていた。知れば、彼はそこへ行かずにはおれなくなるだろうから、と。彼が成人したその日に伝えてやるつもりだ、と話していた。大臣は、あの薄っぺらい笑みを貼り付けて「それが良うございましょう」とか言っていたが。

デールには、歯車がカチカチと噛み合うような音が聞こえた気がした。

「私はグランバニア王族とは関係がありませんが、かつてロザリーヒルで伴侶を得たホイミンの子孫が、どうしても戦士ライアンの築いた国を見たいと飛び出した、家出者の孫なのです」

——すべてはつながっているんだ。

そして、それはどうにも、あの優しいリュカを中心に行っているような気がする。いや、そうとしか思えなかった。

でも、リュカは勇者ではない。彼が勇者なのでは、と何度も思ったことはあるけれど、天空の剣は彼を主だとは認めなかった。

「そして、その家出者は手記を持ち出していました、外の世界を見て、それが世に出回ることがないよう燃やしてしまったのです。だから私は手記を持っていませんし、実物を見たこともありません」

「そんなー」

悲鳴のような声を上げたデールに、プツクルがびくりと体を震わせる。驚かせてしまったことを謝り、少年は神父を責めても仕方がない

と理解しつつも、「勇者」への重要な手掛かりになりうる資料を安易に燃やしてしまったという彼の祖父か祖母へ、恨み言の一つでも言いたくなかった。

「手記はないとはいえ、私は寝物語に『戦士ライアンとその仲間ホイミン』の話を聞いていました。母にそうしてもらったように、あなたに語って聞かせることはできるでしょう」

デールはそのとき、いろいろと質問を重ねそうになって口を開きかけ、そして一度閉じ、己を諫めるために頭を横に振った。

「では、一晩だけ。ボクが眠るまで、そうしてください。神父様がお母上にそうしていただいたように」

その晩、デールは穏やかな気持ちで眠った。思わぬ情報に興奮して眠れないかもしれないとも思ったが、神父の語り口調は耳にすつと馴染み、恐ろしい魔物の棲むデモンスタワーのほど近くにある教会とは思えないほど、そこは優しい空気に満ちていた。

「師匠」

目の前の光景に、ビアンカは自分の口を手で塞いで、声を漏らさないようにただただ必死になっていた。

行きたくはないけれど、そこに手掛かりがあると云われたならば行くのがビアンカである。

古代の遺跡にもぐりこみ、魔物から姿を隠しながら奥へ奥へと、少しずつ冒険を重ねていた中、衝撃的なものを見てしまったのだ。

——ここは、魔物の村なんだわ。

まるで人間のように、魔物たちが生活を営んでいる。店もあれば、家族もいる。野生の魔物たちがつくる「群れ」ではなく、間違いなく、そこには「文化」があった。それも、様々な種族の魔物が、誰もかれも穏やかな顔をしているのだ。闘争本能などありませんという顔で。

「ここで何をしている」
「ひうっ」

突然声を掛けられ、ビアンカは小さく悲鳴を上げた。振り向けば、見たこともない恐ろしい魔物がいた。赤い体に青い髭と頭髪。巨大なヤギのような二本の角に、背中には蝙蝠のような被膜の羽根。顔は人間のようなのであるのに、下半身は蹄のついた獣のそれである。物語に出てくる悪魔のような出で立ちのその魔物の名前をビアンカは知らなかったが、本能的に「勝てない」と悟り、血の気が引いていく。

アングルホーンというその魔物は、逞しい腕を組んで、見定めるように少女を見下ろしていた。

「ここで何をしているのか、聞いているのだ」
「あ、あ、わたし、私……人を、探して……」

なんとか勇気を出しながら、幼い少女は「もしかしたら、話せば分かってくれるかもしれない」という希望を胸に抱いていた。だって、彼らは人間のように暮らしているじゃないか。前に出会ったカンデラという魔物と一緒にいた一つ目の魔物も、決して理不尽な暴力を振

るってほこなかった。だったら、この魔物だって、きつと。

「ここに『人』はいない。去れ！」

人ような顔を持つからか、カンデラのように聞き取りにくい声ではない。低く、はつきりとした活舌の言葉は、母以外の人には叱られ慣れていないビアンカにとつて、身を竦ませるのに十分な迫力だった。

「なんだア？ ガキがなんでこんなところにいるんだ？」

ビアンカの腰が抜けている間に、騒ぎを聞きつけた魔物たちがわらわらと少女の周りを取り囲んでゆく。

「ガキはすぐに周りに喋る。生かして外に出すわけには行かないだろう」

「見張りは何をしていたんだ。子ども一人に出し抜かれて、情けない」
そのうちの一匹に、ビアンカは細い腕を掴まれた。足が地面から離れ、宙ぶらりんになった状態で恐怖心はどんどん増してゆくばかりだ。でも——でも。

「ここに、私以外の人間はいませんか！ 薬に詳しい人を探してるんです！」

それでも、怖くても、勇気を出さなくちゃ。

ビアンカは目に涙を浮かべながら、叫んだ。

「お母さんが病気なんです！ 占い師さんに、ここに来れば薬に詳しい人がいるって、教えてもらったんです！ 私にできることをしてあげたい！ だから、薬のこと、教えてください！！ このことは、絶対に、絶対に誰にも言いませんから！！ お母さんにもお父さんにも、友達にだって、えらい人にだって、将来好きになった人がいたとして、その人にだって、絶対に誰にも言いませんから！！」

恐怖を吹き飛ばすための大声は、よく響いた。閉塞的な遺跡の中、少女の声が反響し、魔物たちは呆然と、泣きながら、目も顔も真っ赤にして真剣に訴えるその子供を見つめる。

「うるさいったらありやしないねえ」

一番に反応したのは、聞き覚えのある声に、見覚えのある魔物だった。

「悪いね、ネロ。この子どもはあたしが預かるよ」

カンデラだった。ネロと呼ばれたアングルホーンが、ビアンカの腕を掴んでいた魔物へ顎をしゃくると、魔物は大人しく手を離し、落とされたビアンカは地面に尻もちをついた。

冷えた空気の流れる遺跡の中、ぺたぺたと歩くカンデラはビアンカへ近付く。なまずのようなひげをピクピクさせ、がさがさと聞き取りにくい声で、「ついて来な」と言った。

「なんだ、『魔女』もついに弟子をとる気になったか」

野次馬がそういうと、カンデラは大きな鼻の孔から、沸騰したやかんの蒸気みたいな鼻息を出して「何でもいいさ」とそっけなく答える。

ぺたぺた。ぺたぺた。歩いて行くドラゴン——正確には、カンデラはドラゴンマッドという魔物である——についていくビアンカは、彼なのか彼女なのか分からないその魔物が「家」としているらしい一室に通され、静かに座った。

「先に言っておくが、人間に作れる万能薬なんてありやしない。それも、怪我でなくて『病』を治すなんてものはね」

「……ええ。万能じゃなくなつたつて、完治なんかしなくなつたつて、お母さんがつらい思いをしないなら、それでいいの。少しでも一緒にいたいだけなの」

「魔物のすみかまで単身で乗り込んで、いるかどうかも分からない男の子を探しに来て、親としちゃ、そっちの方がよっぽど心配で、つらいだろうね。自分のために可愛い我が子がそんなことをしてるなんて分かったら、なおさら」

ビアンカは反論しなかった。カンデラの言うことは正しいし、彼女は自分がこの魔物に、今現在迷惑を掛けていることを理解していた。

ここは魔物の秘密の園だ。本来なら、ビアンカは殺されたつておかしくない立場なのだと、当人からしても簡単に想像できる。カンデラが魔物たちにとってどんな立場の者なのかは分からないが、周りに責められ、謗られる可能性だつて十分にあるのに、向こう見ずな子どもを、真つ先に連れ出してくれた。

「あの、助けてくれてありがとう。あなたのこと嫌いだったけど、私、その、子どもだつたわ。この前だつて、あなた、話を聞いてくれたも

の。私、アベルを探すのだって諦めたくない。だけど、カンデラさん。あなたがもし薬に詳しくて、私に教えてくれるっていうのなら、諦めるわ。本当はアベルに薬のことを聞くだけじゃなくて、友達になりたかったけど、でも、時間がないもの」

「……もう長くない、と医者にでも言われたのかい？」

頭を横へ振ったビアンカは、大人びた笑みを浮かべ、小さく両の拳を握る。

「いいえ。でも、引越すの。そうしたら、学びには来れなくなる。私はそれまでに、すべてを学ばなくちゃいけないのよ」

カンデラは、ビアンカにいくつかの条件を突き付けてきた。まず、教えるのは魔法力を伴わない薬の調合のみ。絶対にこの場所について、そしてこの住人について他言しないこと。そして、引越すその日まで、住み込みでカンデラの弟子として働くこと。

「——分かったわ。だけど、お父さんもお母さんも心配しちゃうわ。手紙を出したいの。それくらいはいい？」

「ああ。けどもし言いつけを守れないようなら、お嬢ちゃん、あなたに未来はないよ」

ビアンカは、澄んだ空色の目をカンデラへとまっすぐ向けた。

「あたしのごとは師匠と呼びな。紙とインクをやるから、さっさと手紙を書きな。内容はこちらで確認するよ」

「もちろん、どうぞ」

少女は微笑んだ。つらいときは優しい人を、苦しいときは勇気をくれた人を、悲しいときはお前さんより悲しんでいる人を。ビアンカの脳裏には、今は会えない人たちが思い浮かんでいた。

——ううん。今はつらくもないし、苦しくもない。悲しくだってないわ。

だから、淑女の礼を性別不詳のドラゴンマッドへしながら、大好きなその人たちの代わりに、あの不愛想な紅の目の少年を思い浮かべた。

友達になりたかった少年。あの子より薬に詳しくなって、いつか会えたときに、うんと驚かしてやろう。そして、「私の方がお姉さんなん

だから」って、なんだか寂しそうなあの子の手を引いてあげよう。あの子の笑った顔は、きつととてもきれいだろうから。

*

私は非常に怒っていた。それはもう怒っていた。

「信じられる？ あの子三馬鹿、お互いを出し抜くために石板を隠して、結果この広大な砂漠の中に埋めたとかアホなことしやがったんだよ？ 砂漠生まれのくせに砂漠ナメてるの？」

灼熱の砂漠の中。私とパパスさんは手掛かりも特にないまま、砂漠の村の村長さんの息子、三つ子の三馬鹿がやらかしたせいで、砂を足でかき分けては石板がないか探し回っているのだ。

事の発端は、砂嵐に運ばれてきた石板を三馬鹿の誰かが拾ったことによるらしい。

兄弟たちに石板を見せびらかし、浮かれて「勇者様に渡して時期村長になるための口添えをもらうんだ」と吹聴した三馬鹿のどれかの言葉を聞き、焦ったその他二人のうち一人が、まず家の裏に埋めた。そしてそれを見ていたもう一人が、「馬鹿め、もつと分かりにくいところに隠してやる」と、村の外れに埋めた。

そしてそれを知った最初の一人が、誰にも取られないように、村の外、柵の近くに埋めた。そしてそれを見ていた……とループした結果、特に目印のない砂漠に埋めて、本当に場所が分からなくなってしまうたそう。頭が悪すぎていつそかわいそうになつてくる。普通の人はそんなことしない。他の人に盗られたくないなら金庫でも買えよ。

「いいけどね別に。砂漠の魔物倒しながら砂漠散策。戦いの修行にもなるし暑いから精神的な修行にもなるし、まあ三馬鹿のしたことは信じられないけど。私はもつとスライム相手に修行したかったけど」

まあ、スライムはスライムで強いやつもいるからどっちが楽とかそういうことは言えないんだけど、環境的に言えば砂漠よりよほどクレージュ周辺の方が楽だ。世界樹ってばーつと見てるだけで元気も

らえる気がするし。

「アルマ、気持ちには分かるがそう言うもんじやない。彼らも反省していたじゃないか」

「反省してなかったよアレ。パパスさんにはどう見たらアレが反省していたように見えたの」

三人ともヘラヘラしてたし、なんなら石板を探しているのが勇者様じゃなくて私って知って明らかにホツとした感じで「まあ簡単に手に入ってはつまらないだろうからな!」「達成感を得るための手助けというやつだ、わはは!」「いい経験になるだろう!」とかめちやくちや神経を逆撫でしてきた。あいつら何かしらの小さな不幸に遭わないかな。次爪切るとき深爪になれ。

「うう……ナイラの川沿いを下って大地の精霊像まで行こうか……ん? 精霊?」

私はひらめいた。ひらめいてしまった。もしかしたら天才かもしれない。

「大地の精霊様に会いに行こう! 砂漠のことなら、誰よりも御存知のはずだもの!」

あまりの名案に、思わずパパスさんの両手を掴んでぶんぶんと上下に振ってしまった。いや、いい考えだ。大地の精霊様かあ。とりあえず、勇者様にどんな方なのか話を聞きに行こう。いや、あんまり勇者様ばかり頼ってるとマリベル様にバレかねないから、アイラ様に聞きに行こうかな。

「グランエスタードに一回戻って、アイラ様に話を聞きに行こう。ついでに、私の歌声も聞いてもらって改善点とか教えてもらえるといいなあ」

うきうきしながら提案すると、パパスさんも賛成してくれて、私たちはキメラの翼でグランエスタードへと向かった。

しかし、とてつもなくタイミングが悪かった。

かつてアイラ様と共に神様（まあその神様は魔王が擬態した偽物だったんだけど）の復活に一役買ったヨハンさんが、グランエスタードに来ていたのだ。

神様の復活の儀式は、ユバールの民という神様を復活させることを悲願とする旅の一族に伝わる「大地のトゥーラ」という楽器と、「清き衣」をまとった踊り手によって行われる。その楽器を演奏したのがヨハンさんで、踊り手がアイラ様だったというわけで、縁あるお二人なのだ。

顔面の良いお二人のだが、アイラ様はチャラついたヨハンさんが少し苦手で、ヨハンさんは真面目で美しくしてしかも強いアイラ様を度々口説いている。

ということ、アイラ様はヨハンさんに口説かれていた。

タイミングが悪いというのは、それでアイラ様の機嫌が悪くなつて、情報を教えてくれなくなるとかとそういうことではない。アイラ様はそういう方ではないからだ。

「おうチビツ子。久しぶりだなあ」

「お久しぶりです、ヨハンさん」

「なんだ、本物の父親でも見つけたか？」

「この人は。パパスさんと言って、私の友達のお父さんです。私、アイラ様に聞きたいことがあつて、今お時間いいですか？」

「もちろんよ」

「いやいや、ベイビー。チビツ子より先にオイラが話し掛けてたじゃん」

こういうことである。ヨハンさんがいると話が進まなくなるのだ。無視してアイラ様と会話を続けなければいいんだけど、茶々の入れ方が絶妙にうざいし、しかもあまりに相手にしないとめちやくちや上手なトゥーラの演奏で心を奪ってくるのだ。無理やり。そのせいで気付くと聴き入っていて、話が全然進んでないのだ。構ってちゃんかよ。お前いくつだよ。

だから適度にヨハンさんを相手にしつつ、アイラ様に情報を聞き出さねばならないというわけだ。単純に疲れるし面倒くさい。

聞き出した結果。大地の精霊様に会いたいのなら、アミュレットを持って、砂漠の村にいるシャーマンに精霊を呼び出してもらおうとい、との話だった。闇が晴れてからは、大地の精霊様は砂漠でのんび

り過ぎしているようだ。

ちなみに、闇に閉ざされた世界のときは大地の精霊像の地下にあるピラミッドいらっしやっただとか。随分お手軽に会えるようになってうれしい。地底ピラミッドともなると、多分王族の了承必要だもんな。

お礼と共に修行の成果を見てもらいたい、とアイラ様に伝えると、なぜかヨハンさんがノリノリになってしまった。

「え、チビツ子ってば今吟遊詩人なのかよ。聴いてやるから一曲歌ってみろって」

私の背でも縮めたいのか、頭頂部に手のひらを置いてうりうりと体重をかけつつ撫でてくるのがうざったい。頭を撫でられることの多い私だけど、別に誰にやられてもうれしいわけではないので、白けた目でヨハンさんを見る。

「私も聞きたいわ」

まあアイラ様が言うなら、と思つて魔封じの歌を歌つた。頑張つて修行をしているので、まだ大会まで半月もあるのに、結構職業レベルは上がった方だと思う。努力は裏切らないってありがたいね。

「……いやお前、本気で歌えよ」

とか思つていたら、歌い終わった後のヨハンさんのテンションがただ下がっていた。そんなに下手だったかな。思わずアイラ様を見ると、「私は上手だと思つたわよ」とにこにこしながらおっしやつていた。なんだ。上手だったんじゃない。

「何今の？ 魔封じの歌？ こんな歌に封じ込められる魔法も魔物もいねえから！ もう楽器の演奏も全然ダメ。歌も魂こもってない。本気じゃない歌で人間はおろか魔物の心に届くと思つてんのか？」

「いや、ヨハンさん。御指導はありがたいんですが、そんな性格でしたっけ？」

熱くなっているヨハンさんに、極めて冷静な言葉を掛けると、どういうわけか、両脇に手を差し込まれ、抱きかかえられた。

「ちよつとオツサン、チビツ子預かるぞ。マーデイラスの大会に出るんだろ？ そんなんで出るとか恥ずかしいわ！ オイラが稽古つけ

「やる！」

「ちよちよちよちよつと、私、歌もそうなんです。が戦闘の修行と石板探しも兼ねてまして……！」

本気で抵抗すれば、まあ逃げ出せはするだろう。とりあえずヨハンさんの脳天にいなずまを呼び出し、ひるんだところで拘束を逃れ、追撃が来ないようにパパスさんの後ろに隠れればいい。

ただし、普通にアイラ様やパパスさんに怒られそうだし、もつと悪ければ軽蔑されそうなのでやめた。

「知るか！ そんなもんは歌と楽器を極めてから言え！ お前は吟遊詩人名乗るな！」

「ええー？ アイラ様、助けて……」

やだこの人。絶対こんなキャラじゃなかった。チャラ男で素行不良って噂だったじゃん。素行はちよつと改善してただのチャラ男になっただけの面倒くさい人になったと思ってたけど、何この人。誰？

私の知ってるヨハンさんはどこに行っちゃったの？ 私別に吟遊詩人界のトップ目指してないし。マーデイラスの大会で勇者様に恥ずかしくない演奏をして優勝もして、さくつと転職して石板集めに精を出したいだけなのに。

「パパスさん、助けて……」

アイラ様とパパスさんは目を見合わせて、「ヨハンは演奏だけはすごいから、教えてもらうのはいいことだと思うわ」「砂漠の石板については私が何とかしておこう」とか何とか言ってる。え、まさかの見捨てられた。パパスさん、私のこと仲間だつて言ったじゃん！

「オイラがこのチビツ子をいつちよ前の吟遊詩人にしてやる！ 今日からオイラのこと『師匠』と呼べ！ じゃ、マーデイラスの大会楽しみにしてるよ！」

こうして私は拉致された。

「お前の歌には『魂』がない！ これが本当の演奏だ!!」

いや、分かるよ。ヨハンさんの演奏めちやくちやうまいし、弾き手の面倒な性格を知っていてなお、そんなことはまるつと忘れてしまうくらい、曲の世界に没頭できるよ。

でも私、別にそこまでは求めてないっていうか。

マーデイラスの大会には優勝しなきゃいけないし、勇者様に聴かれて恥ずかしくない歌と演奏はせねばならないと思っっているけどね。何回だって言うけど、大会終わったらすぐに転職するし、最悪優勝できなくても石板なんてみんな使わないだろうから、なんとかして優勝者買収して石板手に入れようと思っただくらいだし。ぶっちゃけリユカたちの世界に戻るために、戦闘力落ちたら元も子もないっていうか。

「珠玉の演奏は神をも復活させるんだ！」

いやだから、アンタ復活させたの神様じゃなくて魔王だし。騙されたとはいえ、勇者様が倒して結果オーライとはいえ、儀式の手順は合ってたとはいえ、復活したのは魔王だし。神様は世界が平和になっ

て自分からシムティアの町来たし。

「チビッ子！ 『本物』になれ！ 音楽は世界を変える！」
何がつかったって、歌と楽器の修行をやらされて戦闘の勘が鈍っているんじゃないかと思ったら、突然魔物ひしめく場所に放り投げられて「こいつら魅了してみろ」とか言われるし、無茶だと思っ

ていながら修行しなければならなかったってところだ。
こうして、トラウマものの日々を乗り越え、私は残りの半月できっちり吟遊詩人の職をマスターした。

ちなみに、マーデイラスの大会はさくつと優勝し、グレーテ姫より石板を賜った。私の心には達成感よりも虚無感が広がる。

そりゃ石板の一つももらえなさ。世界一と言っても過言ではないトウーラ弾きに、半月間で結果出させて言われて変な根性論で無理やり修行させられてたんだよ。

これなら魔物を倒すのに明け暮れてた方がよっぽど楽だったし、吟遊詩人の職も普通のマスターでできたと思うし、出場者に吟遊詩人極めてるような人いなかったから、全然その程度で優勝できたよ。「本物」になる必要はなかったよ。本気で音楽やってる人もいるだろうけど、そういう人たちはもう宮廷で職を持つてるから出場資格がないんだよね、そもそも。

ていうかもともとグレーテ姫がアルス様に出場してほしくて、しかも優勝してもらって石板あげたいっていう企画だから、出場資格者あるのはペーパーの素人くらいだ。本気の人が来ちゃったら漁師のアルス様には太刀打ちできないだろうし、吟遊詩人に転職したとしても、そりゃまあ音楽一筋で来てる人には敵わない可能性だってあるもの。

もう一回言うよ、つまりこの大会は素人ばかりが出ている、アルス様に優勝させるためだけの、どちらかというとお祭り要素の強いものなのだ。……私の半月は一体何だったのか……。

ひやりとした石板はずしりと重いような気もしたけれど、それも一瞬で、私はさつと袋にしまった。

勇者様たちもシャークアイ様もパパスさんもすぐく褒めてくれたし、ヨハンさんだつて「へへ……やるじゃねえか、チビツ子……」って鼻の下をかきながらどことなく自慢げな表情をしていたけれど、私の心には少しも響かない。

申し訳ないがいろんな人のお褒めの言葉を聞き流し、すぐにダーマの神殿へ向かい、その日のうちに魔法使いに転職した。

パパスさんは宣言通り砂漠に埋まった石板を大地の精霊様の協力を得て手に入れてくれたけど、私がいざばらく彼に冷たく当たってしまったのは、仕方のないことだと思う。

デモンズタワー

デモンズタワーに再び挑んだカンドタ一行は、嫌な気配を感じながらも塔の攻略を進めていた。上に行けば行くほど、その気配は強まる。慎重な盗賊の親分は、常に退路を確認しながら、仲間の安全を第一に考えながらも己の勘を信じて歩を止めなかった。

「がう……」

最初に尻込みしたのは、プツクルだった。リンが緊張した面持ちのまま、彼女のたてがみを撫でて落ち着かせる。階段を昇れば、そこは屋上だった。

「こんなところまで来る人間がいるとは、驚きだな」

魔物。ぽつんとある玉座のような仰々しい椅子に、オークが座っている。否、ただのオークではない。そこらにいるオークよりはるか強いのだろう。ひやり、とリンの背中を冷たい汗が伝った。

「あー。悪いが、俺様たちはお前さんと事を構える気はねえ。ただ、ホラ、あれだ。『空飛ぶ靴』ってお宝を探し求めてきた、夢見る冒険者ってヤツなワケだ。ここにあるって噂を聞いて探しに來ただけだなんだよ」

カンドタが、背後にいる子分とリンたちへ指でサインを送る。意味は「撤退」だ。

「ほお。情報通な人間もいるものだ。『空飛ぶ靴』なら、あるぞ」

ニヤリ。オークが牙をむきながら邪悪に嗤う。

「もとよりグランバニアの大臣に貸していた物だ。欲しいならくれてやろう」

どつかりと、オークは椅子に深く腰掛けていた。槍こそ手に握っているが、こちらがキメラの翼を放り投げれば、初動が遅れて逃げ切れだろう。けれど、魔物の「余計な一言」——大臣云々は、リンの脳内にほのかに熱を燻ぶらせた。

「そこにある銅像はオレを殺せば消える。こんな塔の管理を任されて、退屈していたところだ。つれないことを言わず、事を構えてはど

うだ？」

勝てないことはない、とリンは判断した。相手は一体。危なくなっても離脱の手段はある。疲労はしていたとしても、無茶はしていないし体力は未だ十分だ。それに何より、この塔を覆う嫌な気配の持ち主が、目の前の魔物であるとは到底思えなかった。

「いくつか、質問をしてもいいですか？」

ピリピリと緊張の走る空気の中で、リンはペろりと唇と湿らせてから、声を上げた。リンたちより前に立つカンダタは振り返らないため表情は見えないが、ぴくりと背中が動いたことから怒っているのだろうなど感じさせる。指示をして撤退の機会を伺う中であるにも関わらず、茶々をいれたお子様に対してそう思うのは、当然のことだ。

リン——デールはそれでも、言葉を止めなかった。

「グランバニアの大臣は、空飛ぶ靴を借りて、何がしたかったんでしよう？」

「なに、靴は我らとの連絡手段よ。身を潜める者はこの塔へ来るのに舟は使えまい」

オークの言うことが事実だろう。湖を渡るのに時間が掛ければそれだけ抜け出しにくくなるし、他人に見られる可能性も高くなる。

「なぜ、連絡を取り合っていたんですか？」

そんなことは、デールだつてももちろん承知していた。大臣が魔物とつながっていること。魔物の協力を取り付けて、国を乗っ取ろうとしていたこと。自分たちで調べた結果であり、だからこそその日、城を抜け出して大臣の誘いに乗った。

「決まっている。——愚かな人間どもを、絶望の淵に落とすためよ。同じ人間に裏切られ、国は我ら魔物の物となるのだ」

生きて戻った自分たちを見て悔しそうにしている大臣をせせら笑いながら、オジロンに大臣が魔物とつながっているという証拠を突きだし、追放するはずだったのに。

出し抜いたと思ひ込んで、国に迫る魔の手に気が付けないまま。リンは音のなくなったグランバニアを目の当たりにした。

「そうして内側から腐らせ、そして我ら『光の教団』が救いの手を差し

伸べる。本当なら、石化など淡白なまねではなく、より陰惨で、より芸術的で、より暴力的な『絶望』を与えてやるべきだったのだ。さすれば、グランバニアの王族共に地に落とされた教団の名誉も回復できただろうに」

燻っていたわずかな火が、空気をはらむ。それは何も、リンだけのものではなかった。

「ああ、いい殺気だ。もとよりオレはお前たちを逃がすつもりなどない。少なくとも、魔物でありながら人間と共にいるお前たちだけは、絶対に殺すつもりだったからな」

先に飛び出したのは、ゲレゲレだった。彼の速さに負けぬよう、デールはバイキルトの呪文を掛けることで、相棒の怒りに自らの怒りを上乘せする。

「リン！ ギョギョ！ てめえら勝手しやがって！」

カンダタの怒号が聞こえた。しかし、デールとゲレゲレに「ただの盗賊」の言葉は届かない。危険など、今更だ。

「ぐっ」

予想通り初動が遅れた魔物の足を、ゲレゲレが食いちぎる。残念なことに、オークは回復魔法の使い手だ。反撃を避けたゲレゲレが距離を取る間に傷を回復し、油断なく槍を構えながらにやりと笑った。

「お前ら、グランバニアの生き残りだろう。もつと言えば、王族だ」

腰を深く落として武器を向ける相手に、デールは答えない。オークはおかまいなしに言葉を続ける。

「おかしいと思っていた。あの忌々しい半魔だけが生き残って帰還する？ 我が兄はそこらの人間にやられるような未熟者ではない！ あの半魔に謀られたのだ！」

激昂しながら朗々と語るお喋りな魔物。けれど隙はない。少年は相棒と自らにありつたけの補助呪文を掛けて、ただひたすらに、オークへ殺意を向けながら、機会を伺う。

「そして——グランバニアの王子は、ベビーパンサーを伴っていたと聞く」

跳躍。大きな凶体をしている割には素早い動きで距離を詰めてき

た魔物の攻撃をひらりとかわしたデールは、ぱちんと指を鳴らして、相棒に攻撃の指示をした。デールへと腕を振りかぶっていたことで、がら空きになった脇腹に、ゲレゲレの鋭い爪が深く刺さる。

「半魔は我らを裏切っていたのだ！ でなければ、なぜお前たちが生きています！ 国中が呪われたのに、どうしてお前たちはここにいますのだ!!」

外野に意識を向けていなかったデールの知るところではないが、カンドタの子分が、オークの怒気と殺気にてらられて腰を抜かした。血を拭き出しながら怒号を上げるオークは、器用に傷を癒しながら、ちよこまかと動く素早い獲物二体をどう捌ってやろうかと血走った目をぎよろぎよろさせている。この瞬間、デールには「もつと情報を引き出したい」という気持ちと「欲をかけばやられる」という直感に葛藤していた。

そこで少しだけ隙が生まれたのを、怒れる魔物は見逃さない。

「グランバニアの王子、リユカよ！ ここで死ぬ!!」

鋭く、正確にデールの心臓を狙った突き。少年は瞬時に身をかわして致命傷は避けたものの、避けきれずに攻撃の当たった右腕は肉が抉られ骨が見えている。スクルトを掛けていてなお、この威力だ。彼は甘い考えを棄て、自分への追撃を阻むようにオークを攻撃してくれている相棒を見る。

デールは明らかに後衛だ。今までの戦いでも、自分の役割を理解して仲間の補助や回復に徹してきた。

「――『リユカ』は死なない」

けれど、だからこそ、彼は誰よりも剣の修行に明け暮れていた。

彼は非力だった。もとより、一番年下。それでいて筋肉の付きにくい体質なのだろう。基礎をしっかりと身に付けてそれを応用する兄のようにも、柔軟で直感に優れた友人のようにもなれなかった。攻撃呪文も使えない、剣の腕は思うように伸びない。

それでも、デールは守られるだけの後衛は嫌だった。

ときに攻撃を避けられ、ときに掠め、そうして自分が治療している間にオークと休まず攻防をしていた相棒へ向けて、もう一度ぱちんと指を鳴らす。ゲレゲレは危険を顧みず、オークの懐に飛び込み、飛び掛かった。

「殺されに來たか、裏切り者め！」

自分に馬乗りになったゲレゲレへと、オークが自由な腕を振り上げて、槍を突き刺そうとする。

「——あ」

それは空振りとなった。

オークの屈強な腕が、槍を持ったまま胴体と離れたことに気付かないように、宙を舞う。カラン、と槍が床へ落ちた乾いた音が響いて、次の瞬間、魔物は「裏切り者」に喉笛を噛み千切られた。

「な、なぜ……」

ごふ、と喉から血を吹き出しながら、不明瞭な問いをオークが零す。ぺ、と魔物でありながら人間の味方をするキラパンサーが、口に入ったオークの血を吐き出した。

デールは問いに答えず、冷たい目を向けたまま剣に付いた血を振り落とす。

勝手をしたデールへの怒りもあつたカンダタは戦闘に手を出さなかつた分、少年の新たな一面をしかと見て、衝撃を受けていた。

デールの剣は軽い。普段の戦闘では後衛にいるし、自分で剣を振るときも、魔物たちに対して致命傷は与えられない。彼は敏く、確実な足止めや、味方に対する被害を最小限に抑えるための働きをするため、足手まといだと思つたことはなかつたが。

——隠してやがつたのか。

カンダタはデールの刃、その鋭さに舌を巻く。

確かに、普段の戦闘では彼が魔物に致命傷を与える機会はないだろう。

あまりに研ぎ澄まされた刃だった。相手の弱点、急所、脆いところを見つけ、より効率的に破壊するための、観察眼、集中力。それらは、

日頃周囲に気を配り、最善の行動を選ぶ少年にはできない。周囲への気配りを棄て、ただ一体の敵だけに集中する。補助呪文で極限まで速さを高め、最小限の力で骨すら断ち切る疾風のような一撃。

「本当に像が消えましたね。カンダタさん、ボクらはこのまま先へ進むつもりです。もちろん手に入れたら差し上げますが、ボクらにも『空飛ぶ靴』を魔物から奪いたくなる理由ができました」

デールは額から玉のような汗を浮かべながら、乱れた息を整えるように深く息を吐いた。それから、魔法の聖水の瓶を開け、中身を飲み干す。

「あなたの言うことを聞けなかったボクのわがままに、あなたたちが付き合う必要はない。ついてきてほしいとも言いません。後はボクらだけでやりますよ。あなたの仕事を『手伝う』。あなたはボクの依頼を受け、ストロスの杖を手に入れる。取引の内容は少しも違えませんが」

カンダタは腰を抜かした子分を見て、それから少女の恰好をした少年に、ゆつくりと近付いた。

「俺様はお前らの親分じゃねえ」

「ええ」とはにかんだ彼の頬を、カンダタは力を込めず平手で打った。力を込めていないとはいえ、戦闘直後で気が緩んでいたとはいえ、デールが反応できない速度で振りぬいたのである。少年の白い肌は大きな手形模様になくなった。

「お前らが何者でもどうでもいい。俺様とお前らはただの盗賊と依頼人で、ビジネスパートナーだ。だけどな」

覆面の奥に光る眼光の鋭さに、デールは怯えなかった。それどころか、微笑んだまま彼を見つめている。

「むかつくぜ。お前のその笑顔も、なんでもお見通しって顔も、子どものくせに一丁前な殺気を出すところも!!」

「なうん！」

珍しく、プツクルがカンダタに同意したように鳴いた。その声を聞いて、彼の子分たちが立ち上がる。

「つまりお頭が言いたいのは、ここまで来たら最後までついて行くつ

てことだよ。もともと俺たちの仕事だしな。俺、ビビっちまったけど、リンちゃんだけに大変な目に遭ってもらいたくないよ。リンちゃんには何度も助けられてるし」

「てめえ、俺様のことを何も分かつちやいなえな。ともかく、だ。俺様はお前がいけ好かねえ。いけ好かねえやつに自分の仕事を任せちゃいられねえ。お前らはもともと『手伝い』だ。出しゃばんじゃねえよ、チビっ子どもが」

近寄ってきた子分に拳骨をお見舞いしたカンダタが「ふん」と鼻息を出すと、デールはくすくすと笑った。それから相棒のたてがみを撫でて、そつと近寄ってきたプックルのことも撫でて、一度目を瞑る。「じゃあ、行きましょう。危険だと思ったら各自すぐ離脱してください。自分の命に対する責任は、自分で背負ってくださいね」

オークが息絶えようと、失われることのない禍々しい雰囲気。目を開いたデールは真剣な顔になって、像の消えたその先を睨んだ。

先へ進むと、オークを殺したときに消えたのと似た像がある。しかし、そこで行き止まりというわけではなく、像を無視して先へ進めば、似たような豪華な椅子があるのか見えた。

「キメラ……？」

キメラ。御存知の通り、鳥型の魔物である。体に合わないだろうに、無理をしているようにも見えない。しかしそれが間抜けな光景かと問われれば、その場に居合わせた者たちは首を横に振るだろう。もちろん、ぴりりとした緊張感の張り詰めるデモンズタワーの屋上には、そんな質問をする者はいないが。

「聞こえていたぞ、ヤツの怒号が」

キメラ——キメラという名の魔物はじろりとデールを睨みつけた。先程のオークと同様、そこらへんにいる魔物とは一味違うのだということがあるありと伝わってくる殺気である。

「ケケケ……グランバニアの王子リユカか。まさかわざわざそちらから出向いてくれるとはな」

ふわりと体を浮かせた魔物に対し、全員が応戦の構えを見せた。

否。応戦のつもりでいたのは一人を一匹を除いて、である。

デールは魔物の挙動を待たず、飛び回られては厄介だと、羽根に向けて一閃を放っていた。相手の初動に応じるなんて悠長なまねはしてられない。そんな開戦の一撃に反応したのは、斬りかかられた魔物ではなく、相棒のキラーパンサーである。ぐつと力を溜めて下半身に意識を集中し、空へと追撃から逃れようとしたキメーラへと飛び掛かった。

デールとしては、翼を切り落とすことができれば僥倖。しかし、補助呪文を掛ける暇はなかったし、最初から攻撃の構えを取って敵に目論みを悟られたくなかったこともあり、辛くも避けられてしまった。中途半端な攻撃となってしまったが、相棒が力を溜める隙を作るには十分な一撃だったようで、そこは安心する。

「魔物って、思ってたよりお喋りが好きなんですね。ボクらは敵なのに、随分余裕があることです」

地に落とされた鳥型の魔物に、カンダタの斧が振りかぶる。己の首を落とさんとする力任せの一撃に、キメーラは体を押さえつけるゲレゲレへ向けて火炎の息を吐き出し、なんとか拘束を逃れた。

「イキのいいヤツらじゃねえか。まとめて食ってやるぜー」

放たれたのはベギラマの呪文だ。カンダタ子分がデールとブックルの前に立ちはだかり、ダメージを請け負う。そんな彼の行動に驚きながらも、少年はすぐにカンダタ子分へ回復呪文を施した。

「カンダタさん！」

「分かってらあ！」

ぶおん、と凶悪な音がカンダタの斧から放たれる。それは当たれば間違いないキメーラにとつて痛恨の一撃。当たるわけにはいかなかったが、そちらへ意識を向ければ忌々しいキラーパンサー共の牙や爪が容赦なく襲い掛かってくる。苛立ちながらベギラマやヒヤダルコを唱えても、火炎の息を吐き出しても、子分が仲間に加わって来ると仁王立ちをしてきて、肝心の「リュカ」まで攻撃が届かない。

「ツチー！ ちょこまかとー！」

しかし、だからと言って楽な戦いというわけではなかった。仁王立

ちでかばってくれる仲間がいるとはいえ、キメーラはすばやいし、連続で全体への攻撃を仕掛けてくる。そのため、デールは回復に掛かり切りになってしまおうし、大ぶりなカンダタの攻撃はあまり届かない。ゲレゲレとプツクルの攻撃は当たるものの、致命傷は避けるという器用な立ち回りをしていた。

「ああ、そうか」

そして、魔物は残虐だった。口を開き、火炎の息に身構えるカンダタ子分に向かって——息を吐き出すのではなく近付いて、そのくちばしで直接、目を抉った。

「うわあああああ!？」

痛みと衝撃、恐怖に悶える子分の目の前で、抉り出したその目玉を食らい、魔物は醜悪に、満足げに目を細める。

「食ってやると言っただろう？ さあ、次はもう一つの目を抉ってやろうか」

じつとりと見つめられたカンダタ子分の身がすくむ。それをせせら嗤いながら、キメーラは今度こそ口を思い切り開いて火炎の息をデールたち全員に浴びせた。

「ベホマラー！ 大丈夫です！ ボクがみんなを回復させます！」

全体回復呪文。この王子はそんな高度な魔法まで使えるのか、とキメーラの顔が憎々しきで歪む。この子どもを恐怖に染めてやりたい。矮小な人間の身でありながら、魔物に歯向かったことを後悔させてやりたい。

だが、自分では力が足りない。

それは自覚していた。オークのように回復魔法を使えないキメーラは、持久戦になればなるほど不利だ。しかし決定打がない拳句、回復魔法を使いこなす憎き相手。状況は最悪だった。

キメーラ自身、相方のオークが兄を亡くしたのと同様、三年前に叔父をサンタローズ侵攻で亡くしている。部隊を率いる二つの隊のうち一つを任されていた。

そして半魔の子どもから「敵と相打ちになった」との報だけを聞かされ、人間の村を襲うだけの任務で命を落としたと馬鹿にされ、「王子

「教団」の——邪悪に属する魔物たちの間で、一族全員が立場を失った。兄を失くした相方のオークもキメーラ自身も、それゆえこの「つまらない塔」の管理に配属されたのである。

付け加えれば、「つまらないが、危険な塔」だ。

それは人間にとつての、という意味ではない。オークもキメーラも、同じ魔物でありながら「彼の者」の持つ邪悪さに怯え、精神を削りながら、人間共と半魔と、それから自分たちを馬鹿にした魔物たちへの恨みでなんとかこれまで耐えてきた。

命を「鍵」にするなんて馬鹿げた、あまりに蔑ろにされた扱いをされながらも、見返してやるのだと、耐えてきた。

「つへー！ 隙ができたな！」

——耐えて、「きた」。

カンダタの太い腕から繰り出される斧が、己の首を刈り取ろうとしている。キメーラには避けることができた。でも、そうはしない。憤怒、憎悪、妄執、虚勢、恐怖、あらゆる感情がぐちゃぐちゃになっていきついたその先にある望みは、己の生ではなかった。

「ケケケ……。お前たちは『鍵』を開いた」

ごごご、とキメーラの首が落ちる。

「さあ、苦しめ。恐怖し、絶望し、赦しを乞え、そして惨めに死に絶えるのだ」

首だけになった魔物のくちばしが、どこか期待するように呪詛の言葉を吐いた。魔物の死体がぐずぐずと崩れ、全員が固唾を飲む。

「おい……お前、先帰れ。リンクスの馬鹿がまだ進んでんなら、俺様が行くからよ」

硬質なカンダタの声に、自分は声を出すどころか、頷くことさえできない。嫌な雰囲気が増大したのだ。魔法の気配に敏感な者でなくても、キメーラの死によって「おそろしい何か」を封じていた結果のようなものが解かれてしまったことに気が付くことができるだろう。

それは鳥型の魔物が言ったように、猛獣の檻を誤って開いてしまったような。開けてはいけない箱を、無知ゆえに開いてしまったかのよ

うな。

「い、いや！ 俺も行きます！ 子分の一人もついて行かないんじやあ、親分の恰好が付かないでしょう！」

上級回復魔法であるベホマで戻ってきた片目を押しさえながら、カンダタ子分はガクガクと震えている。自らの頬を両手で打ち、なんとか気力を保つ子分へ向けて、リンはふるふると首を振った。

「さすがのボクも、『空飛ぶ靴』は命を棄ててまで手に入れたい物ではありません。魔力もあまり残っていませんし、戻りましょう。悔しいですが、再挑戦をするとして、回復してから——」

「臭う、臭うぞ……」

ぞわり。

聞こえた地の底を這う低音に、デールは思わず身構えた。ゲレゲレは毛を逆立て、カンダタは子分を庇うように立つ。プツクルはガタガタと震えながら、像が消えたその先から現れた存在を見つめていた。「ああ……お前だ、小僧。お前から、忌々しきラインハット王と同じ臭いがする」

棍棒を手にした、イノシシのような魔物。血走った目に、鋭い牙。ずしりずしりと塔を揺らす巨軀。あるいはアルマが見ていれば、その名を半信半疑ながら口にしたかもしれない。

けれど、確信は持てなかっただろう。ソレはアルマが相対した魔物よりも二回りも大きく、全身を覆う体毛も硬質になっているように見える。

何より、雰囲気。

ただでさえ、幼い少女にはソレは暴力が意思を持ったような存在に見えた。けれど、傍にあった巨悪の存在感で、ソレ自身の印象は霞んでいたのもまた事実。

けれど、あの時とは比べ物にならない邪悪な存在感であると、アルマだけでなくパパスがこの場にいても、同じことを思うだろう。ただし、この場にソレの名を知る者も、そうかもしれないと疑う記憶や知識を持つ者もいなかった。

咆哮。

デモンズタワーから時々聞こえてきた、身の毛もよだつ、この世のあらゆる攻撃的な感情を煮詰めたモノを放出した、ただの「声」というにはあまりにも他者の精神を削り取る、形のない脅威。

「今日は気分がいい……『封印』が解かれ、その上憎きラインハットの血で喉を潤せそうだ」

無造作に、何気ない動作で、魔物は棍棒を振り下ろした。デモンズタワーの屋上の床、デールたちとオークやキメラとの戦闘ではキズもつかなかったそこに、ヒビが入る。

そしてもう一振り、またも力を入れているというよりは起き抜けで体の動かし方を確認しているというような気安い動きで、ヒビで済んでいた床に穴が開いた。

「お前を蹴り殺して、それから再びラインハットにでも向かおうか」

身構えてはいるけれども、そこから動けやしない。金縛りにでも遭ったみたいなのに、デールは硬直していた。あまりに凶悪。あまりに醜悪。

「全てを壊してやろう。あの男があこの世で何をすることもできず、歯噛みする様を想像するだけで愉快だ」

けれど脳はぐるぐると血を巡らせていた。そして、この場から脱出する方法でも、この状況を打開する秘策でも、なんでもなく、ただ一つの真実を導き出した。

「お父さま……」

浮かんだのは、白い粉にむせながら大笑いする、偉大なる父の姿。愛してると言った、あまりに凜とした声。その背中が広くて、大きくて——寂しかったこと。

「おまえ……殺してやる……」

その答えが、デールに理性を失わせた。泣き叫ぶ兄の袖を引いたとき、本当は自分も「嫌だ」と言いたかったこと。けれど父の覚悟を受け取って、寂しさを押し殺したこと。

どす黒い感情が胸の内から溢れる。

「リンクス！ 馬鹿なことするな!! 撤退だ!!」

カンダタの声が遠くに聞こえた。デールの目には、もはや相棒のゲレゲレすら入らない。ただ、彼の視界には憎き魔物の姿が映るのみ。彼の鼓膜は復讐に騒ぐ己の血潮が流れる音で揺れるのみ。

「いいぞオ。逃げたっていい。だが」

魔物が、棍棒を投げた。それは緩慢だけれどあまりに速い動きで、魔物から目を逸らさなかったデールはもとより、他の誰も、反応ができなかった。

気まぐれで、本人にとっては大して意味もない攻撃。

「がへ」

棍棒は、カンダタ子分の頭に命中して、熟れた果実を殴打したときのように跡形もなく弾けさせる。誰も、反応ができなかった。あまりに非現実的な、眼前に晒された理不尽な暴力に。

「逃げられるものならな」

——その「暴力」の名を、ゴonzと言った。

魔法の杖

ヘンリーとリュカは、ルドマンの厚意で彼の所有する船でエルヘブンを目指していた。この世界は内海と外海と呼ばれる海に分かれており、大抵商船や定期船が利用するのは内海を通るルートだ。潮の流れが安定しているし、航路が確立されていて利便性が高い。

内海のメリットとは真逆のデメリットを持つ外海は、航海したことがある者がそもそも少ないので、ベテランの船乗りたちでもあれこれ苦労する、厳しい海なのである。

けれど、エルヘブンという集落は外海からでないと行けないのとこのだった。内海側は山々に囲まれて船では着陸できないためだ。

「オレもう無理……ソロ……お前が羨ましいよ……」

そして、かつてない長距離の船旅にヘンリーはやられていた。

「さっき聞いた話だと、今はメダル王のお城の手前あたりだそうだよ。

エルヘブンは逃げないだろうし、そこで休ませてもらおう」

早いに越したことはないが、火急というわけでもない。進行方向は変わらず、少々の休憩をはさむだけだ。船員たちは見えていて気の毒になるほど体調を崩している少年を見て、快くリュカの提案を受け入れてくれた。

メダル王の城に、二人は一度立ち寄ったことがある。砂漠の国、テルパドールを訪れる前、珍しい品々を集めているというその王様に会いに行ったのだ。

「休ませてもらうんだから、僕、挨拶に行ってくるよ」

「おう、悪いなソロ。後は任せた」

陸地に着くなりぐつたりと地べたに寝そべったヘンリーを置いて、リュカはきらびやかな王城へ向かった。そこは邪悪なる者以外は人であろうと魔物であろうと受け入れる、寛容な城だ。ある意味、リュカが理想とする場所でもある。

「アイヤ。ようやく人間来た思たら、子どもヨ。ぼうや、この国の子カ？」

王城に入る扉の前にいた女性に声を掛けられ、リュカは首を振った。どういう意味だろう、と思いつながら「なら旅人ネ？」と質問を続ける女性に、こくりと頷く。

困ったように、苛立っているように眉間にしわを寄せる女性は、商人のような恰好をしていた。ピンク色の髪を高い位置でおだんご状にまとめ、身軽そうな服装に、武器にもなりそうな大きなそろばんを背負っている。

「あの、僕、この国に前にも来たことがあります。ようやく人間が来たって……どういふことですか？」

確かに、メダル王の島には人間は少ない。旅人は訪れるが、国民と言われると数えるほどしかないと言われても納得できる。銀行、宿屋はあったし、そこで働く人もいたけれど、それ以外と言われるときほど印象に残っていないのだ。実際はメダル王に仕える人や島の景観を維持するために雇われている人もいるのかもしれないが、リュカが前に来たときにはそういった人々とは交流しなかった。

「言葉のままネ。この国人間いない。動物ばかりヨ。でも、別に襲うするない。変な国ネ。ま、見た方が早いアル」

女性が扉を開けると、にわかには信じがたい光景が広がっていた。銀行のカウンターの向こうには鶏が、宿屋には猫が。他にも豚や牛が、城内を闊歩しているのである。

「話通じない、でも必死で鳴くしてくるネ」

「僕が前に来たときには、こんなことには……」

呆然としながらリュカが言うと、女性は瑠璃色の目を鋭く細めて「安心したネ」と言った。

「ワタシ欲しい物あるヨ。ここの王様珍しい物持てる聞いたアル。ぼうや知る国、人間の国なら戻す方法あるはずヨ」

「まさか……お姉さんは、これが魔物の仕業だって言いたいのか？」

一見、ほのぼのした光景である。けれど、リュカの背中には冷たい

汗が伝っていた。動物たちが全員もともと人間だった者たちだと言うのなら、無理やりに人の姿を変え、助けすら求めることができなくしてしまう恐ろしい呪いだ。

「リリカでいいヨ。ぼうやの名前教えるネ」

「あ、僕、ソロです」

「ソロ。ワタシ別に魔物のせい言てないヨ。呪いするの、魔物だけじゃないアル。誰がやたかの前、どう治すかネ。治すするやり方分かる、誰やたかも分かる」

リリカと名乗る女性はそう言ったが、リユカには魔物のせいに思えてならなかった。何にでも変身できて、他者の姿をも変えられる少年を、彼は知っていたから。

「……何か知てる力？」

「あ……そういうわけじゃなくて。僕、この人たち治せるかもしれない」

リユカはラーの鏡を持っている。真実を映すという、伝説の品物だ。けれど、神の塔でシスターが言ったように、それらがむやみに広まるのは好ましくない。

「治すできる、いいことネ。早くやるアル」

「あの、だけど……人に見られちゃいけないんです。だからリリカさん、申し訳ないけど、お城の外で待ってるか、目隠しをするか、してもらえませんか？」

「——まあ、分かたヨ。ワタシ外いる。終わたら知らせるネ」

「はい」

頷いて、リリカが王城から出たのを確認してから、リユカは玉座へ向かった。そこに座る牛に向けて、ラーの鏡を向ける。そこには見知ったメダル王が映されており、やがて玉座に座る牛も鏡の中の姿へ――。

「おお、ソロや。なんと礼を言えば――」

変化は、した。

牛はメダル王の姿に戻り、感激した表情でリュカへと言葉を掛けた。

けれど、それもほんの少しの時間のみ。すぐに王は牛へと姿を戻してしまい、リュカはまさかと思ってラーの鏡を覗き込む。

困惑した顔のリュカの後ろに同じく困惑した顔のメダル王が映っていて、再び元の姿に戻ろうとして、そうはならなかった。

「なんで……戻っても、また動物に……」

リュカは玉座を離れ、他の動物にも同じようにラーの鏡を向けた。何かの間違いであつてほしい、と祈るように、鏡に人々の真の姿を映していく。それでも、結果は同じだった。少しの間だけ元に戻って、それからまた動物の姿になってしまう。

「もう終わったか」

リュカが思わず城を飛び出すと、入り口付近に背中をもたれさせていたりリカが声を掛けてきた。片目を瞑って少年を見ていた彼女は、一度両目を閉じてから今度は両目を開ける。

「ま、落ち込むないネ」

ぽん、と肩を軽くたたかれ、リュカは首を横に振った。打ちひしがれている場合ではない。前を向くと決めた。だから、共に前を見て、隣を歩く人に報告しなければ。

「僕、僕っ、友達に相談してきます！ リリカさんは？」

「ワタシ、城の情報集めるネ」

そう言つてちよいちよいと城内を指差したりリカに、リュカは一つ、思い出したことを口に出した。

「あの、このお城には喋る魔物がいると思います。友好的で、人を襲いません。もう話をしましたか？」

「……魔物いるないヨ。ワタシ見た、動物だけアル」

リュカの脳裏にぶるぶると震えながら話すスライムの姿が思い浮かぶ。そんなはずはない。確実に魔物だっていた。しかし、そうなつてくるといくつか可能性が考えられる。

例えば、この島にいる魔物を含めた全ての生き物が動物になってしまったとか、「光の教団」に友好的ではない魔物は殺されてしまったとか、何者かに連れ去られてしまったとか、魔物たち自身が脅威を感じて逃げ出したとか。

「分かりました。僕、友達を連れてきます。すぐに戻ってきますけど、危険があるかもしれませんから、何かあったら大きな声で呼んでくださいね」

気を引き締め、表情を硬くしたリュカに対して、リリカは笑った。カラリとした、人を安心させる笑顔である。

「ぼうや、紳士アルなあ。ワタシ子どもより強いネ。心配するなヨ」
「僕、強いよ」とは、リュカは言わなかった。こんな状況なのに落ち着いた様子に見えるその人は、リュカよりよっぽど「大人」で「強い」とそう思えたし、わざわざ自分で言うようなことでもないと思ったからだ。ひらりと手を振って城内に向かう彼女を見送りきる前に、リュカは船へと走った。

「アンドレ！ 聞いてよ！」

「あー？ なんだよ、ソロ。オレまだ回復しきってないんだけど……。もうちよつと休ませてくれよ」

「大変なんだ！ お城の人たちがみんな動物になっちゃって」

船の停泊地の傍、木陰で寝そべりながら休んでいたヘンリーに声を掛けたリュカは、小声で「ラーの鏡でも戻らないんだ」と耳打ちした。「どういうことだ？」

「それが僕にも分からなくて……。正確に言うと、一瞬は元に戻るんだ。でもまたすぐに動物になっちゃうんだよ。だから、人間が動物の姿になってるっていうのは間違いないんだけど、どうやって治せばいいのかが手詰まりで……」

のそりと上半身を起こしたヘンリーは、まだ青い顔ながらも「オレも城を見に行く」と言ってから立ち上がった。立ちくらのせいで恰好は付かなかったが、リュカに先導されて、徐々にしつかりした足取りになりつつ走ってゆく。

「そう言えば、お城の外でリリカさんって人に会って……その人、王様に会いに来たみたいなんだけど、動物しかいなくて困ってたって言うてた」

「つかぬことを聞くけどよ、その人は怪しくなかつたんだな？」

「不思議な喋り方をしてたけど……悪い人には見えなかつたよ」

そんな話をしながら、城の扉をヘンリーが我が家のように無遠慮に開けた。神妙な顔つきになった彼は、城の中に入って動物たちにラーの鏡を向けたが、やはりすぐに動物の姿へと戻ってしまう。

「一瞬でも戻るってことは、効果はあるってことなんだよな。続かないだけで」

「その通りネ。アイヤ、ぼうやたち、便利な物持てるアルな」

思考をまとめるために口に出した言葉に知らぬ声から返事を受け、ヘンリーがびくりと肩を揺らした。

「驚くさせた、悪かたネ。ワタシ、リリカ言うヨ」

「あ、ああ。ソロから話は聞いてるぜ。オレはアンドレ。よろしくな、リリカさん」

「よろしくネ。で、その鏡ヨ」

さらっと言葉を交わして、突然現れたリリカは左右反転しただけの己の姿が映るラーの鏡を指差した。

「それ使う見たアル。人動物なる、呪い違うネ。呪い解くする、普通一回で終わりヨ。戻るする、呪いちがう」

確信を持っている様子のリリカへ、ヘンリーが驚いた顔を向ける。

「詳しいな。商人みたいなナリだが、もしや僧侶や学者だったりするの？」

「勘ネ。ワタシ商人アル。でもワタシ、商人で、旅人で、女ヨ。全部の勘働くアル」

目を丸くしている少年に胸を張って得意顔をしたリリカに、「勘かよ……」とヘンリーはがつくりうなだれた。リュカはそのやりとりに、こんな状況であるというのにくすつと笑ってしまう。

リリカはけろつとした顔で、「ぼうやたち、魔法詳しいか？」と質問をした。少年二人は顔を見合わせ、質問の意図が分からず首を傾げる。彼女の問いに答えたのは、胸の前で腕を組んだヘンリーだった。「多少は勉強してるし、身に付いてるぜ。それがどうかしたのか？」
「ワタシ魔法得意ない。でも勘、分かるネ。これ魔法ヨ。魔法道具アル」

言葉は拙いが、リリカの言わんとすることはヘンリーにもリユカにも伝わった。つまり、彼女は「勘」でこの現象が呪いではなく魔法道具によるものだとは判断し、魔法が得意ならその元凶である道具を探せということである。

彼女の言うように、呪いや魔術と言われる類の物であれば、一度解いてしまえば人々が動物の姿に戻ることはないだろう。戻らないとすれば、それはそもそも解けていないということだ。

一瞬解けて戻る、ということは、魔法が原因であれば掛け続けている誰かがいる。しかしこれは現実的ではない。人であれ魔物であれ、魔力は無尽蔵ではないし、魔法というのは難易度にもよるがそれなりに集中力を要する。

ところが、魔法道具であれば「効果を発動させる仕掛け」さえあれば永続的に魔法を掛け続けるということも理論上は可能だ。ただし、理論上の話であって、そのように加工するのは容易なことではないが。

それでも、呪いや魔術と言われるよりは納得がいく説明だった。

魔法に秀でた者は、自他の魔力を辿ったり分析したりすることもできるようになる場合がある。そして、ヘンリーは「多少」と自称するには謙虚が過ぎるほど、魔法について学んでいた。

「分かったぜ、リリカさん。ちよつと待ってな」

ヘンリーが目を瞑り、意識を空間へ、空気中へ、地面へ、あらゆるところへ研ぎ澄ませていく。そして、たしかに太く密度の濃い魔力が、一か所から流れ出ているのを感じた。

「あつた！」

「んっ、んー！」

少年の声を遮るように、王城の扉を開ける者がいた。丸々と太った僧侶である。年は三十代後半程度に見え、当然リユカたちの船で一緒にここまで来た者ではない。リユカとヘンリーがリリカの方を見るが、彼女はと言えば「知らないアル。誰ネ」と簡潔に否定していた。「いえいえ、私は『光の教団』の信徒であります！ こちらの島の住人が動物にされてしまったという噂を聞きつけ、派遣されたのですよ！ 私は『光の教団』の中でも修行を乗り越え、『奇跡』を授けられた身！ この地に起きた悲しみを晴らしてみせましょう！」

その名前が出たことで、少年たちの空気がぴりりと緊張する。それをリリカは見逃さなかった。見逃さなかったからこそ、少年たちより一歩前が出る。そして真っ先に口を開いた。

「アイヤ、これはありがたいネ。で、ここの人達、なぜ動物力？ ワタシ、知りたいアル」

「教えてしんぜよう！ それはこの地に降りそそいだ恐ろしい『呪い』の仕業です！」

「なぜ呪うされたか？ メダル王悪い人か？」

「ええ！ メダル王を名乗るこの地の主は、珍品を集め、人を呼び込み、訪れた人々を騙してロクでもない物を与える詐欺師なのです！ これは天誅でしょう！」

次の瞬間。三つの光が、信徒の目には映った。

己の首に中てられたうちの一つは、黒髪の少年が手にする剣の刃。もう一つは、反対側から同様に茶髪の少年が手にする剣の刃。そして最後の一つは、正面から据えられた桃色の髪の女が手にする大型のそろばんだった。

「詐欺師、オマエ。答えるアル。『呪い』、どう解くつもりか」

「それは——この『奇跡の杖』を使って——」

冷や汗と脂汗を全身から噴き出した信徒が、動くことを許されない

ながらも、絶え絶えに話す。どうやら、腰に佩いた朴訥な木の杖のことを言っているらしい。目立たないながらも、頂点には魔石が埋め込まれ、魔法道具であることがうかがえる。

「これ……マホトーンの方が込められてる。それも、かなり強力にだ」「ふうん」

ヘンリーの呟きに反応したりリリカがそろばんを背に戻し、信徒の腰から杖を取り上げた。商人というより盗賊と言う方が納得できる速さであった。

「じゃ、封じる前に原因見つけるするネ。封じる後、魔法見付ける、難しい。違うカ？」

「あ、そ、そうだな。じゃあオレ探してくるよ。ソロとリリカさんは、ここでこいつを見張っててくれ」

茶髪の少年が剣を鞘に納める。しかしながら、だからと言って信徒がほっと一息つけるわけではない。まだ一振り、彼の脈を狙う剣がある。しかもその持ち主である黒髪の少年の視線はあまりにするどく、「光の教団」の説法をして非暴力を訴えれば最後、その首を刎ねてやるという意思が感じられた。

「ソロ、鏡貸すヨロシ」

「返してくれるなら」

「ワタシ盗賊違うアル。商人ネ。借り物、利子付く前返すヨ」

リユカは頷き、構えた剣を下ろさなまま、袋からリリカがラーの鏡を出すのを許可した。

「人間ネ。ワタシ旅する、『光の教団』おかしな連中聞いたアル。魔物と手を組むするも聞いたヨ。オマエなぜ『光の教団』いるカ？」

「ひっ、光の教団はっ！ 素晴らしいところですよ！ 世界に蔓延る闇を打ち払い、奇跡を起こす!! こんなことをして、許されるはずがありません！ なぜなら私は奇跡を託されて——」

「ソロ、剣下ろすアル」

リリカの声は冷ややかだった。そして再び、そろばんを背から手に持つ。

「オマエ、かわいそうアル。『奇跡』託されるした、ならなぜオマエ、一

人力？ なぜワタシたち来たとき同じ、オマエ来た力？」

瑠璃色の目が信徒を見据える。見つめられた男は、その瞳に怯えた顔の己が映ったのを見て、より怯えた。

「答えは、『いなくなっても困らない無知な者の方が使い勝手が良いから』、『奇跡を起こすのは教団じゃなくてはならなかったから』、『教団が奇跡を起こすところを見て、吹聴する誰かが必要だったから』じゃないですか？ ……でも、お目付け役はいる、と」

へたりこんだ信徒に見向きもせず、リュカはその切っ先を上へ向ける。その先には、天井に張り付いた魔物がいた。ダックカイトと呼ばれる、大きなくちばしと全身にある被膜が特徴的な魔物である。

「しくりやがって、豚野郎が……！」

口汚く信徒を罵った魔物は、滑空して扉から外へ出ようとした。しかし、それを逃すリュカではない。

「バギマツ！」

真空の刃が魔物を襲い、まともに食らったダックカイトは悲鳴を上げて地に落ちた。それを見て、信徒は腰を抜かしたまま悲鳴を上げる。

「オマエ、死にたい違うなら、離れるするネ。一応危なかつたら守てやるアル。謝礼はあの杖でいいヨ」

そろばんを手にしたリリカは、にやりと信徒に笑い掛けた。一方、落ちた魔物へ追撃するべく剣を振り上げたリュカは、その首を刎ねる直前で腕を止める。

「教団の目的はなんだ。なんのためにこんなことをした」

「ゲツゲツゲ……さあな。知りたきや教祖様に聞いてみるこつた」

リュカが唇を噛んで激情を押し殺した一瞬を、魔物は見逃さなかった。素早い身のこなしで体を捻り、切っ先から逃れることに成功。

「ずらからせてもらうぜー！」

宙に浮かび、扉の外へ飛んで行こうとしたダックカイトは、次の瞬間再び地に落とされることとなる。

大型のそろばんを携えて跳躍した女商人が、ハエでも叩くように、飛び上がるうとした魔物の頭を殴打したのだ。まさしく会心の一撃

である。

「オマエ馬鹿ネ。数で負けてる、気付いてなかつた力」

「ぐ、ぐう……」

意識を失ったダックカイトにそろばんを向けながら「オマエ、教団戻る力？」と顔は信徒へ向けるリリカ。

「えっ、あの、その」

「戻る止めないネ。戻らない、殺す」

「ま、待ってよりリリカさん！ 言葉間違えてない？ 普通逆だよ！」

慌てて信徒を庇うように立った少年に、商人はにこりと笑みを向けた。

「間違わないアル。オマエどうせ教団戻るできないネ。戻る、魔物に殺される。戻らない、ワタシ殺す」

「ひ、ひいい……！ 私は教団が魔物と手を組んでいるとは知らなかったのです！ いえ……その、教団にいる魔物は、教祖様のすばらしいお話に心打たれ、改心しているから害はないのだと聞かされていまして！ 本当にそうだと信じていたのです！ 私は教団に心を救われました！ で、ですが、あなた方の言う通り罪もない人々にもこのような仕打ちをしていたのだとしたら……！」

リリカは少年に向けた笑みを、信徒へも向ける。

「したら、何ネ」

「い、今までのように教団を信じることはできない……！ 光の教団をやめ、ひっそり暮らしていきます！ どうか、どうか命だけは……！」

「オマエ死んだ方がいいヨ。生きててもいいことないアル」

「リリカさんッ！ 言い過ぎだよ」

言葉とは裏腹にそろばんを背負い直した商人は、眉を寄せ厳しい表情になる少年へと、片目を瞑り、己の口元に人差し指を当てた。

「死人に口なし、アル。とりあえず魔物は捕えるネ。聞きたいことある、違う力？」

袋からロープを取り出して、手際よく魔物を簀巻きにしたリリカの様子を見て、信徒とリユカが目を合わせる。なんとなくお互い頷くと、視界の端で動物になっていた人々が元の姿に戻ったのが映り、リユカは周囲を見回した。

「おーい、戻ったぜ。あ？　なんだその魔物」

ヘンリーが、両手に一本ずつ杖を持ちながらゆったりとこちらへ向かってくる。なんにせよ、国の人たちが元に戻ったのはよいことだ。「その光の教団の御目付役ネ。意識ないアル。殺す、生かして話聞く、任せるヨ。ワタシ光の教団興味ないネ」

「了解。こつちも解決したぜ。原因はコレだな。『変化の杖』……：天空の勇者が魔王の城に潜入するのに使ったって言われてる伝説の杖だ。城の裏に認識阻害の結界と魔法陣があつて、その中心にコレがあつた。多分、描かれてたのは杖に込められた魔法を永続的に発動させる類の魔法陣だな。起動装置として、この島にいた気のいい魔物たちが使われてたよ。衰弱してたから、今は木陰で休ませてる」

「それ貸すネ」

リリカが手を伸ばすと、ヘンリーは素直に変化の杖を渡した。

「珍しい道具ヨ。酷使されて本来より力落ちてる可能性あるネ。使うしすぎる、壊れるアル。でも、そこらで売っていい物違うネ。大事に持つヨロシ。その魔封じの杖、ワタシもらうネ」

「へえー。さすが商人。目利きはお手の物つてか。ちなみに、こつちの杖はどう見る？」

ぽいつ、と投げ渡された魔封じの杖を受け取り、リリカはヘンリーをちよつとだけ睨む。商人は物を大事にするのだ。

「ただの魔封じの杖違うヨ。かなり広い範囲で魔法封じのできるネ。ただしこれ諸刃の剣。術者もしばらく魔法使えなくなるアル。範囲と強さ、封じる対象で変わるするネ。使うしすぎる、壊れるアル。これも売っていい物違うネ。ま、ワタシ売るしない、大丈夫ヨ」

袋を提げている腰ベルトに杖を挿し込み、リリカはぽんと手を打つ

た。

「こんな場合違ったヨ。ワタシ王様に話聞くする。オマエ一緒に来るネ」

怯える信徒の首根っこを掴む女商人へ、リユカは困ったように眉を下げる。事情を知らないヘンリーは、はらはらとした表情を浮かべる親友に対して何かを思い至ったのか「じゃ、俺この魔物見張ってるから、ソロはリリカさんと一緒に王様に挨拶行ってくれよ」と提案した。「あ、うん。まあ大丈夫だと思うけど、一応警戒してね」

「ああ。船の近くで、船員たちと一緒に見張ってるよ」

存外力が強いのか、軽そうには見えない太った成人男性をずるずると引きずっていく女商人を小走りで追い掛けていく親友を見て、ヘンリーは軽く笑った。

「いつまでたっても、お人よしは抜けねえよなあ。ま、それがアイツの良いところなんだけど」

そして、自身も簀巻きにされた魔物をずるずると引きずりながら、船の停めである場所へと向かう。

「変化の杖、か」

天空の勇者の物語の中で、必ず出てくる貴重な伝説の杖。それが教団の悪事利用されていたことに、怒りと嫌な予感を感じながら、ヘンリーは舌打ちをした。

優しい人

玉座の間では、喜びを隠し切れない様子の王様に、リリカが傳っていた。ちなみに、首根っこを掴まれていた信徒は、今度は頭を押さえられて無理やり首を垂れさせられている。リユカはおろおろとリリカと信徒、それからメダル王へと視線をさまわらせていた。

「ソコ、それから商人の娘や。全てを見ていた。顔を上げておくれ。礼が言いたいのじゃ」

「もたない言葉ネ。王様、ワタシこの男殺す——この男の人生をやり直すさせるアル。この国、こんなことした教団の一人、ワタシ殺したことする、それで許すしてほしいヨ」

それを聞いてリユカはほつと胸を撫で下ろす。言葉はキツイものの、彼女の言葉が比喩であつてよかつた、と心底から思った。この人は光の教団にいたとはいえ、騙されていただけだ。きつと、真実を知って目を覚まし、「救われた」と言っていたそれがまやかしかつたことにも気付いてくれるはず。

当の信徒は「え!? え!?」と騒いで頭を押さええる手に力を籠められ、「ぐうう……」と強制的に黙らされていた。

「人は誰も、失敗するものネ。信じるする、すごい力生むヨ。でも——信じて、誰かを傷付けることある。間違ふことある。後悔することある。そうして、ワタシたち生きてるアル。ワタシ商人。預かるしたなら、利益生むネ」

「——そなた、名を何という?」

「リリカいうアル」

メダル王の視線は優しい。そして、玉座から立ち上がると、信徒の頭を押さええていたリリカの手を外させ、両手でその手を包んだ。

「リリカや。そなたの心の美しさ、しかと見た。心配せずとも、この哀れな男を罪に問うなどせぬ。悪いのは全て……」

「うぐつ、ぐうう……!」

王の言葉を遮るように、信徒が呻き声を漏らす。その声を聞いた周囲の者は、男よりもまず、リリカを見た。やりすぎたんじやないか、と彼女の少々乱暴な態度を非難するように。

「何ネ、大袈裟なやつアル。ワタシそんなに強く打ち付けるしてない……」

そんな視線を受けたリリカが、呆れた顔を男へ向けたそのとき。

「私から離れてくださいッ！」

信徒が脂汗を流しながら、必死の形相でそう叫んだ。

「教団から賜った『奇跡の証』が……ッ！ 熱を持って……!!」

強い力で胸を掻きむしり、男の服が破れる。破れたその先、本来なら素肌が見えるはずのそこには、禍々しい色の宝玉が埋められていた。

「わ、私から、私から離れて——!!」

にわかに騒がしくなる城内。騒然としたその場で、唇を噛みしめたリリカがそろばんの柄を床に打ち付け、大きな音を出した。

「思ってたより、ふざけた連中ネ……!!」

「リリカさんっ」

男から最も近い位置にいるリリカの名を心配したりユカが叫ぶも、彼女は少年へ視線を向けない。そして苦しむ男を見ながら、ふう、と軽く息を吐いた。

「ぐおおおおおー！」

男が心臓のある場所を掻きむしっていた腕が、肥大する。針金のような硬質な毛に覆われ始め、苦悶の声を漏らしていた口には鋭い牙が生え、目が血走っていく。

「オマエ——悪かたね。安らかに眠るするアル」

それはあまりに速く、無駄を省いた、容赦のない一撃だった。

邪悪な宝玉へ、そろばんの先端が突き刺さる。見事な一突きだっ

た。血走った眼は輝きを失い、屈強に変化し始めていた四肢はだらりと力を失って、男は元の姿に戻りながら床へ崩れ落ちてゆく。

己より大柄な男が倒れきる前に抱き留めたりリリカへ、抱き留められた本人はふつと笑った。

「あなたの元で生まれ変われなくて、申し訳……ありま、せん……」

リリカはゆっくりと男を床に横たえ、己の砕いた宝玉の欠片を手取る。固められていた砂が崩れるように、ぼろぼろと形を失っていく男だったものは、やがてそこには何もなかったかのように塵一つ残さず消えた。

沈黙が城を包む。しかし、立ち上がった女商人がそれを破った。

「ワタシ探してるの、きれいな宝玉ネ」

彼女の表情は、当然険しい。

「こんな禍々しい物違う、まんまるできれいで、神秘の力宿す物ヨ。それ探してこの城来たアル」

視線を向けられたメダル王が、ふるふると首を横に振る。

「……すまんが、わしは持つておらんのう」

「それなら、情報欲しいアル。ここ、様々な旅人の訪れる地聞いたネ。ワタシ宝玉……『オーブ』集めてるヨ」

リリカの言葉に、リユカはドキリとした。彼女の顔が、真剣そのものだったこともあり、これが三年前のリユカであったのなら、「僕、持つてるよ」だなんて迂闊に言っていたかもしれない。

「その昔、レヌール城という北方にある城に光る宝玉が落ちたという逸話は聞いたことがあるが、そなたの求める物かどうかまでは……」

「レヌール城……覚えたアル。感謝するヨ。ワタシ、そこ行ってみるネ」「あ、あのー！」

だからこそ、リユカは無礼にも二人の会話に割って入るように大きな声を上げた。お城の教育係が見ていたら、顔面を蒼白にしてその後

くどくどと説教を浴びせてきたことだろう。

「ぼ、僕、昔レヌール城におぼけ退治に行ったこと、あるよ！」

けれど、言わずにはおれなかった。リリカが、ただの収集癖でそれを求めているとは思えなかったからだ。それも、こんなことがあった後すぐに。

彼女の表情は、必死ささえ感じさせるものだった。そんなに求めている物を、自分は持っている。しかしながら、それを軽々しくは言えない。彼女がレヌール城へ行くことが無駄足であると明白だとしても。

「レヌール城には、オーブなんてなかったよ！ 銀のティーセットならあったけど！」

行かなくていいのだと言うことしか、言えなかった。

「ソロ、教えてくれてありがとネ。でも、ワタシ行くアル。オーブ、ワタシが——仲間に会うための手段ヨ。自分の目で見てないモノ、諦めるの無理アル」

同じく、人探しをしている身として、リユカは心臓が締め付けられるような気持ちになってしまう。何を言えばいいのか分からなくて、彼はもう一度口を開きかけた。

「おい、城の方からすごい声が聞こえてきたけど、大丈夫か!？」

しかし、慌てた表情で城に戻ってきたアンドレの方へとリリカの注意が向いてしまい、それはかなわなかった。ほんの少し、リユカはほっとした。だって、口を開いたとして、「自分が持っている」という事実を隠したまま、彼女を納得させられるとは思っていないなかったから。

「アンドレ！ 無事か?！」

「ああ。魔物の目が覚めて突然自害したんで驚いたけどよ。そしたらそのあとすぐに城から魔獣の鳴き声みたいなのが聞こえてきたから、慌ててきてみれば……あれ? 光の教団の信徒はどうしたんだ?！」

「死んだヨ。胸に埋まてた趣味の悪い石の力で、魔物に変わるりするしそっだた。だからワタシ殺したアル」

淡々と述べるリリカに、リユカは思わず眉をひそめて語気を強め

た。そんな自虐的な言い方、彼には到底納得ができなかった。

「リリカさんは悪くないんだ！ あの人は苦しんで、それを止めただけで……！」 光の教団があの人にあんなものを埋めたから……！」
少年の義憤の言葉に、リリカは瑠璃色の目を細めて悲しく微笑んだ。それからふるふると首を振る。

「もちろんワタシ悪いわけではないアル。でも、ワタシ殺した事実ネ。それ、悪い悪くない問題と違うヨ。まあ、長く旅すればそういうこともあるネ。ソロや王様に怪我がなくてよかたヨ」

「うむ。この国を救ってくれた三人には本当に感謝しておる。そこでちと話は変わるが、恩人たちへぜひ褒美を取らせたい。そなたらの旅に、ぜひ役立ててほしい物があるのじゃ」

悲痛な顔をするリユカを見て、メダル王が話題を引き継いだ。いそいそと宝箱から美しく磨かれた剣と鎧を取り出し、話題を変えた王の配慮は見事功を奏し、三人の視線が褒美へと注がれる。特に、商人の性なのかりリカはじつとそれらを見つめ始めた。

「……両方、回復魔法がこめられてるアル。ワタシ装備できないネ。ソロとアンドレがもうヨロシ」

そう言われた少年たちは、慌てて両手を左右に振る。まるで本当の兄弟のように、ふとした仕草が似ている二人だな、とリリカは少し微笑ましく感じた。

「でも、リリカさんは商人だろ？ 装備できなくても困るもんじやないなら、譲るぜ。だって、オレたちがやったことって言えば、リリカさんの言葉通り変化の杖を探し出したり、出てきた魔物を伸したりしたくらいじゃねえか？」

「そうだよ！ 何なら、魔物だってリリカさんが倒したじゃないか。僕らはもらえないよ」

そして、人が好い。女商人は肩をすくませ、話がまとまるのを待たせてくれているメダル王へと小さく目礼した。

「アイヤ、欲のない子どもたちネ。ま、その話は城の外でするアル。王様たち、魔法解けて疲れるしてるネ。休ませるヨロシ」

「あ、うん……」

王様から受け取った剣と鎧を少年たちに手渡したりリリカは、納得のいっていなさそうな二人の背をぽんと押す。彼らが背を向ける前に、とメダル王がほろ苦く笑いながら「せつかちじゃのう」と引き留めた。「ソロ、アンドレ、リリカ。この国の者は、受けた恩義を絶対に忘れぬ。また来るとよい。その時のために、リリカの求めるオーブのことや、二人の探す天空の勇者にまつわる装備のこと、世の中の珍しい品々について情報を集めておくとしよう。いつでもこの国へ立ち寄るとよい」

「ありがたきお言葉、感謝するアル。それじゃ、失礼するネ」

再び傳いて、言葉の珍妙さとは裏腹に品のある礼を取ったリリカは、少年たちの腕を取って城を退出した。三人の背を見て、メダル王はどこか悲しい視線を向ける。

——この国には、多くの旅人が訪れるものじゃ。

メダル王は誰にでも分け隔てなく訪れた者たちを歓待し、小さなメダルを持って来たらその枚数に応じて褒美を取らせてきた。褒美目当てに何度も足を運ぶ者もいれば、この国の穏やかな雰囲気魅せられて、心を癒しに立ち寄る者のいる。

常に門の開かれるメダル王の城には、たくさんの方が訪れるゆえに、彼は旅人を見る独特の「目」が備わっていた。

——彼らの旅路に、幸多からんことを。

だからこそ、この国を訪れる多くの旅人と違って、彼らが苦難を越え、これから先もまた苦難に向かっていくことを感じ取ってしまう。

世界一穏やかな島の主は、そつと目を伏せ、玉座に深く腰を掛けた。

*

城の外に出ると、リリカは改めて少年たちへ向き合った。

「動物しかいない国思て途方に暮れてたところだたネ。解決できてよかったヨ。二人ああ言た、でもワタシそう思うないアル。ワタシ変化の杖の場所分からなかつた。魔封じの杖使うしても、効果切れるする、また元通りかもしれなかつたネ。解決した、二人のおかげアル」

「まあ、じゃあ、三人のおかげってことにしようぜ。ありがとな、リリカさん」

ヘンリーとリリカが握手をして、その後リュカも彼女と握手を交わした。差し出された手を握り返すと、その手が商人というよりは武人のものであるように、リュカには思えた。けれど、何も言わない。もしも女性一人で旅をしているというのなら、武道の心得はないよりあった方がいいし、彼女は強い人だ。戦う力というだけでなく、心も。「そういえば、リリカさんって、仲間とはぐれちゃったの？ どうしてオーブってやつが必要なの？」

その手を離れた後、リュカは自分が詮索されたくない身の上であることを棚に上げて、そんなことを口走っていた。後ろめたさを感じながら、おどおどと上目遣いに質問を重ねる少年に、女性は瑠璃色の目を優しく細める。

「オーブ必要な理由、言た通りアル。ワタシ、会えなくなった仲間、どうしても会いたいネ。謝らなくちゃいけないアル。オーブ、そのための希望ヨ」

リリカは、しゃがんでリュカに視線を合わせながら、揺るぎない意思を感じさせる凜とした口調で質問に答えた。反対に、リュカの瞳は揺らいでしまう。

リュカはこの人の気持ちが分かるからこそ、オーブを譲ってあげたい、と心から思った。

だけどオーブには、リュカの思い出が詰まっている。それに、偉大な父から「大切な物だ」と散々言い含められてきた。譲ってあげたいのに、簡単にそうは言っただけで譲られない自分がいくじなしに思えて、つらくなる。

「リリカさん。僕、その、リリカさんのお話を聞きたいな。旅をしながら商売をしてるんでしょ？ 僕たちも探し物をしてて……物だけじゃなく、人捜しも。僕たちって似てる気がするんだ。だから、情報交換をしようよ」

リュカはどこか縋るように、リリカの目をまっすぐ見た。

へんてこな話し方とはミスマッチなほど知的な瑠璃色の目に射貫

かれ、自然と少年の背筋はすつと伸びる。その目は、続けることを許してはくれないと感じ取ったからだ。

優しく笑い掛けてくれる「お姉さん」ではなく、彼女は今、「商人」の顔をしていた。彼の話に割く時間が有益なものであるかどうかを思案しているようにも、少年自身を値踏みしているようにも見える。リリカは、ふ、と一つ息を吐いた。

「ふむ、話してみるヨロシ」

「じゃあ、僕たちの欲しい物とか、なんでそれが欲しいかってことをまづは伝えるね」

頷いたリリカへ、リユカはヘンリーと視線を交わす。もちろん、その視線は彼が話をすることを反対するものではなく、「説明はお前に任せた」という全幅の信頼によるものである。

リユカは海に落ちてはぐれてしまった仲間のことや、故郷に掛けられた呪いを解きたいこと、それからある理由のため天空の勇者を探していることを、かいつまんで伝えた。

「魔物一緒の少年、ワタシ知らないアル。天空の勇者、ワタシ勇者のこと調べた、だからいくつか知てるヨ。ソロたち知てる内容たくさんあると思う、期待しないことネ。たくさんの人掛けられた呪い解く道具――」

白い指を唇に当てながらリリカは考えるように宙を見て、それからリユカとヘンリーへと順繰りに視線を移す。

少年たちは言葉の続きを焦らす女商人が、自分を傷つけないために言うのをためらっているのだと捉えて、「気を遣わないで」と言おうとした。

「ワタシ、持てるヨ。でも、タダでは譲れないネ」

時が、止まった気さえする。そんな衝撃を、リユカとヘンリーは受けた。ストロスの杖ではだめだと言われ、そんな道具は知らないと言われ。グランバニアの人々のためにどうにかしたいのに、こればかりは手掛かりが何もない状態だった。それなのに、この女商人は情報

を知っているどころではなく、「それ」を持つているのだと言う。

リリカは子どもをからかう大人の、男を翻弄する女の顔でにやりと笑った。

「だから、交換ネ。ソロの持つオーブと」

「えっ!?! な、なんで!?!」

リユカは久しぶりに、子どもらしく本心から慌てふためく。オーブは袋の中にしまつてあるし、持っているなんてことは一言も口に出さなかつた。彼は「なんで知ってるの?」とうっかり漏らしてしまわなかつたことに、自分自身を内心で褒めたたえながら、落ち着かない心臓を無理やり落ち着かせようとした。

「顔、書いてあたネ」

つん、と鼻先を指ではじかれて、それも失敗。目を白黒とさせていると、リリカは楽しげに笑った。そうして笑うと、なんだか少し幼く見える。リユカを値踏みしていた表情は二十代の妙齡の女性にも見えたが、今は十代後半の少女と言われても納得できた。

「話割り込むする、『レヌール城にオーブはない』言う、ワタシ最初レヌール城にオーブ『ある』知てるから思たネ。でも違うヨ。ソロ、オーブ持てるアル。持てること言えない、だからワタシにオーブ必要な理由聞いた、違うカ?」

問い掛け、ではなかつた。彼女は自分の言葉に確信があり、事実確認を行っただけなのだろう。その証拠に、瑠璃色の目には人を騙そうとしている者がする特有の「暗さ」がなかつた。

「ワタシの理由納得する、そしたら譲れる思てるヨ。でも、大切な物、簡単に譲れない、当たり前前ネ。だから、情報、それかワタシの持ち物、釣り合うモノ交換しよう思てるアル」

「あー、リリカさん。どうして、そんな風に思うんだ? ちよつとばかり、強引じゃねえか?」

己の心を見透かされて戸惑っている親友に代わり、ヘンリーが顔を引きつらせながら質問をする。リリカはにやにやと楽しげな笑みのままだつた。

「勘ネ。商人の、女の、武人の、旅人の、全部の」

リユカは長いため息を吐いて、黄金に輝くオーブを袋から取り出す。その美しさに目を見開いたリリカだったが、すぐに真剣な眼差しに切り替わった。まじまじと見つめ、それから、小さく首を振る。

「これ——ワタシの求めるオーブ違うアル」

そう一言呟くと、彼女は人に見られないうちにとその眩い宝玉を袋に戻すように言った。

「分かるの？」

「分かるネ。ワタシ旅人で、商人ヨ。珍しい物たくさん見てきた、目利き自信あるネ」

しかし彼女は、落胆は見せないで、リユカの頭を撫でた。昔みたいにターバンはしていない。昔と似たような恰好をしていれば、それだけで思わぬ誰かに連想させてしまうことがあるだろうから。

「大事にするアル。ワタシの求めてる物違う、でも神秘の力宿る物ネ」
「あの、じゃあ。えーつと、それでも僕、リリカさんの話がもつと聞きたい。……呪いを解く道具のこととか」

「これネ」

ぽいつと無造作に渡された小袋の中には、粉が入っていた。これが何なのか、商人でもなく目利きのできないリユカにもヘンリーにも分からない。

「これ『目覚めの粉』言うネ。振り撒くすると、眠てる人目覚めさせる物アル。ただの眠り違う、呪いの眠り効くヨ。体に流れる時間眠らせる呪い、グランバニアという国掛けられたものよく似てるアル。エルフの秘薬ネ。眠りだけ違う石化の呪いだとしても解くはずヨ」

「こ、これ……もらつていいの？」

「馬鹿なこと言うでないアル。ワタシ商人。タダで物くれてやるワケないネ。オーブじゃぼたくりすぎ、ワタシもうちよと優しいアル。持ち物全部見せるヨロシ」

尊大にそう言つてのけるリリカに対して、リユカはなぜかヘンリーと似た雰囲気を感じ取って、思わず親友を見た。彼はその視線をどう

勘違いしたのか、「ここまで来たら見せるしかねえだろう」と諦め顔で肩をすくませる。

「オレたちの持ち物全部見たんだから、リリカさんのも見せてくれよ。オレたちにだって、『目覚めの粉』以外にも欲しい物があるかもしれないし」

「お断りネ。条件変更するヨ。ワタシ、『目覚めの粉』だけ違う、珍しい物譲るアル。ソロ、オーブ渡す、それで等価に近付けるネ」

腕組みをしてヘンリーの案を棄却し、折衷案を提案してくるリリカに、リユカはまっすぐ目を向けた。

リリカは商人だ。目利きするのはもちろん慣れているが、値踏みさされていることにも慣れている。けれど、リユカのそれは不快ではない。自分より上か下か、という値踏みではないからだ。心の底から、リリカがどんな人か知りたがっている。そのうえで、自分も相手も納得できる方法がないかを探しているのだろう。

こういう、まっすぐで善良で、けれど責任感があるゆえに軽率な行動ができなくて思い悩む人を、彼女はよく知っていた。そしてよく知るその人に、悩める少年はよく似ている。だから、リリカはその値踏みを甘んじて受け入れた。

「僕——リリカさんが仲間を探すためなら、オーブを渡してもいいって思ってたんだ。だってリリカさん、本当に仲間に会いたがっているだろうし、その気持ち、僕は痛いくらいに分かるから」

言葉を区切り、交渉も、話術も、リリカと比べれば随分未熟な少年は、真摯に言葉を選んでいる。

「今でも、譲ったっていいと思ってる。でも、あのオーブは僕の大事な思い出が詰まっついていて、しかも大切な人たちに『大事にするように』って言われてて……。だからやっぱり、簡単に譲るとは言えない。でも——」

リユカは一度、目を閉じた。瞼の裏に浮かぶのは、幼い日の自分と友達の、勇気を振り絞った一夜の大冒険。もう二度と会えない人々。リユカたちを案じる困り顔のまま、時を止めた叔父の姿。

「故郷の呪いは絶対に解きたい。天空の勇者にも絶対に出会いたい。

もちろん、はぐれた仲間によって会いたいし、大事な人との『約束』だって、守りたい」

リリカは今度は、リュカとヘンリー、二人の頭を撫でた。

「全部選ぶ、みんな願うことネ。全部選べて、手にする、すごいことヨ。でも、人間の手大きいと違うアル。ソロ、ワタシの仲間よく似てる。全部選んで、いなくなた人ヨ。その人全部選んだ、でも、自分のこと選ばなかつたネ。だからワタシ、さみしい。さみしい、くるしい、かなしい、我慢できない」

女商人は少年を見ているようで、遠くを見ている。ヘンリーが、あるいは自分も、昔話をするときの顔だ。親友同士、それを感じ取ったのだろう。少年たちは彼女の寂しさを、悲しさを、つらさを、正しく理解した。

「だから探してるアル。全部選ぶ、強欲ヨ。だけど、選ぶ人、ワタシ好きネ。でも、自分選べない人、周りさみしい。全部選ぶ、自分も選ぶ。ソロ、アンドレ、それできるか？ いつもそれしよう、思えるか？」

リリカの言葉は拙くて、リュカは彼女が言わんとすること全てを理解できたわけではない。けれど、その瑠璃色が「オーブを探している」と言った時と同様に、あまりに真剣で、必死で、だからその質問に対して「言葉が分かりにくかったから」と曖昧な答えは返せないと思った。言葉で伝わらずとも、彼女の心からの願いで、訴えであることは伝わったのだから。

「リリカさん。僕、絶対に自分のことをないがしろにだなんてしないよ。僕の命は生かされたもので、それをないがしろにするのは、僕を生かしてくれた人たちへの裏切りだ。僕は絶対に、僕の大切な人たちを裏切らない。自分を犠牲にだなんてしない。約束する」

「ああ。肝に銘じておくぜ」

旅の商人は、小さな少年たちの体を抱きしめた。

「約束ネ。なら、ワタシ『目覚めの粉』あげるヨ。対価、みんなの命、みんなの幸せ」

「じゃあ、僕もオーブをあげる。僕、リリカさんに譲りたいんだ。リリカさんがもう、寂しくないように」

リユカとヘンリーが抱きしめ返すと、彼らのつむじにあたたかな雫が落ちる。鼻をすする音も聞こえたけど、二人は顔を上げず、少し震えているリリカの背を、とんとんと優しくたたいた。ぐずる赤子に母親がそうするように。あるいは——眠れない夜に、父がそうしてくれたように。

あなたへの花

リリカはゴールドオーブに釣り合うように、と「目覚めの粉」と「悟りの書」という巻物、ついでにメダル王から賜った「奇跡の剣」と「神秘の鎧」を彼らに譲った。

「でも、王様もせつかくなら三つくれればよかつたのになあ」

「リリカさんも言つてたじゃないか。あの二つは掛かっている魔法も似てるし、王様が僕ら二人とリリカさんつて分けて考えてたなら、釣り合いの取れた物だったつて。一人一つだったとしたら、同じような価値の物じゃないと不公平になっちゃうから、そういう物が他に手元がないなら間違つてないつて」

「まあ、そりやそうだけだよ。リリカさん、商人だけどちよつと損得勘定甘い気もするぜ」

その損得勘定の甘い女商人は、タイミングよく訪れた内海をめぐる定期便に乗っていた行商人から花飾りを買取っていた。

白い花を模った、髪飾りにもブローチにも使えそうな、可愛らしい花飾り。「花、あるいはそれを模した物がないか」と特徴的な口調で尋ね、「これくらいしかない」と差し出されたそれを、彼女は迷いなく買取っていた。

その時のあまりに凜と伸びた背筋が、細いのに頼りなさを感じさせない肩が、大人びた横顔が。

彼女の強さと、弱さと、——彼女のあらゆることを表現しているような気がして、リユカもヘンリーも、声を掛けられなかった。

買い物を終えた彼女は城の裏手に向かつて、目立たない場所にそれを置いた。本来は女性への贈り物として作られたのであろう花飾りは、穏やかな空気の流れる島にあつて、特に違和感を抱かせない。リリカは少しの間膝を付き、目を瞑り、——おそらく、死者を弔っていた。二人も、彼女に倣つてその可憐な花飾りへ手を合わせた。光の教団を信仰していたとはいえ、騙されて非業な死を遂げた人に、せめて

安らかに眠れるようにと。

そんな二人を見て、リリカは微笑みを浮かべた。それから、せつかく訪れた定期便に乗り遅れる前に、と手を振って自身の旅へと戻ってしまったのだった。

出会いもあれば、別れもある。それは悲しいことじゃないと、ようやく思えるようになってきた少年たちは、外海へ出るために出航準備を手伝うことにした。

悲しいだけの出会いにたくないから、頑張ろう。リリカはそう思わせてくれた。再び出会えることをあれほど強く信じて旅をする人を見ていたら、自然も自分たちも前向きになる。

「そんなこと言ったらルドマンさんだってそうだよ。案外、すごい商人ほど細かい損得については考えないのかもよ」

「あ、確かに。うーん、やつぱ器のデカさってのは人柄に出るモンだよなあ。ま、オレは『浮浪児のアンドレ』だから別にいいけど」

おどけるヘンリーに、リユカはけらけらと笑う。

二人はリリカに、世界を旅するなら一緒に来ないかと誘おうとして、そうはしなかった。お互いに相談せずとも、自分たちの旅に付き合わせるわけにはいかないと理解していたからだ。リリカは仲間に出会うためにオーブを探す旅をしている。けれど、二人は悪に立ち向かい、リユカの母親を救うためにあれこれ探さなくてはならない。オーブを探すだけよりも、よっぽど危険が付きまとう旅だ。リリカが「善い人」であればあるほど、誘ってはいけないと強く思った。

「あのさ。オレ……自分でもオーブをリリカさんに譲ってたと思う。でも、本当によかったのか？」

急に神妙な顔になったヘンリーに、リユカは穏やかな表情を向ける。

「僕が持ってたって、使い道も分からないし。リリカさんなら、きつと必要な場所、必要な時に上手く使ってくれると思うんだ。もしも僕らにとってオーブが必要な時がきたら、そのときはリリカさんに会いに

行けばいい。天空の勇者とその装備と同じさ。物の所在が分かれば、迷わないだろう?」

自信を持ってそう言い切った親友へ、ヘンリーはがしがしと頭を撫でた。今日はよく撫でられる日だなあ、とリュカはそんなことを思った。

「さあ、準備もできたし、出発しよう。エルヘブンで何か情報を得たら、すぐにグランバニアに戻ってみんなを元に戻してあげなくちゃ」「あ、お、おう……いつそ誰かにラリホーでも掛け続けてもらいたいぜ……」

げんなりした顔でつぶやくヘンリーの頭を、リュカは撫で返した。「子守歌でも歌ってあげようか?」

「リンクスと合流したら絶対お前にラリホー掛けさせて、その間やりたい放題に悪戯してやるから覚悟しとけよ」

慈愛に満ち溢れた提案を受けた親友は、額に青筋を浮かべ、撫でていた手をつねりながら睨んでくる。そんな彼に向けておどけた表情を浮かべ、少年はつねられて赤くなつた手の甲をさすつた。

「まったく、君ったら短気なんだから」

「悪いがお前よか気長だぜ」

そんな場面が一度でもあつただろうか、と疑問を浮かべながら、リュカは首を傾げる。呆れたように肩をすくめたヘンリーは、「さつさと行くぞ」を大嫌いな船旅を急かしてきた。

ふと、いつの日かあれほど恐ろしいと感じた海を覗き込む。

水面は瑠璃色で、「自分を犠牲にするな」と、——多分そういうことを言いたかつたのだと思う——不思議な話し方をする優しい人を連想させた。「さみしい」と、真剣な眼差しでそう言った彼女が、いつか会いたい人に会えればいいと思う。彼女と約束したように、リュカだつて、みんなが幸せになれる道をいつだつて探していく。

恐ろしいと思えなくなっていた海から、この日リュカは初めて勇気をもらえた。

瑠璃色は勇気をもらえる色だ。優しく、賢く、「さみしい」と言いながら決して諦めないその人が、背中を押してくれるような気がするか

ら。

最初に動き出したのは、ゲレゲレだった。気まぐれな「暴力」は己の放った棍棒を拾うために、のそりのそりと鷹揚な様子で歩き出す。魔物が初めの一步を踏み出した瞬間、勇敢なキラパンサーは、怯えて震える同胞の首根っこを啜えて、ソレから距離を取った。

ねちや、と嫌な音をたてながら、棍棒が血の糸を引く。

相棒が動き出したことで、デールもようやくと動くことができた。カンダタも同様で、三者は別方向に「暴力」——ゴonzから離れることに成功した。もつとも、この場における絶対的強者である自負があるのか、魔物はそんなことは意にも介さず、血濡れの棍棒を持つのは反対の手で、形の残っている死者の胴体から腕を引きちぎり、むしやむちやと口元を赤く染めながら咀嚼している。

その凄惨な光景を目にしながら、カンダタは奥歯を噛みしめた。

「リンクス、もう一度言う！ こいつとどんな因縁があるうが、撤退だ！！」

「そんなの……」

唾をまき散らしながらびりりと大気を震わせる程の大声を出したカンダタへ、デールは目を向けられずにいる。それは単純に、ゴonzから目を離してしまった次の瞬間には死が迫っていてもおかしくないと理解しているから。それから、そういった切迫したアレコレを度外視したとしても、感情として、彼の方を見ることができはるはずもなかった。

「分かっています、よッ！」

魔物の一振り。幸い、素早いデールには避けられた。けれど、完全に避けて、かすりもしなかつたはずなのに、頬の薄皮が切れてめくれ、一筋血が流れる。

ただの風圧。それだけでも、十二分に脅威となりえることを理解せざるを得なかった。

撤退できるものならしたい。臓腑を溶かすようなどろどろとした感情が己の中でとぐるを巻いているのも事実だ。けれど、一度は引きちぎられた理性が、共に戦った「仲間」のあまりに唐突で悪辣な死によつて繕われ、形を成してきた今。どうあがいてもこの魔物に勝てないことはデールだって理解しているし、最善が撤退であることも、もちろん分かっている。

それでも、想像なんてしたくないのに、脳裏を過ぎるのは自らの死だ。

——ボクは、こんなところで死んでやれない。

走馬灯のように、デールの脳裏に一瞬でこれまでの出来事が駆け巡り、彼は奥歯を噛みしめた。

「ふうむ。封印明けの食料にはちと足らんな。……まあ、すぐに腹いっぱいラインハットの民を食らえばいいか」

ゴنزの言葉で無益な想像を振り払う。勝てなくたって、死んだって、どうにかするしかない。この魔物を世に放つわけにはいかない。足がすくみそうになるのを、デールは己の手首を一度きすつて気持ちいを落ち着かせ、それから武器を構えた。

「ルカニツ！」

しかし、魔物はひらりと避ける。守備力低下呪文は床にぶつかり、デールは何度も魔物目掛けて呪文を放つては避けられてしまった。た。

「リンクス！ 焦って連発なんかしても意味ねえぞ！」

「その男の言う通りだ。まあ、当たったところでそんな呪文、大した効果はないがな」

デールの顔からはだらだらと汗が流れている。息も上がっており、

見るからに普通の状態ではなかった。そんな少年を見かねて、カンダタは彼の前に庇うように立つ。ゴンズは愉快そうに嗤った。狙いを逸らそうとばらけた立ち位置にいたはずの者たちが、結局集結する。当然だ。あの子どもはラインハットの血を引く者であるのだから。

ゴンズの目当ても「子ども」であり、人間とキラーパーンサーたちが守りたいのもまた「子ども」だろう。

「カンダタさん……」

ほっとしたような表情で、子どもが男に何かを話し掛けている。機嫌のよいゴンズにとってその内容はどうでもよく、どうやってあの子どもを食らってやろうか考えていたところだった。

殺してからではつまらない。生きながらにして、まずは指の一本ずつ味見してやろう。痛みと絶望と恐怖で歪んだ顔を眺めながら、その血を啜るのもいい。そのためには、うっかり死んでしまわないように手加減をしなくては。

「ツチ、化け物が！ 近づいてくんじゃねえよ!!」

「ガウ!!」

同時。カンダタの斧がゴンズへ正面から迫り、キラーパーンサーの牙が背後から迫る。だが、そんなものは彼にとっては簡単に避けてしまえる、つまらない攻撃だった。

「お前はあまり美味くなさそうだなあ。硬そうで、臭そうだ」

軽々と避けたゴンズに対し、勢いを殺せなかったカンダタは斧を思い切り挿し、自身は魔物からの追撃を恐れて受け身を取りつつ距離を置く。同じく獲物に避けられたゲレゲレは、天性の脚力を以ってして体勢を崩さず着地した。

「だがまあ、馳走は後に取っとくのがよいだろう。安心しろ、全員仲良く腹の中だ」

ゴンズの巨大な口が大きく開き、怯えて動きが鈍っていたブックルへと迫る。それを庇ったのは、デールだった。

「ぐっ、……い！」

急所を庇うように前に付き出した腕があまりに無残に粉碎される。骨が砕かれ、衝撃で弾けた血肉はデール自身を汚し、醜悪な魔物は満

足げに咀嚼をしていた。

「ああ、味わいたかったぞ！　どれほど待ちわびたことか、憎きラインハットの者よ!!」

「ぐ、うツ……あ、……ボ、ボクも……!」

元に戻すどころか、止血をしなければ命が危うい怪我である。痛み
に視界がぶれ、本能が警鐘を鳴らし、並みの者なら死の恐怖に心が折
れるであろう状況の中——デールは、笑った。

「待って、ましたよ」

刹那。ゴンズは鼻先に嫌な気配を感じ取った。

デールの腕から漏れ出でる、己を死の淵へ招いたあの恐怖の光を思
い出す。白い光だ。恐ろしい、命の光。全てを差し出し、全てを投げ
出し、そうしてようやくと手に入れられる、禁断の力。吐き気のする、
自己犠牲の成れの果て。

「貴様ツ……!　もうこんなものに倒れてなどやるものか!」

光を発しているのは、ラインハットの血を引く子どもではなかつ
た。魔物自身が噛み千切った腕、その手首にあった腕輪。

「倒れなくて、結構」

ゴンズの魂に刻まれている「恐怖」よりは、薄く、弱い力の本流だつ
た。それに違和感を抱きながら、防御の姿勢を取っていた己へのダ
メージはさほどないことに気付く。

「なツ!？」

そう、ゴンズへのダメージは。

けれど塔の床にとっては、耐えきれないものであった。デールによ
り意図的にたっぷりと魔力を込めた守備力低下呪文を重ね掛けされ
ていた床は、本来の強度よりはるかに脆くなっていた挙句、生命力を
糧にぶつけられた爆発により、巨大な魔物一匹の体重を支えることが

出来なくなってしまうたのである。

それは致命的な隙だった。翼のない魔物は階下に落ちていくときに、ろくな身動きを取ることもできない。体を打ち付けたところで死にはしないだろうが、落下の間、魔法使い——聖なる呪文の適性が高く、城や町を守る結界の知識も深いデールに時間を与えてしまったのは、どうしようもない「悪手」だった。

あるいは彼が封印から目覚めたばかりでなければ、戦いの勘や甯猛な本能に従って、落ちる瓦礫にその脅威的な跳躍力をぶつけて屋上に戻ることもあったのかもしれないが。

所詮は「かも」の話である。

「貴様ツ！ 貴様アー!!!」

本来であれば、彼の父親がしたように、メガンテは術者の命を消費して発動する魔法だ。デールが使用したメガンテの腕輪も、本来は装備している者が命尽きたときに、込められた魔法を発動するという道具である。

だからこそゴンズには理解できない。

「その魔法」は威力を調節できるようなものではないのだ。「その魔法」は、死と引き換えの発動でなければならぬはずなのだ。

「神よ、ここに我が封域を創りたる。御名のもとに我が彼を閉ざし、御力によって我が彼をここに縛り、我が命を以って守人とせん。神と私の忠実な子らである我らに牙をむく邪悪なる存在を永き眠りの世界へ誘え！」

——それがどうして、この子どもは生きているのか。

デールの体が淡い青色の光を纏い、その光が彼の心臓がある位置で収束した。それと同時に、落下していたゴンズの体が宙で止まる。それから、目に光が失われ、剥製のように生気を失ってしまった。

「や、やったのか……？」

カンダタが、不思議に宙に浮いたままの魔物を覗き込む。デールは心臓を押さえながら蹲り「封印、しただけ、です……。」と苦しげに、呻くように言った。

「お、おい。大丈夫か？」

意識を魔物からデールへ移したカンダタが、片腕を失った少年へとベホイミを掛ける。少年自身が扱おう上級回復魔法であれば失われた腕も元通りになったかもしれないが、カンダタの魔法では元通りにはできなかった。

「これのどこが大丈夫に見えるんですか……。封印は成功したので、あの魔物は動けないはずです。空飛ぶ靴を探しましょう」

「お前……本気で盗賊に向いてるぞ」

ぐったりとする相棒を気遣うようにその頬を舐めるゲレゲレが「なうん」と心配そうな声を出した。力なく微笑みを返したデールは、呆れたような顔をしているカンダタの覆面の奥にある瞳をじつと見つめる。

「ボクは大丈夫……。それより、行きましょう。魔力がすつからかんで、蘇生呪文が唱えられません。この先に魔力を回復する道具があったら……」

つらそうに立ち上がったデールの脇に手を挿し込み、カンダタはその軽い体を抱き上げた。

「呪文を掛けても、あいつは戻ってきやしねえさ」

それから、荷物のように少年を肩に担ぎ、原形を失ってしまった子分へと向き直る。

「お前、知ってるか？ 死ぬのは誰だって恐ろしい。死の恐ろしさを知った者が、どうして『もう一度死ぬ』ことを受け入れられる？ 生きていれば、どんな形であれ、いずれ行きつくのは死だ。恐怖の最中死んだ魂は、決して『こちら』へは戻ってきちゃくれねえのさ」

それは、恐怖に負けてしまう魂への侮蔑ではなく、「恐怖の最中死なせてしまった」自分を責めるような口調だった。それに気付いてしまったから、デールは次の言葉を紡げなかった。

確かに、デールは完全蘇生呪文であるザオリクはまだ使えないけれど、ザオリクならば使える。ザオリクは、ザオリクよりも「光」が小さいらしい。それでも、魂が戻るべき場所を示す「導」ともいえる光が乏しくても、戻って来れる魂だってある。

「俺様は母親の顔も知らねえが、そのロクデナシの母親は生まれたばっかりの俺様を教会に棄てたそうだ」

ぽつり。小さな声で、彼は肉塊を見つめながらそんな話を始めた。肩に担がれていて、しかも相手が覆面をしているので、デールには彼がどんな表情をしているのかが分からない。

「どうやって手に入れたのか知らねえが、棄てたことへのせめてもの罪滅ぼしだったのか、俺様と共に、こんなモンを置いていきやがった」
カンダタが魔法の掛けられた袋から取り出したのは、先端に天使が象られた杖。それを見て、デールはその杖の名前が分かってしまった。

「復活の杖……」

死せる魂をも呼び出す、強い魔力と祈りの込められた聖なる杖である。かなり希少で、市場に出回ることすらほとんどないという代物だ。

「今までに何人か、ハマして死んじまった子分もいたよ。だがな、そいつらみんな、こんな杖なんか使ったって戻ってきちゃくれなかった」
あまりに悲痛な声に、デールにはなんと言葉を掛ければよいのか分からない。デールだって、近しい人の死を間近で見たことがあるし、その訃報にどうしようもなく悲しんだこともある。

けれど、デールには諦めることができた。諦めない覚悟もできていく。

亡くなった人たちには覚悟があつて、デールはそのときその場にい

なくて、蘇生呪文だって使えなくて、そもそも蘇生呪文が通用するよ
うな状況ではなくて。

それに、デールはもし自分が死んでも必ず生き返るという意思があ
るし、ゲレゲレだって、リユカだって、もちろん敬愛する兄であるへ
ンリーだって、呼び掛けたら応えてくれるだろう。

——けれど、唐突に降ってわいた死だったら。その場にいるのに、
どうしようもできなかったら。蘇生呪文が使えるのに、相手がそれに
応えてくれなかったら。

それはどれほどの痛みだろう。それは、どうやって自分を納得させ
たら良いのだろう。

「生き返るもそのまま眠るも、自分で選べばいい。こんな杖は自己満
足の塊だ。それでも、戻ってきちゃくれなかったって……死に顔を整
えてやるのが、不甲斐ない親分のつとめだろう」

ぽわ、と杖の先端の天使が光を帯びた。その泣きたくなるほどに優
しい光に包まれ、肉塊はやがて安らかな顔を浮かべる人間へと戻って
ゆく。

「あ……あ、……」

本当はカンダタの方が泣きたいだろうに、彼は泣かなかった。嗚咽
を漏らして涙を流したのは、デールの方だった。

「空飛ぶ靴だったな。さっさと回収するか」

靴はすぐに見つかり、カンダタは無言でそれを回収した。ゴンズが
現れた方角にあった階段を下った先の部屋に、ぽつんと置いてあった
のだ。それから屋上へと戻った彼は、デールを肩から下ろして自分の
亡骸を抱き上げる。キメラの翼を使ってアジトへ戻ったすぐあと、全
員へととどったけれど、彼の死を仲間に伝えてみんなで墓を作っ
た。

「ボク、あなたのこと、忘れませんから」

返事がないことなんて分かっていながら、言わずにはおれない。それが自己満足だということは、自分が一番よく分かっていたけれど。

胸の痛みに顔を歪めながら、デールはただ一心に、片腕で墓を掘った。そして、墓にはそつと花を添えた。野に咲く花を摘んだだけの簡単な花束だ。花なんて、彼は望んでいないだろう。だけど、デールがそうしたかった。どうしても、彼に花を供えたかったのだ。

二頭のキラパンサーが、少年へと寄り添う。

彼はまた、涙が溢れるのを止められなかった。

「兄さま……ボクは……弱いです……」

蹲り、デールは残った腕で脈打つ己の胸へと手を当てる。あれほど己の弱さを赦せなくて、努力してきたと思っていたのに。

「兄がいてくれたら」という思いと、「兄にはこんな姿を絶対に見られたくない」という思いで、デールはやっぱり、己の弱さが赦せなかった。

元気でやってる

さて、この度魔法使いになった私なわけですが、なんと今まで集めた石板が全然あの世界とは関係ない物だと発覚しました。理由は一つ、石板パズルが完成しちゃったからです。

「行けば？」

「え、まだマリベル様に挑んでもいないのに、いいんですか？」

「私を倒してからって言うのは、パスさんの世界に戻るときでしょ。石板集めのための異世界くらいなら別に止めやしないわよ」

というわけで、私とパスさんはマリベル様に相談に来ていたんだけど、あっさり異世界渡航をオツケーされてしまい、少々困惑する。まあ、いいと言われたなら別にいいのか。

ちなみに、なんで完成した石板がパスさんの世界と関係ないか分かったかというと、パスさんの世界へ向かうための石板のかけらの一つは神様が持っていると言言しているため、完成するはずがないからである。なのに完成しちゃった。つまりこれはどこへ通じるかも分からない真正銘謎の石板なのだ。

「とりあえず、シムティアの町にある台座にはめてみなさいよ。大概モンスターの棲むへんてこな異世界に通じてるけど、石板があるかは別として、まあそれなりに珍しい道具が入ったり、良い修行になったりするし。まあ、どんな世界かは全く分からないから、むやみに危険に足を踏み入れたくないなら、神様にどんなもんか聞いてみるのもアリかもしれないわね」

マリベル様はお優しいので、めちやくちやアドバイスをくれる。でもそれを言うのと照れちゃってもうアドバイスしてくれなくなる可能性もあるのです、私はシンプルにお礼だけを告げて、やっと覚えたルー

ラを使ってシムティアの町へと向かった。ルーラはとても便利。みんな覚えた方がいい。

あ、ちなみに。パパスさんは現在バトルマスターをやっている。私がお歌の稽古に明け暮れている間に一人でモンスターを倒しつつ石板を集めていたから、私より戦闘経験を積むことができたため、武闘家と戦士の職をマスターして上級職に就いたのだ。私は魔法使いの「妖術師」になったので、メラミを覚えたよ！ 魔法って攻撃もできるし歌と楽器よりいいなって思った！

「神様、こんにちはー！」

「おお、アルマにパパス。どうじゃ、わしに挑む気になったかのう？」
「あ、今日は全然その話じゃなくて。この石板なんですけど、怖い世界につながっているとやだなーって思って、どんなもんか聞きにきたんですよ。どうですか？」

好戦的な創造主の誘いをさらりとかわして質問すると、ちよつとがっかりしたような顔をされた。けれど、すぐに気を取り直したのか、神様は「うーむ」と顎髭を撫でながら石板を見つめている。

「そうじゃのう。アルスたちがよくもらってくるような石板と同様、モンスターが主となっている世界につながっているようじゃな。あとは分からぬ。わしが作った石板でも、この世界に関わるものでもないゆえな」

「ごりごりに邪悪な波動とか出てませんかよね？」

「邪悪な封印は感じぬよ。全く、アルマは慎重じゃなあ。飛び込んでみる勇氣も時には必要じゃぞ」

「もうちよつと強くなつて自分に自信がついたらそういうことにも挑戦しようと思います」

私が子どもなので、大概の人は慎重な姿勢に大賛成してくれるのだが（そもそも危険なことをやろうとしているので、みんな逆に心配をしてくれるくらいだ）、神様だけは違う。もっとやれ、豪胆になれと発破をかけてくるのだ。

正直、この方がどこまで私の事情について知ってるのか未知数すぎて、「私まだ子どもですからね！」みたいなことは強気に言えないので

受け流すしかない現状である。だって、そこで「いやお前中身三十路過ぎてるじゃん」とか言われてしかもパパスさんにそれ聞かれてたらと思うともう恐怖しかないじゃないか。

もし知ってるとしても、今黙っててくれてるわけだから、余計なこととはこれからも言わないように気を付けよう。

「ありがとうございます。パパスさん、さっそく行ってみよう！」

「御助言、感謝致します」

折り目正しく神様に頭を下げたパパスさんと一緒に台座へ向かい、どきどきしながら石板をはめこんでいく。実はこれめっちゃ憧れていたのだ。正直体験できてうれしい。勇者様から何度も聞かせてもらっていたけれど、自分でバラバラの石板をはめるのは初めての経験である。

そして、まばゆい光が台座を覆い、私たちをも覆って――。

渦潮に吞まれるように、私たちは旅の扉をくぐった。

「……は……」

最初に言葉を発したのは、パパスさんだった。

「うーん、どこだろう？」

と、返事をした瞬間。私はこれまでの経験から、背筋に冷たい物を感じて、咄嗟にその場から飛びのいた。私は己の直感に心底感謝しつつ、突如剣戟を放ってきた相手を睨みつける。

「キラーマシン……」

「すごい数だな。ここはモンスターしかいない世界なのか？」

心臓がばくばくと鳴る。周りにいるのは、キラーマシンの群れ。どいうわけか二体か一体ごと、距離を置きながらこちらを囲んでいる。ミステリードルと、赤いからくり兵のような魔物は、たしか勇者様に見せてもらった魔物図鑑によると、レッドハンターだったか。

「パパスさん、これ、まずい」

言いながら、私はどうにかこうにか逃げる算段を付けていた。何せ、ここにいるやつらは魔法——しかも私程度の魔法使いが扱う魔法なんかにはびくともしないような強敵ばかりだ。そうなると私は戦力外。補助魔法や歌などの特技を使つてパパスさんを援護することはできるが、一体ならまだしも、この感じだと戦闘が途切れず次々とかかってくるだろう。

——無理だ。

逃げるにしても数が多すぎる。それならば、どうにか全力で戦うしかない。

「ルカニ！ ルカニ!!」

私の唱える守備力低下呪文など意に介す様子もなく、無駄にある腕を振り上げるキラーマシン。

「アルマー！」

パパスさんの鋭い声が飛んできたけれど、私は反応しきれずにその攻撃をまともにくらってしまった。

さみだれ剣。ふり止むことのない雨の如く連続で繰り出される剣技である。それは私だけならず、パパスさんの体にも容赦なく傷を作っていく。むしろ、前衛で戦ってくれている分、パパスさんの方が攻撃を受けてしまっている状態だ。

「うぐっ……」

傷が痛い。痛いのは嫌いだ。戦いなんだから、いつも楽であるはずがない。だから戦いも、嫌いだ。

嫌いなんだけど、——。

「メラミー！」

私の唱えた火球がキラーマシンの顔面に被弾。衝撃で少しは退けどり、その隙を見逃さなかったパパスさんが心臓部へ目掛けて正拳突きを放つ。

逃げてばつかりじゃいられないのは、私だって嫌になるくらい分かってる。

「パパスさん！どこまで通じるかは分かりませんが、ある程度数を減らしましょう！そしたら、目立たないところまで逃げます！全力で回復しましょう！」

言いながら、私は心に誓った。石板の中の異世界に挑むのは、せめて外を闊歩する魔物たちを楽々倒せるようになってからにしよう。と。だってこんなの、控えめに言って地獄じゃん。

カンデラのもとで修行に明け暮れながら、魔物たちと生活を共にしていたビアンカには、いくつか気付いたことがあった。

まず、カンデラはかなり薬に関して深く広い知識を持っていること。ビアンカが質問したことには何でもすぐに答えられるし、不器用そうな魔物の手で、器用に材料を秤に乗せ、少しのミスもなくそれらを調合していく。ビアンカが転んで怪我などを作ったり、うっかり毒草に触ってしまったりしたときには、すぐに良く効く薬を作ってくれた。まあ、それも最初のうちだけで、段々と「自分で作った物を使いな」と突き放されてしまったが。

次に、ネロと呼ばれるアングルホーンがここのもめ役だということ。おっかない姿をした彼は、しかしながら魔物たちにはかなり慕われているようで、よく相談事を持ち掛けられているし、何かを決めるときは彼の意見が尊重される。ビアンカには全く優しくない彼だが、ビアンカは自分でも「よそ者で裏切るかもしれない人間」だと思われていることをよく知っていたので、彼の対応に傷ついたりしなかった。嫌だな、とは思えけれど、こんなことで傷付いてはられないのだ。

それから、こここの魔物たちは妙に人間味があること。ビアンカに対して懐っこい態度を示してくる魔物、距離を置いて観察してくる魔物、明らかに敵意を向けてくる魔物、それぞれいるが、それでもこの

遺跡の中は秩序が保たれ、みんな個性を出しながら自由に暮らしているようだった。軽い喧嘩はあっても、野生の魔物たちでさえしているような暴力を伴った縄張り争いなどは全くない。姿形が魔物というだけで、ビアンカにとっては人間の町で暮らしているのとそう変わらないように思えた。

「ビアンカ！ 言ってた薬はできたかい!？」

「はい、お師匠様。できてるわよ!！」

ガサガサした声のドラゴンマッドに怒鳴りつけられ、ビアンカは片目を瞑って自分で調合した薬を差し出した。カンデラはビアンカから奪うようにそれを受け取り、まじまじと観察する。

「ふん、まあまあだね。使えないことはないだろう。じゃあ、こいつをマリーリン爺さんへ届けてやっておくれ。年甲斐もなく走って転んだそうだから」

「うふふ。マリーリンおじいちゃんって、お茶目よね。私に今度魔法を教えてくださいって言っていたわ」

「お前は薬の勉強が先だよ!！」

「もちろんよ。はやく上達してお母さんに薬を作ってあげなくちゃならないもの」

言いながら、ビアンカは胸がつきりと痛んだ。両親には定期的に手紙を書いているし、気のいい魔物たちは、どうやってかは知らないけれど、それをきちんと届けてくれていてくれるようで、返事だって持ってきてくれる。

そこに書かれているのはいつも「帰ってきてほしい」「病気は心配いらない」「お前がそばにいたことが一番の薬」という内容なのだ。

ビアンカだって、大好きな両親と一緒にいたい。けれど、ただ一緒にいるだけではいずれ自分が許せなくなる。できることがあったかもしれないのにやらないなんて、主義に反するのだ。

「おい、ビアンカ！ お前、今日は絶対家から出てくるんじゃないぞ!！」

マクベスという名前のオークキングが、「魔法使い」という種族の魔物であるマーリンへ薬を届けようと家の扉を開いたビアンカに気づき、鋭い声を飛ばした。

「ええっ？　じゃあマーリンおじいちゃんへの薬はどうするの？」

困惑顔でビアンカが足を止めると、ぺたぺたと彼女の隣まで歩いてきたカンデラが「やっぱりあたしが持つていくよ」とその手から薬を奪ってしまう。

「そういや、今日はそんな日だったね。マクベス、ありがとよ」

「ったく、カンデラ。お前も日にちの管理くらいしておけ」

ため息を吐くマクベスに対して、ビアンカは「それって一番難しいんじゃないかしら」と思ったけれど、口には出さなかった。何せ、この遺跡ですつと生活していたら、まず昼夜が分からないのだ。いつ一日が始まって、いつ終わったのか、全く分からない。正直、陽の光に当たらないことでビアンカは心がつらくなくなってしまいうことも度々あった。そういうときは、カンデラに頼んで、そのとき暇な魔物と一緒に少しだけ外に出してもらおう。

ともかく、時間間隔がなくなってしまうから、広場みたいになっっているみんな集まる場所に時計があるから、それを見てなんとなく時間を把握しているのだ。

ビアンカは引越しまでの時間があるので、きちんと記録を取って数えてはいるが、そうでなかったらとつくに今日が何日なのかも分からなくなってしまうていただろう。

「ねえ、今日って何かあるの？」

「あー、まあ、集会さ。部外者のお前さんに聞かせる内容でもない。だから留守番をしているんだよ」

「ふうん。分かったわ。じゃあ、何かやっておくことはある？」

「この前失敗した物の毒抜きをやっておきな。草、根っこ、果実、花卉、全部だよ」

ビアンカは露骨に嫌な顔をした。ビアンカは、この「毒抜き」という作業がとても苦手で、よく手が紫色になったり、しびれが取れなくなってしまうりするのだ。酷いときには、爪からぐずぐずに腐りか

けたこともある。だから、毒抜きの実習のときにはいつもカンデラに傍にいてもらっていた。作業自体はいつも一人でやっていたけれど、全くの一人というのは初めてなのである。

「心配だなあ……」

しゅんと肩を落としたビアンカに目もくれず、カンデラはマクベスと共にどこかへ行ってしまった。

とはいえ、ビアンカは教えを乞う立場の者だ。文句と弱音ばかり言ってもいられない。そういうわけで、どうにかこうにか自分を奮い立たせた少女は、まずは一番難易度の低い根っこの毒抜きから取り掛かり始めた。根っこは薬品に決められた時間浸けおくだけでよいため、しつかり時間さえ計れば失敗はない。

なんだかんだ真面目に留守番と課題をこなしていたビアンカは、にわかになが騒がしくなってきたのを感じて、手を止めた。

「何かしら？」

扉に近付くと、どうも表では言い争うような声が聞こえる。不穏な雰囲気になったビアンカは扉から数歩離れて、薬品を片付け始めた。万が一何かあったときに二次被害三次被害を起こさないためである。

「このおれに隠し事とは、いい度胸だな。そんなに大事な物ならば、おれにも見せてもらおうか！」

バン！ と大きな音を立てて扉を開けたのは、見覚えのある少年だった。周りの魔物たちは止めようとしたのか、中途半端な姿勢で固まっただけで、なんだか少し滑稽である。カンデラだけは、「あちゃあ」という顔をしたあと、長いため息と共に両手で顔を覆っていた。

「アベル……？」

紅の目と目が合って、ビアンカは自分より背の低い少年の顔をまじまじと見つめながら、ゆっくり近づいてゆく。扉を開いたままの姿勢

で固まってしまった少年は、慌てて踵を返そうとしたが、扉を開けようとした己を止めようとしていた魔物たちに囲まれていて、上手く退路を見つけられなかった。

「アベルじゃない！ どうしたの、こんなところで！ また会えてうれしいわ！」

久しぶりに人間の、しかも同じ子どもに出逢えたことで、ビアンカは満面の笑みになってアベルへ抱き着く。抱き着かれたアベルはというと、魔物たちへ殺意すらこもった鋭い視線を向け、無言で「どういことだ説明しろ」という圧を放っていた。

「おや。その小僧と知り合いだったのかい、ビアンカ」

誰も何も言えなかった魔物たちの中で、一番に口を開いたのはカンデラだった。

「その小僧はあたしらに食料や水を届ける使いっぱしりでね。あんたと同じで、不幸にもこの場所に足を踏み入れちまったんだよ。ここは魔物たちの秘密の花園。そんな場所を知っちまったからには、秘密を守るよう監視しなくちゃならないだろ？」

「あら、そうだったの？ アベルって案外ドジね」

自分のことを棚に上げてそんなことを言つてくすくす笑うビアンカは抱き着いたままなので全く見えていないが、アベルの額には少年らしからぬ青筋がビキビキと浮かんでいる。その様子をハラハラと見守る魔物もいれば、面白くなってきたのかにやにや見守る魔物もいた。

そのどちらでもない少数派のネロは、深いため息を吐く。未だアベルに抱き着くビアンカをペリっとはがした彼へ、魔物の中にはブーイングをする者もいたが、アベルとネロの二人からにらまれ、静かになった。

「人間同士で情報交換でもされてはたまらん。小僧はさっきの言い分けを守って次の買い出しへ行け！ ビアンカ、お前は菓の修行中だろう！」

ビアンカはネロが苦手だ。すぐに怒鳴ってくるし、高圧的だし、顔が怖いし。でも、ネロが苦手だからというわけではなくて、思うところがあつて「はあい」と素直に返事をした。

——使いつぱしりの「小僧」が、あんなに威張り散らして魔物たちの制止を振り払うことができるかしら。

魔物たちはたくさんの隠し事をしている。それが悪いことではないのなら、ビアンカはどうしようとは思っていない。だけど悪いことなら、自分の大切な人たちが回り回って悲しむようなことになるのなら、それは見過ごせない。

だから、何を隠しているのか、それくらいは知りたい。

そしてその「隠し事」の中には、アベルもばつちり含まれているのだ。

賢い少女は、上機嫌に鼻歌を歌いながら毒抜き作業を続け、失敗して手を爛れさせてちよつぴり泣いた。カンデラはそんなドジな弟子に薬を塗ってやりながら、いつもより一際大きくて長いため息を吐く。

カンデラは毎日ビアンカに薬について教えながら、生活の面倒を見ている。だから彼女の性格も、その賢さも、それなりに分かっているつもりだ。

——面倒なことになったね、こりゃ。

とはいえ、ビアンカがここにいるのも期限付き。どこかの馬鹿な誰かが阿呆なことを口走らなければ、何も問題はない。少年には誰かが彼女がここにいる経緯を伝えるだろうし、ビアンカが出て行くまではここを訪れることはないだろう。

そんな風に楽観的に考えたいものの、人生の酸いも甘いも経験したドラゴンマッドはよく知っていた。

何も問題ないはずでも、時には問題は起こる。期限があろうとなかろうと、面倒事は発生する。なんとなく、カンデラは頭が痛くなってきた。何もなければいいと祈れば祈るほど、己の勘が「それはない」と否定してくるのだ。

——それにしても、あんな顔の坊ちゃん初めて見たね。

現実逃避なのか何なのか、カンデラの頭にはふと驚きで固まったアベルの顔が浮かぶ。けれど、すぐに現実に頭を切り替えた。

「さ、馬鹿弟子や。あたしは腹が減ったよ」

「任せて！ お料理なら得意よ！」

塗り薬が滲いてペろんと取れ、爛れていた皮膚の下から白く玉のような新しい肌が見える。顔も、声も、仕草も、性格も愛らしい弟子を見て、カンデラはふと己の手に視線を移した。顔貌の間抜けさに反して、存外鋭い爪に、青い皮膚。鏡でも見れば、間抜けなドラゴンマツドが真剣味のないしかめ面をしていることだろう。

カンデラは再度弟子を見て、自分が人間ではなくてよかったと心から思った。

覆水

デールは回復魔法で元に戻った腕を眺めて、ひとつため息を吐いていた。いや、「元に戻った」という表現には語弊があるからこそ、ため息を吐いた。

骨も、肉も、形としては元の通り再生している。けれど、その皮膚——ちようど、ゴンズに食いちぎられた肘から指先までの部分がどす黒く変色し、ぴくりとも動かないのだ。メガンテの腕輪を利き手ではない方に付けていて助かった、と彼は思うことにした。

「にやあん」

頭をデールの足に擦りつけながら、プツクルが申し訳なさそうに鳴く。そんな彼女の頭を撫でてやったデールは、にこりと笑い掛けた。「プツクル、君が無事でよかった」

デールがその作戦を思いついたのは、元よりゴンズが封印されていたという状況からである。封印は、二匹の魔物の命と引き換えになっていた。オークの命で第一の鍵が開き、キメーラの命によって第二の鍵が開く。二重の封印がなされていたというわけだ。

己の死を想像せざるを得ない極限の状況の中で、デールは己の命を代償にあの魔物を封印してやろうと思った。ただし、こんなところで死んでしまつては元も子もない。

デールの目的は、兄であるヘンリーと、友であるリユカと一緒に天空の勇者を探し出し、リユカの母親を救出すること。きつと、海に落ちてしまった自分を彼らは心配していることだろう。だからこそ、絶対に再会しなければならなかった。彼らにだけは、理不尽に身内を亡くす苦しみをもう二度と味わつてほしくなかったから。

デールには攻撃呪文の適正がない。だからこそ、自分にできることを増やそうと、「適性のある魔法」や「町などを守る結果」、「邪なるものを封印する魔術」についての研究をしてきた。幼い彼には技術や理解が追い付かないことも多かったが、いろいろ試していく過程で、「自

分に最も適性のある系統」を発見したのである。

まさしくそれが、命を犠牲にする魔法だった。

己の命を賭して敵を滅ぼす「メガンテ」、自らの命と引き換えに仲間の肉体を癒し魂を呼び戻す「メガザル」。もちろん、実際に試したことはない。そんなことをすれば兄から大目玉では済まない叱責を受けていたことだろう。

けれど、理解してしまつたからには、仕方がない。

魔法使いにとって己の内をめぐる魔力に気が付くことは、呪文を覚えるよりも最初にすべき、基礎の基礎である。だから、いくら呪文を覚えようと、己の魔力に気が付けない者は魔法を使えない。これについては、師の教えを受けて訓練により気が付く者もいれば、自覚がなくとも自然に分かつている者もあり、デールとヘンリーは前者であった。王宮で家庭教師に習つたのである。一方、リユカは旅の中で自然と己の中の魔力に気が付き、父が掛けてくれた癒しの魔法を自分でも使えるようになった。

そうして、魔力に気が付き、自分にできることに気が付く。内なる力がどんなふうに変質するのか、理屈じゃなく感覚で理解していく。優れた魔法使いはその感覚が鋭く、微弱な性質であつても感じ取つて訓練することができると、使える魔法の種類が多いのだ。

一般的に、子どもは感覚で理解できても、理屈としては理解していない場合も多く、それゆえ高度な魔法は扱えない。

しかし——デールは「一般的な子」ではなかつた。

幼少のころより英才教育を受けていた王族であり、旅の中で実践する機会があり、そしてどうしてもやり遂げたい目標と、消化しきれない思いを抱えている子どもである。「それ」に気が付いたのは必然だった。

「なうん」

プツクルはその「子ども」の言葉に納得していないような声を出しながら、撫でてくれるその小さな手の平に、自分の頭を「もつともつ

と」と擦りつける。

——もしかして、ゲレゲレもプツクルも、ボクの身に起きたことが分かっているのかもしれない。

デールはそんなことを考えながら、しゃがみこんでプツクルの首に抱き着いた。あの日以来、大きな猫たちはデールに対して妙に過保護に心配そうな視線を向けてきたり、どこに行くにもひつついて甘えてきたりする。ゲレゲレは先ほどカンダタに呼ばれてしぶしぶついて行っていたので、何か手伝っているのだろうが、そういった用事がなければ彼らは常に一緒にいた。

「大丈夫だよ。ボクは死なないから」

そう、死ねるはずもない。

デールはあの日、塔の魔物たちがそうだったように、己の命をゴンズ封印の鍵とした。自分が死ねば、あの凶悪な魔物が甦ってしまう。だからこそ、以前にも増して絶対に命を落とすようなことがあってはならないのだ。

メガンテの腕輪は所有者の「生命エネルギーの流出」に反応する。一方、メガンテは術者が自らの意思で命を捧げる魔法だ。そのため、同じ生命エネルギーを基にして爆発を引き起こすものであっても、その性質は少し違う。デールはその性質の違いを利用した。

プツクルを庇い、命の危険が目前に迫ったことで、彼はためらうことなく自らの生命エネルギーを不可視の鎖としてゴンズへまわりつかせた。所有者から生命エネルギーが流出したことで発動した腕輪の術式は、しかしエネルギー量が少なかったことで本来の威力を発揮することなく、魔物ではなく塔の床を粉碎。隙が生まれたゴンズに対して、「鎖」で固定したデールは一か八かの賭けに出た。

己の持つ知識、技術、魔力の全てと、目の前にいる邪悪を封じるために必要なだけの生命エネルギーを注ぎ込んだのだ。

成功するかも分からない、「できるかもしれない」なんて構想をして

いたわけでもない、その場しのぎの大勝負。

そして少年は、勝負に勝った。

——だけどこんなこと、誰にも言えないな。

ふう、とデールはプツクルから体を離しながら息を吐いた。

生命エネルギーは魔力ほど使い勝手が良いものではなく、それゆえ自在に操れる者はほとんどいない。喩えるとするならば、生命エネルギーは器に入った水で、魔力は泉から湧き出る水だ。前者は容量が決まっており、減ってしまったら自然に戻ることはない。後者は水源が枯渇するほどの無茶をやらなければ、減った水は自然と回復する。

メガンテとメガザルは魔力も併用するため、コップの水をただひっくり返すだけで済む。魔力で容量を記憶しているから、ひっくり返って失われた水は、蘇生魔法で戻すことができる。

けれど、どちらも特殊な魔法だ。教会で聖職者たちのする説法では、「神々の呪文」として登場し、多くのことが謎に包まれており、魔力と生命エネルギーを単純に併用しただけでは、そう上手くはいかない。

兄もリユカも、カンダタでさえ、デールが「そんなこと」をしたと知ったら、怒るだろうし、悲しむだろう。

もう誰も悲しませたくない。

だからデールは、絶対に死ぬわけにはいかなかった。死んで生き返れる保証はないし、生き返ったとして封印が元通りになるとも思えない。

死ぬのであればそれは、あの魔物を——光の教団を、滅ぼすときでなくては。

キラーマシンを筆頭として、レッドハンター、ミステリドールの猛攻も止まらなかった。降り注ぐ矢、肌を切り裂き肉を抉る剣と斧、物理攻撃だけに集中していると突然放たれる錯乱呪文。レッドハン

ターなんて、パパスさんにとってはそんなに強敵じゃなかったかもしれないけど、炎への耐性が異常に高いのか、私のメラミが全然効かなくて困った。

ともあれ、いろいろな戦法を試しつつ戦ったり逃れたりすることができるようになった頃。この世界の出口を探そうと、奥へ奥へと歩みを進めていたのだが。

「うわ……」

発電所のような雰囲気のある場所に出たと思ったら、その奥にまたもマシン系の魔物がいた。この世界の主だろう。勇者様たちが言うには、こういう魔物だらけのヘンテコな世界は、主を倒せば元の世界に戻れるらしい。

けど。

自分からは攻撃をしない魔物を前にして、私はパパスさんの方をちらつと見た。パパスさんの表情は険しい。魔物から視線を外さず、「確か、この世界から戻るには『主』を倒さねばならないんだっかな？」と険しい顔のまま聞いてきた。その通りです。

「アルマ。補助呪文をありったけ頼む。行くぞ——」

パパスさんが身構え、私が魔力を杖に込めた瞬間。

パパスさんの首が、刎ねられた。

「え」

何が起きたか、脳が処理を拒否した一瞬の空白。その次の瞬間、私は脳天から降り下ろされた金属製の棍棒のようなもので、頭蓋ごと体のすべてを砕かれた。

死。

痛みを感じる暇もなかった。見事なほどの即死攻撃。これがオーバーキルってやつか。なんてことは考えられなかった。

そこは暗い世界だった。それは己の意識、その境界さえ曖昧になる、絶対の無。

私はこの場所を知っていた。一度来たことがある。暑くも寒くもなくて、もちろん何も見えない、聞こえない、感じない。散り散りになっていく思考は溶け合って、己がなんなのかすら分からなくなつて、このままそうして消えてしまえたら、つらかったこと、苦しかったこと、全てを手放して楽になれるんだろうな、とぼんやりとだけ思う。

——だけど。

「アルマ、こつちだよ」

だけど、全てを手放すことはできない。生きるとは怖い。死ぬことは恐ろしい。こんなことはもう、終わりにしたい。

——だけど。

「さあ、君の冒険を続けなくちゃ」

だけど、そこに光が差し込んだから。鼓膜でなく、むき出しの魂を震わせるその声を、もう一度ちゃんと聞きたいから。

「……あ。おはよう、ごございます」

「うん。おはよう、アルマ。大変な世界に行っちゃったみたいだね」

そうだ、私は異世界で明らかに敵うわけのないモンスターに立ち向かった挙句、奮戦する間もなく虚しく死んだんだ。隣では一緒に死んだらしいパパスさんも起き上がっていて、「面目ない」と勇者様に頭を下げている。

聞くところによると、私たちの遺体を異世界から回収した神様が、お仕事でだった勇者様の船に届けてくれたらしい。神様がその場で生き返らせてくれればいいのに。そうしないのには何か事情があるんだろうか。まあ、勇者様が生き返らせてくれたから別にいいけど。「うん。アルマは『冒険』に向いてるね。死んだのにそんなに動揺してないもの。でもまあ、なるべく死なないようにね」

「はい。精進します」

動揺、という表現が正しいのかは分からないけれど、パパスさんは呆然とした顔で自分の手のひらをじっと見つめていた。まあ確かなな。あの空間嫌だよなあ。なんか試されてる感じがすごいと思うか、人間楽な方を選びたくないから、やっぱり苦しみのない世界に早くいきたくなるわけよ。それを突っぱねるって、なんというか、戻ってきた瞬間にどっと疲れるのだ。これが戦闘中に死んで生き返ってたらと思うと、せつかく生き返ったのに、死の恐怖がすぐ目の前にあるわけでしょ。やってらんないよね。

「今からフィッシュベルに戻るけど、さすがにこのことはマリベルにもシャークアイさんにも一応伝えておくよ。危険があるのは分かったことだけど、自分たちで対処できなかったわけだしね」

「ア！ は、はい……」

勇者様は別に怒っていなかったけれど、やっぱり心配はしてくれているようだった。私はマリベル様とシャークアイ様の反応がどんな感じになるか、予想できそうできなくて、変な汗をかき始める。

「アルス殿……私は、皆さんにアルマを任せられたというのに、本当に不甲斐なく……！」

「どうしよう」以外の言葉が頭に浮かばなくなった私を現実世界に引き戻したのは、正気に戻つたらしいパパスさんだった。両掌をぐつと握ってアルス様へ深々と頭を下げている。

え。そんなそんな。パパスさんはあの殺人マシンたち相手に、私を庇いながら一生懸命戦ってくれていた。あの世界の主はどう考えても規格外だ。水も食料にも不安があるあの機械だらけの世界で、マシンの主を倒すまで経験を積むのは現実的ではない。だったら、この世界に戻ってくるために、敵わないかもしれないと思っただけでも挑戦するのは、まあアリだろう。

まあ、私がこんなことを考えるのも、「この世界の神様の管理下なら生き返らせてくれるだろう。」って甘い考えがあるからなんだけど。死ぬのは良くないしもちろん死にたくないけど、生き返られるならガンガン挑戦できる。リユカたちの世界とは違い、あのマシンたちの世

界は、アルス様たちがたまに行く世界の特徴に当てはまった。だから、大丈夫だと思った。浅はかだと言われれば言い返せないが。

「まあまあ。危険なのはみんな分かったことですから。『取り返しのつく範囲』でよかったですよ。でも——そうだな、どちらか、あるいはどちらかも、蘇生手段は持っていた方がいいですね」

「それなら、私が」

パパスさんと声が重なる。私たちは互いの顔を見て、それから頷いた。

「じゃあ、順番かな。アルマ、蘇生手段と言われて思い浮かぶのは何？」

「え？ えーと、ザオラルとザオリク、それから天使のうたごえにせいの歌、でしょうか？」

一応、吟遊詩人職を修めている私は「天使の歌声」という、ザオラルと似た効果の特技を使える。でも使ったことはないし、吟遊詩人にまつわる思い出が甦ってきそうで、実際使うときに雑念が入って成功率が下がるんじゃないかという不安があり、できればザオリクを覚えたいところだ。

「そうだね。呪文や特技じゃなくても、復活の杖とか、世界樹の葉とか、道具に頼るって方法もある。呪文も特技も封じられる可能性があるから、いろいろな手段があると、もしものときに助かるよ」

「さすが勇者様……！」と、ハツとする。そういえば、リユカたちと冒険していたときに、道具係みたいなことをやっていたこともあった。経験値を積み重ねば、と自分で動くことばかりを考えていたけれど、道具を有効に使うことも、無理なく敵と戦うには大事なことだと、改めて気付かされる。

「ふむ。異世界というのは、想像だにしない強敵がいることも分かった。迂闊に踏み入れず、まずはじっくり実力をつけながら、この世界に散らばる石板を集める方が先決のようだ。その中で、便利そうな道具も集めていくとしよう」

「うん！ これからの方針が決まったね」

「それじゃあ、フィッシュユベルに戻ろうか」

アッ、それはまだ心の準備が……。私は急に存在を主張しはじめた心臓を押さえ、空いている手でパパスさんの手を握った。ちらりと見たパパスさんは、覚悟を決めた顔をしている。すごい。

さて、フィツシュベルに戻って、先にマール・デ・ドラゴンに向かわせてもらうことにした。ほら、やつぱ、一番は父親であるシャークアイ様に報告しないとなって思っ

て。私は自らの口で経緯を説明し、自分の見通しの甘さや、軽率に石板を使って異世界に行ったことの反省を伝えた。パパスさんも、一緒に謝ってくれる。

「謝ることではないだろう。今回は取り返しがついた。今後どうすればいいかも分かっている。アルマ、もう旅をするのはやめたいと言われる方が、オレとしてはがっかりしていたぞ。一筋縄ではいかない旅だとしても、取り返しがつくうちは、どんどん失敗を糧にするといい」
イケメン……。！ 圧倒的イケメン力……。！！ いや、イケメンなんて軽い言葉で片付けるにはあまりに尊すぎる。器が大きい。私の語彙力が追い付かない。

「アルマ。父はお前がこうして戻って顔を見せてくれれば、それでいい。よくぞ『死』を乗り越えたな」
「……………!! はい!! 何があっても、絶対に戻ってきます!」

私は感極まり、衝動に身を任せてシャークアイ様に抱き着いた。人間力が素晴らしすぎる。私もあやかりたい。なんて思っていると、「じゃ、次はマリベルのところだね」なんて朗らかに言うアルマ様の声が背後から聞こえてきた。え、もうちよつとシャークアイ様を堪能してからじゃダメなんですか……………?

「あんまり遅い時間になると、『泊まっていけ』って言われるよ。パパスさんはともかく、アルマは」
「すぐに行きます」

もちろん私はマリベル様のことをすごく尊敬しているし、大好きな人の一人だ。そこに嘘偽りは少しもない。でも、説教が終わったとして、その後泊まっていくのは普通に気まずいだろう。五歳児に夜通し説教ということはないだろうが、私はアルマになってから、自分のや

らかしで怒られるという経験に乏しいため、予測ができない。

「ハツハツハ。マリベル殿も冒険者だ。そう怖がらずとも、旅に危険がつきものだということは誰よりも理解しているだろう」

シャークアイ様が朗らかに笑って、ぽんと私の頭に手を置いた。

「胸を張れ。お前は『死』してなお、挫けずに前を見ているのだ。誰にでもできることではない」

——死してなお。

別に、この世界であつても「死」は軽く済まされるようなことではない。シャークアイ様の言葉も、表情も、真剣だ。もしかしたら、蘇生しても「死」から戻ってこなかった仲間だつて、いたのかもしれない。悲壮感はないけれど、ただの「慰め」ではないと分かる、ずしりと重い何かを感じてしまう。私は意図して、笑顔を作った。

「はい。私、挫けません。リュカたちに悲しい思いをさせたままの方が、死ぬよりずっと、嫌だから」

ペこりと頭を下げて、私は船を降りた。マリベル様の家にお邪魔し、先程よりは覚悟が決まった状態で、自分たちの身に起こったことを話す。

マリベル様は腕を組んで、静かに話を聞いていた。それから、メイドさんの出したお茶を一口飲んで、コトリとカップを置く。

「悪かったわね」

「えっ?」

「アンタたち、行く前に私に相談してきたでしょう」

まあ、たしかにそれはそうだ。でも、相談に行ったのは、「リュカたちのところへ行くのはマリベル様を倒してから」という条件があつたから、他の異世界にも適応されるのかと思つて確認しただけ。マリベル様だつて、「行きなさい」ではなく「行けば?」と言っただけである。「マリベル殿。恥ずかしながら、手も足も出ずに死んだことで、私は己の未熟さを再認識いたしました」

「あら、何よ。だから旅をやめるとでも言うの?」

「いいえ。逆です。強敵と戦う経験をより積んでいかねばと思ひました。そこで——」

パパスさんはぐつと拳を握り、「私を鍛えてくれませんか」と頭を下げた。呆気にとられる私と、眉を寄せたマリベル様。パパスさんが、頭を下げたまま言葉を続ける。

「アルマに以前聞いたことがあります。マリベル殿は戦況をよく見ておられ、常に的確な意見をおっしゃっていると。それに、魔法にも精通し、手数も多いと見受ける」

「悪いけど、私は誰かに鍛えてもらった経験があるわけでも、戦いが好きなのでもないわ。お断りよ」

つん、とつれない様子で言ったマリベル様が「でも——」とくるくる髪の毛をいじりながら付け加えた。

「ガボなら、暇してるかもね。私より速いし、手数もあるし、遠慮もないから、丁度いいんじゃないかしら」

「……かたじけない」

顔を上げたパパスさんがにこりと笑うと、マリベル様は顔をちよつと赤くして、「ふん。優しく可愛いいマリベルちゃんに感謝しなさいよ」と言いながら立ち上がる。それから、部屋の入口で控えていたアルス様のところまでつかつかと歩くと、ぽかりと肩を小突いていた。「何ニヤニヤしてるのよ。むかつくわね。アンタ、アルマたちの旅にちよつかいばかりかけて、本業を疎かにしてないでしょうね？　いくら大きな漁がない時期だからって……」

「もちろん、ちゃんとやってるよ。手なんて抜いたら、父さんにどやされるもの」

くすくす笑うアルス様は、さすがと言うべきか、ぎろりと睨むマリベル様に対して全く怯んだ様子はない。

「じゃ、僕はもう家に戻るね」

「あ、じゃあ、私たちも。マリベル様、また、いろいろとご相談させてください」

「まあ、暇なときだったら付き合っただけでもいいわよ。じゃあね、つまらない報告はもういらぬから」

返事も聞かずに、すたすたと階段の方へと歩いて行ってしまったマリベル様の背中を見送る。うーん、私の周りには、できた人が多いな。

パパスさんがマリベル様に稽古を付けてほしいと言ったのにはびつくりしたけど。

「明日、ガボ様のところへ行く?」

「そうだな。御挨拶くらいはしておこうと思う。石板や役に立ちそうな道具探しもあるし、毎日というわけにはいかないだろうが、やはり格上の相手と戦う機会は大切にしたい」

確かに、魔物と戦うときは基本的に安全第一だ。勇者様たちのように世界を救う旅をしていたのなら、格上の相手と戦う機会は多いだろう。しかし、私たちはここで無茶をしても意味がない。無茶をするならば、リユカたちのいる世界に戻ったときだ。だから、修行のときは基本的に勝てそうな相手との戦闘をする。楽勝では意味がないが、強すぎる相手との戦いは、数もこなせないし、相手は殺す気がかかってくるし、下手をすると今回のように死んでしまうし。

強くになるには、いろいろなことを考えなくてはいけないな、と私は一つ、息を吐いた。

新たな場所へ

長い船旅にヘンリーが心底参ってしまっていて、僕たちはぽつんと豪邸の建っている小さな島へ上陸することにした。お金持ちが個人で使用している島のように、その他には何も無い。船員が停泊の許可を取りに行くと、初めは渋っていた様子だった年若い青年も、この船がルドマンさんの物だと知った途端、快い返事をくれた。

「ここは別荘として父が僕に贈ってくれましたね。しかし、ここは基本的に穏やかな気候だし、四季も美しい。いずれ妻でも娶ったら、ここを本邸にするつもりなんです。ルドマンさんにはいつも父がお世話になっていました」

船長にそんなことを話していた青年を見て、ヘンリーは「なんだかなあ」という表情をしている。彼はそれに気付いているのかいないのか、一緒に乗っていた僕たちによく視線を向けると、「この子たちは？」と不思議そうな顔で聞いてきた。

「ルドマン様の娘である、フローラ様のお友達です。我々は彼らを送り届ける途中でして」

「そうだったんですね。坊やたち、こんな立派な船で送ってもらえて、さぞうれしかろう。この家で十分休んでいくといい。ああ、そうだな。水や食料でお困りでしたら、お譲りしますよ。もちろん、タダというわけにはいきませんが……」

船長からの紹介を聞いて、すぐに僕らに興味を失った様子の青年は、商談を持ち掛けている。まあ、僕らとしても変にじろじろ見られるのは気分が良くないし、ヘンリーはすぐにでも休みたそうだったので、ありがたかった。部屋を案内してくれたのは、僕らより少し年上の少年で、クラウドというらしい。彼は明らかに顔色の悪いヘンリーを気遣って、すつきり飲めるといってお茶を淹れてくれた。さわやかなミント系の香りがして、美味しいお茶だ。

「はー……。悪いな、ソロ。何度も休憩挟むハメになっちゃってよ」「大丈夫だよ。無理されるよりずっといいさ。それに、いくら長期保

存ができるからって、水も食料も限りがあるからね。補給ができそうなのは、船長たちにとってはうれいんじゃないかな。僕も、やつぱり陸の上の方がほっとするよ」

「でも、ここからは本当にずっと船の上だもんなあ。オレもそろそろ船旅に慣れたいぜ……」

「船を使わずに海を渡る方法があったらよかったのにね」

「なんだよ、空でも飛ぶのか？ そんな技術身に付けるより、慣れる方がずっと現実的だろ」

「でも、最初よりは慣れたんじゃないかな。吐くことはなくなっただけじゃないか」

「あー、そうか。まあ、そう考えたらそうなのかもな」

とりとめのない話をしてしていると、「ソロ君、アンドレ君」と船員の一人から声が掛かる。僕らが部屋の入り口を見ると、「休んでいるところ、ごめんね」と年若い見習い船員の青年が中に紙の入った瓶を見せってきた。

ヘンリーはぐったりしているので、僕が彼に近付いてそれを受け取る。瓶のふたを開けて中身を取り出すと、そこには信じられないことが書かれていた。

「ヘンリー……！ あんまり休んでいる暇はなさそうだ」

「あ？ なんて書かれてたんだよ」

「——『この手紙を手にした、どこかの誰かへ』」

どこの誰とも知れない相手へ宛てた手紙は、このように書かれていた。

へこの手紙を読んでいるあなたへのお願いです。私はエルヘブンに住むマルゴといいます。どうか、我々を助けてください。近頃、どうにも村の皆の様子がおかしいのです。そういう私自身も、時折自分が自分でなくなってしまうような恐怖を感じながら、日々を過ごしています。このままでは、我らに与えられている大切な使命も果たせなくなってしまうでしょう。どうか、どうか、この村をお助けください。へ

「……これだけじゃあ、エルヘブンで何が起きてるのか全く分からねえな。罨だったらどうする？」

「僕もそれは考えた。でも、どちらにせよ、この手紙を見れたことは運がよかつたんじゃないかな」

そう言うと、ヘンリーはふつとため息を吐く。

「まあ、エルヘブンに行くことは決定事項だ。何も知らねえまま行くよりは、罨にしろ罨じゃないにしろ、『何かある』って身構えといった方が対策は立てやすいもんな」

僕もそう思う。なので、すっかり頷いてベッドでだらだらしているヘンリーにっこり笑みを向けた。ヘンリーは露骨に眉を寄せる。

「じゃ、君には悪いけど、船長になるべく早く出航したいことを伝えてくるよ」

「はいはい、行ってこい。決まったら教えてくれ」

苦虫を噛み潰したような顔になったヘンリーは、目を瞑ってぼたんとベッドに倒れ込んだ。エルヘブンへの用事が終わったら、今度はできるだけ陸路で行けることを片付けることにしよう。それとも、やっぱり慣れのためにも船旅をどンドン続けた方がいいのかな？ どちらにせよ、早くデールとゲレゲレに会いたい。

休ませてくれたこの屋敷の主と、世話をしてくれたクラウドへお礼を告げ、食料と水の補給を待って、僕らは忙しく出航した。

ルドマンさんが描いてくれた簡単な地図によれば、エルヘブンはもうすぐだ。船で洞窟内を通って、そこを抜けた先にあるらしい。エルヘブンに着けば、僕たちはキメラの翼を常備しているため、船には帰郷して良いことを伝えてある。彼らは本来ルドマンさんに雇われていた身だし、エルヘブンに『何かある』なら、不必要な危険に巻き込むわけにはいかないからだ。

洞窟に入る頃には、すっかり夜になっていた。波の影響が少ないということで、魔物は手強かったけれど、僕とヘンリーが交替で休みながら船を守ることにして、上陸の前に一度休むことにする。

「不思議な洞窟だな。なんだか……うまく言えないけど、緊張するかどうか」

「うん。僕もそう思ってた。なんていうか、神聖な雰囲気と、邪悪な気配を同時に感じるような気がするよ」

正直、体を休めろと言われてもそうできる雰囲気ではない。それでも、明日はエルヘブンに着く。僕のお母さんの生まれ故郷で、何か良くないことが起きているらしい、その村に、着いてしまう。

「先に眠らせてもらおうね」

「おう、任せとけ。聖水も撒いてあるし、よく寝とけよ」

ヘンリーの言葉にひらりと手を振ることで返事とし、僕は宣言通り眠りについた。

なんだか、ざわざわと騒がしい胸を、必死に宥めながら。

音のない神殿の一室で、アダムは目を覚ました。寝覚めがよかったことなんて、今までに一度もない。けれど、それは自分のやるべきことを疎かにする言い訳にならず、彼は自室にある鏡を見た。

己の姿の確認。

これを日々やらないことには、アダムは己の本当の姿が分からなくなってしまうようで、恐ろしかった。もちろんそんな気持ちを誰かに打ち明けることはないが、今日も変わらぬ顔に心底安堵する。

アダムは変身に関して、卓越した才能と魔法の技術を持っており、だから自分を心底嫌悪しているであろう父親にも生かしてもらえていたのだと自覚していた。

「魔物と人間の子である」らしいと、周囲の言葉から知っていた彼は、自分自身が誰かに変身することを好まない。「自分」という軸がないのに変身して、戻れなくなってしまうたらという恐怖を拭いきれないのだ。今までに一度も失敗したことがないとしても。

「アダム様。イブール様より次の指令です。部屋に来るよう、仰せつかっております」

「すぐに行く」

アダムの教団での役割は大別して二つ。一つは、今呼びつけられたように、教団が世界を牛耳るための細かな工作だ。息子の顔を見たくもないらしい父親にとっては、追い出す良い口実にもなっているのだろう。

二つ目は、魔物を人間に化けさせること。特に、ラマダという教団の幹部には、人々を説き伏せる「聖女」を演じさせているため、定期的に魔法を掛け直している。一つ気に食わないのは——ラマダが「聖女」を演じるとき、「マーサ」と名乗ることだ。それはアダムの「母」の名であった。

そもそも、アダムが他人を変身させる能力が知れ渡るきっかけとなったのが、この「母」だ。どういう経緯か記憶にはないが、幼いアダムはある日突然「母」に会うことができないと告げられた。その言葉通り、母はもう二度と彼の前には姿を見せなかつたのである。

それから、母を求める幼子が、部屋を訪れた世話係を「母」の姿に変えた。魔法に長けたイブールにもゲマにも、そんなことはできない。やるとしても、それには時間と魔力と手間が掛かる。戦闘で使われるような、呪文で簡略化された魔法とは違うからだ。

その日から今まで、アダムは会うことも叶わなかった父のために力を使っている。そして、これからも使い続けるだろう。

「テルパドールに『天空の兜』があるのは知っているな」

「はっ。存じております」

「次の標的はテルパドールだ。国を亡ぼすか、最低でも兜を奪ってこい。詳細は追って伝える。まずはかの地に拠点を構えよ」

「はっ」

アダムは返事をし、イブールの部屋を出た。父は、アダムがラインハット侵攻を失敗させてから、魔法の研究や魔法道具の開発に大変熱心である。息子としては「自分の代わりになるような道具を開発して

いるのだろう」程度にしか思っていないが。事実、イブールは一時期、部下に世界のあちこちまで探させて「変化の杖」なる物を手に入れさせ、昼夜を忘れて夢中になっていた。

しかし、試しにそれを使って教団の奇跡を示そうとしたものの、邪魔が入って変化の杖も魔封じの杖も奪われ、尚且つ馬鹿な信者が情報を漏らしてしまったのか、「光の教団の仕業」と広まってしまったらしく、散々な結果だったとの報告を受けている。試作品の「奇跡の証」も、力を発揮される前に砕かれてしまったそうだと、監視の魔物が言っていた。

イブールの怒りはすさまじいもので、黒髪の少年と茶髪の少年、ピンク色の髪の女の三人組を血眼で探しているようだが、結果は芳しくない。

とはいえ、アダムにはあまり関係がなかった。魔物たちがどれだけしくじろうとも、それはそれ。自分のやるべきことは、父の指令をこなして、信頼を勝ち取ること。ラインハットとサンタローズの侵攻では、あまりに失態が多すぎた。

「テルパドール……砂漠の国だな。面倒だが、行ったことのあるやつか空を飛べるやつを連れて行くとするか」

ふう、と息を吐き、アダムはその紅の目を伏せる。

「しかし、面倒なのがいるんだった」

それから、らしくなく顔を歪めた。彼の腹心の部下たちは現在、押しかけてきたはた迷惑な少女をかくまっている。後から部下に話を聞けば、期間限定で住みついているそうだ。なんだか今日は、あの少女に会いそうな気がした。

普段は鉢合わせないように工夫しているのだが、現状報告や物資のやりとりがあまりに面倒なことになっている。アダムとしてはさっさとあの立派な宿屋に帰ってしまえとすら思っていた。

——いや、なんだか妙にこちらに懐いてくる年上の少女を鬱陶しい

と思うのは、それだけの理由ではない。少女——ビアンカは、彼のことを「アベル」と呼ぶ。それが、たまらなく嫌だった。

それでも、適当な偽名は思いつかないし、本名を伝えるよりはよっぽどマシだろうと、特に訂正はしていないが。

悪い予感はあるもので、アダムが古代の遺跡を訪れると、その出入口でドラゴンマッドのカンデラを中心とした数人の魔物と少女とが、別れを惜しんで言葉を交わしているところだった。

「本当に……今まで……ありがとう。私、私、きつとお母さんが良くなるように、頑張るわ。もちろん、約束は絶対を守るから、安心してね」泣きそうに、大きな青い目に涙を浮かべる少女が、ドラゴンマッドへ抱き着く。抱き着かれたカンデラが、不器用そうな腕で愛弟子を抱きしめ返し、表情の乏しい顔で、小さく笑った。

「ああ、そうしてくれ。さあ、もうどこへなりとも言っちゃまいな。親御さんが心配してるよ」

アダムはなんとなく、少女たちの視界に入らないように身を隠した。このままやり過ぎせば、少女はキメラの翼を使って自分の家へ戻ることだろう。

「ビアンカ、行っちゃまうのかあ。寂しくなるなあ。そうだ。オイラが家の近くまで送っててやろうか？」

まずい、と思った。今の発言をしたのはキメラだ。せめてホークブリザードやホークマンが言っていれば、別にアダムも止めはしない。飛行能力があるとはいえ、ホークブリザードは掴んでいる手が冷えるし、ホークマンは抱えてくるのでちよつと惨めな気持ちになる。

そのため、この場にいる魔物を連れて行くとしたら第一にキメラ、次点でテルパドル出身の者の予定だが、後者はできれば避けたかった。

「え、悪いわよそんなの。私はいいけど、あなたたち、人間と仲良くしてるって他の魔物に見られたらあんまり良くないんじゃないの？」

聞こえてきたビアンカの言葉に、アダムは内心でほっと息を吐く。これで、わざわざ止めに入らなくても大丈夫だろう。そもそも、この魔物たちには、アダムが教団から指令を受けたときにすぐに連れて行けるように、基本は待機命令を出してある。つまり、待機していない者は命令違反だ。

「別に少しくらいなら大丈夫さ。それじゃ、オイラに捕まれよ」

大丈夫ではない。アダムの額に青筋が浮かんだ。

「……待て」

アダムは大きなため息を吐いて、仕方がなしにビアンカと魔物たちの前に姿を現す。

「げえ!? ぼ、坊ちゃん、何か御用ですかい!？」

キメラの発言に、カンデラが顔を手で覆い、大きな息を吐く。建前上、彼は「坊ちゃん」ではなく「間抜けな使いっぱしり」であるのに、その設定すら忘れてうろたえている姿に、真実とまではいかずとも、ビアンカは当然何かを察するだろう。

アダムはつかつかとドジなキメラのもとへと近付き、その羽根の付け根を掴んだ。

「お前は今からおれと一緒に『使いっぱしり』だ。いいな?」

「へ、へえ! び、ビアンカ。そういうことで、送ってやろうと思っただけど、悪いな!」

にこり。キメラの言葉を受け、ビアンカは抜けるような青い空に咲く一輪の花のような可憐な笑顔になった。

「気が変わったわ!」

少女は、キメラの羽根を鷲掴みしている少年の腕に、するりと自身の腕を絡ませる。目に溜まっていた涙はどこへやら、にやりと悪戯な顔をして、「お出掛けするなら、途中まで乗せてってよね」と言葉を付け足した。

「悪いが火急だ。キメラの翼でもなんでも使え」

「いやよ。どうしてもって言うなら、条件があるわ」

「条件だと？」

アダムが眉を寄せ、紅の目で少女を睨む。美貌の少年に睨まれても、ビアンカはどこ吹く風だった。

「ええ。あなたの本当の名前を教えてください。お友達の名前をいつまでも知らないのは、さみしいわ」

「待て。おれとお前はいつ『友達』とやらになった？ おれの記憶にはないが」

「あら、それなら今、なればいいのよ！ よろしくね。それで、どうするの？ 名前、教えてくれるの？」

羽根を鷲掴まれているキメラを覗き、その他の魔物たちが面白がついていそうな空気を感じ取って、アダムは冷えた目を彼らに向けてから、小さく舌打ちをした。

「行くぞ。アルカパだったな。おい、早くしろ」

せつつかれて心なしか胴体を強めに捕まられているキメラは涙目になっていいる。そして、子ども二人にしがみ付かれたまま弱々しく翼を動かし始めた。

「師匠、大人になったら、きつとお礼にくるわ！ だから、みんなも、元気でね!!」

陽の光を浴びて、金色の髪が輝く。手を振った彼女に、魔物たちが手を、あるいは羽根を振り返っていた。見送りに来ていなかったはずの魔物たちも、遺跡の入口に目を向ければ、こつそりと外の様子を

伺っている。

「ふふ……みんな、良いひとたちだったなあ……」

ぼろり、ぼろり。ビアンカの目から零れ落ちた涙が、重力に従って落ちていく。空高く舞い上がる少女の涙は、宝石のようにきらきらと、けれどどこか控えめに空を彩った。

「ね、アベル。私、今度サラボナって町の近くにある、山奥の村へ引越すの。いつか遊びにきてね」

「なぜおれが……」

「いいえ。『いつか』って言葉は、やめにする。アベル、五年後か十年後、会いに来て。それで——他の人にはできない、あの場所の思い出話を、させてほしいの」

ビアンカは、今度は真剣な眼差しでアダムを見つめる。くるくる表情の変わる少女だと思いつつ、どうにもつつばねることができなくて、アダムは小さく頷くことしかできなかった。

「約束よ。五年後に来られなかったら、十年後でもいい。どっちも来られそうになかったら、せめて手紙をちょうだい」

長らく陽の光に当たっていなかったからか、ビアンカの肌は青さを帯びるほど白い。その白い肌が、頬だけは色付いて、真剣な眼差しの先に映るアダムの顔は、未だその瞳に浮かび続ける涙のせいで歪んでいた。

「アベル。あなたが何をしていて、どんな人なのか、私まだ何も知らないわ。だけど……」

ビアンカが唇をきゅつと噛みしめる。それから震えた声で「だけど」と言葉を絞り出した。日頃はお調子者のキメラは、少し切なそうな顔をしながら、それでも口は出さずにアルカパの町へ向かって飛行を続けている。

「大人になったとき『昔の話』ができる友達が、ほしいの。それから、あなたにとって私も、そうだったらいいなって思う。だから、あのね、死んじやだめよ。何をしてたっていいけど、元気だね」

「……………」

言葉に迷って、アダムはぐずぐずと鼻をすすって話さなくなっ

まった少女を見つめた。

「おれは別に、お前の『友達』なんかじゃないが」

アダムは目を細めた。それはきつと、彼女の金髪が眩しかったからだ。

「その『約束』は覚えておいてやる。あれこれ詮索してこない気遣いへの礼としてな」

そのときの少女のとびきりの笑顔を何かに喩えたとしたら、何が適切だったのだろうか。

ともかく、アルカパの近くへ降り立ち、ビアンカはアダムとキメラを抱きしめてから、両親の元へと駆けて行った。きつと、親子で泣きながら抱き合い、彼女は魔物たちとの「約束」を守って、これまでの暮らしぶりについては誰にも話さず隠し通すのだろう。

アダムはなんとなくそんなことを思って、それから硬質な声でキメラへと声を掛けた。

「行き先はテルパドールだ。我々は、乾ききった砂漠へ血の雨を降らせることになった」

「……御意のままに」

先程まで、少女につられて涙ぐんでいたお調子者のキメラが、恭しく首を垂れる。よく晴れた日のことだった。

——やはり、偽名を伝えておくべきだったかな。

「アベル」と。その名の響きは、言い表しようもなく、彼の心を波立たせるものだったから。

毒された村

洞窟に着いた僕たちは、船長たちに別れを告げてエルヘブンを目指した。魔物は今まで訪れたどの地方より強くて、何度も苦戦したけれど、ようやく目的地が見えたときのことである。

「なあ……なんかおかしくねえか」

「うん……なんだか、空気が重いというか……禍々しい感じがする」

「こりや、相当気を引き締めていかねえとな。念のため、変化の杖で動物かなんかになって村の様子探ってみるか？」

「うーん……リリカさんは使いすぎると壊れるって言ってたけど、使ってみる？」

「よし。使おうぜ」

ヘンリーが杖を振ると、僕たちは二人とも猫になった。ちなみに、ヘンリーが茶トラ猫で、僕は灰色の毛並みの猫だ。

「アンドレ、君、猫になりたかったの？」

「特に何も考えなかったぜ。杖が適当に選んだんだろ。ま、行くとするか。ちゃんと人前では猫の鳴きまねしろよ」

動物に変えられた人たちは人の言葉を話すことができなかったのに、なぜか僕たちはお互いの言葉が分かる。変化した者同士にだけ分かるのか、それとも猫の体で人の言葉を喋っているのかまでは分からないけど、ヘンリーの言う通り、用心に越したことはないだろう。幸い、杖も壊れていない。

「うげ!？」

「い、一体何を……!？」

しかし、僕たちは思わず、声を上げてしまった。周りの人たちはそれどころじゃなくて、僕らの言葉には気付いていなかったようだけど、それもまた、この状況の異常性を表している。

エルヘブンの人たちは、狂気に満ちた目で、表情で、様相で、自分たちの家を村を、破壊していたのだ。

「魔王様万歳！ 我こそは魔王様の右腕なり！」

「はん！ あんたなんかどこが右腕よ！ 右腕はこの私！」

「ああ、壊し足りねえ……！ 全部ぶっ壊しちゃいてえ！ そろそろ立てこもってる長老たちでもぶっ殺しに行くかあ!？」

他人を罵倒し、魔王に与することを高らかに言い、破壊活動に勤しむ人々。どう見ても、異常だった。

「なんだあ？ 猫の分際でじろじろ見やがって。俺様は魔王様の忠実なるしもべ！ お前らなんか片手でひねりつぶしてやるぞ！」

近付いてきた目の血走った青年に対して、僕たちは軽く視線を合わせて魔法で気絶させることに決める。だが、それを決行しようとしたところで、ひよい、と二人して首根っこを掴まれ、誰かに抱きかかえられた。

「やめなさい。可愛い猫じゃないか。偉大なる魔王様の部下であるなら、寛容さも持ち合わせなければね。我らが憎むべきは人間。そして、我らがすべきは魔界の扉を開いて、魔王様を早急に地上へお迎えすることでしょうに！」

女性の声だった。その人に声を掛けられたことで、青年は興が冷めたのか、「チッ」と舌打ちをして、崖に創られた家々を破壊する活動に戻っていく。

僕らが見上げると、その人はにこりと微笑んで「怖い思いをさせたね」とやわらかく言った。波打つ豊かな赤みの強い茶色い髪をしたその人は、同じ色の目を細めている。

「うちへ招待しようか、お客様。よく来たね」

抱きかかえられたまま、僕らは村の外れ——というより、村と同じくくりにかけていいのか分からない場所にひっそりと建てられた小屋のような家に招かれた。

「さて、小さなお客さん。君たちは人間だね？」

御丁寧に僕ら一人ずつ椅子に乗せたその人の言葉に、僕らは答ええない。どういふつもりか、なぜこの異常な村で彼女だけが「まとも」そうに見えるのか、何も分からなかったからだ。

「ああ。あんな光景を見たら、もちろん警戒するよね。私はマルゴ。このエルヘブンののはみ出しもので……それが良かったのか悪かったのか、村人たちのように頭がおかしくならなかった一人だよ」

手紙の主だ。その名を聞いてそう思い至った僕は、ヘンリーの方を見る。彼は頷いていた。このまま警戒してただけでは、どうにもならないだろう。

「僕はソロ、こっちはアンドレです。この村の人たちは、突然あんなつたんですか？」

僕らは人間云々の質問にはとりあえず答えず、現状把握に勤めることに決めた。

「……そうだね。ある日突然、『旅の者』を名乗る怪しい男がやってきた。そいつが膝を痛めた年寄りに『万能薬』と称した水を渡したことが始まりさ。受け取った方はさっそく飲んで大喜び。膝が悪くちや、エルヘブンの急な階段を上るのはかなり厳しいからね。体の不調がすっかり無くなったと気を良くした年寄りも、その『万能薬』を売ってくれと持ち掛けた」

マルゴさんは眉を寄せながら、長く骨ばった指で机をトントンと鳴らしている。

「怪しい男は、『それならぜひ、村の皆さんにどうぞ』と気前よく大量の『万能薬』を置いていった。年寄りを中心に広まった『万能薬』の噂は、村人全員に広まったよ。なにせ、小さな村だからね。ある日、こんなに素晴らしい『薬』を、ぜひ長老たちにも差し上げよう、と誰かが言い出したんだ。しかし、一口飲んで四人の長老たちが『これを飲んではいけない』と禁止した。それからさ。タガが外れたみたいに、みんなが頭のおかしい言動を取り始めたのは」

「その……『怪しい男』は、光の教団を名乗っていませんでしたか？」
ヘンリーがそう尋ねると、深く長いため息を吐いたマルゴさんは、

ゆるゆると首を横に振った。

「さあ？ 誰も顔も何も知らない奴の言葉を信じて、馬鹿みたいにありがたがって薬を飲んでいたよ。飲んだ量とか耐性とかがあんのか、効きの良い人と悪い人がいるみたいだけどね。それで、効きの悪かった長老たちは村人たちに日々殺されそうになってるんだ。まあ、頭がおかしくなっているとはいえ、どこかで理性が働いてるのか、実行には移してないんだけど」

「あの……それじゃあ、薬が切れたら元に戻るとか、そういうことは……」

「私も初めはそう思った。はみ出し者で捻くれ者の私や長老たちのように効き目の薄かった人たちもいることだし、薬が無くなればすぐに戻るんじゃないかって、隠してみたんだ」

トン。僕の言葉に受け答え、貧乏ゆすりのように続いていた指の動きが止まる。

「逆効果だったよ。疑心暗鬼になった村人たちは、互いを殺そうとし始めたのさ。仕方なく、『薬を増やせないか研究していた』と嘘を吐いて、薬を戻すことにした。結局、被害が物や家くらいで住むのならと、彼らを刺激しないように『魔王様』とやたらに妄信しているふりをして接するのが一番『平和』らしくてね。この『異常』の中では」

その目は憎しみに満ちていた。当たり前だろう。たとえば「はみ出し者」だとしても、マルゴさんはこの村で生まれ育った人のはず。そうでなくても、こんなこと、誰が許せるだろうか。

「実は僕ら、あなたの手紙を読んで、ここまで来ました」

僕はちよつとした嘘を吐いた。嘘というよりは、もう一つの理由を話さなかっただけとも言えるが。

「ああ、あの手紙か。てことは君らやつぱり、人間だよな？ さつきも村の有様に驚いて喋ってたもの。よかったあ。ただの喋れる猫だったらどうしようって、内心ひやひやしていたんだ」

憎しみを宿していた目元が少し和らぐ。それから「その姿は呪い

？』と、言葉と裏腹に朗らかな口調で聞いてきた。

「あ、これは……」

「そうなんです。でも、呪いの根本がどうにかなったから、時間が経てば解けるって言われました」

僕の言葉を遮って説明を続けたヘンリーが、マルゴさんに質問される間に「話を戻していいですか」と話題を逸らす。僕としても、変化の杖なんて代物については人に話したくないので助かる。何せ、悪用されていた実績がある物だし。人間だろうが魔物だろうが、悪いやつの手に渡ってしまったら、きつと良くない使い方をするだろう。

「まだあるとはいえ、薬は有限なんですよね？　ということは、薬が尽きたら……」

「まあ、三択だろうね。体から『万能薬』が抜けて元に戻るか、戻りはするがなんらかの後遺症が残るか、私が隠したときのように狂暴化するか」

「手紙には、マルゴさんも時々自分が自分じゃなくなるって書いてあったけど、大丈夫なんですか？」

ヘンリーが小さな耳をぴくぴく動かしながら聞く。猫になってからの癖なのか、それとも周囲を警戒しているのかは分からない。

「もちろん、大丈夫じゃないよ。私も『飲まないのはおかし』とか言われて、一口飲まされた。ま、さつきも言ったけど効き目は薄かったみたいだけどね。ただ、夜になると理性が働きにくくなるんだけど……。あ、そうだ。この家にはみんな来ないから、君たちは夜、ここで休むといい。私は村へ行くから」

「えっ、そんな！　村は危険じゃ……」

マルゴさんは女性だ。実際のところは分からないけど、二十代後半くらいに見える。僕らのように鍛えているようにも見えなければ、リカさんのように強者特有の雰囲気もない。

「彼らは私を『仲間』だと思っているし、私も正気じゃなくなったときに自分の家を壊したくないから、夜は村の中で過ごしているんだ。どうせ私がやらなくても誰かが壊すなら、罪悪感が減るでしょう？」

そう笑ってみせた彼女が、僕にはなんだか痛々しく見えた。本当は、自分の生まれ育った村を壊したくなんかないはずだ。サンタローズやラインハット、グランバニアでもしも同じことが起こってしまったら。村を、国を愛しているあの人たちが、自らの手で大切な物を壊してしまつたら。

それは、胸がはちきれぬくらい辛くて、やるせなくて、憎らしくて、赦せない。

「僕たち、何をすればいいですか？」

だからなのか、言葉が勝手に出ていた。

「確かに。現状は分かりましたけど、解決方法に心当たりとかありませんか？ なにか可能性があるなら、一つずつやってみた方がいいと思います。まず、その『怪しい男』は、もう村にはいないんですね？」
僕に続いたヘンリーが、ひげと耳をびくびく動かしながら言う。マールゴさんは席を立ち、僕らの頭を撫でた。いつもと違う位置にある耳の付け根をこしょこしょと触られて、少しくすぐりたい。

「……その男はすぐにどこかへ言ってしまったから、今どこにいるのかは分からない」

僕らから手を放した彼女は、困ったような顔になって、ふう、と息を吐いた。

「そうかあ。じゃあ、他に怪しいやつはいませんか？」

「他？ みんな頭がおかしいからあまり気にしたことがなかったけれど、村人以外に紛れ込んでいたり、君らのように姿を変えたりしている者がいるかもしれないということ？」

「オレはその可能性が高いと思ってます。なんせ、こんな趣味の悪いことをしてくる相手だ。『結末』を見届けずにどこかにいくなんてことではないだろうし、何よりこれじゃ目的が分かりませんからね」

「僕も、なんでこんなことしたのか全然分からないから、具体的に何をすればいいのかが見えにくいように思います。幸い、まだ誰も亡くなつた人はいないでしょう？ それだったら、今エルヘブンに起き

ているのは『村人が自分で物を壊す』だけ。例えばこれが『互いに殺し合う』って言うんだったら、自分の手を汚さずにエルヘブンを滅ぼそうとしているのかな、とか、『魔王を信仰させることで魔王にとって利益になる何かをする』なら、目的が見えるんですけど」

「……確かに」

顎に手を当てたマルゴさんは、神妙な顔になっている。光の教団――と、僕は勝手に決めつけてしまっているけれど、ともかく、こんなことをした黒幕の考えが読めず、僕らは三人でうんうん唸りながら考えこみ始めた。

「つと、時間切れか」

結論が出ないまま時間だけが過ぎる中で、変化の杖の効果が切れる。ヘンリーが呟いたのと同時に、僕らが元の姿に戻ると、マルゴさんは目を見開いてこちらを凝視していた。

「すみません。自分たちでも戻るタイミングが読めなくて。改めて、オレが茶トラのアンドレで、そっちが灰猫のソロです」

「あ、うん。本当に小さなお客さんでびっくりしたよ。猫になっているから少年声なのかと思ってたし。君たち、二人で旅してるの？」

彼女の驚きはもつともだ。僕たちだって、同年代の子どもが二人で旅をしているのを見掛けたら、何か深い事情がありそうだと察するし、そうでなくても身を守る術や旅の知恵を持ち合わせているのか心配になる。

「一緒に旅をしている人がいたんですけど、はぐれてしまったんです」「そうか、大変だったんだね。もう日も落ちるから、さつきも言ったように、君たちはここで休んでいるといい」

窓の外をちらりと見たマルゴさんは、悲しく笑った。

「私は正気なうちに、長老たちへ話をつけてくる。明日の朝、なんとか

ここへ連れてくるよ。知恵を絞るならいろいろな角度の意見があった方がいい。そうでしよう?」

「それなら……まだ日暮れまで時間はあるし、僕たちも行きます」

そう言った僕へ、彼女は骨ばった指で、猫にするみたいに耳の裏を撫でる。

「休んでいなさい。もしかしたら、今日のうちに長老たちがなんとかしてくれるかもしれない。ずっと話し合っているから、何か解決策が見つかっているかも」

強がりだということが分かったから、僕もヘンリーも何も言えなかった。誰だつて、自分が狂つていく姿を見られたいわげがない。

ガチャリとドアを開けて、マルゴさんは村へ向かった。

月が明るく輝く夜。僕はなんだか眠れなくて、少し遠くで狂気を孕んだざわめきを、無力感に潰されそうになりながら聞いていた。

「マルゴさんはああ言ったけどさ……。やっぱ、村を見に行かねえか」
目を瞑つたままなのに、僕が起きていることに気付いていたのか、ヘンリーが話し掛けてくる。

「休めつつても、休めねえしさ。あんだけ隠したいなら、夜が村の『本当の姿』なんだ。それを見なくちゃ、情報が少なくなつて、解決策も何も思い浮かびやしねえよ」

僕は少し迷った。戦いで疲れは癒えている。ここらの魔物が強敵続きだったとはいえ、僕らは子どもにしては弱くない。人間の姿であるなら、鍛えていない村人たちに襲い掛かれても、なんとかかなるだろう。

「……マルゴさん、とても悲しそうな顔をしてた」

「ああ。だから行くんだ」

立ち上がって、ラインハットを、サンタローズを、グランバニアを思い出す。

「そうだね。行こう。マルゴさんには怒られちゃうかもしれないけど」

「怒られたら謝ればいいのさ。オレたち、怒られるのは慣れてるだろう」

山の斜面を利用してつくられた集落には、階段がとても多い。それは、地の利のない僕らにとつて有利に働いた。追い掛けてくる村人たちよりも僕らは体重が軽いし、体力もある。集落のてっぺんにあるのが、たぶん長老たちのいるところだろう。そこにある建物だけが、顕著に破損が少ない。つまり、僕らはそこを目指せばいいのだ。

夜のエルヘブンは、昼に比べて村人が狂暴化しているように見えるものの、マルゴさんの言っていた通り殺し合いとかはないため、昼夜の違いはそれほど感じない。もともとのその人の体力も関係あるのか、糸が切れたように眠る人々もいる。

「ソロー」

「うん。気付いてるよ。……魔物だ」

僕らはすぐに臨戦態勢になった。長老たちの家と思われる場所に、ローブをまとい、仮面を付けた魔物がいる。魔物は持ち手ある棘の付いた鉄球を両手に持ち、何かを家の中の人物へ呼び掛けていた。

「分からないのか？ 我らの要求を呑めば、全員命だけは助けてやる。どうせお前たちに解毒剤は手に入れられまい。貴様らはこの地に魔王像を建て、祈りを捧げる奴隷となるのだ!!」

———そういうことだったのか。

全てが腑に落ちた。殺し合いをさせれば働き手が減る。だが、もともとこの地にある建物は邪魔。だから、おかしな薬を用いて破壊活動をさせ、魔王への信仰心を無理やり植え付けていたのだ。

「光の教団だな」

僕の声は、自分で出したはずなのに、思ったより平坦だった。怒りがお腹の底からふつつつと煮え滾っているのに、どうにも冷えた感覚で、自分の体が自分じゃないみたいなの、妙なちぐはぐさがどうにもおかしい。

「ルカナン！」

ヘンリーの声が聞こえて、気付いたら、その魔物が何かを言う前に剣を振るっていた。こちらに気が付いた魔物が振り向こうとしたけれど、完全にこちらを見る前に首と胴が離れる。

会心の一撃。そう言ってもいいくらい、狙いは鋭く、剣は速かった。防御力低下呪文で脆くなった魔物の首を刎ねた僕は、死体には見向きもせず、扉の向こうにいるであろう人々へ声を掛ける。

「大丈夫ですか!?! 魔物はやつつけました。マルゴさんから話を聞いていませんか? 僕、ソロといいます。お話を伺いたいので、ここを開けてください」

「……………君たちが」

少しの沈黙。その後、部屋の中から、存外若そうな、はつきりとした声が聞こえた。

「君たちが、ソロとアンドレという子どもなら……………もう寝る時間だ。今日は休みなさい。明日、こちらから訪ねに行くから」

「あ」

それが拒絶に聞こえてしまって、僕は言葉に詰まる。それから、そつと息を吐いて、取り繕うように姿の見えない相手へ口を開いた。どうしてこんなことで動揺してしまったのかは、僕にだって分からない。い。

「……………分かりました。おやすみなさい」

それしか言えなかった僕は、ヘンリーの手を引いてエルヘブンの急な階段を駆け下りた。マルゴさんの姿は見当たらなかったけれど、僕が見つけられなかったただけかもしれない。マルゴさんだって、正気じゃない姿を見られるのは嫌だろうから、結果的に良かっただろう。

「なんだ、えらい落ち込んでるじゃねえの。そりゃ、あんな状況で言っても、オレらが魔物かどうか、長老さんたちとやらは分かんないんだ

ぜ。普通の対応だ。腕によっぽど自信がなきや、あの場で扉を開けるのはアホだぞ。扉に魔物除けの結界を張ってるってんなら、尚のこ
と」

「そう、だよね。君の言う通りだ。だけど、なんだろう……」

正直に言えば、村の人が「まとも」だったら、僕は受け入れてもらえると思っていたのかもしれない。なんたって、ここは——「お母さん」の、故郷だから。

「寝ようぜ。マルゴさんは怪しいやつはいないって言ってたけど、この分だと夜は魔物があややって長老たちを脅してるのかもな。何にせよ、情報が少しでも入ったのは良かった。話が本当なら、長老たちは明日の朝ここに来るって言ってたし、マルゴさんも含めてみんなで話し合えばいいさ」

「うん……。おやすみ、アンドレ」

「おやすみ、ソロ」

目をつむつても、その日は寝ることができなかつた。気にしすぎなのかもしれない。そんなことは分かっているけど、なんだか、たったあれだけの一言が、妙に僕の胸にしこりとなって残っているのだった。

不透明な未来

さて。私は現在、ガボ様が暮らしている木こりさんの家に来ています。マリベル様のアドバイス通り、パパスさんと、ついでに私の稽古をつけてもらうためにお願いに来たからです。

もちろん、気のいいガボ様は二つ返事で「おっ。楽しそうだな！

いいぞ！」と元気に了承してくれたし、木こりさんの家の周りには他に住宅地もないので人様に迷惑を掛けることもそうありません。ですが。

「コワー……」

おかしい。あの人のスピードおかしいよ。全然目で追えないし。なんならガボ様だけじゃなくてガボ様のお友達？ 兄弟？ 家族？

ともかく、いつも一緒にいる狼さんたちもめっちゃめっちゃ速くて、気付くと犬パンチされてる。一戦終えたあと恐る恐る鏡見たら、ほっぺが肉球型に赤くなってた。

狼たちに弄ばれた一戦で心折れた私は、一旦見学させてもらうことにして、ガボ様とパパスさんの戦いのハイレベルさにちよつと吐きそうになっている。

いやいや、ガボ様めっちゃ楽しそうに笑ってるけど、パパスさん子ども（私よりは年上だけど、十分少年の範囲内）に対してかなり真剣に剣を振るってるからね。ちよつと殺気立ってる。殺気というか……なんだろう、気迫がすごい。

でもガボ様は、時に特技を使って、時に魔法で、時には物理攻撃で、ひらひらと蝶のように舞い、蜂のように刺している。手数がすごい。何がいやって、本当に楽しそうに遠慮のないエグめの技をぶちこんでくることよ。遊んでる感覚で凍える吹雪とか吐いてくるの怖い。

「ぐ……」

「一旦休憩にすつか。ほら、ベホマ」

「そういえば、ガボ様は旅をされている時はモンスター職を中心に転職されていたと聞きました。何か理由があつたんですか？」

戦闘不能一步手前になったパパスさんに回復呪文を掛けたガボ様に近寄りながら、ふとした疑問をそのまま口にする、ガボ様は「まあな。色々考えてたぞ」と頷いていた。

「まあ、最初は楽しそうな羊飼いになってみて、狼たちと賑やかに旅できたらいいと思ってよ。飯にも困らねえしな」

「えっ？ あ、なんでもないです。続けてください」

羊飼いに転職した理由、非常食の確保……？

斬新すぎて、突っ込んだら負けな気がする。話進まなさそう。聞きたいのはそこじゃないし。

「んで、次はオイラ素早いのが武器だって言われてたから、それを武器にしてる盗賊やつたんだよ。せつかくだから、それが終わったらどっちの経験を活かせる、魔物ハンターになって」

そうなんだ。アルス様を始め、皆さんきつとガボ様の考えを尊重してのびのび好きな職業に就いてもらっていたんだろうな。今の発言を聞くに、仲間とのバランスとかはあんまり配慮していなさそう。いや、自由なのがガボ様のいいところだから、何の問題もないが。

「魔物ハンターやつてたら、モンスター倒したあとに『心』つてのが手に入るから、これなんだろうーな。ってある日フォズに聞きに行ったら、『使ってみたらどうですか？』って言われたから、試しになつてみたんだよな。これが楽しくって」

「あ、ハイ」

ちなみにフォズさんとは勇者様たちが過去のダーマ神殿を救ったときの、大神官の女の子らしい。私より少し年上で大神官とは、未恐ろしい。まあそんなこと言ったらガボ様だって私よりちよつと年上なだけなのに世界救つてるから、大人になつたらどうなつちやうのか、楽しみやらちよつと怖いやらでドキドキである。

「なんかな。オイラもともと狼だからよ、もしかしたら人間の職業よりもモンスターの方が性に合つたのかもしれない。体もモンスターになつちまうのもしれえしよ！」

「へ、へえ……」

「オイラあんま頭良くねーけど、ビビッて勘が働くから、回復も攻撃もできるのは便利だしな。やりたいこと自分で思い付いたとき、すぐにできるのはやっぱ楽だぞ」

そこで言葉を切ったガボ様が、じいつとこちらを見つめてきて、私はサツと目を逸らした。あんまりよろしくなさそうな気配を感じたからだ。

「ま、そういうんで言ったら、パスは人間の職業の方が向いてるかもなあ。戦い方も真面目だしなあ。モンスターの職業やるんなら、アルマの方が合ってると思うぞ。勘だけど」

「モンスター……？」

私も結構真面目な方だと思うんだけど、そんなに自由そうに見えるんだろうか。ていうか、ガボ様に同類だと思われてるんだろうか。やめて！ 天才に変な期待されたくない！

「オイラが昔盗んだ心、アルマにやろうか？ あ、タダじゃだめなら、こうやってまたこいつらと遊んでくれればいいからよ」

「神様方式！」

とりあえず、「盗んだ心」って誤解を招きそうな言い回しだなと思っただけど、口にしたらややこしいことになりそうなので何も言わなかった。

うーん、でも、モンスター職は道のりが長いってマリベル様が言ってたしなあ。覚えた特技や呪文が転職してもずっと使えるのは魅力だけど、目指している職業に辿り着く前に石板が全部揃って、変な職業で向こうに行っただとして、マスターしたらそのモンスターの姿になるんだよね？ それなんか誤解受けない？ ちよつとリスキーかな。うーん、でも、もしガボ様が貴重なモンスターのハートを持っていて、一発で上級職に就けるんだったらアリかもしれない。

「え、えーと……考えておきます」

「おう。それで、オイラ別に戦うのはいいけど、戦い方は教えらんねーぞ。いつも大体考える前に動いちまうしな！」

私に返事をして、すぐにパパスさんに向き合ったガボ様は、にこにこしながらそんなことを言っている。

「いえ、十分です。石板を探しながらの身。こうして時折相手をしてもらえるだけで、修行になりますから」

「気になってたんだけどよ、オイラに堅苦しい話し方しなくてもいいぞ。アルマは何回言っても聞かねえから、もう諦めちまったけど」

パパスさんは少し迷ったような表情になったけれど、すぐに首を振った。

「いえ。ガボ殿にそのつもりはなくても、私にとっては稽古をつけていただく相手です。せめてガボ殿から一本取るまでは、この話し方は変えられません」

「へんなやつらだなあ。フオズみたいに誰にでもそういう話し方ならともかく、そうじゃねえのによ。オイラだったらむずがゆくなっちゃうよ」

まあ、ガボ様は王族にもタメ口だからな、とは言わなかった。それでも許されるし、無礼っぽくならないのがガボ様。それもまた才能。勇者一行はジャステイス。

「あ、そういえば昨日の夜アルスが来て、アルマたちが珍しい道具探してるっていう話を聞いたけど、本当か？」

そんなジャステイスなガボ様は思い付きで会話の内容が変わることも多く、そんなところでも自由さを感じる。話があつちこつち行くので苦手な人は苦手かもしれないが、慣れれば話題が尽きなくて楽しい。

「そうなんですよ。旅に役立つ物がないか探しています」

「まあ世界中のほとんどの道具はアルスが持ってんだけど、アルスがそのまま持つてるとなんかと交換とかにしなくちゃだめじゃんか」

「まあ、そうですね」

「だから、世界中のいろんなところに置いてくるって言ってたぞ。あ

んまりふらふらしてつとマリベルに怒られるから、段々隠していくつてよ」

ガボ様全部喋ってくれるな。助かるけど、カジノ方式でコインでもなんでも稼いでくるから、交換してくれた方が楽だったなあ！ まあ、値段の付けられない貴重な物とかもいっぱいお持ちだろうから、だったら下手に値段を付けるより隠しちやえつていうのは分からないが。

「他に何か言ってみました？」

「んー。とりあえず、リートルードの大会優勝賞品として寄付してくるって言ってたけど、何を賞品にするかまでは覚えてねえなあ」

リートルードとは、芸術の町であり、名物のランキングを開いていることで有名である。確か、「賢さランキング」「かつこよさランキング」「力自慢ランキング」の三つの部門をランキング協会というところが主催して参加者に順位を付けていくというものだ。

「……とりあえず、情報収集がてら、アルス様が何を置いていくのか見に行ってみます？」

「そうだな。ガボ殿、ありがとうございました。また伺います」

「なんだ。もう行っちゃうのか。いつでも来いよ」

「はーい」と良い子の返事をして、私はさくつとルーラを使った。リートルードには、メルビン様にたまに連れて行ってもらう。芸術は心癒されるし、メルビン様はかつこよさランキングに出場している女性を熱心に見ているし、目的は違っても二人とも楽しめる町なのだ。

さて、リートルードに着いて、普段あんまりチェックしないランキングの掲示板を見に行った。掲示板周辺は常に人で賑わっている。文字が見えるように、私はパパスさんに肩車をしてもらった。

「うげ……」

私がそう言ってしまったのも仕方あるまい。現実には常に非情なの

ものである。

賢さランキング一位：マリベル

かつこよさランキング一位：アイラ

力自慢ランキング：アルス

これ終わりすぎてない？ いつのランキング？ まさか全盛期？
ちよつと超えられる気がしないんですけど、どうすればいいの？

審査員って買収できる？

私の頭に、いくつもの疑問が同時に湧き出た瞬間であった。

封印の件で、定期的にデモンズタワーを訪れるつもりであることを
デルがカンダタに告げると、彼は「それなら、あそこを定期連絡の
場にしよう」と提案をしてきた。連絡手段を確立するためである。ス
トロスの杖を見つけたときに居場所が分からないと届けられないこ
とや、情報交換したいときに困ることなどから、連絡の期間や場所が
決まっていた方が便利であろう、とのことだ。

「分かりました。お世話になりました。御迷惑も……たくさん、お掛
けしました」

頭を深く下げる。これだけでは足りないくらいの迷惑を掛けたこ
とは重々承知であったが、「足りるほどのこと」をしようとしても、カ
ンダタは喜ばないだろうし、亡くなった彼の子分だって同じだろう。
「リンちゃん、しんみりしないでいいって。こんな仕事だ。いつ何が
あってもおかしくねえんだから」

「そうそう。今度こそ、一緒に仕事しような」

カンダタの子分たちは、女装をしていないデルのことをやはり
「リン」と呼んだが、もはや少年には気にならなくなっていた。

「じゃあな。せっかくの『空飛ぶ靴』だ。俺様が有効に使わせてもら
うぜ」

「ええ。そうしてください。それでは、また」
ひらりとデールが手を振ると、それに合わせるように、傍らに控えるキラーパーンサーたちが尻尾をゆらりと振る。

騒がしい盗賊たちに見送られて、デールはアジトを後にした。ついでに、グランバニアの様子も少し見ておこう。この短期間で結界が綻びることはないだろうが、もし兄たちが自分を探しに城へ戻ることであれば、分かるように何か印でも付けておきたいと思ったのだ。

「……………」

静寂。この国から、音は消えた。一人、一人欠けたところはないか見て回る。城の中に変わりはないか、結界におかしなところはないか。

——安心、するべきなんだろうな。

何も、なかった。もちろん、兄たちからの連絡もない。あのとときから時を止めた城の中に、デールは自分たちの部屋に一枚の書置きを残した。そして、傍らにぬいぐるみを置く。

へぐぶんのしるし

これで、兄たちは分かるはずだ。デールがかつてリユカとアルマからもらった、大切なぬいぐるみ。リユカがラインハットから持ち帰って以来、肌身離さず持ち歩いてきた、自分の分身。

——僕の魂はここに。

ラインハットにはいずれみんなと一緒に行くから。それまで、自分の帰って来る場所はここ以外にありえない。

「じゃあ、行こうか。ギコギコ、プツクル」

グランバニア王国が閉ざされたとはいえ、この大陸には定期便が来る。細々とはあるが、チゾットやネットドの宿屋が取引している商人たちが訪れるのだ。

「次の定期便はテルパドールか……」

港で船員たちが話すのを聞きながらデールは頭の中でいくつかの計画を立てた。

まず、次の定期便に乗り込み、テルパドールに行く計画。テルパドールには天空の兜があると有名だ。兄たちもそこへ将来的に向かうか、もしくは既に行っている可能性が高い。とすれば、聞き込めばもしかしたらどこへ向かったのか分かるかもしれないという希望が少しだけある。

次に、次の定期便を見送り、ポートセルミに向かう便を待つ計画。盗賊をやっているときに聞いた話では、サラボナという町に住む大富豪が、天空の盾を所有しているのだとか。テルパドールで女王から兜を賜るよりは挑戦しやすそうである。ただし、懸念としてはグランバニアが閉ざされたことで、定期便自体が減っているであろう中、次のポートセルミ行きの便がいつ出航するかは賭けの要素が強いことだ。他には、何とか小舟でもいいから入手し、大陸の南から短い距離での航海をしてメダル王の城を訪れる計画。メダル王は珍しい品々をたくさん所有していると聞き、グランバニア大陸への定期便が減ったとしても、メダル王の城への定期便はそこそこあるだろう。観光地として有名な場所であるから、定期便だけでなく金持ちが所有している個人船なんかも時折訪れることがあるとか。

「うーん……。やっぱり、テルパドールかなあ」

デールは少し悩んで、初めに浮かんだ案を採用した。それから、お涙ちょうだいのホラ話で船員の気を引き付けている間に、ゲレゲレとブックルを船に乗り込ませることに成功。一人分の料金を払って、個室を取った彼は、のんびりと船旅を楽しんだのだった。ちなみに、下船する際は最後に降り、出会う船員たちに道すがらメダパニを掛ける性悪ぶりを発揮していたが、これはおそらく兄ではなく盗賊たちの影

響であろう。

砂漠の国は人間にとってもキラールパンサーたちにとっても暑すぎで、デールは途中のオアシスで休憩することにした。

「おや、坊ちゃん。珍しいペットを連れているね」

「あ、はい。ボク、旅芸人をやっている。一座とはぐれてしまったんです。次はテルパドールで巡業すると言っていたので、なんとか船乗りさんに泣きついて連れてきてもらったんですが……おじさん、テルパドールまであとどれくらいですか？」

「なあに、ここで一休みすれば、坊ちゃんの足でも日暮れまでには着くだろうよ」

「へえ。教えてくれて、ありがとうございます。おじさんは行商をしているんですか？」

「ああ。オアシスに立ち寄る旅人たちに水や食料を売っているよ。坊ちゃんもどうだい？」

「水だけでもらおうかな。おいくらですか？」

幸い、行商人は砂漠にしては良心的な値段で水を売ってくれた。子ども一人、お金がないと思われたのかもしれないし、両脇を固める魔物に臆病風を吹かせたのかもしれない。まあ、デールにとってはどちらでもよかった。

行商人と少しの間雑談をして、体力が回復したらテルパドールへ向かう。砂漠を歩き慣れていないデールでも、確かに陽が沈む前には宿屋に着いて眠りにつくことができた。

行商人にしたのと同じ説明をすれば、キラールパンサーたちを連れて、宿に泊まるのができたのは幸運と言えよう。最悪、この寒暖差の大きい砂漠で（結界に守られた場所にいるとしても）野宿ということもありえたのだから。

「ふわあ……じゃあ、行きましようか。一応、お城は昼間なら誰でも入れるみたいだけど……君たちはもしかしたらお留守番かもしれないな。そうなったら、ごめんね」

「にやうん」

「なーお！」

翌朝、起きるなりそんなことを言うと、先輩のゲレゲレからは「気にしてないぞ」の返事、後輩のブックルからは「しようがないわねー」の返事をもらった。その反応を見たデールは、くすくす笑いながらさつと身支度を済ませ、宿屋を後にする。

門番は魔物を見て少し戸惑った顔をした後、「えーと、その大きな猫たちは……」と困ったように頬をかいた。デールも困ったような顔を向け、「ボクの友達なんです」と答える。

「えーと……結界に入れてるってことは問題ないんだらうけど……魔物、だよな？ 城内に入れるのはちよつと……うーん……」

優しい門番が少年を傷付けないように言葉を選んでいると、しやらり、と涼やかな音が城の入口から聞こえた。

音の主は、豪華な装飾品を身に着けた美しい女性で、デールには彼女こそがこの国の女王アイシスであることを直感する。

「お待ちしております。『魔物を従えし少年』。私からお話があります。どうぞ、こちらへ」

「え？ えーと、あの、はい」

有無を言わせぬ雰囲気、彼らしくなく思わず頷いて、デールはすたすたと早足に歩く女王の後ろをついて行った。美しく整えられた庭園に案内されると、そこは人払いが済んでいて、さらに茶や菓子を用意した侍女も、自分の仕事が終われば会話の聞こえない距離まで下がってしまう。

「驚かせてしまいましたね。私はこの国の女王である、アイシスと申します」

「あ、えっと、ボクはリンクスといいます。右側にいるのがギコギコで、左側にいるのがブックルです」

「実は、あなたにお願いがあるのです」

アイシスは戸惑った様子のデールへ少しだけ笑みを向け、すぐに真剣な顔になった。

「我が一族には遙か昔より未来予知の能力が備わっているようで、私も時折、未来が視えることがあるのですが……。どうやら、もうすぐこの国に大きな危機が訪れるようなのです。そのとき、我が国の力となってくれるのが、魔物を連れた少年——つまり、あなたなのです」

唐突すぎる話に、デールは頭が痛くなってきたが、どうにか表情に出すことはせず、無言を貫いて続きを促す。アイシスはそんな彼の目を見て、「無茶は承知です」と物憂げに言葉を続けた。

「国民にはまだこのことは知らせていません。『危機が訪れる』ことは分かってても、『どんな』危機が起こるのかは分かっておらず、せいぜい今できることといえ、食料や水の備蓄、魔物の襲来を警戒すること以外にありません。しかし、あなたが来たのなら、私はあなたをこの国から出さないことが、この国のためになると信じています。あなたにも事情や予定があるのはお察しますが、どうか、力を貸してください」

「それなら、条件があります」

「条件？」

「はい。ボクはとある理由で天空の勇者を探していて、天空の兜を必要としています。ボクがこの国のために何か力になれることがあるとするなら、それを果たせたとき、天空の兜をボクにお譲りください」
アイシスはしばし無言になる。その黒曜石の瞳をデールから一切逸らさず見つめ、それからふりと首を振った。

「いえ、それはできません。御心配いただくまでも、時が来れば天空の兜は勇者様にお渡しします。今あなたにお譲りする意味はありません。ですが——」

アイシスは白く長い指で、デールの頬にそっと触れる。

「我が王家に伝わる秘宝を、あなたにお譲りいたします」

「秘宝？」

「ええ。今となつては使いこなせる者のない、神秘の品です。しかし、過酷な運命を背負うあなた——いいえ、あなた方の、旅の助けとなるでしょう」

デールは緩やかに首を横へ振り、「お受けできません」と眉を寄せた。

「ボクは、ボクたちの旅は——」

「あなたが焦る理由は、ソロとアンドレと名乗っていた少年たちにあるのでしょ」

びくり、と肩を揺らしそうになる。けれど、表面上だけでもなんとか平静を保つて、デールは困つたように微笑んだ。

「女王陛下。ボクが焦っていると、そしてその理由をお察しなんですね。どうか、お考えを聞かせてください」

そして当たり障りのないことを口にする。女王は彼の考えを見抜いているのかいないのか、小さく顎を引いてから、美しく彩られた唇を開いた。

「以前、この国に二人の少年が訪れたのです。彼らはあなたと同じように天空の勇者と、勇者のみが装備できる伝説の防具を求めていました。リンクスさん。あなたはアンドレと名乗った少年とよく似ています。同じ血が流れているのではと、そう感じられるほどに」

デールの容貌は、腹違いの兄とは全く似ていない。会ったことがないが、肖像画を見かけた限りでは、ヘンリーは母親と瓜二つなのである。一方、デールは父親と母親を少しずつ合わせたような容姿なので、外見だけで兄弟とは判断されにくいだろう。

「ソロさんもアンドレさんも、あなたと同じように、過酷な運命を背負った方。数々の困難が立ちふさがり、ときに悲劇に見舞われる——いいえ、これまでも、見舞われたことがあったのでしょ。アンドレさんは人を探していると言っていました。リンクスさん、おそらく、あなたのことを」

女王は、もう一度リンクスの頬に触れた。それから、まっすぐとそ

の目で、揺れる心を隠し切れぬ少年の瞳を射貫く。

「どうか、この国を救ってください。一刻も早く大切な方々と合流したいこととは存じますが」

「……あなたは、分かってない」

リンクスは長い睫毛を伏せ、一度その目から逃れた。言葉とは裏腹に、縋るわけでも、期待するわけでもない、真摯な想いの込められた目。その目が、どうしようもなく「あの人」を想起させる。

くだらない理由かもしれない。不確かな「未来視」なんて、取るに足らないとすら思う。

それなのに。

「……お受けします。ボクにできることがあるならば」

——似ていると言われたのが、うれしかった。

「もちろん、『危機』の度合いによって、報酬は弾んでもらいますよ」

今は、そういうことにおこう。